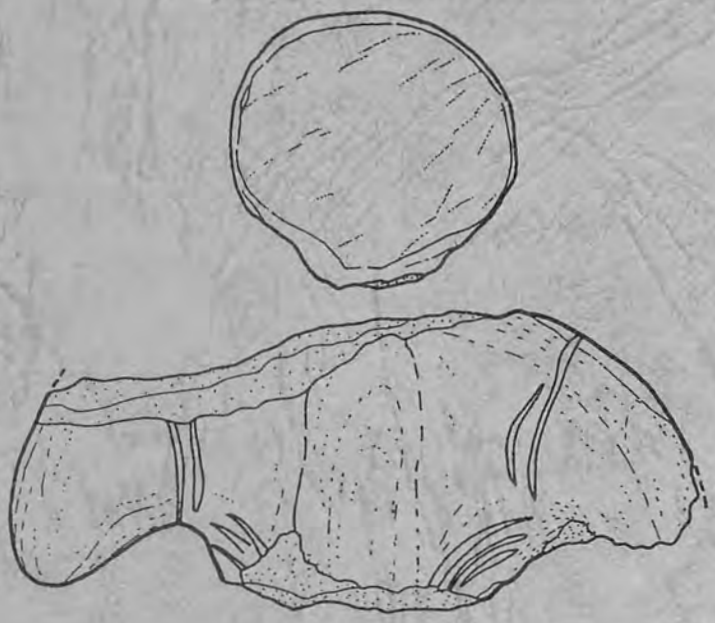
熊本県教育委員会

大久保遺跡

七城町林原所在の縄文遺跡



熊本県文化財
調査報告
第143集

1994

熊本県文化財調査報告　第143集

大久保遺跡

七城町林原所在の縄文遺跡

１９９４年

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、十三部地区県営圃場整備事業に伴い昭和61年度に埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本書は、熊本県菊池郡七城町大字林原に所在する大久保遺跡の報告です。大久保遺跡は、縄文時代後期から晩期にかけて存続した遺跡であり、なかでも土偶を多く出土した遺跡として広く注目されていました。しかしながら調査結果の詳細は未報告のまま歳月が流れ、ようやく平成５年度に調査結果の整理を実施し、遺跡の全容を報告するに到りました。

この報告書が、熊本県の歴史を学ぶうえで、また埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、ご活用いただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに関係諸機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成６年３月31日

熊本県教育長

道　越　　温

例　　言

1．本書は、県営十三部地区圃場整備事業に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、熊本県菊池郡七城町大字林原に所在する大久保遺跡で、熊本県農政部からの依頼を受けて、熊本県教育委員会がおこなった。

3．遺物の整理は、熊本県文化財収蔵庫でおこなった。

4．遺跡の発掘調査は、昭和61年度に実施し、平成５年度に整理をおこなった。

5．本書に用いた地形図は、国土地理院発行の地形図と、熊本県農政部からの提供を受けたものをもとにして作成した。

6．現地調査での実測および写真撮影は、調査員がおこなった。

7．遺構および遺物の製図は、木下俊恵、中田弥生、丹生英里、藤原ゆり子、吉本清子、大塚磯子、平畑信子がおこなった。

8．遺物の実測は、吉田正一、木下、中田、丹生、大塚、吉本、重永照代、平畑が主におこない、野口龍彦、山下義満、宮崎敬士、江島園子、河野智子、徳永みどりが随時協力し実測した。その分担は、遺物実測図の傍らに記する通りである。

9．遺物実測における土器の色調観察には、主に農林水産技術会議・日本色彩研究所監修の標準土色帖帳を用いた。

10．土器の復元は熊本県文化財収蔵庫でおこない、実測時の補修は荒牧陽子、後藤ちず子、宇野玲子、水本寿美子、小山正子、山元友子、重永、中田、丹生、吉本があたった。

11．遺物の写真撮影は、吉田、中田、丹生、吉本、平畑、重永でおこなった。

12．遺物の写真処理は、中田、丹生、吉本、平畑でプリントした。

13．石器の石材鑑定は永井剛がおこなった。

14．本書の執筆は、主に吉田正一があたり、一部を島津義昭（第Ⅰ章）が担当した。

15．本書の編集は、熊本県教育委員会でおこない、吉田が担当した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査にいたる経過……1
第２節　調査の組織と構成……1
第Ⅱ章　調査の成果
第１節　遺構の総説……2
第２節　縄文時代の遺構と遺物
１、竪穴住居跡と遺物……3
２、埋甕遺構と遺物……38
３、土坑と出土遺物……39
４、包含層からの出土土器……75
５、土偶……141
６、土製円盤……142
７、焼成粘土塊……142
８、石器……156
第３節　縄文時代以外の遺構と遺物
１、竪穴住居跡と遺物……215
２、掘立柱建物と遺物……215
３、土坑と遺物……216
４、墨書土器……238
５、鉄滓……239
６、布目瓦……239
７、土錘……239
８、権形石製品……242
９、紡錘車……242
10、青磁、白磁など……242
11、弥生土器……242
第Ⅲ章　総括と展望
第１節　縄文時代の遺構について
１、遺構の分布……248
２、土器の編年……248
３、器形の変遷……251
４、土偶、焼成粘土塊について……257
５、埋甕について……259
６、まとめ……260
７、ひとつの縄文社会試論……260
第Ⅳ章　平安時代の遺構と遺物について……263

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図
第２図　Ⅰ区遺構配置図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　Ⅱ区遺構配置図
第５図　Ⅲ区遺構配置図
第６図　Ⅳ区遺構配置図
第７図　Ⅴ区遺構配置図
第８図　401号住居跡実測図
第９図　Ⅵ区遺構配置図
第10図　Ⅶ区遺構配置図
第11図　802号、1201号住居跡実測図
第12図　1302号住居跡実測図
第13図　1303号、1304号住居跡実測図
第14図　1303号、1304号住居跡断面図
第15図　1305号住居跡実測図
第16図　Ⅷ区遺構配置図
第17図　Ⅹ区遺構配置図
第18図　ⅩⅡ区西側遺構配置図
第19図　ⅩⅡ区東側遺構配置図
第20図　ⅩⅢ区遺構配置図
第21図　ⅩⅠ区遺構配置図
第22図　401号、501号埋甕実測図
第23図　502号、901号埋甕実測図
第24図　1301号、1302号埋甕実測図
第25図　1303号埋甕、801号土坑実測図
第26図　801号～805号土坑、1204号土坑実測図
第27図　1101号土坑実測図
第28図　主要遺構の出土土器
第29図　主要遺構の出土土器
第30図　主要遺構の出土土器
第31図　主要遺構の出土土器
第32図　主要遺構の出土土器
第33図　主要遺構の出土土器
第34図　主要遺構の出土土器
第35図　主要遺構の出土土器
第36図　主要遺構の出土土器
第37図　主要遺構の出土土器
第38図　主要遺構の出土土器
第39図　主要遺構の出土土器
第40図　主要遺構の出土土器
第41図　主要遺構の出土土器
第42図　主要遺構の出土土器
第42図　主要遺構の出土土器
第43図　主要遺構の出土土器
第44図　主要遺構の出土土器
第45図　主要遺構の出土土器
第46図　主要遺構の出土土器
第47図　主要遺構の出土土器
第48図　主要遺構の出土土器
第49図　包含層からの出土土器
第50図　包含層からの出土土器
第51図　包含層からの出土土器
第52図　包含層からの出土土器
第53図　包含層からの出土土器
第54図　包含層からの出土土器
第55図　包含層からの出土土器
第56図　包含層からの出土土器
第57図　包含層からの出土土器
第58図　包含層からの出土土器
第59図　包含層からの出土土器
第60図　包含層からの出土土器
第61図　包含層からの出土土器
第62図　包含層からの出土土器
第63図　包含層からの出土土器
第64図　包含層からの出土土器
第65図　包含層からの出土土器
第66図　包含層からの出土土器
第67図　包含層からの出土土器
第68図　包含層からの出土土器
第69図　包含層からの出土土器
第70図　包含層からの出土土器
第71図　包含層からの出土土器
第72図　包含層からの出土土器
第73図　包含層からの出土土器
第74図　包含層からの出土土器
第75図　包含層からの出土土器
第76図　包含層からの出土土器
第77図　包含層からの出土土器
第78図　包含層からの出土土器
第79図　包含層からの出土土器
第80図　包含層からの出土土器
第81図　包含層からの出土土器

第82図　包含層からの出土土器
第83図　包含層からの出土土器
第84図　包含層からの出土土器
第85図　包含層からの出土土器
第86図　包含層からの出土土器
第87図　包含層からの出土土器
第88図　土偶実測図
第89図　土偶実測図
第90図　土偶実測図
第91図　土偶実測図
第92図　土製円盤実測図
第93図　焼成粘土塊実測図
第94図　焼成粘土塊実測図
第95図　焼成粘土塊実測図
第96図　焼成粘土塊実測図
第97図　石器実測図
第98図　石器実測図
第99図　石器実測図
第100図　石器実測図
第101図　石器実測図
第102図　石器実測図
第103図　石器実測図
第104図　石器実測図
第105図　石器実測図
第106図　石器実測図
第107図　石器実測図
第108図　石器実測図
第109図　石器実測図
第110図　石器実測図
第111図　石器実測図
第112図　石器実測図
第113図　石器実測図
第114図　石器実測図
第115図　石器実測図
第116図　石器実測図
第117図　石器実測図
第118図　石器実測図
第119図　石器実測図
第120図　石器実測図
第121図　石器実測図
第122図　石器実測図
第123図　石器実測図
第124図　石器実測図
第125図　石器実測図
第126図　石器実測図
第127図　石器実測図
第128図　石器実測図
第129図　石器実測図
第130図　石器実測図
第131図　石器実測図
第132図　石器実測図
第133図　石器実測図
第134図　石器実測図
第135図　石器実測図
第136図　石器実測図
第137図　石器実測図
第138図　石器実測図
第139図　501号住居跡実測図
第140図　801号住居跡実測図
第141図　1301号住居跡実測図
第142図　401号掘立柱建物跡実測図
第143図　601号掘立柱建物跡実測図
第144図　1201号掘立柱建物実測図
第145図　101号、401号土坑実測図
第146図　402号、403号土坑実測図
第147図　501号、1001号土坑実測図
第148図　1002号、1005号土坑実測図
第149図　1201号、1202号、1203号土坑実測図
第150図　501号住居跡、501号土坑出土土器
第151図　801号住居跡出土土器
第152図　1301号住居跡出土土器
第153図　301号、302号溝出土土器
第154図　縄文時代以外の出土土器
第155図　縄文時代以外の出土土器
第156図　縄文時代以外の出土土器
第157図　縄文時代以外の出土土器（墨書土器）
第158図　歴史時代の出土遺物（鉄滓）
第159図　歴史時代の出土遺物
第160図　歴史時代の出土土器
第161図　縄文時代以外の出土土器（弥生土器）
第162図　縄文時代の遺構・遺物分布関係図
第163図　大久保遺跡出土土器編年表（浅鉢）
第164図　大久保遺跡出土土器編年表（深鉢）
第165図　土偶腹部の子宮底位置比較図

表　目　次

第１表　地名表
第２表　主要遺構出土土器計測表
第３表　主要遺構出土土器計測表
第４表　主要遺構出土土器計測表
第５表　主要遺構出土土器計測表
第６表　主要遺構出土土器計測表
第７表　主要遺構出土土器計測表
第８表　主要遺構出土土器計測表
第９表　包含層からの出土土器計測表
第10表　包含層からの出土土器計測表
第11表　包含層からの出土土器計測表
第12表　包含層からの出土土器計測表
第13表　包含層からの出土土器計測表
第14表　包含層からの出土土器計測表
第15表　包含層からの出土土器計測表
第16表　包含層からの出土土器計測表
第17表　包含層からの出土土器計測表
第18表　包含層からの出土土器計測表
第19表　包含層からの出土土器計測表
第20表　包含層からの出土土器計測表
第21表　包含層からの出土土器計測表
第22表　包含層からの出土土器計測表
第23表　包含層からの出土土器計測表
第24表　包含層からの出土土器計測表
第25表　包含層からの出土土器計測表
第26表　土偶計測表
第27表　土製円盤、焼成粘土塊計測表
第28表　焼成粘土塊計測表
第29表　石器計測表
第30表　石器計測表
第31表　石器計測表
第32表　石器計測表
第33表　石器計測表
第34表　石器計測表
第35表　石器計測表
第36表　石器計測表
第37表　石器計測表
第38表　石器計測表
第39表　石器計測表
第40表　石器計測表
第41表　石器計測表
第42表　石器計測表
第43表　石器計測表
第44表　縄文土器以外の出土土器計測表
第45表　縄文土器以外の出土土器計測表
第46表　縄文土器以外の出土土器計測表
第47表　歴史時代の遺物計測表
第48表　歴史時代の遺物計測表

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査にいたる経過

１、調査の契機

熊本県菊池郡七城町を中心とする県営圃場整備事業が開始されたのは昭和56(1981)年のことである。事業面積は166haに及ぶ広域な事業で、平成６年度までに118haが完了して残り地区は少なくなった。

圃場整備事業は、農地の区画整理を中心に用排水路、道路、暗渠排水などを整備し、農地の集団化、機械化による高能率農業を促進する事業である。事業の設定された七城町は北部をうてな台地、南部を花房台地に挟まれた菊池川中流域の低地を中心にする行政域を持つ。台地部には多くの遺跡が存在する。事業の実施に先立ち試掘調査を実施した結果、この地区に縄文時代後晩期の包含層があることが確認された。そのため、圃場整備事業の計画と対比し、やむを得ず削平される箇所については調査を実施した。調査の実施期間は昭和61(1986)年12月から同62年３月である。

２、報告書の作成

大久保遺跡は調査時より、多量の土偶の出土で注目されるところであったが、農政部関係の事業がめじろ押しで本報告書の作成は見送られてきた。近年、土偶出土の遺跡の再評価がなされるに及び、大久保遺跡の重要性が再認識されてきた。このような情勢に鑑み大久保遺跡の本報告書を刊行することが計画された。平成５年度の農政部局との協議で報告書を作成することとなり、次節に記す者がその作業に当たった。なお、報告書の作成は熊本県文化財収蔵庫でおこなった。出土遺物は同所が保管している。

第２節　調査の組織と構成

発掘調査責任者	文化課長	丸木保賢
	課長補佐	林田敏嗣
調査事務担当	主幹（経理係長）	柴田和馬
調査総括	文化財調査係長	隈　昭志
調査担当	文化財保護主事	松本健郎
調査担当	文化財保護主事	園村辰実
	嘱託	吉田正一
	〃	坂本重義
	〃	山城敏昭
	臨時職員	安達武敏
整理責任者	文化課長	大塚正信
	教育審議員	平野芳久
	課長補佐	松崎厚生
整理事務担当	主幹（経理係長）	木下英治
	主幹（文化財調査第一係長）	島津義昭
整理担当	嘱託	吉田正一
	〃	木下俊恵
	〃	中田弥生
	〃	丹生英里
専門調査	元熊本博物館学芸員	永井　剛
整理作業	整理作業員	大塚磯子(実測)
	〃	吉本清子(実測)
	〃	重永照代(実測)
	〃	平畑信子(実測)
	〃	荒牧陽子
	〃	後藤ちず子
	〃	宇野玲子
	〃	水本寿美子
	〃	小山正子
	〃	山元友子

本書の作成に協力された人々

江島園子	清田純一
河野智子	徳永みどり
富田紘一	野口龍彦
藤原ゆり子	宮崎敬士
井出田敦子	山下義満

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　遺構の総説

調査区は、丘陵上の平坦面におもに設けられ、一部が丘陵の南斜面に所在する。標高は平坦面で最高68ｍ、南斜面で65ｍである。

調査区は、主に道路と水路工事に係わる部分であるため大半は狭長である。各調査区の概要は次の通りである。

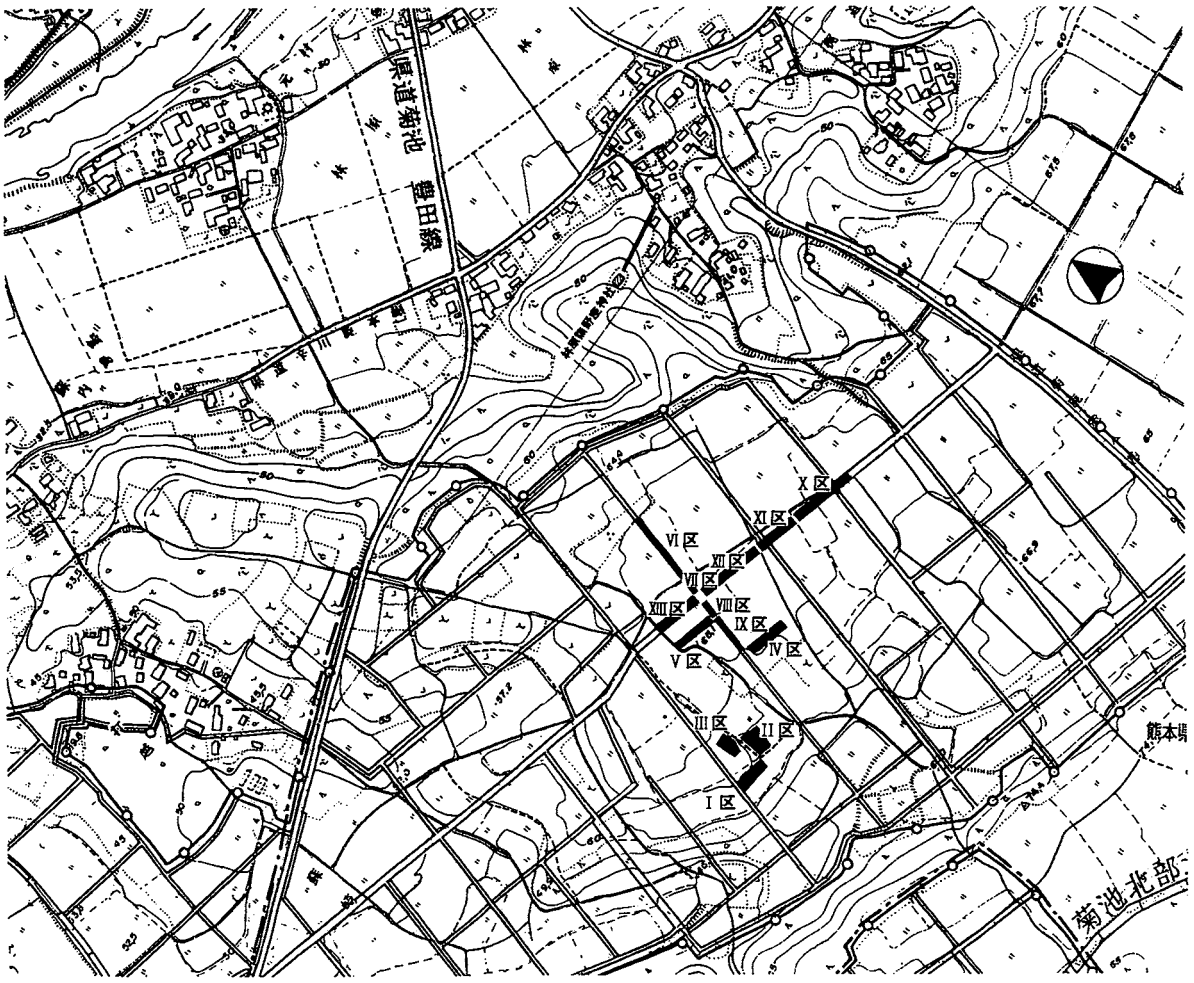
Ⅰ区は、南北37ｍ、東西14ｍであり、南に緩く傾斜する。遺構は、３条の道路状遺構であり、うち２条は路面の中央に浅いくぼみが列条に連なる。また道路条遺構に平行した溝が数条検出された。遺物は須恵器、土師器であり、ほとんどは平安時代の遺物である。特筆されるのは布目瓦である。

Ⅱ区は、南北21ｍ、東西19ｍである。遺構は溝３条、道路状遺構と柱穴群であり、遺物は、須恵器、土師器である。

Ⅲ区は、南北22ｍ、東西34ｍであり、わずかに南に緩く傾斜する。遺構は、溝２条、道路状遺構２条である。北東から南西に横切る302号溝からは、須恵器、土師器が出土した。301号道路状遺構は近世である。丘陵の縁辺部のためか南北に風倒木跡が３カ所ある。

Ⅳ区は、南北９ｍ、東西46ｍで丘陵の平坦面に所在する。遺構は、縄文時代の住居跡と思われる柱穴列、同じく埋甕１基、掘立柱建物１基、土坑３基である。このほか近世の溝が数条された。

Ⅴ区は、南北２ｍ、東西54ｍで丘陵の平坦面に所



第１図　調査区配置図

在する。遺構は、埋甕２基、竈付きの竪穴住居跡１基、土坑１基である。このほか南北方向に数条の溝、道路状遺構が検出された。

Ⅵ区は、南北35ｍ、東西３ｍである。Ⅶ区の北に位置し、南北に狭長な調査区である。縄文時代の土坑１基と掘立柱建物の一部と思われる柱穴列が検出された。

Ⅶ区は、Ⅷ区の北に位置し、南北18ｍ、東西３ｍの南北に狭長な調査区である。近世の溝が同区からⅧ区を貫いて南北に走り、調査区の北端には東西方向に数条の溝が検出された。調査区の南半は縄文土器の著しい分布が見られる。

Ⅷ区は、Ⅸ区の北に位置し、南北27ｍ、東西３ｍの南北に狭長な調査区である。Ⅶ区から続く近世の溝が調査区の西辺を南北に走る。縄文時代の住居跡らしい硬化面の広がり１基、古墳時代の住居跡１基、掘立柱建物１基、土坑５基である。表土下は縄文時代の包含層であり、夥しい土器片が出土した。

Ⅸ区は、Ⅷ区の南に位置するが資料散逸のため詳らかでない。東西３ｍの南北に狭長な調査区で、わずかに南に傾斜する。掘立柱建物２棟、埋甕１基が検出された。

Ⅹ区は、南北６ｍ、東西48ｍの東西に狭長な調査区である。丘陵上の平坦面に所在する。埋甕１基、土坑５基のほか近世の溝を検出した。

ⅩⅠ区は、南北６ｍ、東西21ｍの東西に狭長な調査区である。丘陵上の平坦面に所在する。土坑１基のほか近世の溝を検出した。

ⅩⅡ区は、南北７ｍ、東西88ｍの東西に狭長な調査区である。丘陵上の平坦面に所在する。出土遺構は、縄文時代の住居跡１基、埋甕１基、掘立柱建物１棟、土坑４基のほか、近世の溝と道路状遺構数条が南北に走る。表土下は縄文時代の包含層であり、夥しい土器片が出土した。

ⅩⅢ区は、南北６ｍ、東西51ｍの東西に狭長な調査区である。丘陵上の平坦面に所在する。出土遺構は、縄文時代の住居跡４基、埋甕３基、土坑３基のほか、竈付き住居跡１基、近世の溝が数条が縦横に走る。表土下は縄文時代の包含層であり、夥しい土器片が出土した。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１、竪穴式住居跡と遺物

縄文時代の竪穴式住居跡は、Ⅳ区に１基、Ⅷ区に１基、ⅩⅢ区に４基の総計６基を確認した。このうち４基は壁を検出した住居跡であるが、他は円形の柱列のみの遺構と、硬化した床面および炉のみの遺構であり、言うまでもなく住居跡としての条件が不十分な遺構であるが、ここでは住居跡に類するものとして扱った。

401号住居跡（第８図）

円形に柱穴が配列される竪穴式住居跡とみられる遺構である。南がわの一部は後世の攪乱を受け、また住居跡の中央部は歴史時代の土壙（402号土壙）と切り合う。著しい削平により壁および床面は確認出来ないが、若干の遺物が分布することから本来の床面のレベルと大差はないとみられる。11個の柱穴が円陣を組みさらに３個の柱穴をその内側に配する。柱穴の規模は25㌢ないし16㌢であり、その比高差は28㌢ないし17㌢である。柱穴の配列分布は長軸方向205㌢、短軸方向204㌢のほぼ円形であり、住居跡の規模はこれより一まわり大きいとみられる。

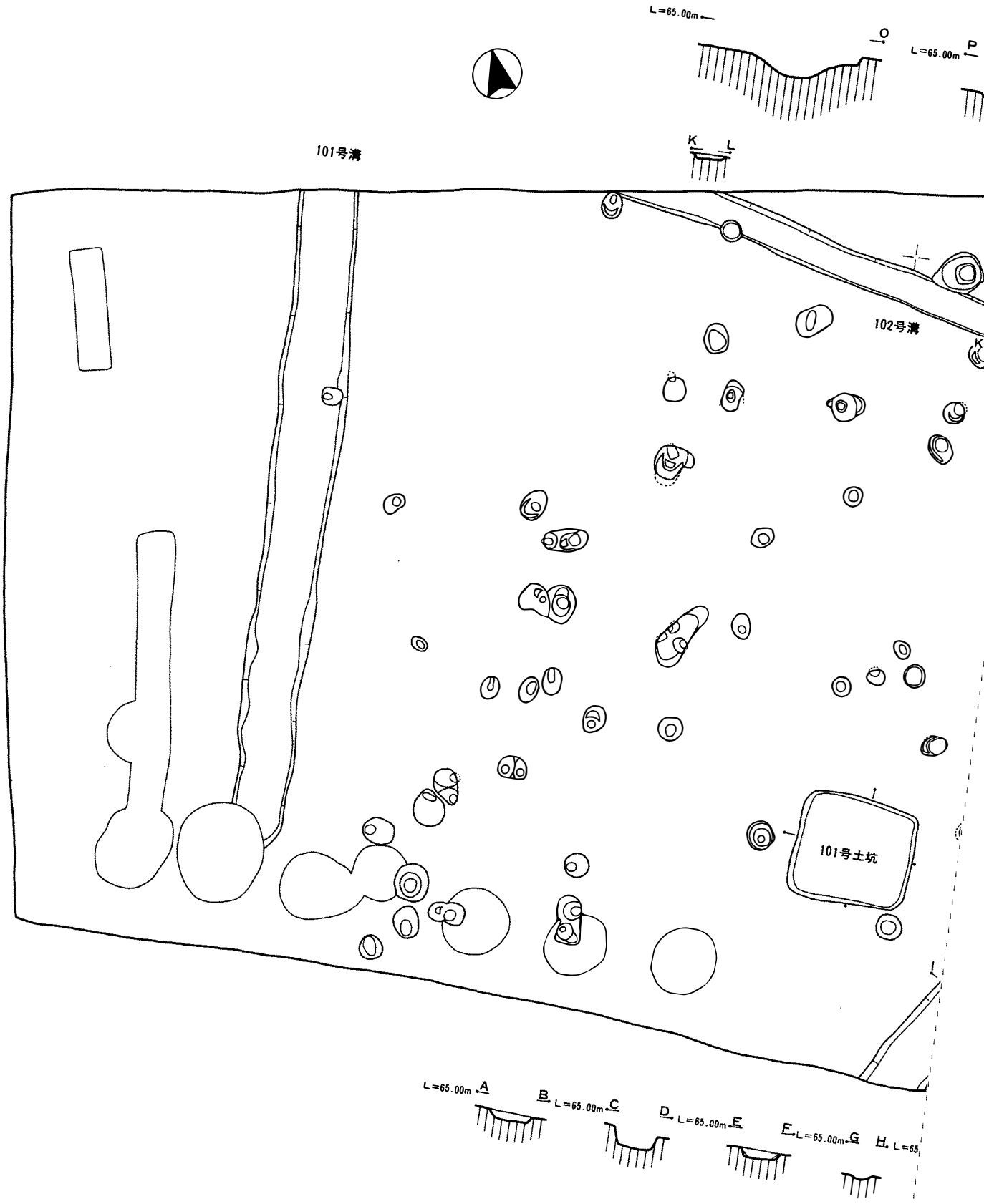
【出土遺物】（第28図）

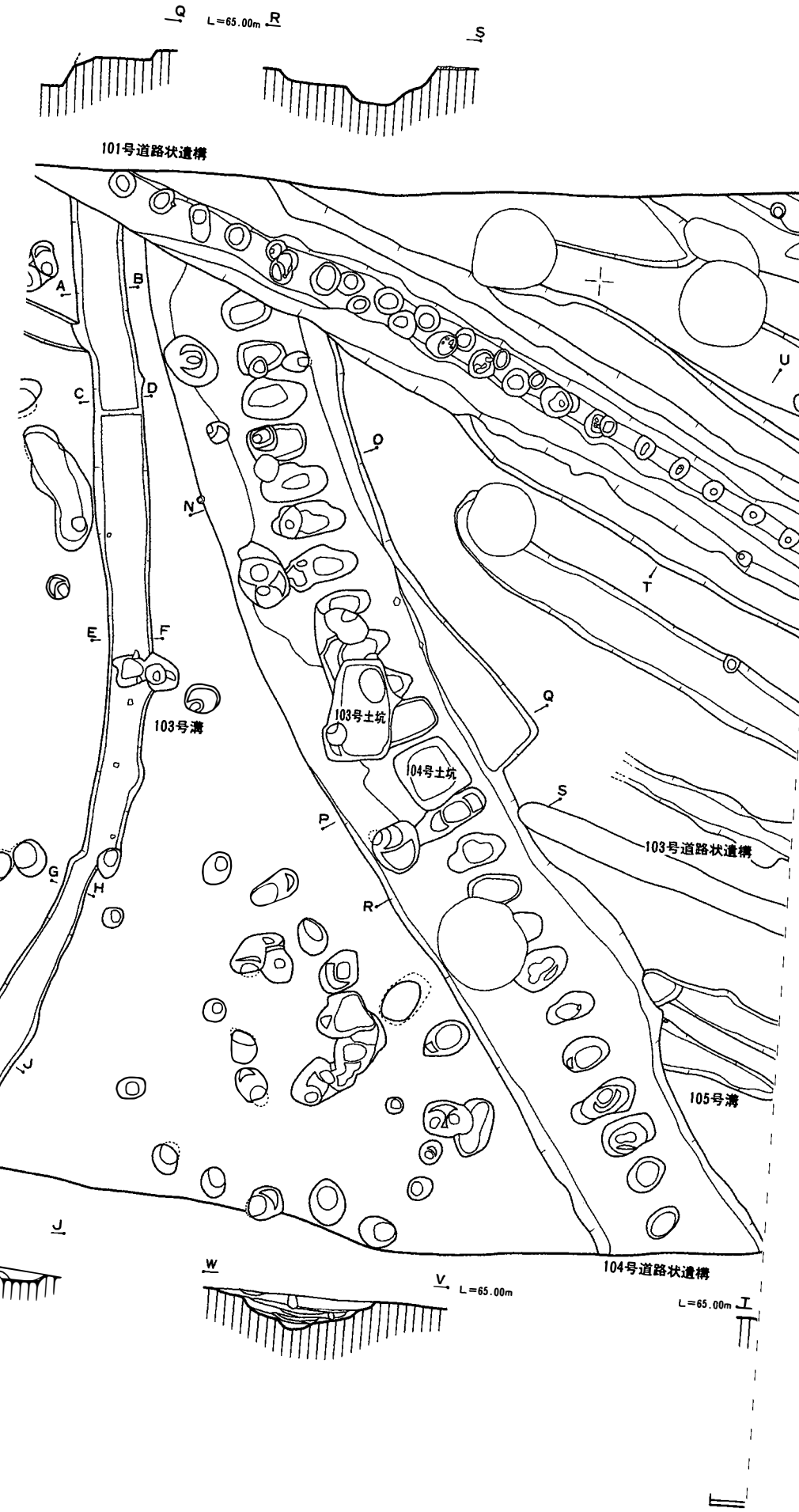
１は、丸底の浅鉢である。床面に正立位で出土した器高のやや高い位置に胴部最大径を置き、凹点を付す。頚部は浅くくびれ、口縁部はわずかに外反して短く開き、外面に１条の沈線が巡る。口縁端部は４カ所に低い山形突起を有する。内外面はミガキ調整である。

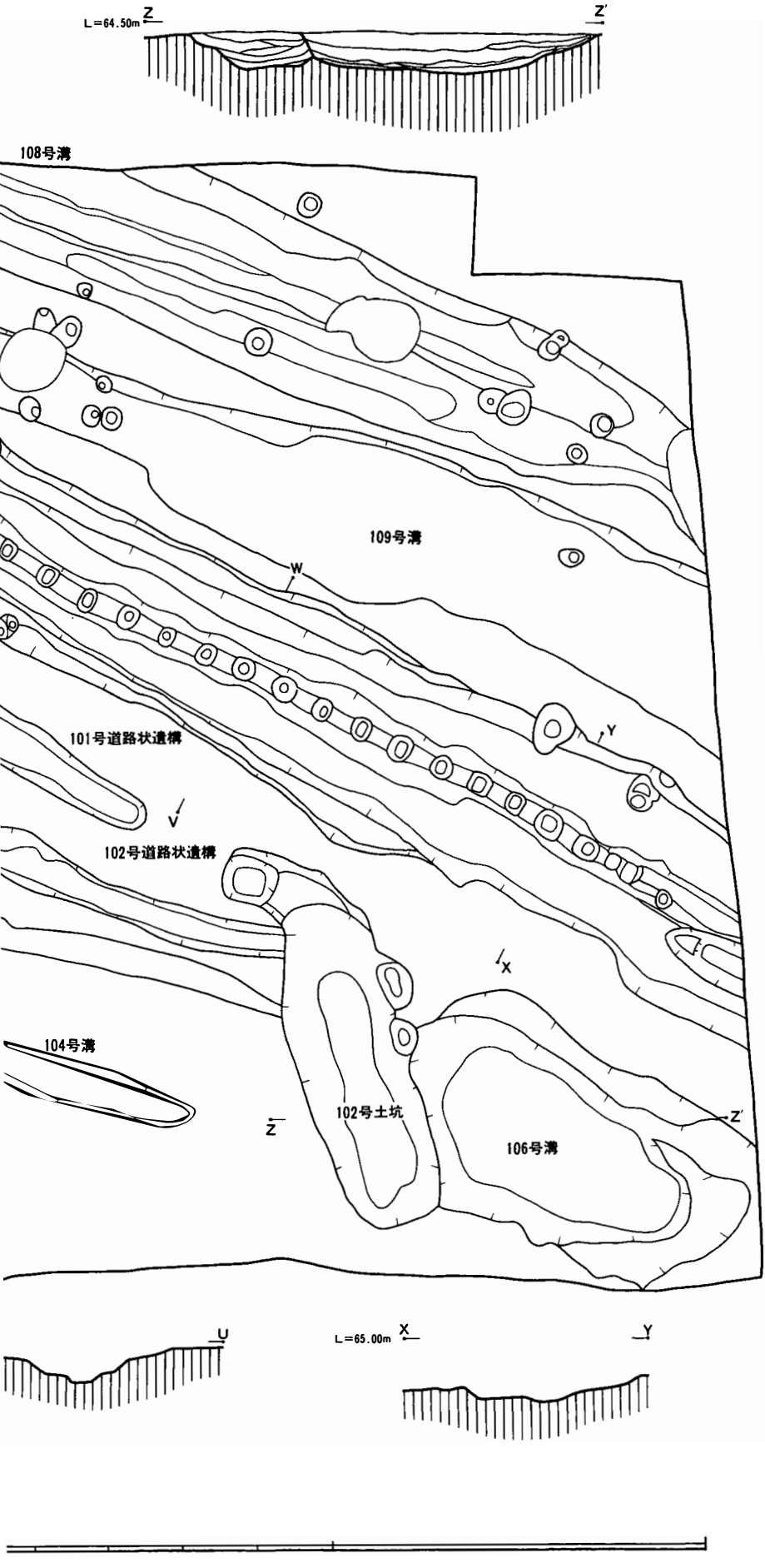
２、３は、深鉢の胴部下半のみの資料で、底部はわずかに上げ底である。４、５は、浅鉢である。４は、外反して開く口縁部で、３条の凹線が巡る。

802号住居跡（第11図）

西がわを近世の溝で切られ、炉とその周囲にわずかに残す硬化面の広がりが辛うじて住居跡の床面の面影を留める。壁と柱穴は確認できない。炉の規模は一辺33㌢の隅丸方形をなし比高差は10㌢でその埋土には炭化物を多く含む。硬化面の広がりは93㌢×


L=65.00m
O
L=65.00m
P
101号溝
K
L
102号溝
K
101号土坑
L=65.00m
A
B
L=65.00m
C
D
L=65.00m
E
F
L=65.00m
G
H
L=65.


Q
L=65.00m
R
S
101号道路状遺構
A
B
C
D
E
F
G
H
J
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
I
103号溝
103号土坑
104号土坑
103号道路状遺構
105号溝
104号道路状遺構
L=65.00m
L=65.00m


L=64.50m
Z
Z'
108号溝
109号溝
W
Y
101号道路状遺構
102号道路状遺構
X
104号溝
102号土坑
106号溝
Z
Z'
U
L=65.00m
X
Y

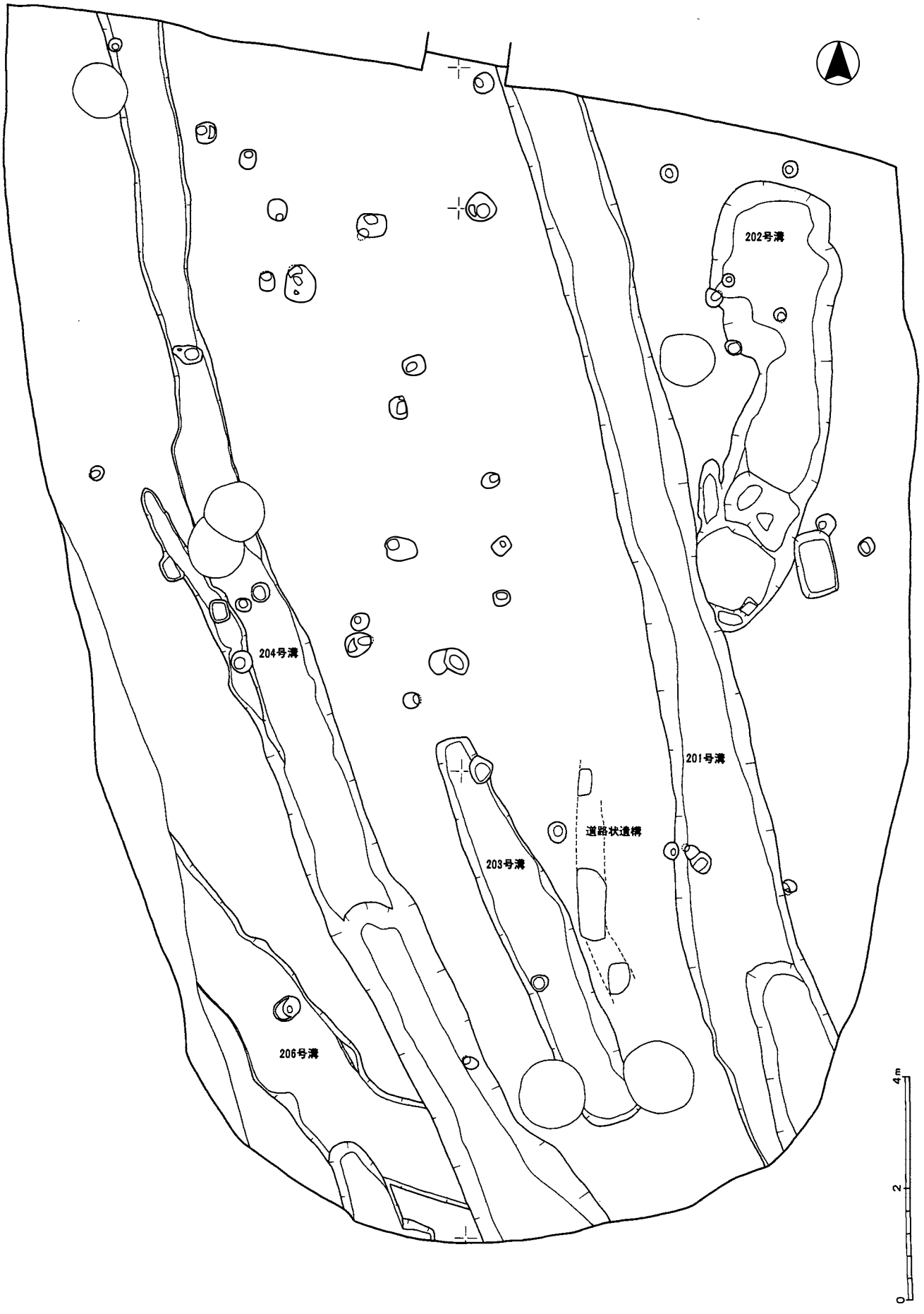
第２図　Ⅰ区遺構配置図

第3図

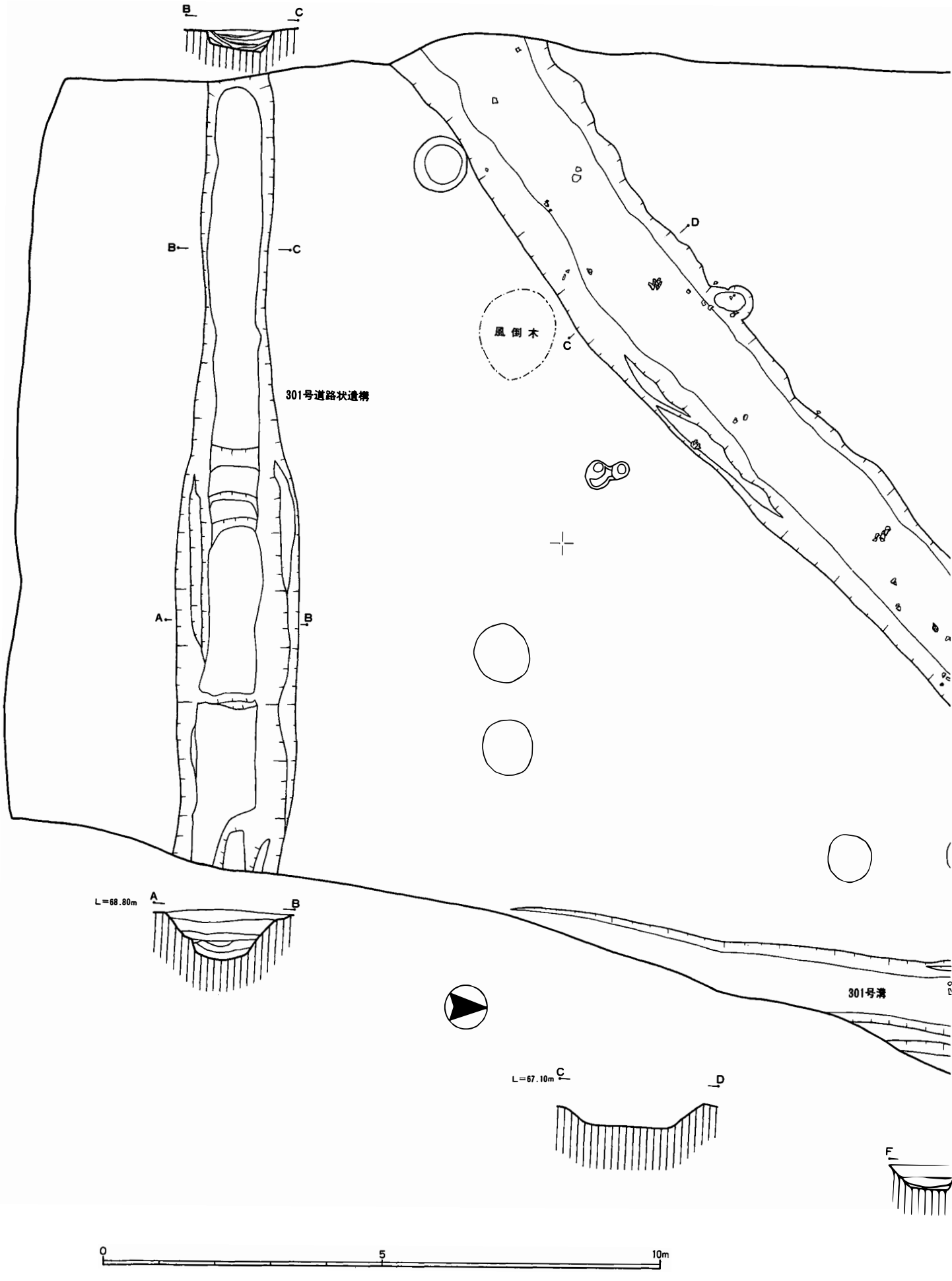
第1表　地　名　表

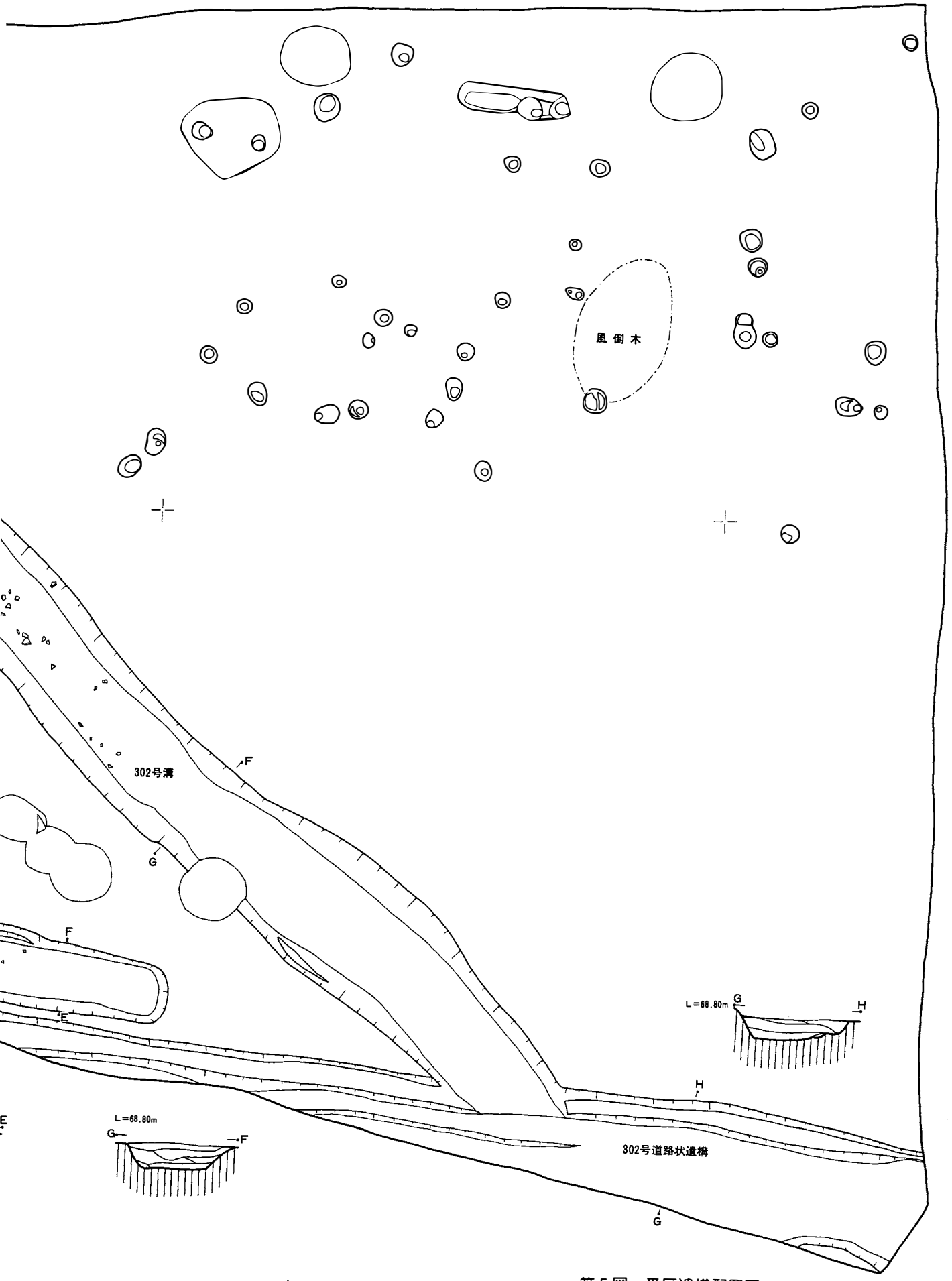
1	大久保	七城町林原	縄文　古墳　平安
2	城甕棺群	西合志町城	弥生
3	北野甕棺遺跡	西合志町上生	弥生
4	上原石棺墓	西合志町上生	弥生
5	上生	西合志町上生	弥生
6	城敷古墳	西合志町上生	古墳
7	城	西合志町上生	弥生　古墳
8	汐浸石棺	西合志町上生	古墳
9	瀬吐古墳	西合志町野々島	古墳
10	永田石棺	西合志町野々島	古墳
11	沖田	西合志町野々島	縄文　弥生　古墳
12	野々島	西合志町野々島	弥生　古墳
13	フタゴ塚古墳	西合志町野々島	古墳
14	二子山石器製作跡	西合志町野々島	縄文
15	八反畑	西合志町野々島	縄文　弥生　古墳
16	枇杷田	西合志町野々島	縄文
17	枇杷田	西合志町野々島	縄文
18	中尾	西合志町野々島	縄文　弥生　古墳
19	笹山	西合志町御代志	縄文
20	黒松萩の迫	西合志町合生	弥生
21	塚口横穴群	西合志町合生	古墳
22	生坪塚山古墳	西合志町合生	古墳
23	生坪古墳	西合志町合生	古墳
24	生坪石立古墳	西合志町合生	古墳
25	八反田	西合志町合生	弥生
26	八反原	西合志町合生	古墳
27	弘生原	西合志町合生	弥生　古墳
28	迫原ハヤマ古墳	西合志町合生	古墳
29	迫原長塚古墳	西合志町合生	古墳
30	高木原	西合志町合生	縄文 弥生 古墳 歴史
31	江良	西合志町合生	古墳
32	立割横穴群	西合志町合生	古墳
33	小合志古墳	西合志町合生	古墳
34	小合志原	西合志町合生	縄文 弥生 古墳 平安
35	辻久保	西合志町合生	縄文
36	岡山小塚古墳	泗水町田島	古墳
37	岡B	泗水町田島	奈良　平安
38	岡A	泗水町田島	奈良　平安
39	薄井	泗水町田島	古墳
40	天神平	泗水町南田島	古墳
41	宮田	泗水町田島	古墳　歴史
42	長塚古墳	泗水町南田島	古墳
43	宮の迫	泗水町南田島	古墳
44	アブミ塚古墳群	泗水町南田島	古墳
45	平野横穴群	泗水町南田島	古墳
46	田島廃寺	泗水町田島	奈良　平安
47	陣塚	泗水町田島	平安
48	高江出分塚山古墳	泗水町豊水	古墳
49	高江出分	泗水町豊水	縄文～平安
50	久米若宮古墳	泗水町豊水	古墳
51	三万田B	泗水町亀尾	縄文
52	三万田A	泗水町亀尾	縄文
53	古閑原	泗水町吉富	弥生
54	牛畑	泗水町吉富	古墳～中世
55	富出分	泗水町吉富	古墳
56	麦田	泗水町豊水	古墳
57	平町	泗水町吉富	古墳～中世
58	福本	泗水町福本	弥生
59	西谷	泗水町福本	古墳
60	南原古墳	泗水町福本	古墳
61	南原古墳	泗水町福本	古墳
62	村吉古墳	泗水町吉富	古墳
63	藤巻	泗水町永	弥生
64	村吉	泗水町吉富	平安
65	鬼木製鉄跡	泗水町永	平安
66	福原	泗水町永	弥生　古墳
67	今寺横穴群	泗水町富納	古墳
68	高納	泗水町富納	古墳
69	硯町横穴群	泗水町住吉	古墳
70	下峯	泗水町住吉	弥生
71	狐塚古墳	泗水町住吉	古墳
72	備後塚古墳	泗水町住吉	古墳
73	城山A	泗水町住吉	縄文～平安
74	住吉日吉神社遺跡	泗水町住吉	奈良～中世
75	南住吉古墳	泗水町住吉	古墳
76	南山王	泗水町住吉	縄文
77	長塚古墳	泗水町住吉	古墳
78	城山C	泗水町住吉	古墳～平安
79	城山B	泗水町福本	縄文～中世
80	城山	泗水町住吉	平安
81	新屋敷	泗水町南住吉	弥生　古墳
82	平町横穴群	泗水町住吉	古墳

83	松島	七城町小野崎	弥生
84	年賀塚古墳	七城町小野崎	古墳
85	小野崎	七城町小野崎	弥生
86	町畑石棺墓	七城町小野崎	古墳
87	打越古墳群	七城町蘇崎	古墳
88	鬼丸	七城町打越	縄文～平安
89	蛇塚古墳	七城町亀尾	古墳
90	長明寺古墳群	七城町亀尾	古墳
91	梶尾原古墳	七城町清泉	古墳
92	亀尾横穴	七城町亀尾	古墳
93	上鶴頭	七城町	平安
94	亀尾原	七城町亀尾	縄文
95	岩瀬横穴群	七城町亀尾	古墳
96	岩瀬チョウ塚古墳	七城町亀尾	古墳
97	南園	菊池市西寺	奈良　平安
98	西寺辻	菊池市西寺	弥生～平安
99	西寺辻	菊池市西寺	弥生～平安
100	水町	菊池市西寺	古墳～平安
101	狐塚	菊池市長田	古墳～平安
102	長田	菊池市長田	弥生
103	長田狐塚	菊池市長田	弥生
104	外園	菊池市長田	弥生
105	大塚古墳	菊池市長田	古墳
106	大塚	菊池市長田	弥生～古墳
107	木柑子船形石棺	菊池市木柑子	古墳
108	フタツカサン古墳	菊池市木柑子	古墳
109	木柑子横穴群	菊池市木柑子	古墳
110	東浦田平横穴	菊池市木柑子	古墳
111	深川古屋敷	菊池市深川	弥生
112	赤星宮ノ前	菊池市赤星	平安
113	赤星ヤンボシ塚古墳	菊池市赤星	古墳
114	赤星福土・水溜	菊池市赤星	平安
115	マユミノ横穴	菊池市今	古墳
116	天城神社古墳	菊池市赤星	古墳
117	天城	菊池市赤星	縄文　弥生
118	天城池端	菊池市赤星	縄文
119	妙見後田横穴	菊池市森北	古墳
120	医者どん坂A	菊池市出田	縄文　弥生
121	医者どん坂B	菊池市出田	縄文　弥生
122	医者どん坂C	菊池市出田	縄文　弥生
123	鬼石古墳	菊池市出田	古墳
124	堂坂横穴群	菊池市出田	古墳
125	古池城跡古墳	菊池市出田	古墳
126	亀の甲古墳	菊池市出田	古墳
127	万太郎B	菊池市出田	縄文
128	城山	菊池市出田	縄文　弥生
129	万太郎A	菊池市出田	縄文
130	森北落水古墳	菊池市森北	古墳
131	妙見後田横穴	菊池市森北	古墳
132	モトドリ山横穴群	菊池市森北	古墳
133	立石支石墓	菊池市森北	弥生
134	小川	旭志村弁利	縄文　弥生
135	松尾横穴	旭志村伊萩	古墳
136	屋敷の上	旭志村弁利	縄文
137	岩下横穴群	旭志村弁利	古墳
138	鶴ノ宮	旭志村弁利	古墳
139	土平横穴群	旭志村弁利	古墳
140	高永	旭志村新明	縄文～古墳
141	古宮	旭志村新明	縄文
142	平山古墳	旭志村麓	古墳
143	高柳	旭志村麓	弥生
144	伊坂上の原	旭志村伊坂	縄文～古墳
145	西原	旭志村川辺	縄文～古墳
146	ヒララ石	旭志村川辺	縄文　弥生
147	柏木	旭志村川辺	縄文　弥生
148	四郎丸	旭志村川辺	縄文　弥生
149	松ケ平	旭志村新明	縄文
150	尾足原	旭志村尾足	縄文　弥生
151	カメキユウラ	旭志村尾足	弥生
152	尾足原	大津町杉水	縄文
153	ワクド石	大津町杉水	縄文
154	ワクド石	大津町杉水	縄文
155	塔の本	大津町杉水	縄文
156	尾鶴	大津町杉水	縄文
157	今村	大津町杉水	縄文
158	杉水上ノ原矢鋅	大津町杉水	縄文　弥生
159	中林西原	合志町栄	弥生
160	中林	合志町栄	縄文
161	中林古墳	合志町栄	古墳
162	千経塚	合志町上庄	弥生
163	木瀬	合志町上庄	弥生
164	虚空蔵横穴	合志町上庄	古墳
165	八久保	合志町竹迫	縄文
166		合志町上庄	縄文

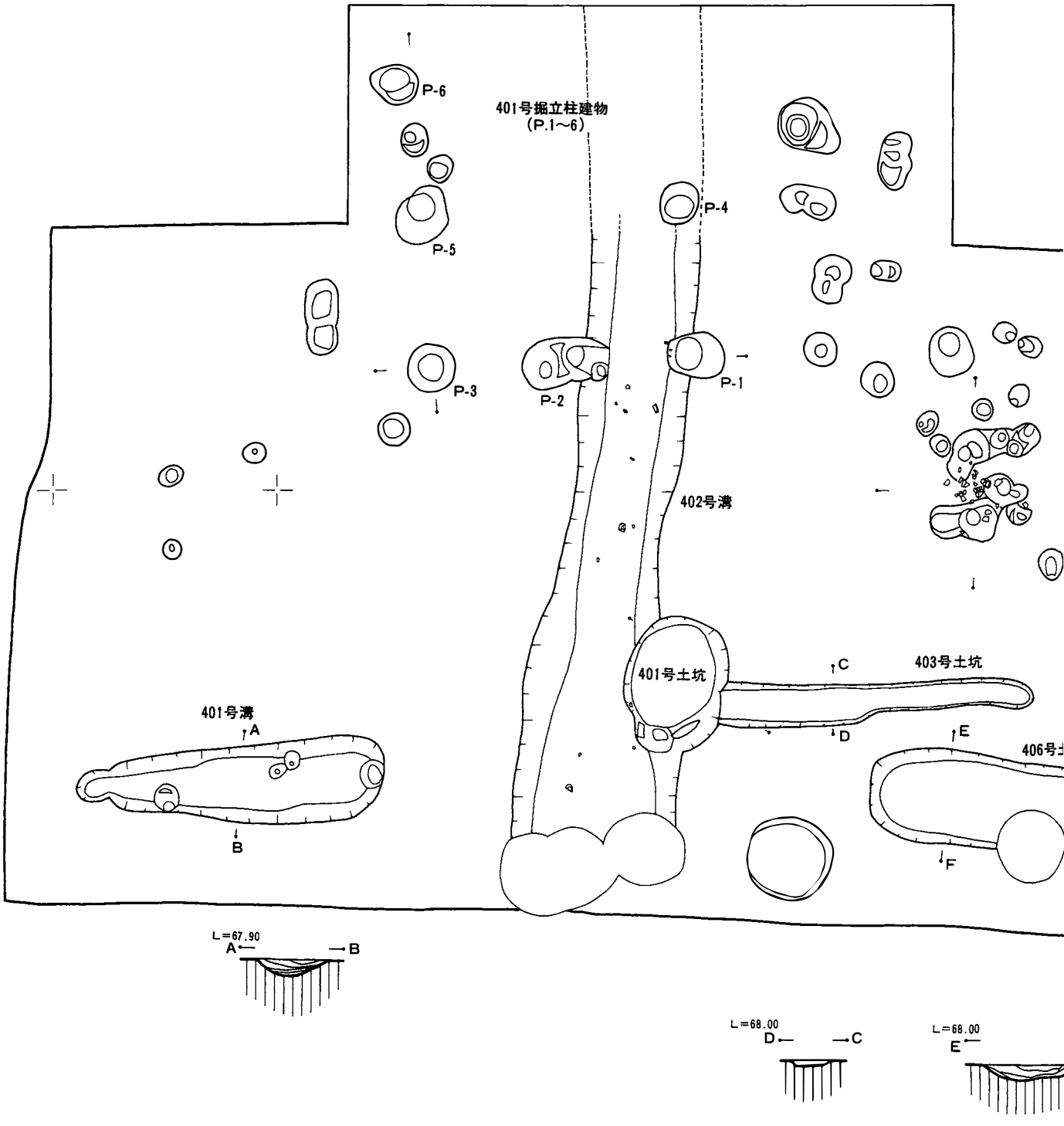


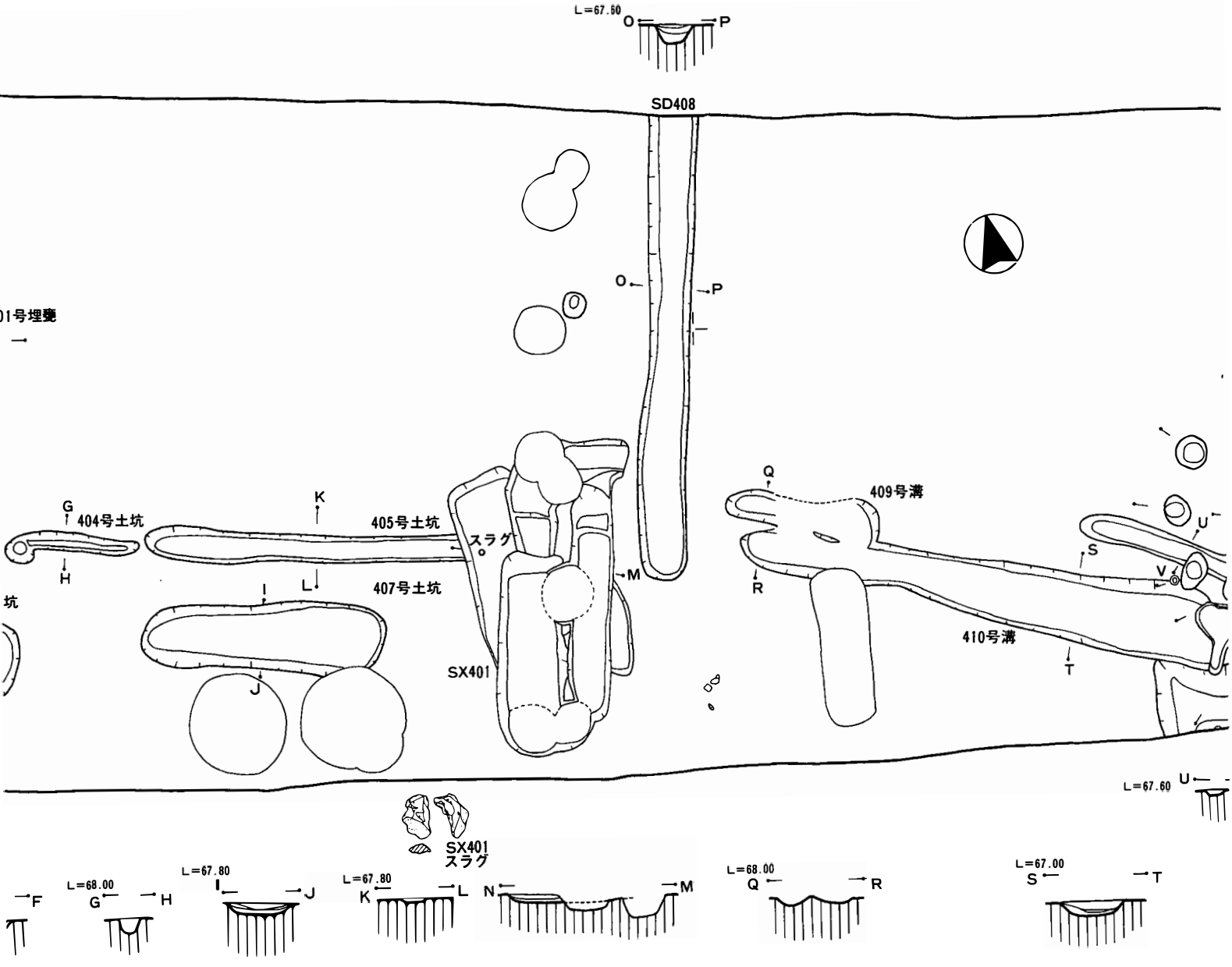
第４図　Ⅱ区遺構配置図


B
C
B
C
D
風倒木
C
301号道路状遺構
A
B
L=68.80m
A
B
301号溝
L=67.10m
C
D
F
0
5
10m

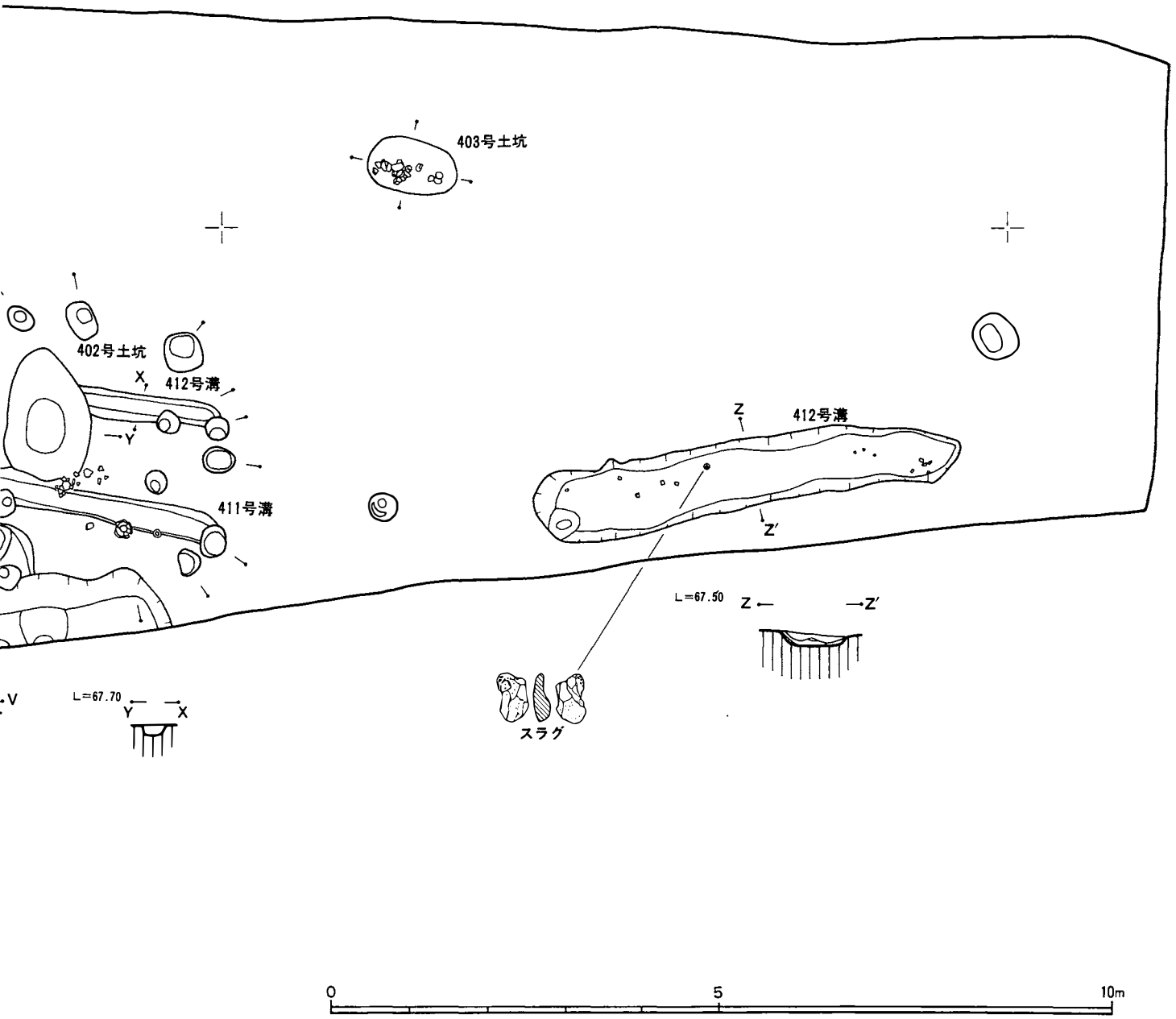


第５図　Ⅲ区遺構配置図

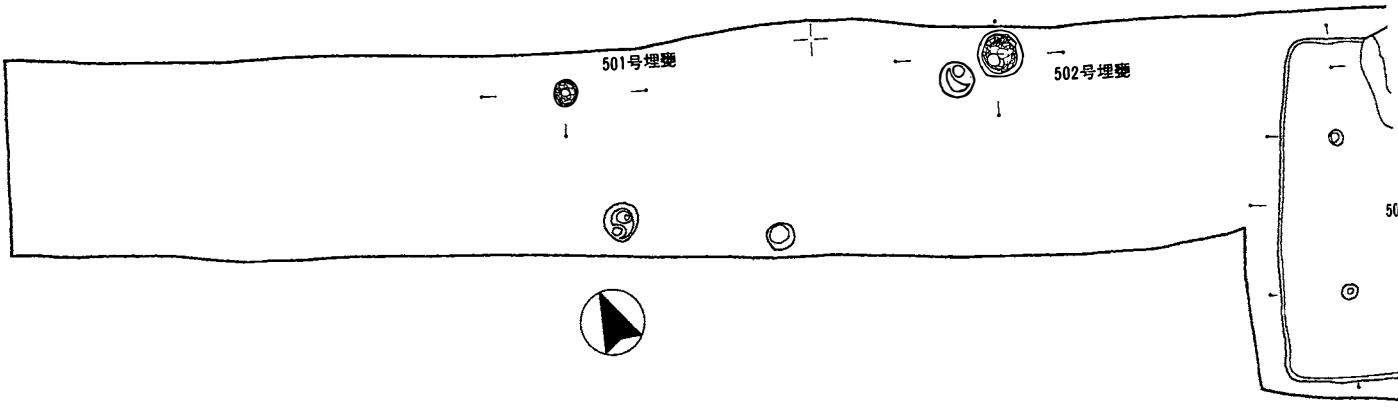

401号掘立柱建物
(P.1～6)
P-6
P-5
P-4
P-3
P-2
P-1
402号溝
401号土坑
403号土坑
C
D
E
F
401号溝
A
B
L=67.90
A
B
L=68.00
D
C
L=68.00
E

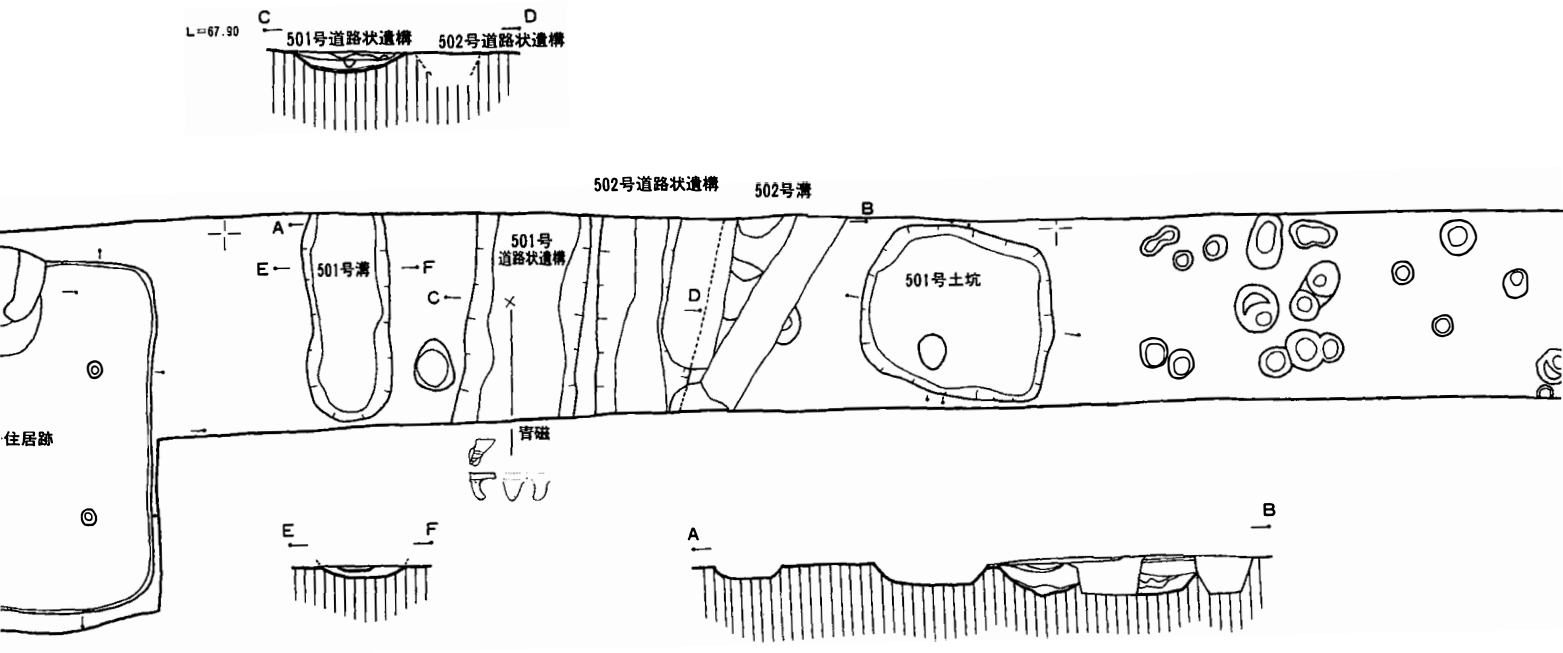

L=67.60
O
P
SD408
01号埋甕
G
404号土坑
H
K
405号土坑
スラグ
L
407号土坑
I
J
坑
SX401
M
Q
409号溝
R
S
V
U
410号溝
T
L=67.60
U

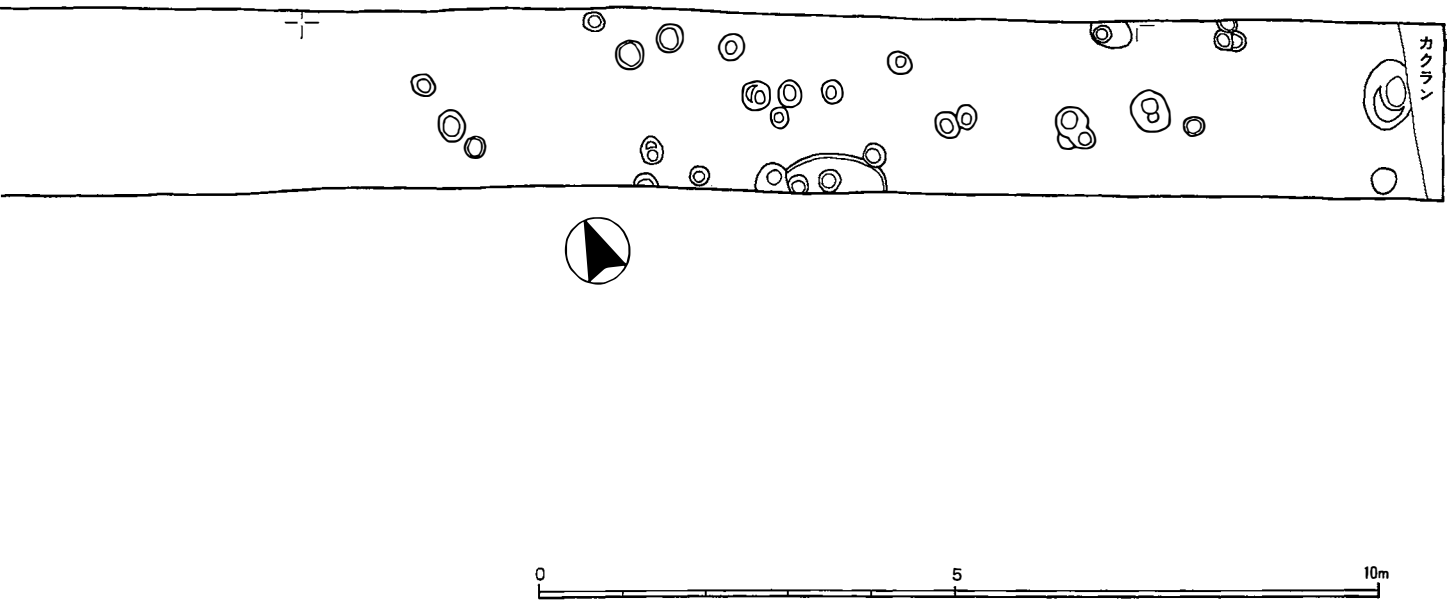
SX401
スラグ
F
L=68.00
G
H
L=67.80
I
J
L=67.80
K
L
N
M
L=68.00
Q
R
L=67.00
S
T


403号土坑
402号土坑
412号溝
X
Y
411号溝
412号溝
Z
Z′
L=67.50
Z
Z′
L=67.70
Y
X
スラグ
0
5
10m

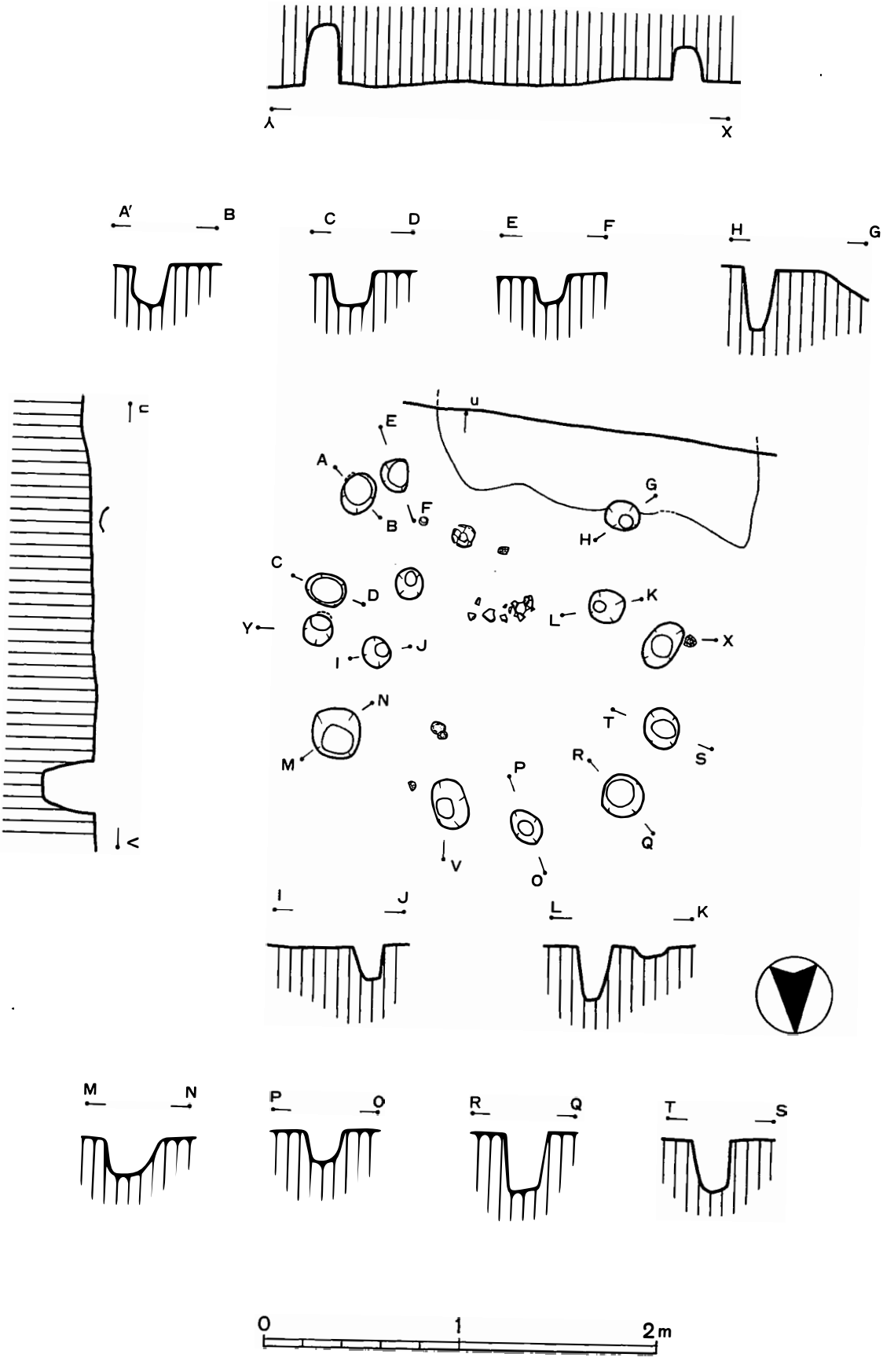
第6図　Ⅳ区遺構配置図


501号埋甕
502号埋甕


L=67.90
C
D
501号道路状遺構
502号道路状遺構
502号道路状遺構
502号溝
A
B
E
F
501号溝
501号
道路状遺構
C
D
501号土坑
住居跡
青磁
E
F
A
B



第７図　Ｖ区遺構配置図



第８図　401号住居跡実測図

73㌢の不整形で表面には起伏が目立つ。遺物は炉の周囲に土器片が散在する。

【出土遺物】（第29図）

1は、浅鉢の口縁部である。外傾して直線状に開く胴部をなし口縁に到る。口縁部は外面で稜線をなし直立ぎみに外傾し断面は切出状を呈する。外面には2条の沈線が巡る。

2は、肩部にX字文を有する深鉢の胴部である。器形は弯曲して張り出す胴部をなし、頚部で「く」の字に屈曲する。肩部に6条の沈線が巡り、さらにX字文を重ねる。口縁は波状をなすとみられる。

4、9は、ミニチュア土器である。前者は外傾して直線状に開く浅鉢で、いわゆる鳥井原式浅鉢の祖形器形を模したものである。口縁部はやや肥厚し、外面に1条の沈線が曖昧に巡る。後者は深鉢である。丸底の底部をなし、頚部で内面には稜線を残しつつわずかにくびれ、口縁部はわずかに内傾しつつ外反して開く。口縁端部は尖り外面には1条の沈線が観察される。

7は、浅鉢の口縁部である。屈折し内傾して端部に到る。2条の凹線を外面が巡る。

8は、外傾して直線状に開き、頚部そのまま口縁部をなす浅鉢である。口縁端部の外面に稜線を持ち断面が三角形を呈する。外面は荒い条痕で調整する。

1201号住居跡（第11図）

XⅡ区に所在する。北半分は区外であり未調査である。平面形態は円形であり、その規模は直径242㌢、壁高は良好な部分で16㌢である。住居跡の中央に円形の炉があり内に炭化物を含む焼土混じり土を充たす。炉の規模は残存する長径で52㌢、深さは6㌢である。床面には広範囲に硬化面があり、柱穴は壁に沿って4カ所認められ、さらに内側には4カ所が炉の周囲に存在するが、必ずしもこの住居跡に伴うものかは判然としない。

出土遺物は土器のほかに焼成粘土塊が出土した。

【出土遺物】

81－4は、浅鉢の口縁部である。外弯しつつ開き頚部のくびれた位置に文様を有し、口縁端部の両面に沈線を巡らす。

96－6は、低火度の火を受けた粘土塊片である。破断面が灰白色を呈することから本来は大型の集塊から分離した破片とみられる。細かい粘土の屑に交えて植物質の繊維炭化物を含む。

1302号住居跡（第12図）

XⅢ区に所在する。南がわの一部は調査区外である。平面形態は南北に長い楕円形であり、その規模は長軸方向は残存204㌢、短軸方向189㌢、壁高は良好な部分で15㌢である。炉は確認されない。住居跡の中央部の中層から横位で押し潰れた姿の深鉢が出土した。柱穴は23カ所検出したが、いずれを主たる柱穴とするかは判断しがたい。床面の硬化は未発達である。

【出土遺物】（第30図）

1は、浅鉢である。胴部は緩く内弯ぎみに立ち上がり、胴部最大径より外弯して浅くくびれ口縁に到る。わずかに外傾する口縁部は外面に3条の凹線が巡り、口縁端部の上面は平坦であり山形突起を付す。

2は、深鉢である。胴部は内弯ぎみに立ち上がり、胴部最大径にての屈曲は弱く、頚部の高い位置でわずかにくびれ、直立する口縁部へ到る。端面は平坦であり口縁の外面は4条の沈線を巡らす。また胴部には1条の界線が巡る。胴部は粗く条痕が残りカーボンが付着する。

1303号住居跡（第13図）

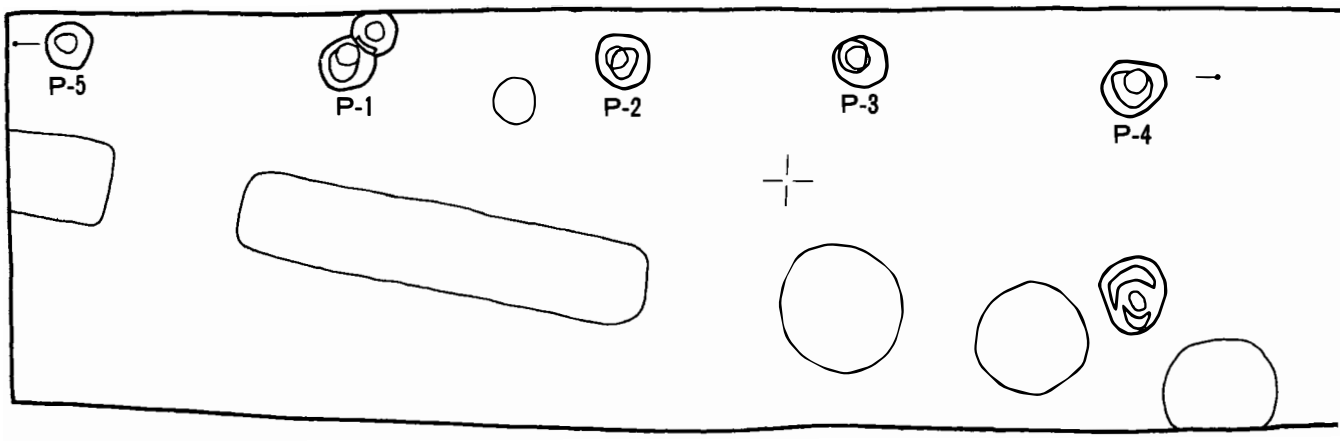
XⅢ区に所在し、1304号住居跡の一部を切って立地する。平面形態は円形であり、その規模は直径245㌢、壁高は良好な部分で8㌢である。炉は住居跡の中央部にあり、長軸方向44㌢、短軸方向38㌢の楕円形である。深さは10㌢を測り、焼土を充たす。主柱穴は4本を有し、硬化面は住居跡の中央部に主柱穴を取り込んで広範囲に分布する。また壁際には安山岩の板石製の台石を据える。

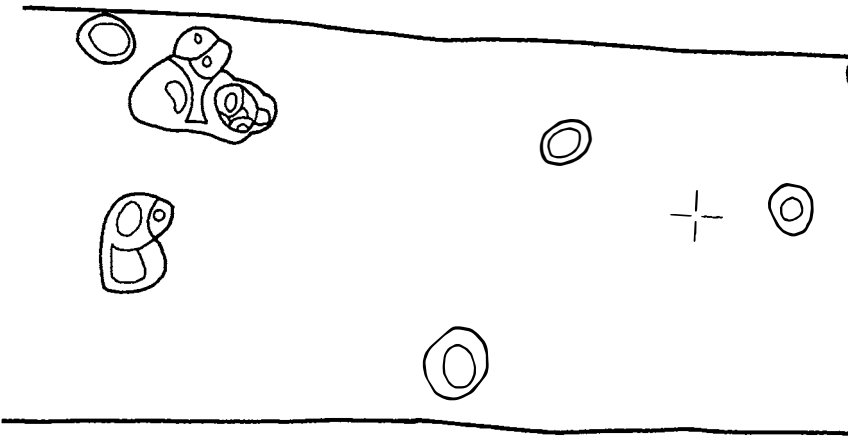
【出土遺物】（第31～39図）

31－1～7、32－1～11、39－2は、頚部が屈曲する浅鉢である。共通する特徴は次のとおりである。

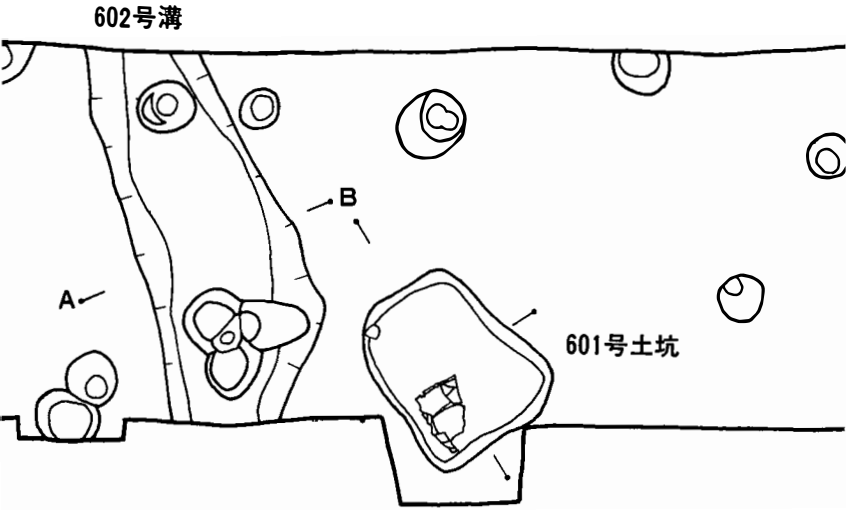
胴部は緩く内弯ぎみに立ち上がり、胴部最大径に

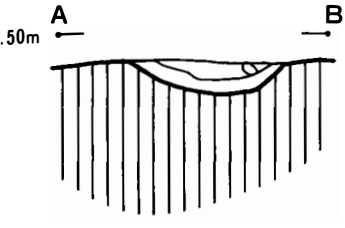
601号掘立柱建物(P.1～5)

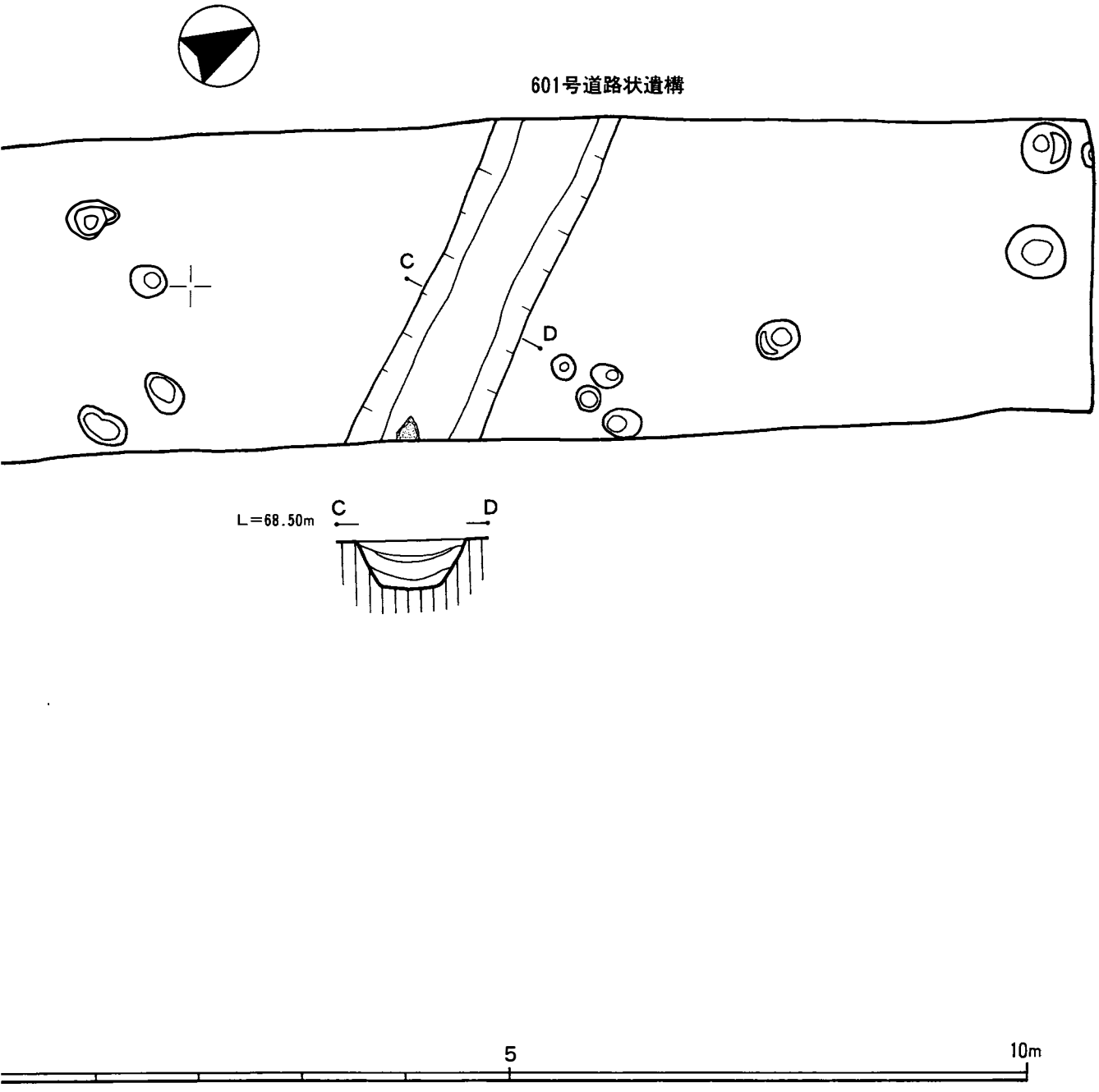




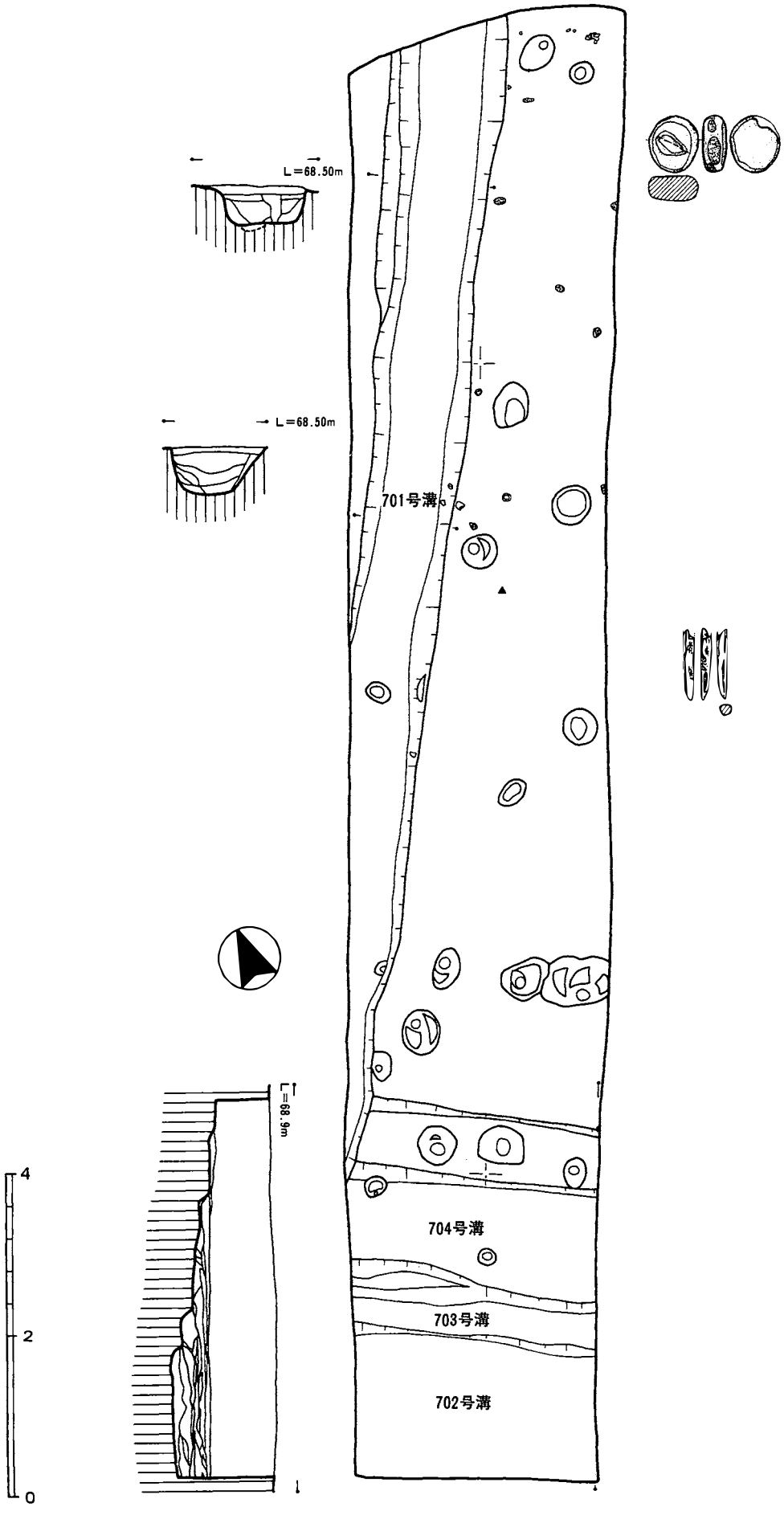
L=ℓ


602号溝
B
A
601号土坑

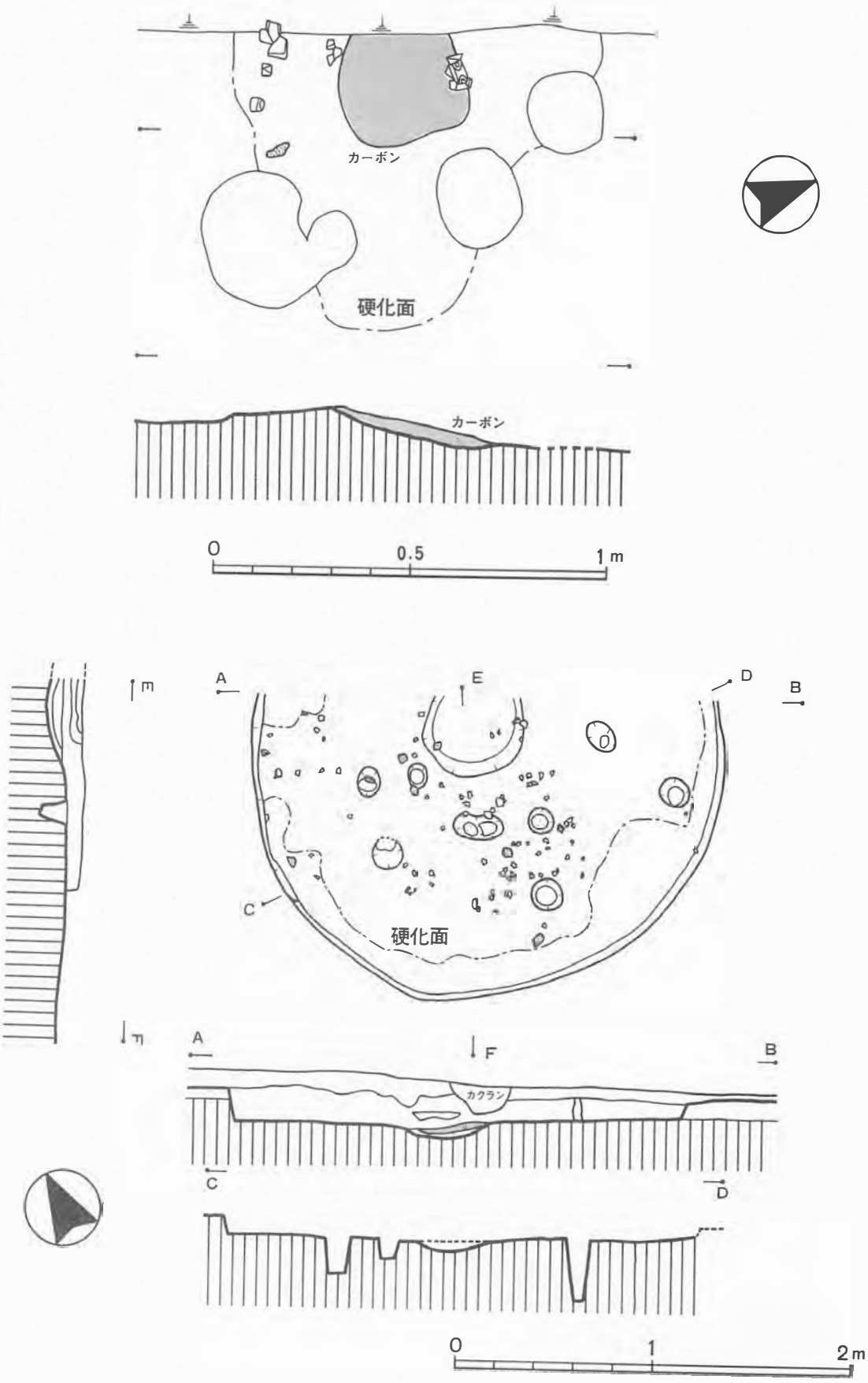

A
B
.50m



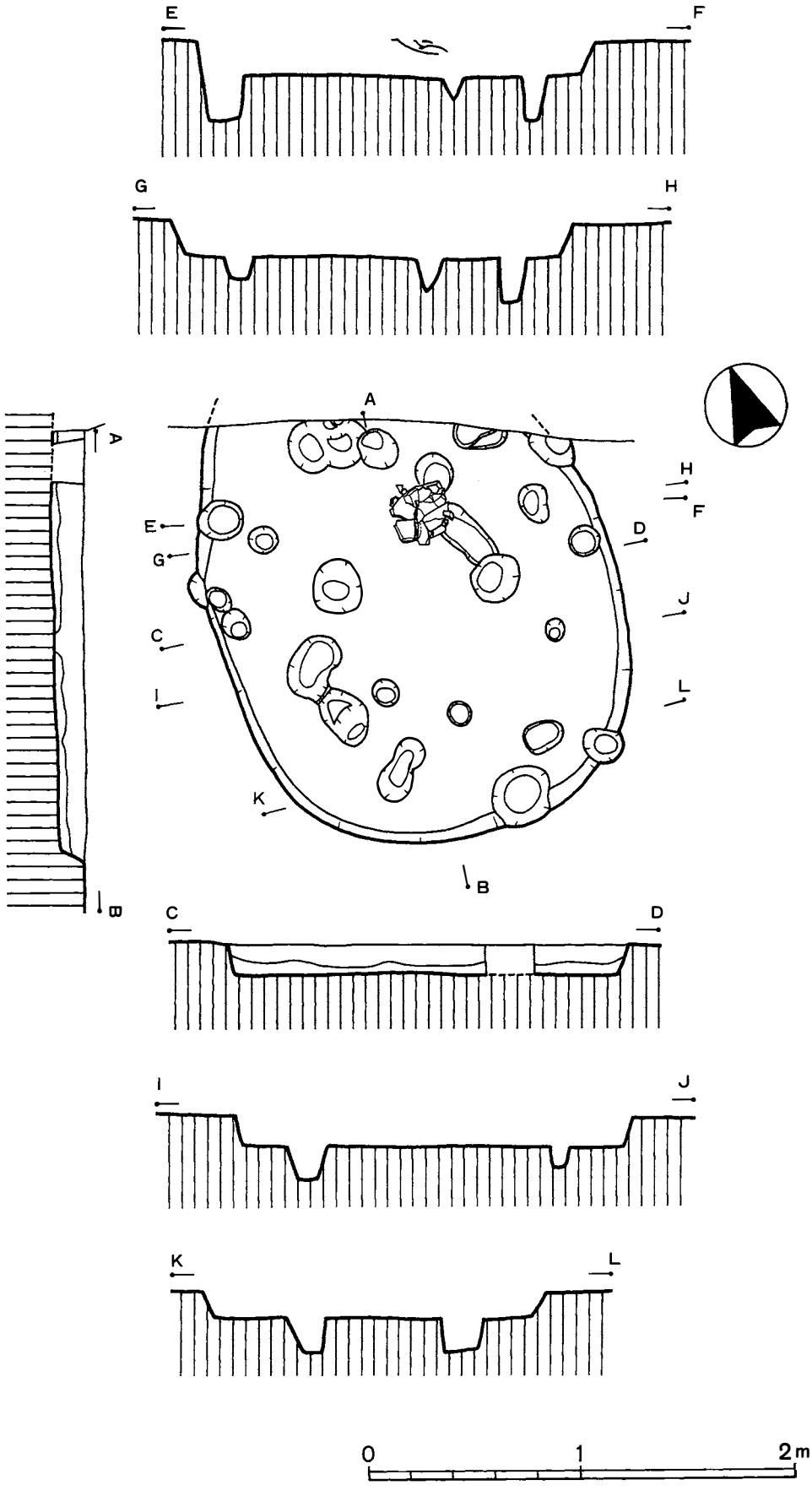
第９図　Ⅵ区遺構配置図



第10図　Ⅶ区遺構配置図



第11図　802号、1201号住居跡実測図



第12図　1302号住居跡実測図

て外弯してくびれ口縁に到る。口縁部は外面に２条の沈線が巡り、口縁端部は一般に平縁で山形突起を付すものがある。

特徴の現れやすい口縁部を観察すると３つの傾向がみられる。31－１、31－６、32－２、32－３、32－５、32－６は、口縁端部が尖りやや外反し、磨きのかかった彫りの浅い沈線であり古い傾向を残す。32－４、32－８は深く鋭い沈線である。他は最も多い器形であるが、反復した磨き込みによる２条の沈線が巡り、その間を中高に浮彫り状にするものである。

32－９、33－１～３、33－４～６は、頚部での屈曲がなく口縁端面にわずかに文様帯を有するか、あるいは無文の浅鉢である。

32－９、33－１は、口縁端面に辛うじて文様帯を有する。内傾する短い口縁に２条の磨き込まれた沈線を有する。前者は丸底から心持ちＳ字状をなしつつ緩やかに立ち上がり口縁に到る。後者は大型の土器で外面には磨き残された条痕が目立つ。口縁は体部と比べ薄手で、短かく直角に内に折れ、２条の浅い沈線が巡る。体部の高い位置には内から穿たれた補修孔があり、傍らに外からの未通補修孔がほとんど接して観察される。

33－２、33－４、33－５は無文で碗形の浅鉢である。前２者には口縁端部に極くわずかな内傾がみられる。

33－３は辛うじて頚部の屈曲が観察しうる体部を有する浅鉢である。各屈曲部位の稜線は不明瞭であり、碗形の浅鉢に分類せざるを得なかった。口縁端部は尖る。

33－６は小型の皿形の浅鉢で、分厚い丸底から緩く内湾して体部は立ち上がり、口縁端部は薄く尖る。内外面はよく磨かれている。

深鉢の資料は次のとおりである。

33－８、33－９、34－１～３、35－１～６、36－１～４、37－１～５、38－１～６である。

主流は、胴部の中位で「く」の字に折れ、頚部は外湾し屈曲する水平な口縁を有する器形であり、口縁の形状および沈線のあり方で分類が可能である。

この種の大半は、沈線の数は３本で多くは口縁が直立し一部が内傾し、口縁端部の断面の形状は、平坦なものと尖ったもの２種があり、ほとんどは前者である。34－３、35－２、35－４～５、37－１～２がこの類である。後者は35－１である。

沈線が２本のものは、35－２、35－６、36－４、39－１、39－１～４、39－６である。口縁はいずれも直立し、とくに前２者は良く磨き込まれ古い型式の特徴を持つ。39－３には補修孔を有する。このほか４本沈線のものでは34－１、36－３である。

口縁が無文のものでは37－３、37－４であるが後者は胴部の屈曲が弱い。34－２は口縁に６カ所の山形突起を有する。

その他の深鉢の器種では口縁に文様帯のない38－１、小型で文様帯のない深鉢38－２、碗形の深鉢33－８、38－５である。

33－９、38－３は口縁のありかたがよく分からない資料である。

1304号住居跡（第13図）

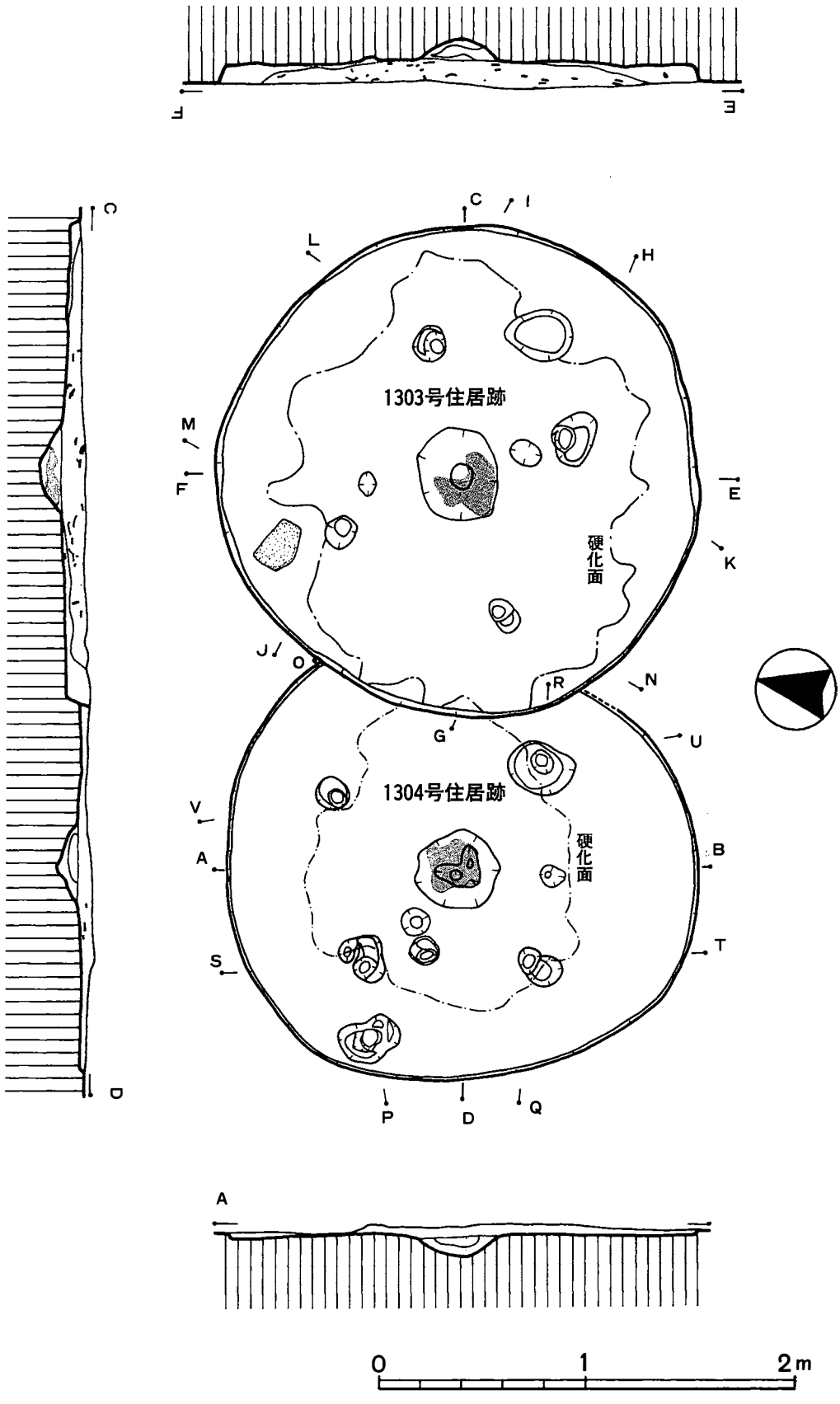
ⅩⅢ区に所在し、1303号住居跡に東がわの一部を切られる。平面形態は円形であり、その規模は長軸方向228㌢、壁高は良好な部分で４㌢である。炉は住居跡の中央部にあり、長軸方向42㌢、短軸方向38㌢の楕円形である。深さは17㌢を測り、焼土を充たす。主柱穴は４本を有し、他に４カ所小柱穴がある。硬化面は住居跡の中央部に主柱穴の間際まで広がる。

【出土遺物】（第40図）

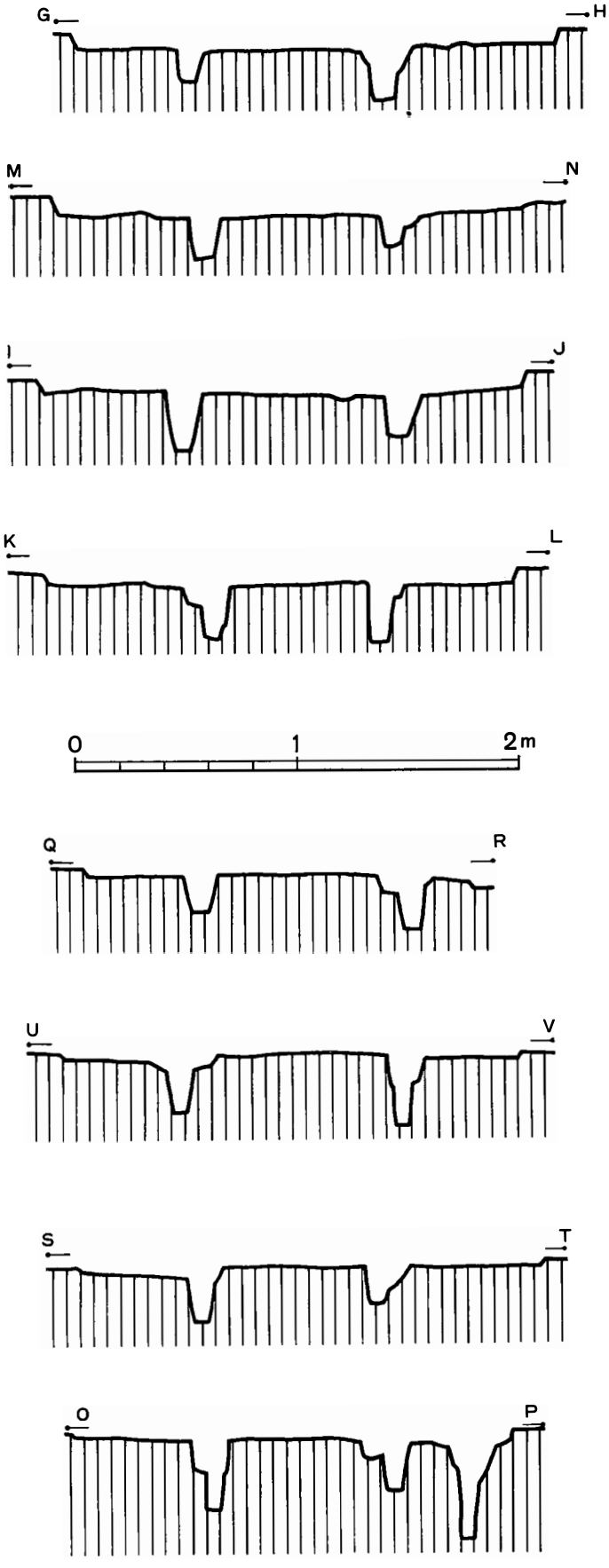
40－１、40－２は、浅鉢の資料である。前者は底部以外を残存する良好な資料である。胴部はわずかに外弯しつつ立ち上がり、最大径にて内に折れ頚部のくびれをなし口縁に到る。口縁は短く直立し外面に２本の沈線が巡る。口縁端部はやや尖り４カ所に山形突起を有する。後者は同様の器形であるが頚部は内に折れたあと強く外湾し直立した水平の口縁部に到る。口縁には２条の沈線を巡らし、沈線の集約する部分の口縁端面にヘラを押し当てた凹部を有する。

40－３～５、41－１～３は深鉢の資料である。

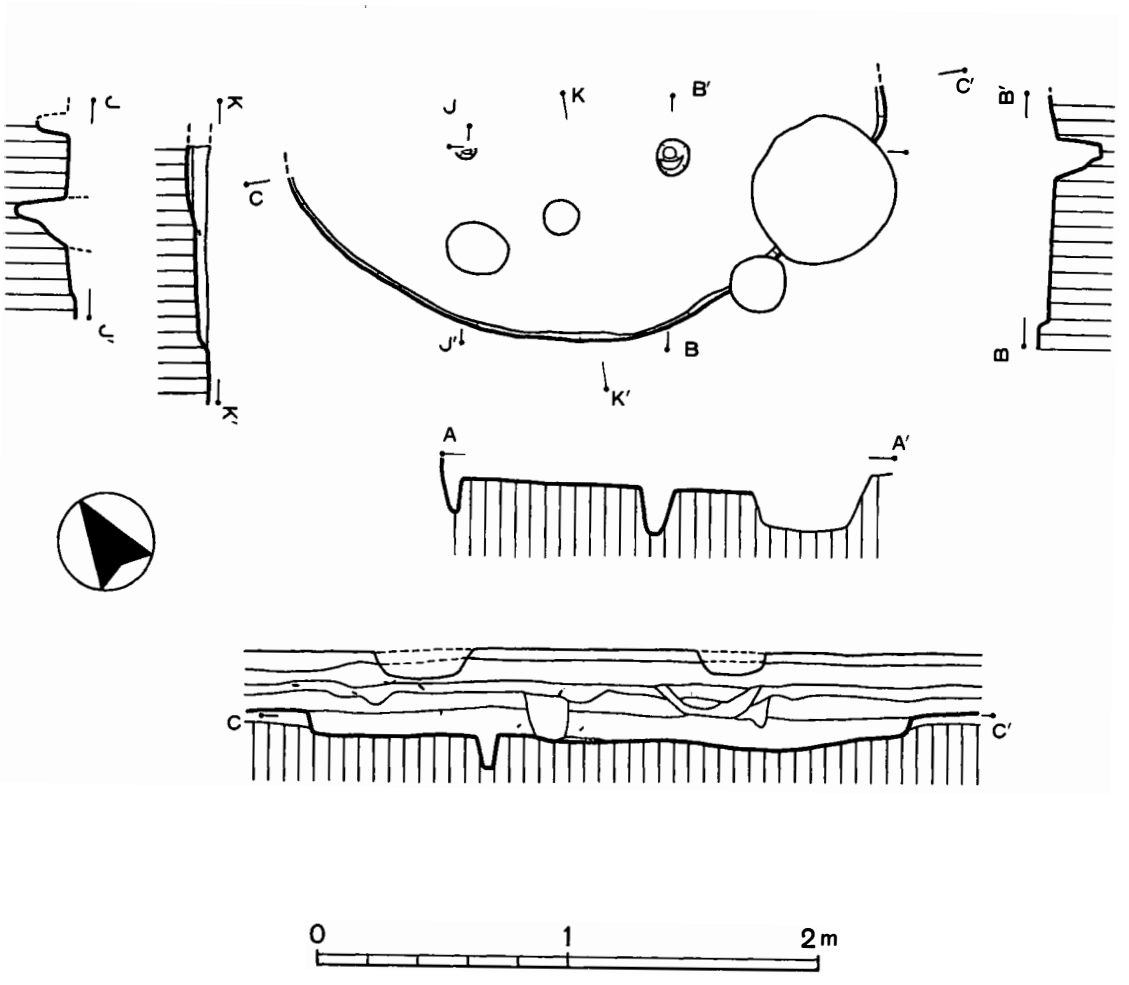
40－３、40－４、41－２は、３本の沈線を巡らす。頚部は、胴部最大径より内傾して立ち上がり外反し



第13図　1303号、1304号住居跡実測図



第14図　1303号、1304号住居跡断面図

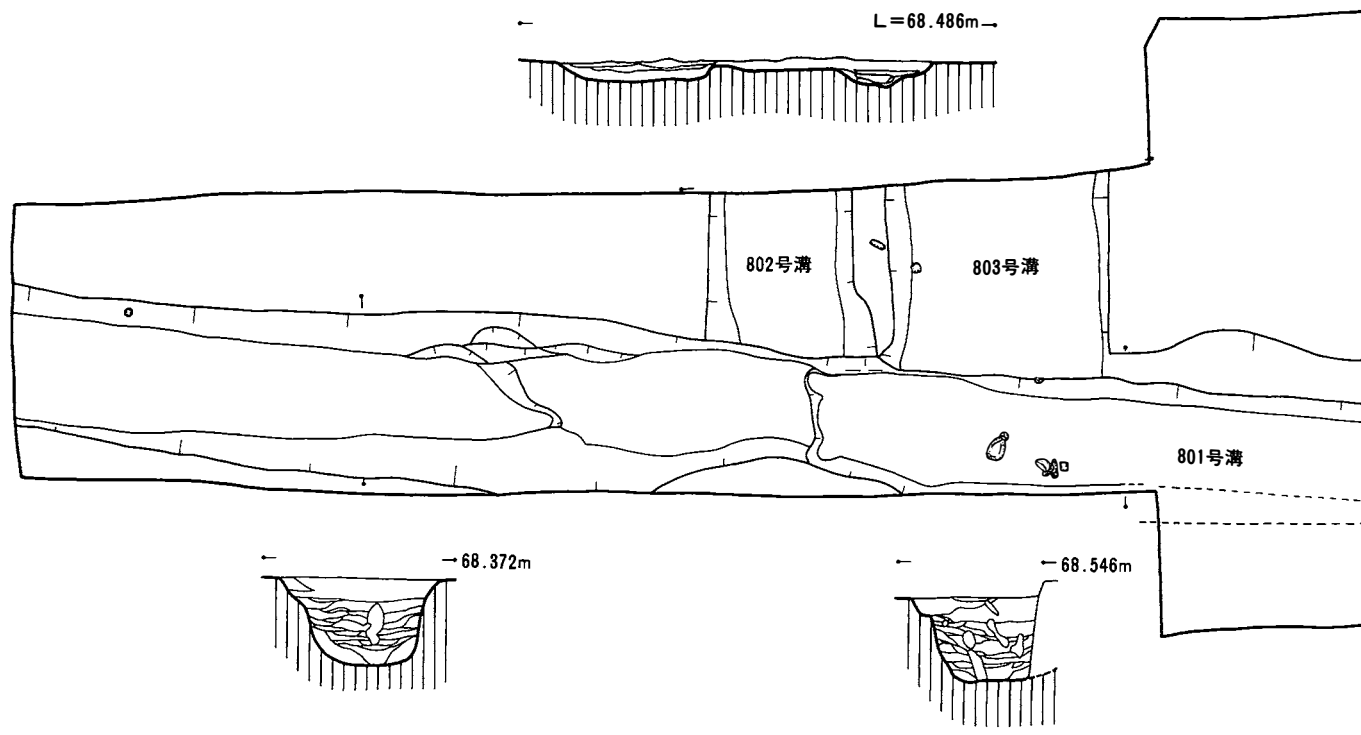


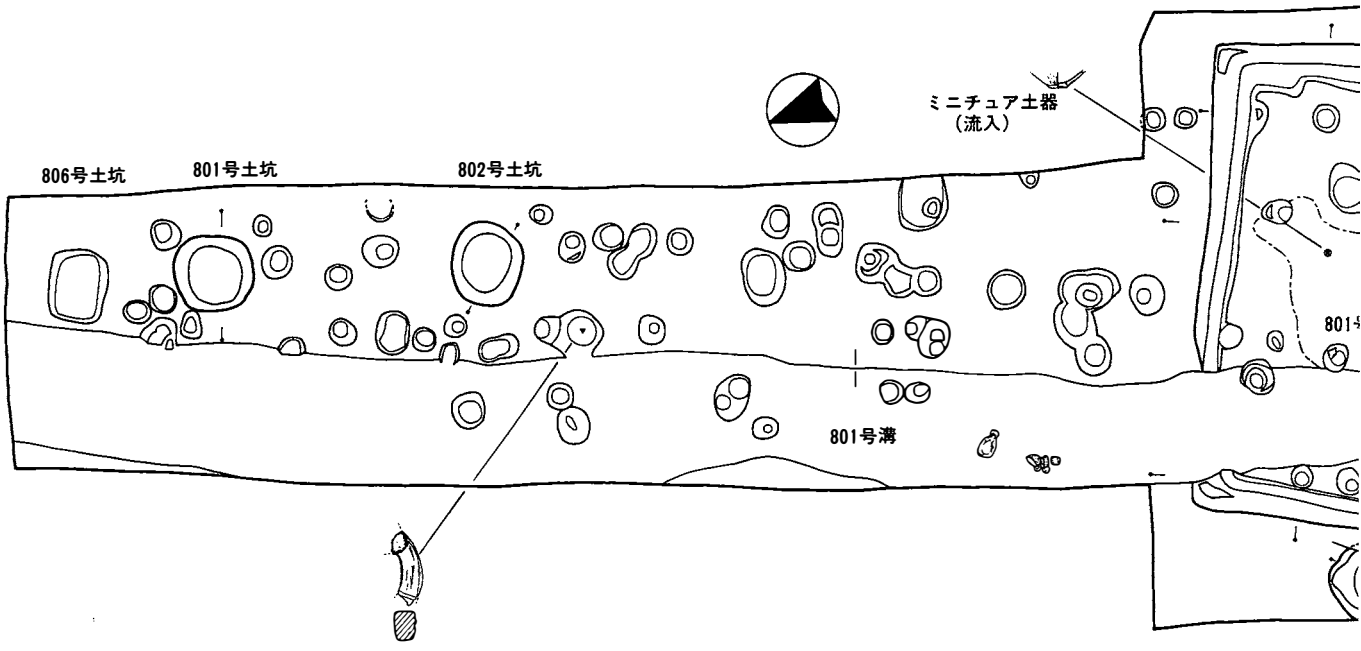
第15図　1305号住居跡実測図

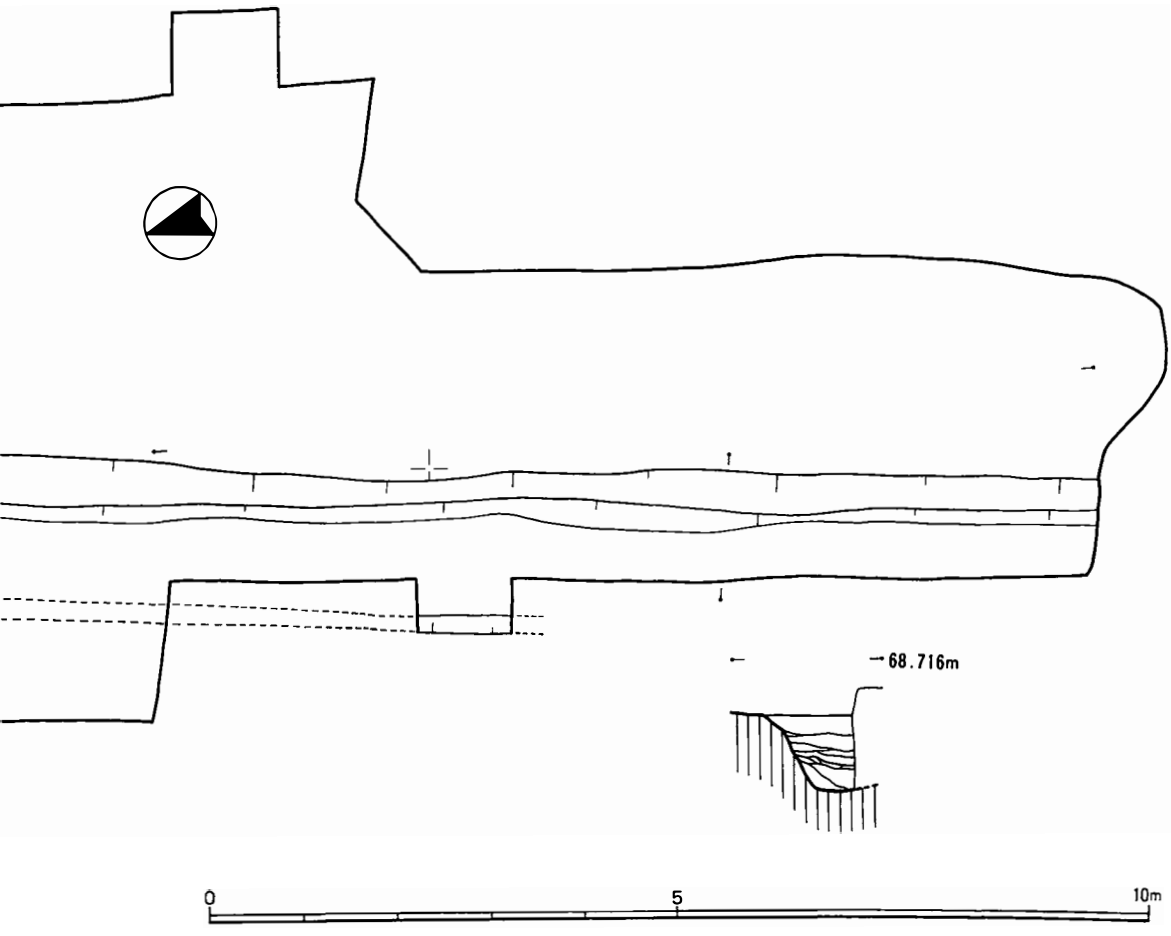
て開き、内に折れ直立する水平の口縁部に到る。40－5、41－1は沈線のない屈曲口縁の深鉢である。器厚は薄く口縁部は短く直立する。口縁端部は水平で断面は尖る。41－3は深鉢の頚部のみの資料である。41－3は器種不明の破片であるが注口土器の胴部の可能性がある。最大径の部分に1条の沈線が巡り器面全体は良く磨く。

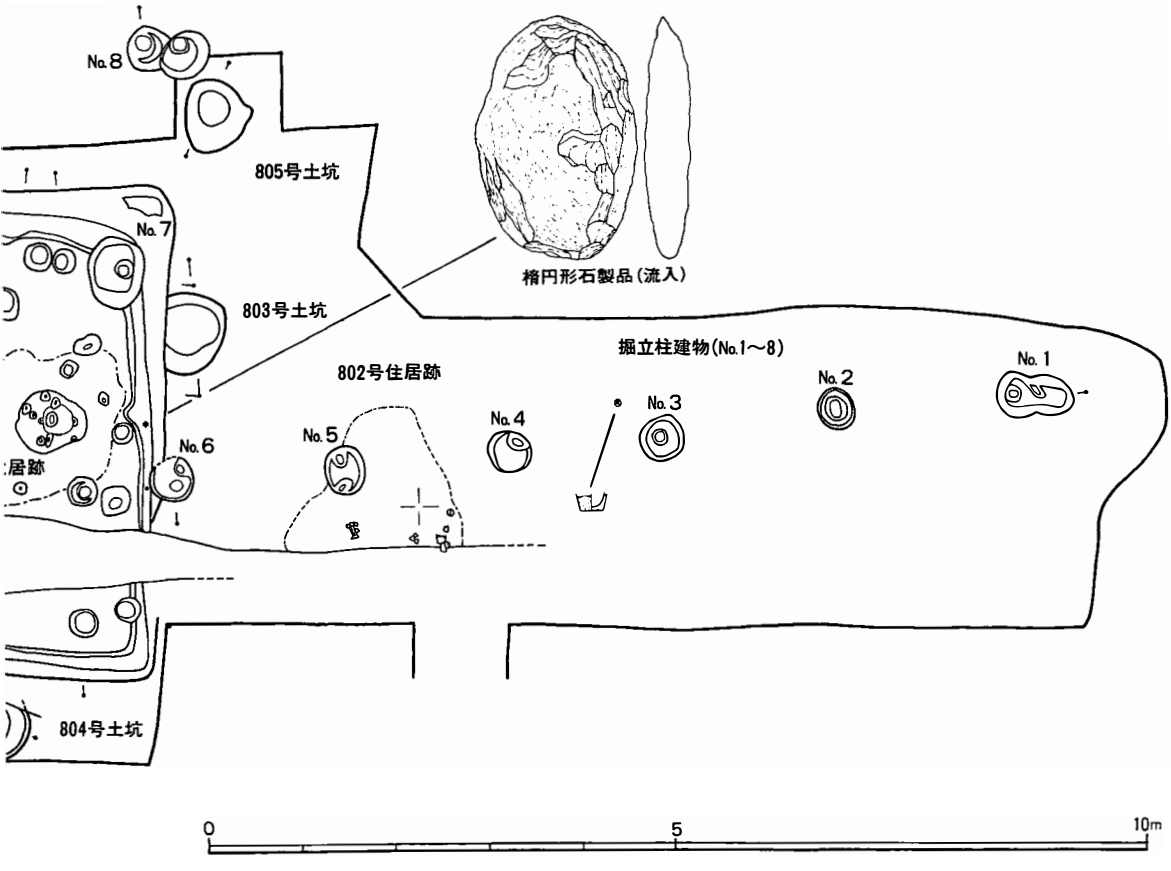
1305号住居跡（第15図）

ⅩⅢ区に所在し、北がわの大半が調査区外である。平面形態は円形であり、その規模は残存する部分で240㌢である。壁高は良好な部分で11㌢である。柱穴は2本だけがみえる。

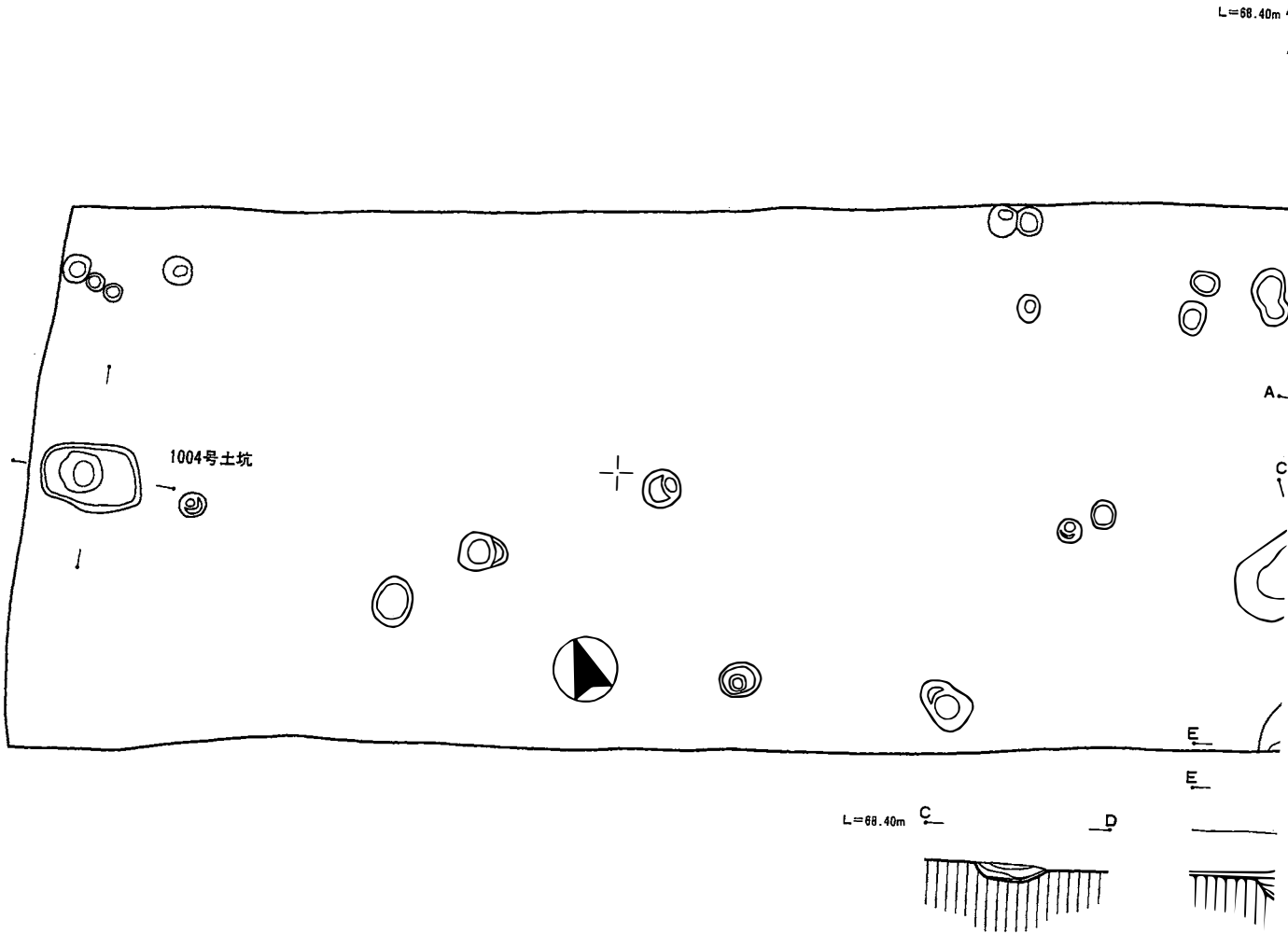

L＝68.486m
802号溝
803号溝
801号溝
68.372m
68.546m

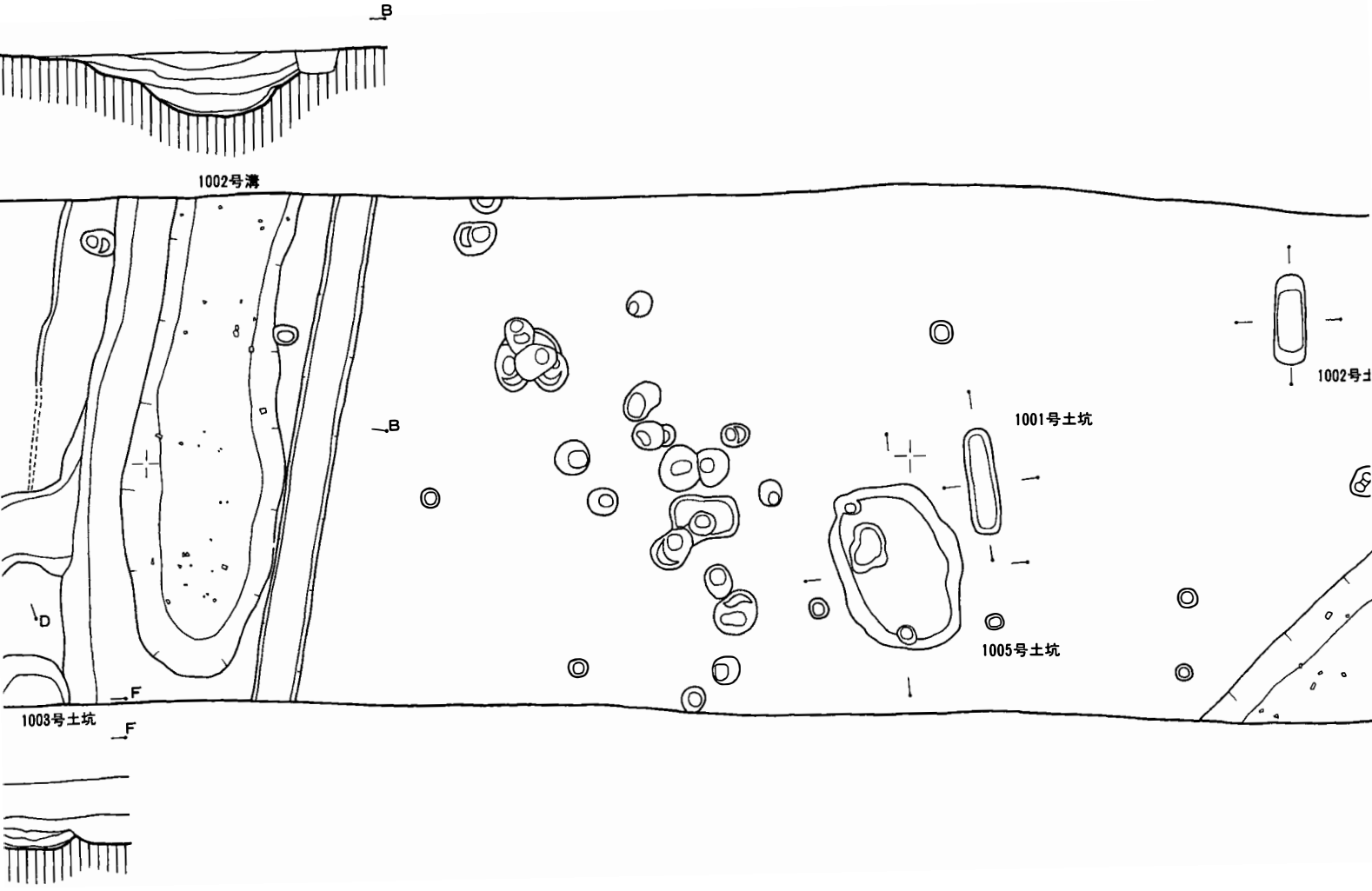

ミニチュア土器
（流入）
806号土坑
801号土坑
802号土坑
801号溝

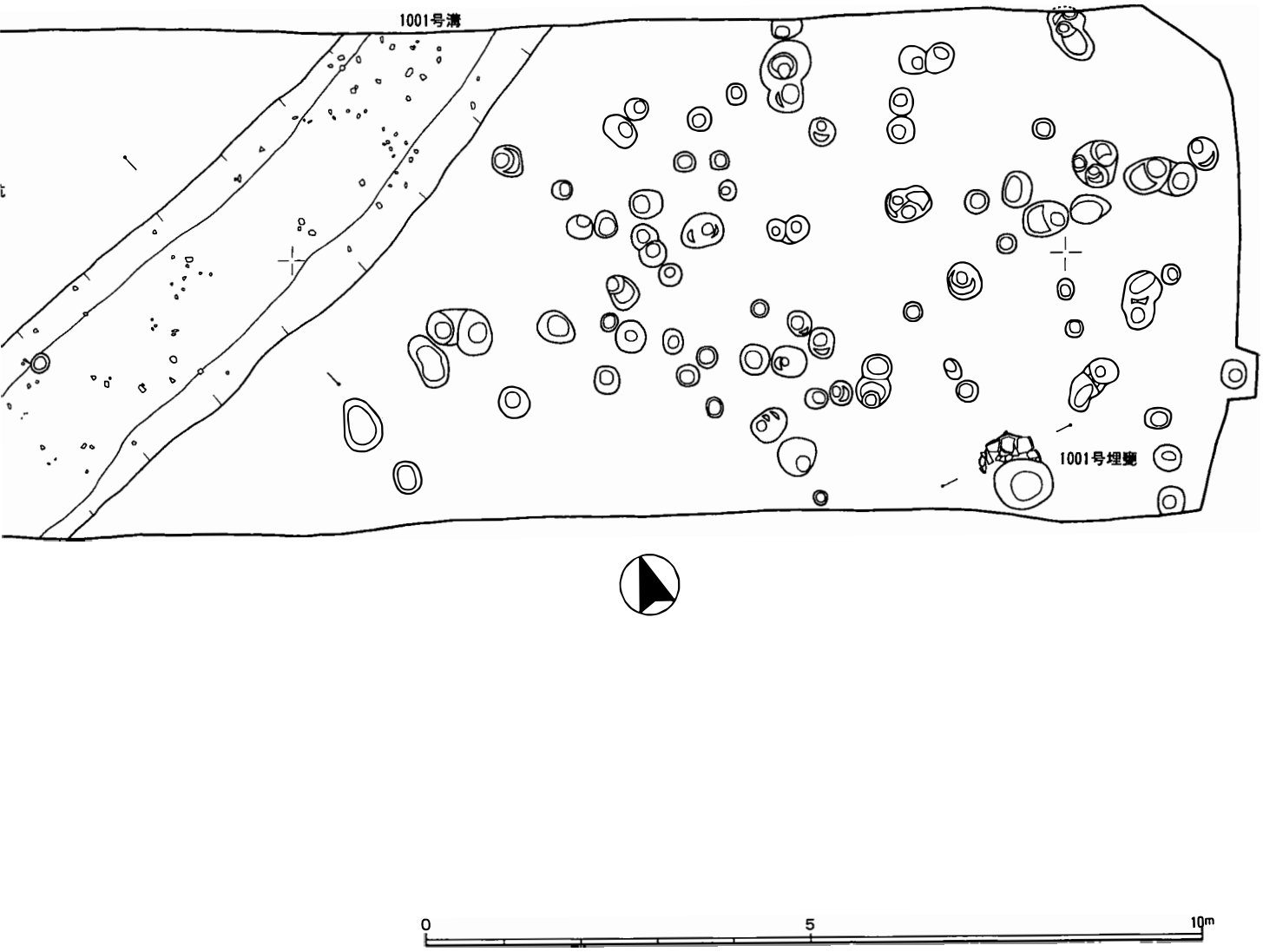




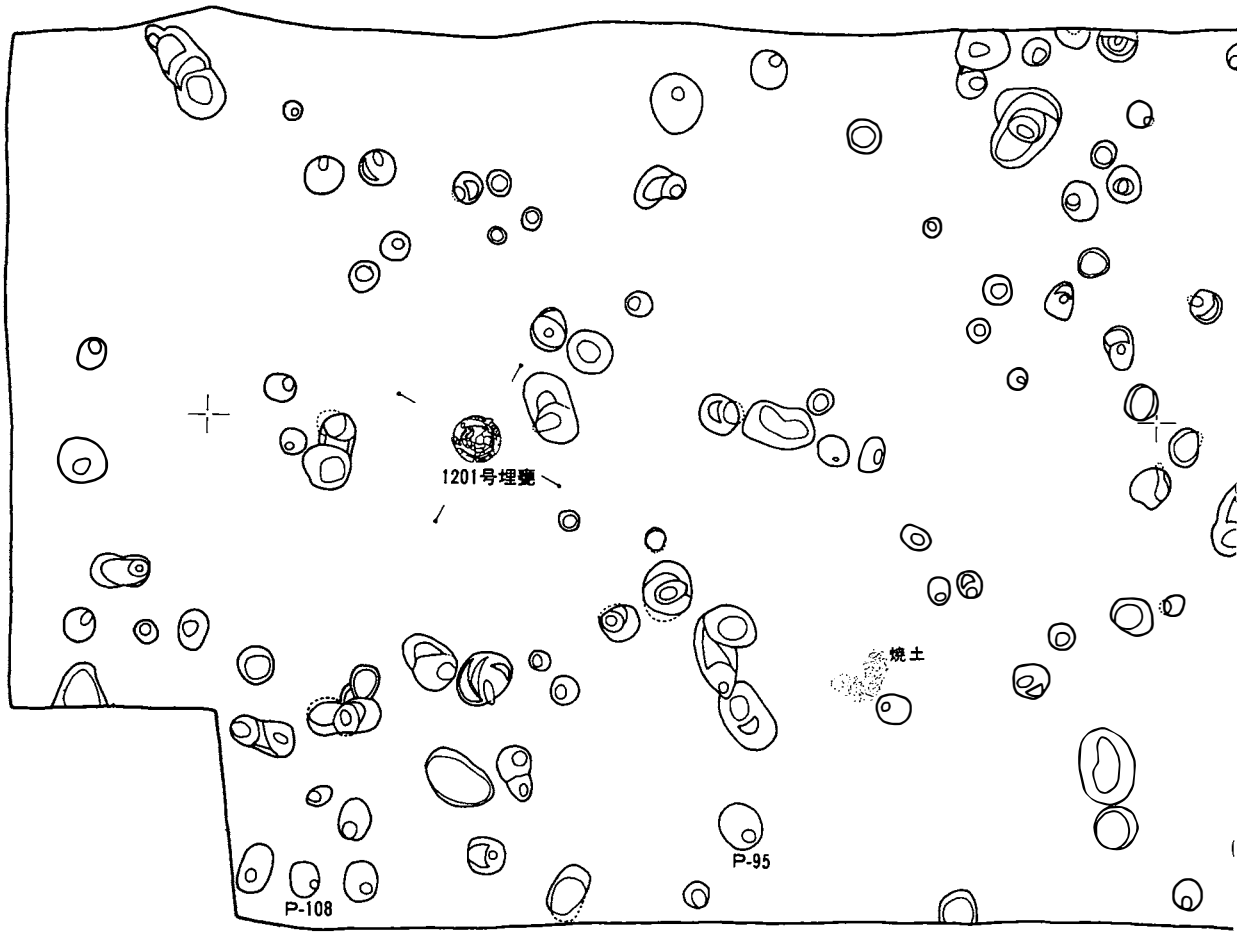
第16図　Ⅷ区遺構配置図

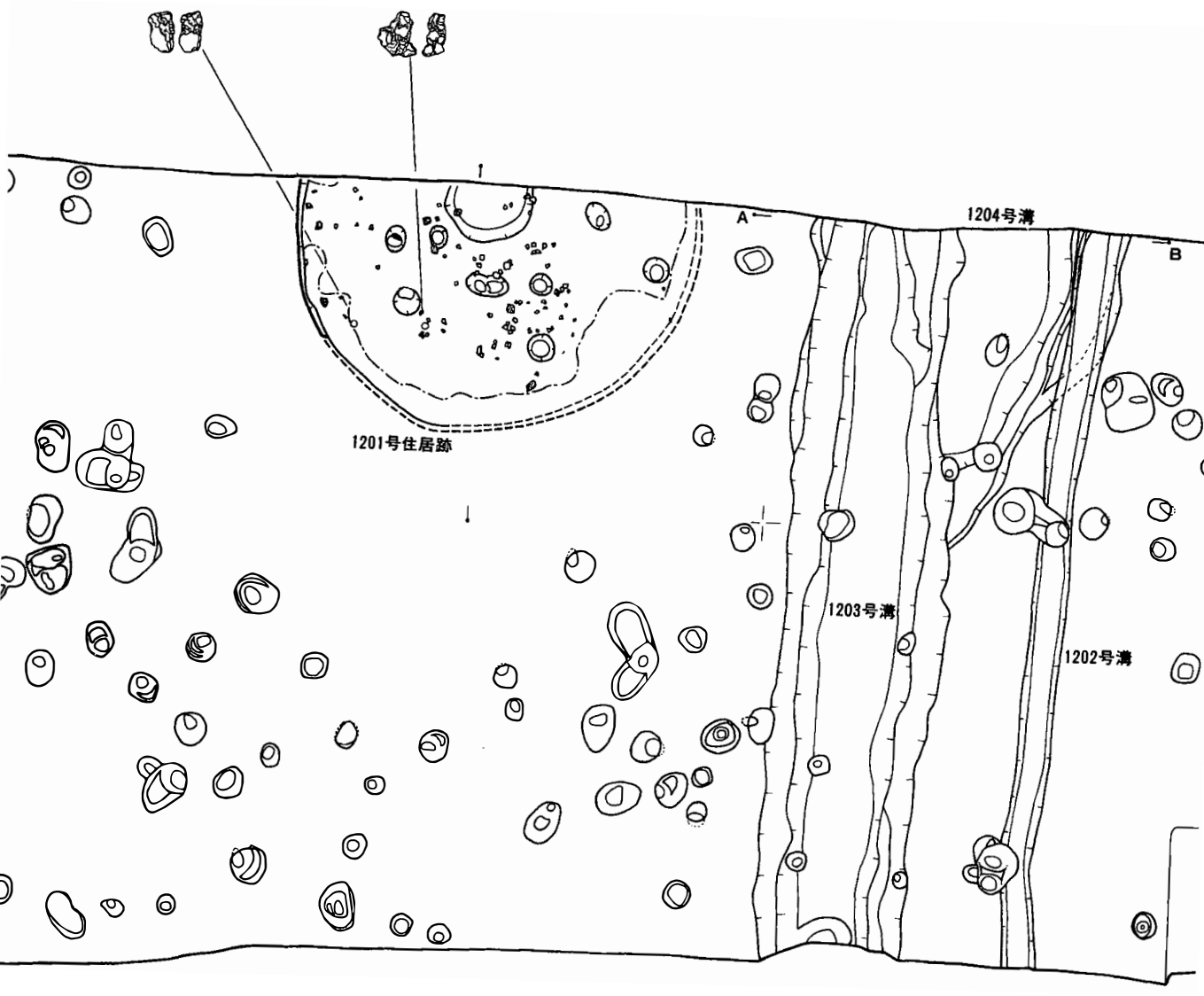

L=68.40m
A
1004号土坑
C
E
E
L=68.40m
C
D

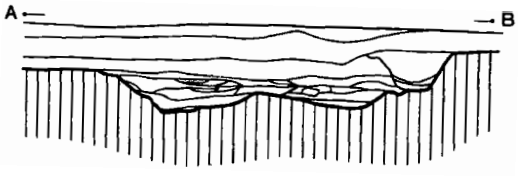

B
1002号溝
B
D
F
1003号土坑
F
1001号土坑
1005号土坑
1002号土

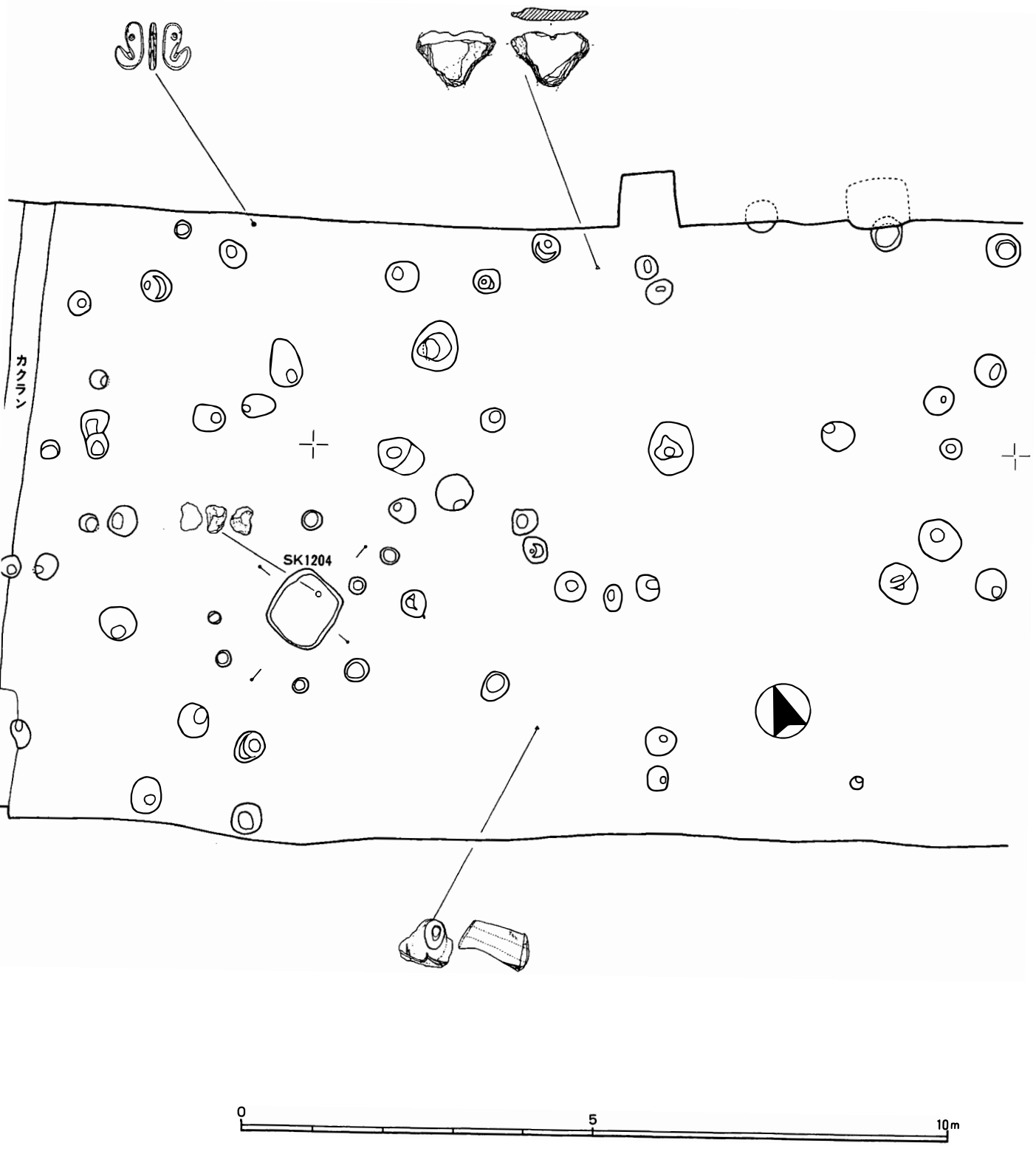


第17図　Ⅹ区遺構配置図

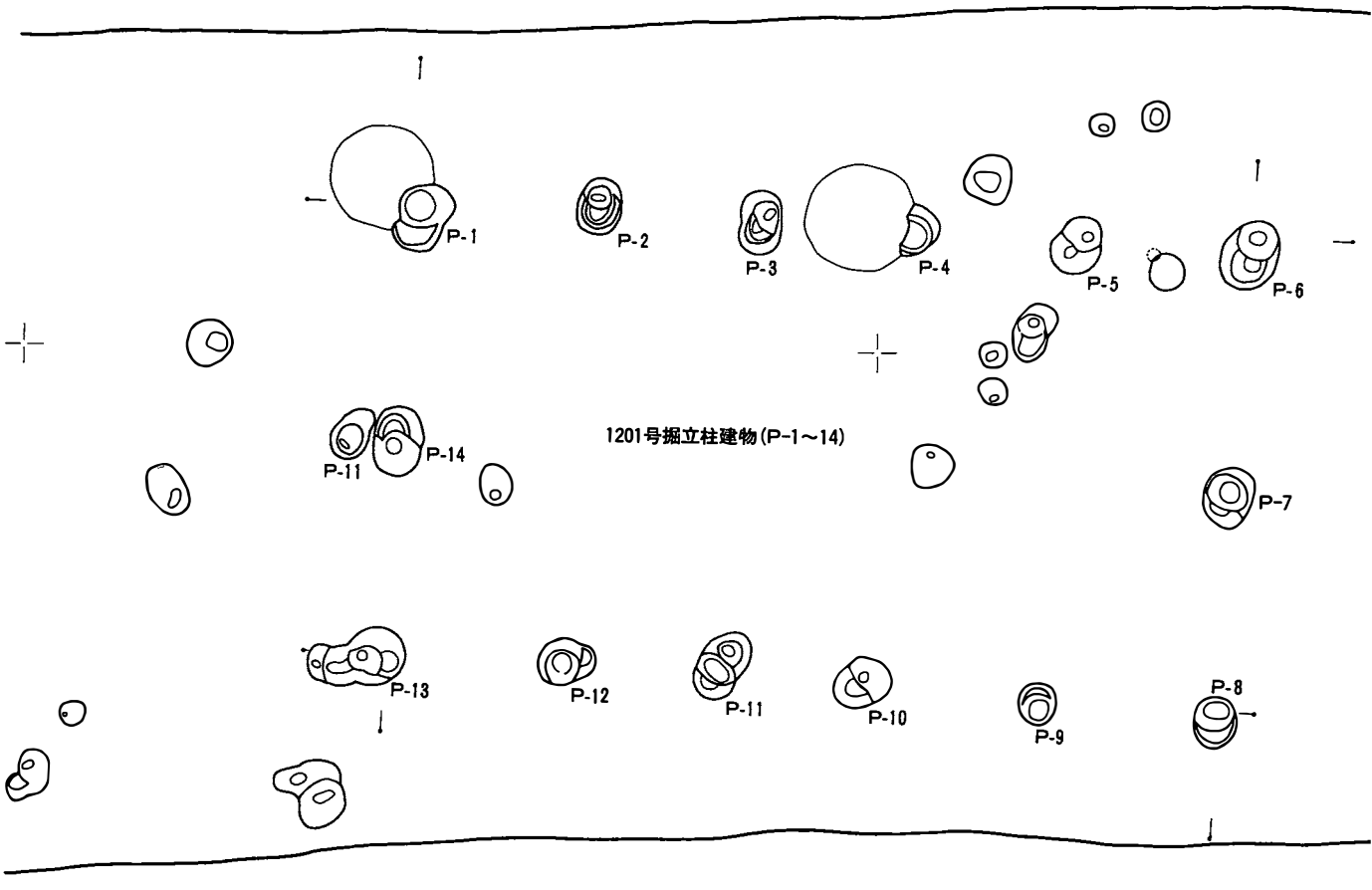

1201号埋甕
焼土
P-95
P-108


1204号溝
A
B
1201号住居跡
1203号溝
1202号溝

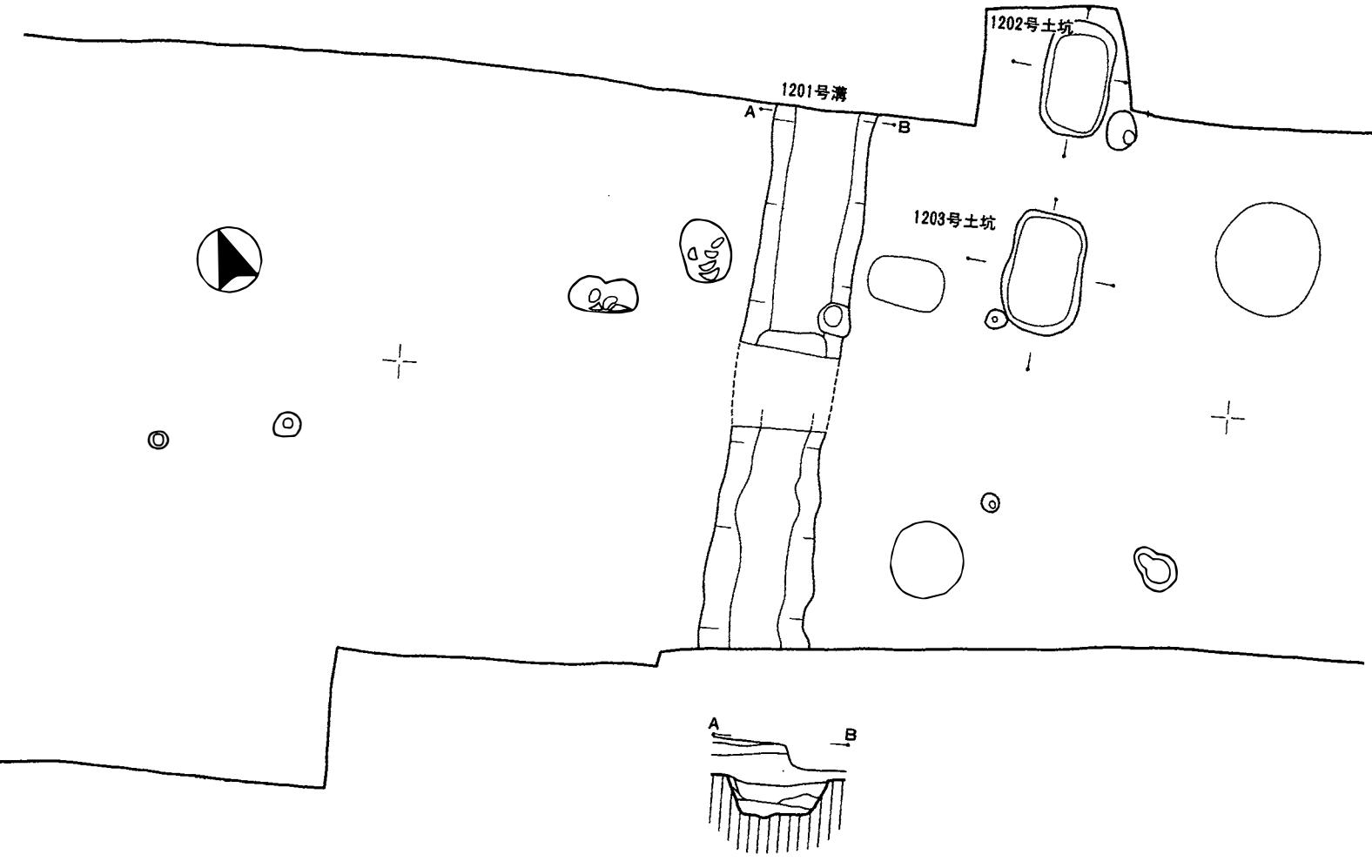

A
B

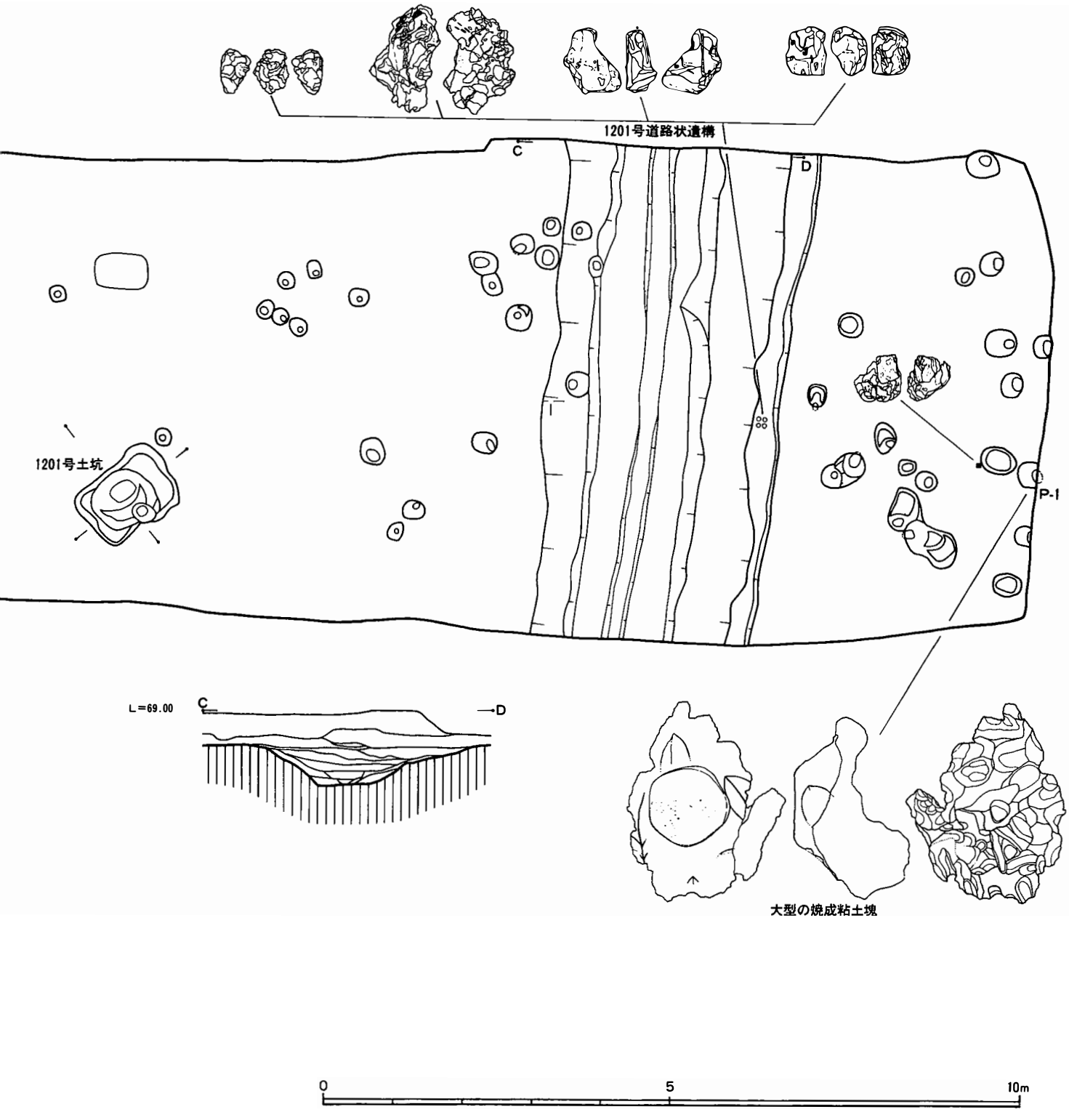


第18図　ⅩⅡ区西側遺構配置図

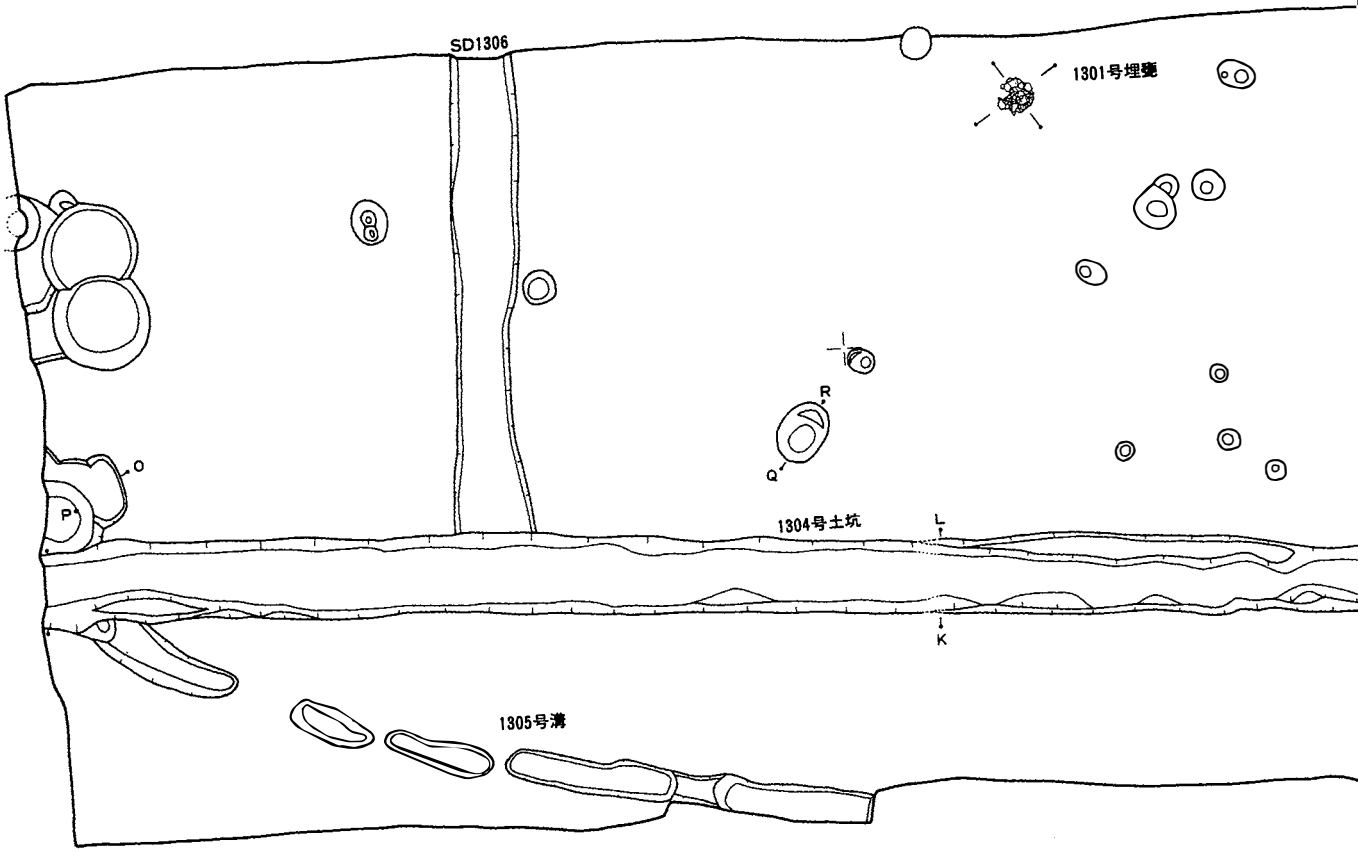


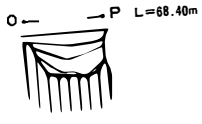
1201号掘立柱建物(P-1～14)

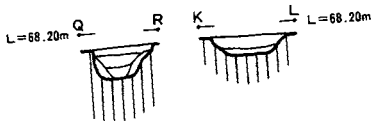

1202号土坑
1201号溝
A
B
1203号土坑
A
B

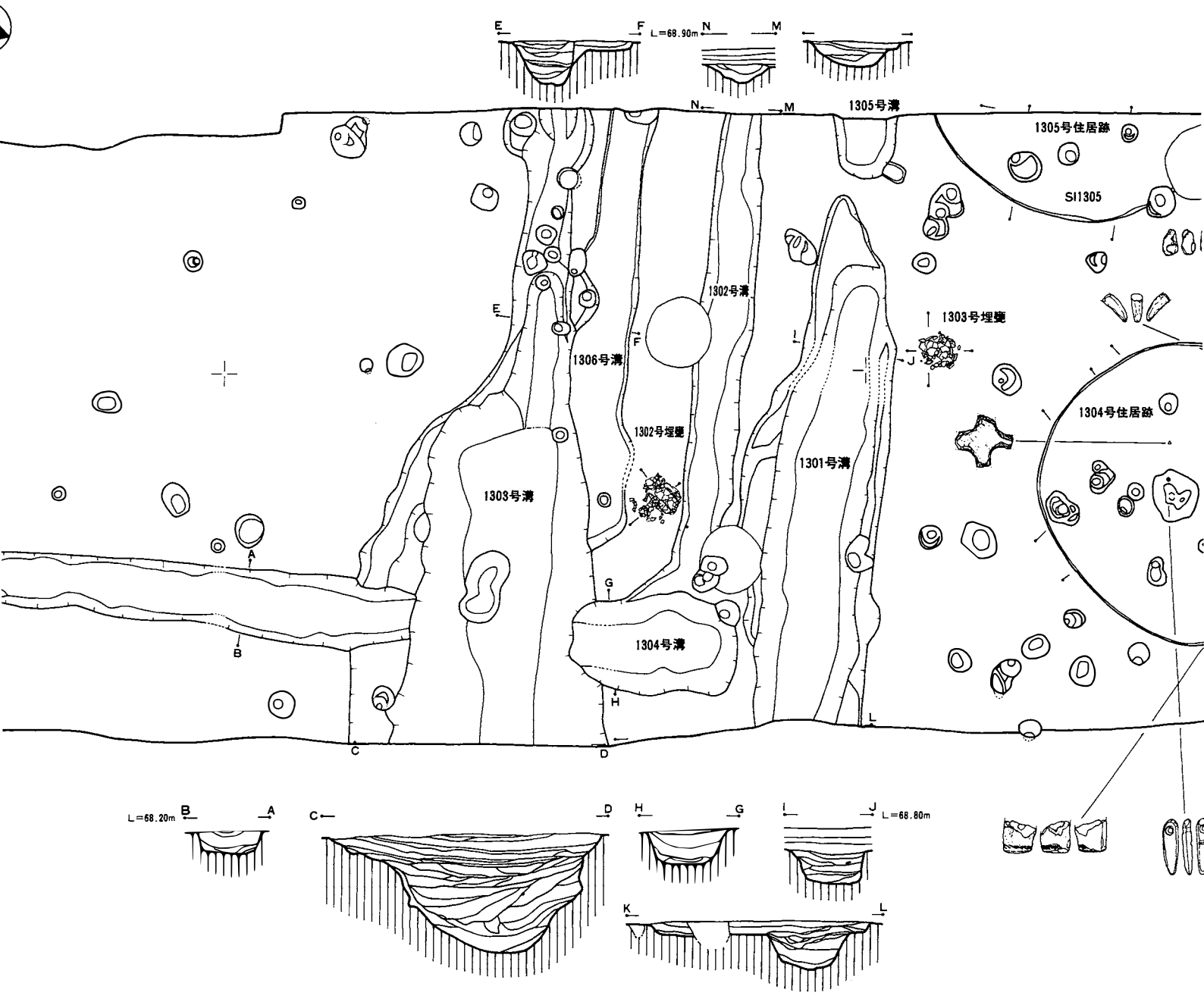


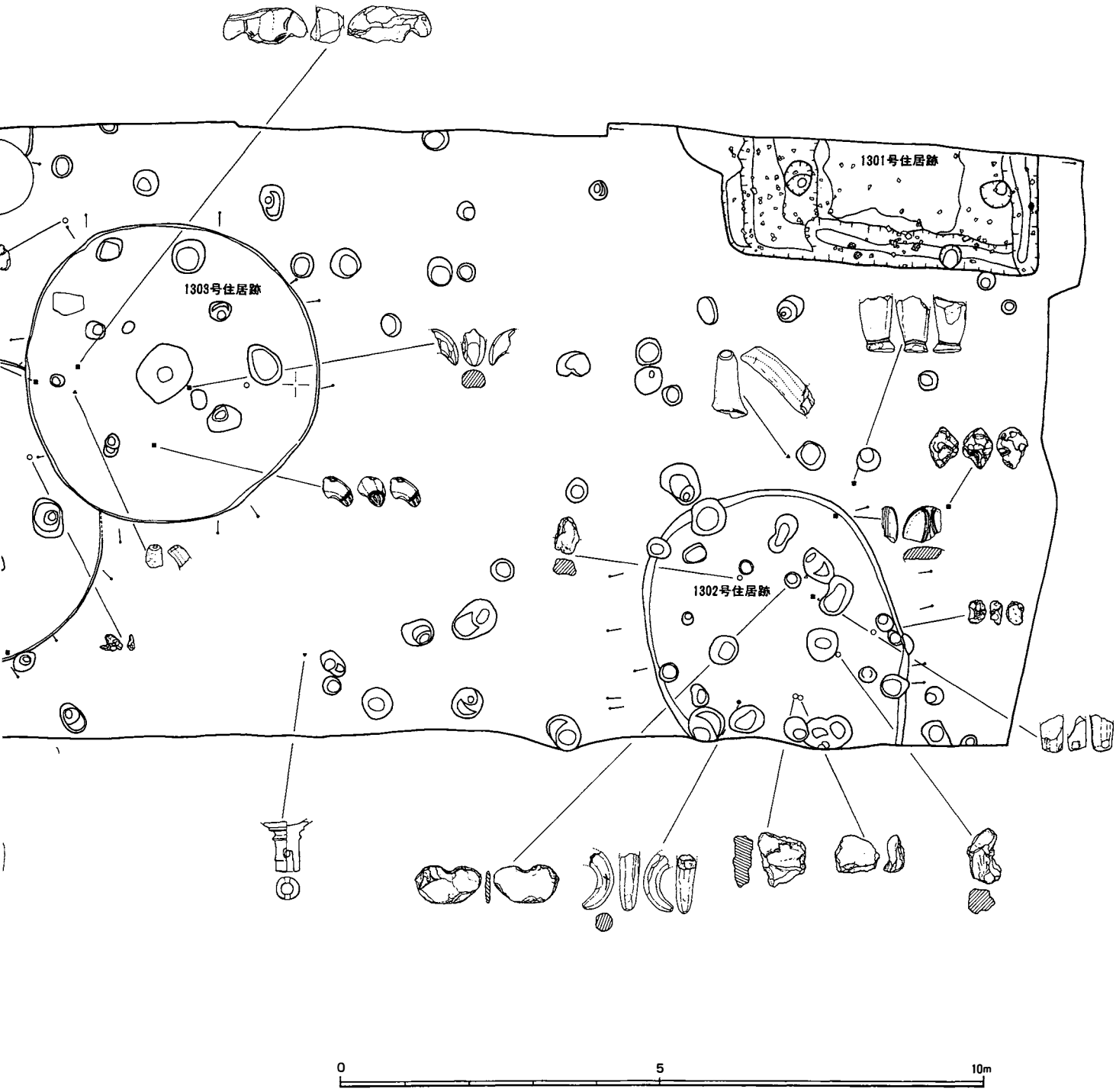
第19図　XⅡ区東側遺構配置図


SD1306
1301号埋甕
R
Q
O
P
1304号土坑
L
K
1305号溝

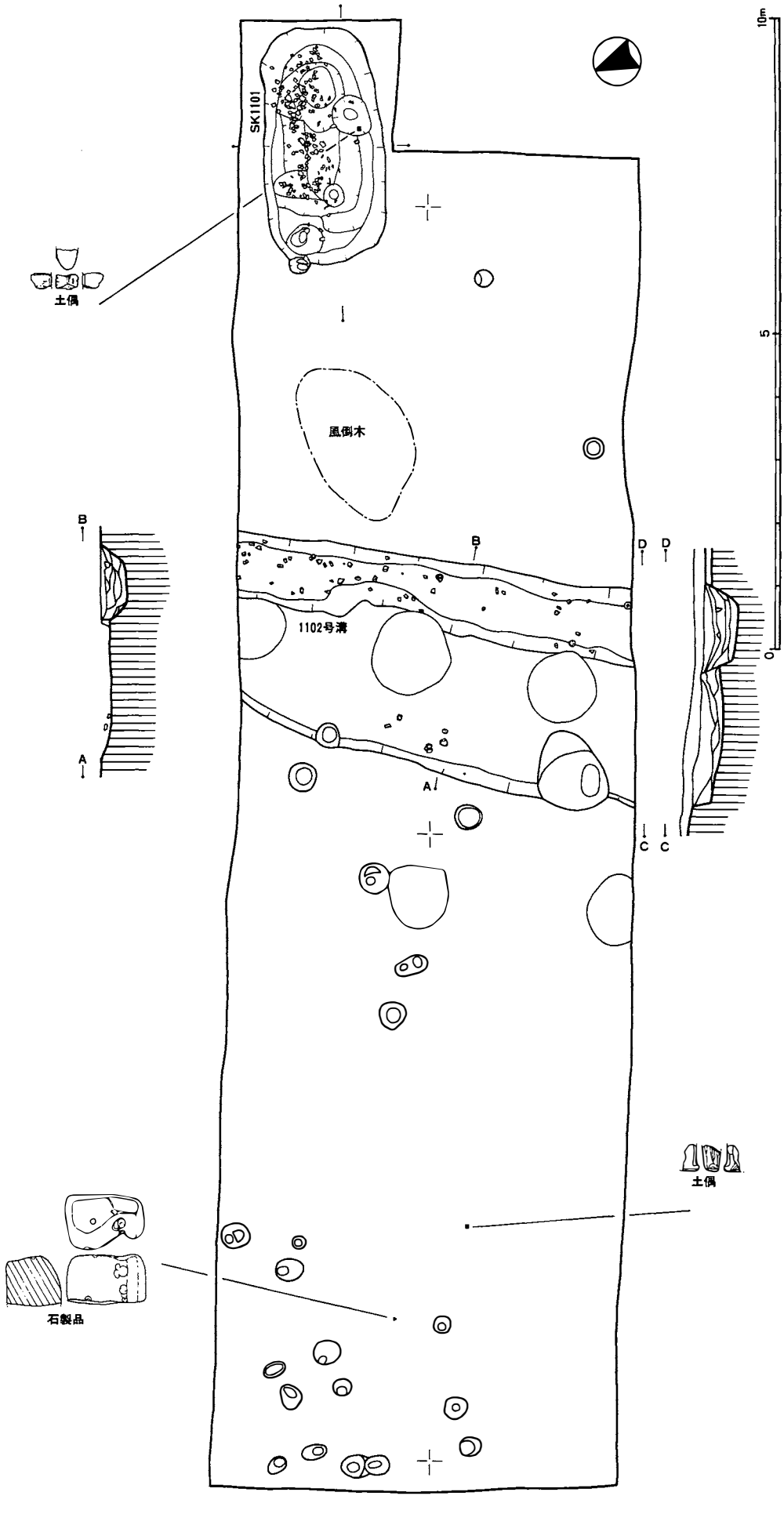

O
P
L=68.40m


L=68.20m
Q
R
K
L
L=68.20m


1305号溝
1305号住居跡
SI1305
1302号溝
1303号埋甕
1306号溝
1302号埋甕
1301号溝
1303号溝
1304号住居跡
1304号溝
L=68.90m
L=68.20m
L=68.80m



第20図　XⅢ区遺構配置図



第21図　ＸＩ区遺構配置図

２、埋甕遺構と遺物

401号埋甕（第22図）

Ⅳ区に所在する。検出状況は削平により土器は胴部より上の一部を欠く。掘り形は詳らかでないが土器の検出状況ではほぼ直立した姿勢で深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第42図）

47－１は、文様帯のない大型深鉢である。頚部と胴部上位の一部を欠く。

底部は平底だが胴部との境界は曖昧である。胴部は内弯しつつ立ち上がり最大径にて「く」の字に折れたあと頚部で緩やかなくびれをなし、外反して開き口縁部をなす。口縁端部は水平で断面形は尖る。頚部より上はよく磨かれており、胴部内外の下半にはカーボンがつく。底部近くは橙色の赤変が認められる。

501号埋甕（第22図）

Ⅴ区に所在する。掘り形は長軸方向61㌢、短軸方向55㌢の楕円形である。著しい削平により土器は胴部より上を欠く。土器の検出状況ではほぼ直立した姿勢で深鉢形土器が据えるが、底部は見当たらず、埋納の段階で打ち抜いた可能性もある。

【出土土器】（第43図）

43－２は，胴部下位のみの深鉢である。外面は荒く条痕が残りカーボンが付着する。

502号埋甕（第23図）

Ⅴ区に所在する。掘り形は長軸方向109㌢、短軸方向105㌢のほぼ円形である。著しい削平により土器は胴の上部を欠く。土器の検出状況ではほぼ直立した姿勢で深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第43図）

43－１は、大型の深鉢である。頚部の上半から口縁の接合部にかけて欠失する。底部は平底をなし胴部は直線状に開く。胴部の最大径にて「く」の字に鋭く折れ頚部をなし、くびれをなしたあと外反して開き口縁部に到る。口縁部は頚部の上端で屈曲して直立するとみられるが接合面で外れている。

頚部より上はよく磨かれており、胴部にはカーボンがつく。底部近くは橙色の赤変が認められる。

901号埋甕（第23図）

Ⅸ区に所在するが資料の散逸により調査区内での位置関係は詳らかでない。

掘り形は長軸方向110㌢、短軸方向98㌢のほぼ円形である。削平により土器は頚部の上半を欠く。土器の検出状況ではほぼ直立した姿勢でそのまま陥没した姿の深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第42図）

42－２は、胴部下位のみの深鉢である。外面は荒く条痕が残りカーボンが付着する。

1001号埋甕（第27図）

Ⅹ区に所在する。出土状況が不明確な埋甕である。削平により掘り形は確認できないが土器片が潰れた姿で出土した。

【出土土器】（第44図）

44－１は、深鉢の資料である。器高が最大径と比べ低い器形である。底部は浅く上げ底をなし、胴部は横に張りつつ立ち上がり、頚部はやや深く内傾し肩を張る器形である。胴部最大径には１条の浅く斜方向のヘラ当てによる沈線を描く。口縁部は強く内に折れ３条の沈線を巡らす。胴部の上半にはカーボンが付着する。

1301号埋甕（第24図）

ⅩⅢ区に所在する。土圧により押し潰された状況で検出された。ほとんど床面すれすれで削平を受け掘り形は確認できない。土器片の広がりは概ね長軸方向90㌢、短軸方向82㌢の範囲である。土器の検出状況では横に大きく傾斜した姿勢で深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第44図）

44－２は、深鉢である。底部はやや突出した弱い上げ底である。胴部は中位までは内湾して立ち上がり、さらに上位は直立して伸びる。胴部最大径では１条の界線が巡るものの胴部と頚部はほとんど連続し、頚部はわずかにくびれたあとやや外反して開き

口縁に向かう。

内外面は全面に荒い条痕がありさらに縦方向の磨きが若干みられる。胴部外面とそれの内面下半にはカーボンの付着があり、また底部近くには赤変がみられる。

1302号埋甕（第24図）

ⅩⅢ区に所在する。横位の姿勢で土圧により押し潰された状況で検出された。ほとんど床面すれすれで削平を受け掘り形は確認できない。土器片の広がりは概ね長軸方向140㌢、短軸方向138㌢の範囲である。土器の検出状況では横に大きく傾斜した姿勢で深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第45図）

45－１は、大型の深鉢で本遺跡で最大のものである。遊離した同一個体と思われる底部は平底である。胴部の最大径の屈曲は緩慢で稜線を辛うじて残す。口縁部は短く直立し、外面には２条の沈線を斜方向にヘラを浅く当てて描く。器面は頚部に顕著な縦方向の磨きを有する。胴部の最大径以下の外面にはカーボンが付着し下半には赤変が認められる。

1303号埋甕（第25図）

ⅩⅢ区に所在する。土圧により押し潰された状況で検出され、しかも削平を受け掘り形は確認できない。土器片の広がりは概ね長軸方向130㌢、短軸方向120㌢の範囲である。土器の検出状況では底部と胴部の一部のみのわずかに傾斜した姿勢の深鉢形土器が据えられていたとみられる。

【出土土器】（第45図）

45－２は、頚部上端と口縁を欠く資料である。わずかに上げ底の底部から立ち上がり胴部の最大径にて界線を１条巡らしつつ内に折れ頚部となす。口縁部の姿は詳らかでない。胴部は荒く条痕が残り頚部は良く磨かれている。胴部にはカーボンが付着する。

３、土壙と遺物

601号土壙（第25図）

Ⅵ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸方向は69㌢、短軸方向は56㌢であり、深さは15㌢を測る。主軸の方向はＮ12°Ｗである。遺構の床面から縄文時代の深鉢の大型の破片を重ね合わせの状態で出土した。出土状況からみて埋甕に類する埋葬遺構の可能性が考えられる。

【出土土器】（第46図）

46－１は、底部を欠き縦半身のみの深鉢である。直線状に開きつつ立ち上がる胴部を有し、その最大径に１条の沈線を巡らす。口縁部は直立し３条の沈線を巡らす。器厚は全般に厚めで胎土は砂が多い。外面は縦方向の磨きが施されるが光沢に乏しい。胴部の上半にはカーボンの付着がある。

801号土壙（第26図）

Ⅷ区に所在する。平面形態は隅丸の正方形であり、長軸方向は82㌢、短軸方向は72㌢である。深さは８㌢を測り、焼土混じりの埋土を充たし、若干の縄文土器の微細な破片を含む。長軸の方向はＮ22°Ｅである。出土状況からみて炉跡とみられる。

802号土壙（第26図）

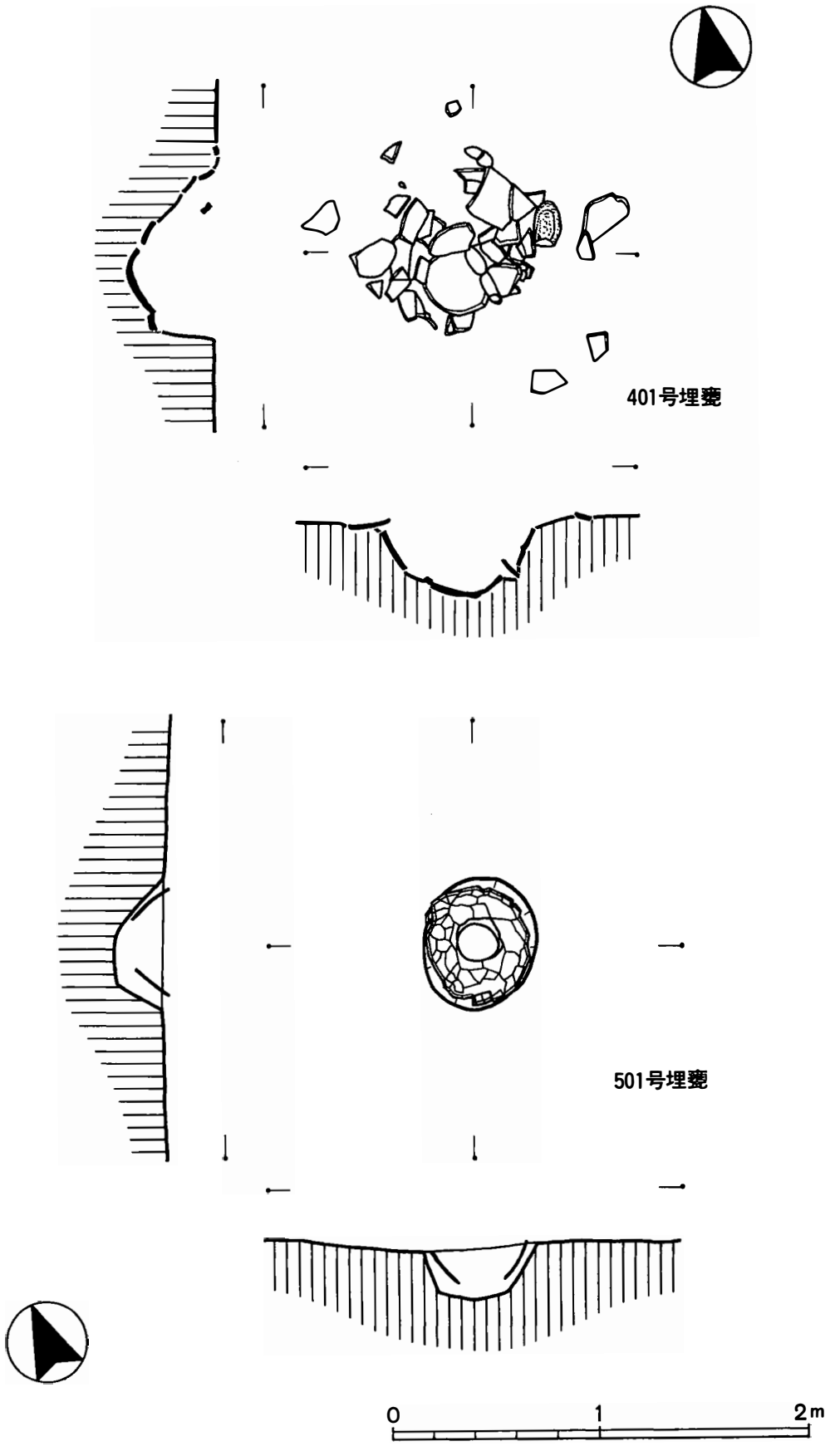
Ⅷ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸方向は82㌢、短軸方向は残存70㌢である。深さは16㌢を測り、焼土混じりの埋土を充たし、若干の縄文土器の微細な破片を含む。長軸の方向はＮ38°Ｗである。出土状況からみて炉跡とみられる。

【出土土器】（第47図）

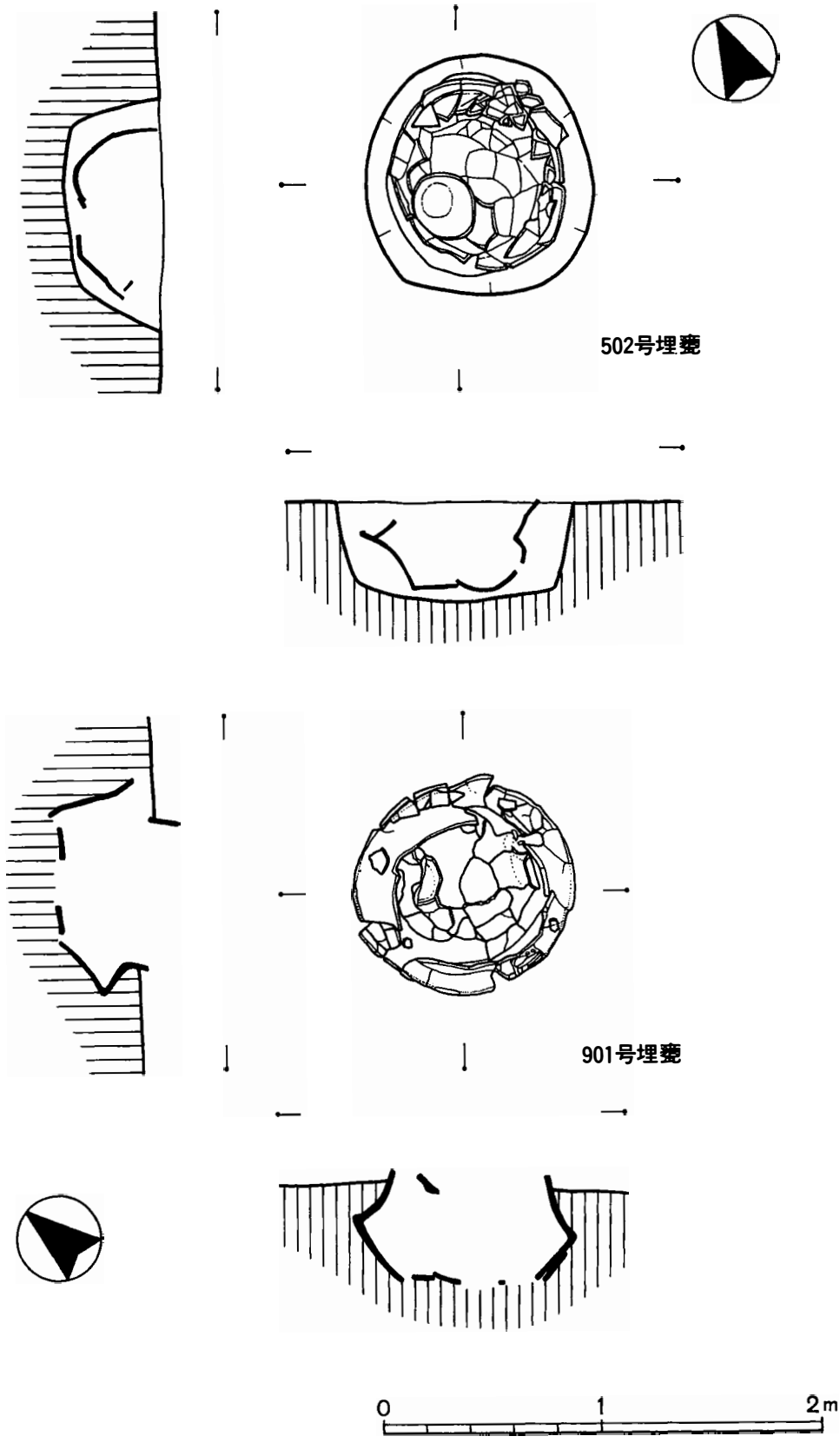
47－１は、深鉢の口縁部とみられる破片である。２条の沈線を磨き込みで描く。

803号土壙（第26図）

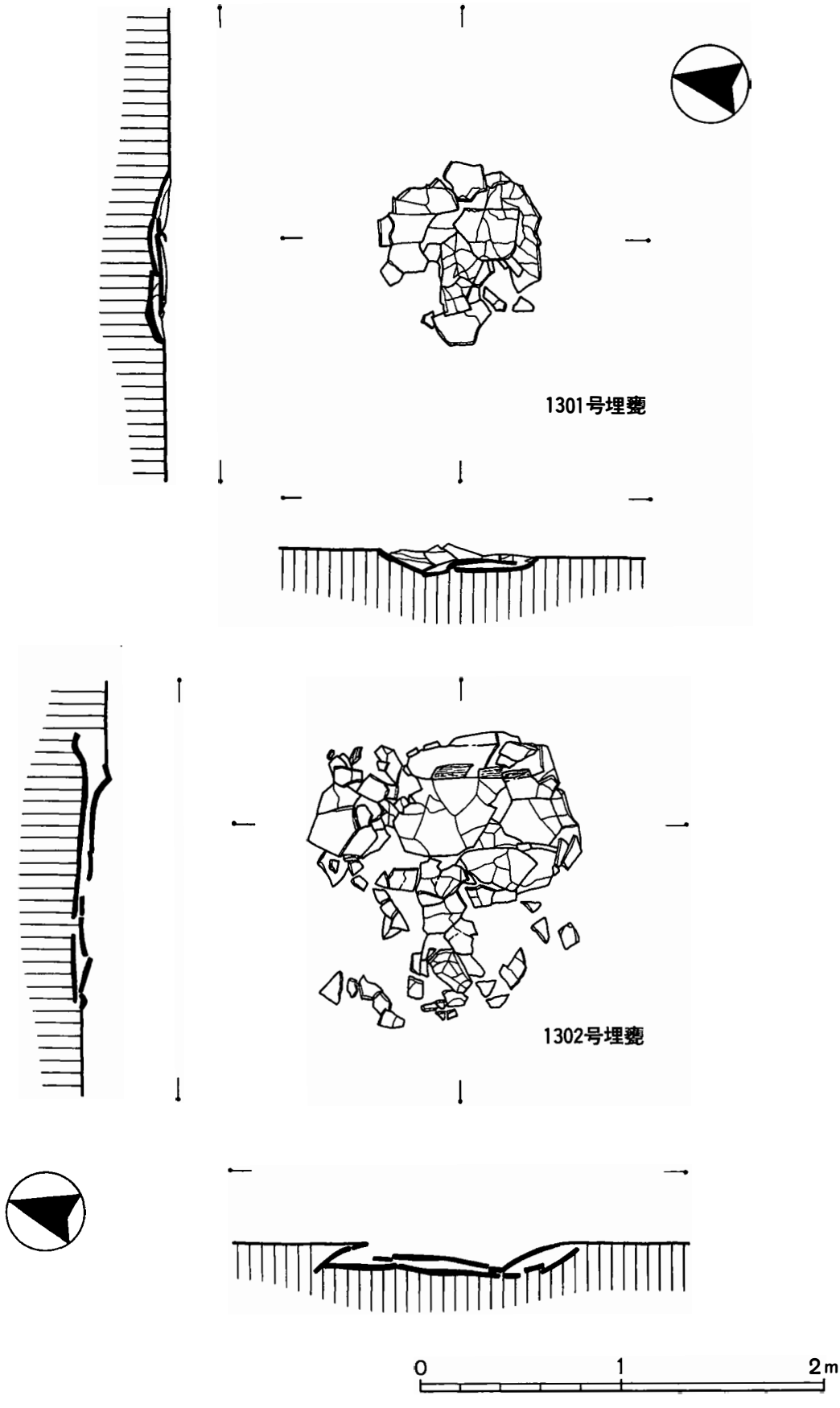
Ⅷ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸向は86㌢、短軸方向は残存70㌢である。深さは22㌢を測り、焼土混じりの埋土を充たし、若干の縄文土器の微細な破片を含む。古墳時代の住居跡（801号住居跡）に一部を切られている。長軸の方向はＮ



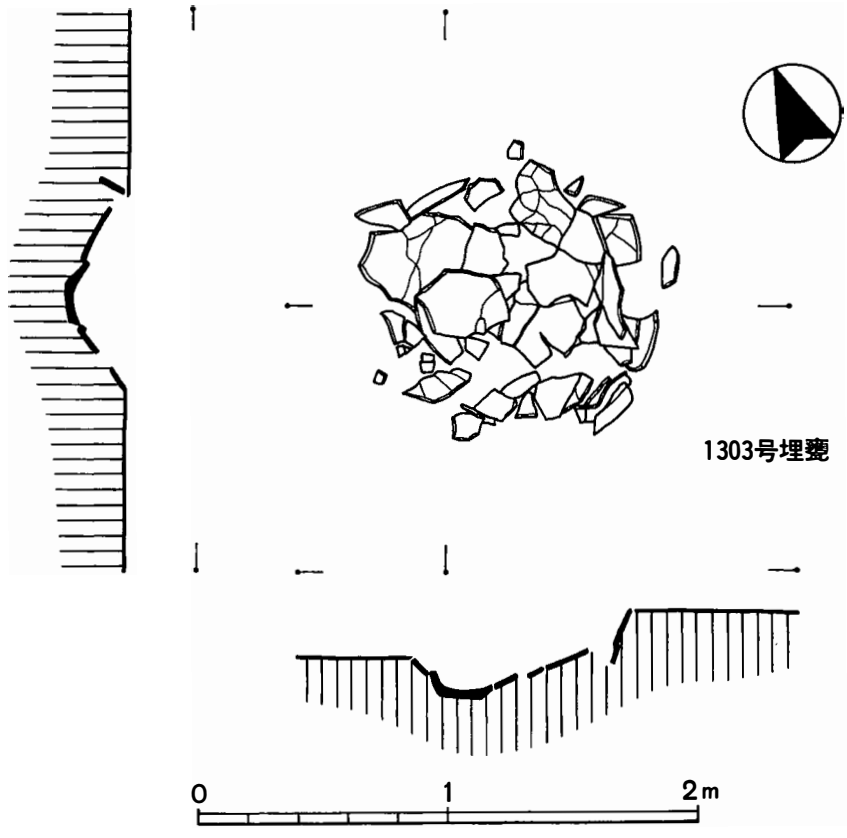
第22図　401号、501号埋甕実測図

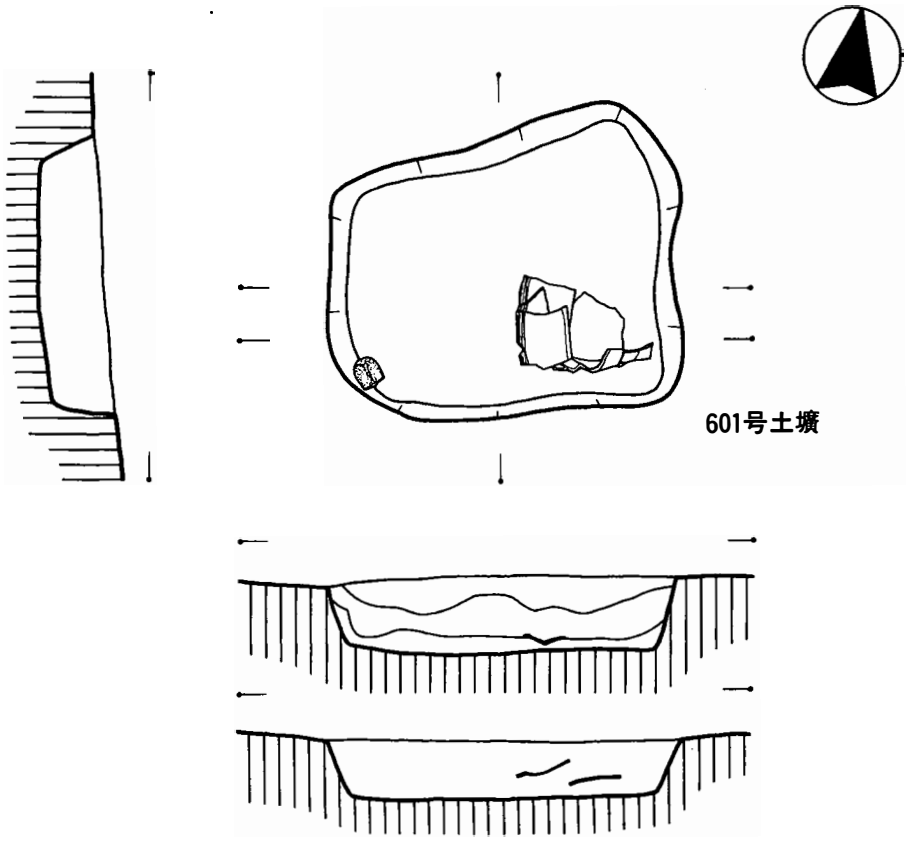


第23図　502号、901号埋甕実測図

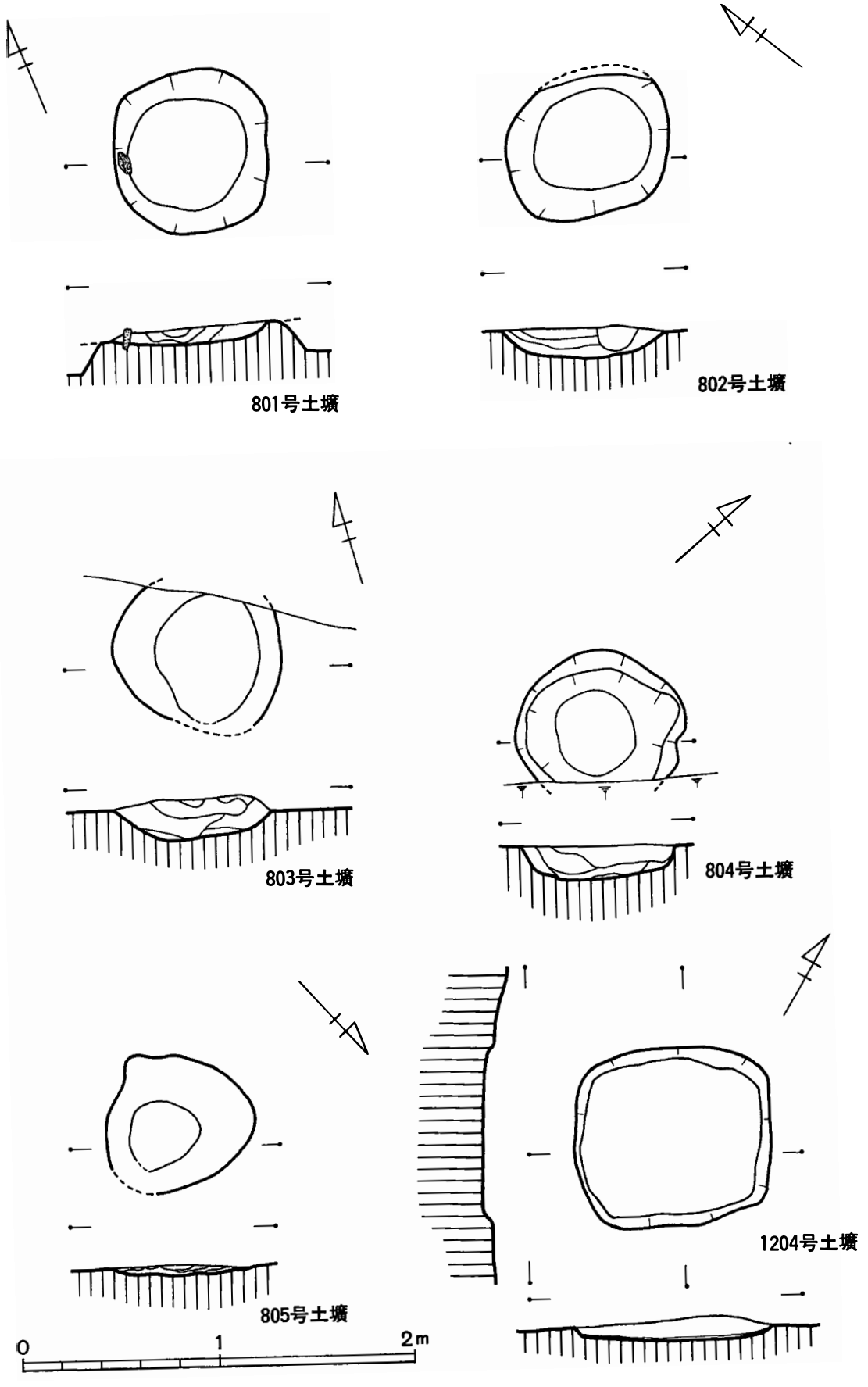


第24図　1301号、1302号埋甕実測図

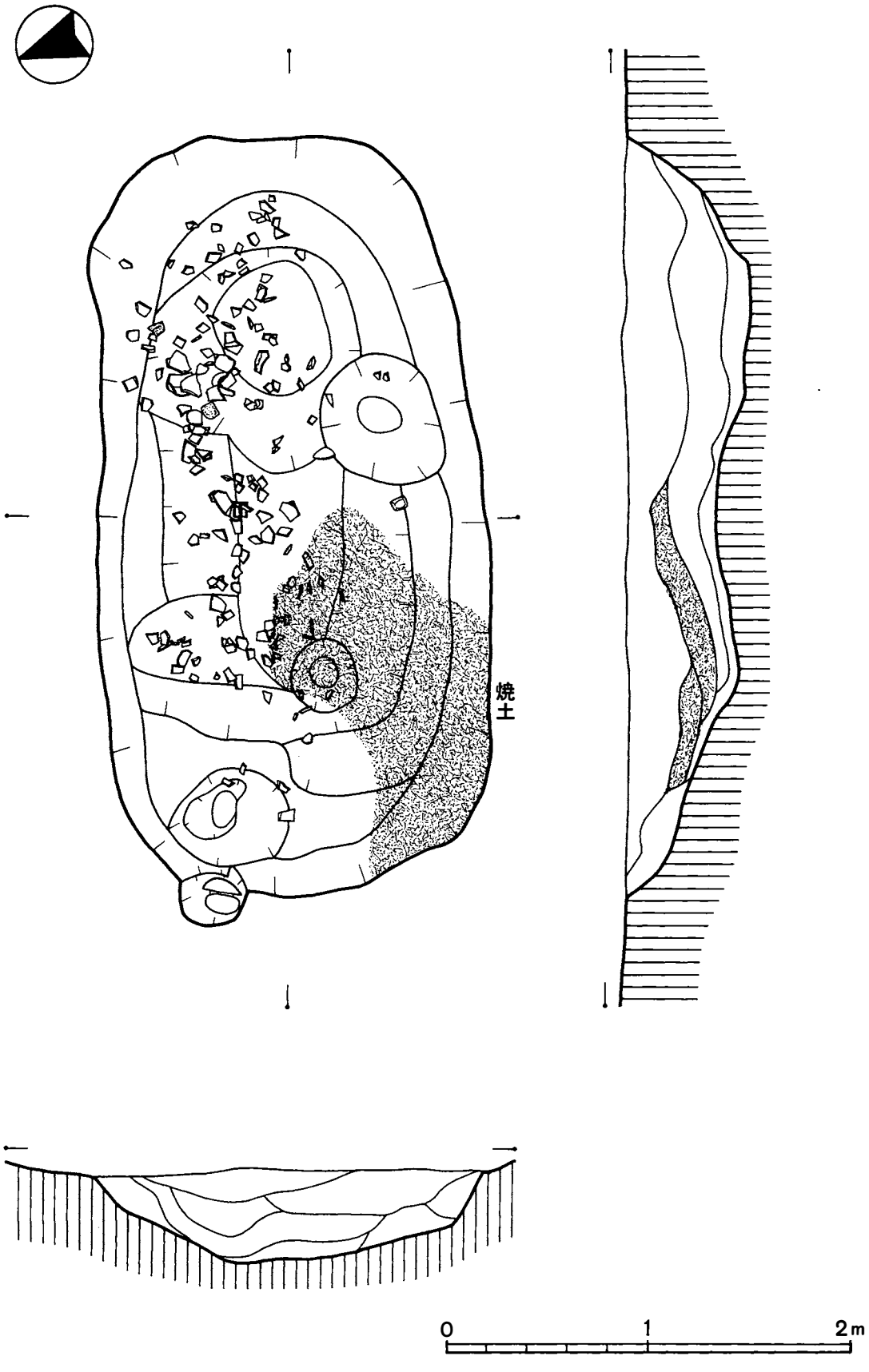




第25図　1303号埋甕、801号土坑実測図



第26図　801号～805号土坑、1204号土坑実測図



第27図　1101号土坑実測図

76°Wである。出土状況からみて炉跡とみられる。

804号土壙（第26図）

Ⅷ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸方向は88㌢、短軸方向は残存66㌢である。深さは18㌢を測り、焼土混じりの埋土を充たし、若干の縄文土器の微細な破片を含む。長軸の方向はＮ40°Ｅである。出土状況からみて炉跡とみられる。

【出土土器】（第47図）

47－２は、口縁の破片で３条の沈線に重ねて羽状文を描く土器片である。

47－３は、深鉢の口縁部とみられる破片である。２条の沈線を磨き込みで描く。

47－４は、浅鉢の胴部とみられ、２条の凹線に斜方向の羽状文を描く。　は、深鉢の肩部で、６条の平行沈線にＸ字文を重ねる。

805号土壙（第26図）

Ⅷ区に所在する。平面形態は卵円形であり、長軸方向は74㌢、短軸方向は70㌢である。深さは６㌢を測り、焼土混じりの埋土を充たし、若干の縄文土器の微細な破片を含む。長軸の方向はＮ48°Wである。出土状況からみて炉跡とみられる。

【出土土器】（第47図）

47－６は、深鉢の肩部である。外に湾曲する器形であり色調は明るい。５条まで沈線が数えられる。沈線にＸ字文を重ねる。

1101号土壙（第27図）

ⅩⅠ区に所在する。平面形態は大型の隅丸の長方形である。長軸方向は371㌢、短軸方向は194㌢である。深さは62㌢を測る。縄文土器片に交えて土師器を含み後世の遺構を包含して切り合っているとみられる。長軸の方向はＮ68°Wである。

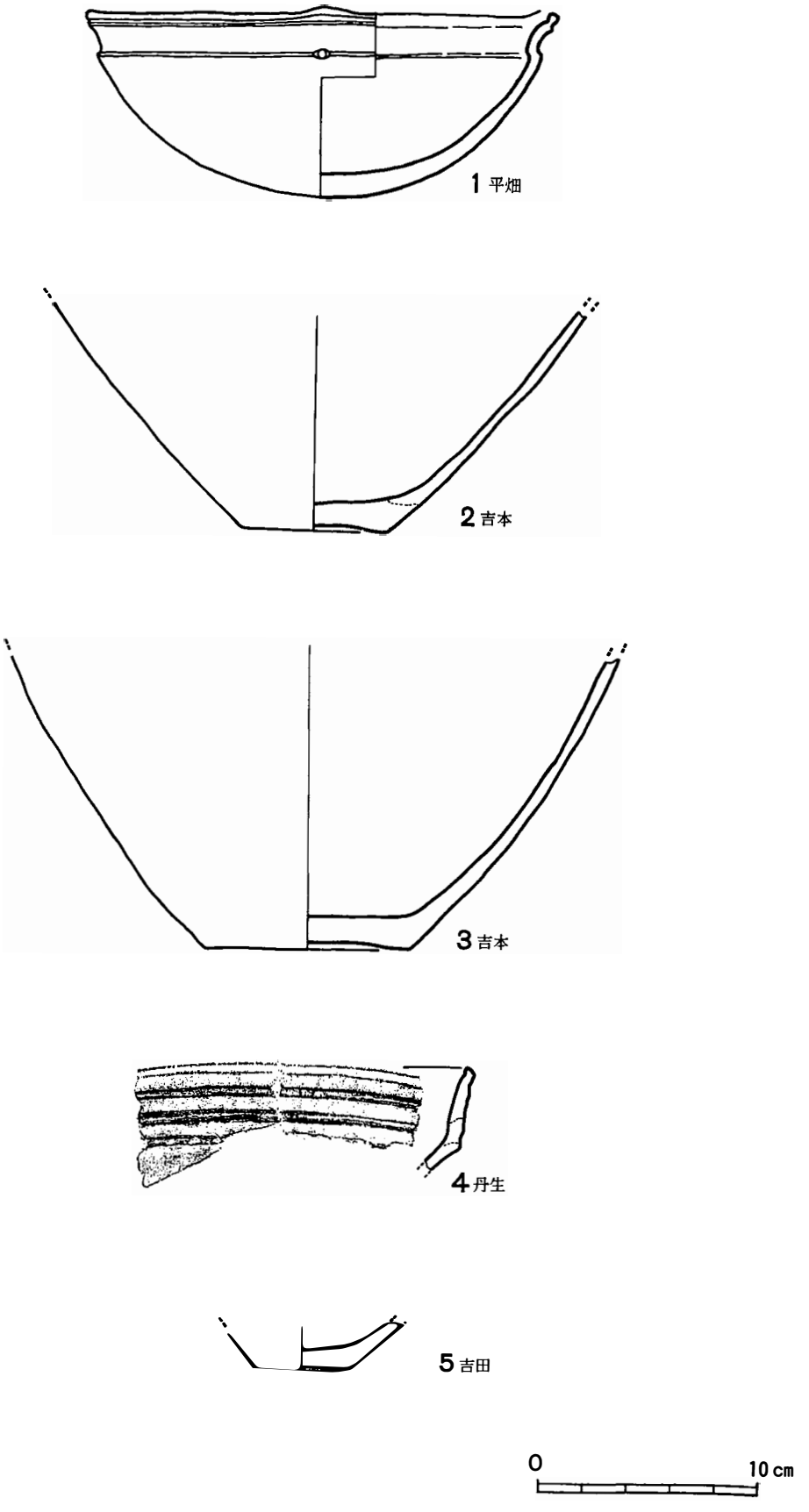
【出土土器】

48－１は、深鉢である。頚部は縦方向に丁寧に磨く。口縁部は斜方向にヘラを当てた３条の沈線を巡らす。48－２は、やや深い浅鉢である。口縁端部には２条の沈線が巡る。48－３は、文様帯のない浅鉢で胴部の屈曲は著しく強く、胴部は頚部と比べかなり低い。48－４は、文様帯のない深鉢である。48－５は、浅鉢の底部であろう。48－６は、直径５ミリの補修孔を有する破片である。48－７は、小型の浅鉢である。２条の沈線が巡り山形突起を有する。

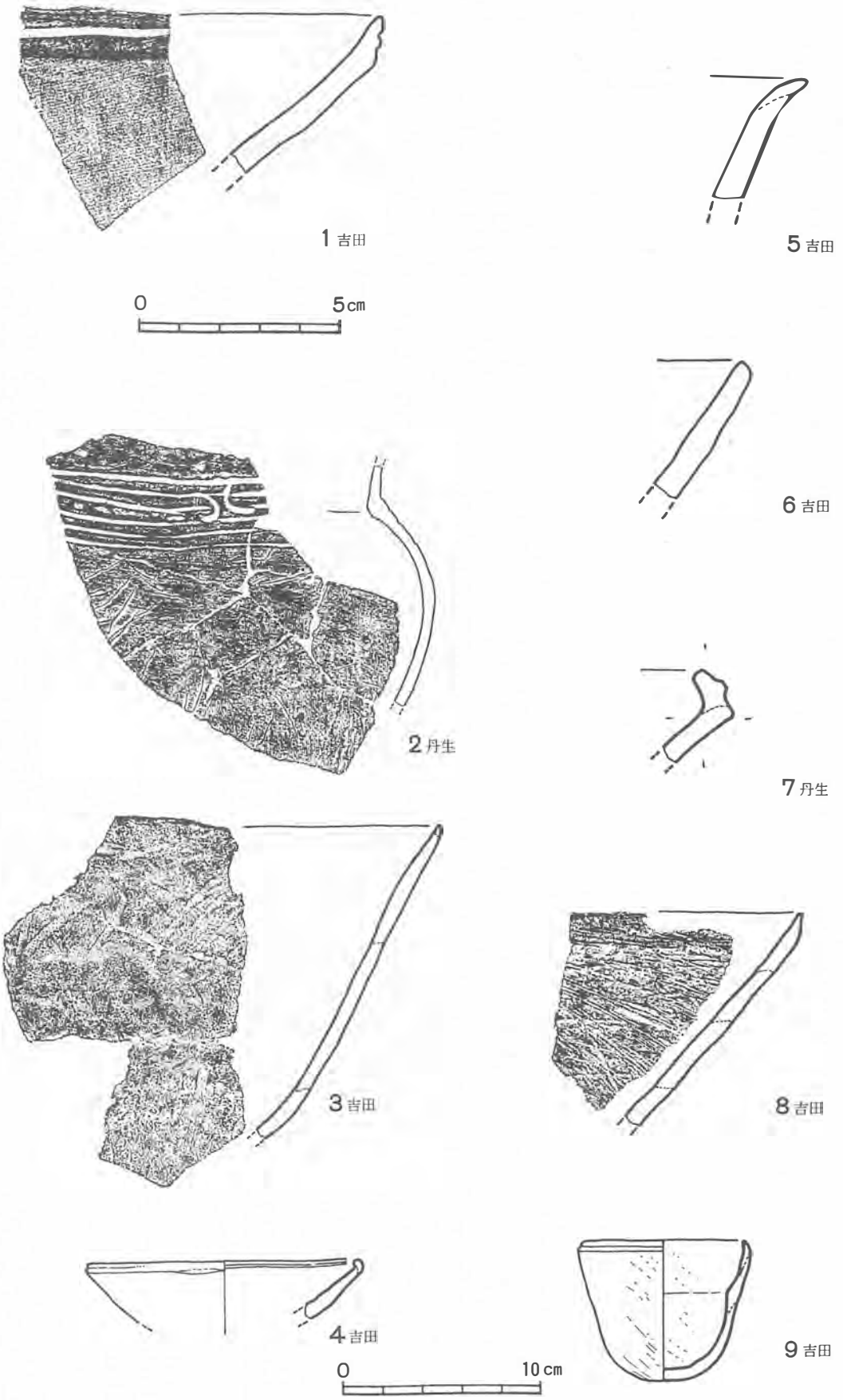
87－８は、土器の把手であろう。弓状に曲がり断面は楕円形である。

1204号土壙（第26図）

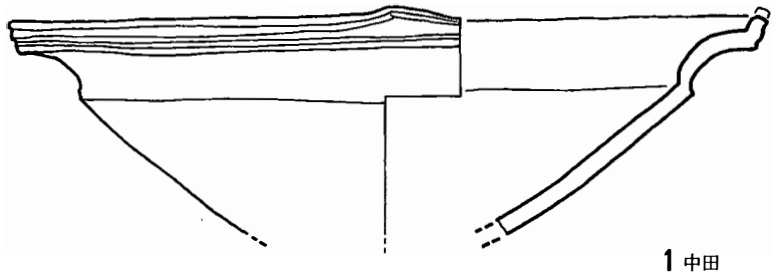
ⅩⅡ区の中央に所在する。平面形態は歪んだ長方形である。長軸方向は100㌢短軸方向は91㌢である。深さは９㌢を測る。遺物としては、埋土に微細な縄文土器片を多数含み、また焼けた粘土塊１点が出土した。埋土は床面に薄く砂が敷かれ、これより上層は黒褐色土である。長軸の方向はＮ60°Ｅである。



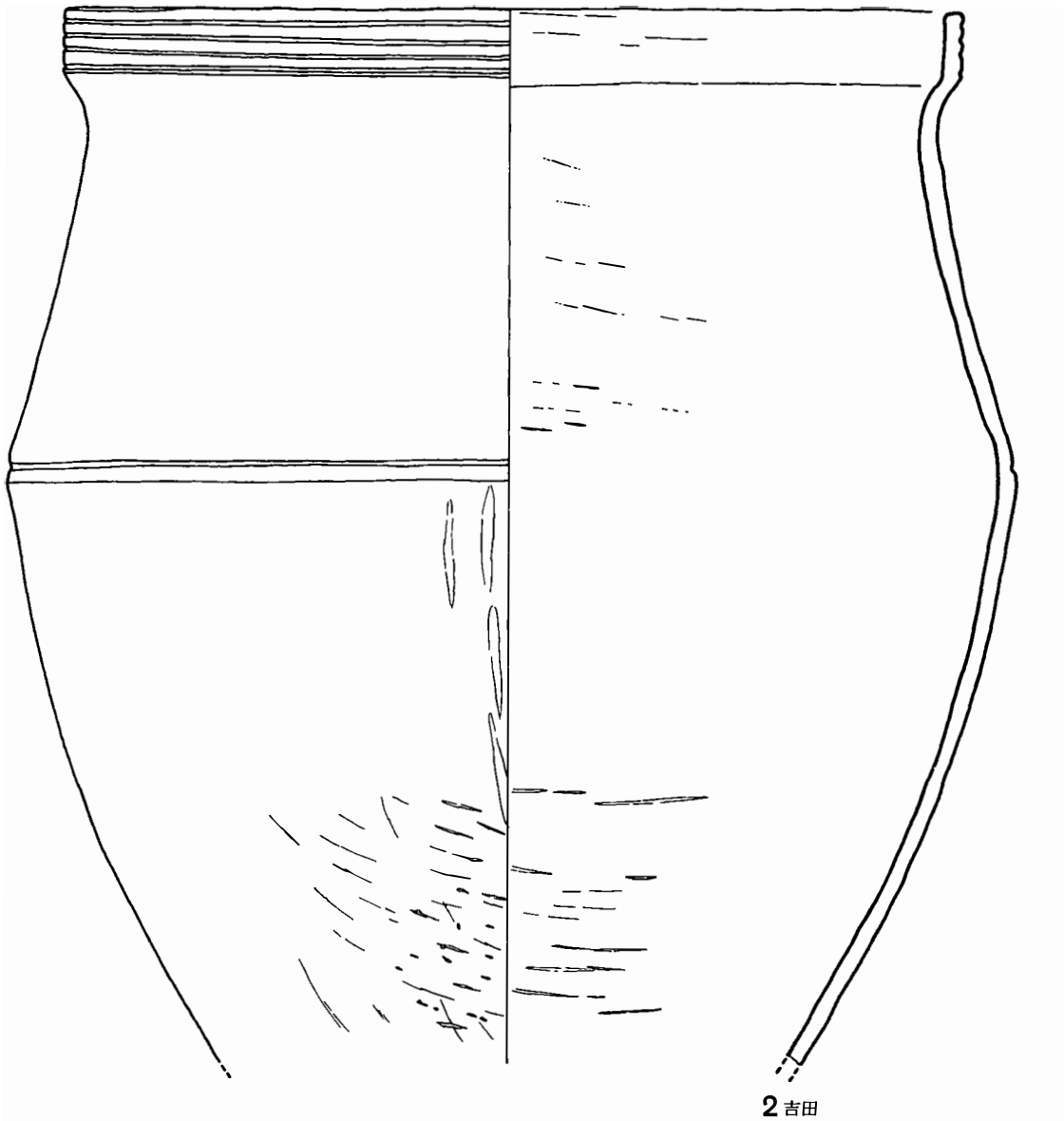
第28図　主要遺構の出土土器



第29図　主要遺構の出土土器



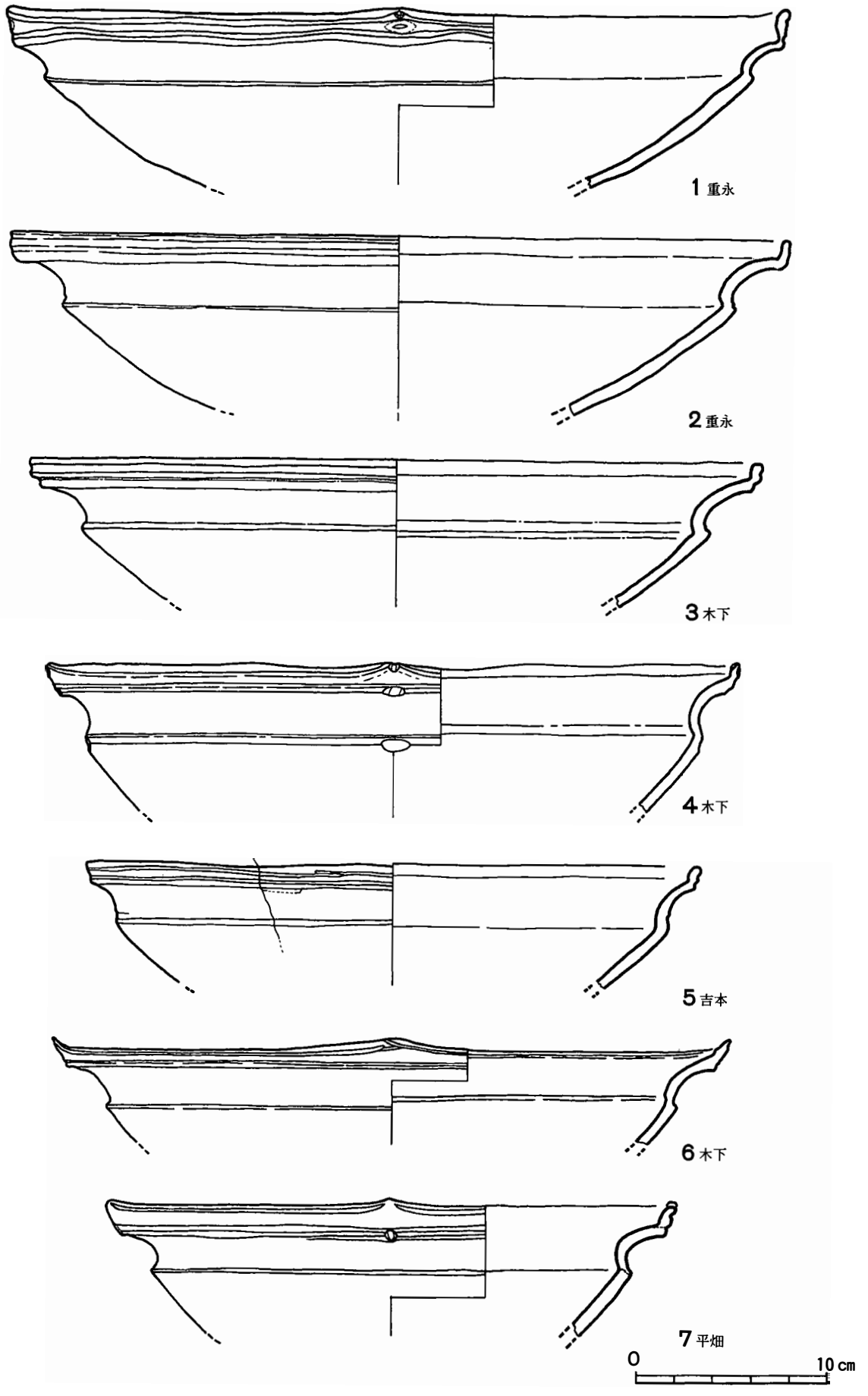
1 中田



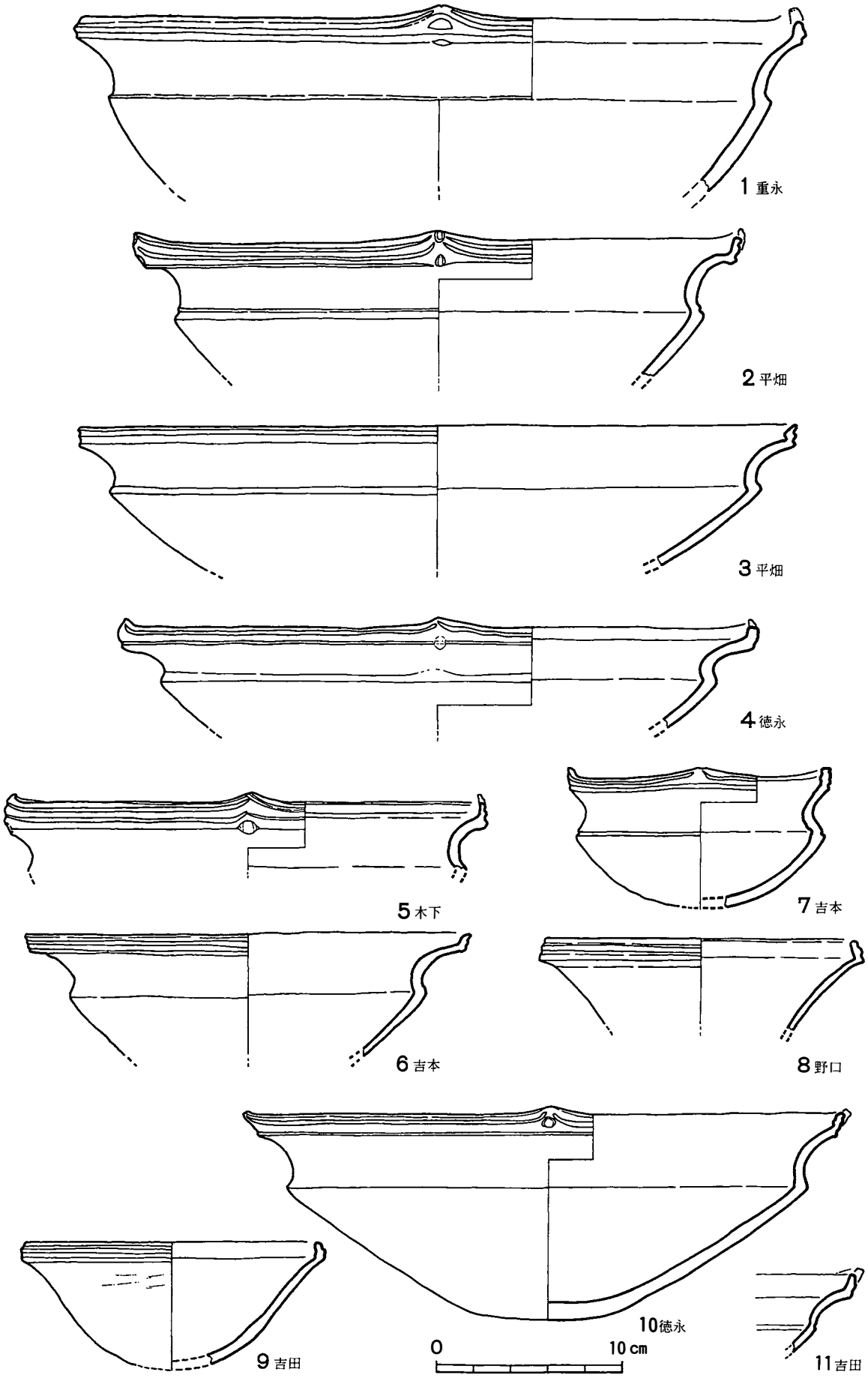
2 吉田

0 10 cm

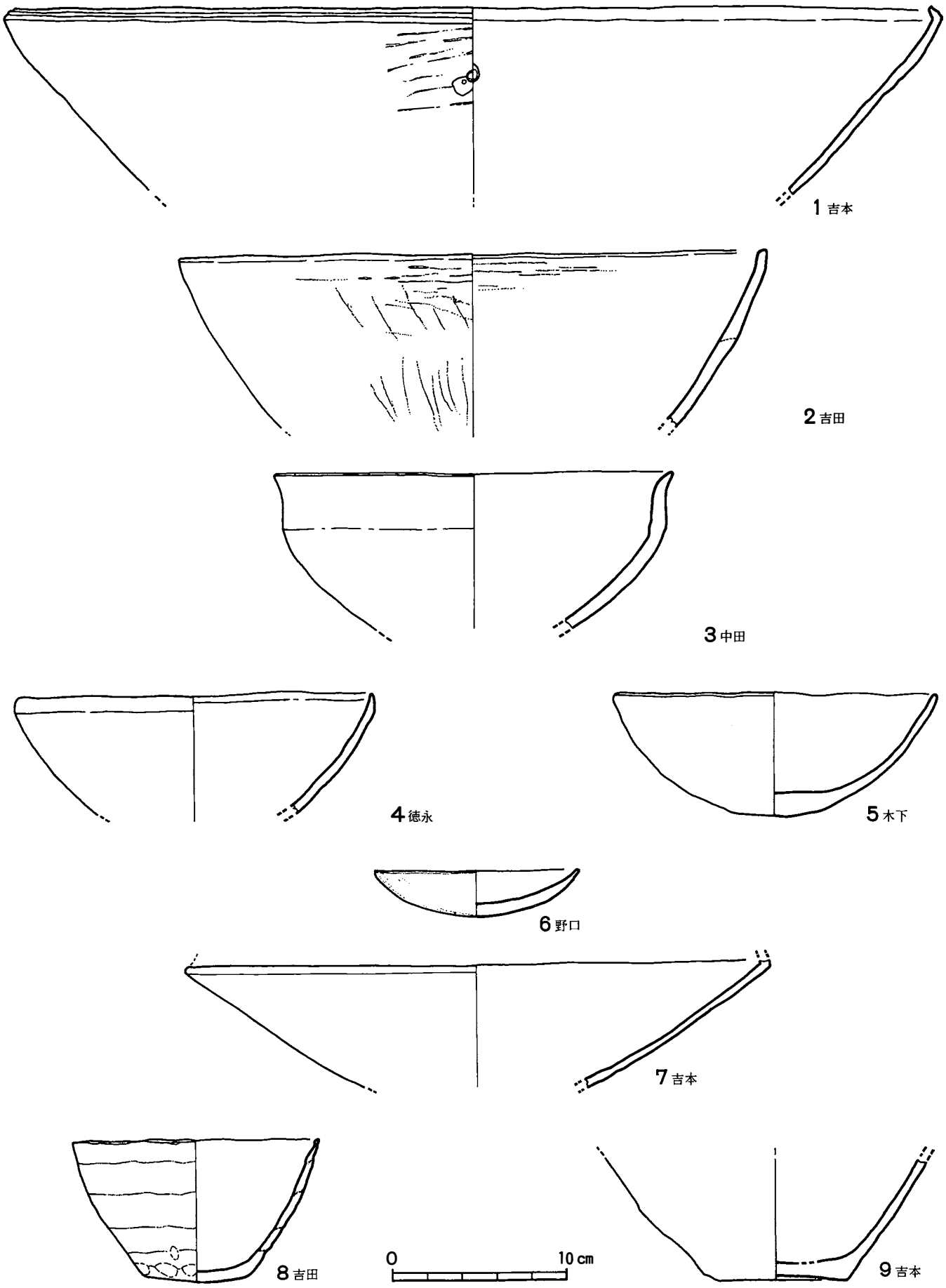
第30図　主要遺構の出土土器



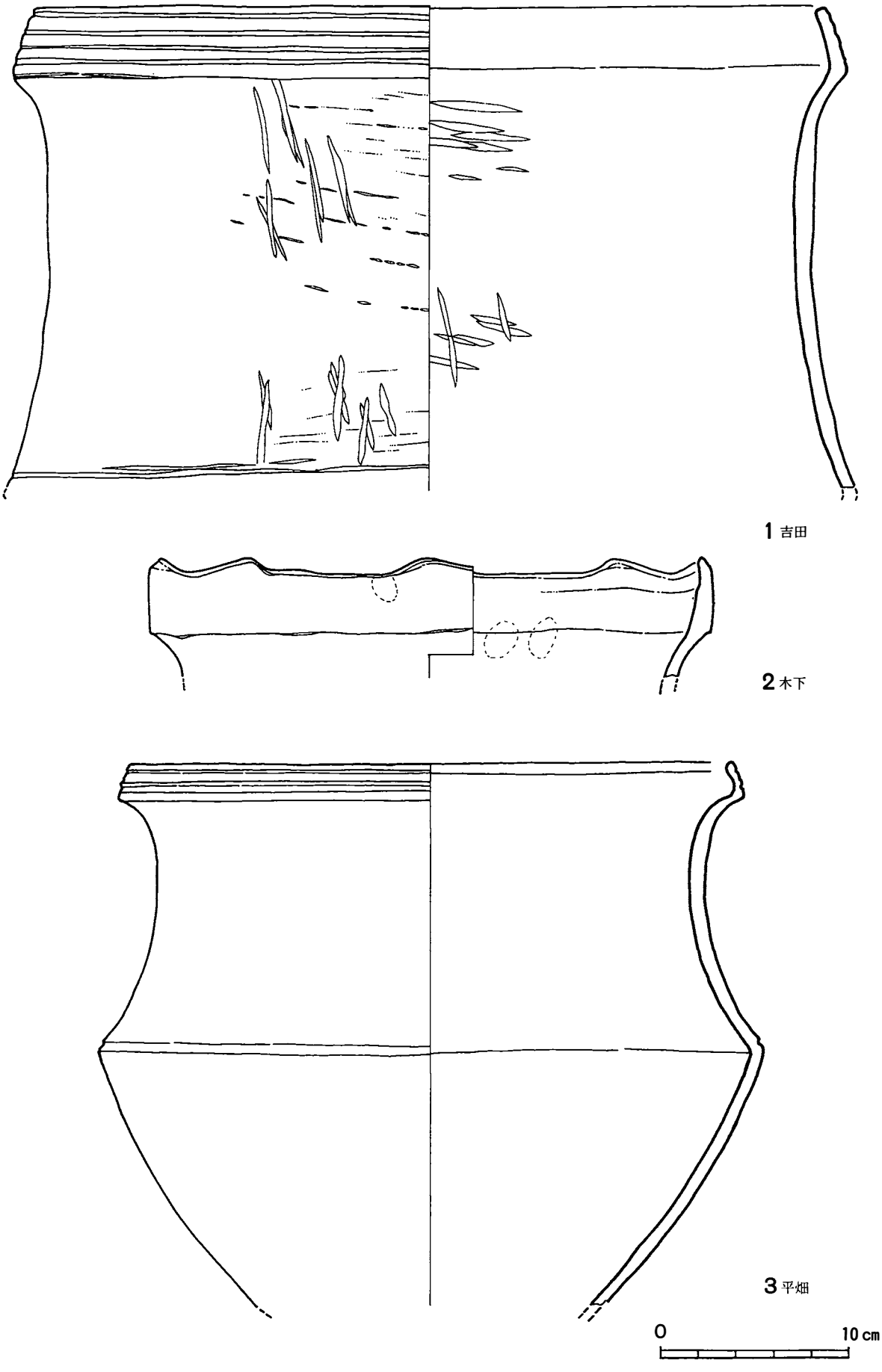
第31図　主要遺構の出土土器



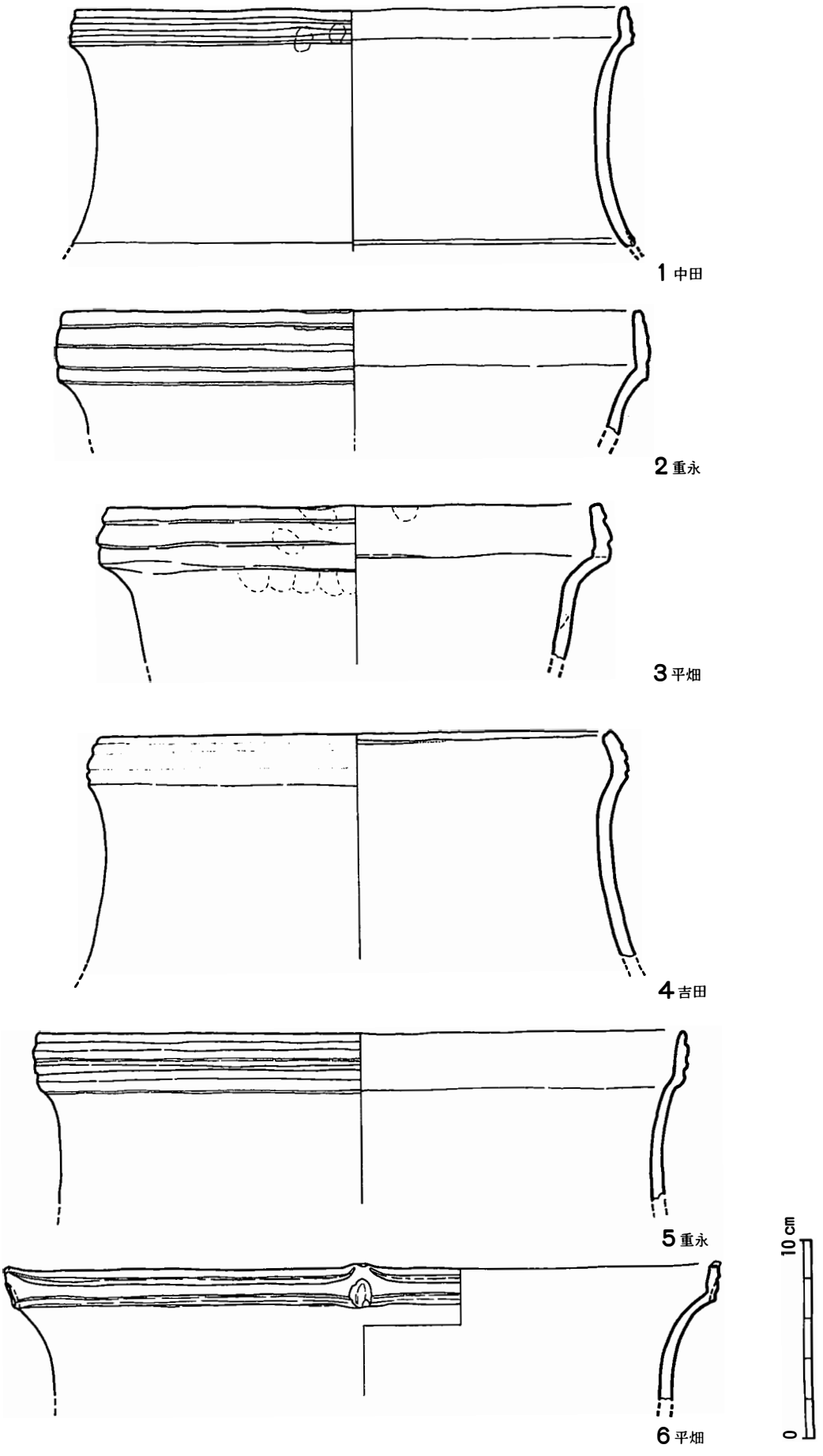
第32図　主要遺構の出土土器



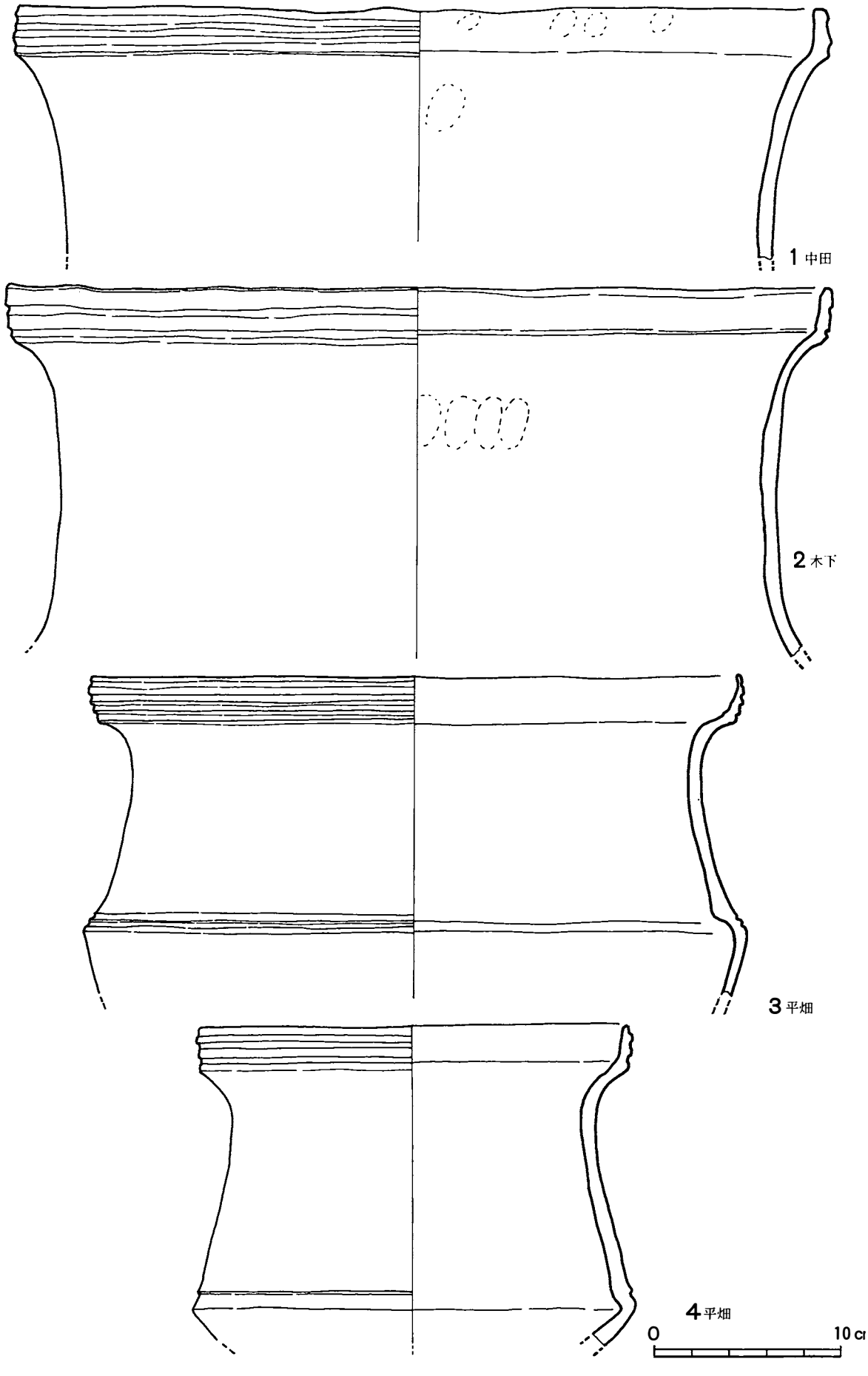
第33図　主要遺構の出土土器



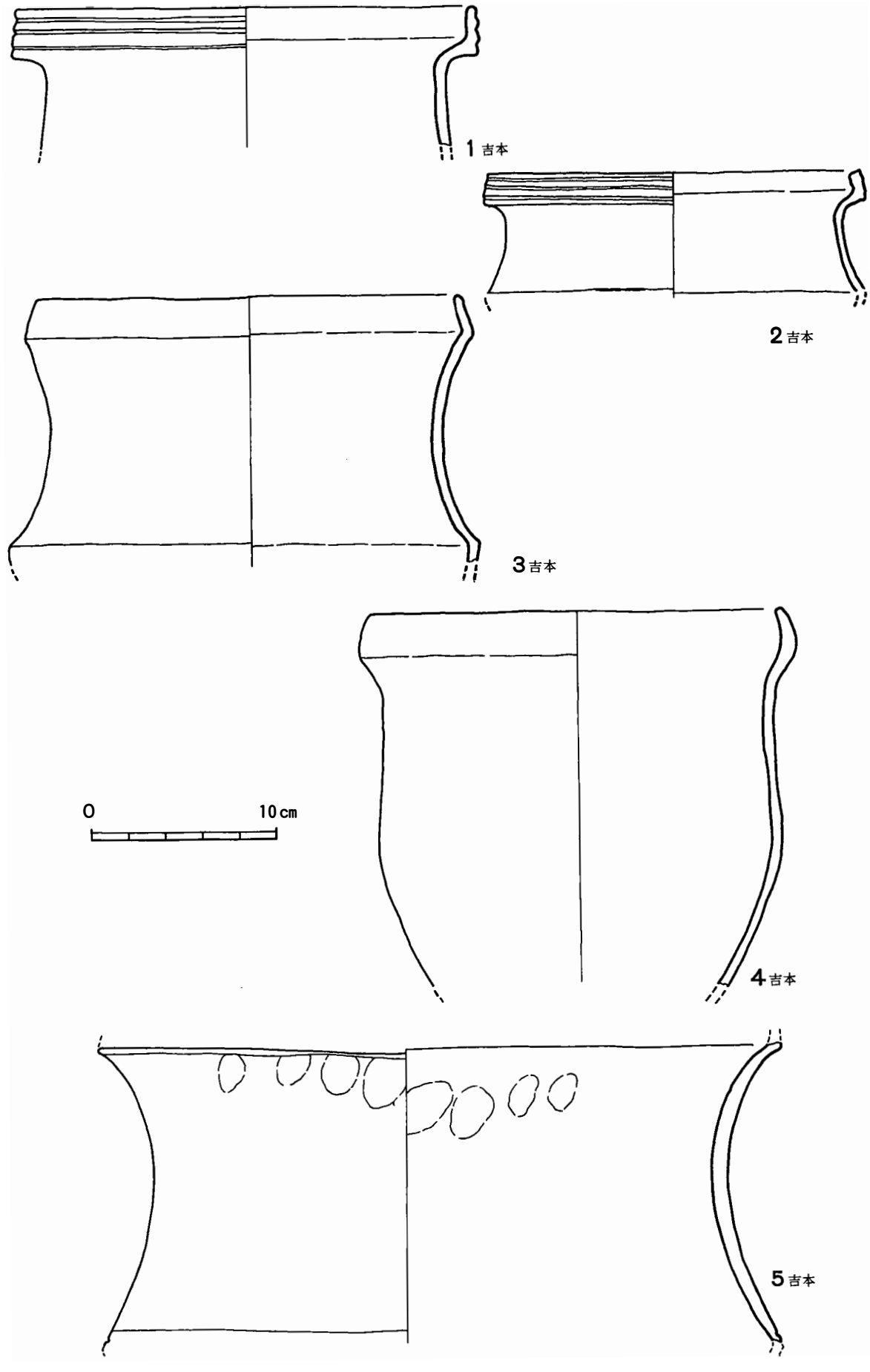
第34図　主要遺構の出土土器



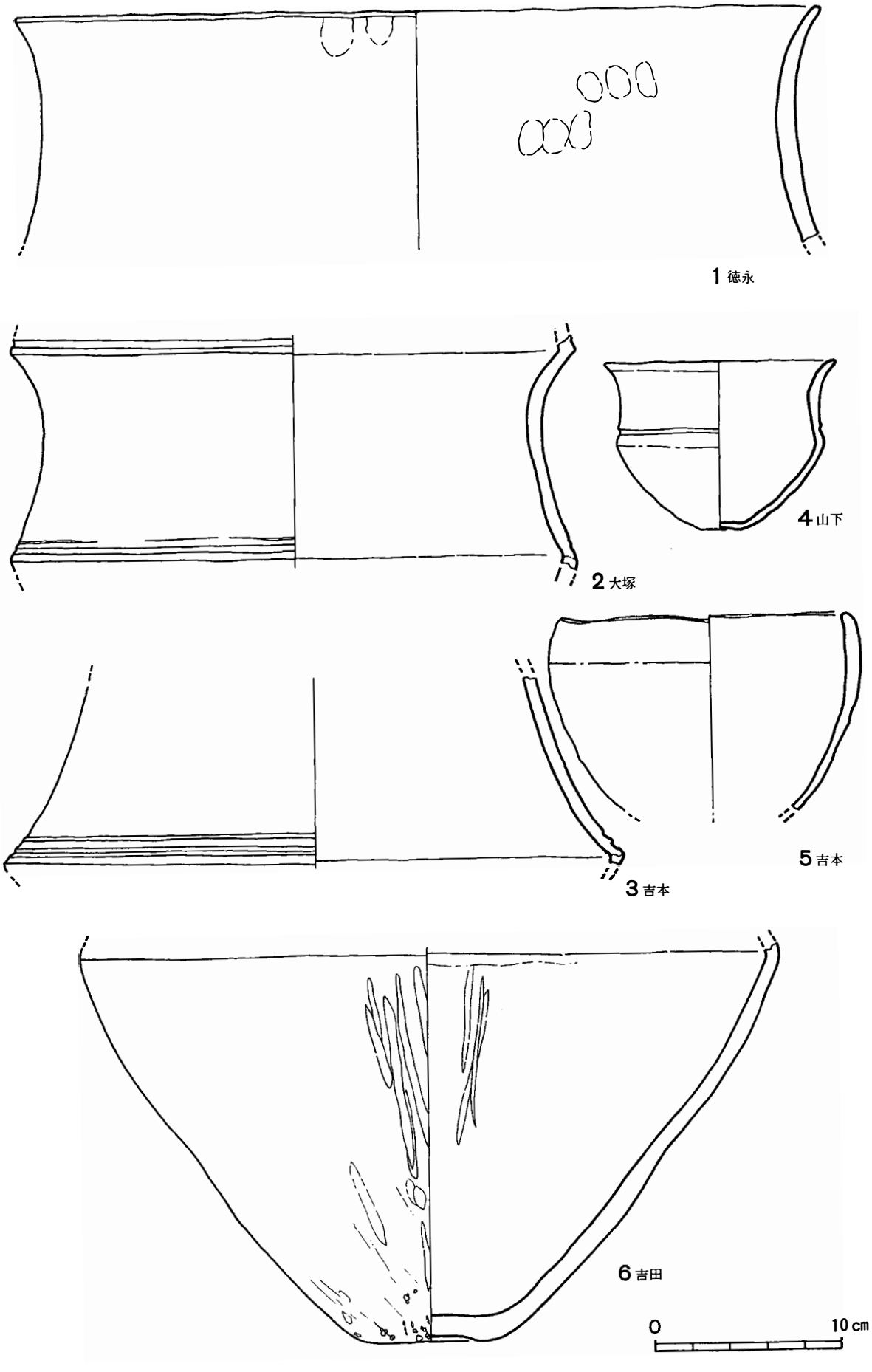
第35図　主要遺構の出土土器



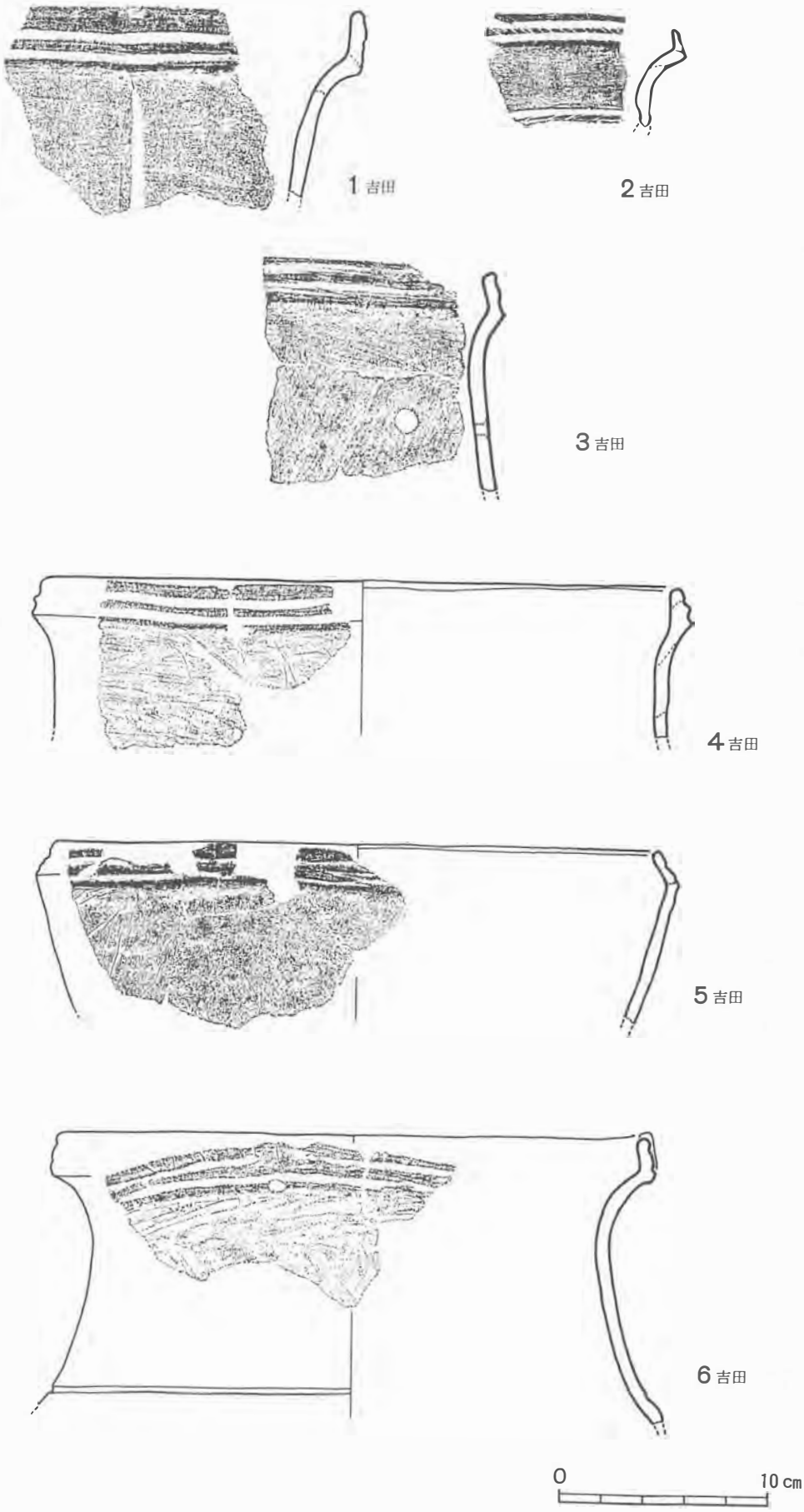
第36図　主要遺構の出土土器



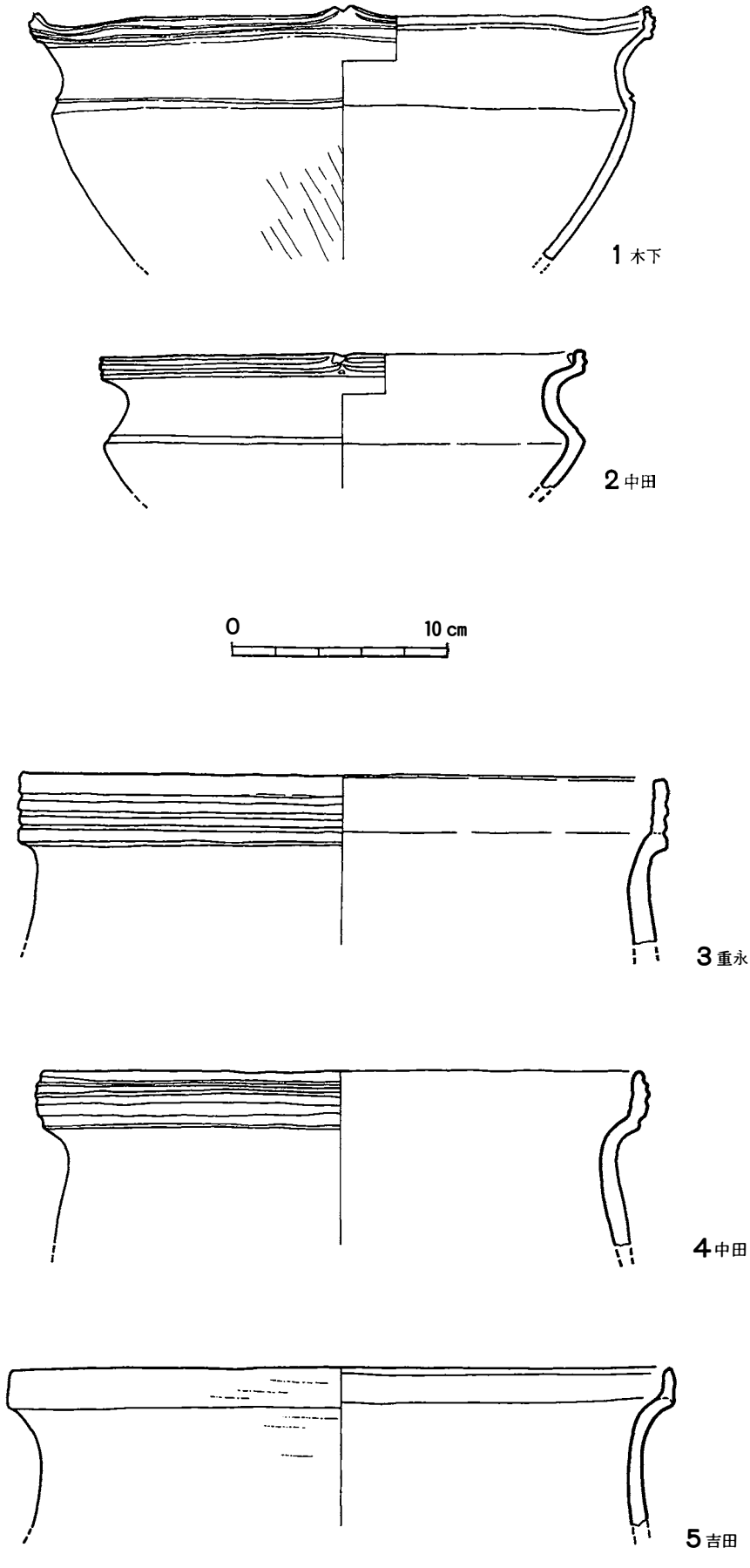
第37図　主要遺構の出土土器



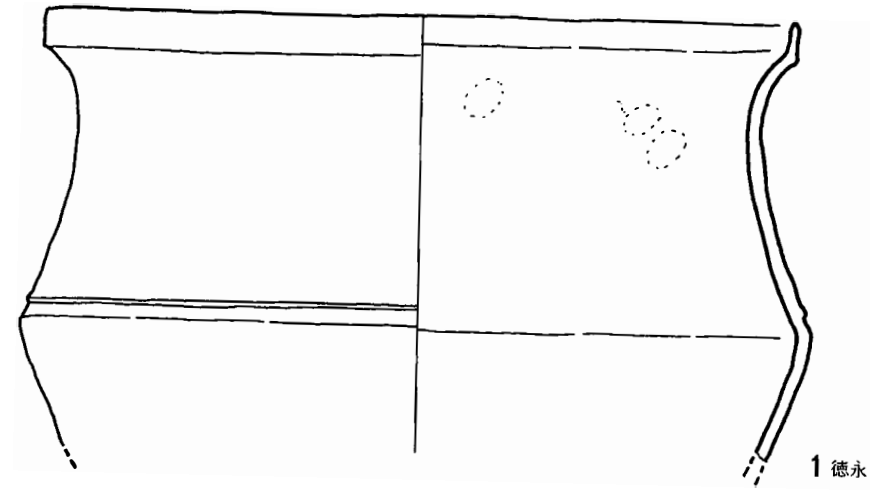
第38図　主要遺構の出土土器

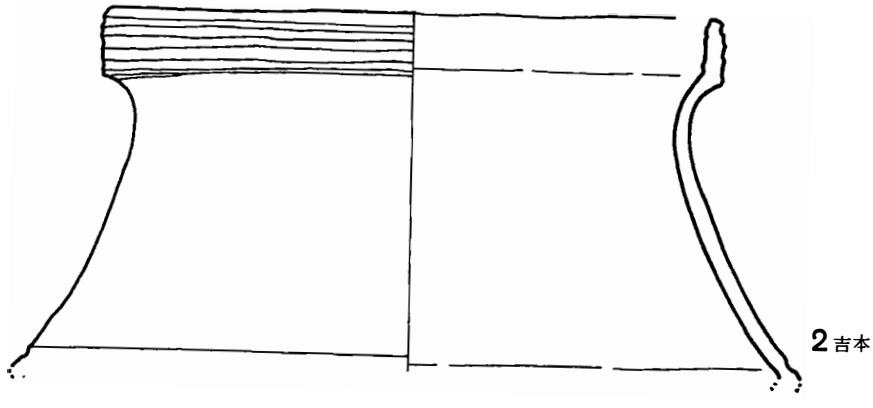


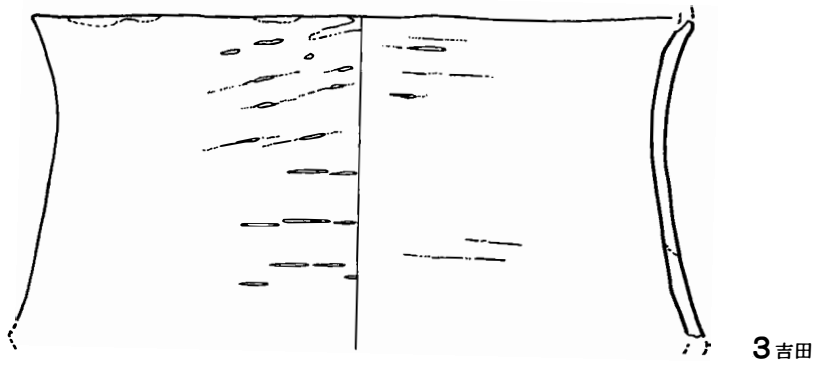
第39図　主要遺構の出土土器

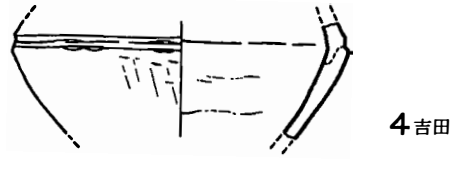


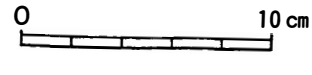
第40図　主要遺構の出土土器



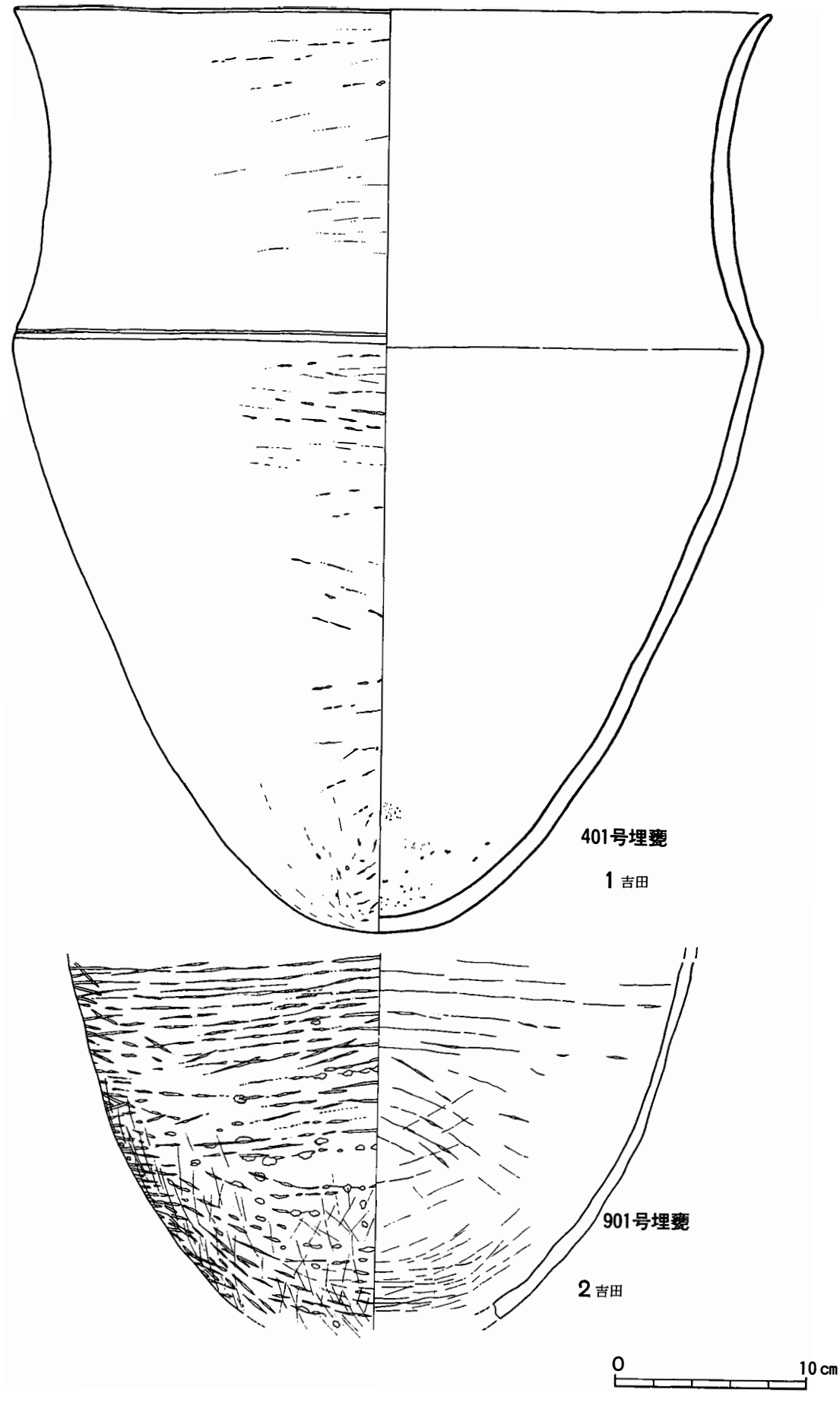




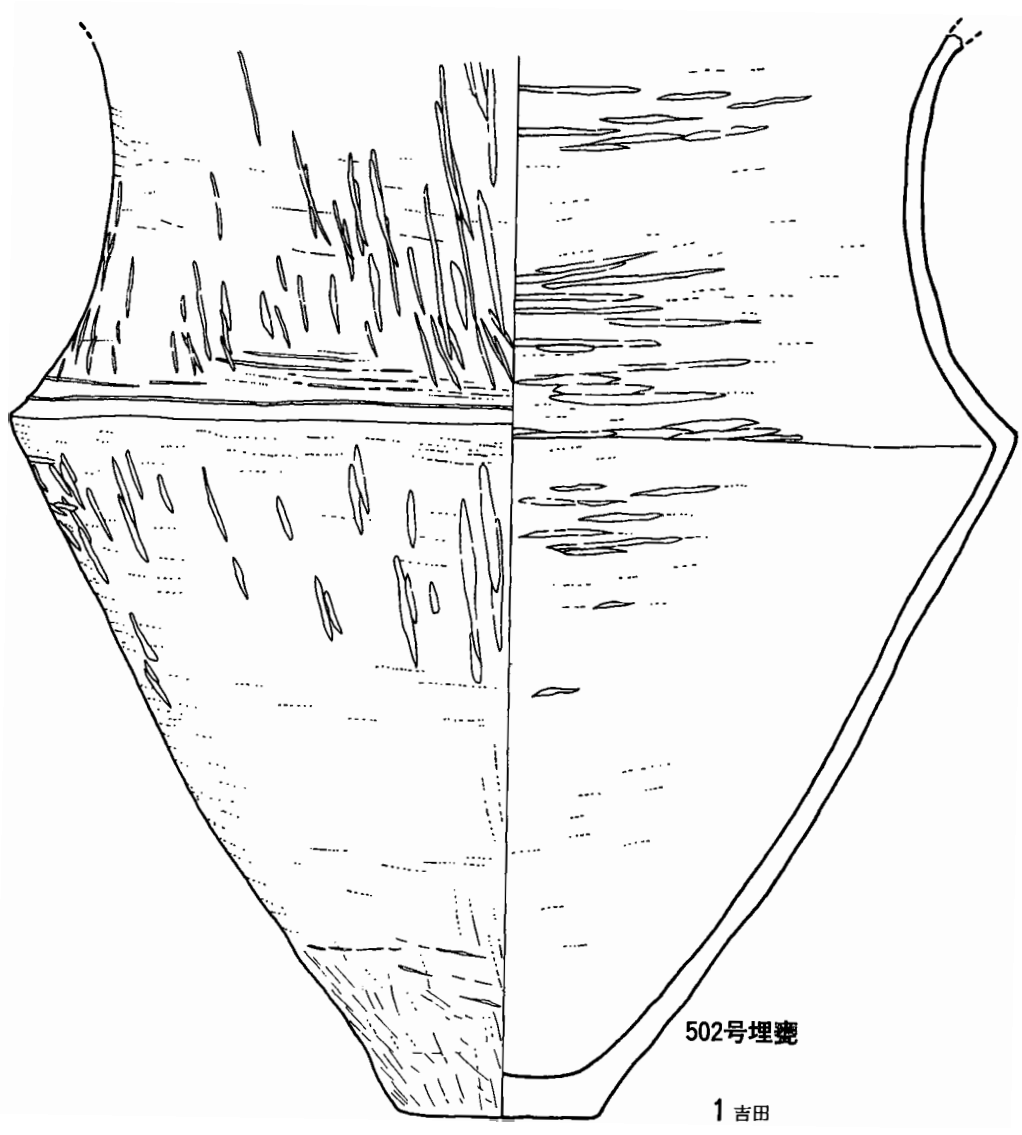


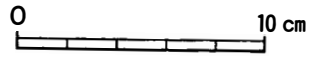


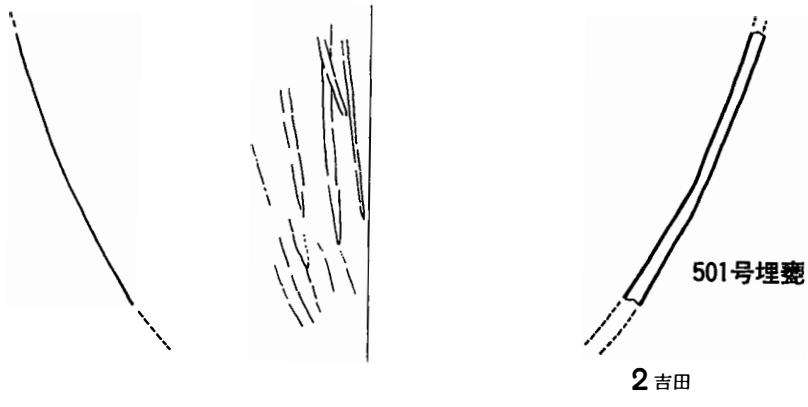
第41図　主要遺構の出土土器



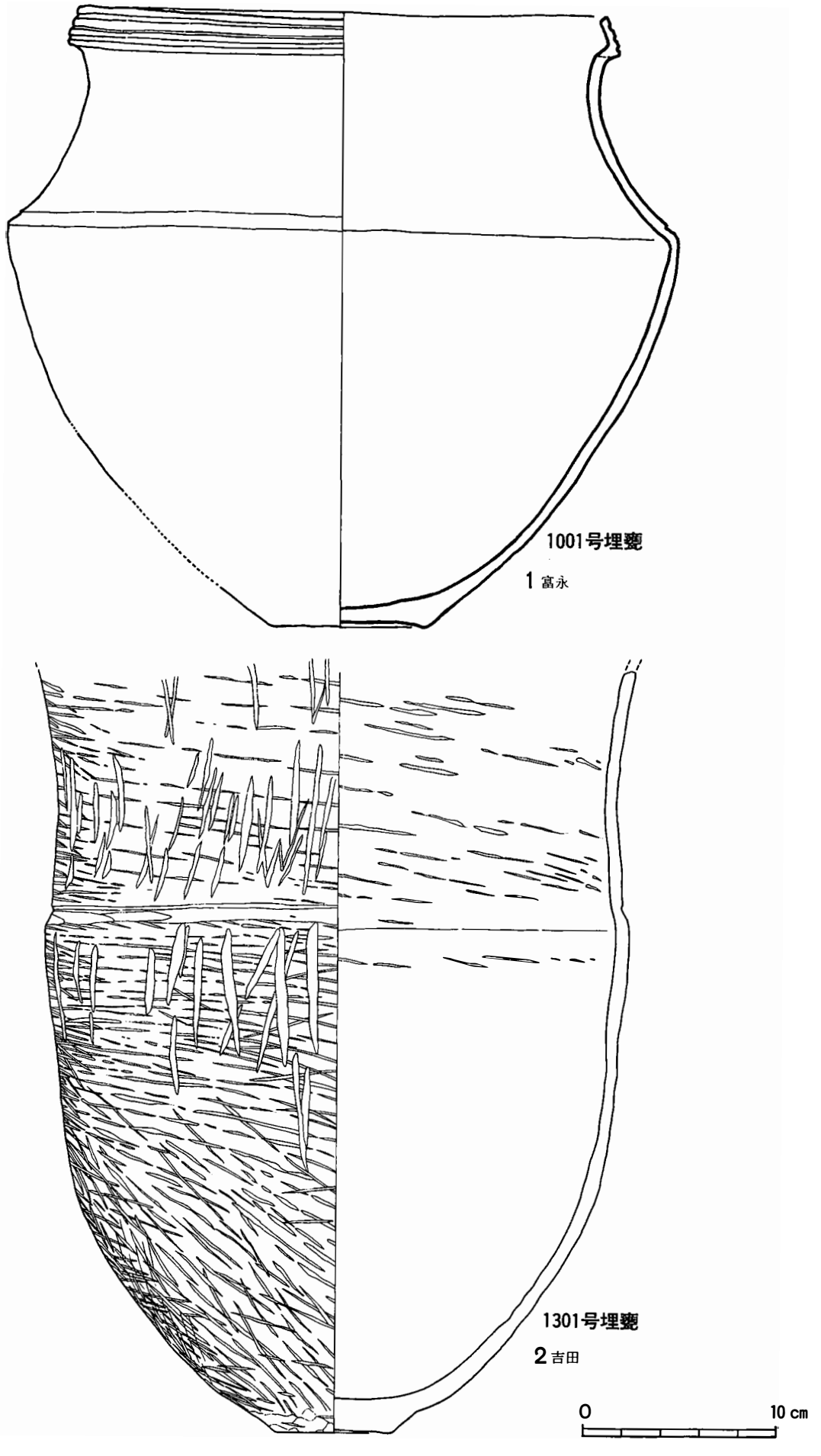
第42図　主要遺構の出土土器



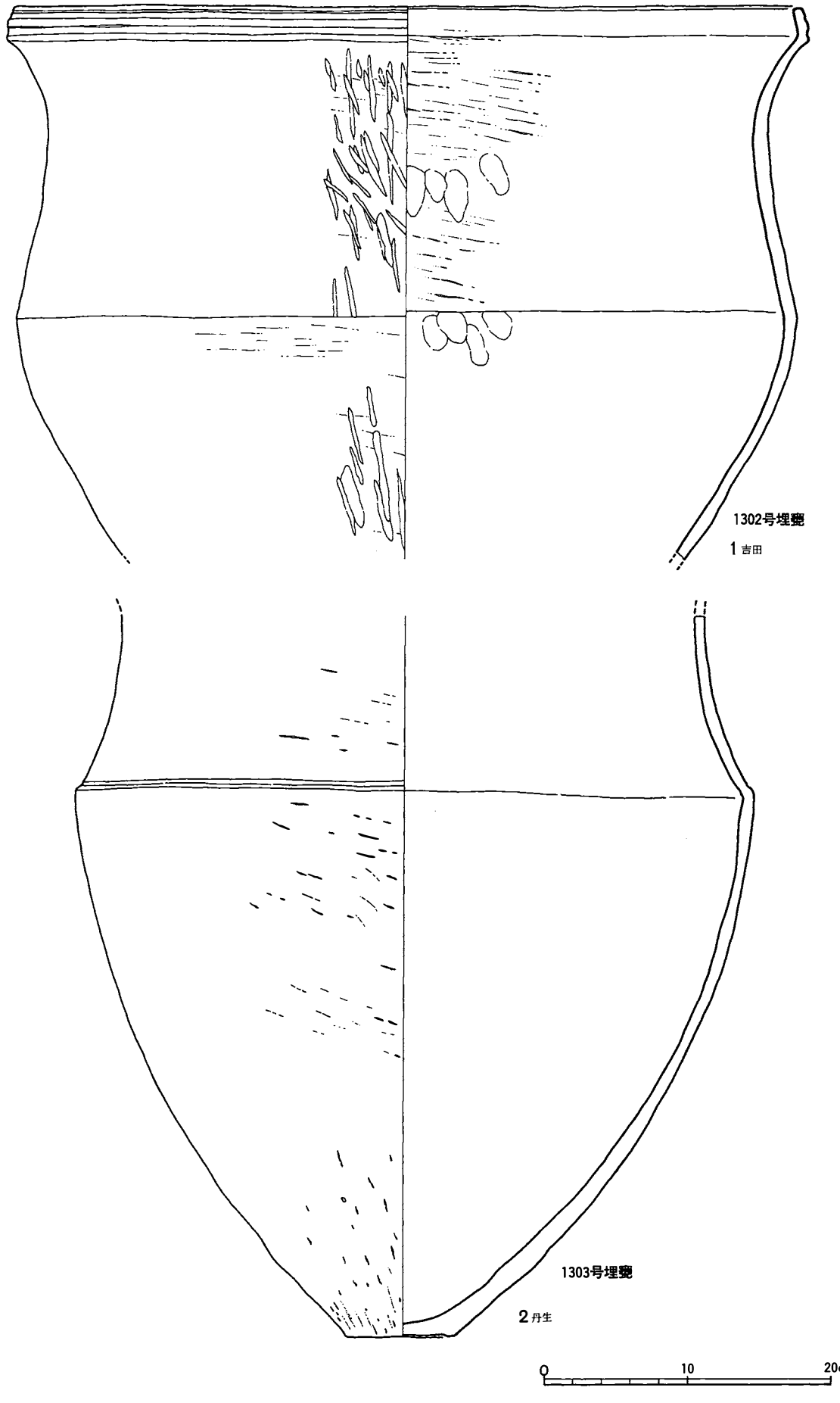




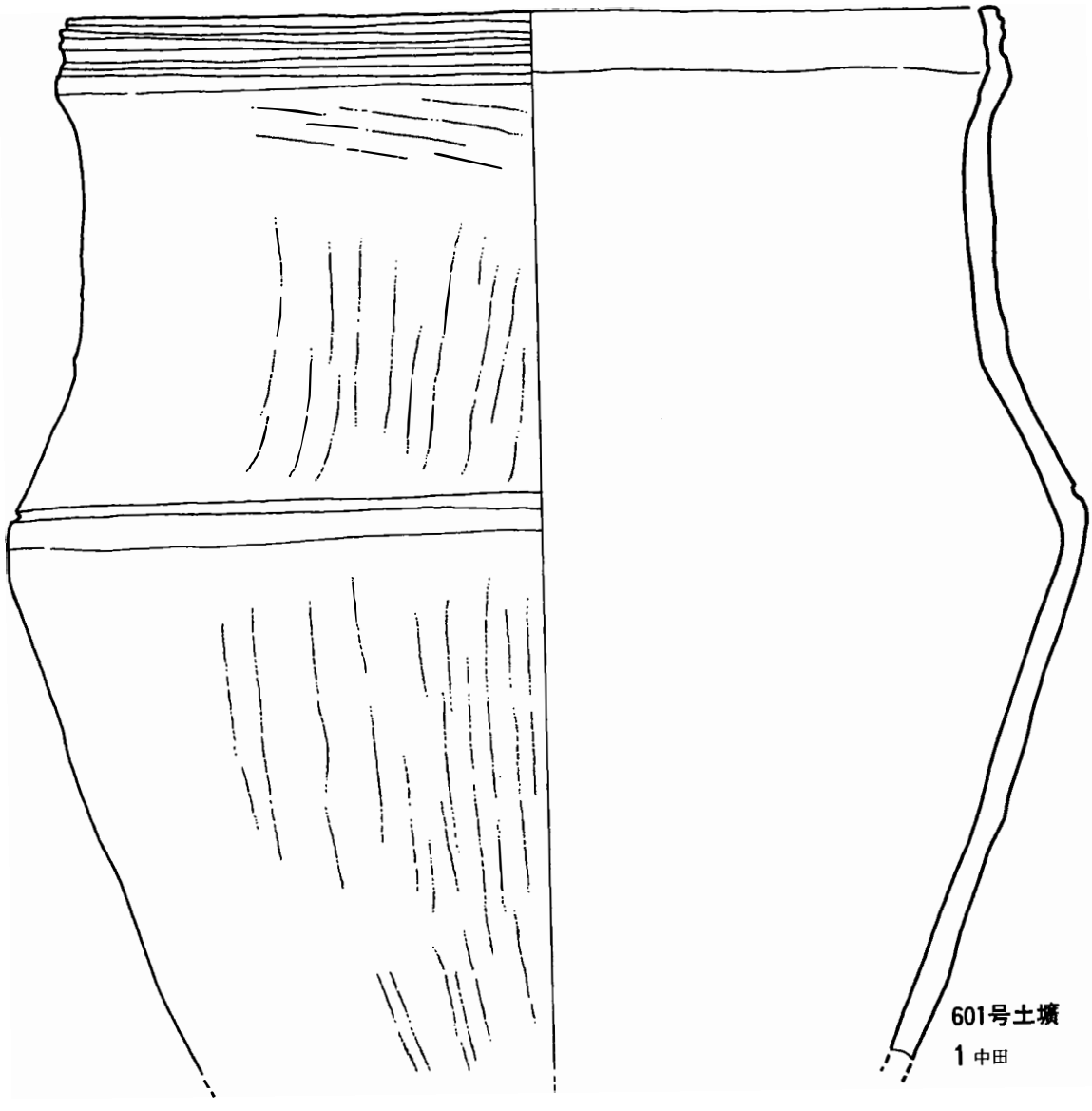
第43図　主要遺構の出土土器

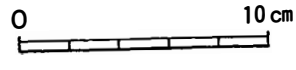


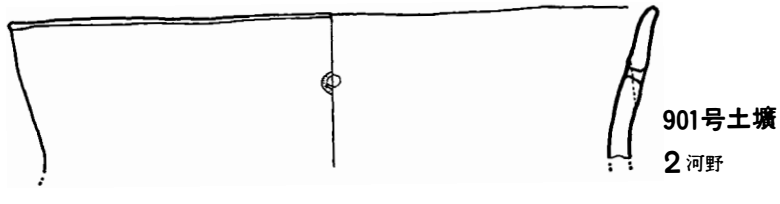
第44図　主要遺構の出土土器



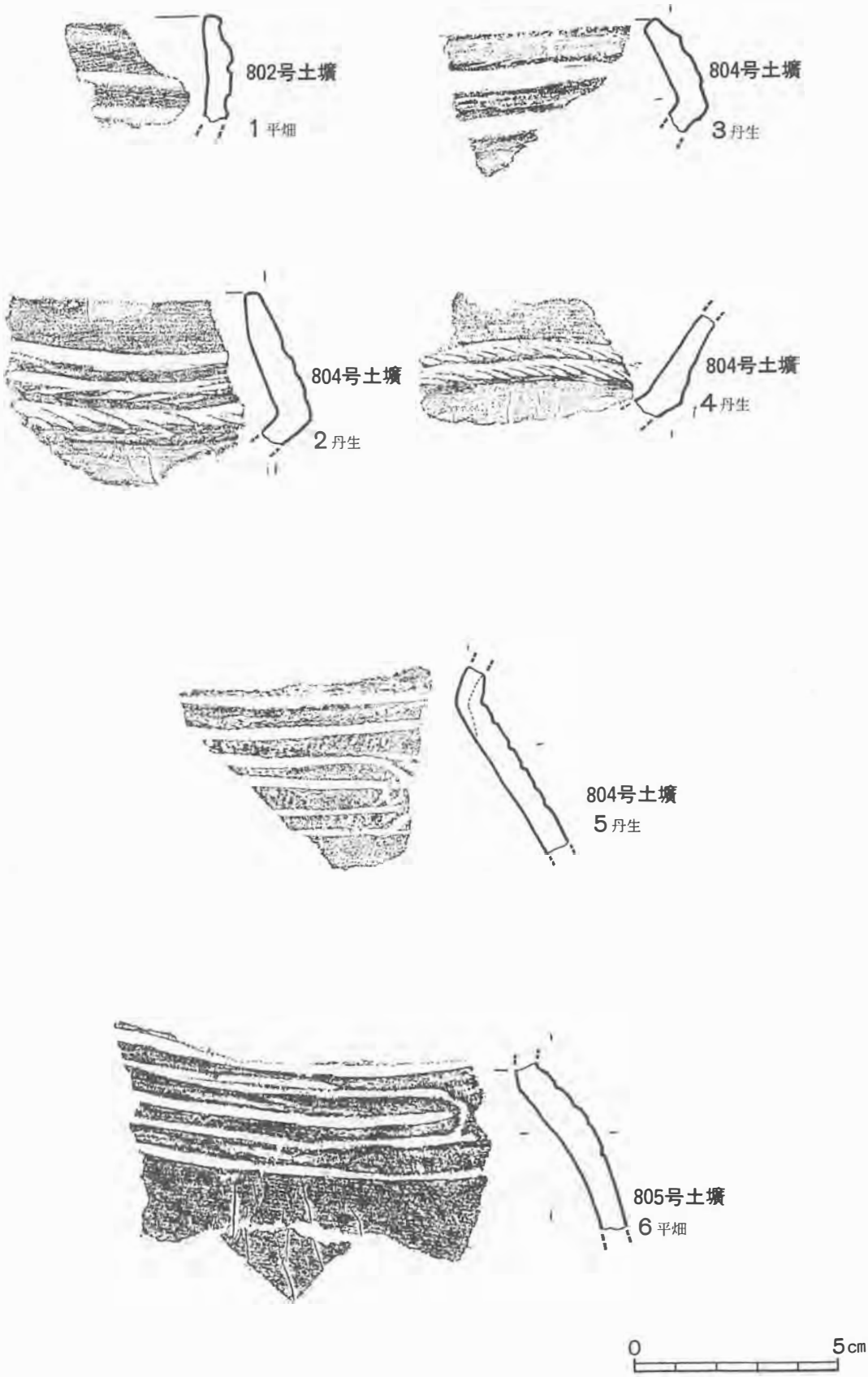
第45図　主要遺構の出土土器



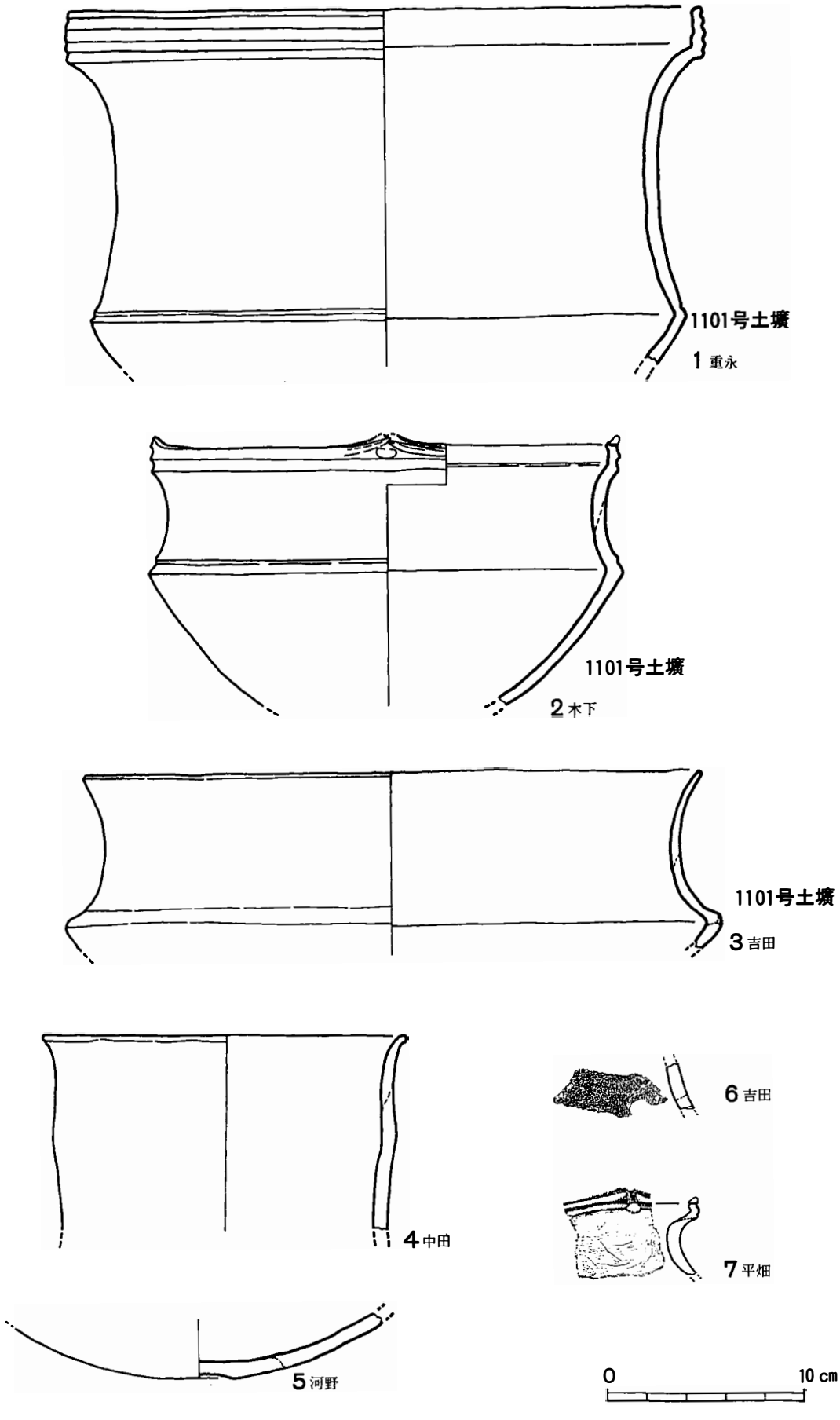




第46図　主要遺構の出土土器



第47図　主要遺構の出土土器



第48図　主要遺構の出土土器

第２表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第28図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
28-1	401 住	浅鉢Ⅴ-E	(214)	84		丸底	外 にぶい黄色 内 灰黄色		No10、包417,415
2	401 住	深鉢		(100)		(65)	外 にぶい黄橙10YR 7/4 内 褐灰色10YR 6/1		No12、包77,81,96,99,403
3	401 住	深鉢		(131)		(91)	外 橙色 内 にぶい黄橙7/4		No2,3,4 包384,390,420,341,413
4	401 住	浅鉢		(45)			外 にぶい黄橙10YR 6/4 内 にぶい黄褐10YR 5/3	ていねいなミガキ	P-5 一括、包310
5	401 住	浅鉢		(22)		(38)	外 にぶい黄褐10YR 5/4 内 灰黄褐色10YR 5/2	大粒の砂を含む	No11

土　器　第29図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
29-1	802 住	浅鉢Ⅱ-A		(38)			にぶい黄橙10YR 6/4		
2	802 住	深鉢Ⅱ-D		(71)			外 にぶい黄橙10YR 5/3 内 にぶい黄褐10YR 6/3		M-23、No1
3	802 住	浅鉢		(153)			外 にぶい黄褐10YR 4/3 内 にぶい黄褐10YR 5/3	カーボン付着	No8
4	802 住	浅鉢Ⅱ-A	(138)	(29)			にぶい黄2.5YR 6/3	ミニチュア土器	No21
5	802 住	深鉢		(30)			外 暗褐色10YR 3/3 内 浅黄橙10YR 8/4		No2
6	802 住	浅鉢		(33)			灰黄褐色10YR 4/2		No1
7	802 住	浅鉢		(22)			外 灰黄褐色10YR 6/3 内 にぶい黄橙10YR 6/2		
8	802 住	浅鉢Ⅱ-B		(104)			にぶい黄褐色10YR 7/4	カーボン付着	M-24,30 、No3
9	802 住	深鉢Ⅱ-G	80	70	86		浅黄橙10YR 8/4	ミニチュア土器	M-21、No405

土　器　第30図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
30-1	1302 住	浅鉢Ⅶ-E	(302)	(63)	(234)		外 暗褐色 内 灰褐色	光沢のあるミガキ カーボン付着	No2168
2	1302 住	深鉢Ⅶ-C	373	(432)	421		外 にぶい黄橙10YR 7/4 内 にぶい黄橙10YR 6/4	カーボン付着	No260

第３表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第31図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
31-1	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(410)	(93)	(392)		外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR7/4		No2168
2	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(408)	(90)	(354)		外 黒褐色 10YR3/2 内 黒褐色 10YR3/1		No260
3	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(382)	(74)	(330)		にぶい黄橙		No1910
4	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(361)	(77)	(324)		明るい淡黄褐色		No1389, 2075, 2080, 2319
5	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(312)	(64)	(292)		浅黄色		No989, 1856
6	1303 住	浅鉢Ⅶ-D	(354)	(54)	(300)		外 にぶい黄橙 内 黒斑状の黒色		No180, 1538, 1803
7	1303 住	浅鉢Ⅶ-D	(300)	(71)	(252)		外 灰黄褐色 10YR5/2 内 黒褐色 10YR3/1		No1320

土　器　第32図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
32-1	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(190)	(92)	(352)		外 - 褐色 2.5Y4/4 内 黒褐色 2.5Y3/2	口縁に文様 ミガキ	No2052
2	1303 住	浅鉢Ⅶ-D	(320)	(76)	(278)		外 灰黄褐色 10YR4/2 内 暗褐色 10YR3/3	カーボン付着 ミガキ	No1467
3	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(378)	(65)	(336)		外 にぶい黄褐 10YR4/3 内 黒褐色 10YR3/1	ミガキ	
4	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(329)	(58)	(293)		外 にぶい黄色 2.5Y6/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4	光沢あるミガキ	No1775
5	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(248)	(41)	(184)		にぶい黄橙	光沢のあるていねいなミガキ	No360
6	1303 住	浅鉢Ⅶ-D	(236)	(60)	(182)		外 黒褐色 2.5Y3/2 内 黒褐色 2.5Y3/2	口縁に文様 光沢あるミガキ	No1045
7	1303 住	浅鉢Ⅶ-E	(138)	(72)	(130)		外 にぶい黄橙 10R7/4 内 にぶい黄橙 10R6/3	口縁に文様 光沢あるミガキ	No927, 928, 86473
8	1303 住	浅鉢Ⅶ-A	(164)	(55)			黒褐色	光沢のあるていねいなミガキ	包6276、No818
9	1303 住	浅鉢Ⅶ-A	(156)	67		丸底	灰黄褐 10YR4/2 ～黒褐色 10YR3/2	条痕の上にミガキ やや光沢あり	No263
10	1303 住	浅鉢Ⅶ-D	(321)	111	(276)		にぶい黄褐 10YR5/4	ミガキ	No1802, 2150, 2426
11	1303 住	浅鉢Ⅶ-E		(44)			黒褐色 7.5YR3/2	ベンガラ付着 光沢あり	No203

第４表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第33図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
33-1	1303 住	浅鉢Ⅶ-Ⅰ	518	(103)			外　灰黄褐色　10YR4/2 内　にぶい黄橙　10YR6/4	補修孔 ミガキ	包4363, 10592 No2338, 2328, 4363
2	1303 住	浅鉢Ⅶ-Ⅰ	337	(98)			外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR6/3	カーボン付着 ミガキ	包526
3	1303 住	浅鉢Ⅶ-F	(226	(88)	(218)		外　にぶい赤褐　5YR4/4 内　赤褐色　5YR4/6	２次受熱	No1837, 1833, 2182, 1850
4	1303 住	浅鉢Ⅶ-G	(198)	(66)			外　にぶい黄色　2.5Y6/4 内　にぶい黄橙　10YR6/4	光沢あるミガキ	包9849、No783, 2798
5	1303 住	浅鉢Ⅶ-G	181	69			にぶい黄橙	ミガキ	No1483, 1485, 1679
6	1303 住	浅鉢Ⅶ-G	(116)	(35)			外　黒褐色　2.5Y3/2 内　黒褐色　2.5Y3/2	ていねいなつくり	No2268
7	1303 住	浅鉢		(68)	(330)		外　にぶい黄橙　10R7/4 内　にぶい黄橙　10R6/3	ミガキ	No2113, 109, 8076, 218, 2109, 2456, 1302, 1929
8	1303 住	浅鉢Ⅶ-G	(140)	(81)		60	外　黒褐色　2.5Y3/1 内　浅黄色　2.5Y7/3		包2334, 8369 No883, 886, 8369,
9	1303 住	深鉢		(65)		74	外　明黄褐色　10YR6/6 内　にぶい黄橙　10YR5/3	内部にカーボン付着	No1026, 532, 900

土　器　第34図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
34-1	1303 住	深鉢Ⅶ-C	420	(254)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　にぶい黄褐　10YR5/3	ていねいなミガキ	No9, 1889, 1830, 1925, 127
2	1303 住	深鉢Ⅶ-F	(287)	62			にぶい黄褐色（黒斑）	口縁に８カ所の突起 雑なミガキ	No1836, 2024
3	1303 住	深鉢Ⅳ-C	317	(284)	354		外　黒褐色　10YR3/1 内　にぶい黄橙　10YR6/4	粗い条痕	

土　器　第35図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
35-1	1303 住	深鉢Ⅶ-C	(278)	(117)			外　にぶい黄橙　10YR7/4 内　にぶい黄橙　10YR7/6		No890
2	1303 住	深鉢	(290)	(80)			外　灰褐色　5YR4/2 内　にぶい黄橙　10YR7/4		No1992
3	1303 住	深鉢	(249)	(78)			外　灰黄褐色　10YR4/2 内　灰黄褐色　10YR5/2		No2350
4	1303 住	深鉢	(263)	(114)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　橙色　7.5YR7/6		
5	1303 住	深鉢	(164)	(83)			外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄褐　10YR5/4		No1974, 1978
6	1303 住	深鉢	(363)	(68)			外　灰褐色　7.5YR4/2 内　にぶい黄褐　10YR4/3		No1445

第５表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第36図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
36-1	1303 住	浅鉢	(436)	(131)			外 橙 内 にぶい黄橙	粘土クズ付着 ていねいなミガキ	No955
2	1303 住	深鉢	(440)	(193)			外 褐色 内 明るい黄褐	ていねいなミガキ	No3262, 6262, 8178, 9756, 9779, 296, 29770
3	1303 住	深鉢Ⅶ-D	(348)	(169)	(356)		外 褐灰色 内 にぶい黄橙	指頭圧痕	No2328
4	1303 住	深鉢Ⅶ-D	(263)	(165)	(238)		外 灰黄褐色 内 にぶい黄褐色		No415

土　器　第37図１

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
37-1	1303 住	深鉢Ⅶ-D	(244)	(76)			外 浅黄色 2.5Y7/4 内 にぶい黄 2.5Y6/4		No2342, 2411
2	1303 住	深鉢Ⅶ-D	(188)	(64)			外 浅黄色 内 黄灰色	黒斑 カーボン付着	No2352, 2369
3	1303 住	深鉢	(227)	(140)	(242)		外 にぶい黄 2.5Y6/4 内 浅黄色 2.5Y7/4	カーボン付着	No265, 248 、包6570, 2408
4	1303 住	深鉢Ⅶ-F	(320)	(199)	(218)		外 黄褐色 内 にぶい黄	うすくカーボン付着	No772, 764, 765 出土一括
5	1303 住	深鉢		(154)			外 浅黄色 2.5Y7/4 内 灰黄色 2.5Y6/2	指頭圧痕著しい	No1212, 1770, 1200, 1303

土　器　第38図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
38-1	1303 住	深鉢Ⅶ-G	(429)	(121)	(427)		にぶい黄 2.5Y6/3	指あと カーボン付着	No1190, 1191
2	1303 住	深鉢Ⅶ-C		(124)	(306)		外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3		No9841, 1046
3	1303 住	浅鉢Ⅶ-F		(101)	(334)		外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 灰黄 10YR4/2	胴部に２条の沈線 ミガキ	No150, 149
4	1303 住	深鉢	118	90	124		外 褐灰色 10YR4/1 内 にぶい黄橙 10YR6/4	カーボン付着 胴部に沈線	
5	1303 住	浅鉢Ⅶ-G	140	(104)	166	20	外 黒褐色 10YR3/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	うすいカーボン付着	No1512, 2112, 1926, 2530
6	1303 住	深鉢		(204)		64	外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4		

第６表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第39図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
39-1	1303 住	深鉢		(87)			外 黒褐色 10YR3/1 内 にぶい黄褐 10YR5/4	粗いミガキ 胎土に砂多い	No2343
2	1303 住	深鉢		(48)			外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 黒色 10YR2/1	羽状文	No326, 403
3	1303 住	深鉢		(102)			外 黒褐色 10YR2/2 内 にぶい黄褐 10YR4/3	孔あり 粗いミガキ	No677, 67
4	1303 住	深鉢	(305)	(72)			外 黒褐色 10YR3/1 内 にぶい黄褐 10YR5/3		No1907, 1474
5	1303 住	深鉢	(293)	(83)			外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 にぶい褐 7.5YR5/4	カーボン付着	No2216, 2218
6	1303 住	深鉢Ⅶ-C	(283)	(85)	(305)		外 灰黄褐色 10YR4/2 内 にぶい黄橙 10YR6/4	雑な調整である	No2054, 2506, 2500

土　器　第40図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
40-1	1304 住	浅鉢Ⅶ-E	281	112	264		にぶい黄褐色	黒斑	No23, 39, 131, 140, 141, 174 包52, 133, 533, 9522, 9533
2	1304 住	浅鉢	(220)	(61)	(219)		外 黒褐色 2.5Y3/1 内 暗褐色 2.5Y4/2	光沢のあるミガキ	No212
3	1304 住	深鉢Ⅶ-C	(147)	(75)			外 黒褐色 7.5YR2/2 内 褐灰色 7.5YR4/1	光沢のあるミガキ	No564, 477
4	1304 住	深鉢Ⅶ-C	(272)	(78)			外 にぶい黄 6/3 内 にぶい黄 7/3	黒斑	No21, 7036, 7030, 712, 4269
5	1304 住	深鉢Ⅶ-C	(306)	(72)			外 にぶい黄橙10YR7/4 内 灰黄褐色 10YR4/2	光沢のあるていねいなミガキ	No380

土　器　第41図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
41-1	1304 住	深鉢Ⅶ-C	(299)	(172)	(314)		にぶい黄橙	ミガキ	No384, 466, 380, 55
2	1304 住	深鉢Ⅶ-C	(244)	(140)			にぶい黄橙	粗いミガキ	No526 、包11027
3	1304 住	深鉢		(126)			外 にぶい褐色 7.5YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4	カーボン付着	No547, 495 、包8915
4	1304 住	深鉢		(47)	(135)		外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	No513 、包10981

第７表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第42図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
42-1	４０１号 埋甕	深鉢Ⅶ-G	395	475	391		外　浅黄橙　10YR8/3 内　浅黄　2.5Y7/3	ていねいなつくり	
2	９０１号 埋甕	深鉢		185			にぶい黄橙　10YR7/4	砂多い 器面の調整雑	

土　器　第43図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
43-1	５０２号 埋甕	深鉢Ⅴ-C		(427)	400	78	外　にぶい赤褐色10YR7/3 内　にぶい黄橙 10YR7/3		
2	５０１号 埋甕	深鉢		(106)			外　にぶい黄橙　10YR7/3 内　黒褐色	上部は削平による欠失	

土　器　第44図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
44-1	1001号 埋甕	深鉢Ⅳ-C	275	(316)	(351)	80	明淡黄褐色		
2	1301号 埋甕	深鉢Ⅶ-G		(395)	(304)	65	外　にぶい黄橙　10YR5/4 内　にぶい黄橙　10YR5/3	外面は条痕著しい	

土　器　第45図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
45-1	1302号 埋甕	深鉢Ⅶ-C	498	(381)	(495)		外　褐色　7.5YR4/3 内　にぶい黄褐　10YR7/4	ていねいなナデ	
2	1301号 埋甕	深鉢Ⅶ-C		(501)	474	77	外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4	カーボン付着	

土　器　第46図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
46-1	６０１号 土壙	深鉢Ⅶ-C	(386)	(435)	(445)		外　にぶい黄橙 10YR6/4 内　灰黄褐色 10YR6/2	貝殻条痕のあとナデ	
2	９０１号 土壙	深鉢	(255)	(60)			外　にぶい黄褐色 10YR5/3 内　にぶい黄橙　10YR6/4	著しいカーボン付着 穿孔あり　流入遺物	

第８表　主要遺構出土土器計測表

土　器　第47図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
47-1	８０２号土壙	深鉢Ⅱ-D		(26)			にぶい褐色 7.5YR5/4		
2	８０４号土壙	深鉢Ⅱ-D		(34)			外　褐灰色 10YR4/1 内　灰黄褐　10YR5/2	羽状文	
3	８０４号土壙	深鉢Ⅱ-D		(28)			外　にぶい黄橙 10YR6/3 内　灰黄褐　10YR6/2	粗い沈線	
4	８０４号土壙	浅鉢Ⅲ-C		(22)			外　にぶい黄橙 10YR7/2 内　灰黄褐　10YR5/2	羽状文 ていねいなミガキ	
5	８０４号土壙	深鉢Ⅱ-D		(41)			外　灰黄褐　10YR4/2 内　にぶい黄橙 10YR7/4	擦消縄文	
6	８０５号土壙	深鉢Ⅱ-D		(39)			外　にぶい黄橙 10YR6/3 内　にぶい褐　7.5YR5/3	ややていねいなミガキ	

土　器　第48図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
48-1	1101号土壙	深鉢Ⅴ-D	(159)	(178)	(132)		外　にぶい黄褐 7.5YR5/3 内　にぶい黄緑 10YR7/4	うすいカーボンミガキ	No19, 21 、包1771
2	1101号土壙	浅鉢Ⅴ-E	(234)	(136)	(240)		にぶい黄橙	カーボン付着 ていねいなミガキ	No20
3	1101号土壙	深鉢Ⅴ-D	(314)	(89)	(331)		外　褐色　7.5YR4/6 内　にぶい褐色 7.5YR5/4	カーボン付着 条痕，胎土に砂多い	No125, 126, 17
4	1101号土壙	深鉢Ⅴ-G	(184)	(97)			外　黒褐色 内　灰黄褐		No48, 49, 141, 479
5	1101号土壙	浅鉢		(27)		40	外　にぶい橙　7.5YR6/4 内　黒褐色　7.5YR2/2	光沢のあるていねいなミガキ	No29, 30, 31、包1665
6	1101号土壙								
7	1101号土壙	浅鉢Ⅴ-D		(36)			黒褐色　5YR2/1	光沢のあるていねいなミガキ	No154

土　器　第49図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
49-1	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(373)	(68)			灰黄褐色　10YR4/2	カーボン付着	M-3
2	ⅩⅡ区	浅鉢Ⅳ-A	(274)	(67)	(244)		外　黒褐色　7.5YR3/1 内　黒褐色　7.5YR3/2	全体にカーボン付着	包1361, 1362
3	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-A	144	(67)			黒褐色　7.5YR3/2	光沢あるミガキ	No182
4	ⅩⅠ区	深鉢Ⅳ-A	(260)	(57)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　灰黄　10YR4/2	光沢あるミガキ	包356
5	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(270)	(66)			外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　褐灰色　5YR4/1	光沢あるミガキ	M-35
6	ⅩⅡ区	浅鉢Ⅳ-A	(296)	(43)			外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　灰黄褐色　10YR5/2	光沢あるミガキ	包2952
7	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(230)	(75)	(214)		外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄褐　10YR5/3	カーボン付着	No169, 206

4、包含層からの出土土器

遺構以外で出土した縄文土器である。拓本で表した遺物については編集の都合上、別途に後半でまとめて掲げた。

浅鉢（第49～53図）

浅鉢は口縁部の形状により2種に分けられ、口縁部の文様帯の有無でさらに2種に細分できる。これから浅鉢を大別すると次の通りである。

胴部がわずかに外反してほぼ直線状に立ち上がり胴部で折れ、頚部のくびれがなく外弯する口縁部を付しここに文様帯を有するもの（49－1～50－6）。

同じく口縁部が無文で胴部に文様を有するもの（50－8）。

胴部が内弯して立ち上がり、頚部でくびれるもの（51－1～53－7）。

次いで各土器を通観してみよう。

49－1は、口縁部が直線状に外反して開き、外面には数条の沈線を施し、また口縁端部の内面に1条の沈線を有する。49－2は、口縁部は外弯し無文で胴部最大径の部位に2条の沈線を有する。

49－3～50－3は、外弯する口縁部をなし2条の凹線を有し端部は尖る。49－3、49－5、50－1、50－3には2カ所の凹点が、49－6には1カ所の凹点がみえる。

50－4～50－5は、口縁部の外弯が弱く、口縁端部が尖らないものである。前者は凹線が3本である。

50－6は、ミニチュアの土器で鳥井原式の浅鉢の祖形特徴を表現している。手捏ねで作り口縁端部はわずかに内に折れ沈線らしい文様が描かれる。

50－7は、直線状に開く口縁部のみの資料であるが大型の浅鉢であろう。口縁端部の上面にはごく浅く刻み目を施す。外面は、粗く横方向に条痕が残る。

50－8は、上げ底の底部をなし、胴部は直線状に開く。口縁部は外弯して開き端部は尖り、その内面には1条の沈線があり、胴部の最大径部位には曖昧な1条の沈線が巡る。

51－1は、波状口縁に近い山形突起を有する資料である。突起部分は内傾するが他の部分は外反する口縁部であり、2条の凹線を巡らす。

51－2は、直立する口縁端部に磨き込みによる2条の沈線を施す。

51－3は、口縁端部は短く直立し磨き込みによる2条の沈線を施す。

51－4は、短く外反する口縁端部の外面と内面に1条の沈線を施す。

51－5は、山形突起を有し、口縁端部はやや短く外反し磨き込みによる2条の沈線を施す。

51－6は、山形突起を有し、口縁端部は直立し磨き込みによる2条の沈線を施す。

51－7は、口縁端部は直立し磨き込みによる2条の沈線を施す。

52－1は、胴部に比べ短い口縁部を有し、口縁端部はわずかに内面に1条の沈線を巡らす。

52－2は、口縁端部は外反して開き先端は尖る。胴部の最大径には1条の沈線が巡る。

52－3は、口縁端部はやや外反して短く尖り、外面には1条の沈線が巡る。

52－4は、胴部の最大径で「く」の字に屈曲し、強く内傾する。口縁端部はやや外反して開き、外面には1条の沈線が巡る。

52－5～6は、丸底の浅鉢である。口縁端部は外反して開き、内外面には各1条の沈線が巡る。

52－7は、凹点の付く山形突起を有する小型の浅鉢である。口縁端部には2条の沈線を胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

52－8は、口縁部が端部にかけて著しく圧縮された器形の浅鉢である。口縁端部の内外面には各1条の沈線を巡らす。

52－9は、胴部での屈曲角が緩く、口縁部が立ち上がる器形の浅鉢である。口縁端部には内傾し山形突起があり2条の沈線を巡らす。

53－1は、口縁端部は外反して開き、外面には2条の沈線を巡らす。口縁端部には弱い凹点のある山形突起を有する。

53－2は、口縁端部は外反して内弯ぎみに開き、外面には2条の沈線を巡らす。口縁端部には山形突起および凹点を有する。

53－3は、口縁端部は外反して開き、外面には2条の沈線を巡らす。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

53－4は、著しく反り返った口縁端部を有する浅鉢である。外面には2条の沈線を巡らす。山形突起ははとんど省略され、わずかに沈線の集約部分が山形に描かれている。

53－5は、口縁端部は外反して開き、先端は尖る。外面には磨き込みによる2条の沈線を巡らす。

53－6は、口縁端部は短く、外反して開き、外面には1条の沈線を巡らす。また胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

53－7は、胴部での屈曲角が緩く、口縁部が立ち上がる器形の浅鉢である。口縁端部には直立し山形突起があり2条の沈線を有する。

53－8は、口縁部のみの資料である。外反して開き端部の内面には1条の沈線を巡らす。また胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

53－9は、胴部のみの資料である。大型の浅鉢である。

深鉢（第54～65図）

口縁部に文様帯を有するものと、そうでないものに分けられる。

前者は54－1～62－2、64－6および65－6であり、後者は63－1～64－5、65－1～65－4および65－7～65－11である。

各遺物の概要は次の通りである。

54－1～3は、内傾する口縁部を有する深鉢である。いずれも磨き込みによる3条の沈線を有する。

54－3は著しく内傾し先端が尖る口縁部である。

54－4は、やや外反して開きぎみの口縁部である。外面に3条の沈線を有する。

54－5は、内傾する直線状の口縁部を有する深鉢である。外面に3条の凹線を有する。胴部は最大径部位で深く「く」の字に折れ込む。

55－1は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる3条の沈線を有する。

55－2は、内傾する短い口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる2条の沈線を有し先端は尖る。

55－3は、わずかに内傾する口縁部である。外面には磨き込みによる3条の沈線を有し先端は尖る。

55－4は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる3条の沈線を有する。

55－5は、直立する口縁部を有する深鉢である。外面には3条の沈線を有する。胴部の最大径部位は緩く屈曲し外面に1条の沈線を巡らす。

56－1は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には強い磨き込みによる凹線を有する。胴部の最大径部位は強く屈曲し、丸みを持つやや肩の張る器形である。器壁は薄い。

56－2は、強く内傾する直線状の口縁部を有する深鉢である。外面には強い磨き込みによる凹線を有し、楕円形の凹点を2カ所有する。

56－3は、平底の底部から内弯しつつ胴部は立ち上がり、口縁部は直立する。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

57－1は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には強い磨き込みによる3条の沈線を有する。口唇の内面にも曖昧な沈線が1条認められる。

57－2は、やや外反ぎみの口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる沈線を有する。口縁部の外面下端は若干突出を見せる。胴部の最大径部位の屈曲は緩やかである。
器壁は薄い。

57－3は、直立する口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる2条の沈線を有する。
縁部の外面下端は若干突出を見せる。

57－4は、直立する口縁部を有する胴部の中位以上を残す深鉢である。外面には磨き込みによる2条の沈線を有する。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

58－1は、わずかに内傾する口縁部を有する大型の深鉢である。外面には磨き込みによる3条の浅い沈線を有する。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。横方向の条痕の上半に縦方向の磨きを施す。

58－2は、口縁部の上半と底部を欠く大型の深鉢の資料である。全面に条痕が残り、下位は特に荒い。

59－1は、直立する口縁部を有する深鉢である。外面には磨き込みによる2条の沈線を有する。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

59－2は、内傾する短い口縁部を有する深鉢である。外面には細い2条の沈線を有する。

59－3は、内傾する短い口縁部を有する深鉢である。口縁部の下端は突出する。外面には2条の沈線を有する。

59－4は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。先端は尖り、文様を欠く。
線を有する。

59－5は、やや内傾する口縁部を有する深鉢である。文様を欠く。外面には口唇に近い部分に1条の沈線を有する。口縁と頚部の境界は稜線が曖昧である。

59－6は、直立する短い口縁部を有する小型の深鉢である。文様を欠き、凹線状の窪みが巡る。

59－7は、直立する口縁部を有する小型の深鉢である。文様帯は雑に1条の沈線を巡らす。

59－8は、直立する口縁部を有する小型の深鉢である。上端は尖る。外面には3条の沈線を巡らす。

60－1は、内傾する口縁部を有する大型の深鉢である。外面には2条の沈線を巡らす。

60－2は、内傾する短い口縁2条の沈線を巡らす。胴部の最大径は鋭く屈曲する。

60－3は、わずかに内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には2条の沈線を巡らす。

60－4は、強く内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には不明瞭な3条の沈線を巡らす。

60－5は、わずかに内傾する口縁部を有する深鉢である。外面にはくっきりした3条の沈線を巡らす。

61－1は、わずかに内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には2条の沈線を巡らし、下端はわずかに突出する。

61－2は、わずかに内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には3条の沈線を巡らす。

61－3は、わずかに内傾するやや短い口縁部を有する深鉢である。外面には2条の沈線を巡らす。

61－4は、内傾するやや長い口縁部を有する大型の深鉢である。文様を欠く。

61－5は、内傾する口縁部を有する深鉢である。先端はやや尖る。外面には明瞭な3条の沈線を巡らす。

61－6は、内傾する口縁部を有する深鉢である。外面には雑な3条の沈線を巡らす。
文様を欠く。

62－1は、口縁部は屈曲がなく、わずかに外面の下端に稜線をなしつつもほぼ口縁部と同様に直立する。胴部も屈曲が著しく弱く全体に抑揚のない器形である。器壁は薄く、口縁部の外面には3条の不明瞭な沈線を有する。

62－2は、内傾する短い口縁部を有する深鉢である。先端はやや尖り、下端は突出して尖る。外面には明瞭な2条の沈線を巡らす。

62－3は、口縁部と胴部の下半を欠く深鉢である。胴部の最大径部位に1条の沈線を巡らす。
は明瞭な2条の沈線を巡らす。

62－4は、文様帯のない深鉢である。わずかに口縁部の外面に稜線が認められ、口唇部は尖る。器面は荒く調整がなされ粘土紐を積んだ成形痕が窺える。

63－1は、頚部がくびれ文様帯のない深鉢である。口唇部の内面に1条の沈線を巡らす。

63－2～3は、口縁部に文様帯を欠き頚部がくびれる深鉢である。口縁部は外弯しつつ開く。後者は胴部の最大径部位に1条の沈線を巡らす。

63－4～5は、大型の、口縁部に文様帯を欠き頚部がくびれる深鉢である。後者は口縁部が直立して伸びる器形である。

64－1～2は、口縁部に文様帯を欠き頚部がくびれる深鉢である。後者は口縁部がやや直線状に開き、先端は平坦である。

64－3は、胴部のみの資料である。胴部の最大径部位に1条の沈線を巡らす大型の深鉢である。

64－4～5は、口縁部に文様帯を欠く深鉢である。いずれも口縁部の破片である。前者は先端が尖る。

64－6は、小型の深鉢である。器形は、口縁部に文様帯を欠く深鉢に類似し、口唇部に荒く沈線状の文様を付ける。胴部の最大径部位の屈曲は深く外面に鋭い稜線を有する。

65－1～4は、口縁部に文様帯を欠く小型の深鉢

である。前２者は上端が反り返り尖る。65－２は胴部の最大径部位に２条の沈線が巡る。

65－７～11は、口縁部に文様帯を欠く小型の深鉢である。多くは胴部の最大径部位に曖昧な１条の沈線を巡らす。

65－５は、器形の詳らかでない土器の胴部である。１ないし２条の沈線を巡らし、これに弧状の沈線を付す。

65－６は、尖底の小型の深鉢である。体部は底部から直線状に外反して開き、外面にわずかな稜線をなしつつ区画され口縁部をなす。口縁部はわずかに外弯がみられ、外面には４条の沈線を巡らし、上下２点の凹点が90度ごとに付す。その下位には斜方向の羽状文が巡り、これの90度ごとに４か所にはさらに羽状文が垂れ下がる。

65－12は、碗形土器の口縁部である。外面にわずかな稜線をなし口縁部を形成する。文様はみられない。

66－１は、碗形土器である。浅く立ち上がり、器高の高い位置でわずかに内弯し口縁に到る。内弯する部位の外面には微かに稜線が認められる。

66－２、66－７は、碗形土器である。口縁部の上端に１条の沈線を巡らす。前者は、器高が低く、後者は、丸底の縁辺にわずかに稜線をなし体部は立ち上がる。器高が高い。

66－３は、碗形土器である。体部の高い位置にわずかに外面に稜線で区画し口縁部らしき部分が形成される。口縁部の上端は尖る。

66－４は、碗形土器である。器高が低く、平底をなし体部は立ち上がり、口縁部はわずかに窪みを巡らし先端はやや開き尖る。

66－５は、手捏ねの皿状の土器である。浅い碗形土器かあるいは未製品の土器の底部であろう。内外面には指痕が残る。

66－８は、小型の深鉢の器形であるが口縁部を欠く。上げ底の底部をなし、胴部の最大径部位で屈曲するが接合面で擬口縁のまま制作をやめた碗形土器である。

66－６、66－９は、楕円形の碗形土器とされる土器である。前者は完形で、底部は分厚く、やや不安定なレンズ状の底面をなす。体部は底部の縁辺よりやや内側からわずかに外反して直線状に開く。底部の側面には１条の沈線を巡らす。底面は、良く磨かれ光沢がある。後者は、破片である。底面は平坦である。これらの土器は、ここでは碗形土器に分類したが、底面が磨かれていること、底面の座りが悪いことから、伏せられて器台として用いられた可能性がある。

浅鉢

頚部のくびれがなく胴部の最大径で屈曲し外反して開く口縁部をなす器形（67－１～68－14、76－１、80－３）は、凹線に羽状文を有するものと、凹線のみのものに細分される。

前者は、67－１、67－３、67－６、68－５、68－10～68－13である。後者はこれ以外の遺物である。

各土器を概説すると次の通りである。

67－１は、綾杉状の羽状文を有する２条の凹線を巡らし口縁部の上端は尖る。

67－２は、２条の凹線を巡らし口縁部の上端は鈍く尖る。

67－３は、右下がりの羽状文を有する３条の凹線を巡らし口縁部の上端は平坦である。補修孔がある。

67－４は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は狭い平坦をなす。

67－５は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は尖る。

67－６は、左下がりの羽状文を有する３条の凹線を巡らし口縁部の上端は尖る。

67－７は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は平坦である。山形突起の部分であり、凹線の稜がＸ字状をなす。

67－８は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は尖る。凹線の稜上に円形の凹点を有する。

67－９は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は平坦である。

67－10は、３条の凹線を巡らし口縁部の上端は平坦である。凹線の稜上に２カ所の楕円形の凹点を有する。

67－11は、２条の凹線を巡らし口縁部の上端は平坦である。

67－12は、小型の浅鉢である。口縁部は短く伸び、２条の凹線を巡らし上端は平坦である。

68－１は、２条の鋭い凹線を巡らし、さらに水平２連の円形の凹点を有する。口縁の上端は狭く平坦である。

68－２～４は、２条の凹線を巡らし、口縁部の上端は尖る。

68－５は、右下がりの羽状文を有する３条の凹線を巡らし、口縁部の上端は尖る。

68－６は、３条の凹線を巡らし、口縁部の上端はやや尖る。

68－７は、２条の凹線を巡らし、口縁部の上端はやや尖る。凹線の稜上に楕円形の１カ所の凹点を有する。

68－８は、綾杉状の羽状文を付す３条の凹線を巡らし、さらに円形の凹点を４カ所山形に重ねて付す。口縁端部の内面には１条の沈線を巡らす。上端は尖る。

68－９は、２条の凹線を巡らし、口縁端部の内面には１条の沈線を巡らす。口縁の上端は尖る。

68－10は、右下がりの羽状文を付す３条の凹線を巡らし、口縁の上端は尖る。

68－11は、右下がりの羽状文を付す３条の凹線を巡らし、口縁の上端は狭く平坦である。

68－12は、左下がりと綾杉状の羽状文を付す３条の凹線を巡らし、口縁の上端は平坦である。

68－13は、右下がりの羽状文を付す２条の沈線を口縁の基部に巡らし、また口縁端部の上端内面には１条の沈線を巡らす。口縁の上端は尖る。

68－14は、楕円形の凹点を１カ所重ねた２条の凹線を巡らし、口縁の上端は尖る。

76－１は、三万田式の浅鉢である。外反して開く口縁部である。基部近くに２条の凹線に右下がりの羽状文を重ね、さらに縦に２連の凹点を付す。口縁端部の内面には１条の沈線を巡らす。

80－３は、直立する口縁部である。２条の凹線を有し、先端は尖る。

頚部がくびれる浅鉢の類では、山形突起を有するもの、同じく持たないものに細分できる。以下、各遺物を通観する。

69－１は、山形突起をなし、内傾して尖る口縁部に２条の凹線を有し、胴部の最大径部位には１条の沈線を巡らし、さらに凹点を１カ所重ねる。

69－２は、外反して先端が尖る口縁部に２条の凹線を有し、さらに凹点を１カ所重ねる。胴部の最大径部位には凹点を１カ所付し、１条の沈線を巡らす。

69－３は、山形突起部分のみの口縁部の資料である。２条の凹線があり、うち１条が山形をなす。口縁部は内傾し先端が尖る。

69－４は、山形突起部分のみの口縁部の資料である。２条の凹線があり、うち１条が山形をなしさらに凹点を１カ所重ねる。先端は平坦である。

69－５は、低い山形突起を有する口縁部の資料である。１条の凹線があり、山形突起の部分に縦に２連の凹点を付す。

69－６は、山形突起を有する内傾した口縁部の資料である。２条の凹線があり、それぞれ山形をなす。分に縦に２連の凹点を付す。先端は平坦である。

69－７は、内傾した口縁部の資料である。２条の凹線があり、先端は平坦で、下端は突出して尖る。

69－８は、低い山形突起をなし細い口縁部の内外に各２条の沈線を巡し、外面には凹点を１カ所付す。胴部の最大径部位には１条の沈線を巡らし、水平２連の凹点を添える。

69－９は、内傾する短い口縁部の外面に２条の沈線が巡る。胴部の最大径部位には１条の沈線を巡らし、口縁部の半ばに補修孔を１カ所有する。先端は平坦である。

69－10は、直立する短い口縁部の外面に２条の凹線が巡る。胴部の最大径部位には１条の沈線を巡はす。

70－１～２は、山形突起を有する直立する短い口縁部の外面に２条の沈線が巡る。胴部の最大径部位には１条の沈線を巡らす。いずれも凹点を１カ所付す。

70－３～４は、低い山形突起を有し、直立する短い口縁部の外面に１条の沈線が巡る。前者は、凹点を１カ所付す。

胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らし、水平2連の凹点を添える。

69－9は、内傾する短い口縁部の外面に2条の沈線が巡る。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らし、口縁部の半ばに補修孔を1カ所有する。先端は平坦である。

69－10は、直立する短い口縁部の外面に2条の凹線が巡る。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡はす。

70－1～2は、山形突起を有する直立する短い口縁部の外面に2条の沈線が巡る。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。いずれも凹点を1カ所付す。

70－3～4は、低い山形突起を有し、直立する短い口縁部の外面に1条の沈線が巡る。前者は、凹点を1カ所付す。

70－5は、直立する口縁部の外面に磨き込まれた2条の沈線が巡る。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。先端は丸みのある平坦である。

70－6は、内傾する短い口縁部の外面に磨き込まれた2条の沈線が巡る。先端は尖る。

70－7は、内傾する短い口縁部の外面に2条の沈線が巡る。先端は平坦である。

70－8は、山形突起の部分である。直立する短い口縁部の外面に2条の沈線が巡る。先端は鈍く尖る。

70－9は、やや内傾する短い口縁部の外面に2条の沈線が巡る。先端は平坦である。

70－10は、山形突起の部分である。直立する口縁部の外面に2条の沈線が巡る。凹点が縦に2カ所あり、先端は平坦である。

70－11は、わずかに内に折れる小さい口縁部をなし内面に1条の沈線を巡らす。

70－12は、外反する口縁部の外面に1条の浅い沈線を巡らす。山形突起はなく沈線のみが山形をなし口唇にわずかな窪みを有する。

71－1は、内傾する口縁部の外面に2条の沈線を巡らす。山形突起の部分には1カ所の凹点を付す。先端は平坦である。

71－2は、強く内傾する口縁部の外面に2条の凹線を巡らす。先端は平坦で、下端は突出して尖る。

71－3は、直立する口縁部の外面に2条の凹線を巡らす。先端は平坦である。

71－4は、直立する短い口縁部の外面に2条の沈線を巡らす。先端は平坦である。山形突起には凹点を1カ所付す。

71－5は、山形突起のみの資料である。内傾する口縁部の外面に2条の沈線が山形をなし、その下位に1カ所凹点を付す。

71－6～8は、山形突起のみの資料である。口縁部の外面に2条の沈線が山形をなし、さらに1カ所凹点を付す。いずれも上端は平坦である。

71－9は、山形突起のみの資料である。直立する口縁部の外面に1条の沈線が山形をなす。

71－10～11は、低い山形突起のみの資料である。口縁部の外面に1条が巡り、山形の頂部には刻み目が施され、後者は凹点が1カ所ある。

72－1は、短く直立する口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。先端は平坦である。

72－2は、短く外反する口縁部の外面に2条の凹線を巡らす。先端は尖る。

72－3は、短く外反する口縁部の外面に2条の沈線を巡らす。低い山形突起があり凹点1カ所を付す。

72－4は、短く直立する口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。先端は平坦である。凹点1カ所を付す。

72－5は、やや外反する口縁部の外面に2条の沈線を巡らす。低い山形突起があり、凹点を1カ所付す。先端は尖る。

72－6は、短く直立する口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。先端は尖り、下端は突出する。

72－7は、短く外傾する口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。先端は丸い。

72－8は、短く外傾する口縁部の内外面に各1条の沈線を巡らす。先端は丸い。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

72－9は、短く直立する口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。先端は尖る。

72－10は、直立する口縁部の外面に2条の凹線を巡らす。先端は鈍く尖る。胴部の最大径部位には1条の沈線を巡らす。

72－11は、短く内傾する口縁部の外面に2条の凹線を巡らす。先端は平坦である。

73－1は、口縁部は強く屈曲して短く、口縁部は

73－8は、口縁部の屈曲は退化しわずかに凹線で表現する。口縁部の文様帯が退化して短く、内外面に各1条の沈線を巡らす。山形突起の部分は口唇に凹点を付す。

73－9は、口縁部が外反して開き、内外面の各1条の沈線で区画され貧弱な口縁部を形成する。山形突起は低く凹点を1カ所付す。

73－10は、口縁部が胴部の最大径部位にて内に折れ、口縁部は強く外反して開き、その内面には1条の沈線が巡る。山形突起は低く凹点を1カ所付す。

73－11は、口縁部が胴部の最大径部位にて強く内に折れ込み、口縁部は内に窪みをなしつ外面に1条の沈線を巡らし、先端は尖る。

73－12は、ほとんど碗形をなす器形である。器高の上端にわずかに折れ込み、口縁部をなす。先端は尖る。

73－13は、体部の高い位置で内に折れ口縁部を形成する。口縁端部の内面には1条の沈線を巡らす。

76－4は、直立する口縁部に3条の沈線を有する。先端は尖る。補修孔が1カ所ある。

76－5は、ほとんど碗形の土器である。わずかに山形突起をなし、2条の沈線が内傾する口縁部に巡る。

80－1は、体部の高い位置で内に深く折れ込み短い口縁部を形成する。

深鉢（74－1～75－9）

74－1は、口縁部がわずかに外反して開き、先端はやや尖る。外面には磨き込まれた3条の沈線に上下2連の凹点を付す。

74－2は、口縁部が直立し、先端は切出し状に尖る。外面に磨き込まれた3条の沈線を有する。

74－3は、口縁部がやや内傾する。先端は平坦である。外面に2条の凹線を有する。

74－4は、口縁部はやや内傾する。先端は平坦で分厚い。外面には2条の沈線を有する。

74－5は、口縁部が直立し、その基部の屈曲は著しく弱い。先端は平坦で、外面には4条の沈線を有する。

74－6は、口縁部が著しく内傾して直立し、その先端は平坦である。外面には3条の凹線に1カ所の凹点を重ねる。

74－7は、口縁部が著しく内傾し短く直立する。その先端は平坦である。外面には3条の凹線に1カ所の凹点を重ねる。

74－8は、口縁部はわずかに内傾する。その先端は平坦である。外面には3条の沈線を有する。

74－9は、口縁部がわずかに内傾する。その先端は平坦である。外面には4条の細く粗雑な沈線を有する。

75－1は、口縁部が内傾し、その先端は平坦である。外面には4条の沈線を有する。

75－2は、口縁部が直立し、その先端はやや平坦である。外面に繊細な3条の沈線を有する。

75－3は、口縁部が内傾し、その先端は丸い。外面に2条の沈線を有する。

75－4は、短い口縁部が直立し、その先端は丸い。内外面に各1条の沈線を有する。

75－5は、口縁部が短く内傾し、その先端は平坦である。外面に2条の沈線を有する。

75－6は、口縁部がわずかに外弯しつつ直立する。その先端は尖る。外面には2条の凹線を有する。

75－7は、口縁部がわずかに外弯しつつ直立する。その先端は尖る。外面には2条の凹線を有する。

75－8は、口縁部が内傾し、その先端はやや尖る。外面には2条の凹線に1カ所の凹点を重ねる。

75－9は、口縁部がやや内傾し、その先端は尖る。外面には2条の磨き込みによる太い沈線を有する。

76－2は、口縁に文様帯がない深鉢である。口縁端部は外弯し、胴部の最大径部位に1条の沈線を巡らす。

79－1は、口縁部が内傾し、その先端は尖る。外面には2条の凹線を有する。

79－2は、口縁部が直立し、その先端は平坦である。外面には2条の沈線を有し、山形突起をなす。

79－4は、口縁部が内傾し、その先端は平坦である。外面には2条の凹線を有し、口縁部の下端は鋭い突出をなす。

80－5は、口縁部が内傾し、その先端は尖る。外面には3条の沈線を有し、口縁部の下端は鋭い突出

をなす。

その他の土器片

76－3は、胴部の破片である。よく磨かれ、強く内に弯曲しており、偏平に張る注口土器の胴部であろう。頚部に2条の沈線を巡らす。

76－6は、深鉢の胴部の破片である。補修孔が表裏の双方向から穿孔している。

76－7は、同じく深鉢の胴部の破片である。補修孔がみられる。

76－8は、箱形に胴を張る注口土器か深鉢の胴部最大径部位の破片である。2条の凹線とこれをはさみ2条の綾杉状の羽状文を稜線の上に付す。

77－1は、西平式の擦消縄文を有する土器である。内弯する胴部をなし、その上端に、刺突文を配した6条の沈線を巡らす。口縁部は欠くが波状口縁であろう。

77－2は、深鉢の肩部あるいは頚部であろう。沈線で区画された擦消縄文を有する。

77－3は、深鉢の肩部であろう。沈線で区画された擦消縄文を有する。

77－4、10、11、80－2は、深鉢の頚部である。平行沈線に大きなX字状の沈線を重ねる。

77－5は、深鉢の口縁端部である。縦方向の沈線で区画し沈線を2条横位に描き、端部に対向するX字状文を重ねる。

77－6は、内傾する口縁端部である。波状部分で2条の沈線で区画し擦消縄文を施す。

77－7は、深鉢の口縁部である。間に斜方向の刺突文を配する2条の沈線の沈線を2組重ね、その下位に弓状の沈線で区画された擦消縄文を施す。

77－8は、外反して開く小さい口縁部である。2条の沈線で区画し擦消縄文を施す。

77－9は、深鉢の口縁部である。2条の沈線の下位に斜方向の刺突文を配する。

77－12は、深鉢の頚部である。3条の沈線と斜方向の刺突文を配する。

78－1は、深鉢の口縁部である。やや内傾する口縁部の基部に近い位置に2条の沈線と綾杉文を有する。

78－2は、器種不明の土器片である。胴部の最大径部位とその下半であろう。2条の凹線と右傾する羽状文を有する。

78－3、10は、浅鉢の頚部である。大柄な弧状の連続する沈線が巡る。

78－4は、小型の碗形の深鉢である。胴部は低い位置で丸みをなし、わずかに内弯しつつ直立して立ち上がり、口縁端部はやや内傾して尖る。胴部の中央で肥厚する。外面にはいわゆる滋賀里式に特徴的な木の葉紋を有する。上下に数条の沈線を巡らし、この間に上下双方から対向して連続する弧状の沈線を施す。

78－5は、深鉢の底部である。水平な底面をなし板目圧痕が残る。

78－6は、深鉢あるいは注口土器の胴部の最大径部位であろう。2条の凹線と綾杉文を有する。
の沈線と綾杉文を有する。

78－7は、器種不明の土器片である。T字形に沈線を施し、これに重ねて羽状文を有する。

78－8は、外弯して開く浅鉢の口縁部である。口縁端部の内面に1条の沈線を巡らす。外面には、2条の凹線が巡り、縦に3列の凹点を付す。

78－9は、外反して直線状に開く浅鉢の口縁部である。口縁の基部には水平に2連の小さい穿孔を有する。

78－11は、深鉢の肩部である。4条を有する。口縁の基部には水平に2連の小さい穿孔を有する。

78－12は、深鉢の肩部である。編み目状の細い沈線を有する。

78－13は、器種不明の土器片である。斜交する細い沈線を有する。

78－14は、浅鉢の底部に近い胴部である。いわゆる滋賀里式の特徴である文様を有する。きわめて繊細な連続する弧状文を巡らす。

79－5、6は、刻目突帯を有する深鉢である。断面が三角形の突帯を外面に張り付ける。前者の外面には荒い条痕を有する。後者は口縁端部にも刻み目文を有する。

80－2は、深鉢の肩部である。平行沈線にX字形の沈線文を重ねて描く。

81－1、2は、深鉢の胴部である。最大径の部位は丸みをなして屈曲し、1条の沈線を巡らす。

81－3は、浅鉢の口縁部である。口縁の基部に近い部位に2条の沈線を巡らし、その下位には右傾する羽状文を有する。

81－4は、浅鉢の口縁部である。口縁端部の内外面には各1条の沈線を巡らす。口縁の基部に近い部位には、対向する半弓状の沈線を配する1条の沈線とその下位に右傾する羽状文を有する。

底部のみの資料は82－1～83－21である。底部の形態は、上げ底と平底の2種あり、前者は天井部が平坦なものと、丸みのあるものに細分される。

ミニチュア土器（第84図）

84－1は、Ⅸ区で出土した頚部のくびれた口縁部を有する浅鉢である。口縁部の外面に1条の沈線を巡らす。

84－2は、XⅢ区で出土した文様帯のない深鉢である。口縁部は外弯して端部は尖る。

84－3は、XⅢ区で出土した頚部のくびれた深鉢である。口縁部は短く外反する。かなり粗雑な作りである。

84－5は、XⅢ区で出土した胴部の最大径部位で直立する口縁部をなす、頚部のくびれのない浅鉢である。2条の凹線を巡らす。

84－6は、Ⅷ区で出土した捏鉢形の浅鉢である。器壁は薄く、口縁端部は尖る。

84－7は、XⅢ区で出土した頚部がくびれ口縁部の屈曲する浅鉢である。丁寧に作られ口縁部は直立し1条の沈線を巡らす。

84－8は、XⅢ区で出土した口縁部に文様帯のない深鉢である。やや粗製であり、実用され外面にカーボンが付着する。口縁部は直立し端部はわずかに外弯する。

84－9は、XⅢ区で出土した口縁部に文様帯のない深鉢である。口縁部は外面に縦方向の著しい磨きの痕跡が残る。口縁端部はわずかに外弯する。わずかにカーボンが付着する。

84－10は、XⅢ区で出土した口縁部に文様帯のない深鉢である。丁寧な作りである。口縁端部はわずかに外弯し先端は尖る。わずかにカーボンが付着する。

84－11は、XⅢ区で出土した深鉢の胴部の最大径部位のみの資料である。沈線らしい表現が認められる。器壁は分厚い。

84－12は、XⅢ区で出土した口縁部に文様帯のない深鉢である。口縁端部はわずかに外弯し先端は尖る。胴部は表面剝離が著しく火を受けた可能性がある。

84－13は、Ⅷ区で出土した口縁部に文様帯のない深鉢である。丸底をなし胴部は丸みのある縁辺から内弯しつつ立ち上がる。口縁端部はわずかに内弯し先端は尖り1条の沈線を巡らす。内外面はよく磨く。

84－14は、XⅢ区で出土した浅鉢の底部である。上げ底をなし、縁辺から直線状に外反して開く。丁寧に作られ内外面はよく磨く。

84－15は、Ⅷ区で出土した鉢の底部である。わずかに上げ底をなし、縁辺から直線状に外反して立ち上がる。

84－16は、XⅢ区で出土した碗形の浅鉢である。口縁端部は平坦でややうねりがある。
外反して立ち上がる。

84－17は、Ⅷ区で出土した浅鉢である。体部は直線状に低く立ち上がり開く。口縁部はわずかに文様帯をなし、沈線状の擦痕がある。丁寧に作られ内外面はよく磨く。

84－18は、XⅢ区で出土した碗形の浅鉢である。体部は内弯して立ち上がり、口縁端部は尖る。外面は粗雑で成形の時の粘土紐のあとが残り、内面は丁寧に磨かれる。

84－19は、Ⅷ区で出土した浅鉢である。底部は上げ底をなし、低く胴部は立ち上がる。外面はよく磨く。

注口土器（第85～86図）

85－1は、XⅢ区で出土した注口部である。わずかに下に反り、上斜方向に開口する。断面は円形である。先端は下位が尖る。内面にはベンガラが付着する。

85－2は、表面採集した注口部である。直線状に伸び、先端はわずかに上斜方向に開口する。断面は円形である。外面は縦方向に磨く。

85－3は、XⅡ区で出土した注口部である。直線状に伸び、先端はわずかに上斜方向に開口する。断面は楕円形である。外面は縦方向に磨き、注口基部の下面には沈線で弓状の文様を描く。

85－4は、XⅢ区で出土した短い注口部である。直線状に伸び、先端は平坦な開口部であり断面は円形である。

85－5は、表面採集した注口部である。わずかに上に反り、先端はわずかに上斜方向に開口し、断面は円形である。外面は縦方向に磨く。

85－6は、表面採集した注口部である。わずかに下に反る。先端はわずかに下斜方向に開口し、断面は円形である。外面は縦方向に磨く。

85－7は、XⅢ区で出土したやや小さい注口部である。わずかに下に反り、先端はわずかに下斜方向に開口し、断面は円形である。外面は縦方向に磨く。

85－8は、Ⅷ区で出土した長大な注口部である。下に反り、先端は上斜方向に開口し、断面は円形である。外面は縦方向に磨く。

86－1は、X区で出土した注口土器の胴部である。箱形に突出する胴部の最大径部位には3条の凹線を有し、縦2連の凹点を付す。

86－2は、Ⅷ区で出土した注口土器の胴部上半である。胴部の最大径部位は箱形に突出し、稜線の上面に2条の磨き込まれた沈線を有する。

86－3は、XⅢ区で出土した注口土器の肩部である。階段状に凹線が5条あり、最上の凹線にはわずかに羽状文が重なる。

86－4は、Ⅸ区で出土した注口土器か異形土器の口縁部でろう。口縁部は内弯し袋状を呈する。外面には4条の階段状に凹線を有する。

86－5は、Ⅷ区で出土した注口土器の胴部である。上げ底の底部から立ち上がり、口縁部は直立し6条の凹線が巡る。凹線間の稜線上には円形あるいは半円形の刺突文を付す。

86－6は、Ⅷ区で出土した注口土器の胴部である。底部の縁辺からやや外傾して直立する。

高杯形土器（第87図）

87－1～4は、高杯形土器である。87－1～2は、小型の高杯形土器の脚部である。前者は、やや粗製であり、内部が中空で、わずかに透かし穴が窺える。後者は、中位に円形の透かし穴を有し、杯部の基部には断面が三角形の突帯を巡らす。脚部下端は裾の張り出しの剝離した接着痕が残る。

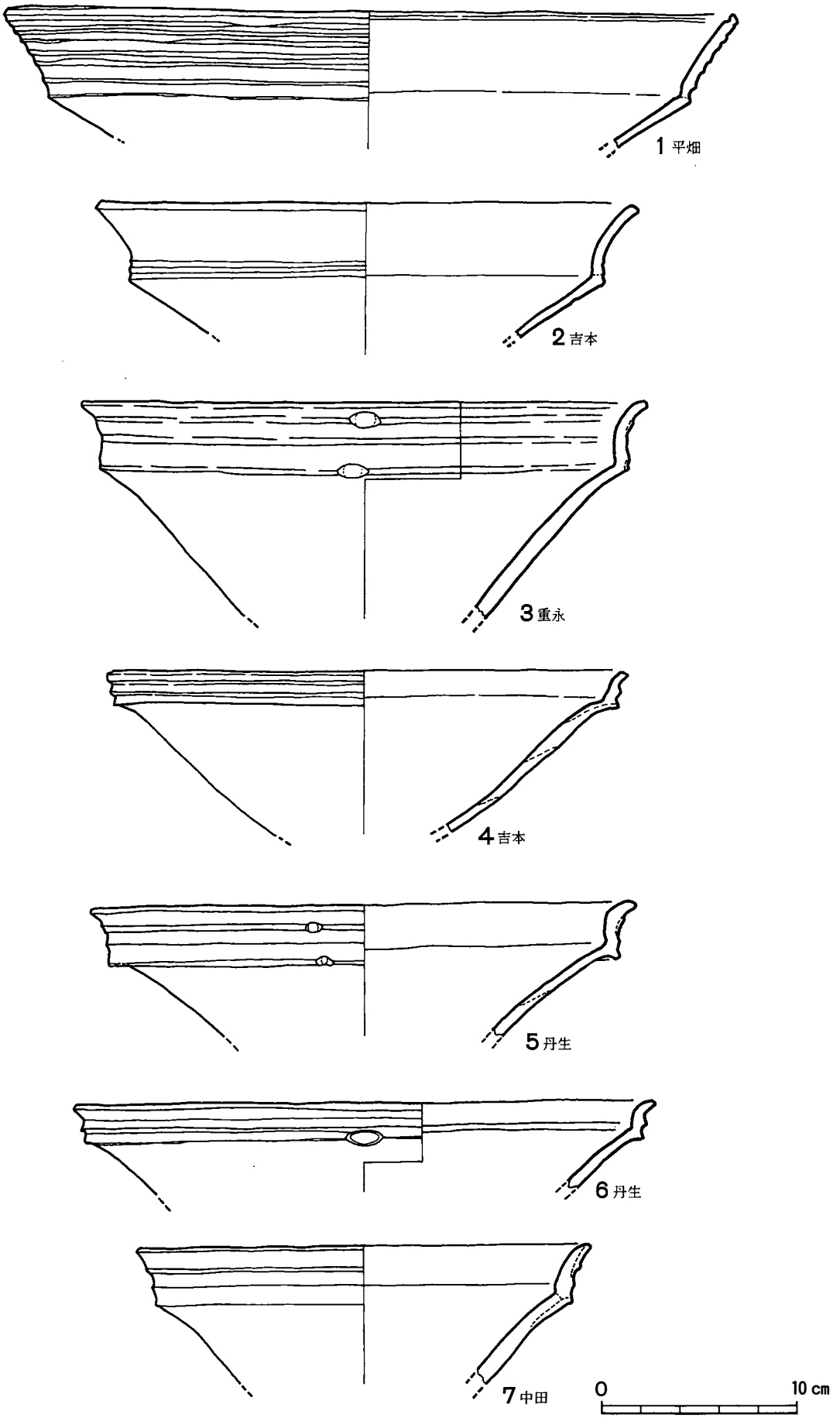
87－3は、高杯形土器の波状をなす口縁部の一部である。外面には綾杉状の羽状文を内面には口縁端部に1条の沈線を巡らす。

87－4は、大型の高杯形土器の脚部である。下端は縁辺が張り出し端部は丸みがある。脚部の中央には箆先で鋭くX字状に文様を彫り込み、交点はさらに穿孔して透かし穴とする。

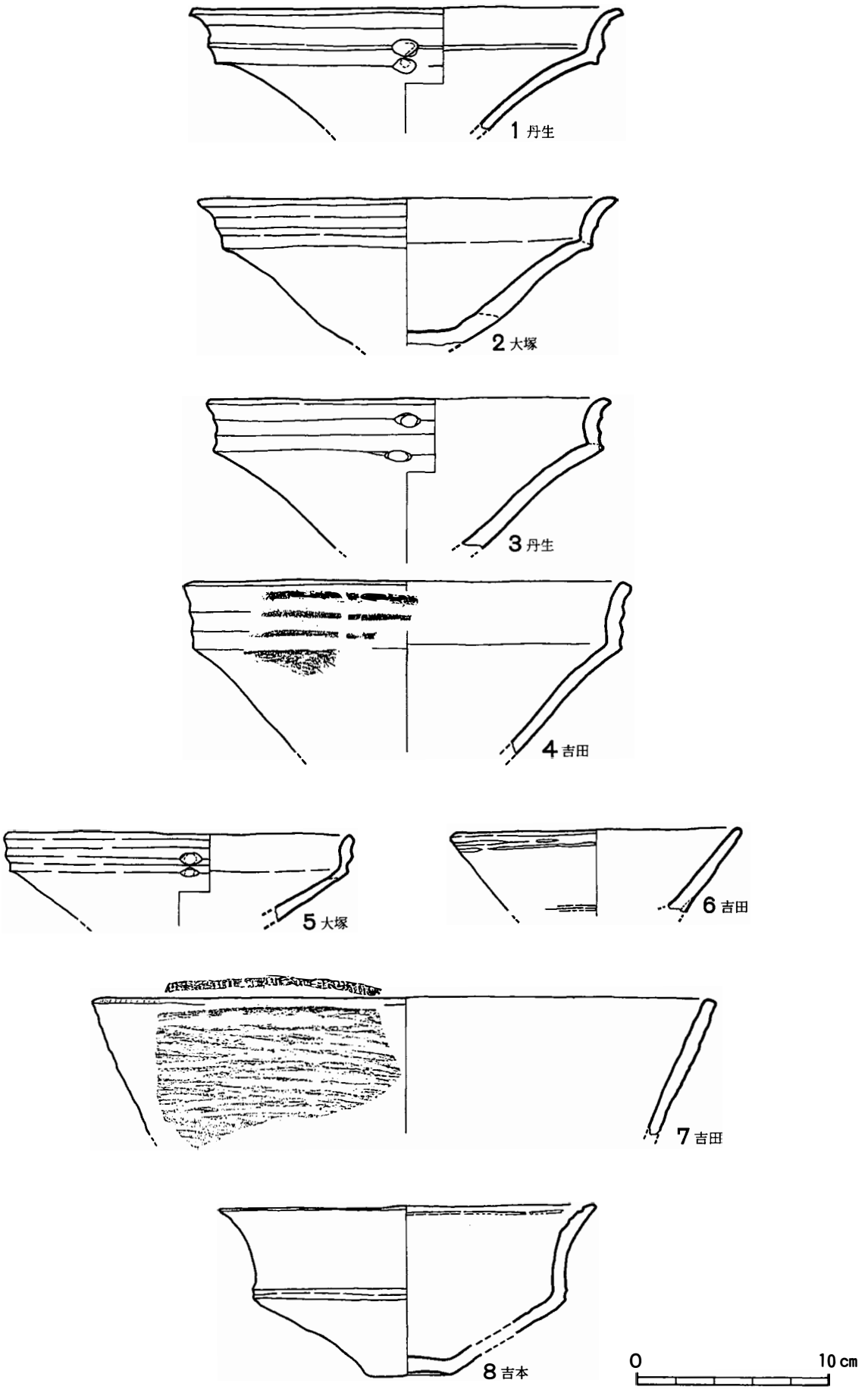
異形土器（第87図）

87－5～8は、土器の橋状把手であると思われるが、本体の器形および接合の有り方は詳らかでない。87－5は、断面は円形で丁寧に作られ、背面に羽状文に挟まれた沈線を有する。87－6は、断面は半円形で、平坦な背面には荒い羽状文と沈線を有する。87－7は、断面は長方形で、磨き込まれた3条の沈線を有する。87－8は、断面が楕円形をなし、粗製で無文である。

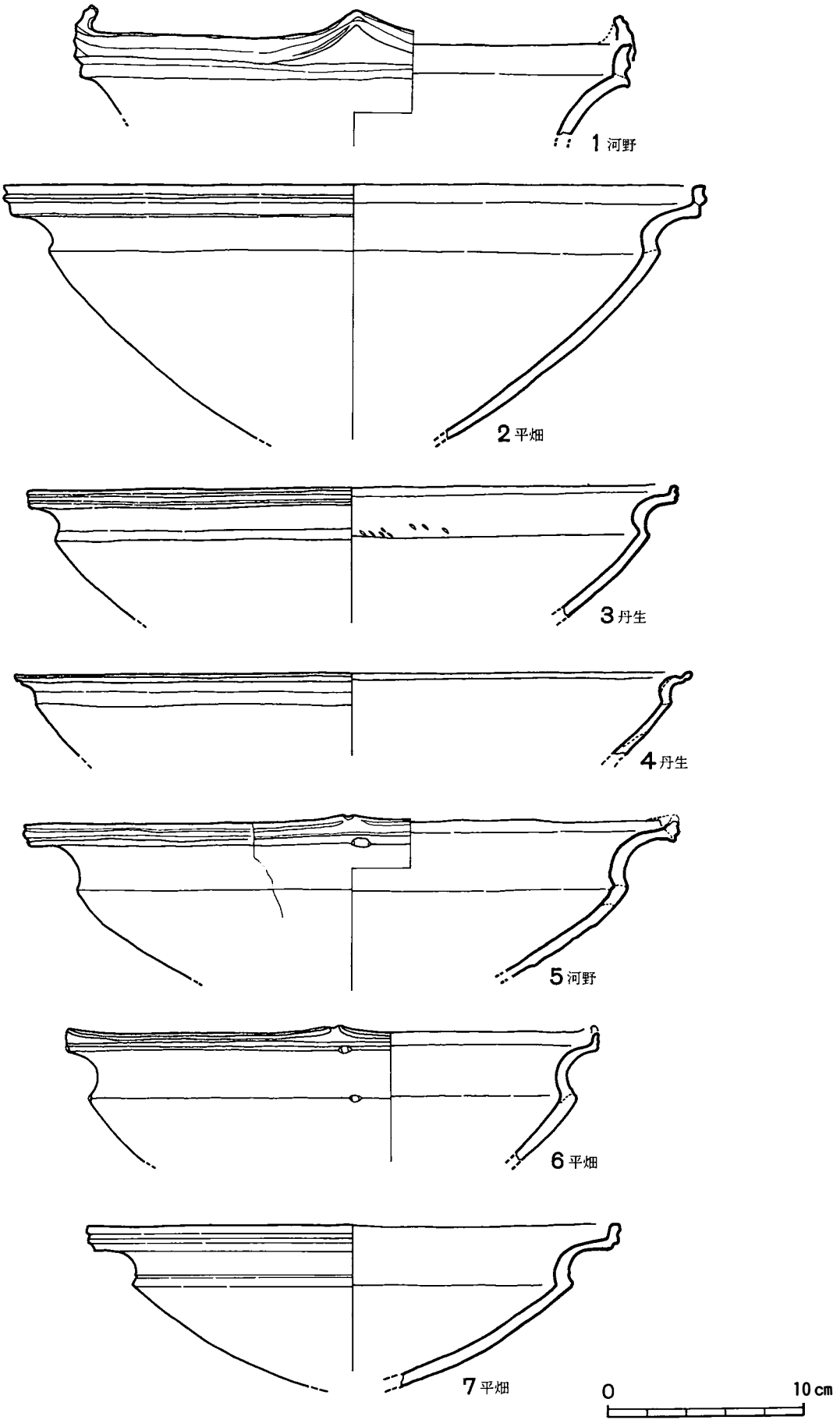
87－9は、器種不明の土器であり、把手であろう。断面は楕円形をなし、先端には貫通する穿孔を有する。87－10は、器種および部位不明の土器である。波状口縁の突出する一部とも思われる。器壁は分厚く、縦方向に2条の浅い凹線があり、これに重ねて交差あるいは斜方向の羽状文を付す。



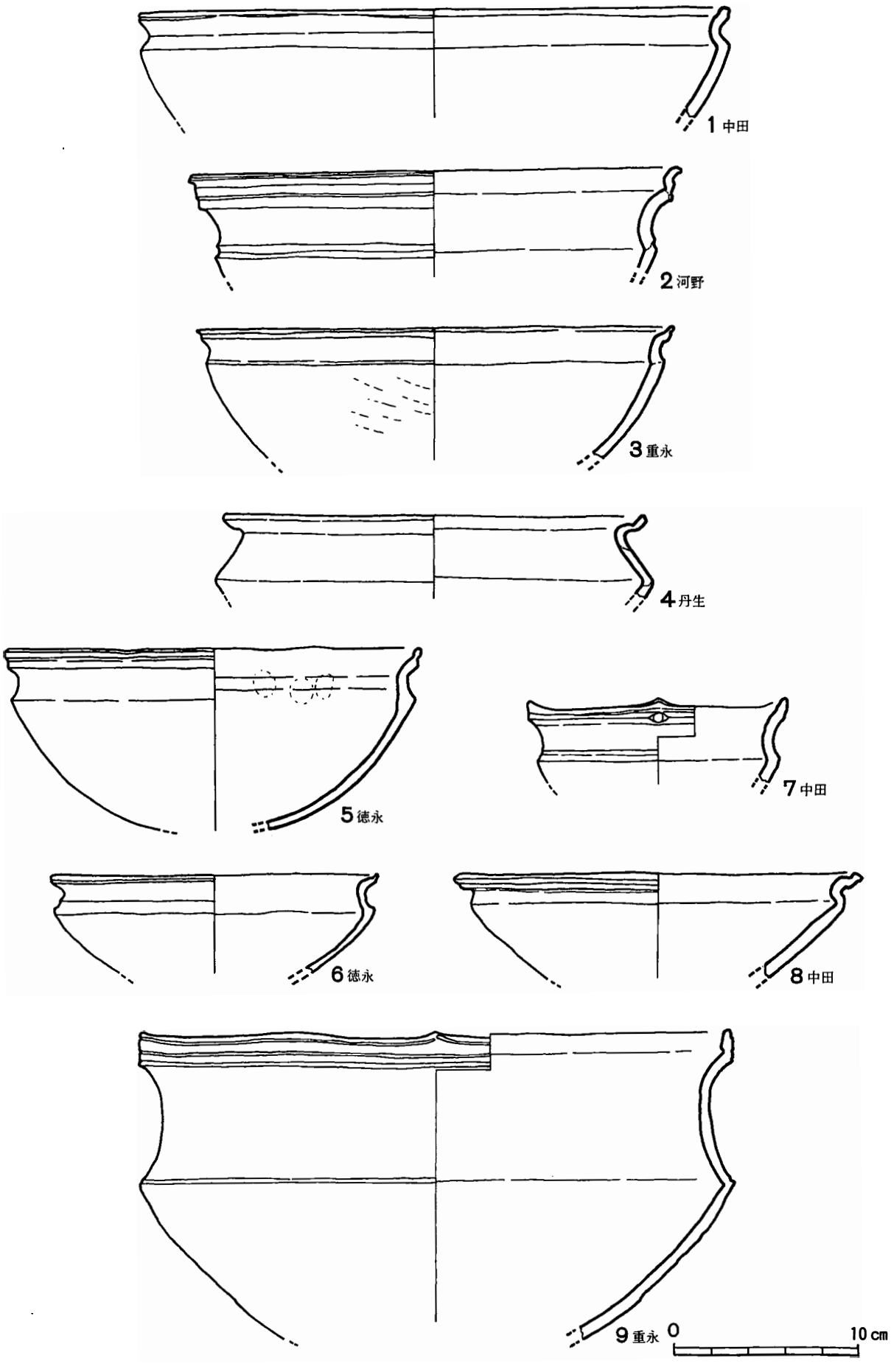
第49図　包含層からの出土土器



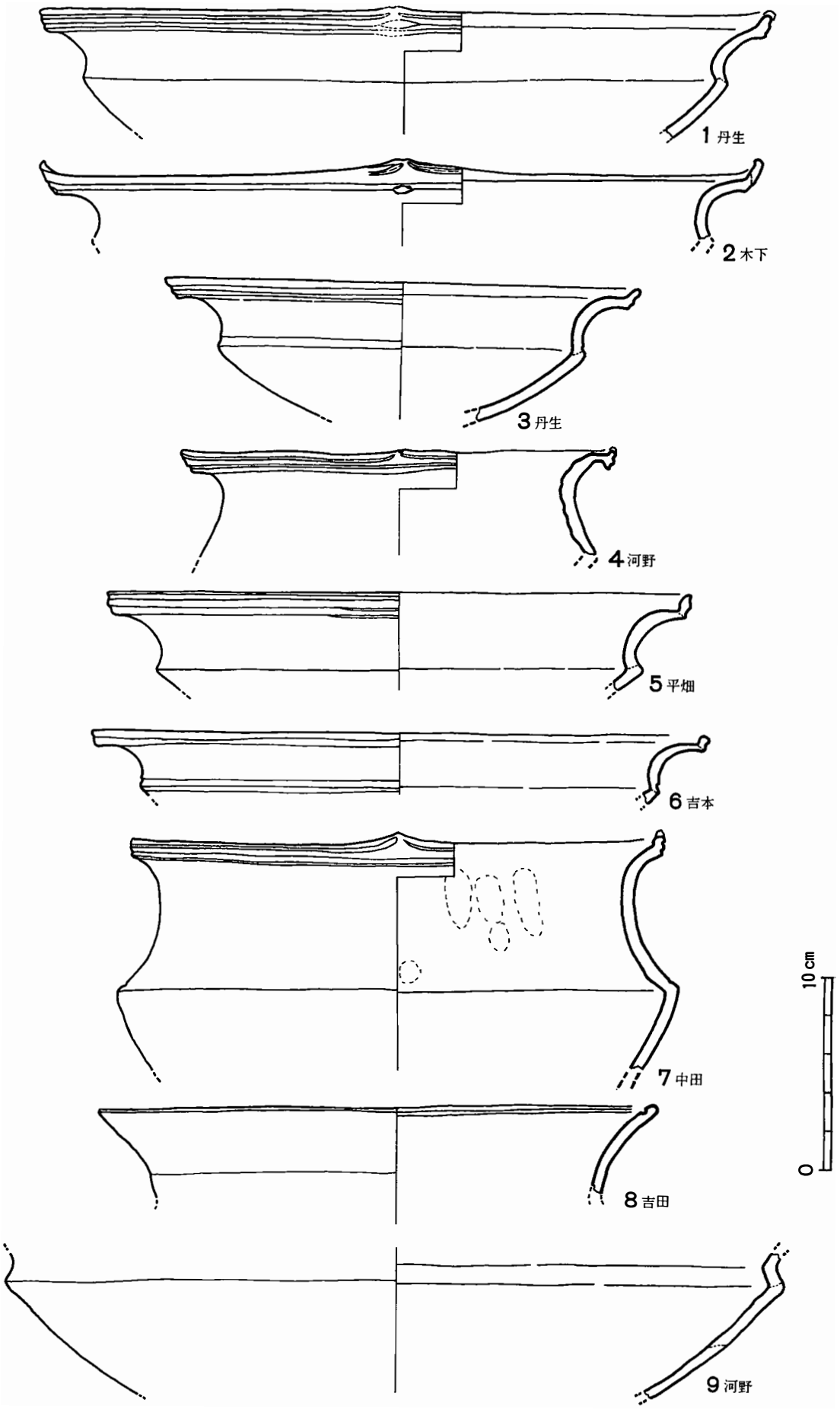
第50図　包含層からの出土土器



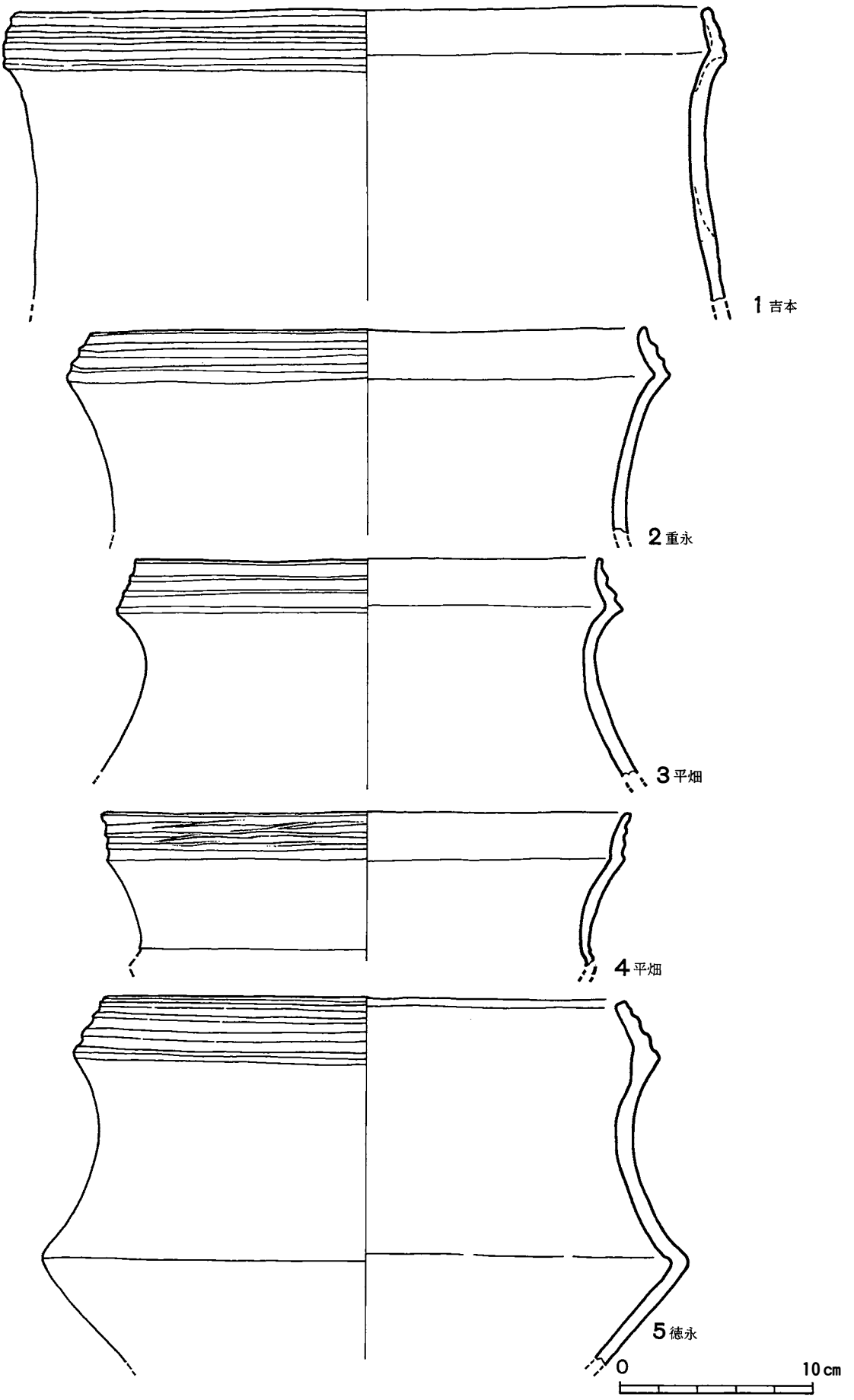
第51図　包含層からの出土土器



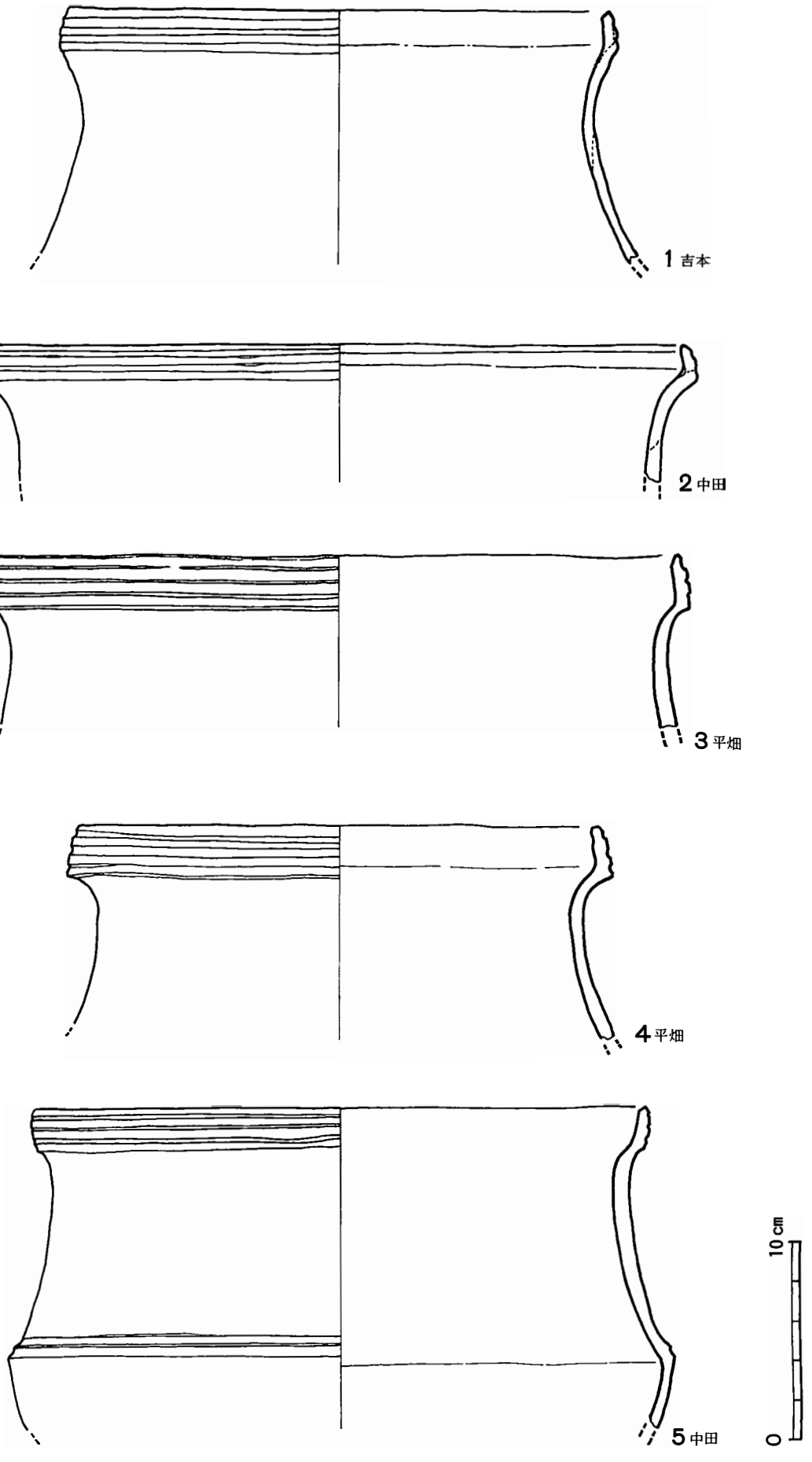
第52図　包含層からの出土土器



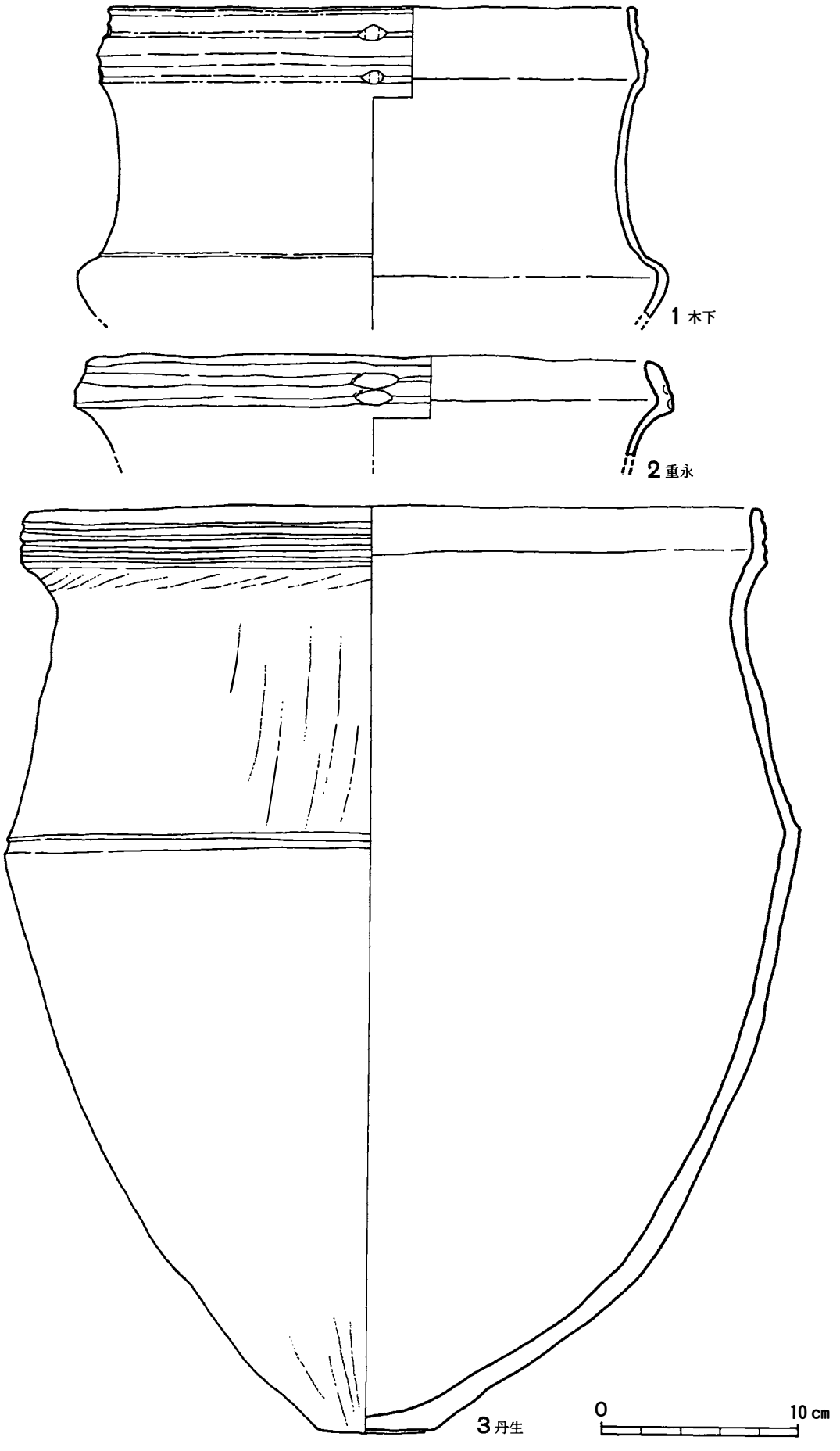
第53図　包含層からの出土土器



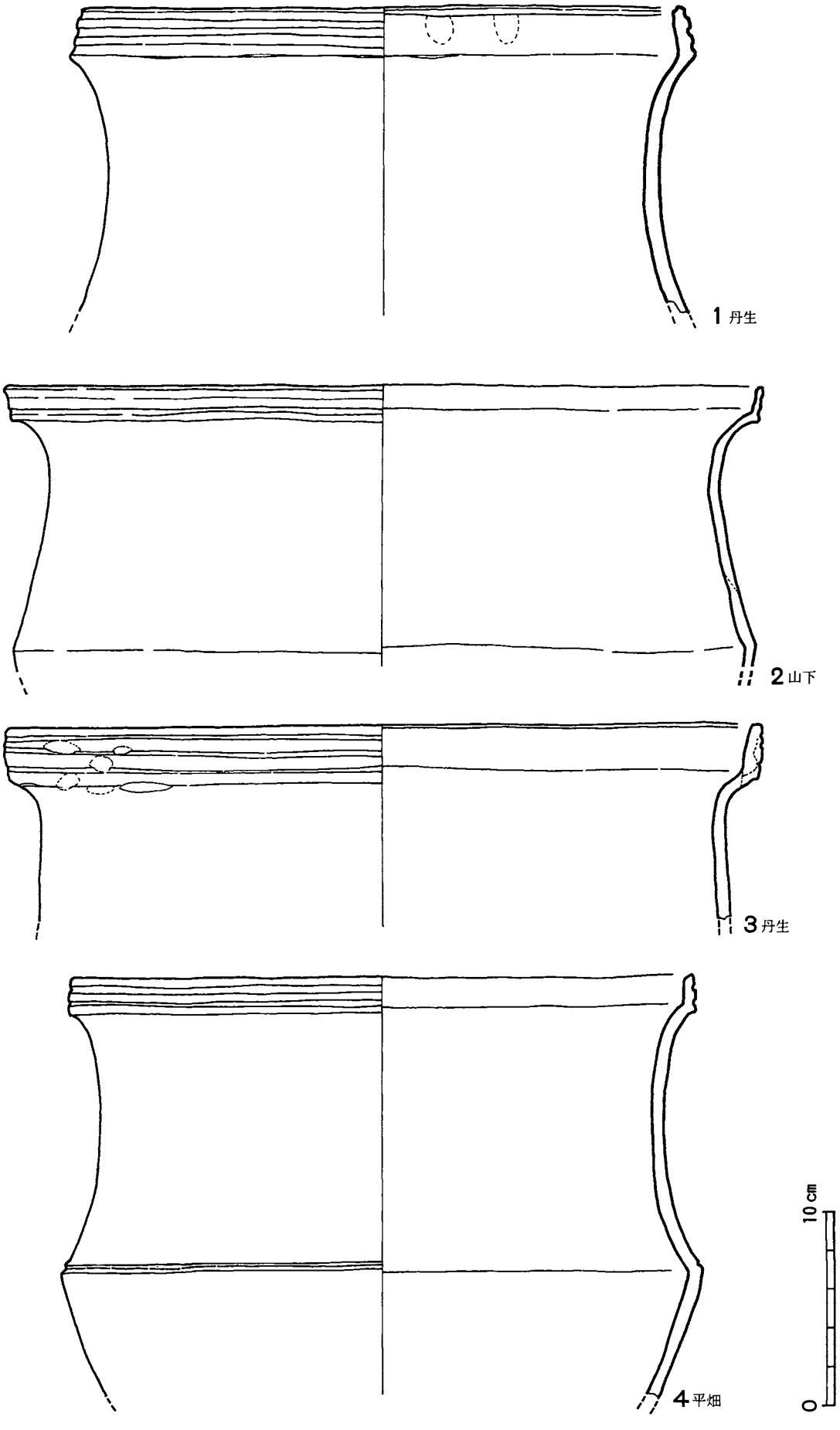
第54図　包含層からの出土土器



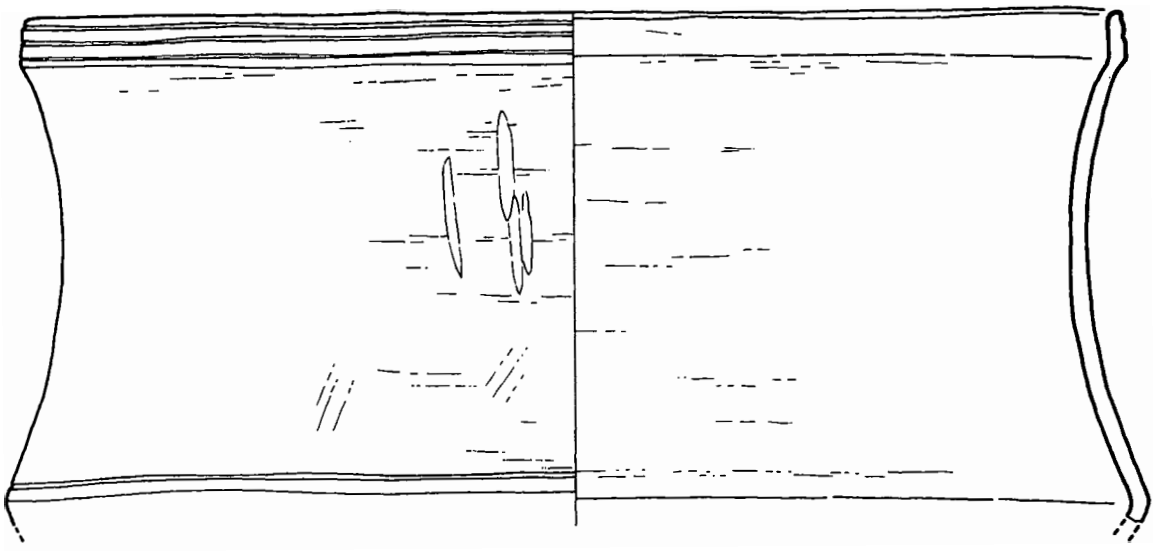
第55図　包含層からの出土土器



第56図　包含層からの出土土器

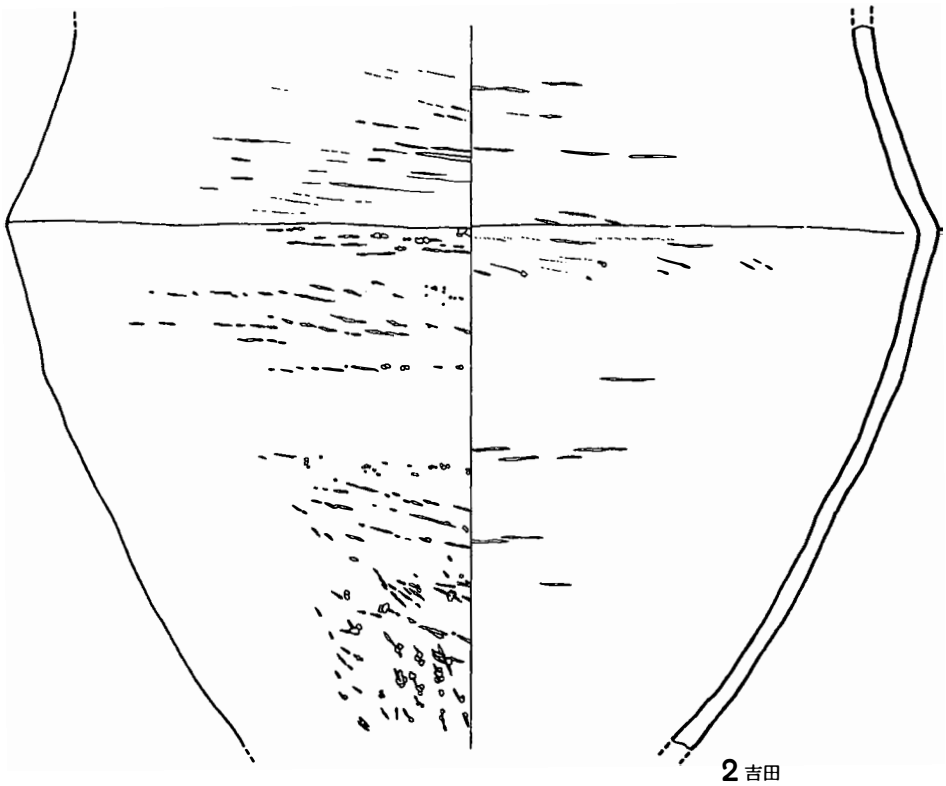


第57図　包含層からの出土土器



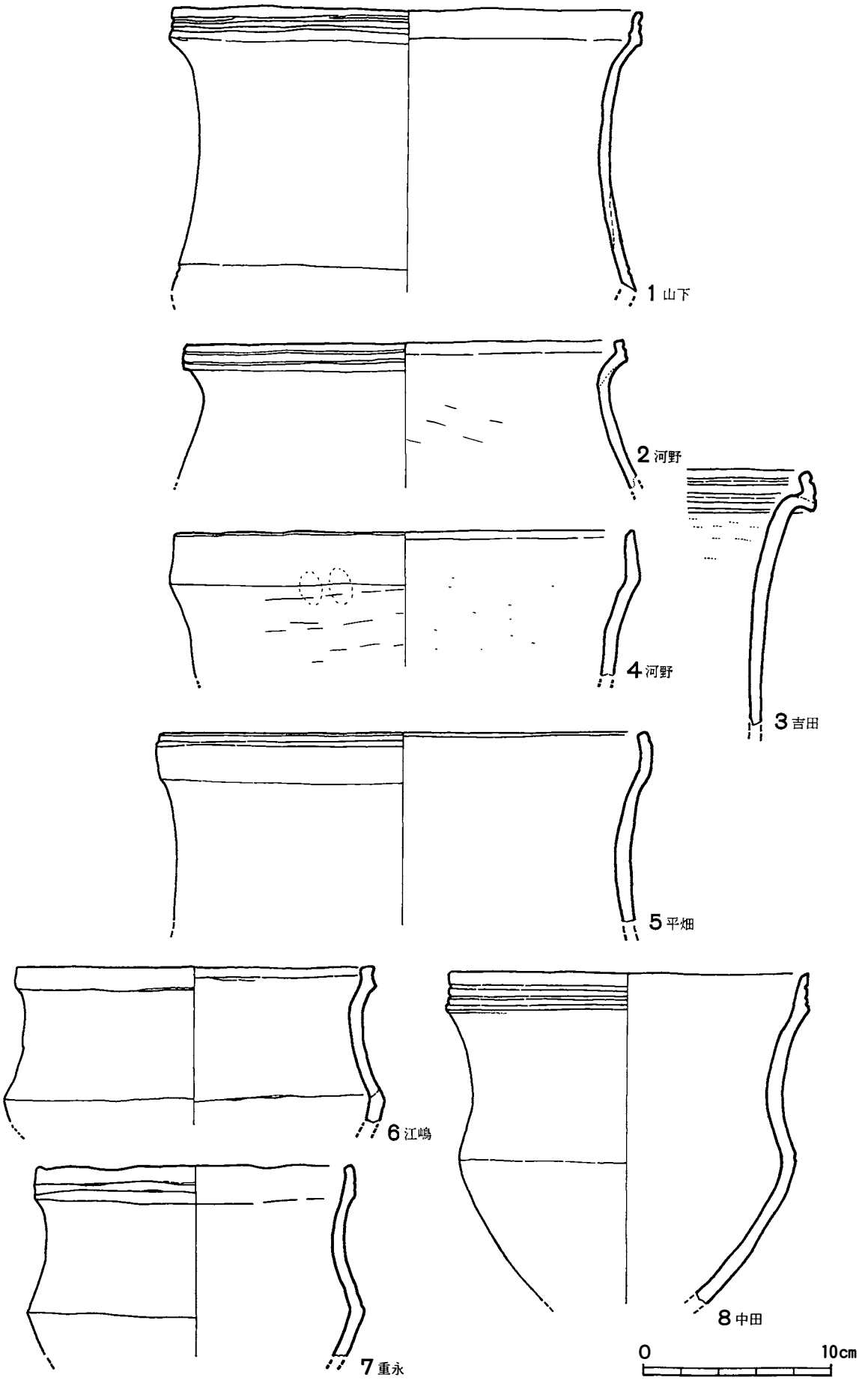
1 吉田

0 10cm

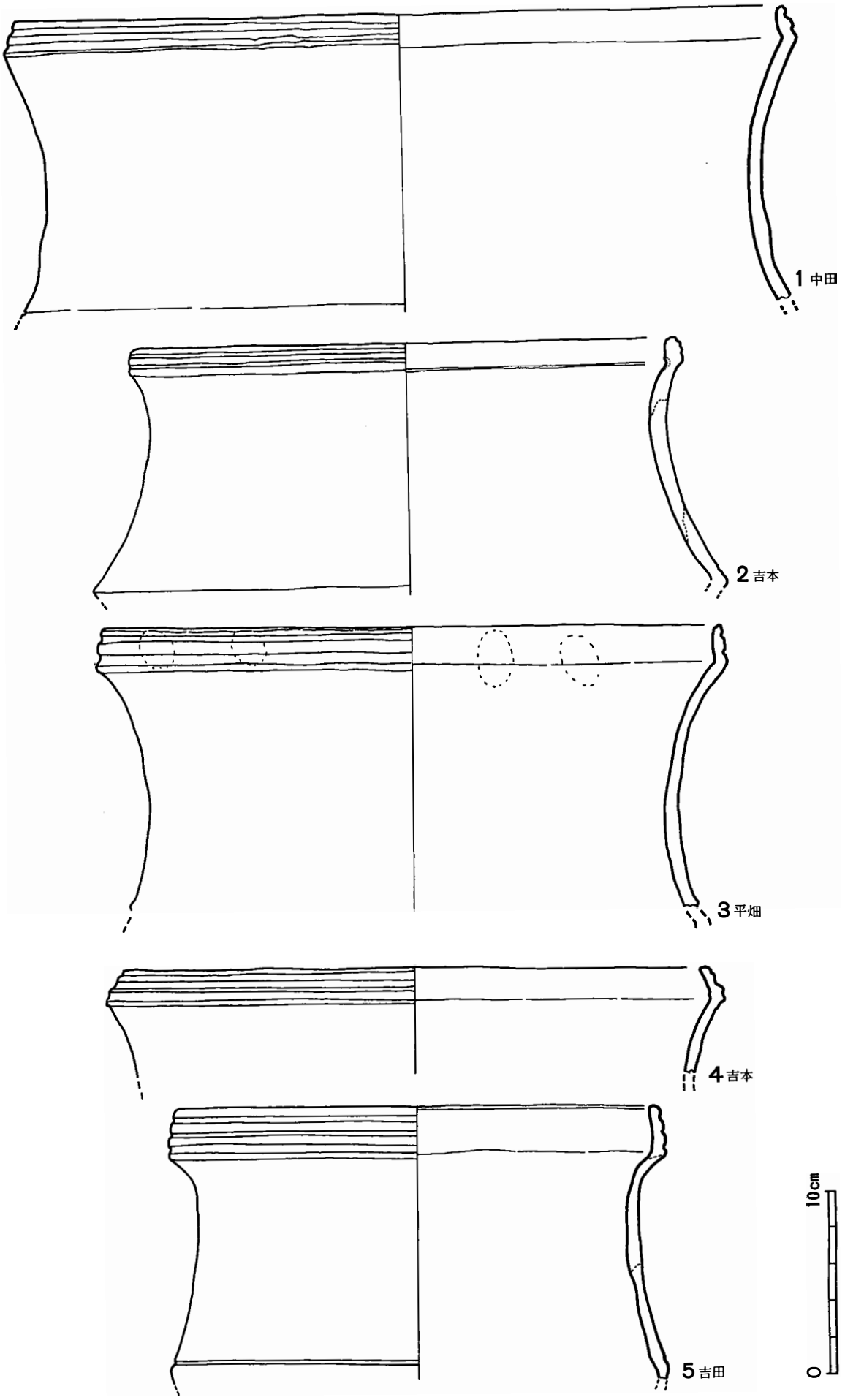


2 吉田

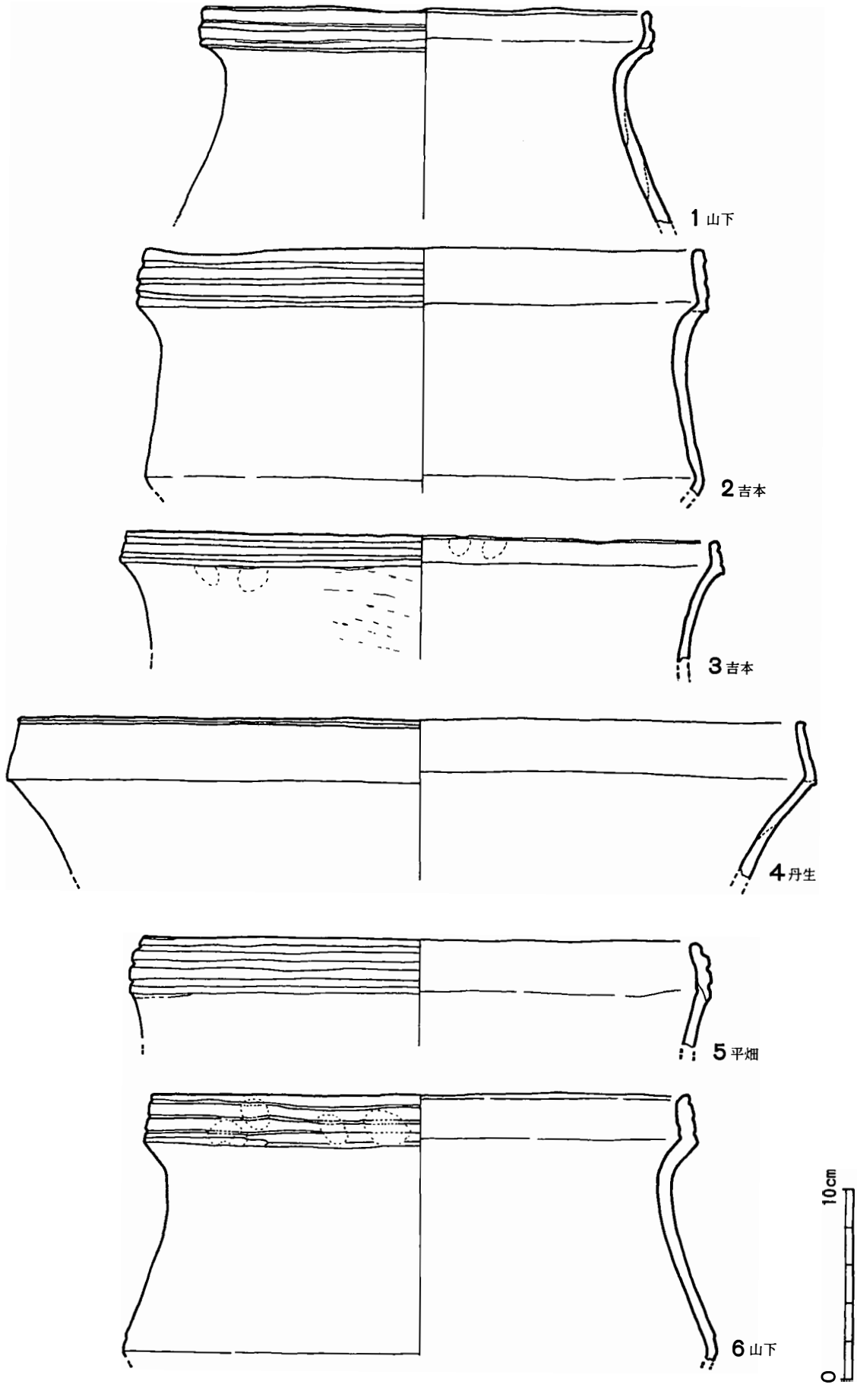
第58図　包含層からの出土土器



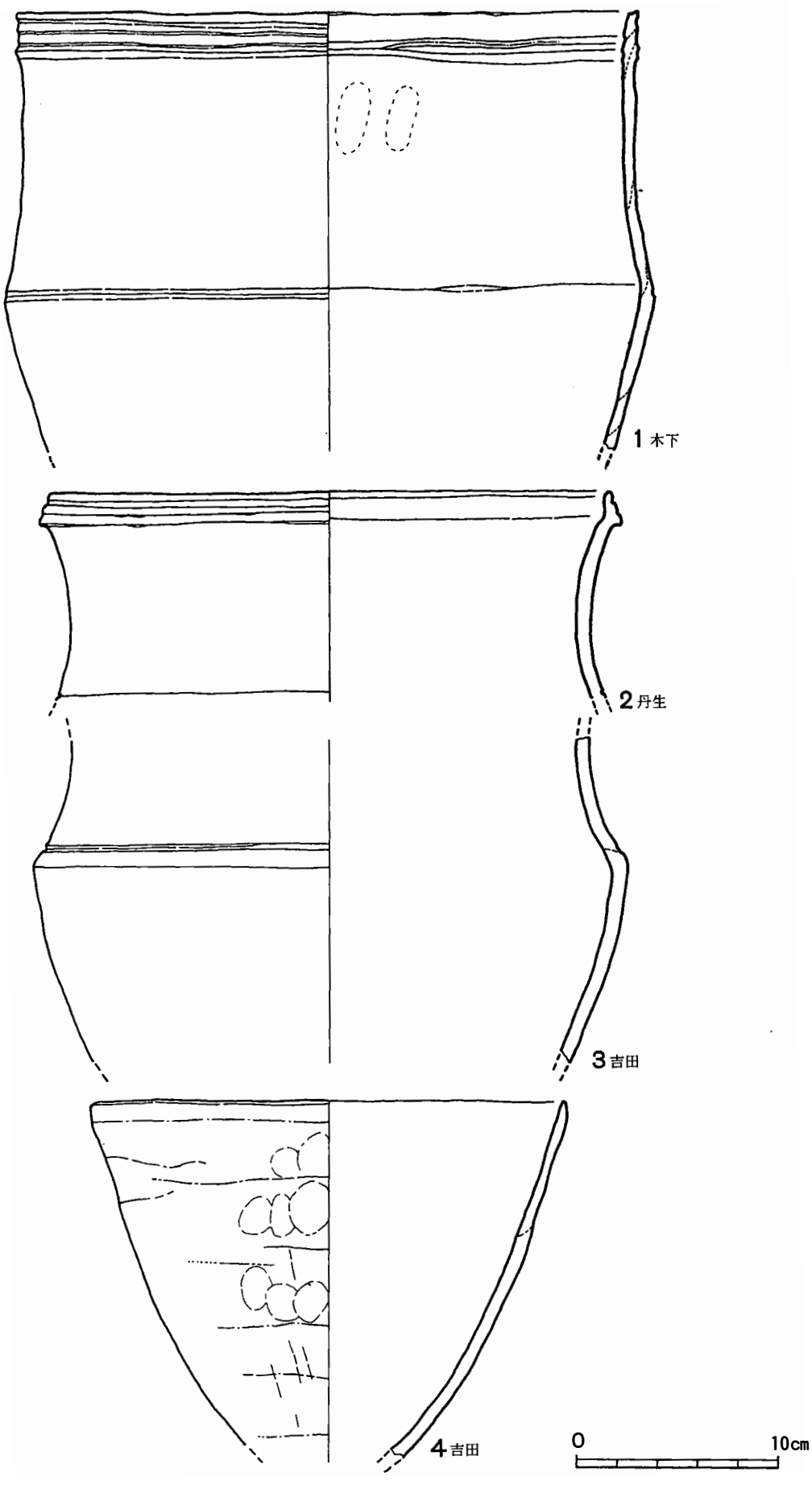
第59図　包含層からの出土土器



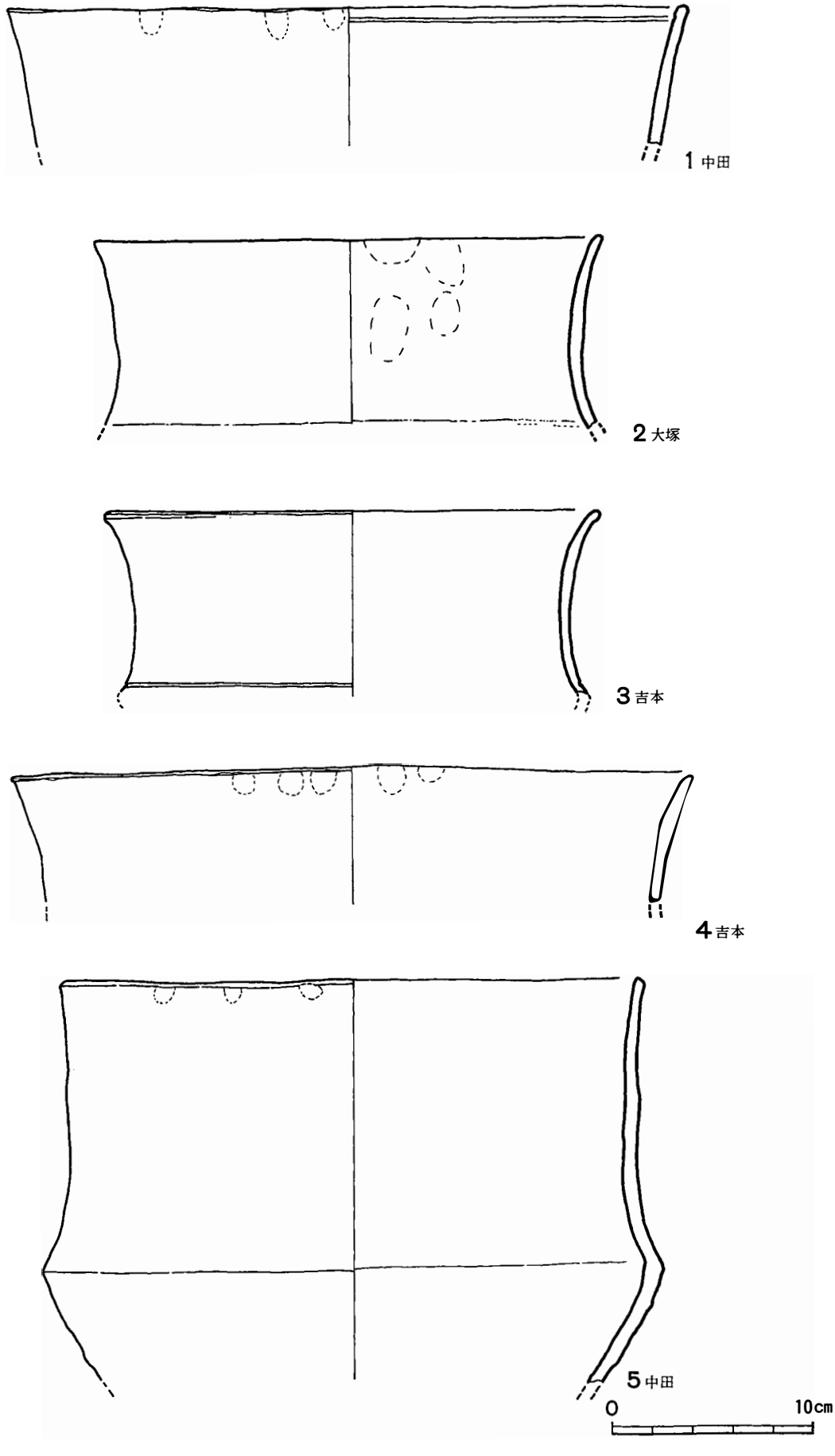
第60図　包含層からの出土土器



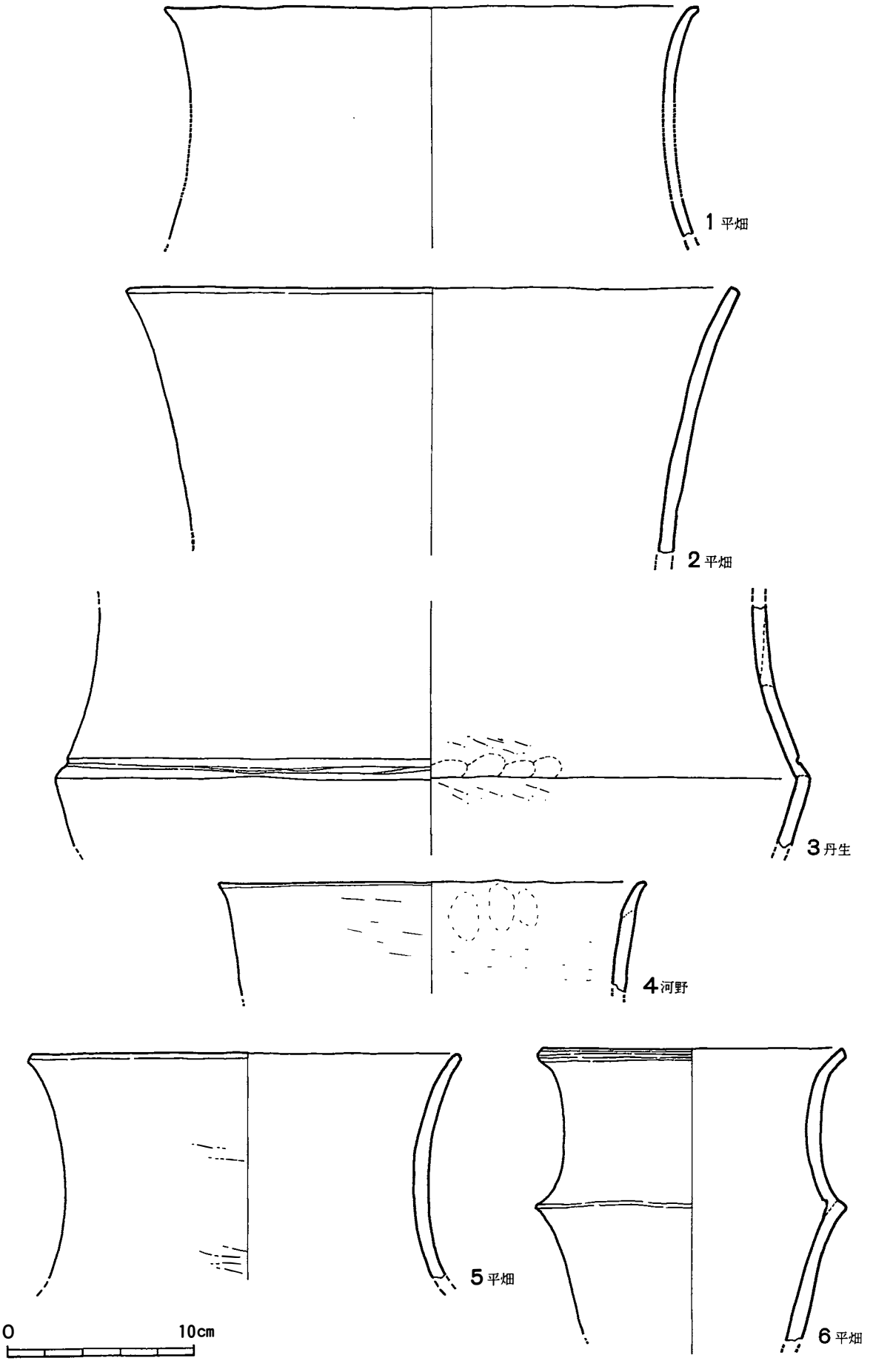
第61図　包含層からの出土土器



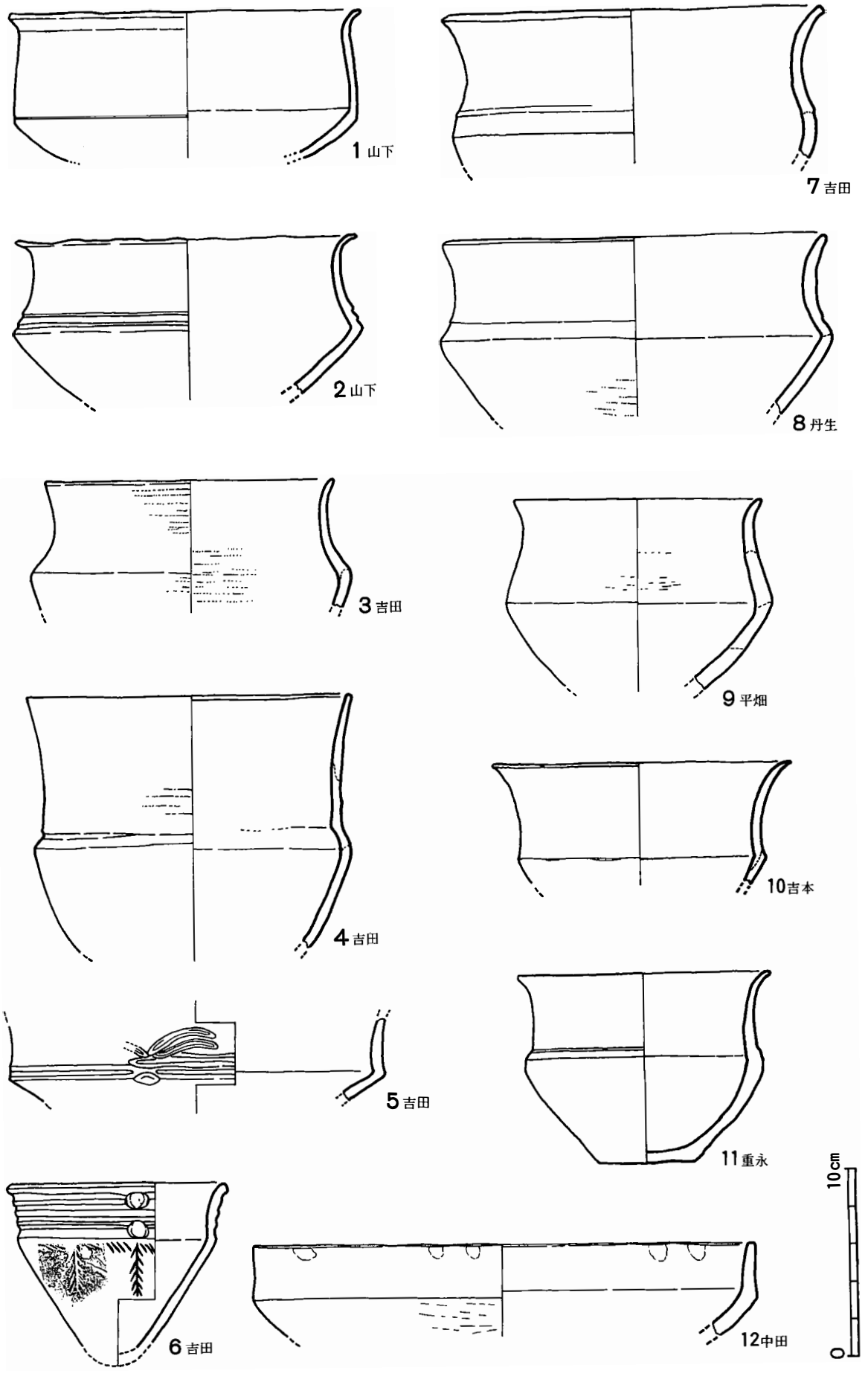
第62図　包含層からの出土土器



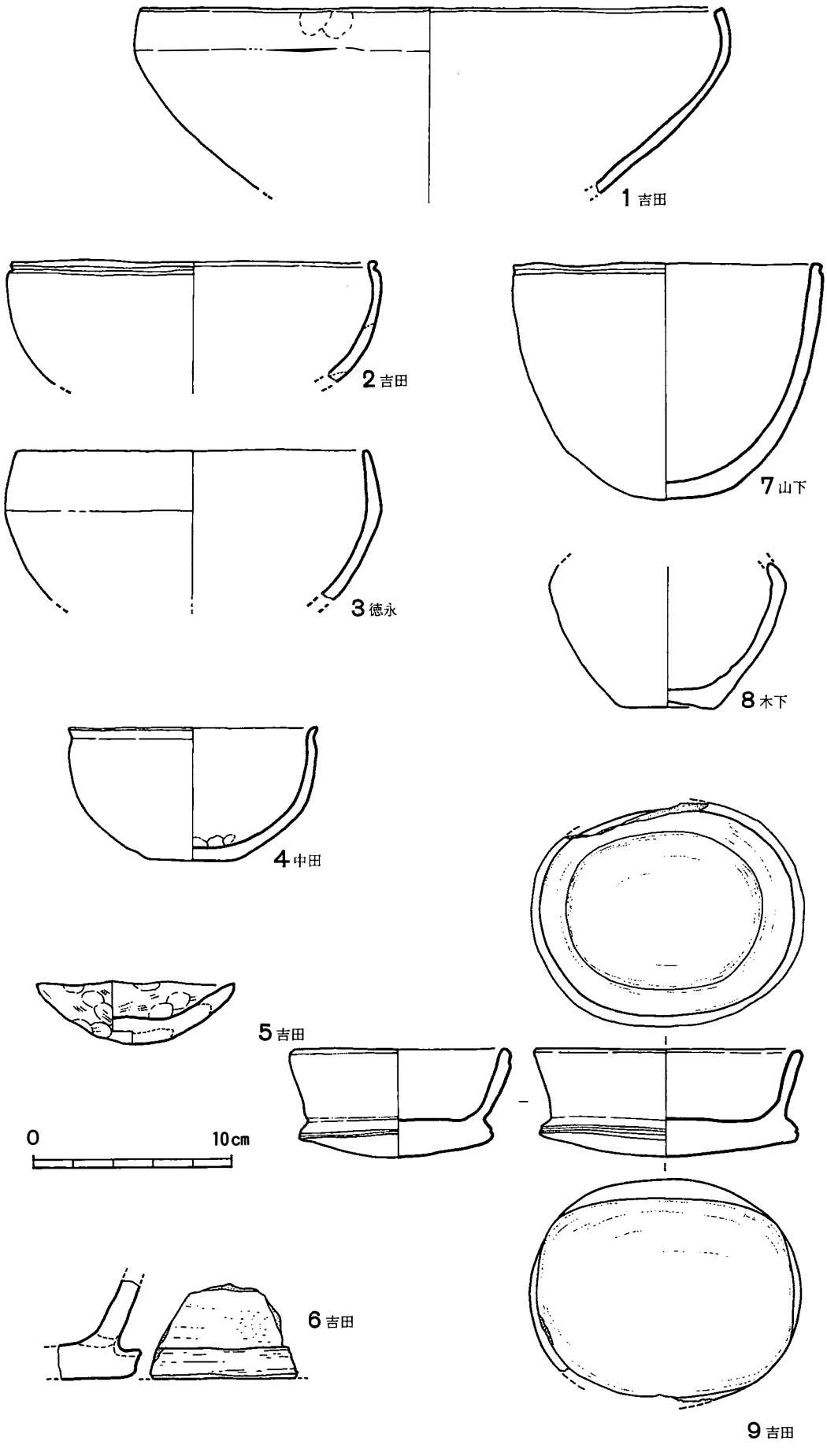
第63図　包含層からの出土土器



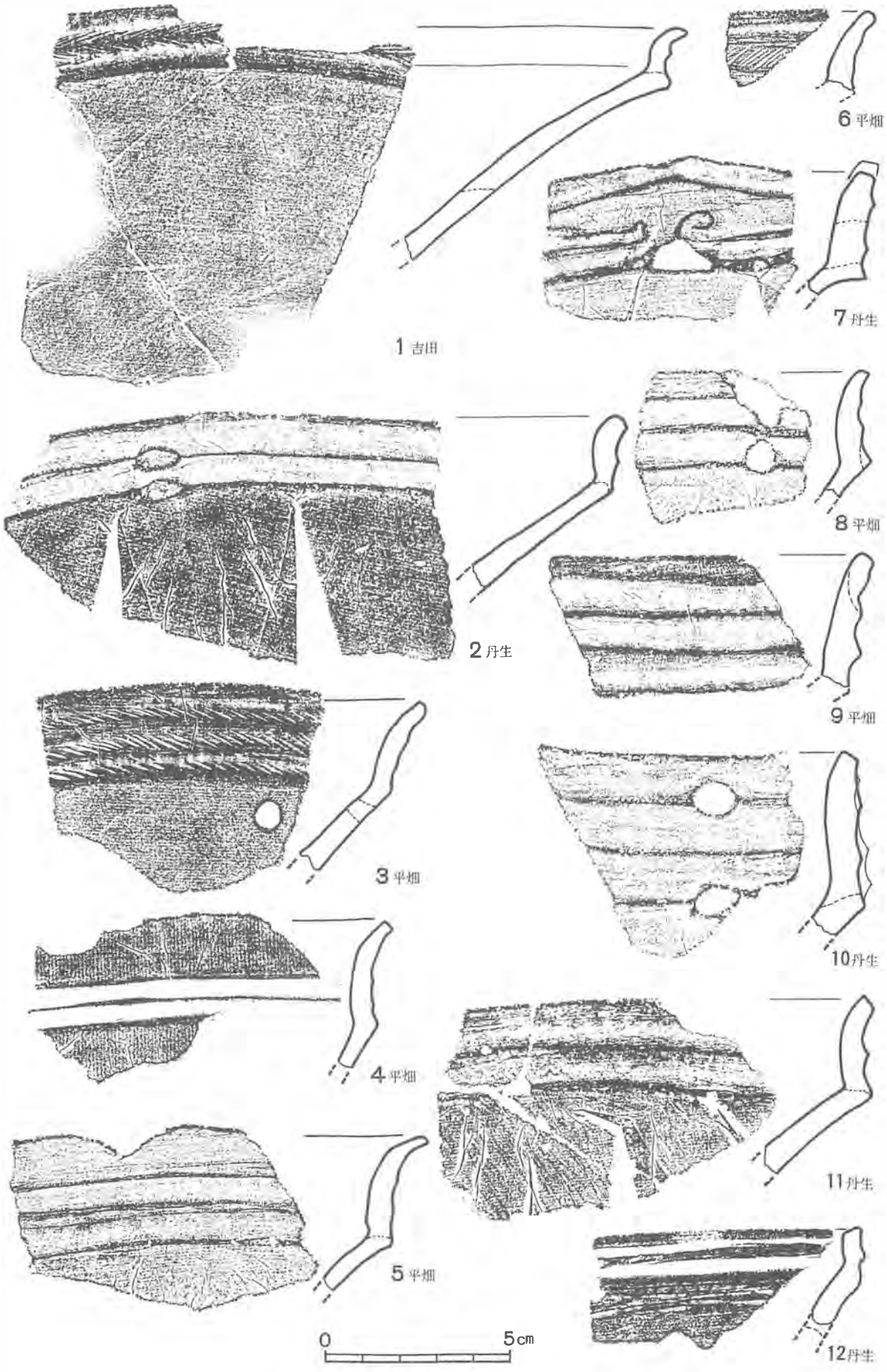
第64図　包含層からの出土土器



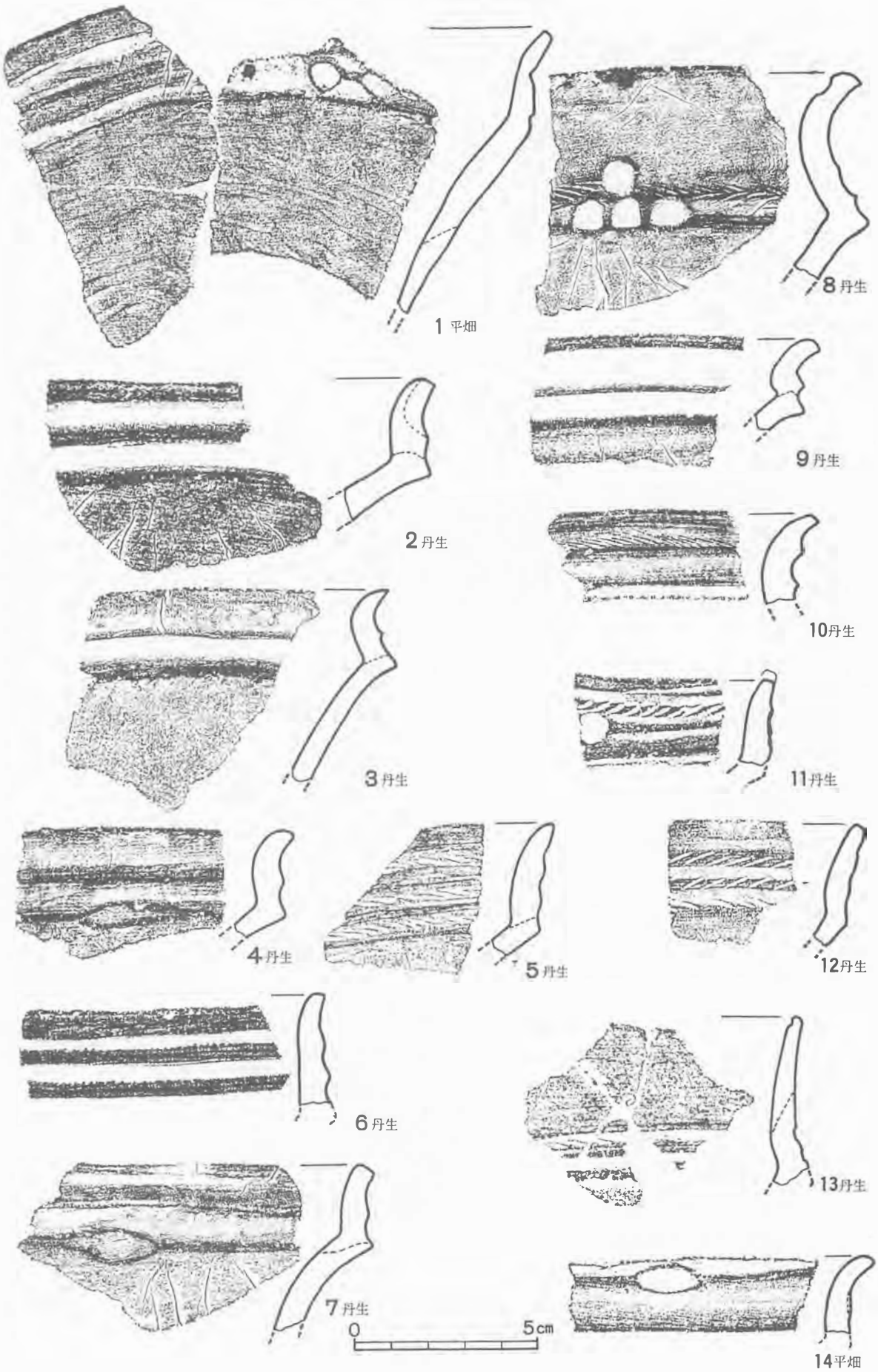
第65図　包含層からの出土土器



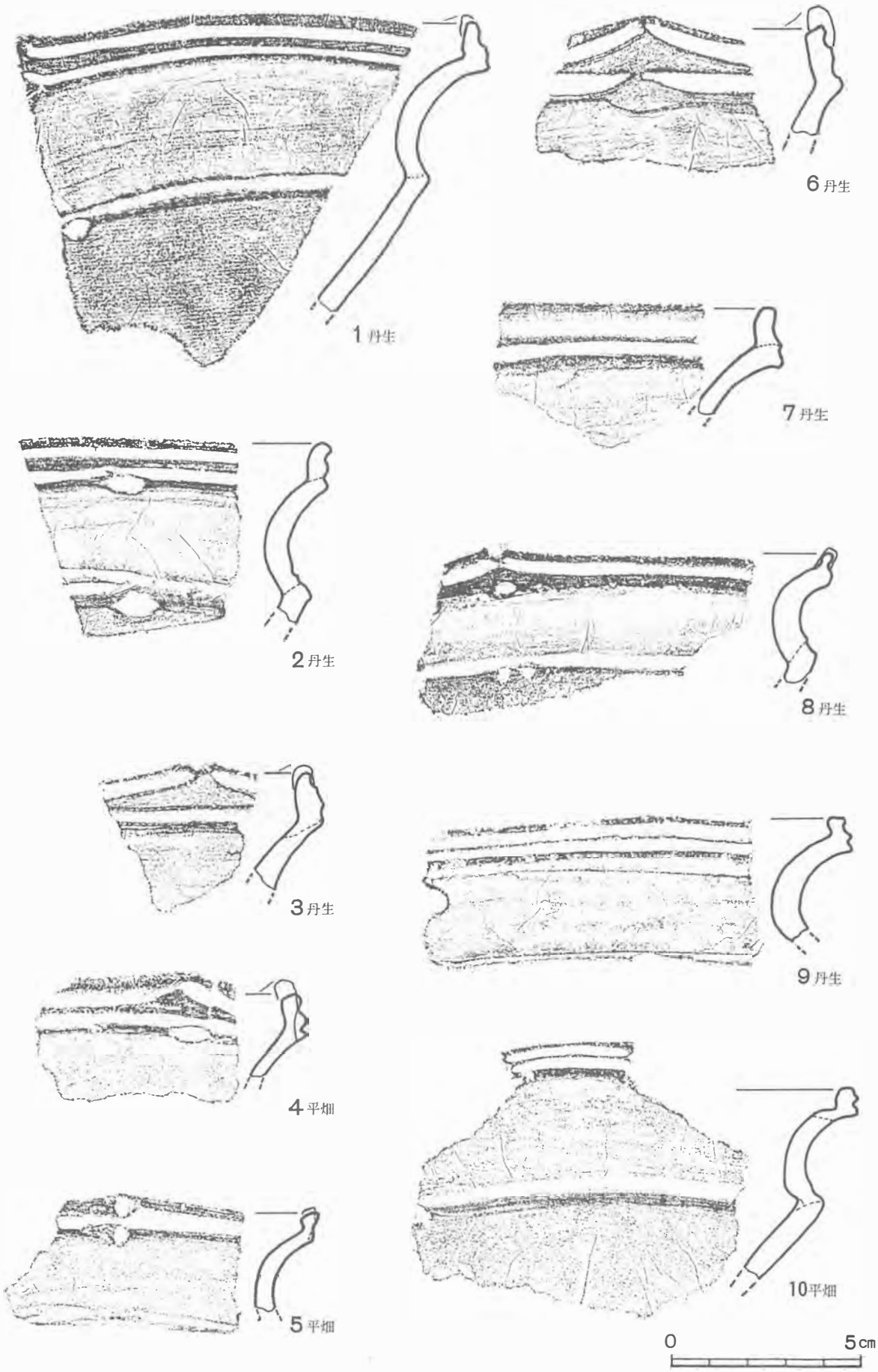
第66図　包含層からの出土土器



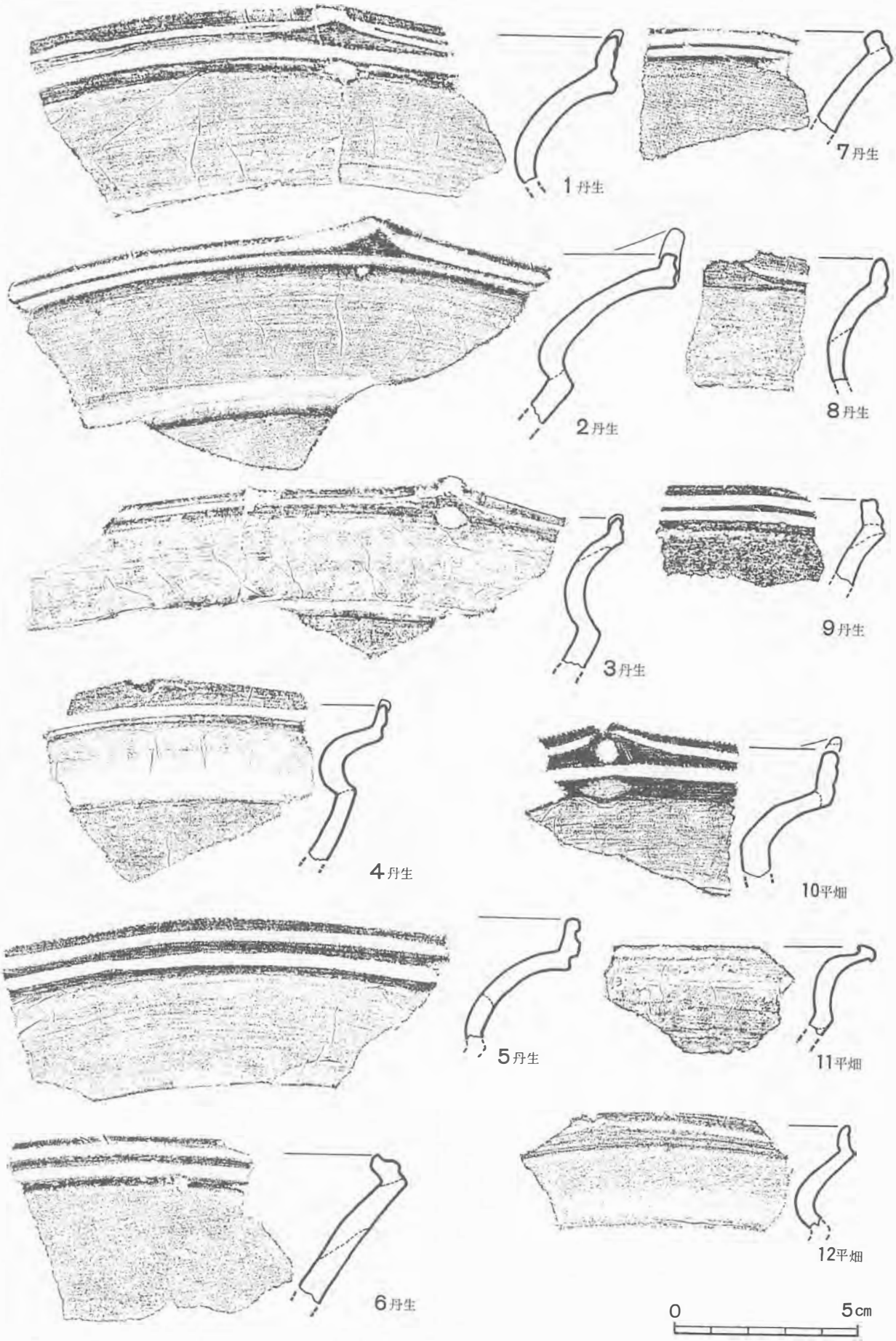
第67図　包含層からの出土土器



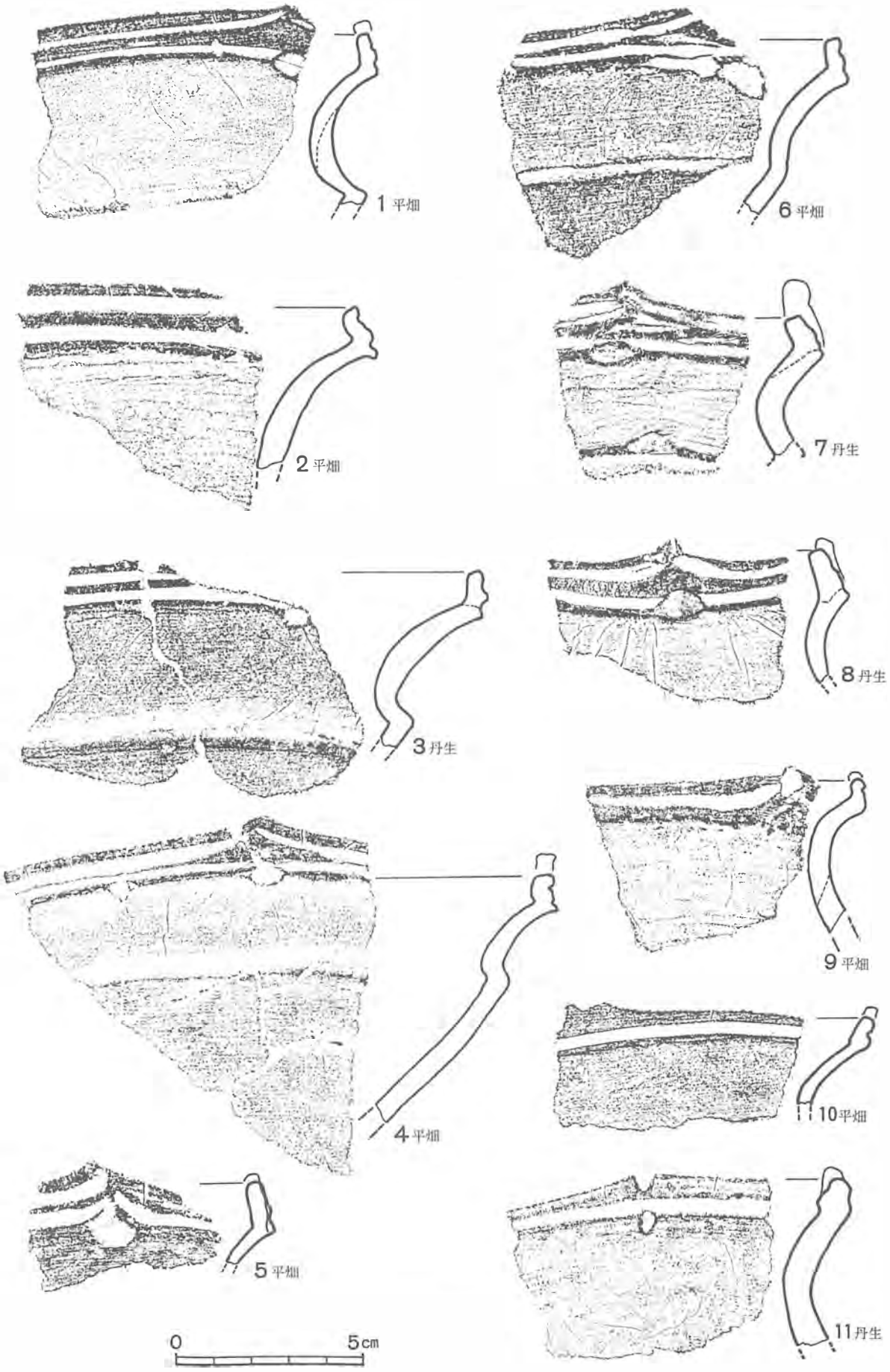
第68図　包含層からの出土土器



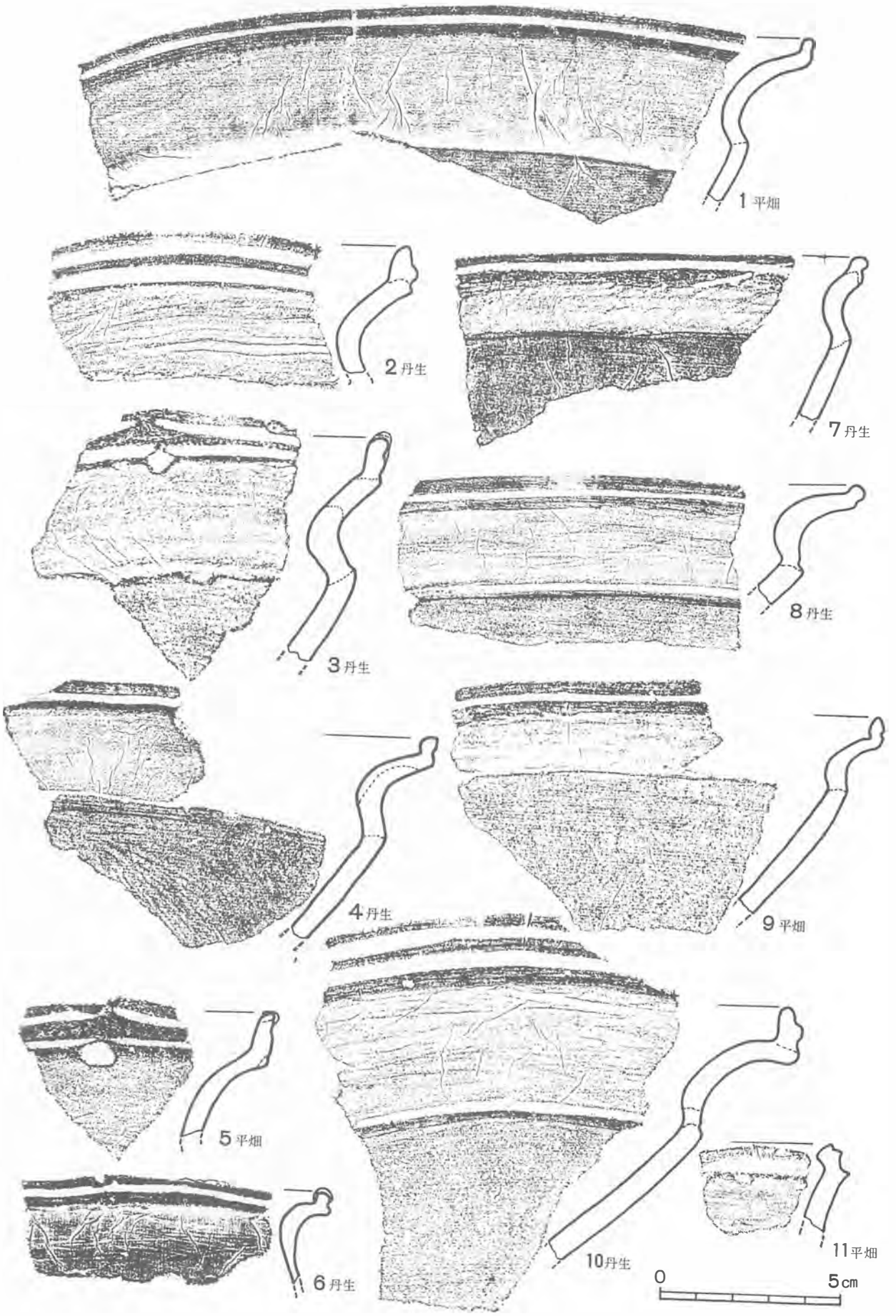
第69図　包含層からの出土土器



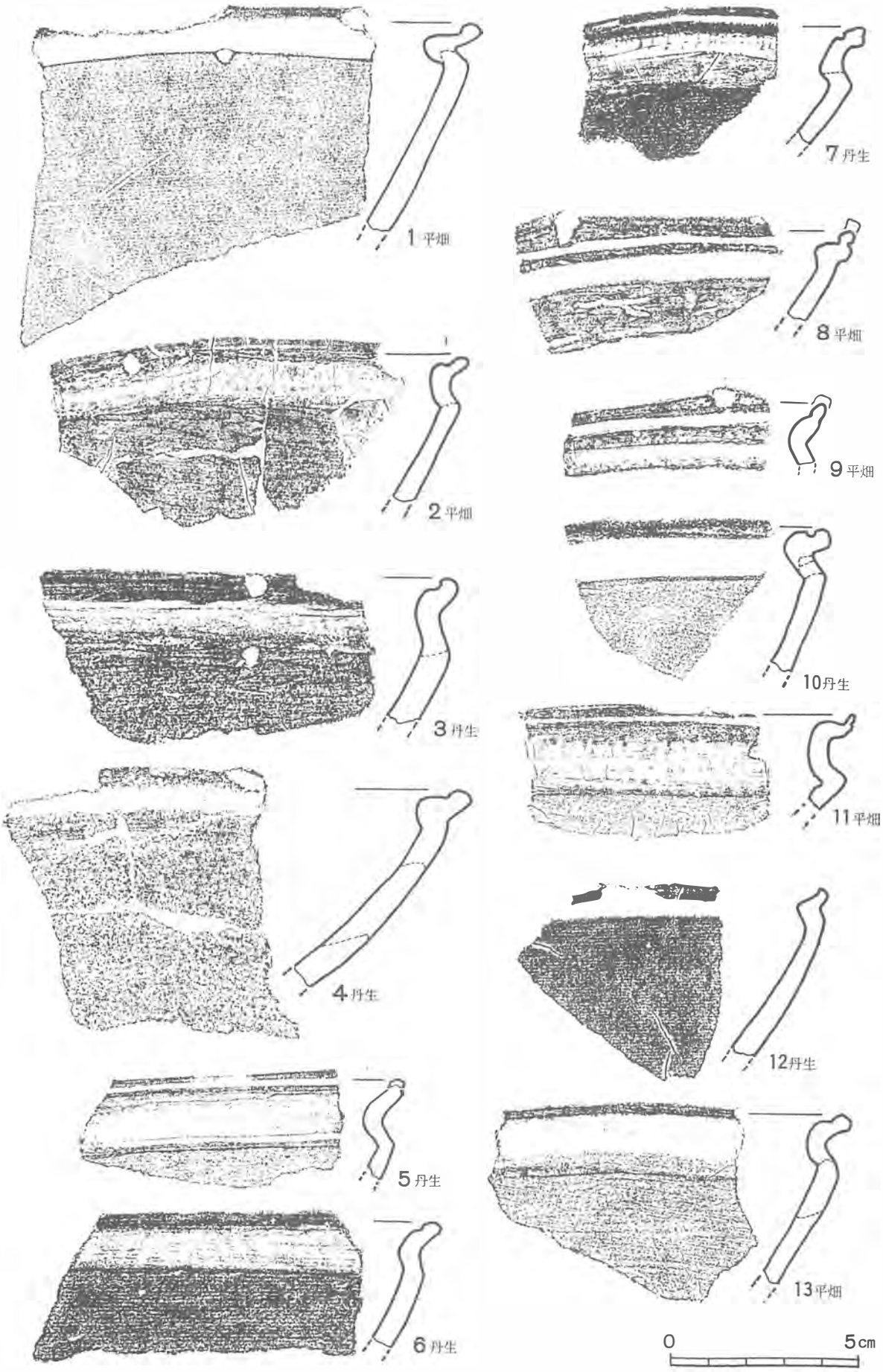
第70図　包含層からの出土土器



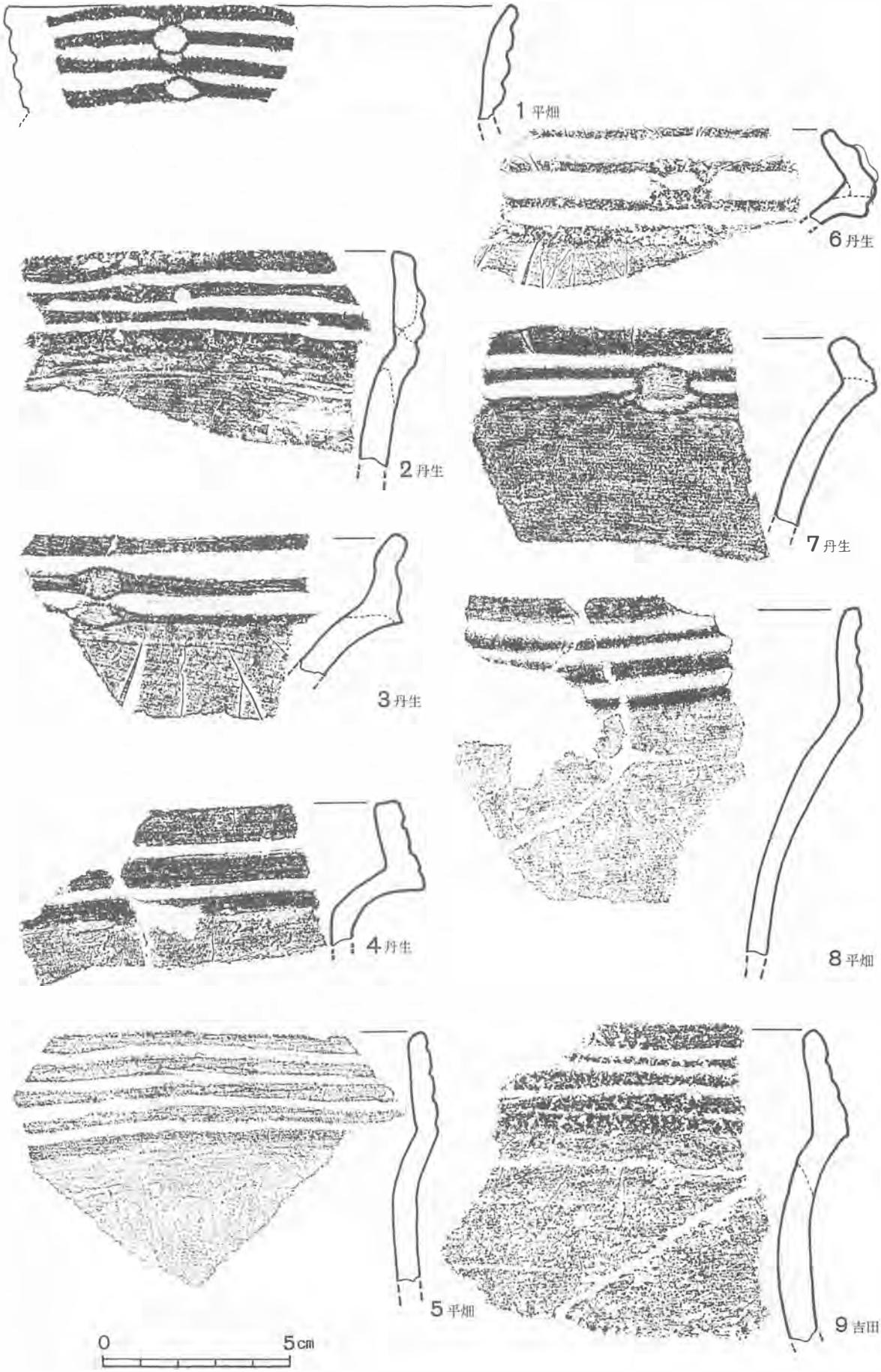
第71図　包含層からの出土土器



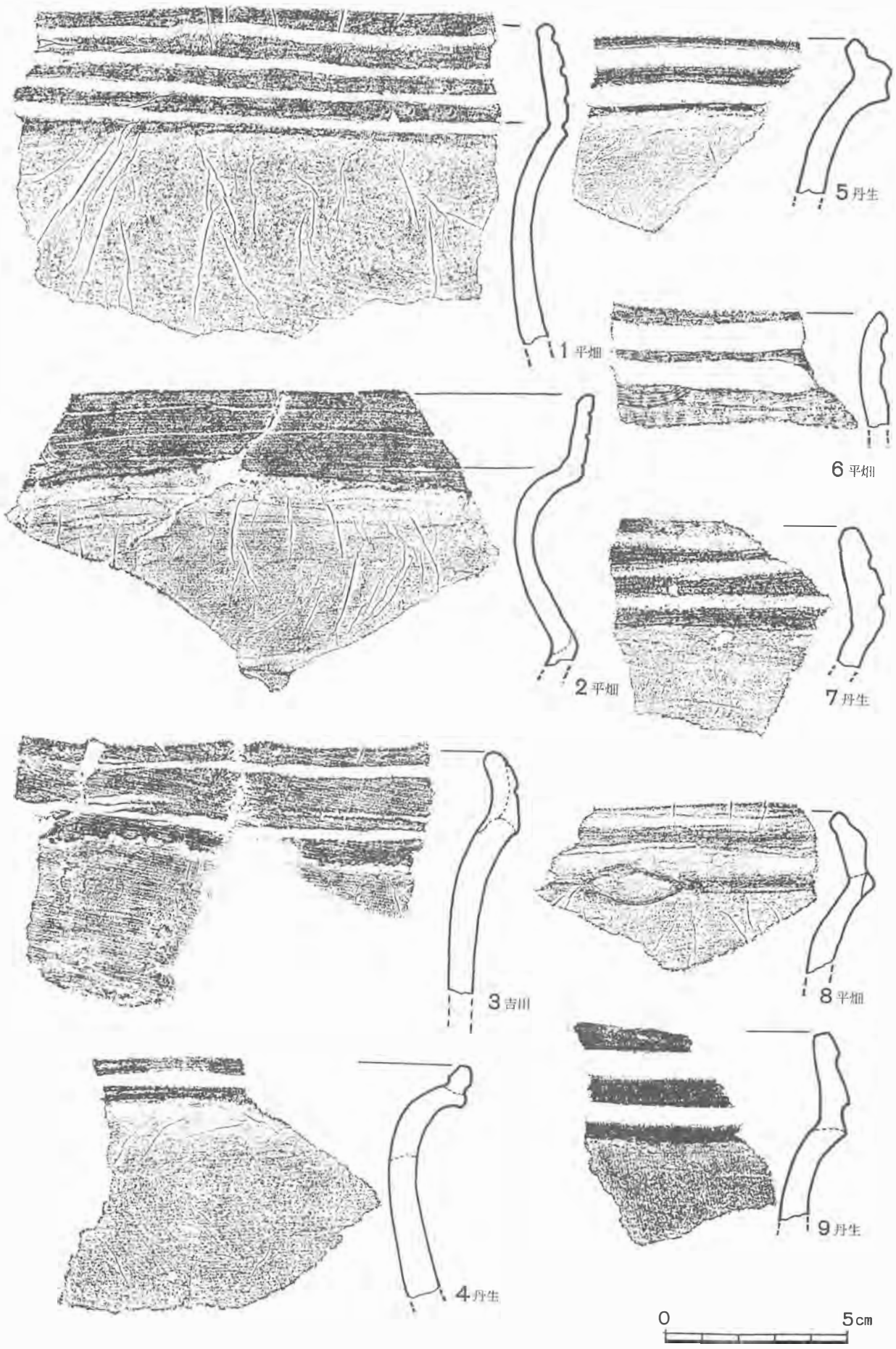
第72図　包含層からの出土土器



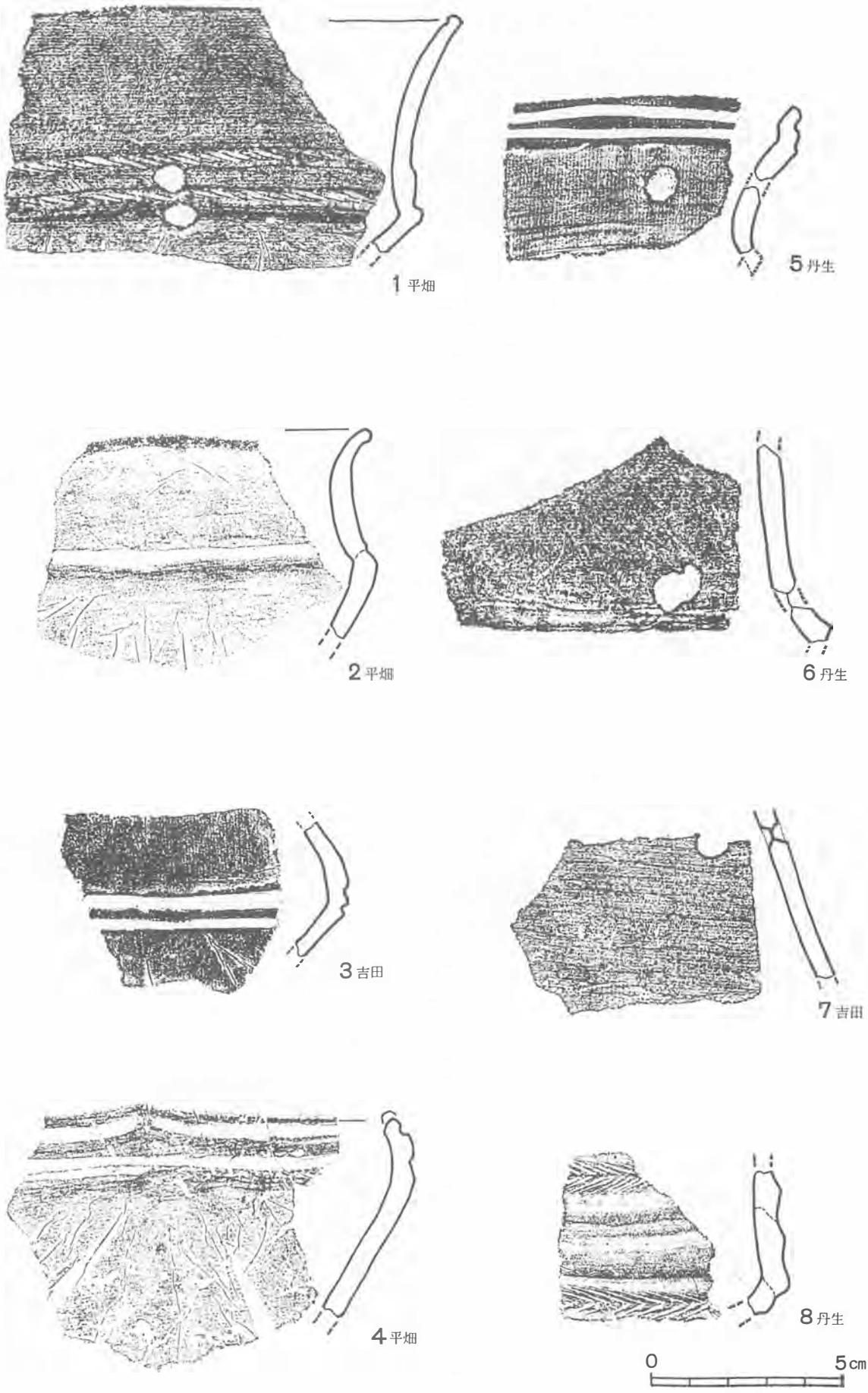
第73図　包含層からの出土土器



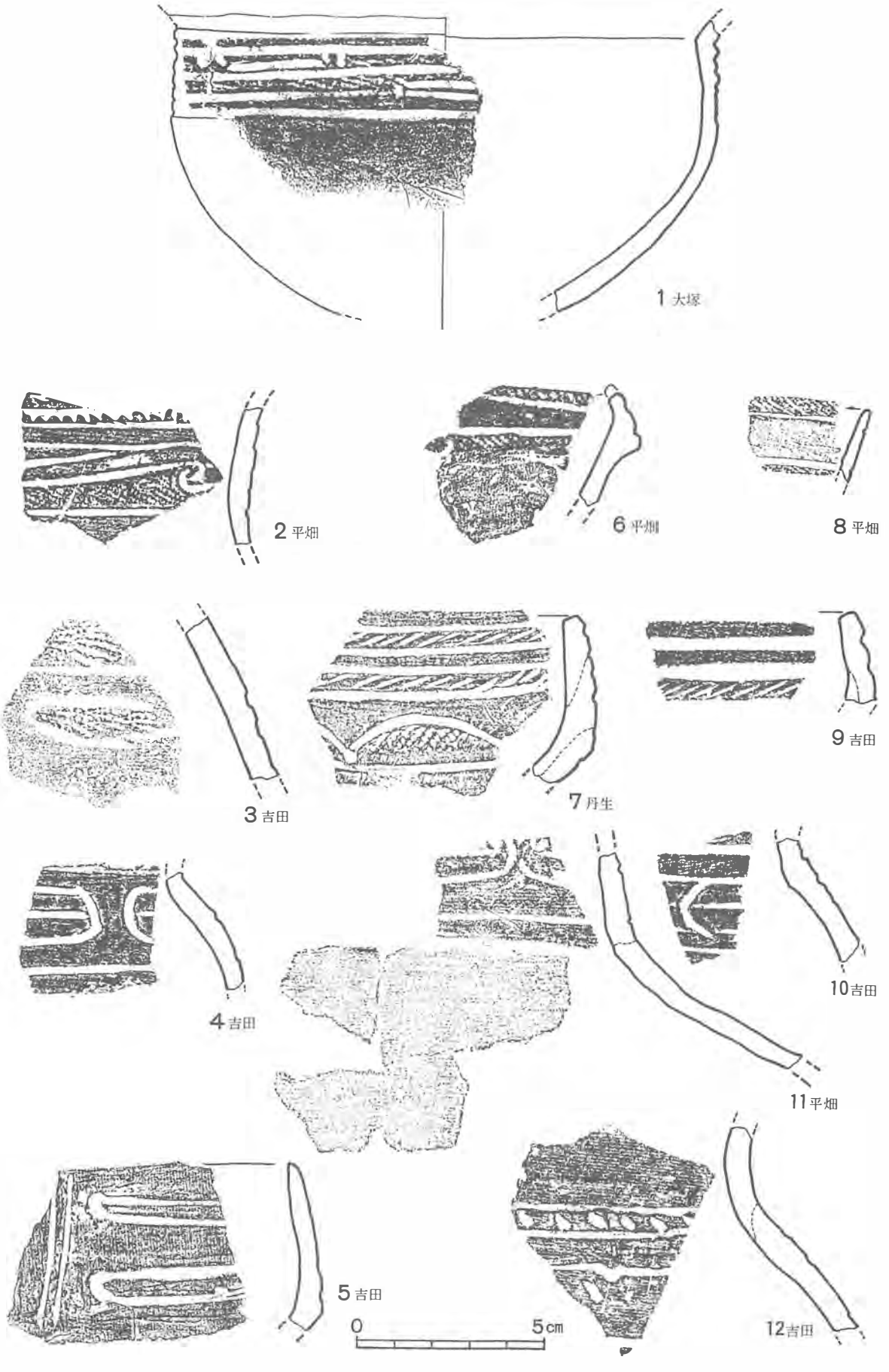
第74図　包含層からの出土土器



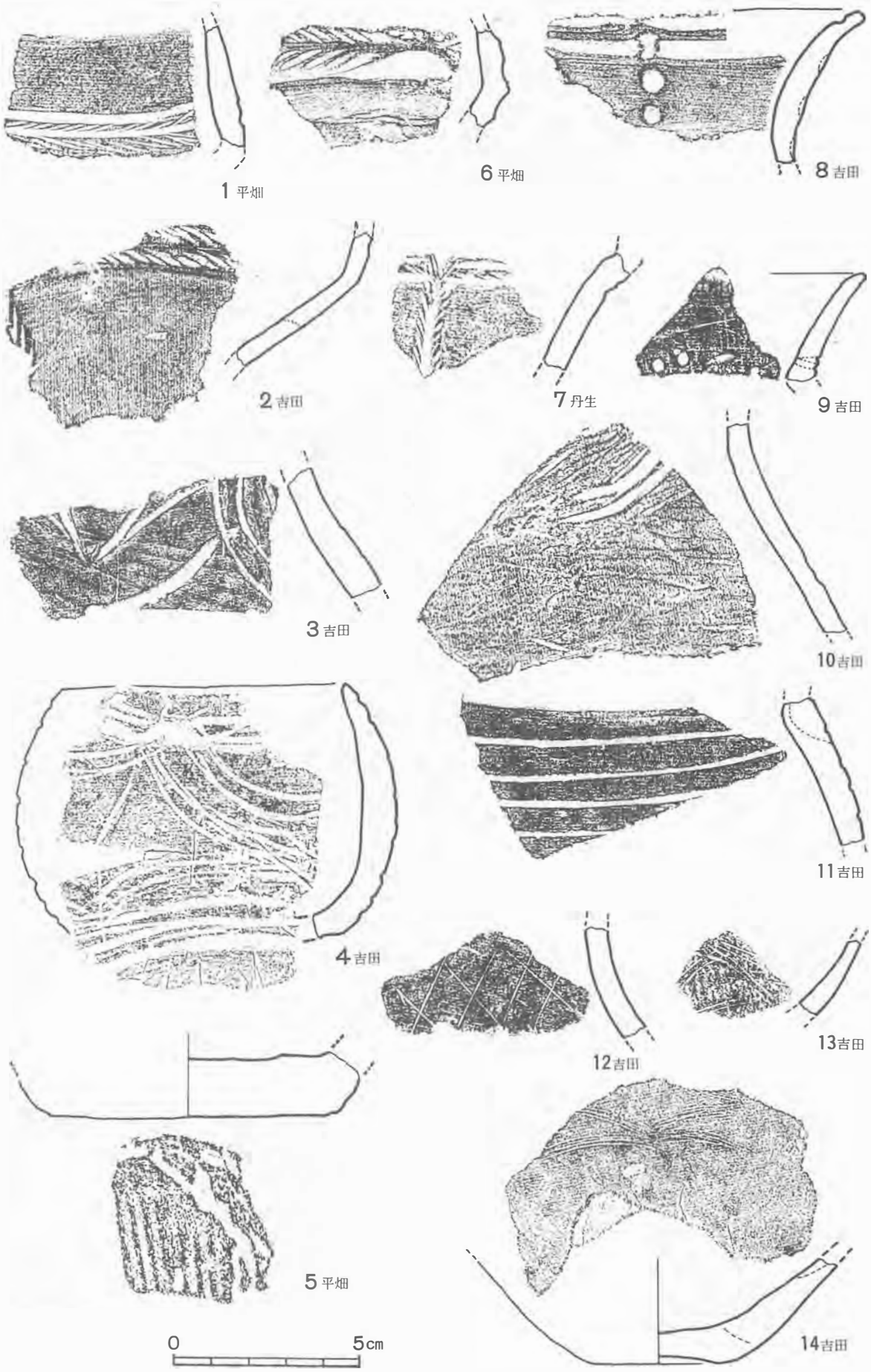
第75図　包含層からの出土土器



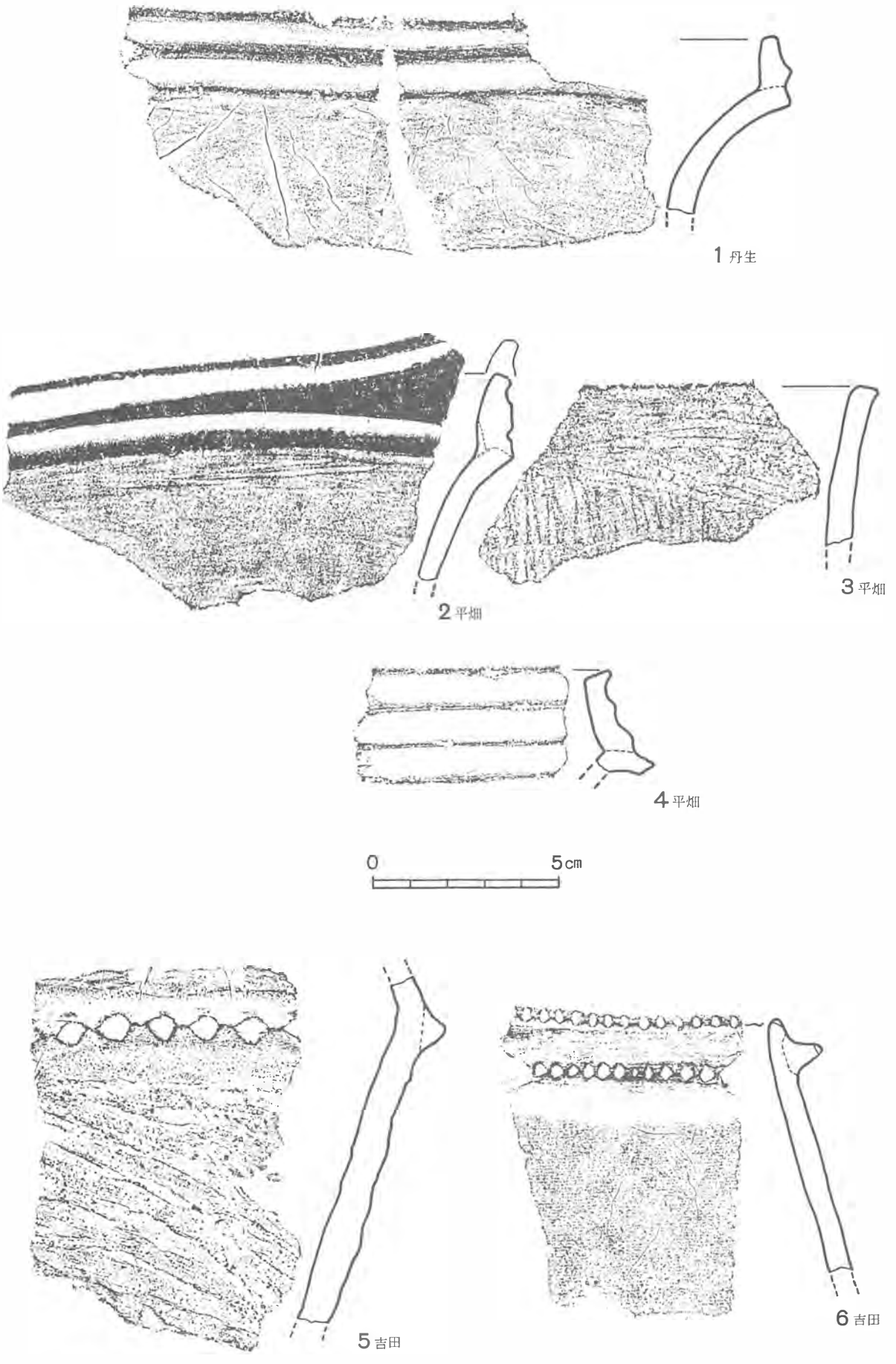
第76図　包含層からの出土土器



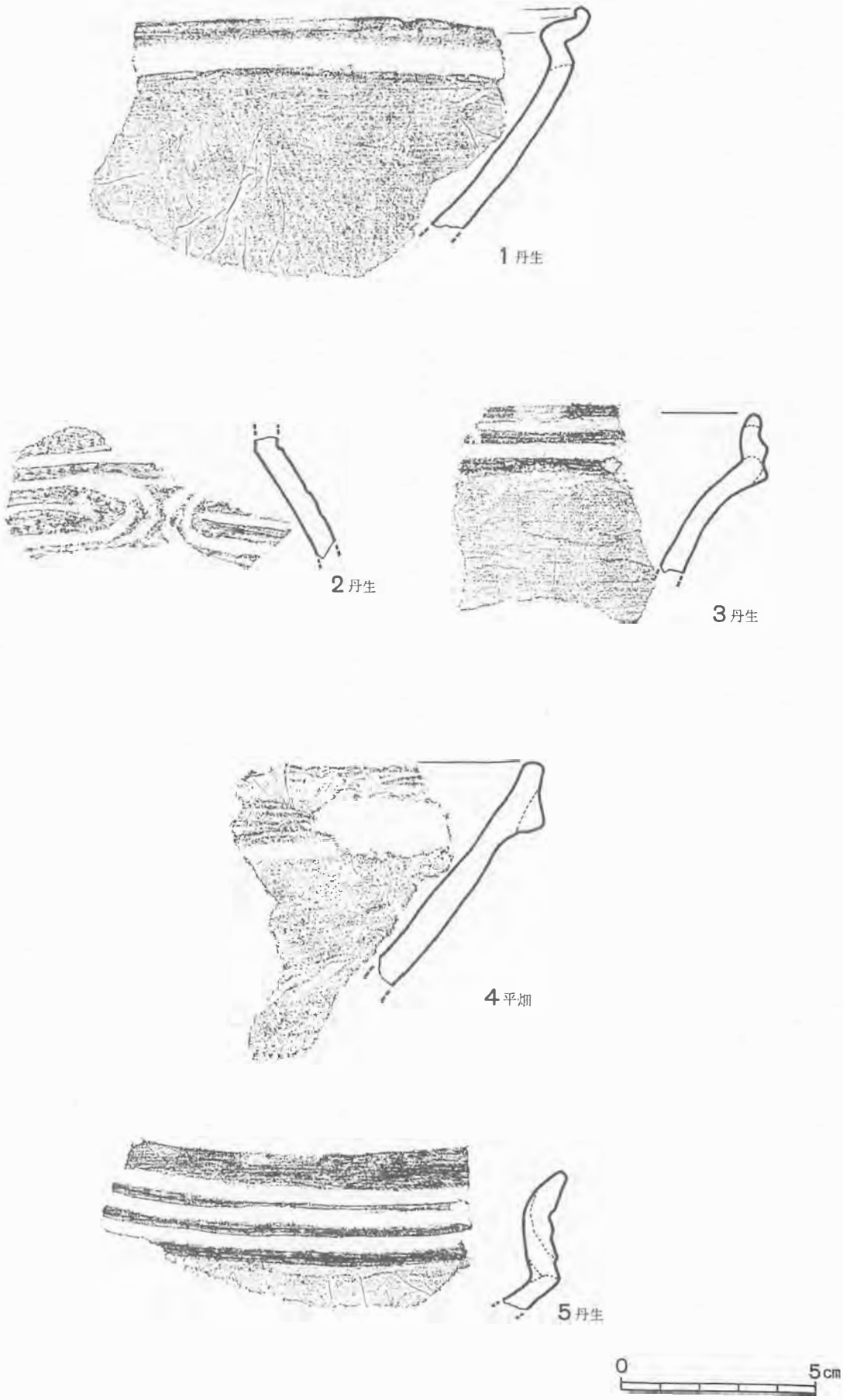
第77図　包含層からの出土土器



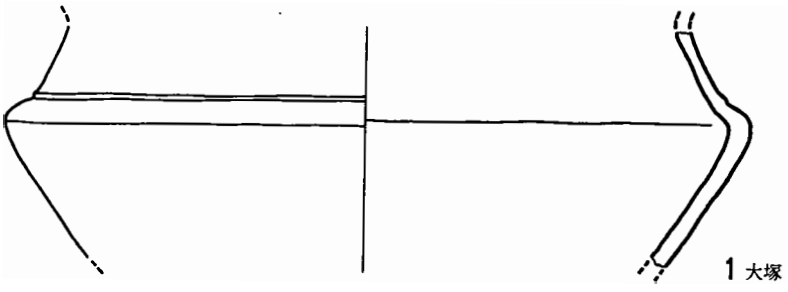
第78図　包含層からの出土土器



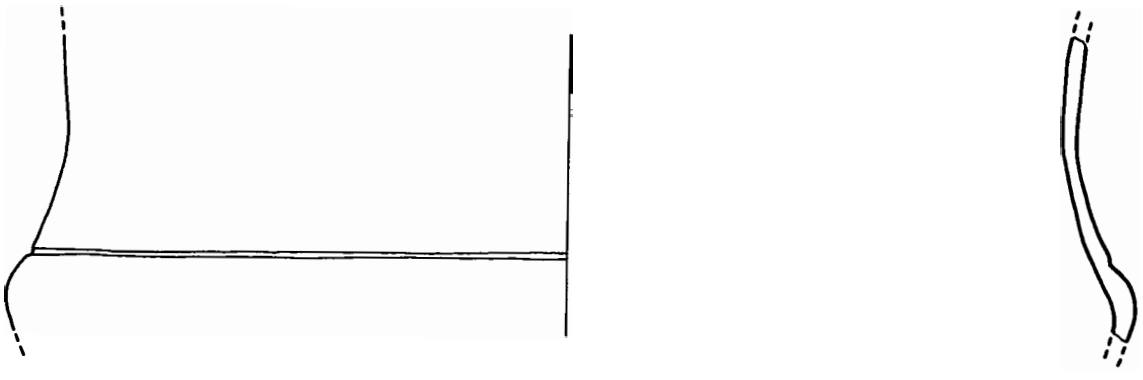
第79図　包含層からの出土土器



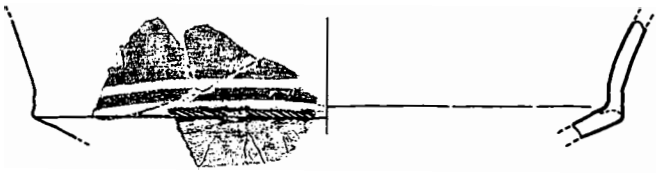
第80図　包含層からの出土土器



1 大塚

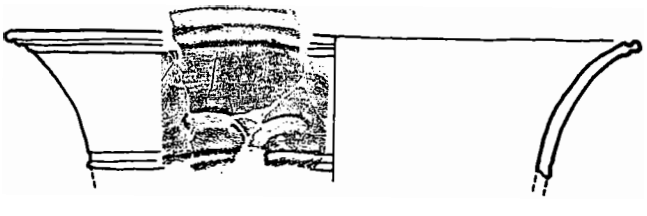


2 吉田



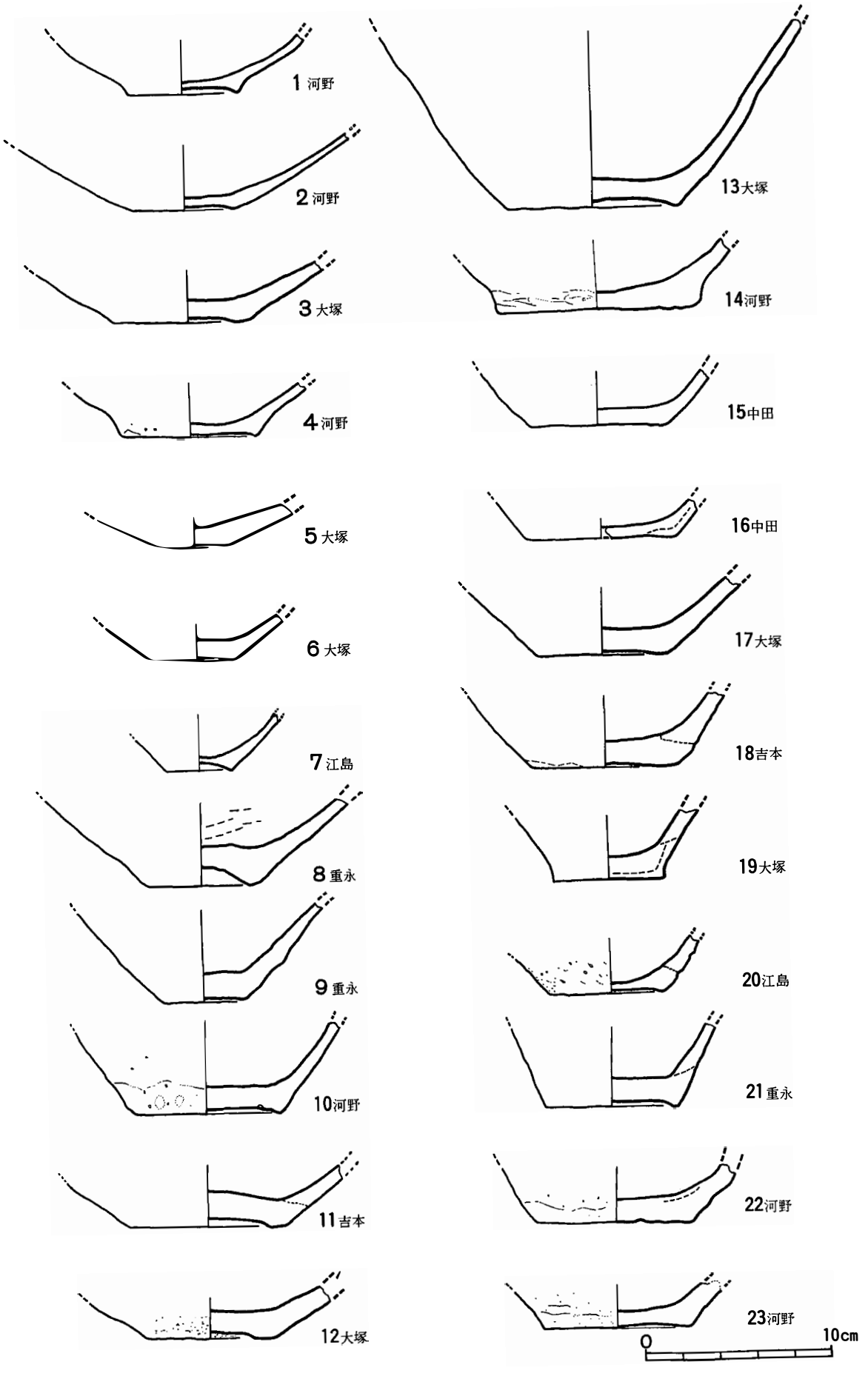
3 吉田

0　5cm

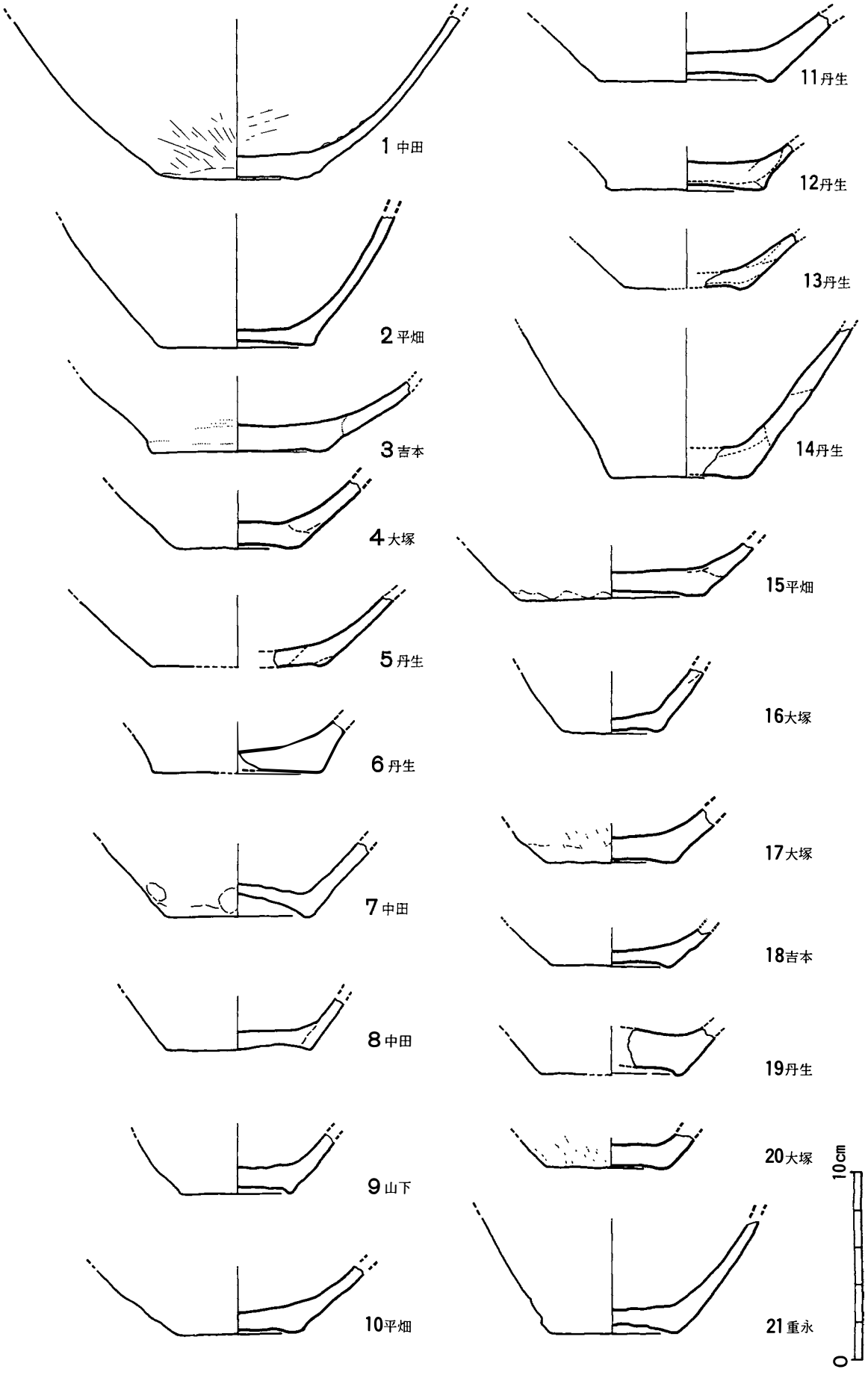


4 吉田

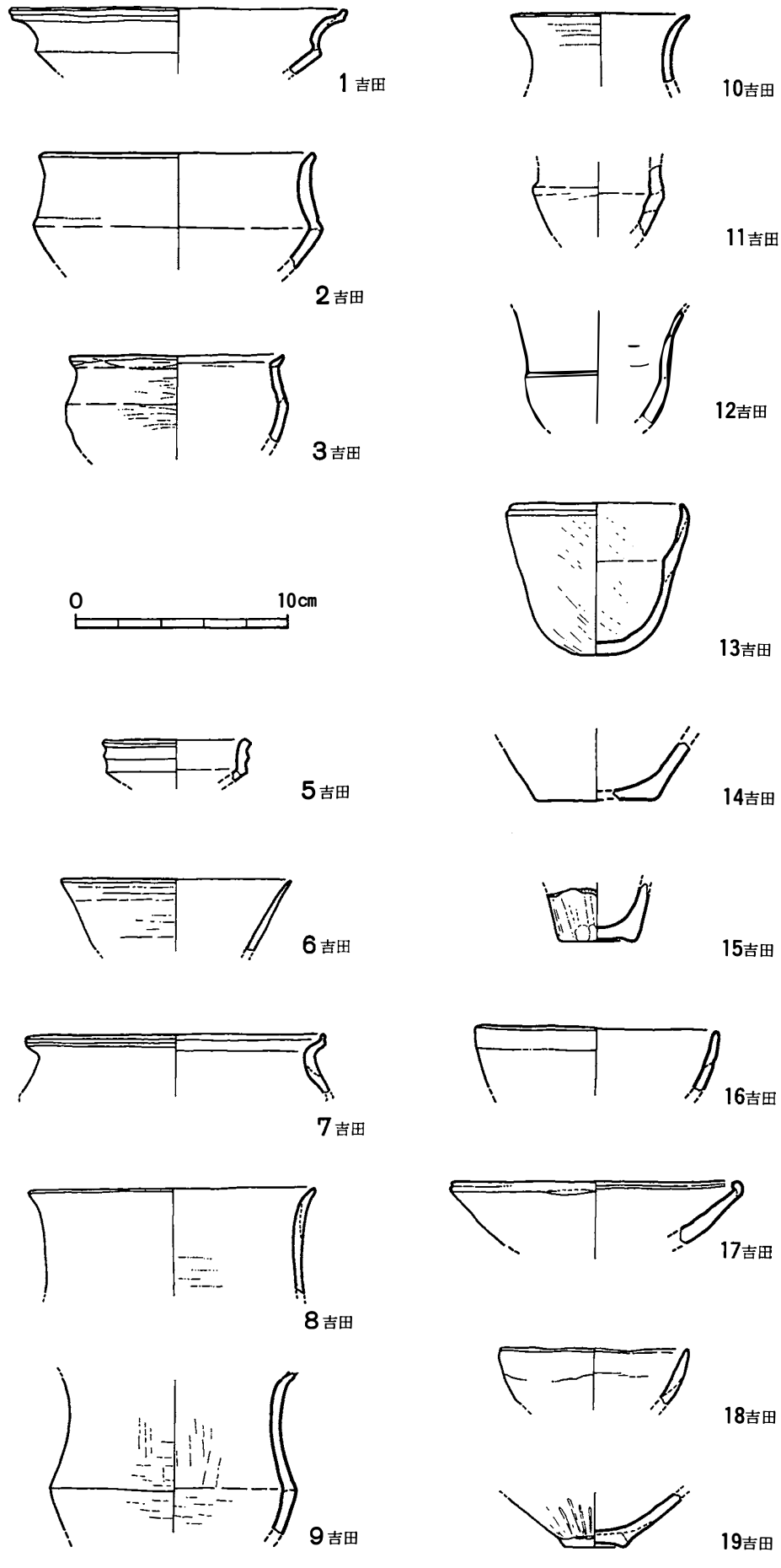
第81図　包含層からの出土土器



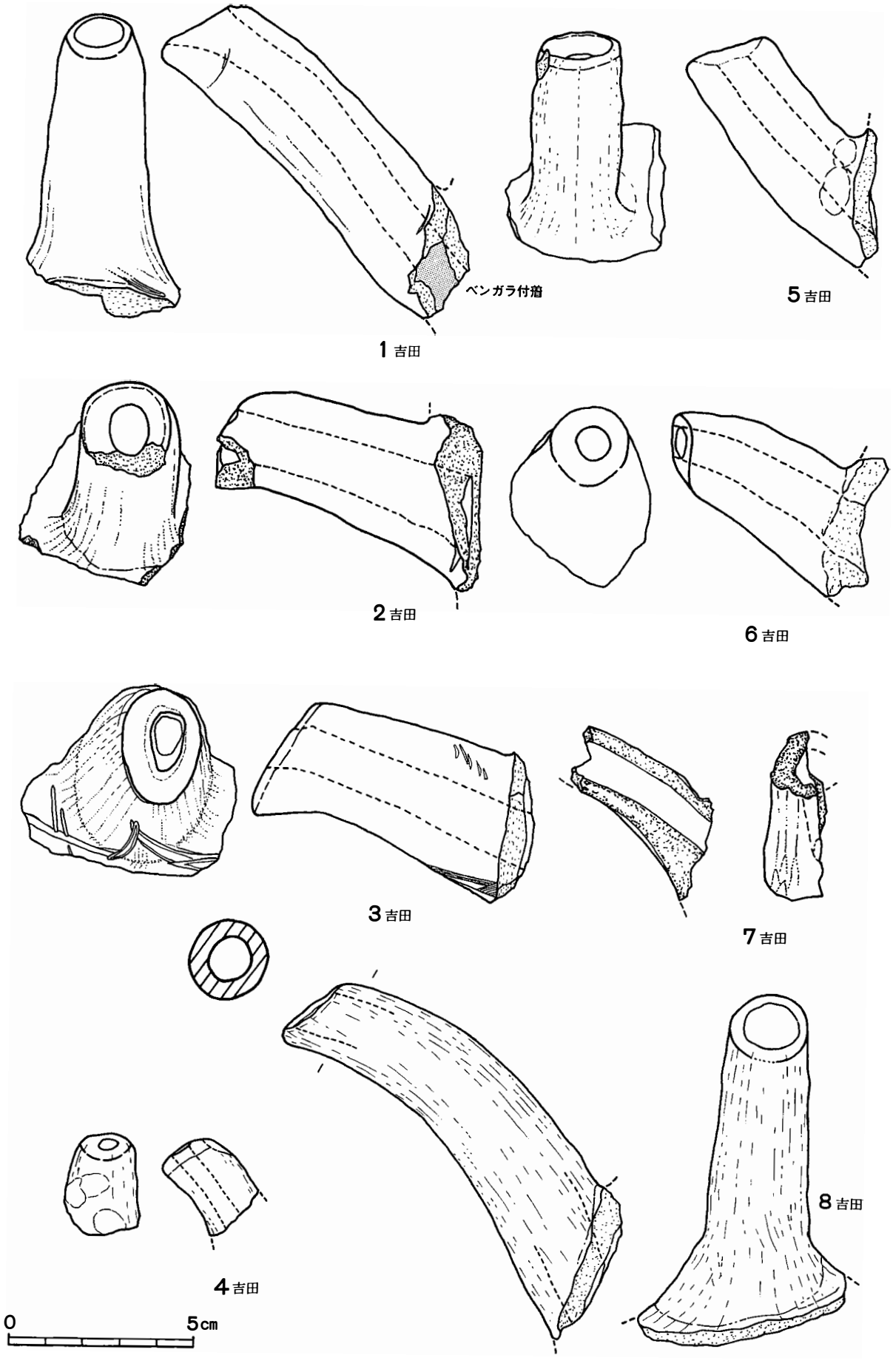
第82図　包含層からの出土土器



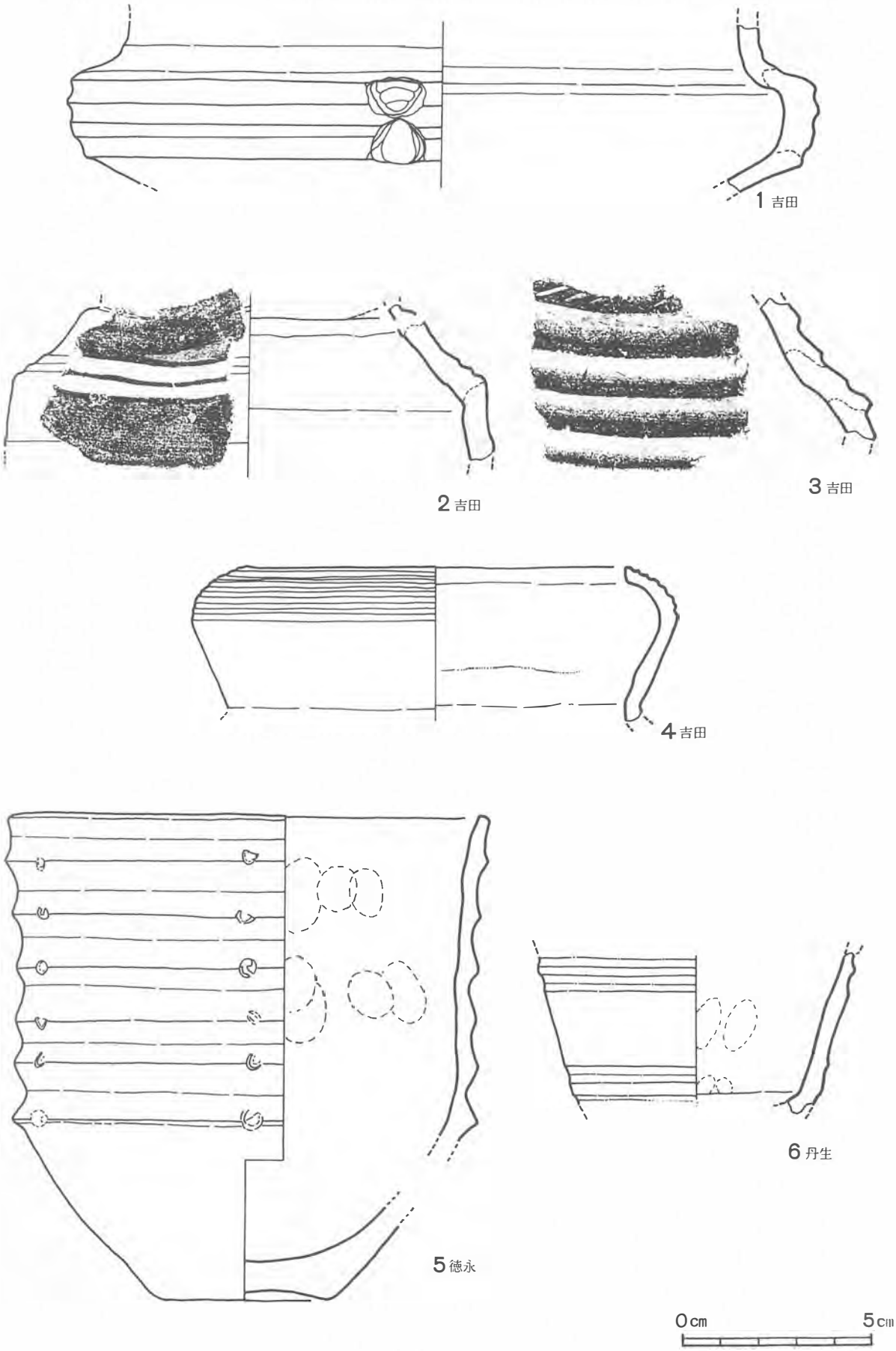
第83図　包含層からの出土土器



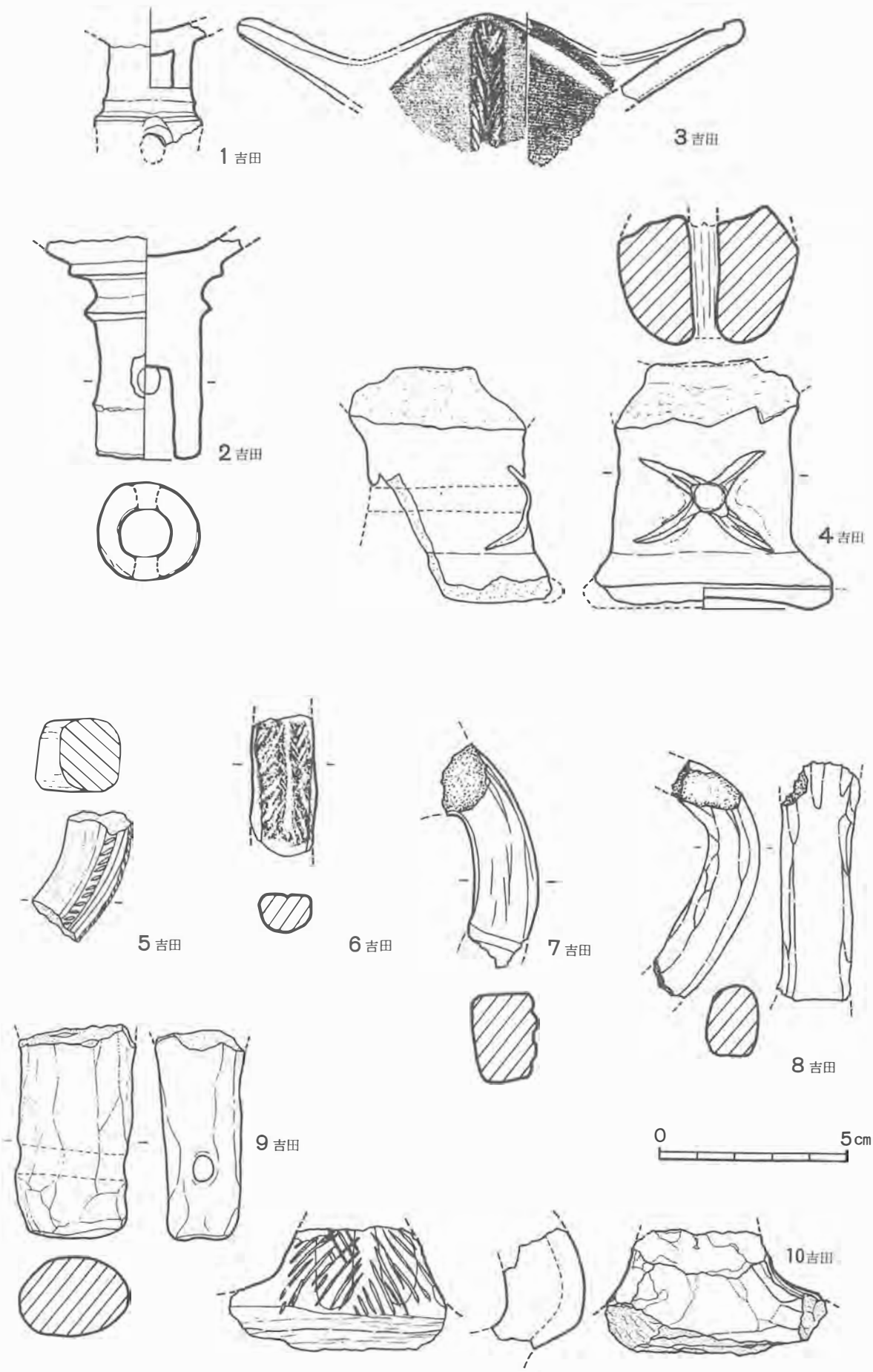
第84図　包含層からの出土土器



第85図　包含層からの出土土器



第86図　包含層からの出土土器



第87図　包含層からの出土土器

第９表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第50図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
50-1	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(226)	(62)			外 にぶい褐 7.5YR6/3 内 にぶい褐 10YR5/3	光沢のあるミガキ 刺突文の押点	
2	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅳ-A	(222)	(75)			外 にぶい黄 2.5Y6/3 内 にぶい黄橙 10YR7/4	光沢のあるていねいなミガキ	包3065, 1570, 5573
3	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅳ-A	212	(76)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR7/3	ていねいなミガキ	包296
4	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(230)	(91)	(227)		外 黒褐色 10YR2/2 内 灰黄褐色 10YR4/6	光沢あるミガキ	
5	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A	(200)	(45)			外 にぶい黄 2.5Y6/3 内 灰黄色 2.5Y6/2	ていねいなミガキ	No173
6	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅱ-G							
7	Ⅷ区	浅鉢Ⅶ-I	(322)	(71)			外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR7/2	条痕のあとナデ	
8	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-F	(200)	(139)	(166)	43	外 灰黄褐色 10YR4/2 内 褐色 7.5YR4/3		No30, 544, 545, 161

土　器　第51図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
51-1	Ⅷ区	浅鉢Ⅲ-D		(55)			外 黒褐色 10YR2/1 内 褐灰色 7.5YR4/1	著しいカーボン付着	
2	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(356)	(127)	(310)		外 黄灰 2.5Y4/1 内 黒褐色 2.5Y3/1	著しいカーボン付着 ていねいなミガキ	包9994
3	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅶ-E	324	(64)	(300)		外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4	ていねいなミガキ ヘラ状工具圧痕	包600, 2793
4	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅶ-E	(340)	(40)	(320)		外 黒褐色 7.5YR2/2 内 黒褐色 7.5YR3/1	ミガキ	包10704
5	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(330)	(81)	(282)		外 褐灰色 10YR5/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	ていねいなつくり 光沢のあるミガキ	包3426, 6536, 8419
6	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅶ-E	270	(68)	250		外 暗灰黄色 2.5Y5/2 内 黄灰色 2.5Y4/1	カーボン付着	包9985
7	Ⅹ Ⅰ区	浅鉢Ⅶ-E	(272)	(81)	(278)		外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 黒褐色 10YR3/2	口縁にベンガラ付着	包135, 166

土　器　第52図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
52-1	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(320)	(57)	(318)		外 にぶい黄褐 内 暗褐色	光沢のあるミガキ	
2	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-D	(260)	(56)	(238)		外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3	光沢のあるていねいなミガキ	No121
3	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(127)	(70)	(244)		外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 黒褐色 10YR3/2	光沢のあるミガキ	包9071
4	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(224)	(42)	(234)		外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 黒褐色 10YR3/1	ていねいなミガキ	包2164
5	Ⅷ区	浅鉢Ⅴ-E	(221)	(96)	(218)		外 にぶい黄橙 内 灰黄褐色	ていねいなミガキ	包318, 500
6	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(138)	(450)	(130)			ミガキ	包10158, 1402
7	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅶ-E	(174)	(52)	(172)		外 黒褐色 2.5Y3/1 内 黒色 2.5Y2/1	ベンガラ付着	包7260
8	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(210)	(72)	(194)		外 黒褐色 内 黒色	光沢のあるミガキ	包10701
9	Ⅹ Ⅲ区	浅鉢Ⅴ-E	(157)	(165)	(320)		外 にぶい黄橙 10YR7/2 内 浅黄橙 10YR8/3	ミガキ	包11207

第10表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第53図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
53-1	XⅢ区	浅鉢Ⅶ-E	(372)	(62)	(334)		外 にぶい黄橙 10YR7/2 内 黒褐色 10YR3/1	ていねいなミガキ	包10473
2	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-E	(374)	(40)			黒褐色	光沢のあるていねいなミガキ	包4206
3	XⅢ区	浅鉢Ⅶ-D	(244)	(70)	(190)		外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR6/4	ミガキ	包6659
4	1301号溝	浅鉢Ⅴ-E	(227)	(54)			外 灰黄褐色 10YR6/2 内 灰黄褐色 10YR5/2	ていねいなつくり 光沢あるミガキ	包7121, 9199
5	XⅢ区	浅鉢Ⅶ-E	(305)	(50)	(255)		外 暗灰黄色 2.5Y4/2 内 黒褐色 10YR3/1	光沢あるミガキ	包409
6	801 号溝	浅鉢Ⅶ-E	(320)	(35)	(268)		外 黄灰 2.5Y4/1 内 暗灰色 2.5Y5/2		
7	XⅢ区	深鉢Ⅶ-D	(278)	(119)	(294)		外 にぶい黄褐 内 黄褐色	ミガキ	包9520, 9526
8	XⅢ区	浅鉢	(188)	(45)			外 灰黄褐色 10YR5/2 内 にぶい黄橙 10YR7/1	ていねいなミガキ	No1075
9	XⅢ区	浅鉢		(72)	(406)		外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	光沢あるミガキ ていねいなつくり	包2895, 2898, 2899

土　器　第54図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
54-1	XⅢ区	深鉢Ⅳ-C	(420)	(149)			外 明黄色 10YR7/6 内 にぶい黄橙 10YR5/3		包10535, 10531, 10532
2	Ⅳ区	深鉢Ⅳ-C	(145)	(114)			外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3	カーボン付着	包123, 100, 397, 102, 74, 73, 93, 94, 89
3	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-C	244	(11)			外 にぶい赤褐 内 灰黄褐色		Z-4
4	XⅡ区	浅鉢Ⅳ-C	(275)	(71)			外 灰黄褐色 内 褐灰色	カーボン付着	包1353
5	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-D	(292)	(188)	(337)		外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4		

土　器　第55図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
55-1	XⅢ区	深鉢Ⅳ-C	(278)	(124)			外 暗灰色 2.5Y4/2 内 にぶい黄 2.5Y6/3		P-29包2942
2	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-C	(348)	(68)			外 にぶい黄橙 内 黒褐色		包2470, 2661
3	XⅢ区	深鉢Ⅴ-C	(339)	(85)			外 暗褐色 7.5YR3/3 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	包2651
4	XⅢ区	深鉢Ⅴ-C	(264)	(105)			外 にぶい褐色 7.5YR5/3 内 灰褐色 7.5YR4/2		包8834
5	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-C	155	(160)	339		にぶい黄褐 10YR5/4		包8430

第11表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第56図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
56-1	Ⅷ区	深鉢Ⅴ-D	(268)	(155)	(298)		暗黄褐色		M-28,359、No90
2	Ⅷ区	深鉢	(145)	(90)			外　灰黄褐色　10YR6/4 内　黒褐色　10YR3/1		
3	Ⅹ Ⅲ区	深鉢Ⅶ-C	368	463	468	55	外　橙色　7.5YR6/6 内　にぶい黄橙　10YR6/3	うすいカーボン付着	包2798, 2799

土　器　第57図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
57-1	Ⅹ Ⅲ区	深鉢Ⅴ-C	(303)	(206)			外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4		No199, 2214、包3900
2	Ⅹ Ⅱ区	深鉢Ⅴ-C	382	(140)	380		外　灰黄褐色　10YR5/2 内　暗褐色　10YR2/3	カーボン付着	
3	901 号溝	深鉢	(380)	(98)			外　浅黄橙　10YR8/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4	条痕	No1
4	Ⅳ区	深鉢Ⅴ-C	(317)	(215)	(329)		外　にぶい黄橙 内　にぶい黄褐	うすいカーボン付着	No264, 271, 272, 268, 281 284, 304

土　器　第58図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
58-1	Ⅹ Ⅲ区	深鉢Ⅶ-C	434	(198)	456		外　浅黄橙　10YR8/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4	雑なつくり	包9509
*2	Ⅹ Ⅲ区	深鉢Ⅶ-C		(282)	272		外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR7/3	カーボン付着	包10794, 10780, 10757, 10778

土　器　第59図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
59-1	Ⅹ Ⅲ区	深鉢Ⅴ-C	240	(145)			外　黒褐色　10YR3/2 内　黒色　10YR2/1		
2	Ⅹ Ⅲ区	深鉢	(235)	(77)			外　浅黄色　2.5Y7/3 内　浅黄色　2.5Y7/4	カーボン付着	No75
3	801 号溝	深鉢		(133)			橙色　7.5YR6/6		No4, 3
4	Ⅷ区	深鉢	(243)	(76)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　にぶい黄橙　10YR7/3		
5	Ⅹ Ⅰ区	深鉢Ⅴ-F	260	(99)			外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR6/3	カーボン付着 ふきこぼれ痕	包2249
6	Ⅷ区	深鉢Ⅴ-F	(188)	(80)	(200)		外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　灰黄褐色　10YR5/2		No147
7	Ⅹ Ⅱ区	深鉢Ⅴ-F	(168)	(101)	(179)		外　黄褐色　2.5Y5/3 内　にぶい黄色　2.5Y6/3		包2589, 2590, 2697, 2725
8	Ⅷ区	深鉢Ⅴ-F	(190)	(176)	179		にぶい黄褐　10YR5/3	カーボン付着	M-28,26,58

第12表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第60図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
60-1	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	(420)	(155)			外　暗黄褐色 内　にぶい黄橙		包2918
2	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	(290)	(153)	(344)		外　明褐色　7.5YR5/6 内　橙色　7.5YR6/6		No59、M-19,20,26
3	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	(332)	(151)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　灰黄褐色　10YR5/2	指圧痕	包2912,2918
4	XⅢ区	深鉢	(320)	(57)			外　明褐色　2.5YR5/6 内　にぶい赤褐　2.5YR5/3	胎土に赤み ていねいなつくり	包5419,5417
5	Ⅷ区	深鉢Ⅶ-C	(265)	(148)	(276)		外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4	カーボン付着	No200

土　器　第61図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
61-1	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	226	(107)			外　黒褐色　2.5YR3/1 内　にぶい黄橙　10YR6/4	カーボン付着	包8452,6567
2	XⅢ区	深鉢Ⅶ-D	(270)	(116)	(290)		外　黒褐色　2.5Y3/1 内　暗灰色　2.5Y5/2		包8914,10640,10635
3	XⅢ区	深鉢	(308)	(63)			外　褐灰色　10YR4/1 内　にぶい黄橙　10YR5/3		包10552,8354
4	1304号溝	深鉢	(392)	(80)			外　明黄褐色　10YR7/6 内　にぶい黄褐　10YR5/3		
5	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	(291)	(54)			外　褐灰色　10YR4/1 内　灰黄褐色　10YR4/2		No609
6	Ⅷ区	深鉢Ⅶ-C	(280)	(137)	(340)		外　にぶい黄橙 内　灰黄褐色		M-8,11、N-8 、No37,172

土　器　第62図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
62-1	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C	(306)	(212)	(318)		外　灰褐色 内　にぶい褐色		包7049,7056,9307,9308
2	XⅢ区	深鉢	(276)	(99)			外　にぶい褐色 7.5YR5/3 内　にぶい褐色 7.5YR5/4	うすいカーボン付着	包8459
3	XⅠ区	深鉢		(160)	(298)		黒褐色　2.5Y3/2	カーボン付着	包2212,2211,1995,2062,2127,2125,2013,1993,2126
4	Ⅷ区	深鉢	(235)	(177)			にぶい黄褐色　10YR4/3	口縁に歪み（うねり）　カーボン付着	M-25,10

第13表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第63図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
63-1	1401号溝 1304号溝	深鉢	(340)	(68)			外　明褐色　7.5YR5/6 内　明黄褐色　10YR6/6		
2	XI区	深鉢	(256)	(92)			外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　にぶい黄褐　10YR5/3	指頭痕	包344, 388
3	XII区	深鉢V-G	(245)	(90)			外　黒褐色　10YR3/1 内　灰黄褐色　10YR4/2	光沢あるミガキ	包2550
4	XII区	深鉢	(340)	(66)			外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR5/4	指頭痕	包2398, 2379
5	XIII区	深鉢VII-D	(286)	(200)	(310)		外　黒褐色　7.5YR3/2 内　灰黄褐色　10YR5/2	貝殻条痕	包5975, 8667, 8521, 8675, 323, 5962, 5311, 5301

土　器　第64図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
64-1	XI区	深鉢	(286)	(121)			外　黒褐色　2.5Y3/1 内　黄灰色　2.5Y4/1		包1499, 1567, 1601, 1611, 1341
2	XII区	深鉢	(334)	(139)			外　黒褐色　10YR3/1 内　黄褐色　2.5YR5/3	全体にカーボン付着 胎土に砂多い	包3612
3	XIII区	深鉢		(124)	(406)		外　黒褐色　7.5YR3/1 内　にぶい褐色　7.5YR6/3		No183, 915, 1956
4	VIII区	深鉢	(218)	(60)			外　にぶい黄褐　10YR4/3 内　にぶい黄褐　10YR5/4		No158
5	XII区	深鉢	(230)	(119)			外　黒褐色　10YR3/1 内　にぶい黄褐　10YR4/3	著しいカーボン付着 ていねいなつくり	包3077
6	VIII区	深鉢IV-G	(161)	(156)	(167)		外　にぶい褐色 内　明褐色	ていねいなつくり	M-23,35,37

土　器　第65図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
65-1	XIII区	浅鉢V-F	(178)	(78)	(183)		外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　褐灰色　10YR4/1	カーボン付着 擬口縁	包2622
2	XIII区	浅鉢IV-F	(175)	(82)	(187)		外　明褐色　7.5YR5/6 内　にぶい黄褐　10YR5/4	全体にカーボン付着 擬口縁	包2006
3	XIII区	浅鉢	(152)	(64)			外　暗褐色　10YR3/3 内　にぶい黄褐　10YR5/4		
4	XII区	深鉢VII-D	(172)	(134)	(168)		外　にぶい黄橙　10YR6/4 内　褐色　7.5YR4/3	稚拙なつくり	包2554, 3406, 3236, 3407, 3408, 3406, 3233, 2554
5	IV区	浅鉢III-C		(42)	(200)		にぶい黄褐色　10YR5/3	ややていねいなつくり	包375
6	XI区	深鉢III-B	(119)	(98)	(106)		外　黒褐色　10YR3/2 内　にぶい黄褐　10YR6/4	4対の文様集約部あり　羽状文	包224
7	VII区	浅鉢	(197)	(81)	(193)		外　にぶい橙色　7.5YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR6/4		
8	801 号溝	浅鉢VII-F	(206)	(93)	(210)		外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　にぶい黄橙　10YR6/4	カーボン付着 ていねいなミガキ	
9	VIII区	浅鉢	(130)	(100)	(143)		外　赤褐色　5YR4/6 内　にぶい黄褐　10YR5/4	カーボン付着	M-25
10	XII区	浅鉢VII-F	(158)	(64)	(132)		外　黒褐色　7.5YR3/1 内　灰褐色　7.5YR5/2		包1444
11	XIII区	浅鉢	(124)	(100)	(126)		外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　にぶい黄橙　10YR6/3	カーボン付着	No4, 5, 652
12	VIII区	浅鉢	(268)	(49)	(270)		外　暗褐色　10YR3/3 内　にぶい黄褐　10YR5/4		M-35

第14表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第66図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
66-1	XⅢ区	浅鉢Ⅴ	(294)	(91)	(301)		外 にぶい褐 7.5YR5/4 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	包7415
2	XⅠ区	浅鉢	(180)	(60)	(190)		外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 灰黄褐色 10YR5/2		包1352
3	XⅢ区	浅鉢	(178)	(74)	(189)		外 灰黄褐色 10YR5/2 内 にぶい黄橙		包9041
4	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-G	(123)	(66)	(124)		外 褐色 7.5YR4/4 内 暗褐色 10YR3/3	カーボン付着	包10286
5	XⅢ区	浅鉢	(100)	30			浅黄橙 10YR8/4	底部未製品	包5420
6	1303 住	浅鉢Ⅴ-H		(48)			にぶい黄橙 10YR7/4 底 浅黄橙 10YR8/4		
7	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-G	226	119	156		外 褐色 7.5YR4/4 内 灰褐色 7.5YR4/2	カーボン付着 ほぼ完形	包1869
8	Ⅷ区	浅鉢		(70)	(119)		外 黄褐色 10YR5/4 内 灰黄褐色 10YR5/2	ていねいなミガキ	包193
9	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-H	(109)	540			にぶい黄橙 10YR6/4		包8073

土　器　第67図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
67-1	Ⅷ区	浅鉢Ⅲ-A		(65)			外 にぶい黄褐 10YR4/3 内 褐色 7.5YR4/4	羽状文	M-28
2	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(44)			外 褐色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	包173
3	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-A		(44)			黒褐色 10YR3/2	羽状文 穿孔あり	包808
4	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(40)			外 灰黄褐色 10YR5/2 内 にぶい黄橙 10YR6/3	ていねいなミガキ	M-28
5	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(41)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 灰黄褐色 10YR5/2		P-13,14
6	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-A		(20)			黒褐色 2.5Y3/1	羽状文	包6409
7	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-A		(33)			外 灰黄褐色 10YR6/2 内 にぶい黄橙 10YR7/3		包5146
8	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-A		(34)			外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	包8274
9	802 号溝	浅鉢Ⅳ-A		(34)			外 灰黄褐色 10YR4/2 内 灰黄褐色 10YR6/2		
10	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(53)			外 褐灰色 10YR6/1 内 灰黄褐色 10YR5/2		包206
11	XⅡ区	浅鉢Ⅳ-A		(46)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR6/4	小型のコネ鉢形	包50
12	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(24)			外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 橙色 5YR6/6	穿孔あり	包81

第15表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第68図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
68-1	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-A		(75)			外 暗褐色 7.5YR2/3 内 灰褐色 5YR4/2	ていねいなミガキ	包17,18,1842
2	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(30)			外 黒褐色 10YR3/1 内 にぶい黄橙 10YR6/4	光沢のあるミガキ	包142
3	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-A		(50)			外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	ていねいなミガキ	包5011
4	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(28)			外 灰黄褐色 10YR4/2 内 にぶい黄褐 10YR5/4		包155
5		浅鉢Ⅲ-A		(27)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3		
6	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-A		(41)			外 にぶい黄橙 7.5YR4/2 内 灰褐色 7.5YR4/2	ていねいなミガキ	
7	Ⅶ区	浅鉢Ⅳ-A		(54)			外 褐灰色 10YR5/1 内 灰黄褐色 10YR5/2	羽状文 押点文	包180
8	Ⅶ区	浅鉢Ⅲ-A		(23)			外 灰黄褐色 10YR5/2 内 黒褐色 10YR5/1	ていねいなミガキ	包116
9	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-A		(20)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 浅黄橙 10YR8/4		包237
10	Ⅷ区	浅鉢Ⅲ-A		(22)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR5/3		
11	1002号土壙	浅鉢Ⅲ-A		(31)			外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR7/4		
12	1304号溝	深鉢Ⅲ-A		(44)			にぶい黄橙 10YR6/4	羽状文	No70
13	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-A		(19)			黒色 10YR2/1	光沢あるていねいなミガキ	包6295

土　器　第69図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
69-1	801 住	浅鉢Ⅳ-D		(71)			にぶい黄褐色 10YR5/3	ていねいなミガキ	包613
2	XⅠ区	浅鉢Ⅳ-D		(46)			外 灰黄褐色 10YR4/2 内 にぶい黄褐 10YR7/3	ていねいなミガキ	包2274
3	XⅡ区	浅鉢Ⅳ-D		(30)			外 黒褐色 10YR3/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	ていねいなミガキ	包2892
4	XⅢ区	浅鉢		(21)			外 黒褐色 10YR3/2 内 黒褐色 10YR2/1	カーボン付着	包1598
5	XⅢ区	浅鉢		(27)			外 黄灰色 2.5Y4/1 内 黒褐色 2.5Y3/1		包11219
6	XⅠ区	浅鉢Ⅴ-E		(23)			外 黒褐色 5YR3/1 内 灰褐色 5YR4/2		包2068
7	805 号土壙	深鉢		(39)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい褐色 10YR5/3	ていねいなミガキ	
8	Ⅷ区	浅鉢		(31)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 黒褐色 10YR3/1	胎土に砂多い	包41
9	XⅢ区	浅鉢Ⅴ-E		(29)			外 褐灰色 10YR6/3 内 にぶい黄褐 10YR5/3		包5777
10	Ⅷ区	浅鉢Ⅴ-E		(48)			黒褐色 5YR3/1	光沢あるミガキ	

第16表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第70図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
70-1	XⅢ区	浅鉢V-E		(40)			外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 灰黄褐色 10YR4/2	ていねいなミガキ	包3305
2	XⅢ区	浅鉢V-E		(53)			外 灰黄褐色 内 にぶい黄橙 10YR7/4		包4072
3	XⅢ区	浅鉢V-E		(41)			外 黒褐色 10YR3/1 内 暗褐色 10YR3/3	ていねいなミガキ	包4029, 4181
4	Ⅷ区	浅鉢V-E		(42)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 褐灰色 10YR2/1		
5	XⅢ区	浅鉢V-E		(32)			外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2		包6678
6	XⅢ区	浅鉢V-E		(41)			外 黒褐色 7.5YR3/1 内 にぶい褐色 7.5YR5/3	ていねいなミガキ	包5852
7	XⅢ区	浅鉢		(22)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR6/4	ていねいなミガキ	包6498
8	XⅢ区	浅鉢		(33)			外 褐灰色 10YR4/1 内 褐灰色 7.5YR4/1		包8391
9	Ⅷ区	浅鉢V-E		(22)			外 褐灰色 10YR5/1 内 褐灰色 10YR4/1		包138
10	XⅡ区	浅鉢		(38)			外 黒褐色 7.5YR2/2 内 黒褐色 7.5YR3/2	カーボン付着	包671
11	XⅢ区	浅鉢Ⅳ-D		(22)			外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR5/2	光沢あるミガキ	包2701
12	XⅢ区	浅鉢		(28)			外 黒褐色 2.5Y3/1 内 暗オリーブ褐 2.5Y3/3	光沢あるミガキ	包1994

土　器　第71図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
71-1	XⅢ区	浅鉢V-E		(49)			黒褐色 10YR3/1	光沢あるていねいなミガキ	包2420
2	Ⅷ区	深鉢V-E		(40)			外 暗灰黄色 2.5Y5/2 内 黒褐色 2.5Y3/1	光沢あるていねいなミガキ	
3	XⅢ区	浅鉢V-E		(46)			外 灰黄褐色 10YR4/2 内 黒褐色 10YR3/1		包5496, 1673
4	XⅠ区	浅鉢		(74)			暗灰黄色 2.5Y5/2		包627, 867, 904, 980
5	XⅢ区	浅鉢		(22)			外 暗褐色 10YR3/3 内 黒褐色 10YR2/2	カーボン付着	包4157
6	XⅢ区	浅鉢V-E		(45)			黒褐色 10YR3/1	ていねいなミガキ やや雑なつくり	包9960
7		浅鉢		(32)			外 黄橙 10YR8/6 内 にぶい黄橙 10YR7/3	文様部分は稚拙	
8	XⅠ区	深鉢V-C		(32)			外 褐灰色 10YR4/1 内 灰黄褐色 10YR4/2	カーボン付着	
9	Ⅷ区	深鉢V-C		(38)			黄灰褐色 10YR5/2		
10	XⅢ区	浅鉢		(55)			外 灰黄褐色 10YR4/2 内 にぶい黄褐 10YR5/3	ていねいなミガキ	包6830
11	XⅢ区	浅鉢		(45)			外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄褐 10YR5/3		包10609

第17表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第72図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
72-1	XⅢ区	浅鉢		(55)			外　黄灰色　2.5Y4/1 内　黒褐色　2.5Y3/1		包4585
2	XⅢ区	〃		(33)			外　灰黄褐色　10YR5/2 内　にぶい黄褐　10YR5/3	ていねいなミガキ	包3162
3	XⅢ区	〃		(63)			外　黒褐色　10YR3/1 内　褐灰色　10YR4/1		包3498
4	802 号溝	〃		(65)			外　褐灰色　10YR4/1 内　灰黄褐色　10YR5/2		
5	XⅢ区	〃		(33)			黄灰色　2.5Y4/1		包9185
6	1102号溝	〃		(22)			外　橙色　7.5YR7/6 内　橙色　7.5YR6/6	ていねいなミガキ	
7	XⅢ区	〃		(44)			外　褐灰色　10YR4/1 内　灰黄褐色　10YR4/1		包10798
8	XⅢ区	〃		(32)			外　灰黄褐色　10YR4/2 内　黒色　10YR2/1	ていねいなミガキ	包4514
9	XⅢ区	〃		(55)			外　灰黄褐色　10YR4/2 内　褐灰色　10YR4/1	ていねいなミガキ	包6830
10	XⅢ区	〃　V-E		(71)			外　にぶい黄褐　10YR5/2 内　灰黄褐色　10YR4/2	カーボン付着	包991
11	Ⅷ区	〃		(23)			黒褐色　10YR2/2	光沢あるていねいなミガキ	

土　器　第73図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
73-1	Ⅷ区	浅鉢Ⅷ-E		(54)			黒褐色　5YR3/1		
2	XⅡ区	〃　Ⅷ-E		(38)			外　黒褐色　7.5YR2/2 内　黒褐色　7.5YR3/2	カーボン付着	包679, 691
3	Ⅷ区	〃　Ⅷ-E		(32)			外　黒褐色　10YR3/1 内　黒褐色　10YR2/2		包176
4	802 号溝	〃　Ⅷ-E		(52)			外　褐灰色　10YR4/1 内　黒褐色　10YR5/2		
5	XⅢ区	〃　Ⅷ-E		(26)			外　黒褐色　10YR3/1 内　褐灰色　10YR4/1		包4375
6	Ⅷ区	〃		(34)			にぶい黄橙　10YR7/3		No67
7	Ⅷ区	〃		(30)			外　にぶい黄橙　10YR7/3 内　灰黄褐色　10YR4/2		No177
8	XⅢ区	〃　Ⅷ-E		(22)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　黒褐色　10YR4/1		包6517
9	XⅢ区	〃　Ⅷ-E		(14)			黒褐色　2.5Y3/1	光沢あるミガキ	包4499
10	Ⅷ区	〃　Ⅷ-E		(32)			外　灰黄褐色　10YR6/2 内　黒褐色　10YR3/1	ていねいなミガキ	No144
11	XⅢ区	〃		(25)			外　オリーブ黒　10Y3/1 内　黒色　5Y2/1	光沢あるていねいなミガキ	包11204
12	Ⅷ区	〃　Ⅷ-E		(43)			黒褐色　10YR3/1		No303
13	1001号溝	〃　Ⅷ-E		(46)			黒褐色　5YR2/1	光沢あるていねいなミガキ	No10

第18表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第74図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
74-1	Ⅸ区	深鉢		(30)			灰黄色　2.5Y6/2	胎土に砂多い	包222
2	XⅢ区	深鉢Ⅴ-C		(54)			外　にぶい黄橙 10YR5/3 内　にぶい黄橙 10YR6/4		包8343
3	Ⅷ区	浅鉢Ⅳ-A		(40)			褐灰色　10YR4/1		No145
4	Ⅳ区	深鉢Ⅴ-C		(35)			外　浅黄橙　10YR8/4 内　にぶい黄橙　10YR7/3		
5	Ⅷ区	〃　Ⅶ-C		(65)			外　灰オリーブ　5Y5/2 内　灰黄色　2.5Y6/2		
6	Ⅷ区			(23)			浅黄橙　10YR8/4		
7	Ⅷ区	深鉢		(43)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　灰黄褐色　10YR5/2	カーボン付着	No98
8	Ⅷ区	〃　Ⅶ-C		(94)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　にぶい黄褐　10YR5/4		
9	XⅢ区	〃　Ⅶ-C		(82)			にぶい黄橙　10YR7/4	胎土に砂多い	No25, 包11025,

土　器　第75図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
75-1	XⅢ区	深鉢Ⅶ-C		(272)	(86)		外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　にぶい黄褐　10YR5/3	カーボン付着	包9864
2	XⅢ区	〃　Ⅶ-C		(294)	(73)		外　暗灰黄色　2.5Y5/2 内　黄褐色　2.5Y5/2		包520
3	1303 住	〃		(65)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　にぶい黄褐　10YR7/3		No674
4	802号溝	浅鉢		(59)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　にぶい黄橙　10YR7/4		
5	XⅢ区	深鉢		(41)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　褐灰色　10YR4/1		包2137
6	Ⅷ区	〃		(31)			にぶい黄褐色　10YR5/3		
7		〃		(37)			外　にぶい黄橙　10YR5/2 内　灰黄褐色　10YR5/3		包3840
8	802号溝	浅鉢Ⅳ-A		(40)			外　にぶい黄褐　10YR5/3 内　にぶい黄橙　10YR6/3	カーボン付着	
9	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-C		(47)			外　にぶい黄橙　10YR6/3 内　にぶい黄橙　10YR6/4		No151

第19表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第76図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
76-1	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-C		(60)			外 にぶい黄褐 10YR4/3 内 褐色 10YR4/6	羽状文 カーボン付着	730
2	Ⅷ区	浅鉢Ⅶ-F		(51)			黄褐色 2.5Y5/4		
3	XⅢ区	注口土器		(35)			黒褐色 10YR3/2		包2349
4	XⅠ区	浅鉢		(51)			灰黄褐色 10YR4/2		包693
5	Ⅷ区	〃		(36)			にぶい黄橙 10YR6/3		包120
6	Ⅷ区	〃		(39)			外 黒褐色 10YR3/1 内 にぶい黄褐 10YR5/3		M55
7	Ⅷ区	深鉢		(38)			外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR7/4		包563
8	Ⅷ区	浅鉢Ⅲ-A		(37)			外 褐灰色 10YR6/1 内 浅黄橙 10YR8/4	羽状文	包5

土　器　第77図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
77-1	XⅢ区	深鉢Ⅰ-A		(76)	(144)		外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR6/3	刺突文、磨消文	包3052, 3892, 3886, 6257, 7962, 8022, 8036
2	Ⅸ区	深鉢		(35)			にぶい黄色 2.5Y6/4	磨消縄文	包1
3	Ⅸ区			(43)			にぶい黄橙 10YR6/4		
4	XⅢ区	深鉢Ⅳ-C		(29)			外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR6/4	カーボン付着	
5	501号土壙	深鉢Ⅸ-Ⅰ		(64)			外 明赤褐色 5YR5/6 内 にぶい赤褐 5YR5/4		No2
6	Ⅸ区	浅鉢		(28)			にぶい黄色 2.5Y6/3	磨消縄文	包10
7	Ⅷ区			(43)			外 にぶい黄橙 10YR7/2 内 にぶい黄橙 10YR7/3		No183
8	XⅢ区			(19)			暗褐色 10YR3/3	磨消縄文	包3088
9	XⅢ区	深鉢		(24)			にぶい黄橙 10YR7/4	羽状文 カーボン付着	包3203
10	XⅢ区	深鉢		(32)			外 にぶい橙 7.5YR6/4 内 浅黄橙 10YR8/4		包10177
11	Ⅲ区	深鉢		(53)			外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 にぶい黄橙 10YR6/4		
12	Ⅸ区	深鉢		(55)			外 暗灰黄色 2.5YR5/2 内 浅黄色 2.5YR7/3		No130

第20表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第78図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
78-1	XⅢ区	浅鉢		(32)			外 褐灰色 10YR4/1 内 にぶい黄褐 10YR4/3	羽状文	包9704
2	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-A		(35)			外 にぶい黄褐 10YR4/3 内 にぶい黄橙 10YR6/3	羽状文	包1064, 1080
3	Ⅷ区	深鉢		(62)			にぶい黄橙 10YR7/3		包248
4	Ⅶ区	浅鉢Ⅶ-J	(75)	(66)	(102)		外 灰黄褐色 10YR4/2 内 灰黄褐色 10YR5/2		No10
5	XⅢ区	深鉢		(16)			灰黄色 2.5Y6/2	板目圧痕	包4916
6	XⅢ区	浅鉢		(20)			外 褐灰色 10YR4/1 内 にぶい黄橙 10YR7/3	羽状文	包3214
7	1301号溝	深鉢		(25)			外 褐灰色 7.5YR4/1 内 黒褐色 7.5YR3/1	光沢あるミガキ 羽状文	
8	1301号溝 1304号溝	浅鉢		(41)			外 灰褐色 7.5YR4/2 内 灰黄褐色 10YR4/2	光沢あるていねいなミガキ	
9	XⅡ区			(28)			浅黄褐色 10YR8/3	穿孔あり	P-16
10	XⅢ区	深鉢		(55)			外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 灰黄褐色 10YR4/2		包3840
11	XⅢ区	〃		(28)			にぶい黄褐色 10YR5/3	平行文 カーボン付着	包8667
12	Ⅷ区	深鉢		(29)			外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 浅黄橙 10YR8/4	斜交文	
13	XⅡ区	浅鉢		(20)			外 にぶい橙 7.5YR7/4 内 にぶい橙 7.5YR6/4	線刻あり	包260
14	801住	浅鉢		(28)		(35)	外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 灰黄色 2.5Y6/2	木葉文	

土　器　第79図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
79-1	Ⅳ区	浅鉢		(51)			外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 にぶい黄橙 10YR6/3		包365, 380
2	XⅠ区	深鉢		(53)			にぶい黄色 2.5Y6/3		包328
3	802 号溝	浅鉢		(42)			灰黄褐色 10YR5/2	ていねいなミガキ	
4	302 号溝	浅鉢		(27)			黒色 10YR2/1	光沢あるていねいなミガキ	
5	XⅡ区	深鉢Ⅸ-I		(91)			外 黄灰色 2.5Y4/1 内 淡黄色 2.5Y8/4	刻目突帯文	包2355
6	XⅡ区	〃 Ⅸ-I		(67)			外 にぶい橙 7.5YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4	刻目突帯文	包2209

第21表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第80図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
80-1	XⅢ区	浅鉢Ⅷ-E		(56)			外　灰黄褐色　10YR5/2 内　にぶい黄褐 10YR5/3		No78
2	1301 住	深鉢		(26)			外　黒褐色　10YR3/2 内　灰褐色　10YR4/2		
3	1301 住	浅鉢Ⅳ-E		(40)			外　にぶい黄橙 10YR6/3 内　黒褐色　10YR3/2	ていねいなミガキ	No46
4	1301 住	浅鉢		(56)			外　黄灰色　2.5Y4/1 内　灰黄色　2.5Y6/2		No69
5	1301 住	浅鉢Ⅳ-A		(36)			外　にぶい黄橙 10YR6/4 内　明黄褐色　10YR6/6	ていねいなミガキ	No89

土　器　第81図

番号	出土地点	器種	口径	器高 残存高	胴部 最大径	底径	色調	備考	登録番号
81-1	XⅢ区	深鉢Ⅴ-D		(92)	(296)		外　橙色　7.5YR6/6 内　にぶい黄橙　10YR6/4	光沢あるていねいなミガキ	包10080, 11485
2	XⅠ区	〃　Ⅴ-D		(150)	(456)		外　浅黄橙　10YR8/3 内　灰白色　10YR8/2		包1434, 1436, 1509, 1540
3	XⅢ区	浅鉢Ⅲ-C		(46)	(238)		外　浅黄色　2.5Y7/4 内　浅黄橙　10YR8/4	羽状文	P-125,126
4	1201 住	深鉢Ⅲ-C	(253)	(56)			黒褐色　10YR2/2	光沢あるていねいなミガキ	No4, 15

第22表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第82図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
82-1	XⅢ区	浅鉢		(31)		61	外 にぶい橙 5YR7/4 内 黒褐色 5YR2/1	カーボン付着	包3440, 8431
2	801号溝	〃		(38)		54	外 明黄褐色 10YR7/6 内 黒色 10YR7/1		No20, 30, 71
3	XⅢ区	〃		(31)		70	灰黄色 2.5Y6/2	ていねいなミガキ	
4	XⅢ区	〃		(24)		71	外 にぶい橙 7.5YR7/4 内 灰黄褐色 10YR4/2	砂粒多い	包2942
5	802号溝	〃		(22)		34	外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 灰黄色 2.5Y6/2	ていねいなミガキ	
6	XⅢ区	〃		(24)		45	外 橙色 7.5YR7/6 内 灰黄褐色 10YR5/2	カーボン付着	包7373
7	1101号溝	浅鉢		(25)		34	外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 浅黄色 2.5Y7/3	カーボン付着	No49
8	XⅢ区	深鉢		(42)		56	外 にぶい橙色 7.5YR6/4 内 にぶい褐色 7.5YR5/3		包8363
9	XⅢ区	〃		(47)		44	にぶい黄橙色 10YR6/3	ていねいなミガキ	包8380
10	XⅠ区	〃		(46)		78	外 にぶい橙 7.5YR6/4 内 にぶい褐 7.5YR5/3		
11	801号溝	〃		(33)		82	外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 褐灰色 10YR6/1		No515
12		〃		(28)		69	外 橙色 5YR6/6 内 にぶい黄橙 10YR6/3	砂粒多い	
13	Ⅶ区	〃		(97)		90	にぶい黄橙 10YR7/4		No10
14	Ⅷ区	〃		(28)		107	外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石多い	No293, 378
15	XⅠ区	〃		(29)		74	外 明黄褐色 10YR6/6 内 にぶい黄橙 10YR7/4		包388
16	XⅠ区	〃		(14)		80	外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3		包390
17	XⅠ区	〃		(40)		70	外 にぶい橙 7.5YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR7/3	カーボン付着	包919
18	801 住	〃		(37)		77	外 にぶい褐色 7.5YR5/3 内 にぶい黄橙 10YR7/4	内面に砂粒付着	No779
19	Ⅷ区	〃		(35)		59	外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 灰褐色 7.5YR5/2	光沢あるミガキ	M38,42,46
20	XⅠ区	〃		(26)		60	外 橙色 7.5YR6/6 内 にぶい黄褐 10YR5/3		包850
21	XⅢ区	〃		(42)		72	外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR7/3		
22	XⅢ区	〃		(31)		84	外 にぶい橙色 7.5YR7/3 内 にぶい橙色 7.5YR7/4		包6570
23	XⅢ区	〃		(24)		80	外 にぶい橙色 7.5YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR7/3		P45

第23表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第83図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
83-1	XⅢ区	深鉢		(83)		90	外 明褐色 7.5YR5/6 内 にぶい黄褐 10YR5/4	カーボン付着	包4030, 6410
2	XⅢ区	〃		(69)		82	外 灰黄褐色 10YR5/2 内 にぶい黄褐 10YR5/3	条痕	包2254
3	XⅢ区	〃		(37)		93	外 明黄色 10YR7/6 内 にぶい黄 2.5Y6/3	カーボン付着	包2917
4	XⅢ区	〃		(55)		65	にぶい褐色 7.5YR5/4		包72, 79, 80
5	XⅠ区	〃		(34)		91	外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 灰黄褐色 10YR6/2		包452
6	XⅢ区	〃		(20)		91	外 浅黄橙 10YR8/4 内 明褐灰色 7.5YR7/2		包6187
7	XⅢ区	〃		(20)		98	外 明褐色 7.5YR5/6 内 にぶい黄褐 10YR5/4		包8748
8	XⅢ区	〃		(24)		76	外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 黄褐色 2.5Y5/4	ていねいなミガキ	包8267
9	1306号溝	〃		(34)		58	外 明黄褐色 10YR6/8 内 にぶい黄橙 10YR7/3	カーボン付着	No801, 545
10	XⅢ区	〃		(31)		68	外 にぶい黄橙 10YR6/3 内 にぶい黄褐 10YR5/3		包8846
11	XⅠ区	〃		(29)		93	外 橙色 7.5YR7/6 内 灰褐色 7.5YR5/2		包830, 832
12		〃		(20)		85	外 橙色 7.5YR7/6 内 にぶい黄橙 10YR6/3	ていねいなミガキ	
13	XⅢ区	〃		(24)		63	外 橙色 7.5YR6/6 内 灰黄褐色 10YR6/2	ていねいなミガキ	包7651
14	XⅠ区	〃		(77)		72	外 明赤褐色 2.5YR5/6 内 灰黄褐色 10YR4/2		包619, 680, 1123
15	XⅢ区	〃		(25)		98	外 にぶい黄褐 10YR4/3 内 褐灰色 10YR4/1		包6410
16	Ⅷ区	〃		(33)		51	外 にぶい橙 2.5YR6/4 内 浅黄橙 10YR8/3	ていねいなミガキ	No565
17	XⅠ区	〃		(29)		65	外 明黄褐色 10YR6/6 内 橙色 5YR6/6		包1903
18	XⅢ区	〃		(20)		60	外 明黄色 10YR6/6 内 黒褐色 10YR3/1		包8891
19	XⅠ区	〃		(19)		75	外 浅黄橙 10YR8/4 内 褐灰色 10YR4/1	ていねいなつくり	包1881
20	XⅢ区	〃		(19)		65	外 にぶい褐色 7.5YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR7/3	砂粒多い	包8445
21	XⅢ区	〃		(66)		69	外 橙色 7.5YR7/4 内 浅黄橙 7.5YR8/4		

第24表　包含層からの出土土器計測表

土　器　第84図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
84-1	XⅢ区	浅鉢	(159)	(30)	(135)		外 にぶい黄褐 10YR5/3 内 黒褐色 10YR2/2	黒彩	包4649
2	XⅢ区	深鉢	(125)	(54)	(135)		にぶい黄橙 10YR7/4	ていねいなミガキ	包269
3	XⅢ区	〃	(101)	(41)	(105)		浅黄色 2.5Y7/4		No4513, 9176, 10916
4	XⅢ区	浅鉢		(41)			黒褐色 7.5YR1/2	カーボン付着	包828
5	XⅢ区	〃	(70)	(19)	(66)		外 にぶい黄橙 10YR7/3 内 灰黄褐色 10YR5/2		包11502
6	Ⅷ区	〃	(109)	(33)			にぶい黄橙 10YR6/4		
7	XⅢ区	深鉢	(141)	(48)			にぶい黄橙 10YR6/4		包116
8	XⅢ区	〃	(134)	(49)			外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3	胎土に砂多い	包4123
9	XⅢ区	〃	(108)	(74)	(116)		にぶい黄橙 10YR7/4		包142
10	XⅢ区	〃	(87)	(28)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3		包2798
11	XⅢ区	〃		(33)	(62)		外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4		包5276
12	Ⅷ区	〃	(82)	(67)	(70)		外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄褐 10YR5/4		
13	802 住	〃 Ⅱ-G	(80)	(70)	(86)		浅黄橙 10YR8/4	手づくね	No405,M21
14	XⅢ区	浅鉢		(28)		55	外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3		包2075
15	Ⅷ区	深鉢Ⅳ-A		(22)		38	にぶい黄橙 10YR7/4		No26
16	XⅢ区	深鉢	(114)	(28)			灰黄褐色 10YR4/2		包8208
17	802 住	浅鉢Ⅱ-A	(138)	(29)			にぶい黄色 2.5Y6/3	ていねいなつくり	No21
18	XⅢ区	鉢	(88)	(26)			外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄橙 10YR6/4		包28
19	Ⅷ区	浅鉢		(26)		31	外 にぶい黄 2.5Y6/4 内 黒色 2.5Y2/1	精製の胎土	No372

土　器

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
85-1	XⅢ区	注口土器	10	(68)			にぶい黄橙 10YR6/4	ベンガラ付着	包3405
2		〃	12	(80)	(47)		暗褐色 7.5YR3/	光沢あるミガキ	
3	XⅡ区	〃	14	(72)	(58)		にぶい褐色 7.5YR5/4	ヘラ状の押圧引圧痕	包892
4	XⅢ区	〃	5	(25)	(21)		にぶい黄褐 10YR7/4	長石，砂粒多い	包601
5		〃	24	(71)	(42)		にぶい黄褐 10YR6/4		
6		〃	22	(67)	(38)		にぶい黄橙 10YR7/4	黒い砂粒多い	
7	XⅡ区	〃		(45)			にぶい黄橙 10YR7/4	カーボン付着	包423
8	XⅢ区	〃	21	(108)	(54)		浅黄褐色 10YR8/4		No127

第25表　包含層からの出土土器計測表

土　器

番号	出土地点	器種	口　径	器　高 残存高	胴　部 最大径	底　径	色　調	備　考	登録番号
86-1	Ⅹ区	注口土器		(43)	(201)		外　黒褐色 10YR2/2 内　にぶい黄褐　10YR5/3		包11
2	Ⅷ区	〃		(41)			外　黒褐色　10YR3/2 内　にぶい黄橙 10YR7/4	波状口縁	M3
3	ⅩⅢ区	〃		(37)			外　褐灰色　10YR4/1 内　黒褐色　10YR3/2	羽状文	包1613
4	901号 土壙	〃	(102)	(50)			外　にぶい黄褐 10YR5/3 内　浅黄橙　10YR8/4		
5	Ⅷ区	〃	(124)	(128)	(124)		外　にぶい赤褐　5YR5/4 内　灰褐色　7.5YR4/2		M4,5,8,163,164
6	Ⅷ区	〃		(76)			外　にぶい黄橙 10YR7/3 内　灰黄褐色　10YR6/2	指頭圧痕多し	

土　器

番号	出土地点	器種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　調	備　考	登録番号
87-1	ⅩⅢ区		長　さ (58)	幅 (53)	厚 7	孔直径 13	淡黄色　2.5Y8/3		包8122
2	ⅩⅢ区	高坏形 土器		(58)	28		淡黄色　2.5Y8/3		包8122
3	1301号溝	〃		(22)			外　灰褐色　7.5YR4/2 内　暗褐色　7.5YR3/3	光沢あるていねいな ミガキ	
4			長　さ (65)	幅 (68)	厚 (36)		浅黄色　2.5Y7/3	穿孔あり	
5			長　さ (33)	幅 (25)	厚 15		にぶい黄橙　10YR7/2	ていねいなつくり	
6	Ⅷ区	異形土器	長　さ (36)	幅 (17)	厚 10		黄橙色　10YR8/6	羽状文	M-25
7	Ⅷ区	把手	長　さ (57)	幅 (24)	厚 (23)		黒褐色　7.5YR3/2	光沢あるミガキ	P-23
8	1101号 土　壙	異形土器	長　さ (63)	幅 (28)	厚 14		浅黄色　2.5Y7/4		
9	Ⅷ区		長　さ (57)	幅 (31)	厚 24		にぶい黄橙　10YR7/4		
10	1302 住	深鉢		(33)			にぶい黄褐	波状口縁	No240

5、土偶（第88、89～91図）

26点出土し、出土地点では、Ⅷ区で６点、Ⅹ区で１点、ⅩⅠ区１点、ⅩⅡ区４点、ⅩⅢ区10点、出土地点不明４点である。このうち11点は出土状況が詳らかでない。

出土部位では、腕５点、胴部６点、脚部11点、頭部４点である。

88は、出土地点不明の土偶の胴部である。四肢と頭部を欠く。乳房を表現するが何故か腹部は平常の姿である。背面は中央部を縦に凹面に指で抉る。両脇はやや指押さえで絞るが腰の張り出しは乏しい。脚部の破損面は器面と同じ橙色を呈する。

89－１は、Ⅷ区出土の土偶の胴部である。腰より上と両脚を欠く。骨盤の体側への張り出しはデフォルメして強調し、腹部は妊娠の相をリアルに手捏ねで造形する。背面は、臀部との境を段をなして盛り上げて表現する。腹部の左側にはごくわずかにベンガラが付着する。

89－２は、ⅩⅡ区土の大型の土偶の胴部である。腰より上と両脚を欠く。腰はくびれ骨盤の体側への張り出しを著しく強調し、臍を有する腹部は、臨月を表現し、背面は、臀部をリアルに造形する。接合面を観察すると、両脚、腹部前面は別々の粘土塊でつくられ表面は腰の両側に指押さえ痕があり、その他は箆で縦方向に短いタッチで磨かれる。

89－３は、ⅩⅢ区1303号住居跡出土の土偶の腕である。著しくその表現に乏しく、肩から内湾して垂れる短い腕の先はとがり、その内側には手の平と思われる平坦面があり、指先の表現はない。表面は縦方向に磨かれ、わずかにベンガラの付着がみられる。

89－４は、Ⅷ区出土の土偶の腕と思われるが土製の勾玉の可能性もある資料である。内弯して垂れる細い棒状で先は尖り、表面は若干の縦方向に撫でられる。

89－５は、ⅩⅢ区出土の土偶の右腕である。肩から内弯して垂れ先端を欠く。表面は縦方向に磨かれ光沢を有する。肩の基部にわずかな盛り上がりが観察され、これが乳房の一部分とすれば右側の腕と判断されよう。

89－６は、ⅩⅡ区出土の土偶の左腕である。著しく短く水平ぎみに肩からわずかに内弯して開き、先端は尖る。表面は先端に向けて縦方向に磨かれる。肩の付け根のわずかな盛り上がりから観察すれば左の腕であろう。

89－７は、ⅩⅢ区出土の土偶の左腕である。肩から内弯して垂れ先端は鈍く尖る。肩には文様があり、浅い窪みを作りその周囲に花弁状に箆を押し当てて造形する。先端は衣服の袖かがりを思わす箆を押し当てた斜方向の羽状文があり、さらに指を表現するとみられる５条の縦方向の沈線がみられる。表面は縦方向に丁寧に磨かれ光沢を有する。肩の付け根にみえるわずかな盛り上がりから観察すれば左側の腕であろう。

90－１は、ⅩⅡ区出土の土偶の右脚である。爪先と踵の表現がある。足首には１条の沈線が巡る。縦方向に丁寧な磨きがあり、脛の左面の磨きが疎らであることから右脚であると判断する。器面にベンガラの付着がみられる。

90－２は、出土地点不明の土偶の脚部である。爪先と踵の表現があり、足首は強くくびれ脛の正面には脚半を思わせるＴ字形の沈線文があり、足首に巡らした沈線と結ぶ。縦方向に磨きがある。断面には渦巻き状の素材粘土の丸めた痕跡がみられる。器面は断面と同色の鈍い黄橙色であることから破損後に火を受けた可能性がある。

90－３は、ⅩⅢ区より出土した土偶の脚部である。足首以下を欠く、縦方向に磨きがみられる。

90－４は、表面採集の土偶の脚部である。器面は後世の耕作による傷が多い。爪先部分を欠く、縦方向に磨きがみられる。

90－５は、ⅩⅢ区より出土した大型の土偶の脚部である。爪先と踵の表現はほとんどなく、わずかに爪先らしき突出が申し訳けに付いている。足首とみられる部分に羽状文を円周の３分の２まで巡る。器面には縦方向に磨きがありベンガラの付着がみられる。

90－６は、Ⅷ区表土より出土した小型の土偶の脚部である。爪先と踵の表現はほとんどなく、わずかに爪先らしき突出が見える。

90－7は、Ⅹ区より出土した土偶の脚部である。爪先と踵の表現は乏しくわずかに爪先らしき突出が見える。器面には縦方向に磨きがありベンガラの付着がみられる。

90－8は、ⅩⅡ区より出土した土偶の脚部である。爪先の部分のみの資料である。三角形に突出し器面は平滑に撫でられ、わずかにベンガラの付着がみられる。

90－9は、Ⅷ区より出土した土偶の脚部である。足首部分は強く絞られ以下を欠く。器面は縦方向に磨かれ、わずかにベンガラの付着がみられる。

90－10は、Ⅷ区より出土した土偶の左脚である。爪先とみられる突出が表現され、足首部分には雑な沈線が巡る。器面は縦方向に磨かれ、わずかにベンガラの付着がみられる。断面は器面と同色の浅い黄橙色であり破損後に火を受けたとみられる。

90－11は、ⅩⅡ区包含層出土の土偶の脚である。爪先とみられる突出がみられるが他の部分を欠く。器面は縦方向に磨かれる。

91－1は、ⅩⅢ区より出土した土偶の頭部背面である。頭部の約4分の1が残存し半面は剝離により失う。器面はよく磨かれ、側面に2条の沈線を巡らし、また器表には結い上げた頭髪とみられる2条の沈線を2組左右から寄せ合わせて描く。

91－2は、ⅩⅠ区より出土した土偶の頭部である。顔面は、平坦でよく磨かれ光沢を有し、目、鼻などの表現は省略されている。後頭部は半球状をなす。首は短く断面は円形である。器面にはベンガラの付着がみられる。

91－3は、ⅩⅡ区より出土した土偶の頭部である。偏平で厚みの少ない円形で表裏がはっきりしない。頚部との境とみられる部位にはわずかに箆を押し当てたとみられる沈線らしきものがみえ、頚部の断面には制作時に竹ひご状のもの刺し入れたとみられる穴が頭部の中央まで達している。

91－4は、ⅩⅢ区より出土した土偶の頭部破片である。本来の器形は顔面が平坦で後頭部が半球状をなすとみられる。顔面はよく磨かれており、後頭部は成形の時のひび割れがみられる。

91－5は、ⅩⅢ区より出土した土偶の胸部である。完形の左腕をみると、内にやや弯曲して短く垂れ、先端は丸みを以て尖り、両肩部には2条の浅い沈線が前面のみに描かれる。乳房は頂部以下を欠き、脇から乳房の頂部にかけて2条の沈線がみられる。胸と腹部の間は別々の粘土塊で成形したとみられ接合面が観察される。破損した断面は器面と同色の鈍い黄橙色を呈する。

91－6は、ⅩⅢ区より出土した土偶の胴部破片である。胸部は左の乳房があり腹部は臨月を表現する。腰はくびれ骨盤が張り出す。背面はやや凹面をなすとみられる。器面はナデで仕上げられ、断面には成形時に刺し入れた竹ひご状の骨材の圧痕が観察される。

91－7は、Ⅷ区より出土した土偶の胴部である。両腕と頭部を欠く。乳房と膨張した腹部を表現する。腰はくびれ骨盤が張り出す。背面は逆T字形の陰刻があり、脚部は膝位以下でやや絞り足首にはわずかに沈線らしきものがみえる。頚部上面の破損面は他の器面とほとんど同質であり、頭部は弱く接着していたとみられる。

6、土製円盤（第92図）

3点出土した。いずれも縄文土器の深鉢の破片を素材とする。

92－1は大型で厚手の土製円盤である。素材の土器片には条痕がみられる。周囲を打ち欠きやや角ばった円形に仕上げる。92－2はⅩⅡ区出土の土製円盤である。素材の土器片の周囲を打ち欠いだあと磨き、形状は不整円形である。92－3はⅩⅢ区出土の土製円盤である。土器片の周囲を打ち欠いだあとわずかに磨き、形状は楕円形である。

7、焼成粘土塊（第93～96図）

ほとんどがⅩⅢ区より出土する。本遺物は土器制作過程で廃棄された偶然的な産物であるため、形状と大きさおよび焼成の程度まちまちである。

93－1は、ⅩⅡ区で出土した大型の粘土塊である。上面には使いかけのまま廃棄されたとみえ、粘土を

掴みかけた無数の指頭圧痕が残り、下位には貯蔵されていた土器の底部の圧痕がみられる。また注目すべきは土器と粘土塊の間には敷いたとみられる木の葉の圧痕が5カ所あり、当時の貯蔵の姿を知る良い資料である。

94－1は、XⅠ区付近で表面採集したやや大型の粘土塊である。全体に稜角は丸みがあり、表面には大きな皺が刻まれ、一端はちぎられている。焼成は良好である。

94－2は、XⅢ区で出土した粘土塊である。細長い平紐状であり、掌中で握ってちぎられ、リボン状の捩れを生じている。焼成は良好である。

94－3は、XⅢ区で出土した粘土塊である。掌中で握り丸められ、指痕がつく。焼成は良好である。

94－4は、XⅢ区で出土した粘土塊である。偏平な不整形で箆状工具で捏ねまわした圧痕がみられる。焼成は良好である。

94－5は、XⅢ区で出土した粘土塊である。細かい皺があり、一部は欠けている。焼成は不良で軟質である。

94－6は、XⅢ区で出土した粘土塊である。小さく丸められるが元は細長い平紐状である。焼成は良好である。

94－7は、XⅡ区で出土した粘土塊である。小さく丸められるが元は細長い平紐状である。焼成は不良で軟質である。細い繊維質の圧痕を残す。

94－8は、XⅡ区で出土した粘土塊である。小さい粘土塊を纏めて丸めたものであろう。焼成は良好である。

94－9は、XⅢ区で出土した粘土塊である。小さいチップ状の粘土塊である。砂粒を胎土に多く含む。焼成は良好である。

94－10は、XⅢ区で出土した粘土塊である。大型の粘土塊の破片とみられ一方の面が剝離しやや未焼成である。

95－1は、XⅡ区で出土した粘土塊である。フレーク状の小さい粘土片を多く含む集塊で、細かい炭化物を噛み込む。焼成は不良で、大型の粘土塊の破片とみられる。集塊の中には粘土紐の原料らしい角柱状の粘土塊も含まれる。

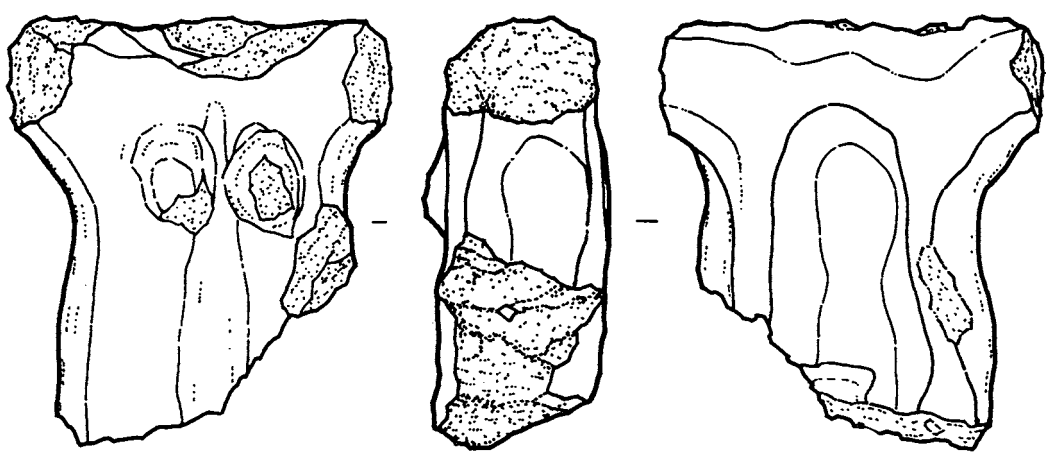
95－2は、XⅡ区で出土した粘土塊である。フレーク状の小さい粘土片の集塊で、焼成は悪く、大型の粘土塊から分離したものであろう。

95－3は、XⅡ区で出土した粘土塊である。大型の粘土塊から分離したものとみられ焼成は悪い。団塊状の粘土を集め圧着したものである。

95－4は、XⅡ区で出土した焼成の良好な粘土塊である。団塊状の粘土にフレーク状の粘土を集め、握り固めた圧着したさいの指痕が残る。またハイガイとみられる二枚貝の圧痕がある。

95－5は、XⅢ区で出土した粘土塊である。焼成の良好な表面には箆による圧痕がみられ、他方は焼成の良くない大型の粘土塊からの分離面である。

95－6は、XⅢ区で出土した粘土塊である。焼成



第88図　土偶実測図

の良好で掌中で握り締められ若干の指痕が残る。

95－7は、XⅢ区で出土した焼成の良好な粘土塊で橙色を呈し堅緻である。握り固められた団塊である。

96－1は、XⅢ区で出土した大型の粘土塊である。フレーク状と角柱状の粘土の集塊である。繊維質の炭化物を含む。焼成は不良である。

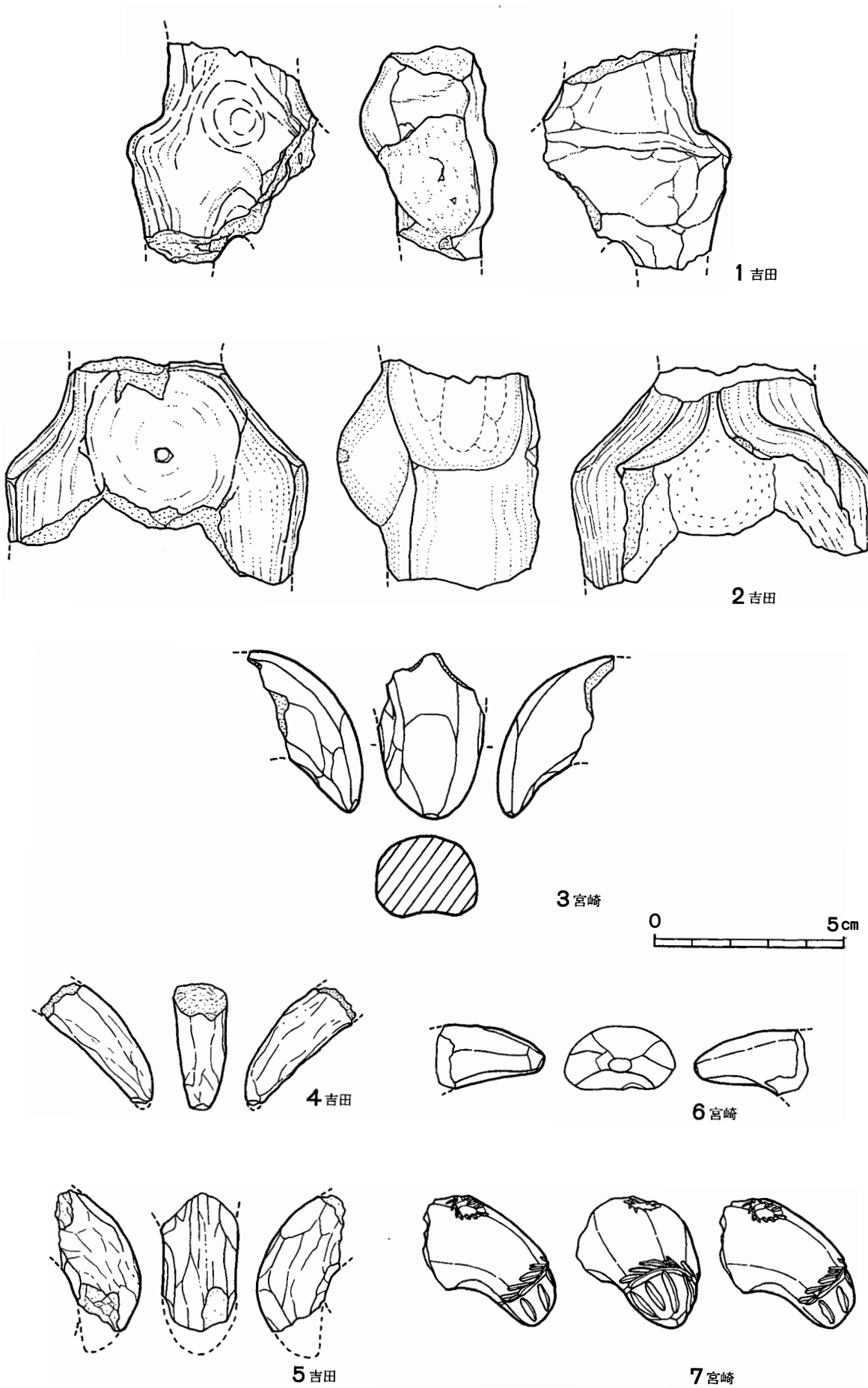
96－2～3は、XⅢ区で出土した焼成の良くない粘土塊である。角柱状の粘土の集塊である。繊維質の炭化物を含む。

96－4は、XⅢ区で出土した焼成の良くない粘土塊である。フレーク状と団塊状の粘土の集塊である。わずかに繊維質の炭化物を含む。

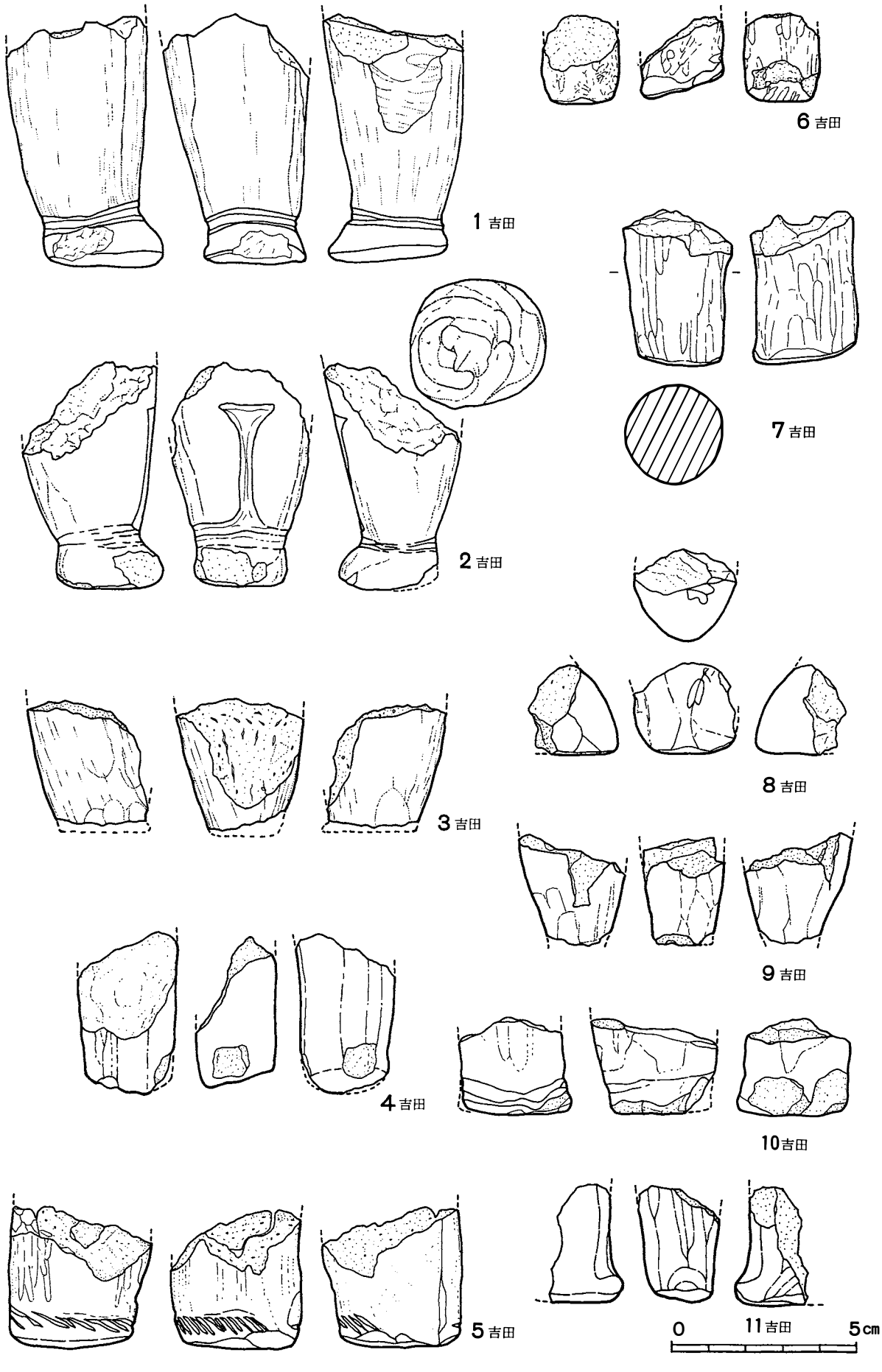
96－5は、XⅢ区で出土した焼成の良くない粘土塊の破片である。

96－6は、XⅢ区で出土した焼成の良い粘土塊である。小さい団塊状であるが厚いリボン状のものを握り固めたものであろう。

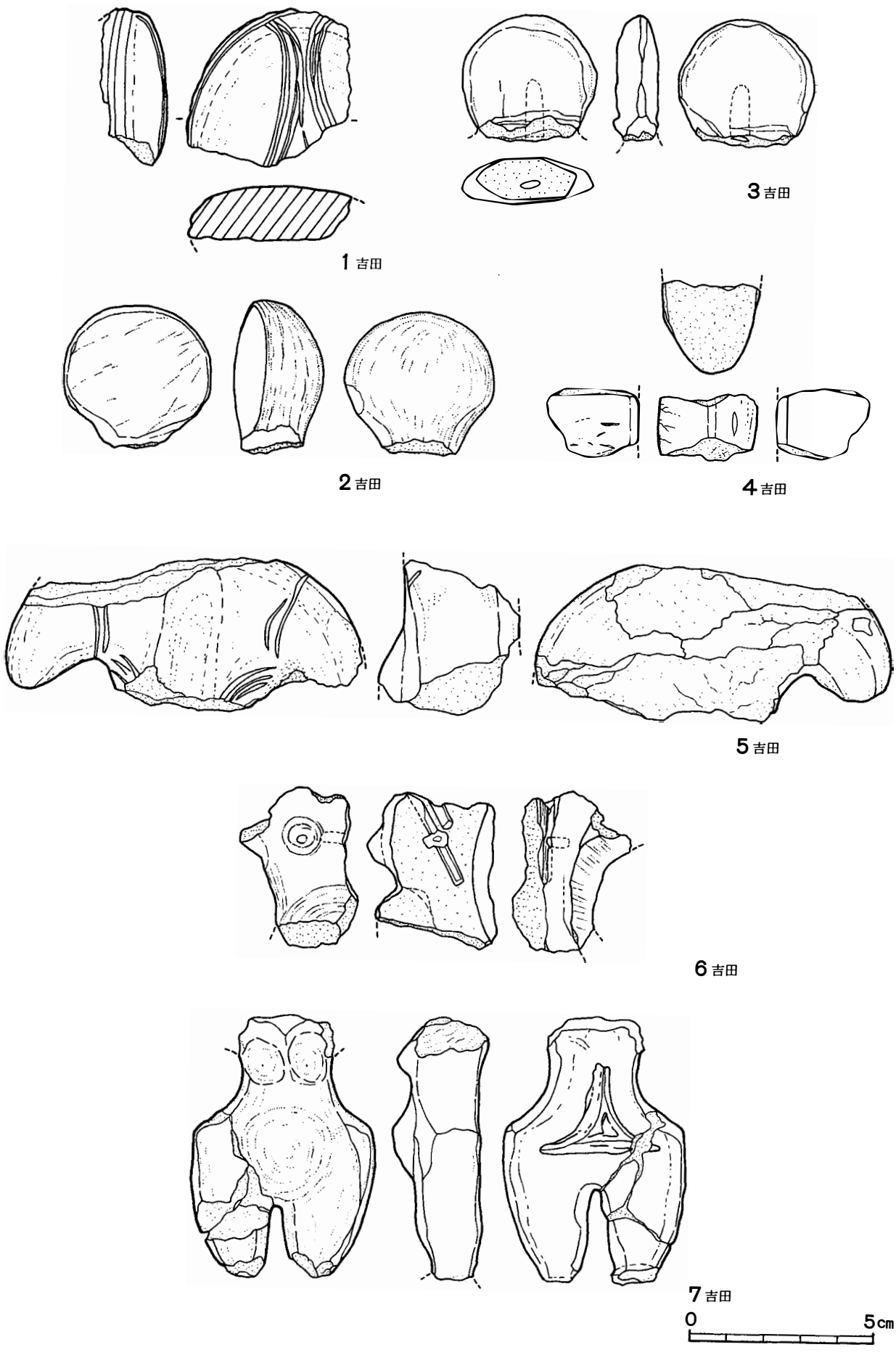
96－7は、XⅢ区で出土した焼成の良くない粘土塊のである。団塊状の粘土塊にフレーク状の粘土が付着する。



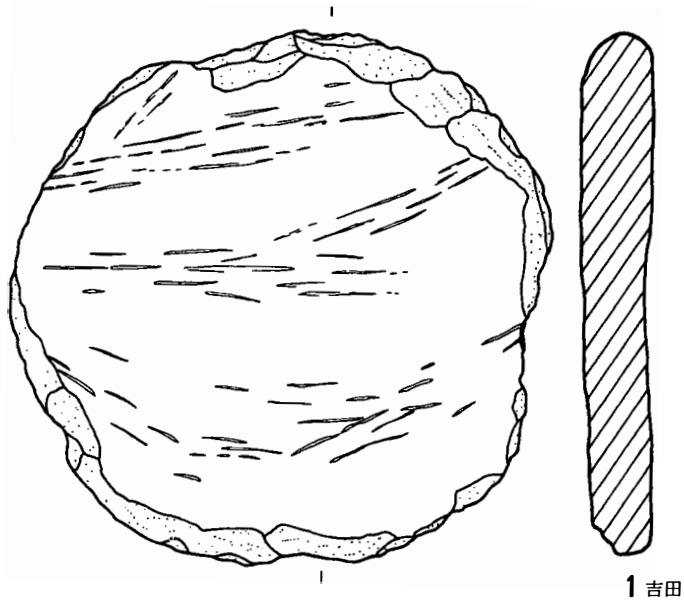
第89図　土偶実測図



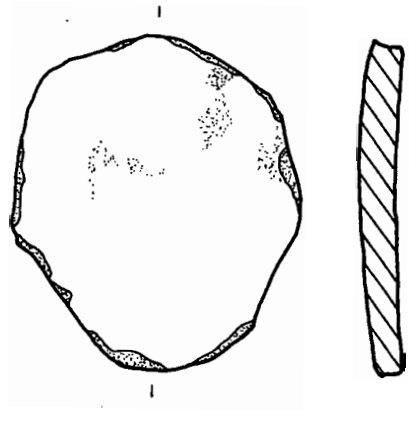
第90図　土偶実測図



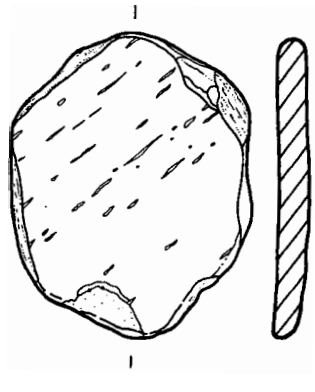
第91図　土偶実測図



1 吉田

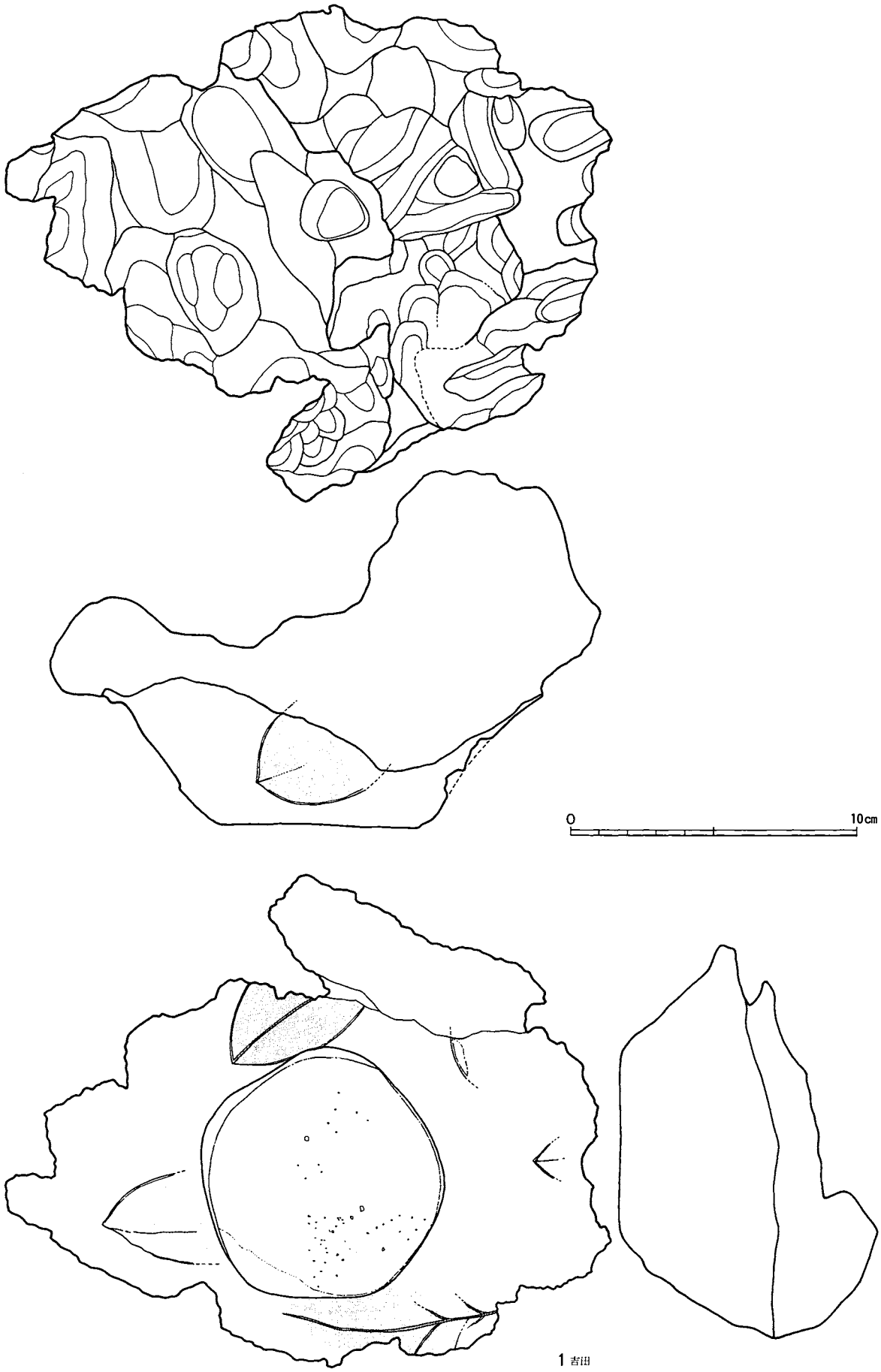


2 吉田

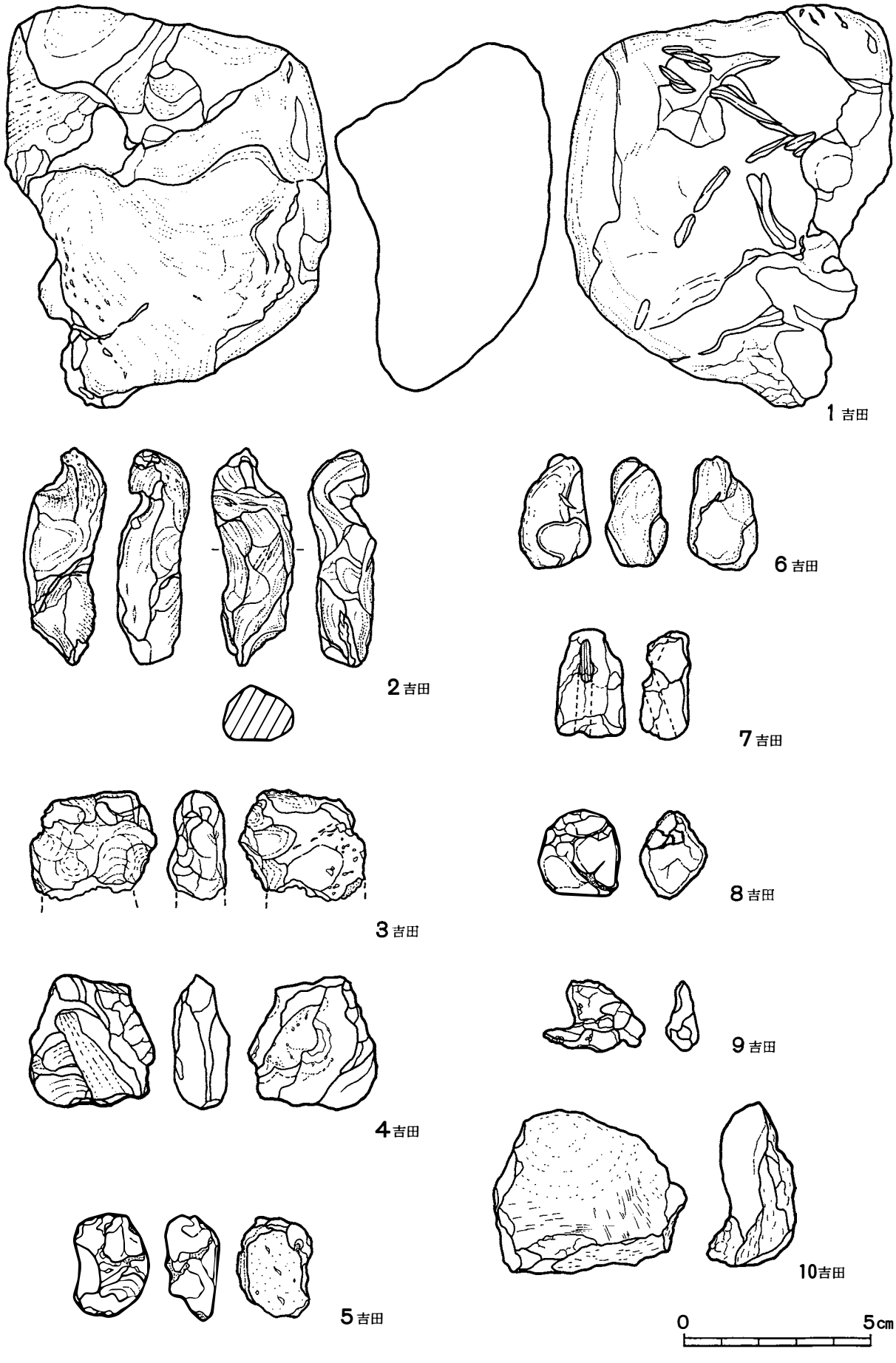


3 吉田

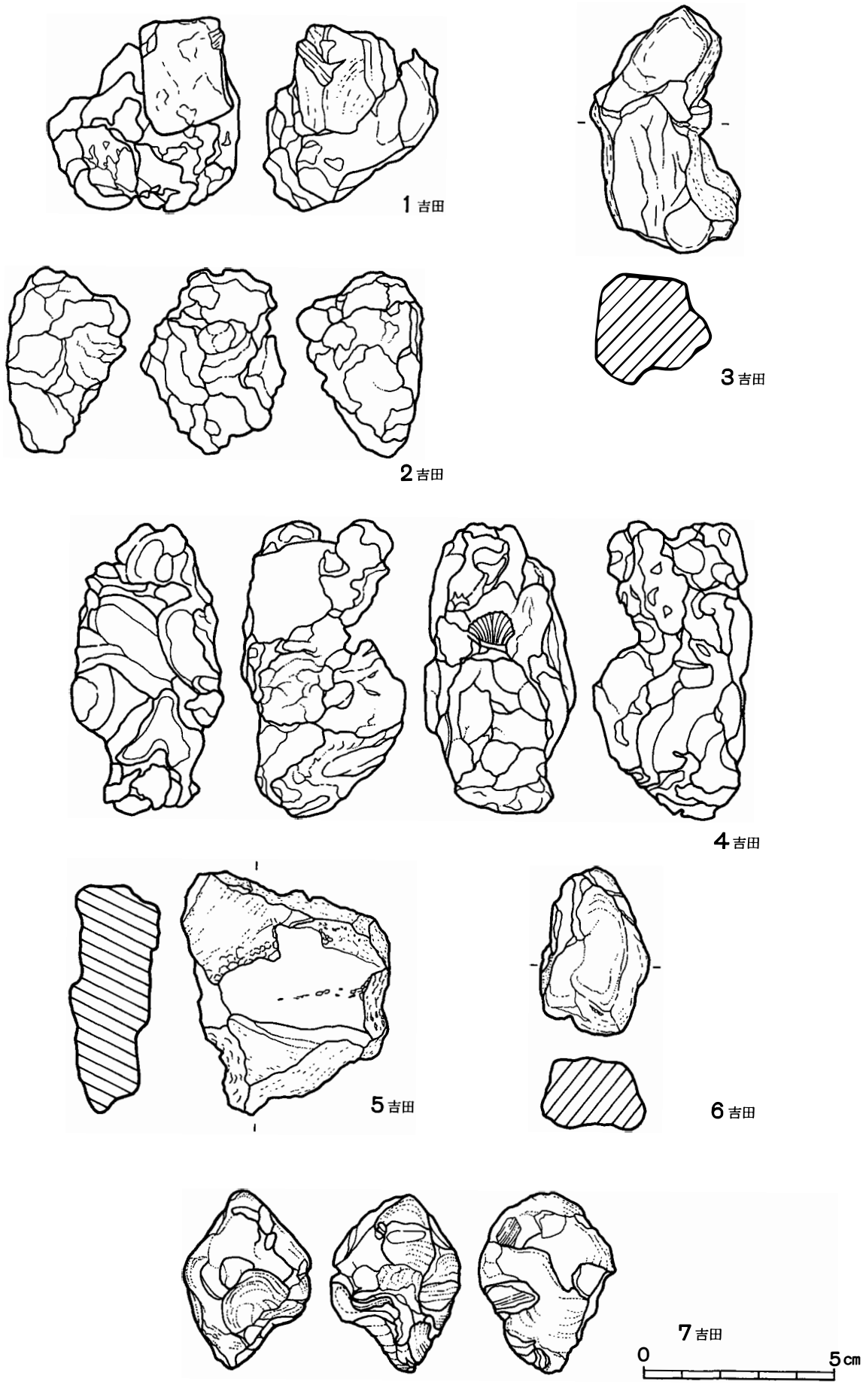
第92図　土製円盤実測図



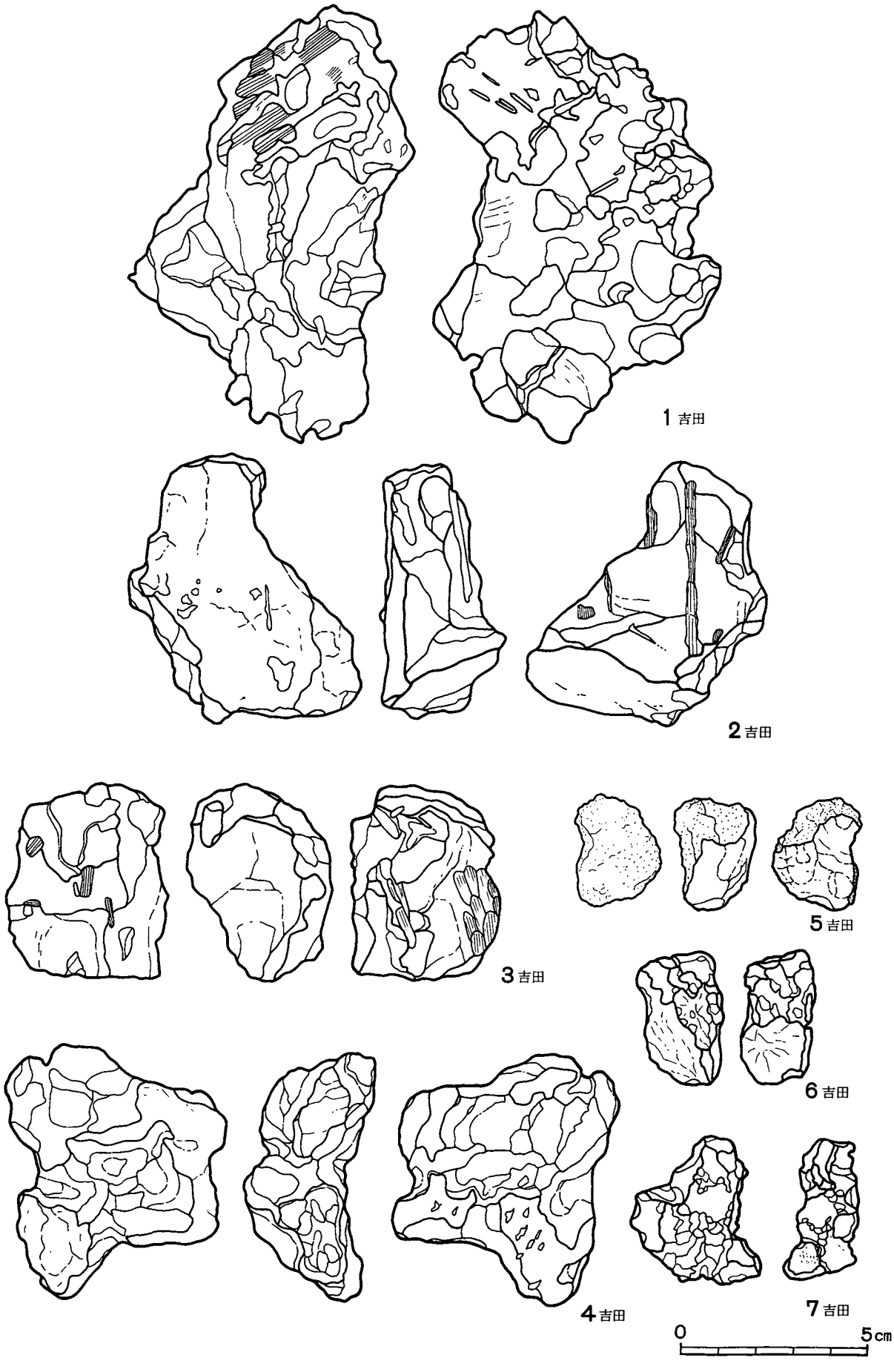
第93図　焼成粘土塊実測図



第94図　焼成粘土塊実測図



第95図　焼成粘土塊実測図



第96図　焼成粘土塊実測図

第26表　土偶計測表

土　偶

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
89-1	Ⅷ区	胴部	(57)	(48)	(33)		外　黒褐色　7.5YR8/3 内　にぶい黄橙　10YR6/4		
2	XⅡ区	腹部	(58)	(81)	(55)	125.6	外　にぶい黄褐　10YR5/4 内　黒色　10YR2/1		
3	1303 住	腕	(49)	(31)	20	18.0	にぶい黄褐　10YR5/3	ベンガラ付着	No2057
4	Ⅷ区	腕	38	13	14		橙色　7.5YR6/8		
5	XⅢ区	右腕	37	22	18	33.2	橙色　10YR6/6	ベンガラ付着	
6	XⅢ区	左腕	16	29	29	10.6	橙色　7.5YR7/6		No1424
7	XⅢ区	左腕	34	35	28	23.9	にぶい黄橙　10YR7/3		包8457

土　偶

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
90-1	XⅡ区	右足	(65)	(37)	38	89.5	暗灰褐色　5YR3/2	ベンガラ付着	包2315
2		足	(59)	(36)	33	62.9	にぶい黄橙　10YR7/4		
3	XⅢ区	足	(34)	(31)	32	31.0	にぶい黄褐　10YR5/3	ベンガラ付着	包8457
4		足	42	26	21		浅黄橙　10YR8/4		
5	XⅢ区	足	48	37	34	50.5	にぶい橙　5YR6/4	羽状文 ベンガラ付着	包2740
6	Ⅷ区	足	22	20	21	8.7	明黄褐色　10YR6/6		
7	1001号溝	足	40	29		12.7	明赤褐色　5YR5/6	ベンガラ付着	
8	XⅡ区	足	24	27		12.2	浅黄橙　10YR8/4	ベンガラ付着	P-80
9	Ⅷ区	足	38	28		12.9	にぶい橙　7.5YR6/4	白い砂粒	M-10
10	Ⅷ区	左足	25	34	30	22.1	浅黄橙　10YR8/4	ベンガラ付着 胎土に角閃石	No117
11	XⅡ区	足	32	22	19	7.9	にぶい黄褐　10YR4/3	胎土に輝石、黒い砂	包2289

土　偶

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
91-1	XⅢ区	頭部	(43)	(45)	(14)	22.7	外　灰黄褐色　10YR4/2 内　黒褐色　10YR3/1	光沢あり	包1406
2	XⅠ区	頭部	36	40	23	37.1	黒褐色　10YR3/2	薄くベンガラ付着	
3	XⅡ区	頭部	33	36	11		明赤褐色　2.5YR5/6		包413
4	XⅢ区	頭部	18	27	24		にぶい黄橙　10YR7/4		包1701
5	XⅢ区	胸～腕	40	96	37		にぶい黄橙　10YR6/4	全体にミガキ	包1048
6	XⅢ区	胸～腹	44	29	35	26.3	淡黄色　2.5Y8/4		包2022
7	801 住	胸～足	70	50	25	69.2	にぶい橙色　7.5YR7/4	薄いベンガラ付着	

第27表　土製円盤、焼成粘土塊計測表

土製円盤

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
92-1		土製円盤	102	106	13		外　にぶい黄橙 10YR7/4 内　明黄褐色　10YR6/6		
2	XⅢ区	〃	64	57	7		にぶい褐色　7.5YR5/4		包1823
3	XⅢ区	〃	60	49	6		外　灰黄褐色　10YR6/2 内　浅黄橙　10YR8/4		No6854

粘土塊

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
93-1	XⅡ区	粘土塊	173	214	122		にぶい黄橙 10YR7/3	大型である	P-1

粘土塊

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
94-1	XⅠ区	粘土塊	85	105	57	367.2	にぶい黄橙　10YR6/4	焼成良	
2	XⅢ区	粘土ひも塊	57	20	17	13.7	浅黄橙　10YR8/4	砂粒含む	包4292
3	Ⅷ区	粘土ひも塊	28	34	16		にぶい黄褐　10YR5/3	砂粒多い 焼成良	
4	XⅢ区	粘土塊	34	32	14	12.6	明黄褐色　10YR6/6	焼成良	
5	XⅢ区	粘土塊	26	19	14		灰白色　2.5YR8/1		包8498
6	XⅢ区	粘土塊	30	18	16	7.1	にぶい橙　5YR6/4		包6634
7		粘土塊片	27	18	13	5.9	浅黄橙　10YR8/4	軟質	
8		粘土塊	21	21	17		明黄褐色　10YR6/6	焼成良	
9	XⅢ区	粘土塊	26	18	8	2.2	橙色　7.5YR6/6	焼成良	包10820
10	XⅢ区	粘土塊				35.7	にぶい橙　7.5YR6/4		包1210

粘土塊

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
95-1	XⅡ区	粘土塊	49	49	44	74.8	浅黄橙　10YR8/3		包57
2	XⅡ区	〃	46	37	31	35.5	浅黄橙　10YR8/3		包55
3	XⅢ区	〃	62	38	28	33.8	灰白色　2.5Y8/2	角柱状素材	No3299
4	XⅡ区	粘土塊	76	39	43	91.9	にぶい橙色　7.5YR6/4		包56
5	XⅢ区	〃	62	54	23	67.2	にぶい橙色　7.5YR6/4		包1210
6	XⅢ区	〃	42	28	18	18.8	橙色　7.5YR6/6		No120
7	XⅡ区	〃	48	36	34	35.1	明赤褐色　2.5YR5/6		包2387

第28表　焼成粘土塊計測表

粘 土 塊

番号	出土地点	器種	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	色調	備考	登録番号
96-1	XⅡ区	粘土塊	115	76	75		浅黄橙 2.5Y7/3		包55
2	XⅡ区	〃	70	61	33		にぶい黄橙 10YR7/3	角柱状	包55
3	XⅡ区	〃	51	43	38		にぶい黄橙 10YR7/3	角柱状	包55
4	XⅡ区	〃	66	60	29	69	浅黄橙 10YR8/4	焼成良	包55
5	XⅡ区	〃	29	23	21		灰白色 2.5YR8/2	カーボン付着	No1772
6	XⅡ区	〃	34	23	19		浅黄橙 10YR8/3	角柱状	包55
7	XⅡ区	〃	30	34	19		浅黄橙 10YR8/3		包55

8、石器（第96～137図）

大久保遺跡で出土した石器は総数で2183点である。この中には遺跡内に持ち込まれた自然石および器形不明の石器小破片は含まれない。

石鏃は、97－1～98－11。石匙は、99－1～100－4。石錘は、101－1～3。101－4～6は、杯状および有孔の石製品である。102－1～112－7は、打製石斧である。113－1～114－8は、打製石鎌である。115－1～4は、打製石斧あるいは石鎌の破片とみられるものである。116－1～117－9は、磨製石斧である。120－1～126－4は、円盤形石器である。127－1～128－3は、抉入石器である。130－1、2、5は砥石である。130－3、4、6は石器の半製品である。131－1～134－9は、磨石である。135－1～4は、敲石である。136－1～137－1は、台石である。138－1～5は装身具であり、前3者は勾玉、4は垂玉、5は不明の石製品である。139－1は大型の楕円形石製品、139－2は、杯状穴のある不明石製品である。

主要な器種の組成は次の通りである。

剝片および剝片石器：個数1057点、組成比48.4％

磨石：個数481点、組成比22.0％

打製石斧（一部打製石鎌を含む）：個数217点、組成比9.9％

円盤形石器：個数62点、組成比2.8％

磨製石斧：個数41点、組成比1.9％

台石：個数26点、組成比1.2％

石鏃：個数16点、組成比0.7％

砥石：個数13点、組成比0.6％

石匙：個数8点、組成比0.4％

石錘：個数8点、組成比0.4％

抉入石器：個数6点、組成比0.3％

玉類：個数3点、組成比0.1％

このほか、わずかに使用痕の観察される自然円礫として、

球状小円礫：個数116点、組成比5.3％

偏平小円礫：個数109点、組成比5.0％

棒状小円礫：個数18点、組成比0.8％である。

剝片と剝片石器の分別は、整理に要する時間の制約により未達成に甘んじたが、石材別に分類すると次の通りである。

腰岳産黒燿石：665点

サヌカイト：312点

姫島産黒燿石：77点

翡翠：3点

で、剝片と剝片石器における4石材の各石材別の構成比は、上より62.9％、29.5％、7.3％、0.3％であり、姫島産黒燿石の比率が著しく低い特徴が読み取れる。

磨石は、ほとんどが安山岩で、大半は破損による半割状態である。またかなりの点数が破損後に火を受けている。

打製石斧は、緑色片岩類と、やや前者より少ない安山岩が主たる石材である。緑色片岩類を用いたものの一部は薄手で打製石鎌とすべきものであるが、多くは区別の決め手を欠くものが多い。安山岩は熊本県西合志町の二子山産のものがほとんどである。

円盤形石器の石材は、前述の打製石斧とほぼ同様で、比率も近い。このことは円盤形石器が打製石斧といわれるものと用途が近似したものであることを暗示するものである。

台石の素材は、すべて安山岩である。検出した住居跡はいずれも壁が浅く、住居跡に伴うものは1点であり、後世の耕作で多くは撤去されたものであろう。

石鏃は、16点であり、栽培に関わりがあるとされる打製石斧と比べると著しく少ない。

砥石の素材は、すべて砂岩であり、使用痕のあり方は、面をなすものと溝状をなすものがある。

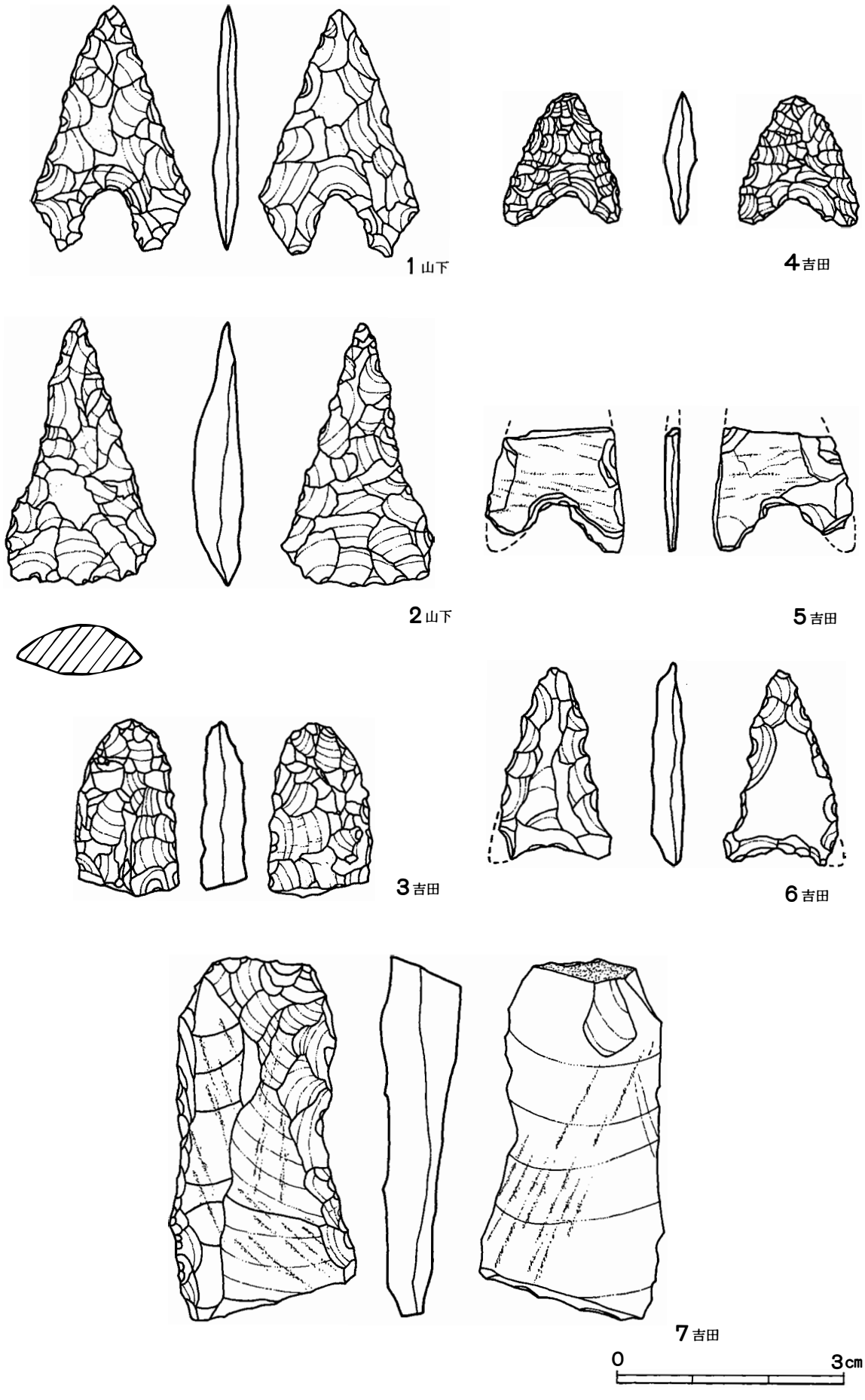
石匙は、8点で少なく、素材はすべてサヌカイトである。

石錘は、すべて安山岩の偏平な自然円礫を素材とし縁辺の2カ所を打ち欠いて作られる。

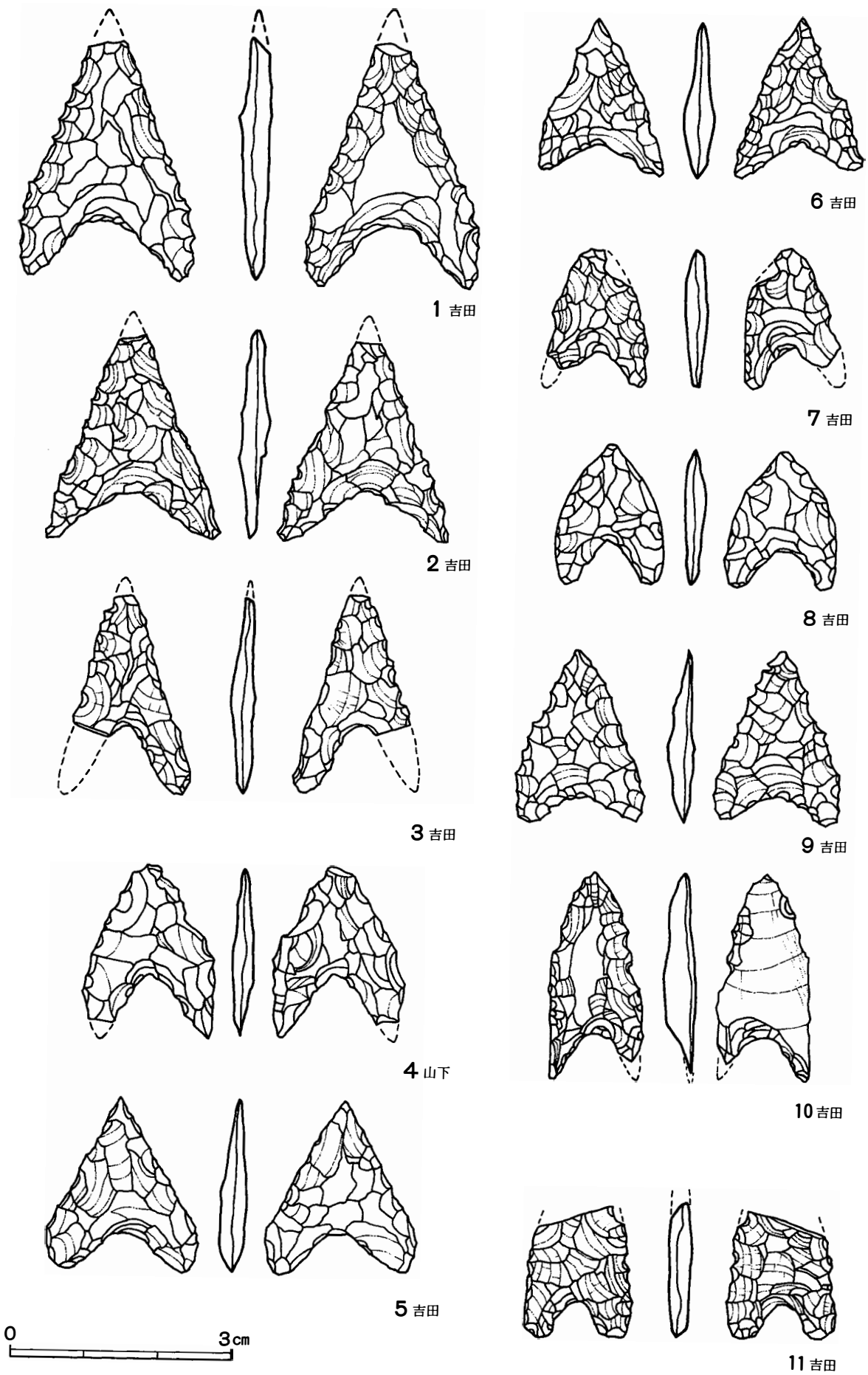
抉入石器としたものは、一般に十字形石器といわれる4支のものに加え、分銅形の2支のもの、1支のものを含めた。いずれも抉りの部分は半円状をなし、石材は薄く剝離した緑色片岩を用いており、共通した用途（抉り部分を用いた工具か）が想定でき

る。

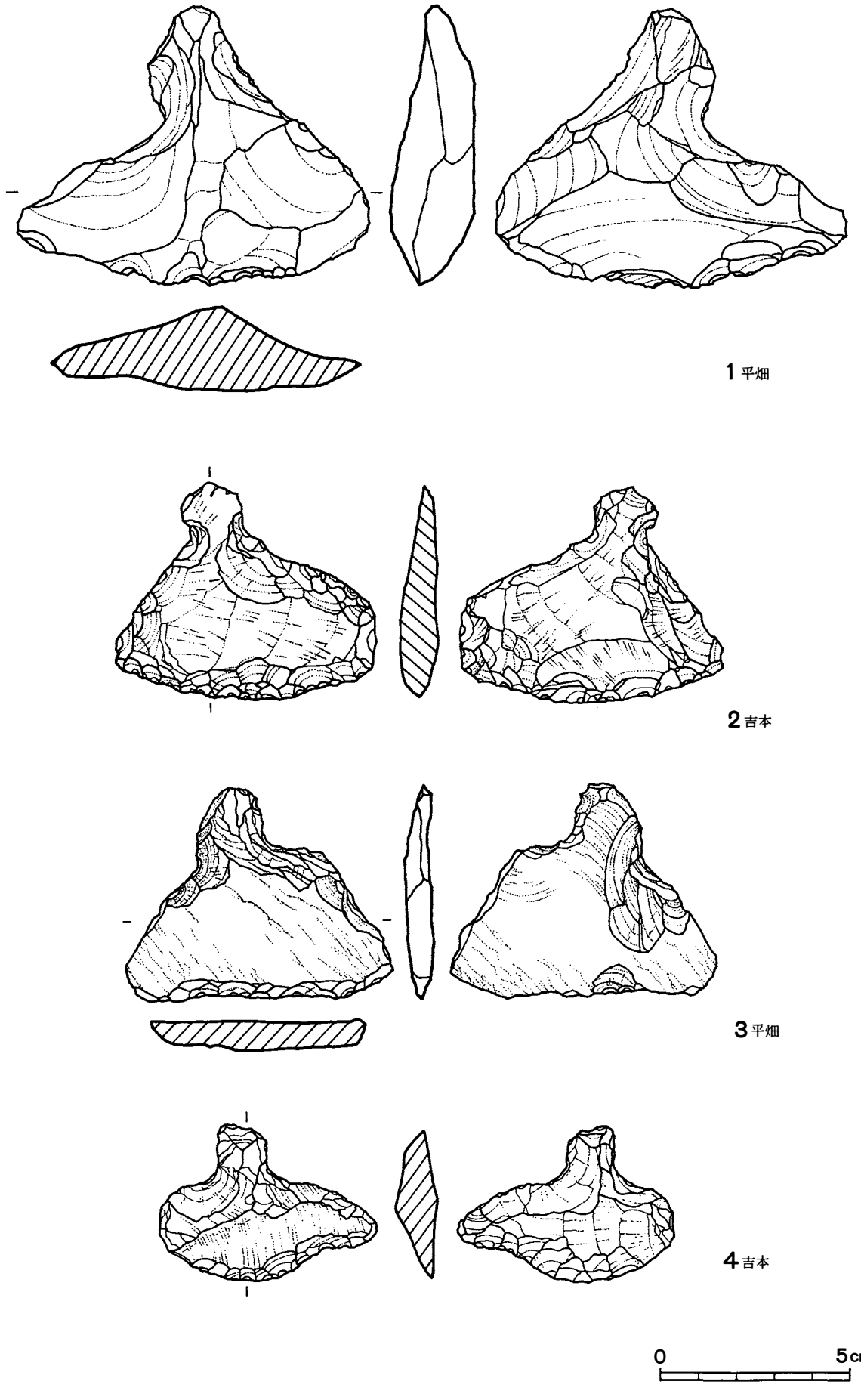
このほか、わずかに使用痕のある小円礫がかなり出土した。いずれも掌中に収まるサイズであり、加工痕がないがわずかに使用痕がみられるとはいえ、外観は自然石とさして変わらず石器とするには憚られる遺物である。形状により球状、偏平、棒状に分類した。球状のものは、表面に擦痕があり磨石に近い用途が考えられる。偏平なものは、円盤形石器に類するものとみられるが縁辺に加工痕がなく、敲打した使用痕が観察される。棒状のものは、先端に敲打痕がある。いずれも使用痕がわずかであり、臨時に自然石を石器の代用に用いたものであろう。



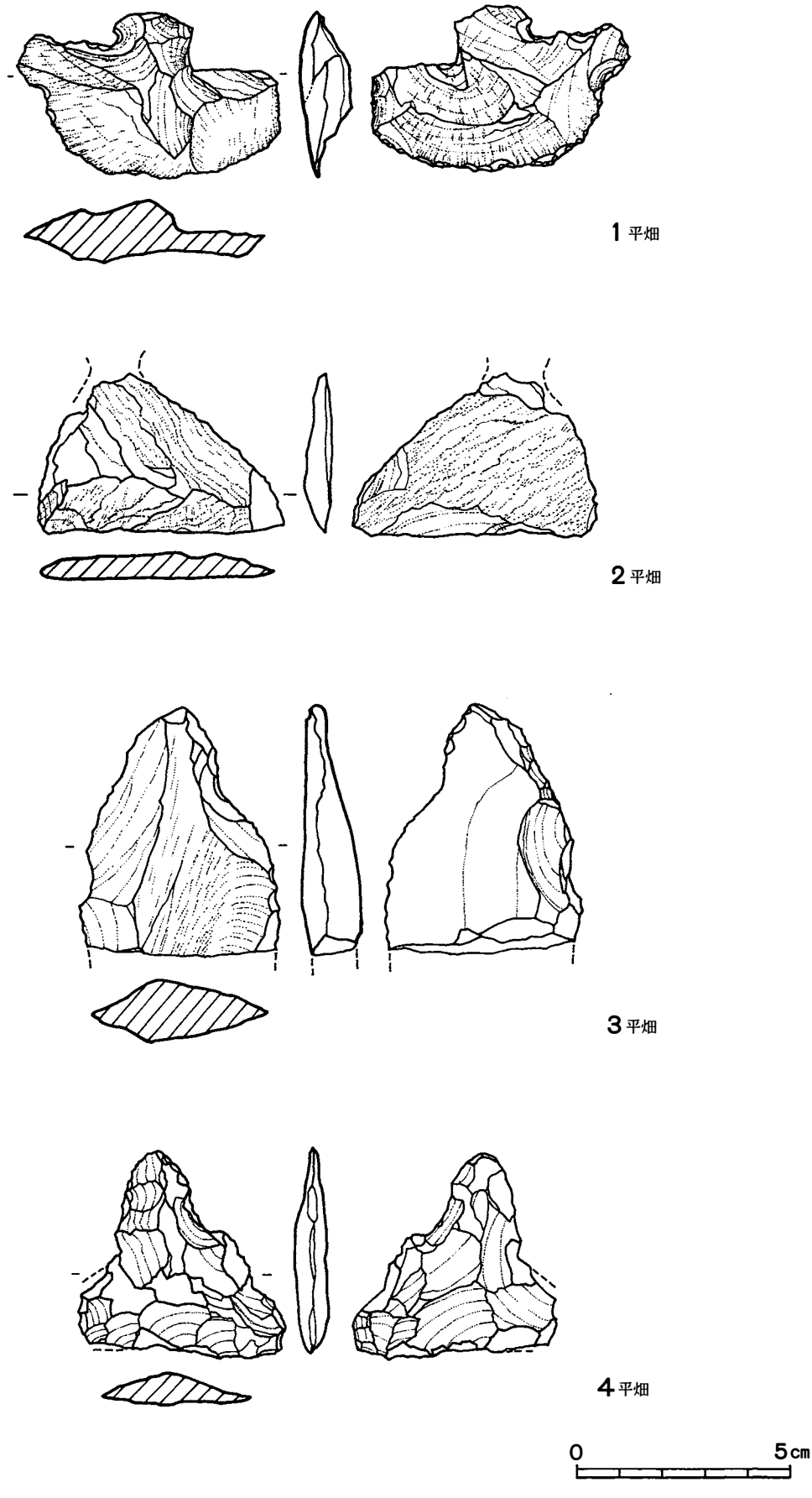
第97図　石器実測図



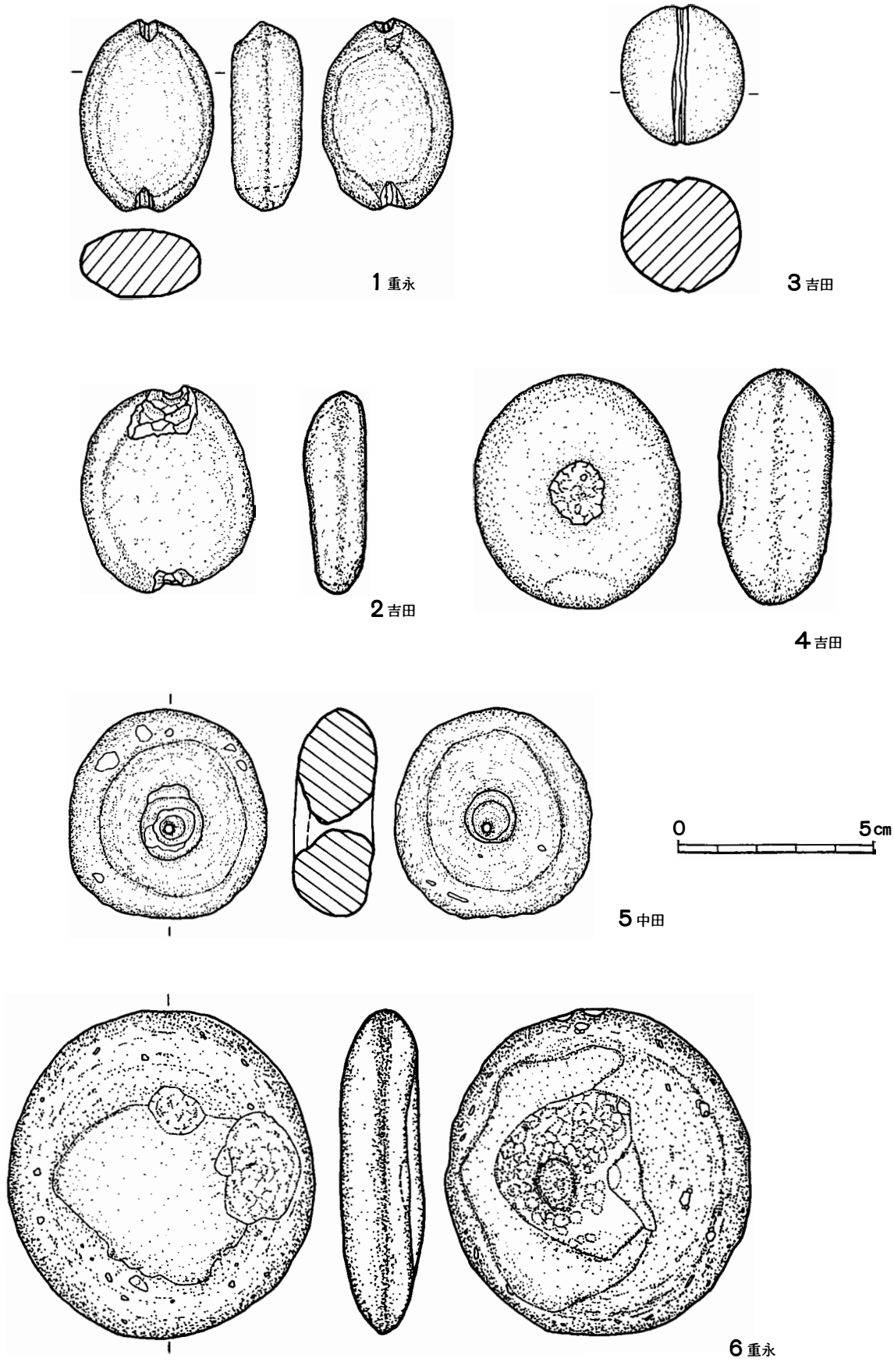
第98図　石器実測図



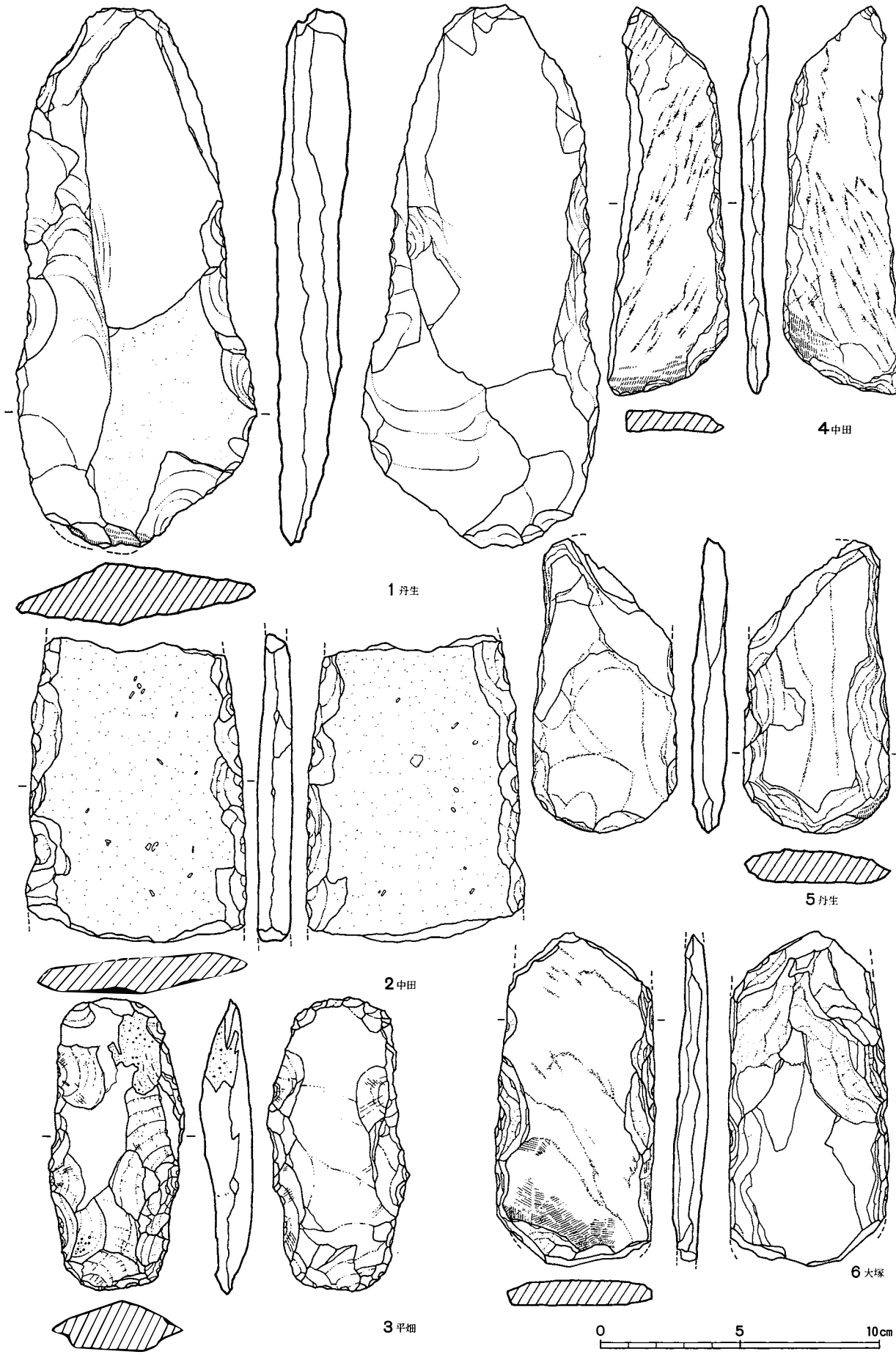
第99図　石器実測図



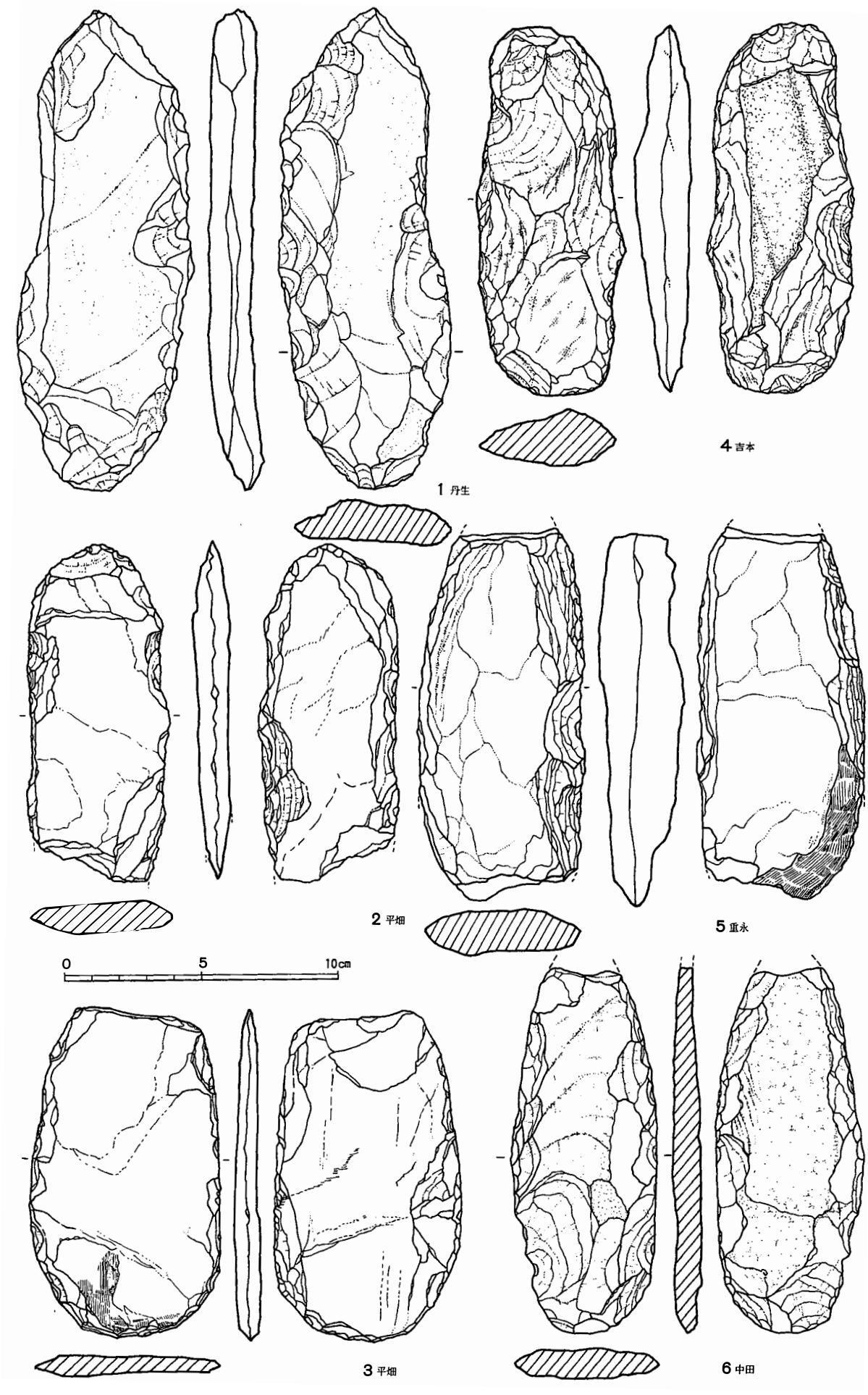
第100図　石器実測図



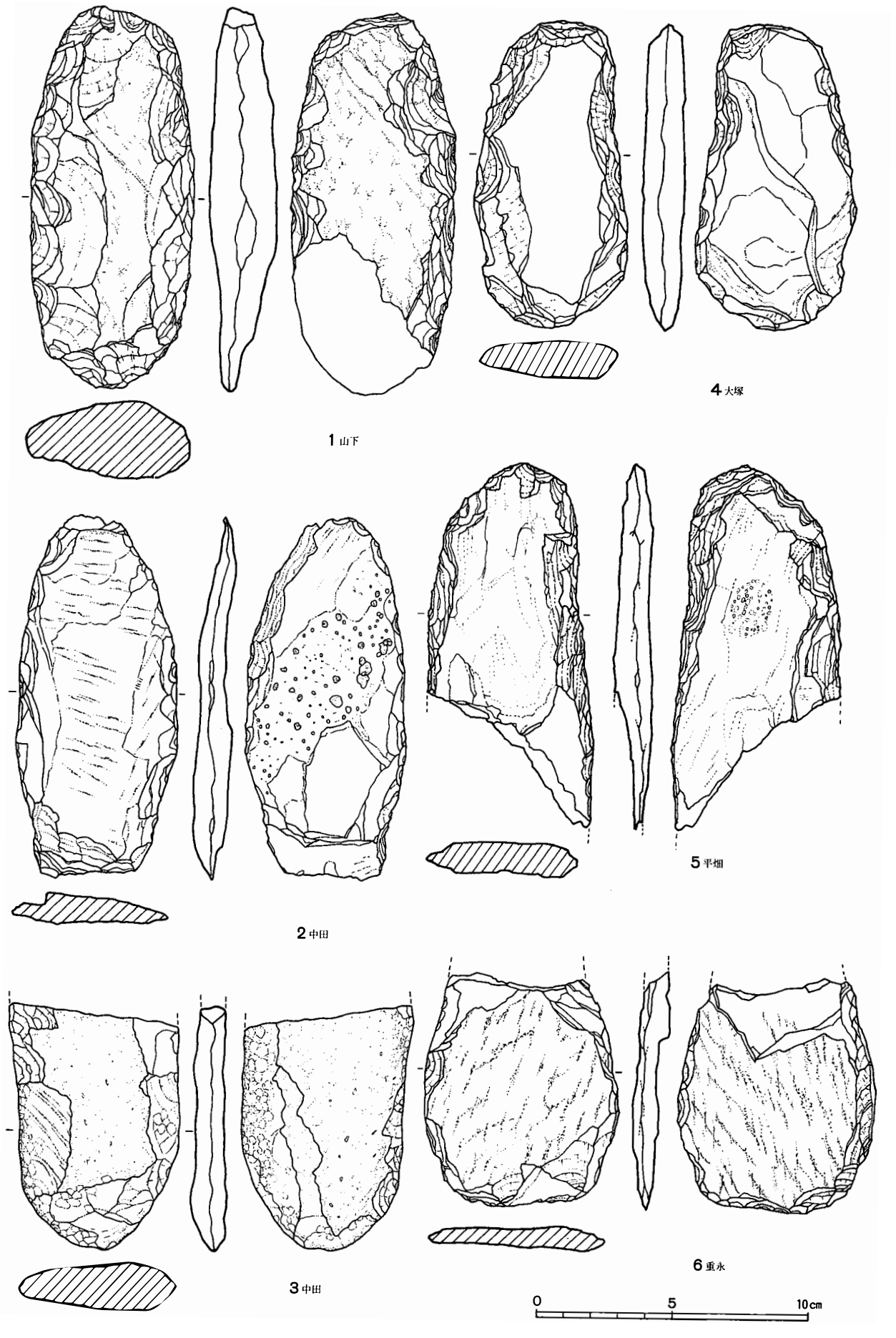
第101図　石器実測図



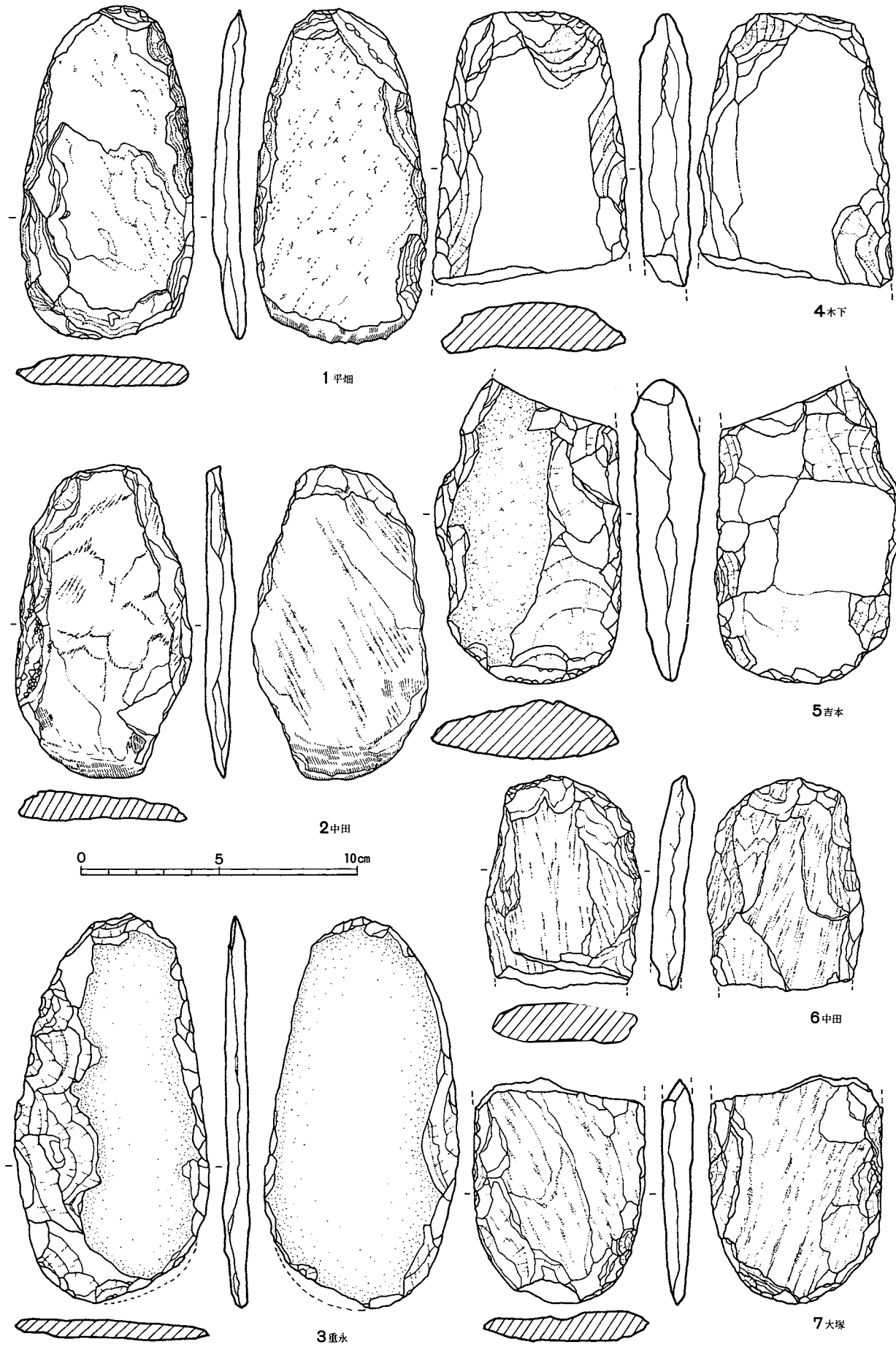
第102図　石器実測図



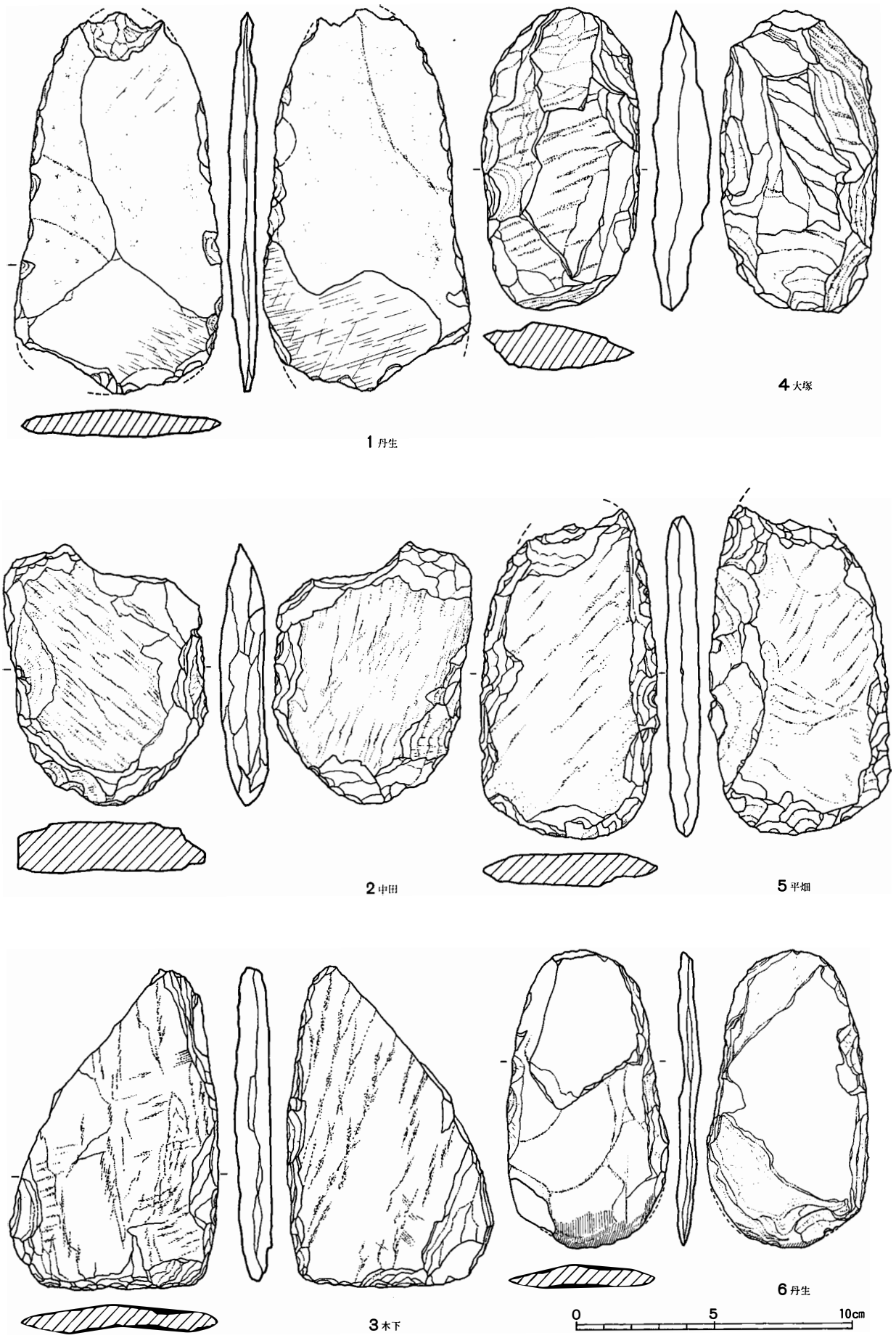
第103図　石器実測図



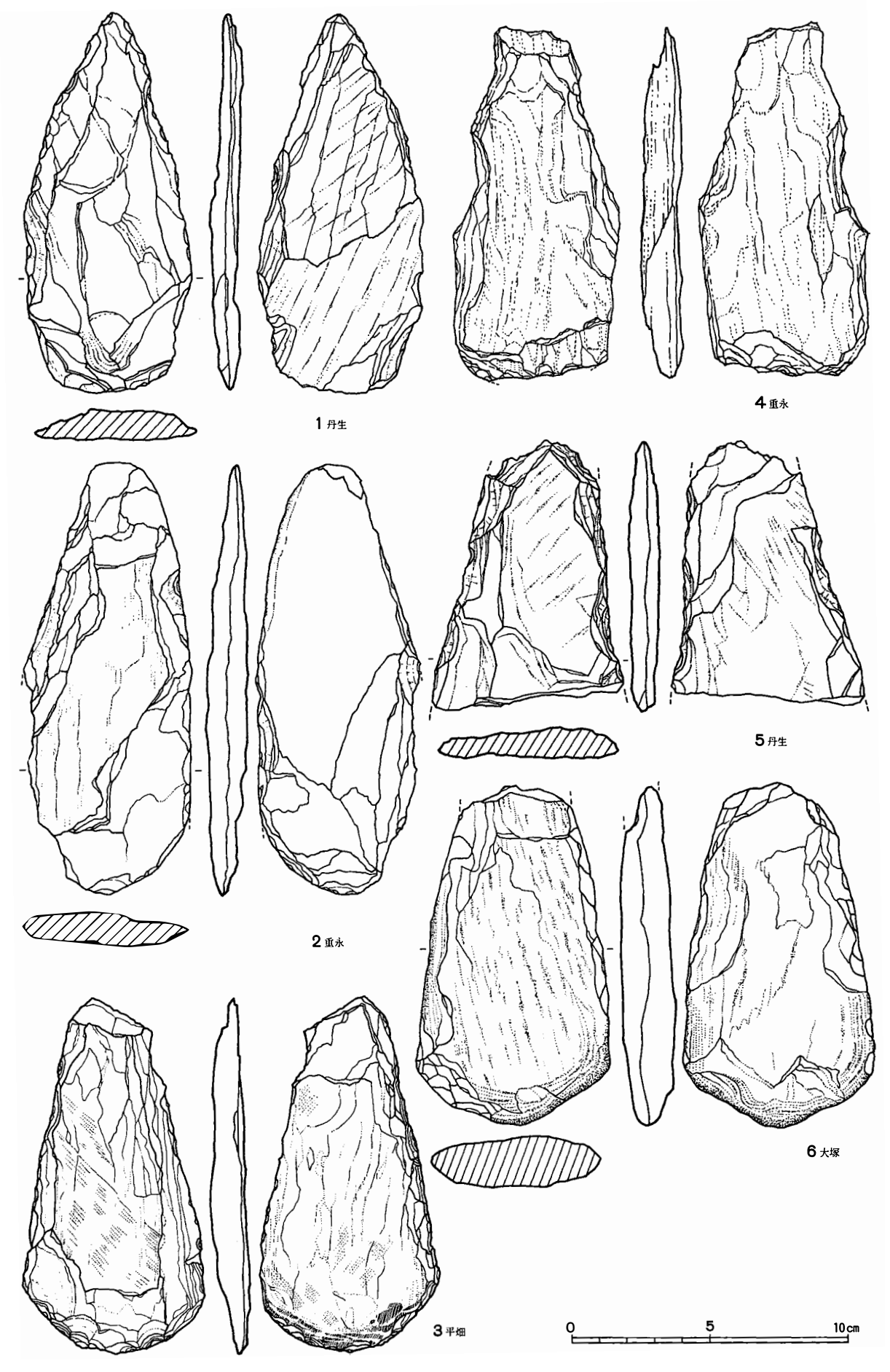
第104図　石器実測図



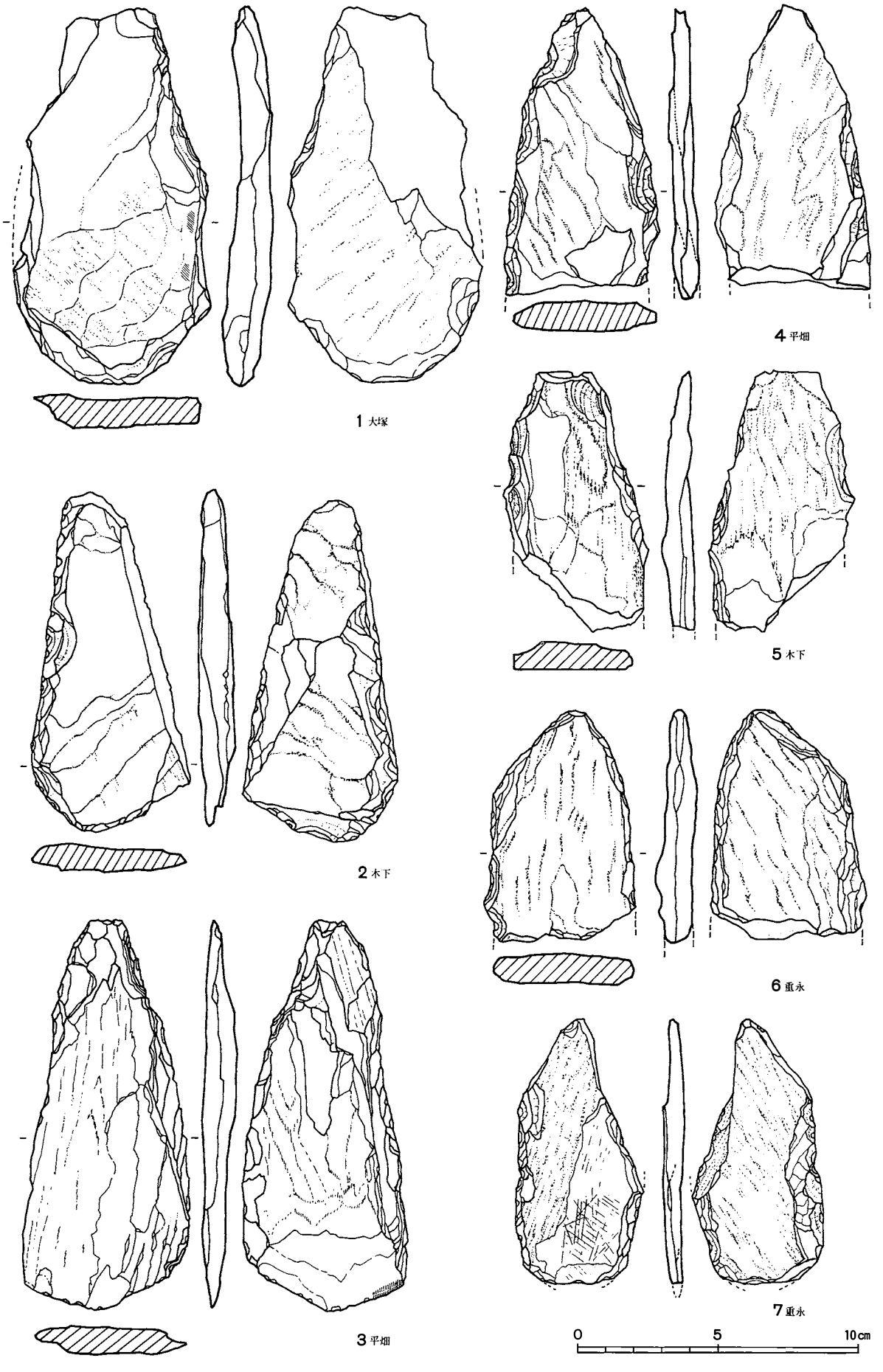
第105図　石器実測図



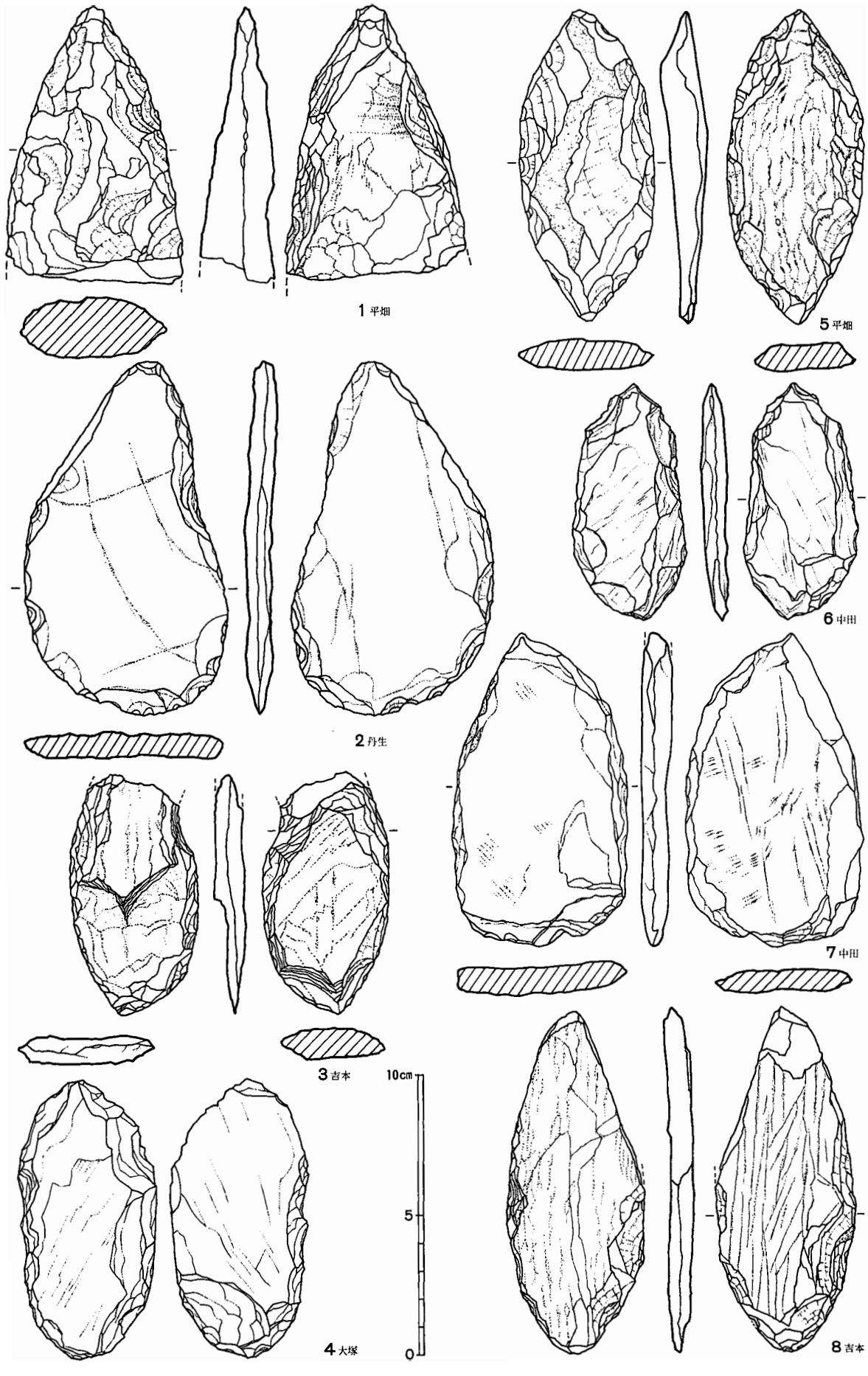
第106図　石器実測図



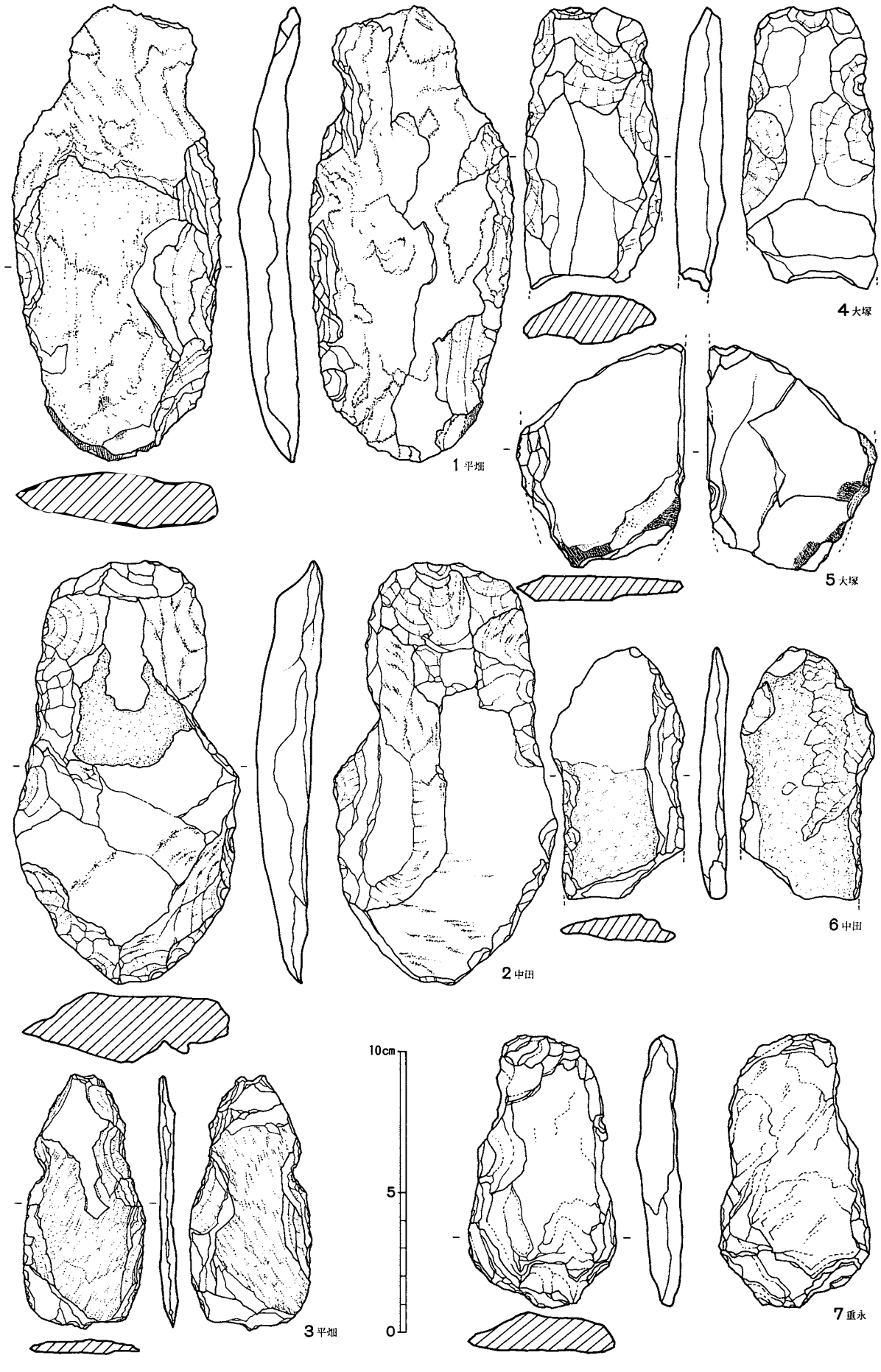
第107図　石器実測図



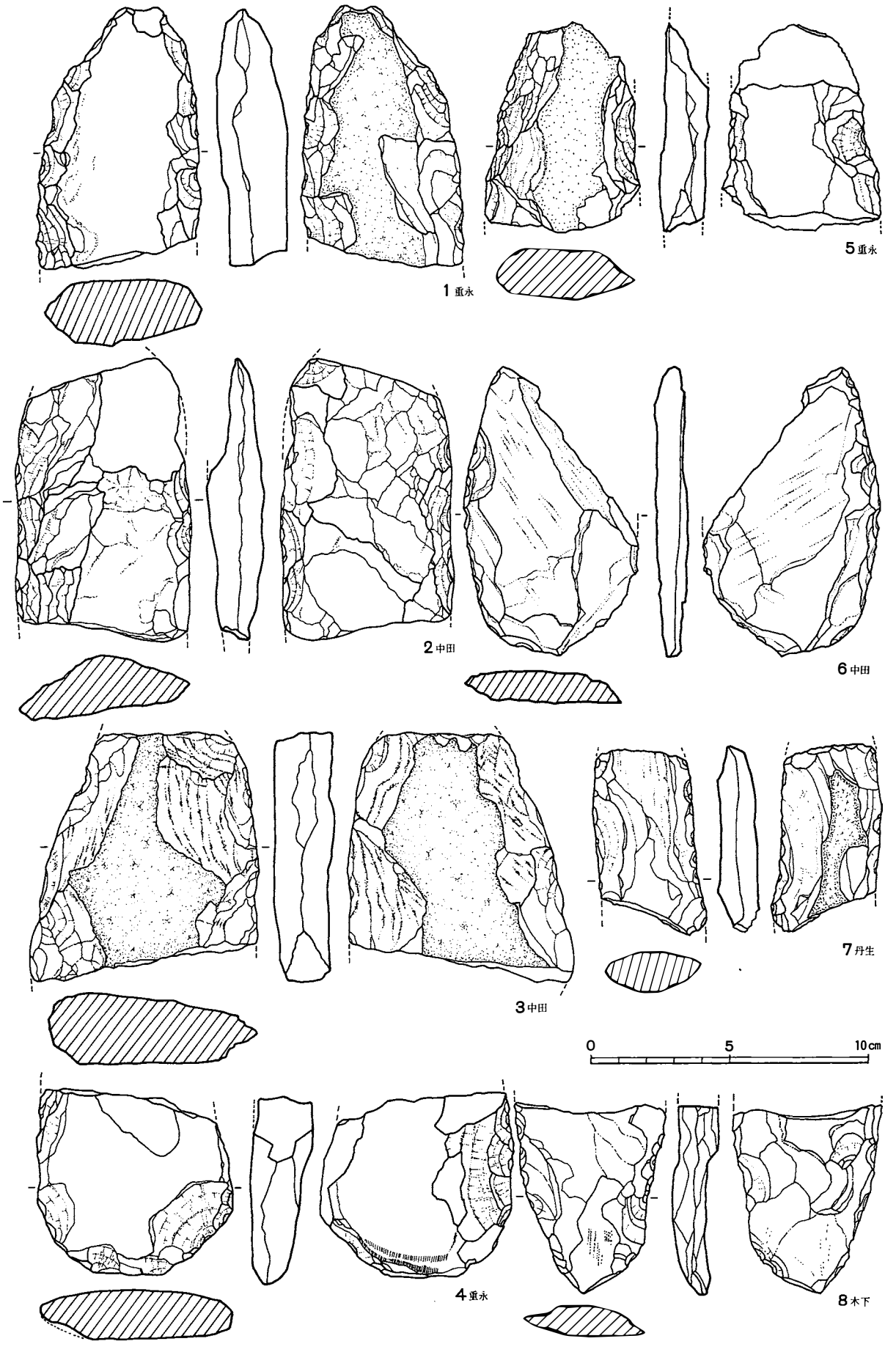
第108図　石器実測図



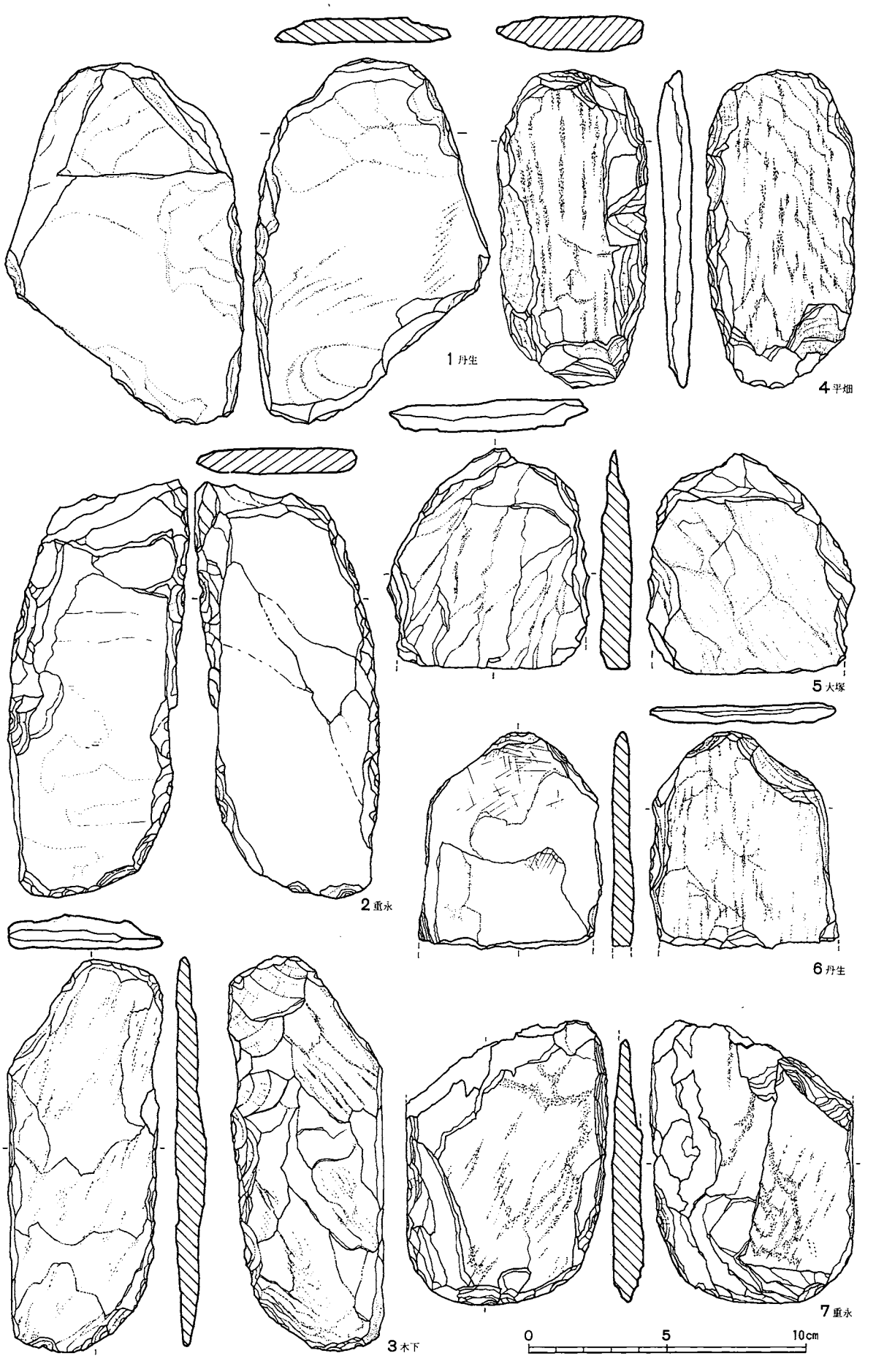
第109図　石器実測図



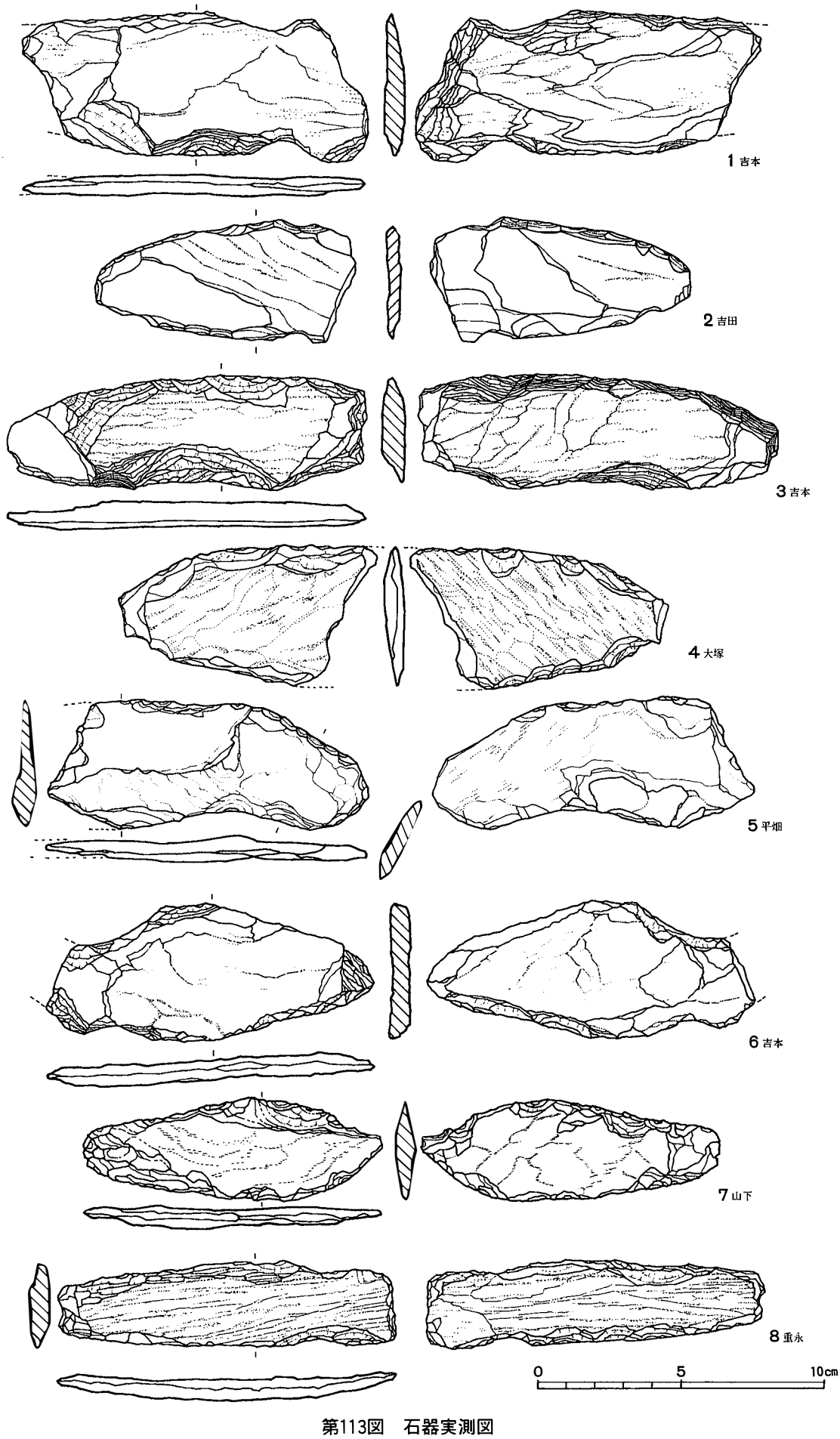
第110図　石器実測図



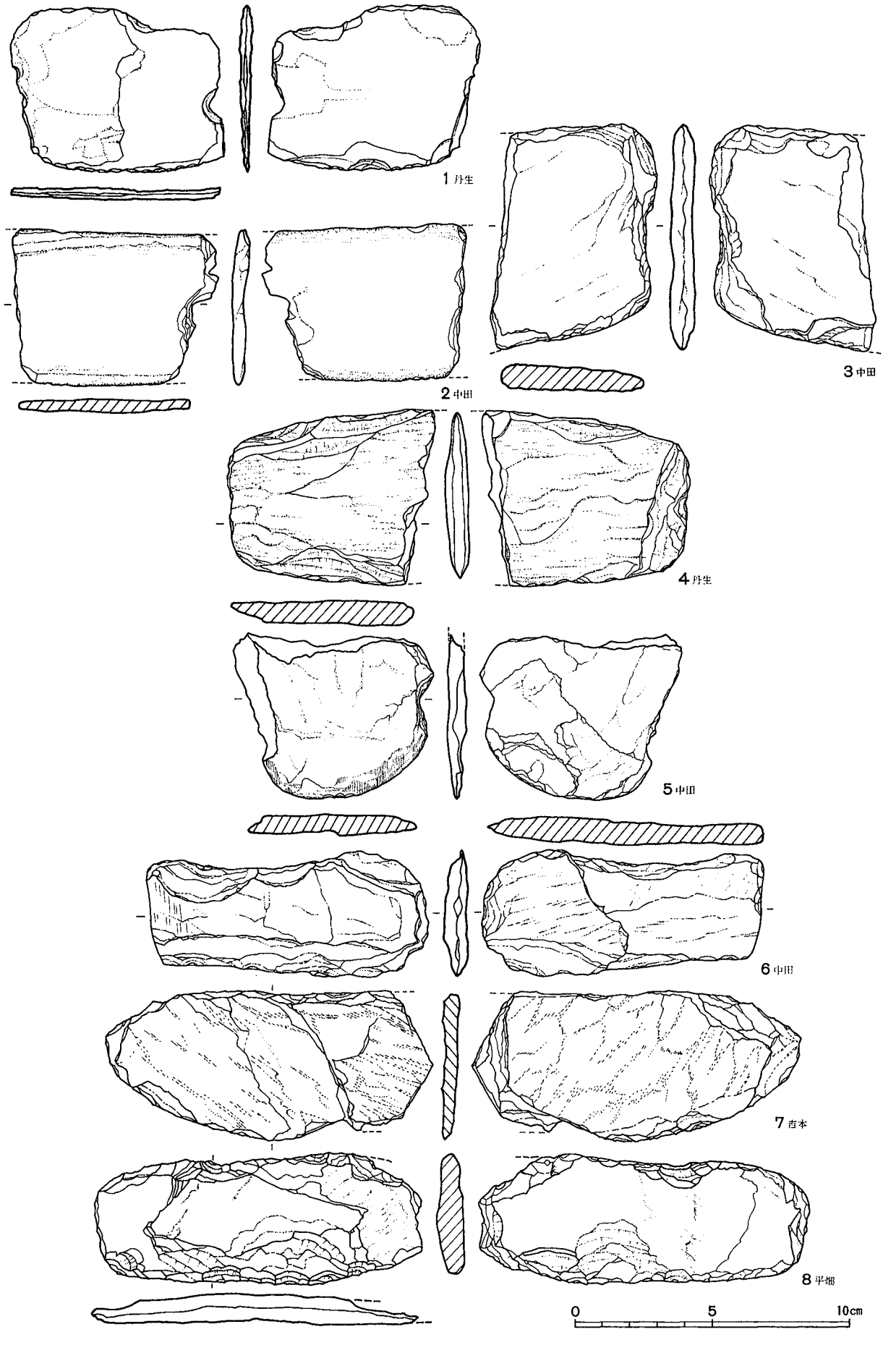
第111図　石器実測図



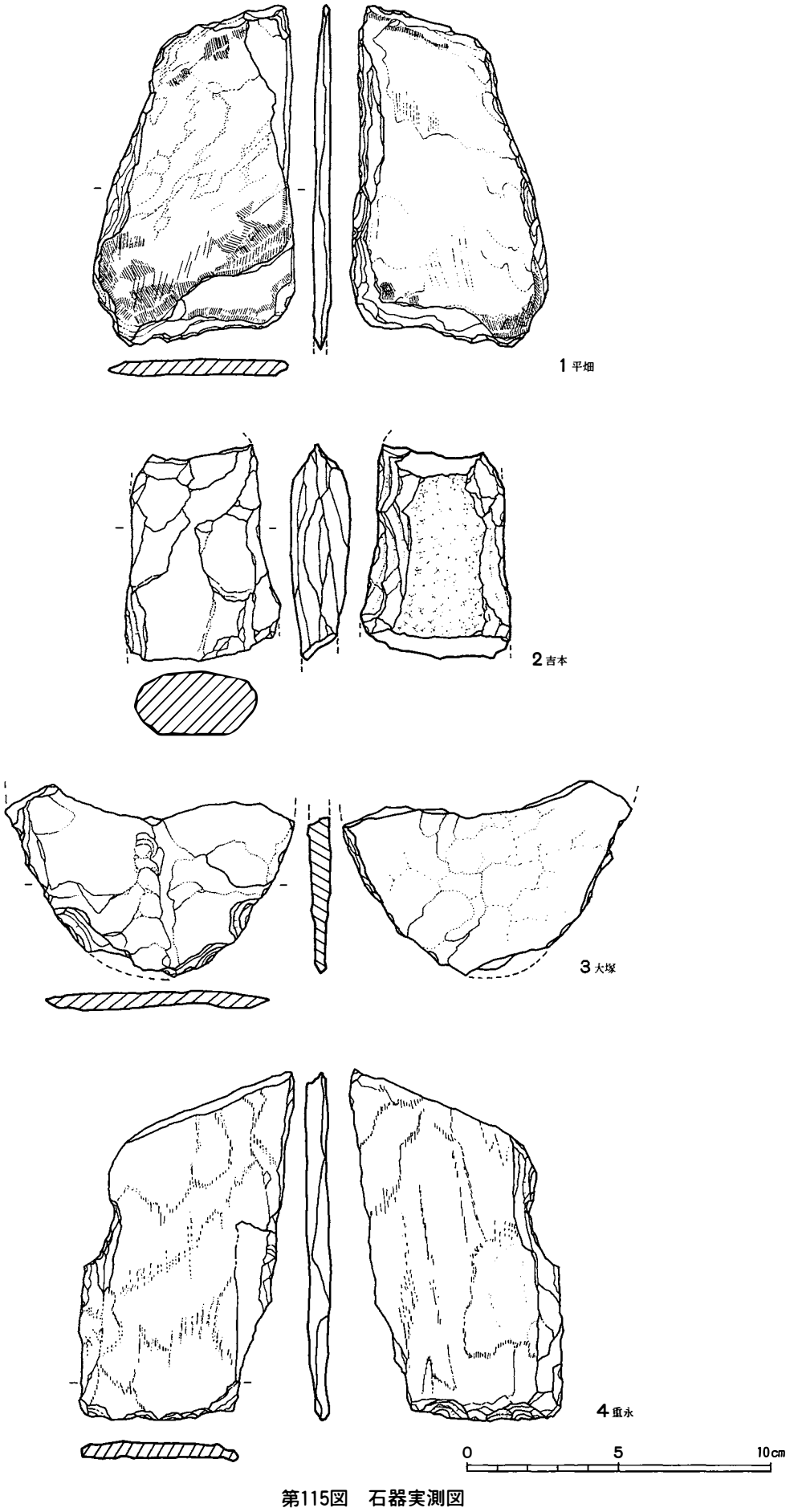
第112図　石器実測図



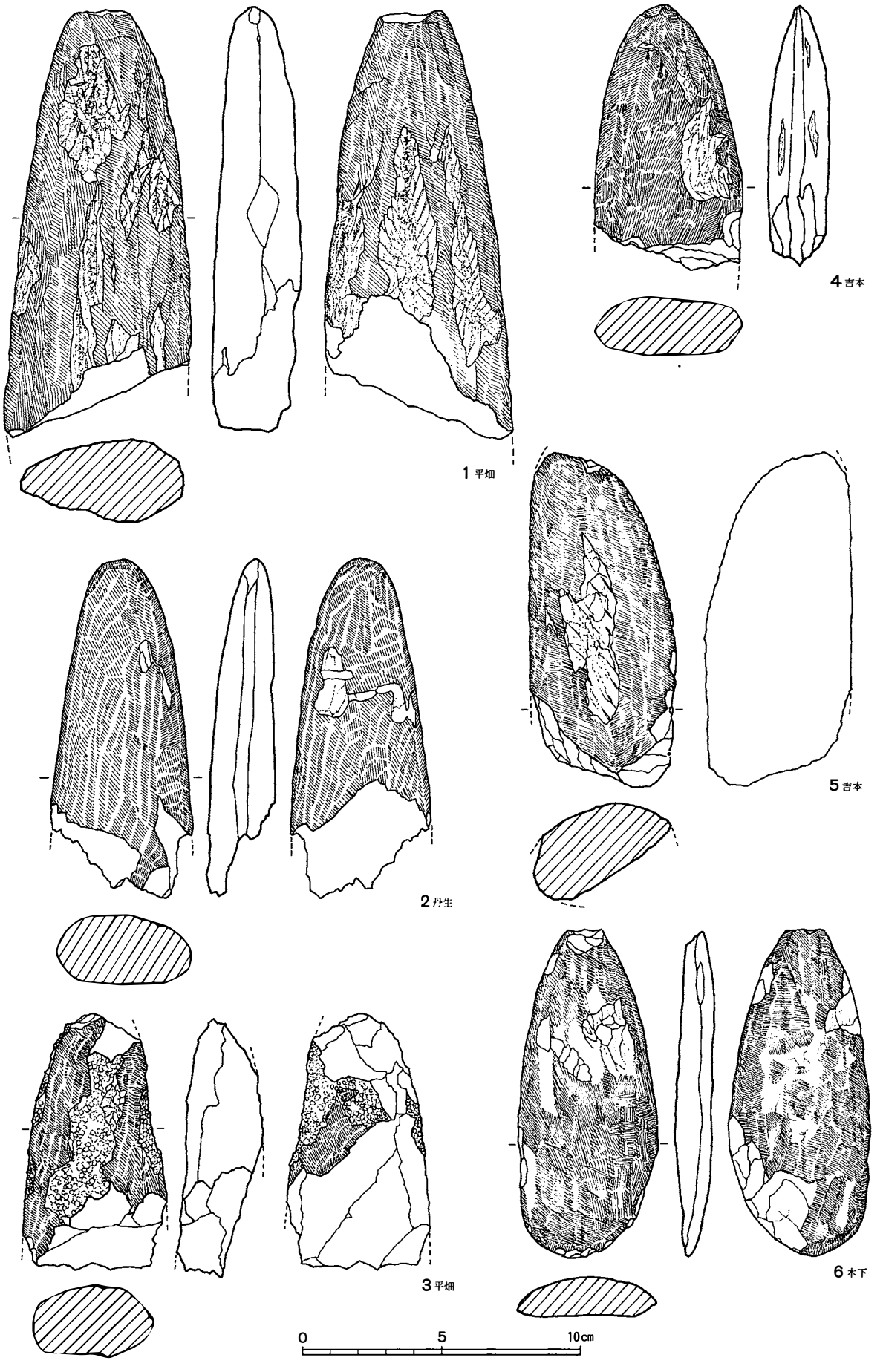
第113図　石器実測図



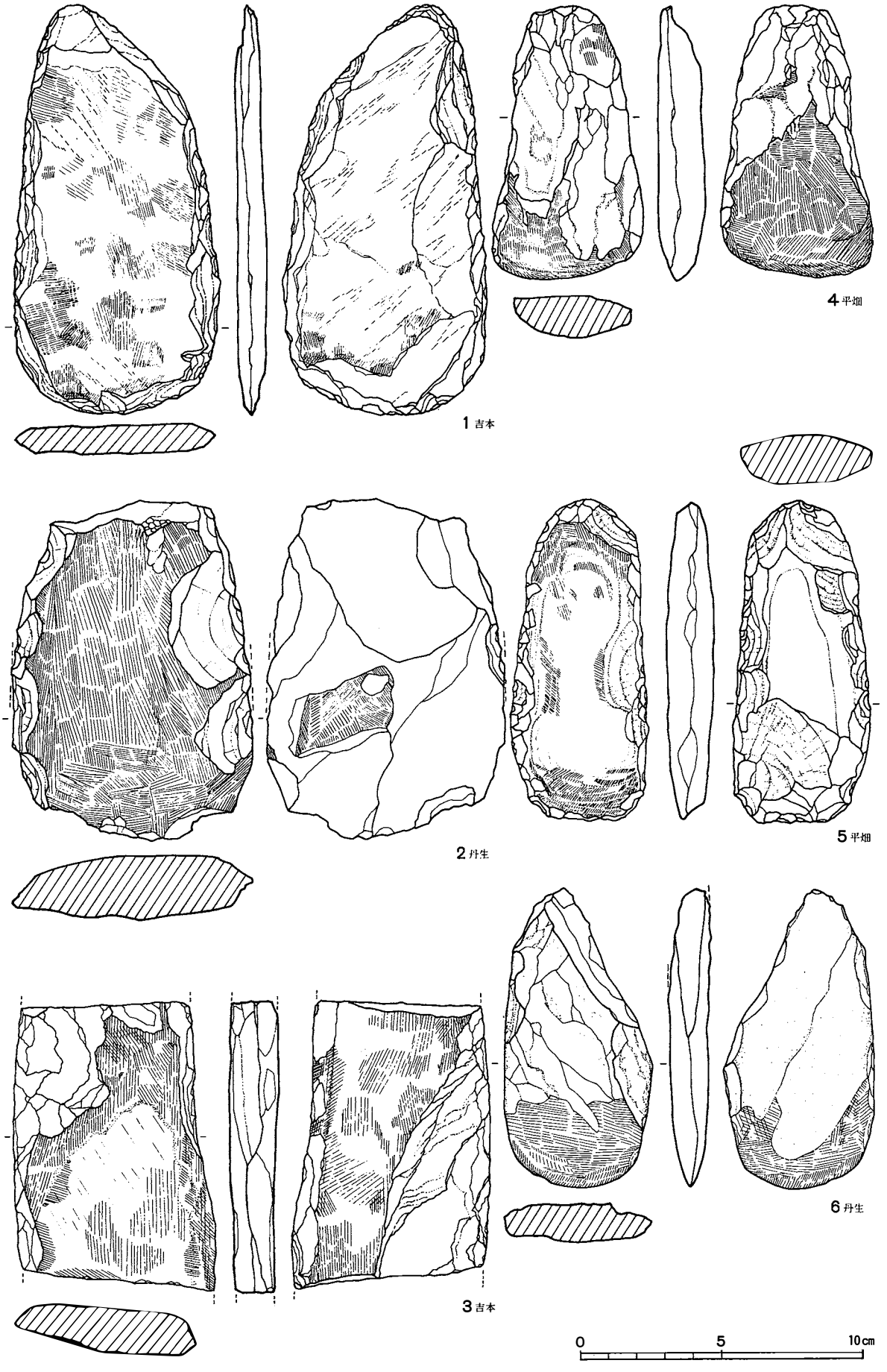
第114図　石器実測図



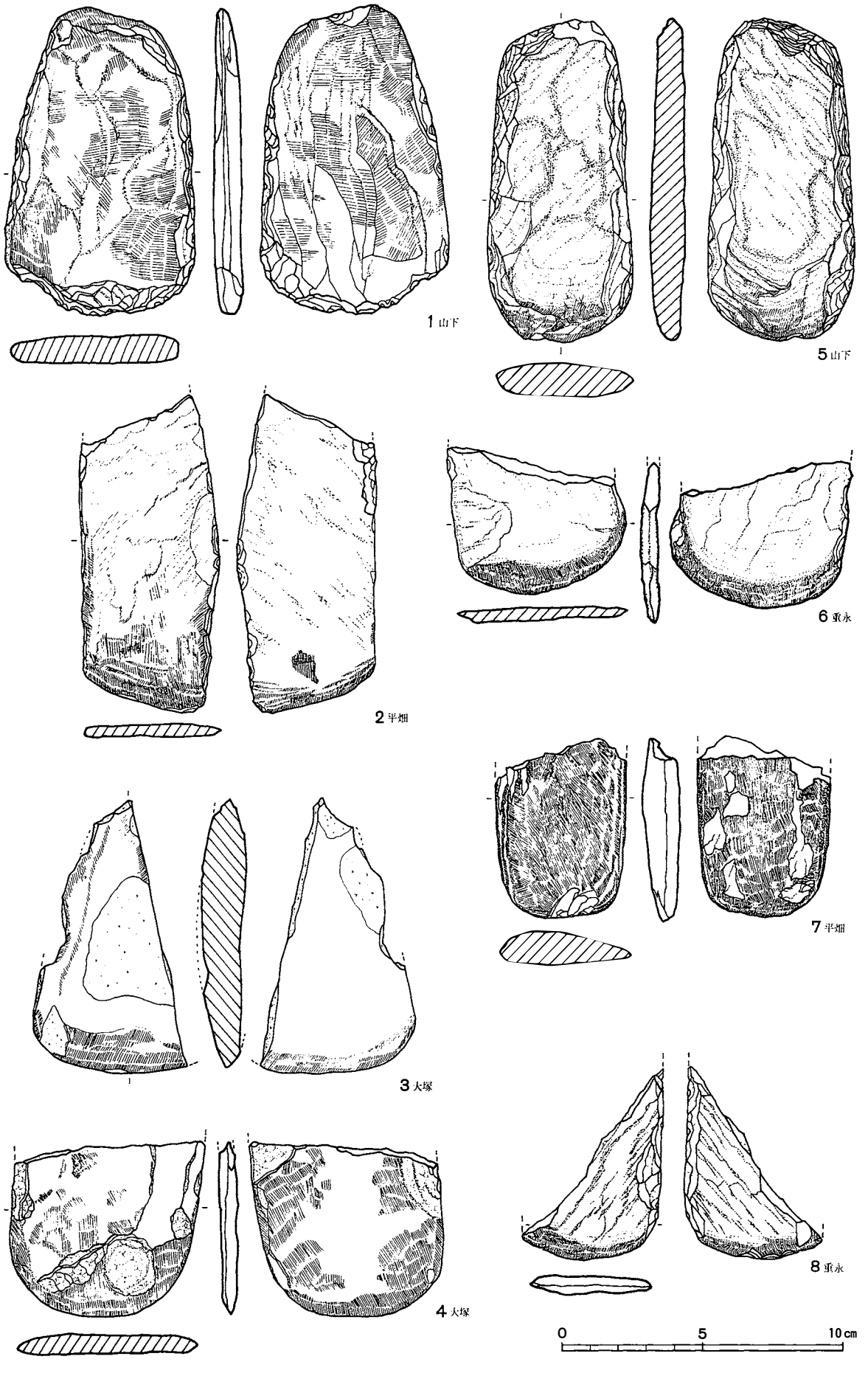
第115図　石器実測図



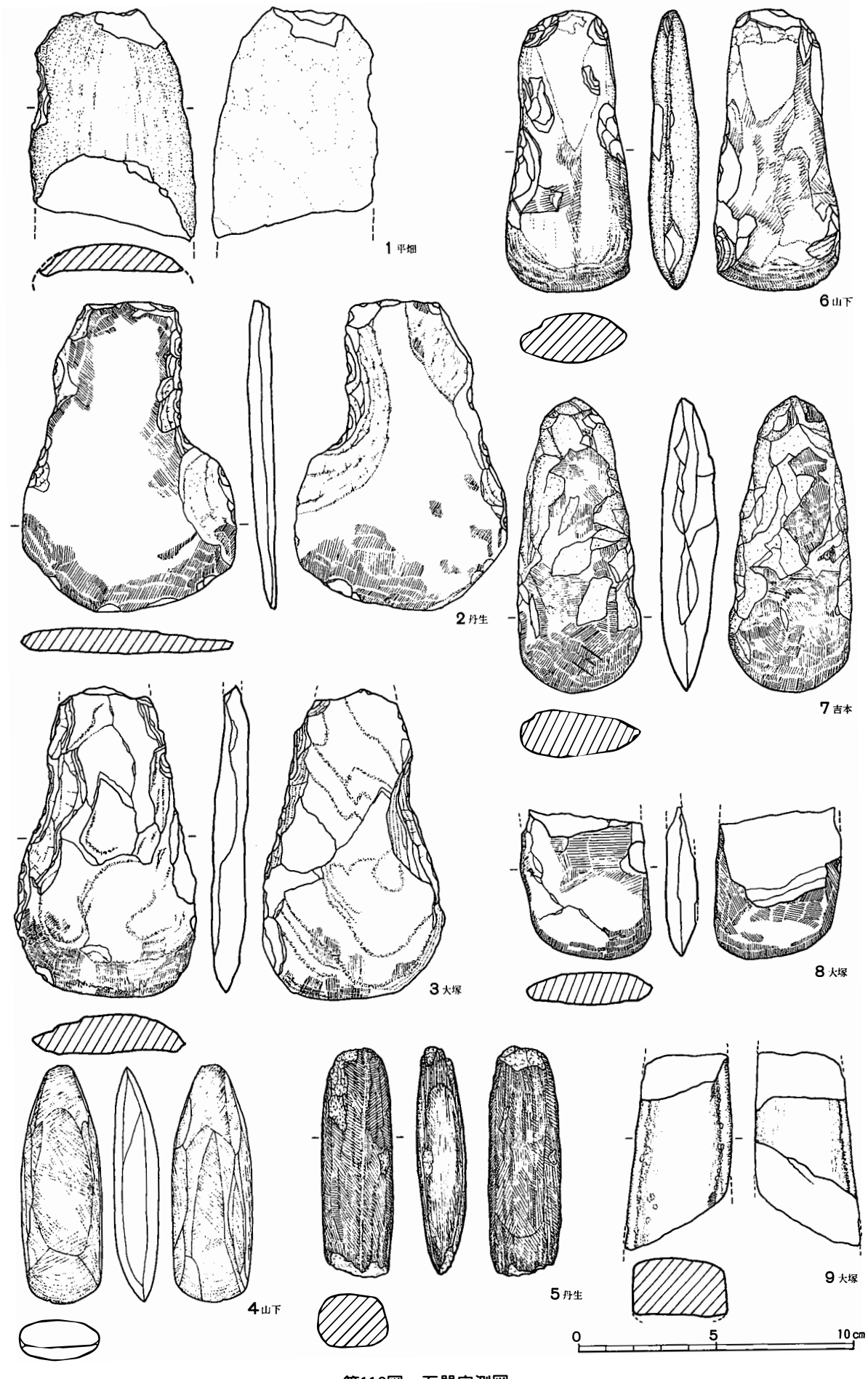
第116図　石器実測図



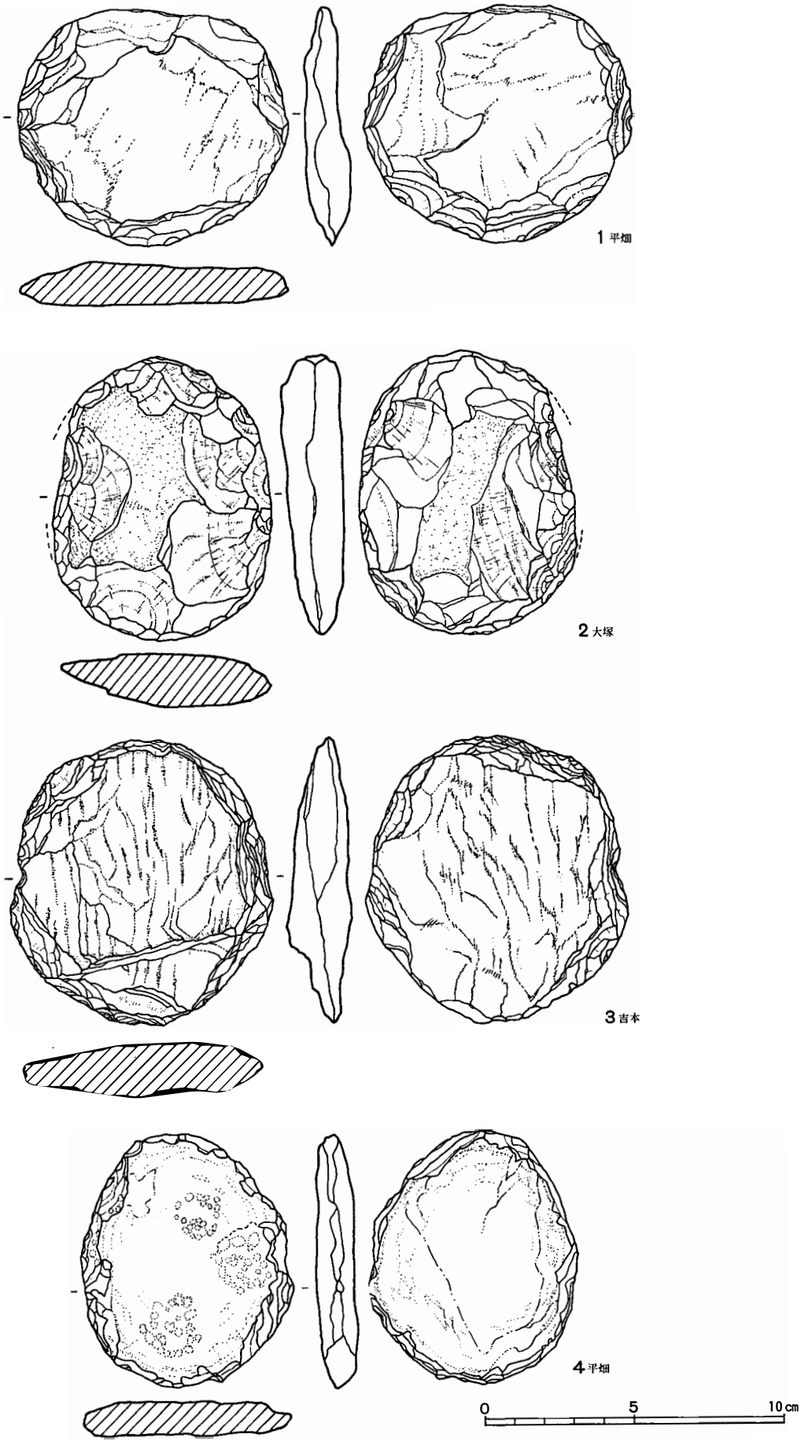
第117図　石器実測図



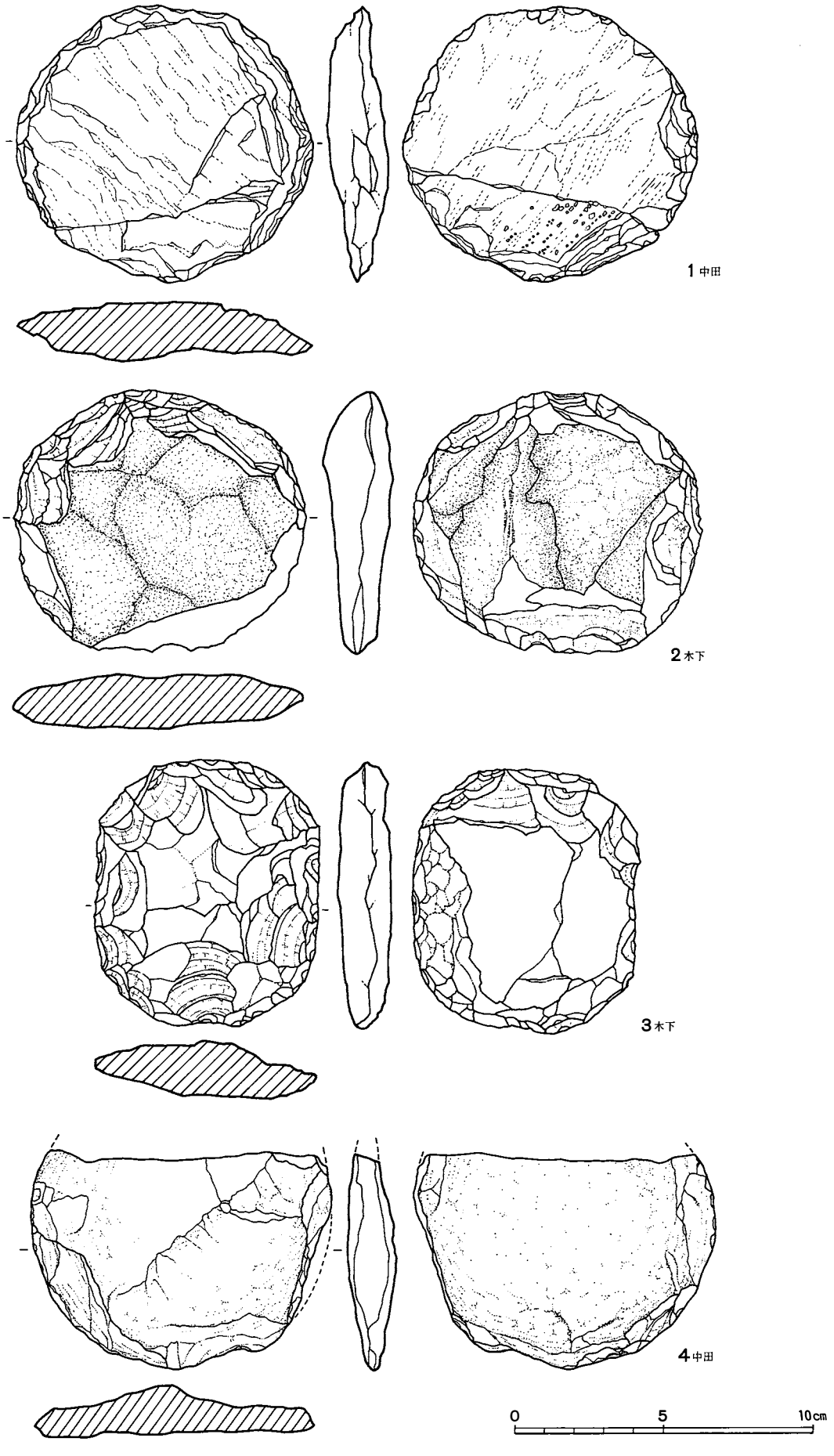
第118図　石器実測図



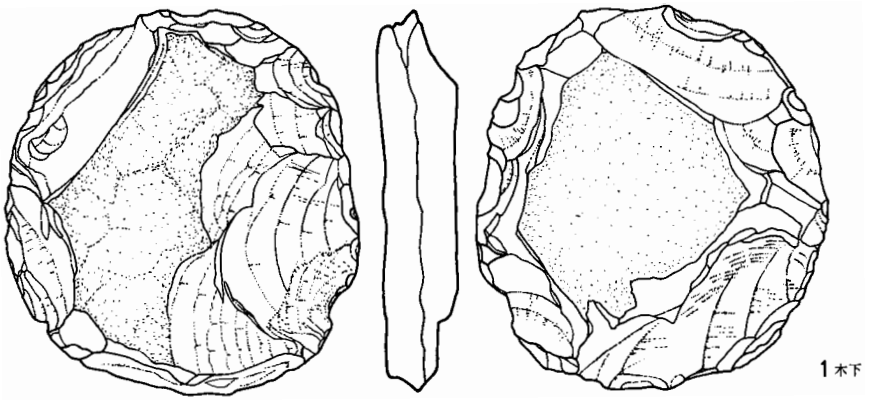
第119図　石器実測図

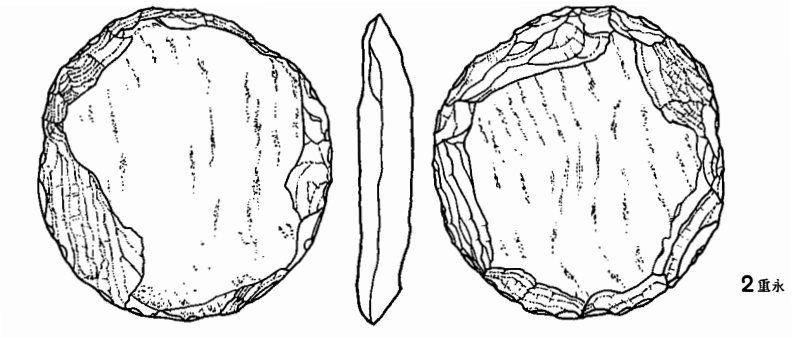


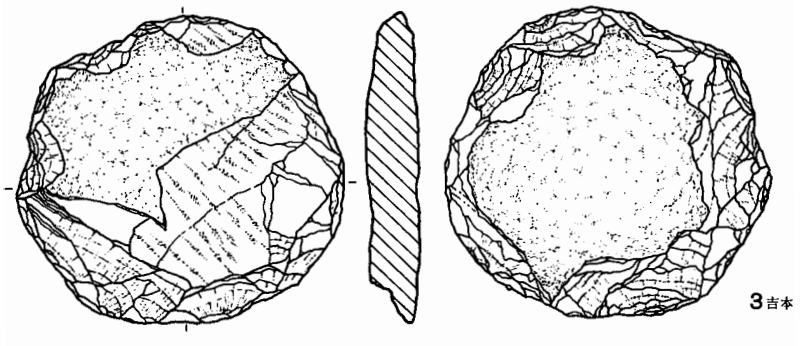
第120図　石器実測図

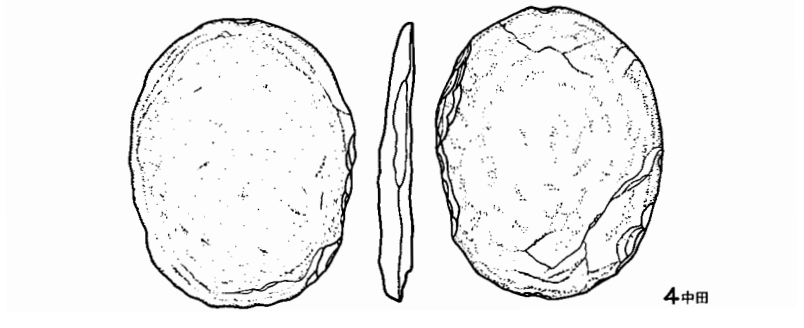


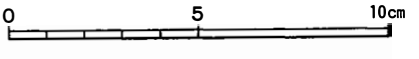
第121図　石器実測図

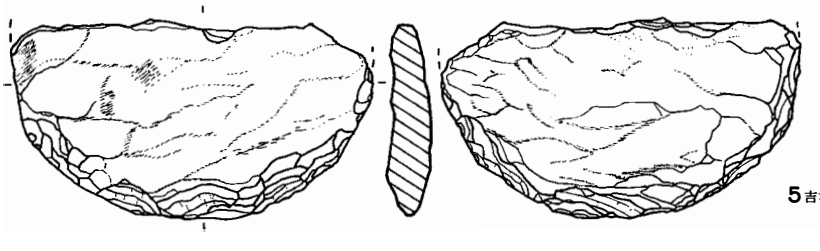




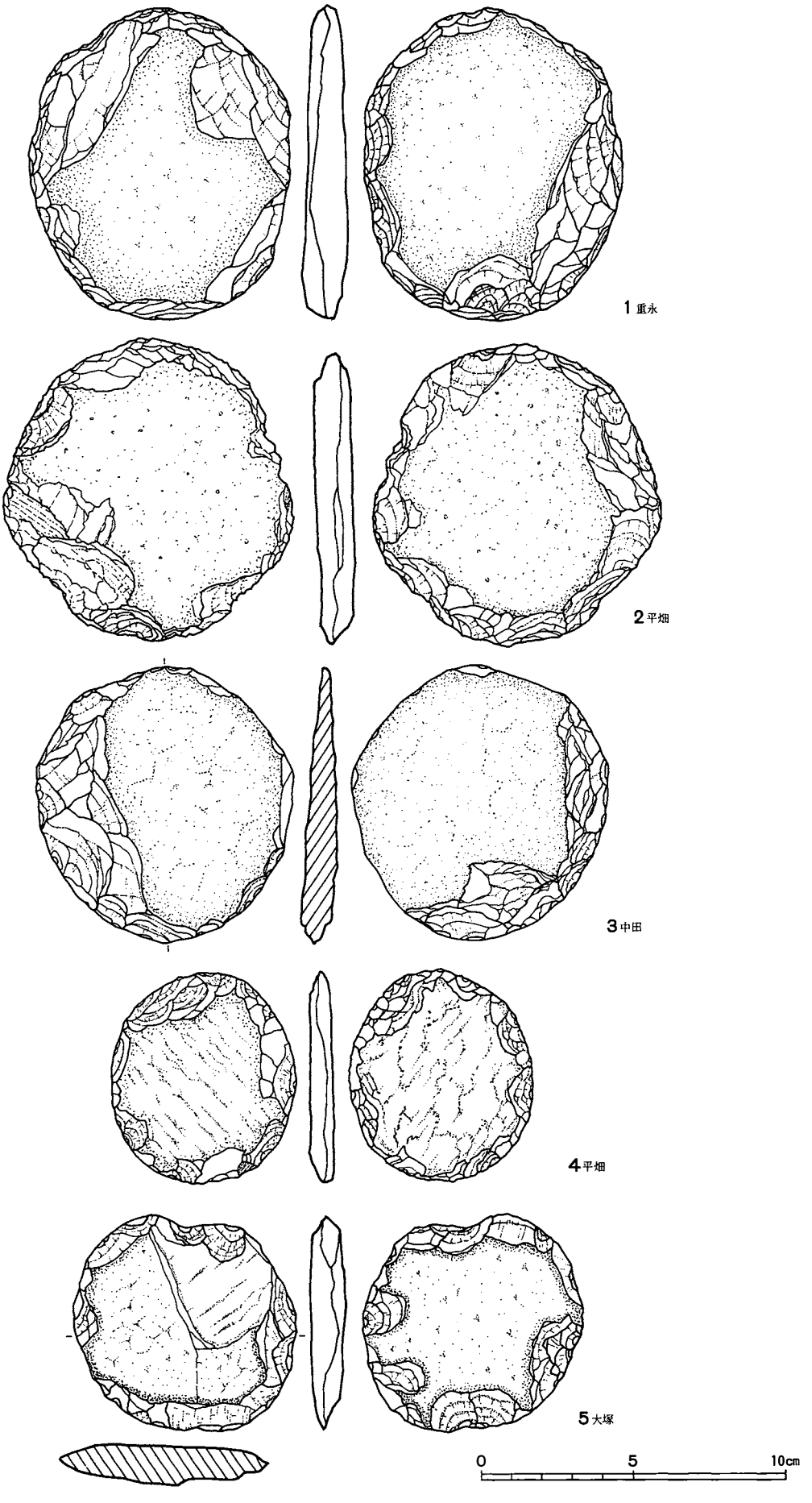




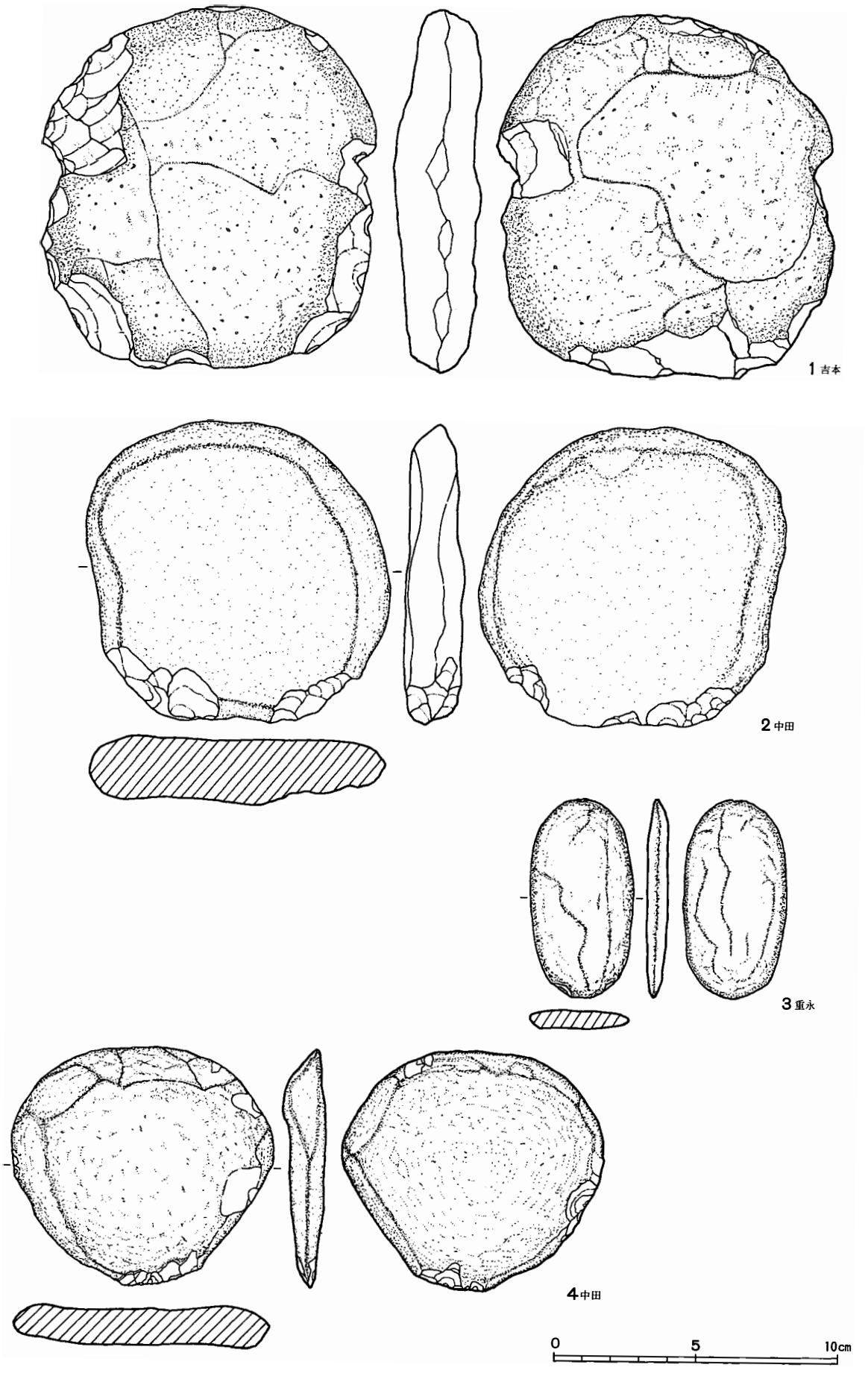




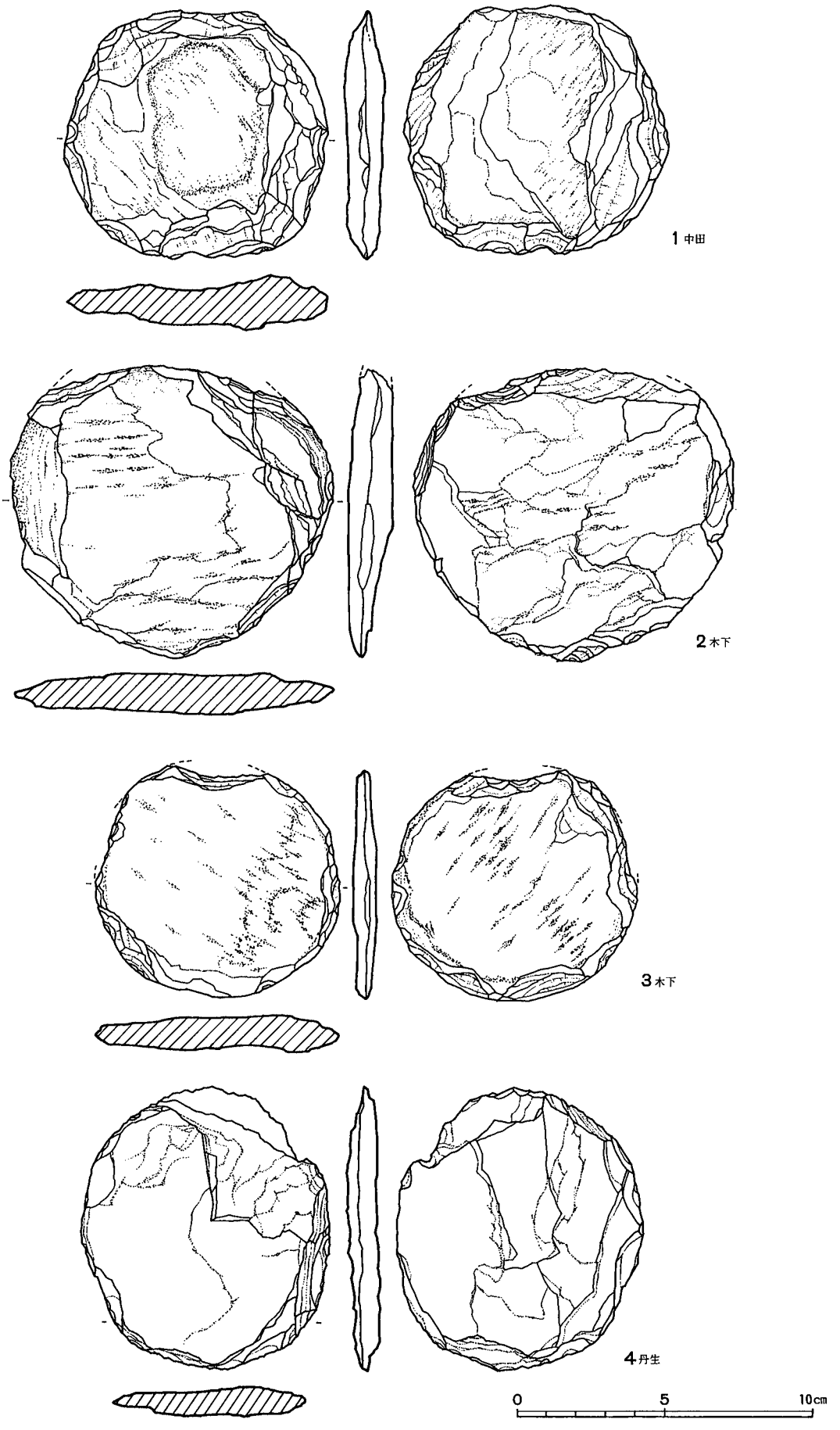
第122図　石器実測図



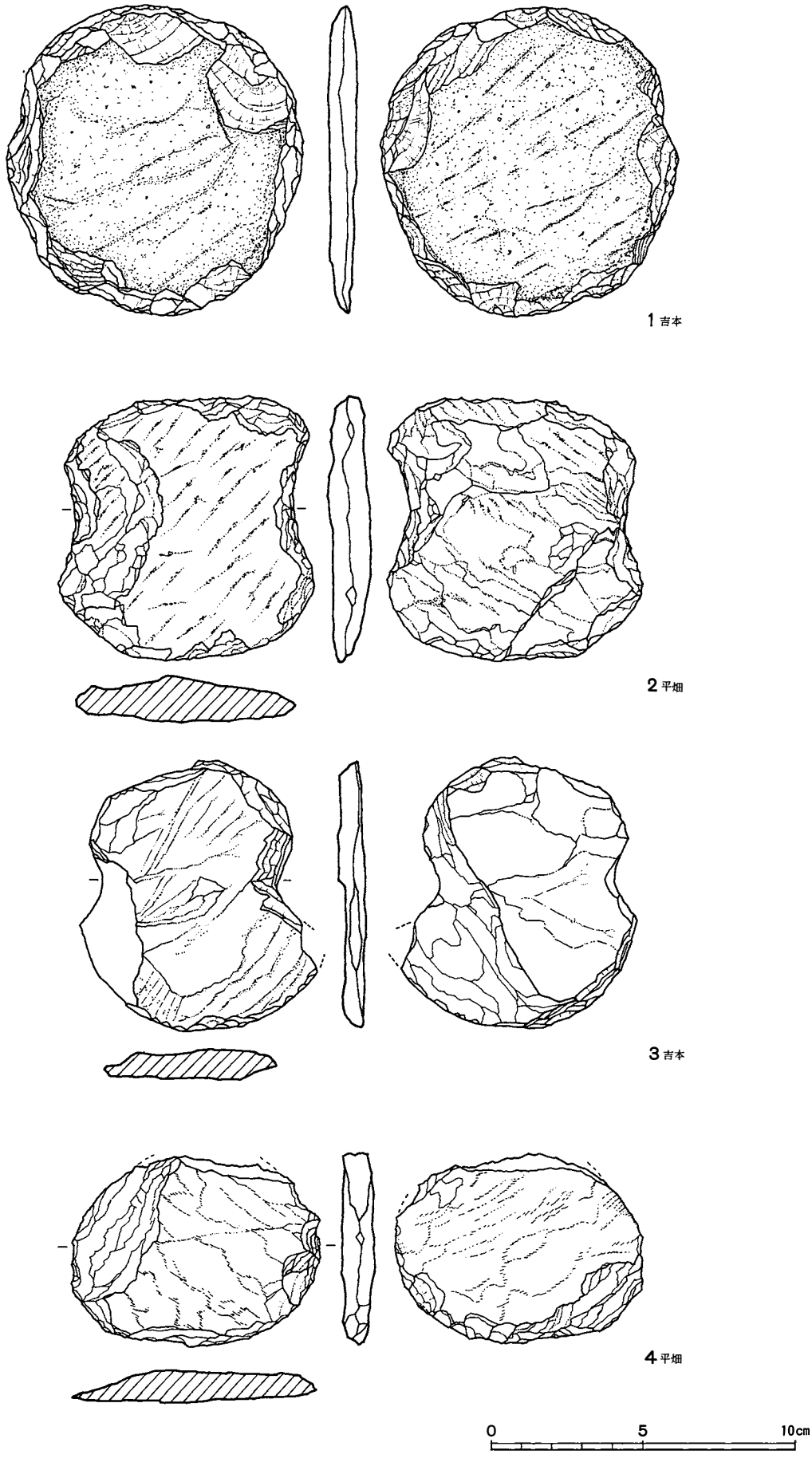
第123図　石器実測図



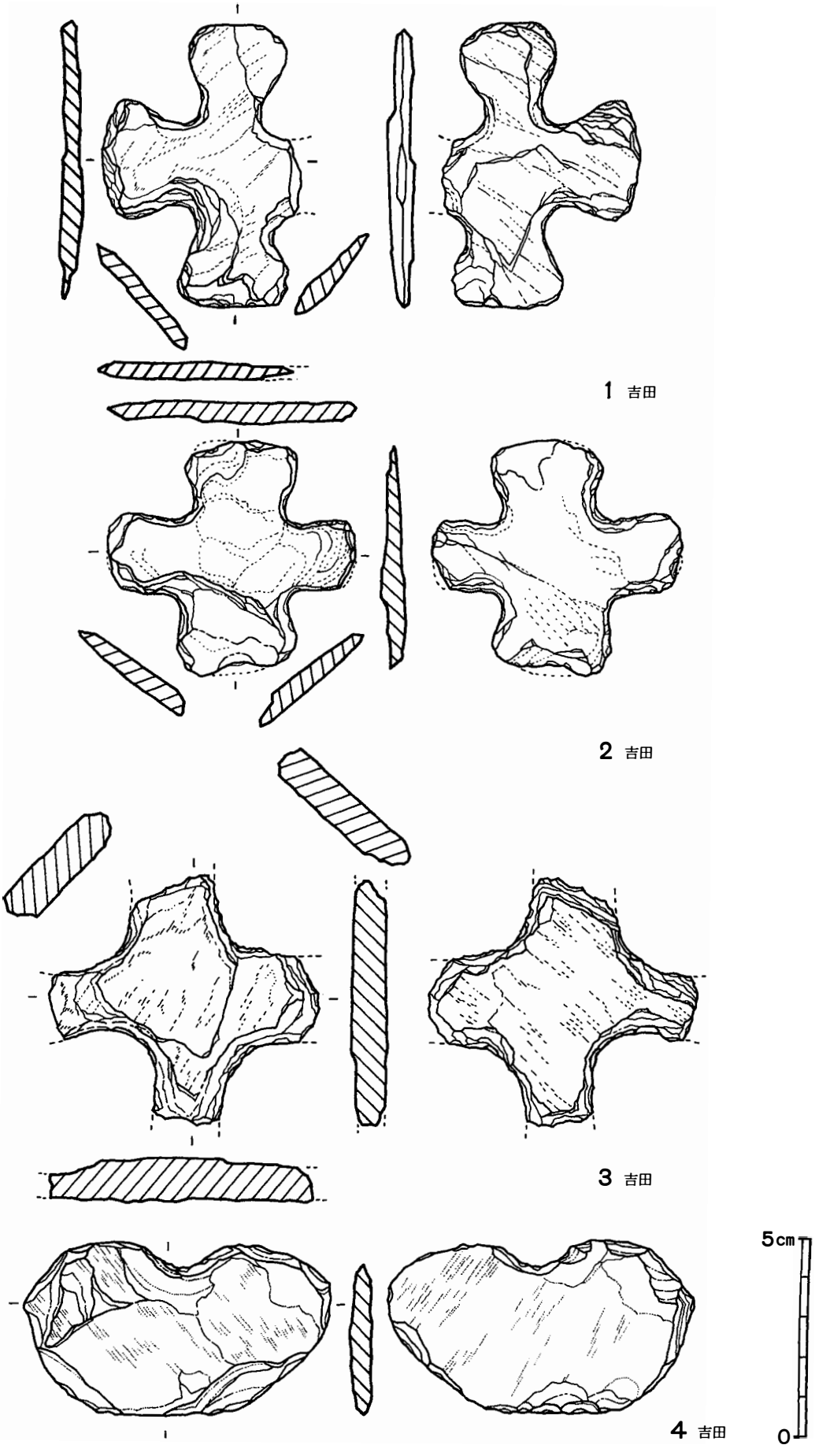
第124図　石器実測図



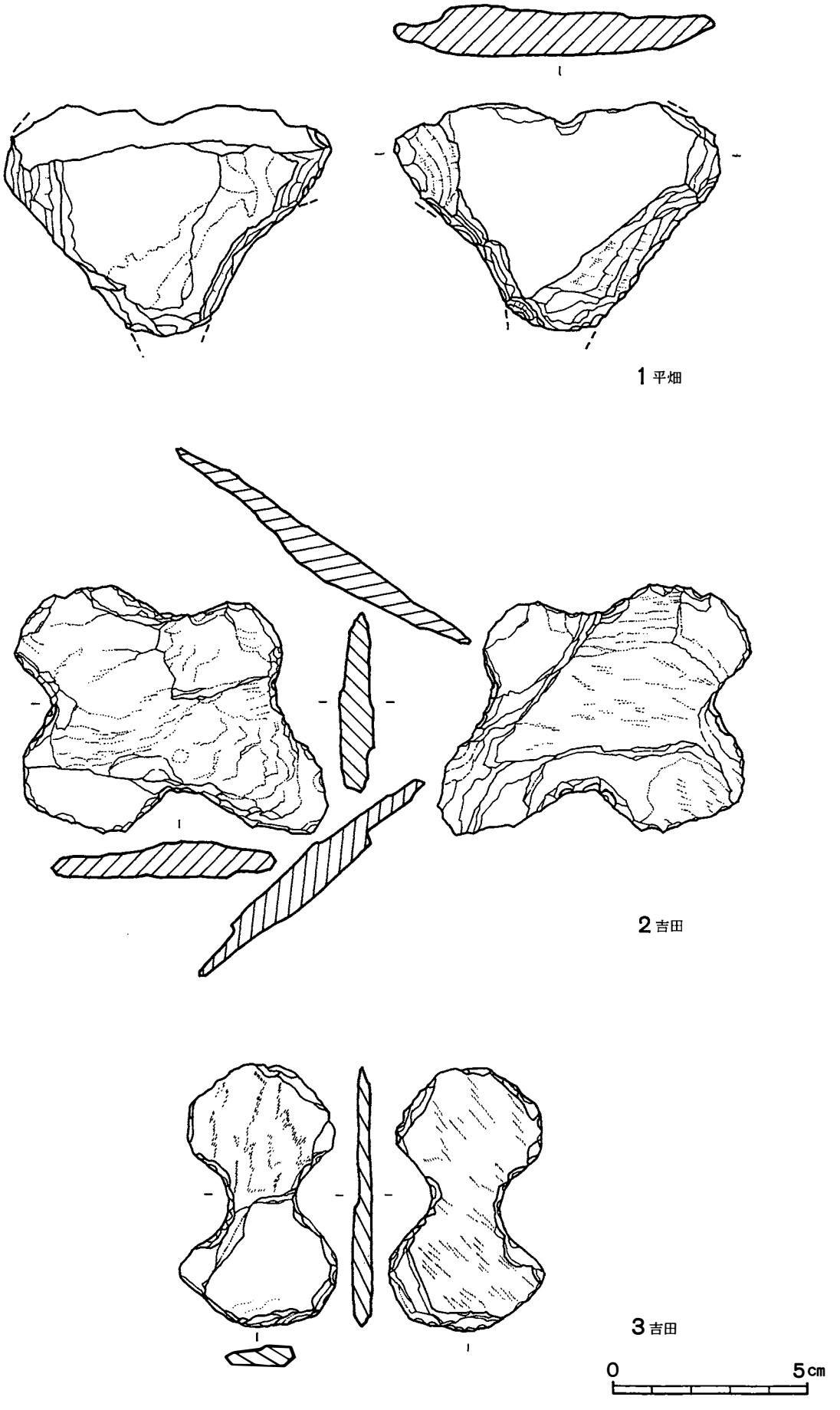
第125図　石器実測図



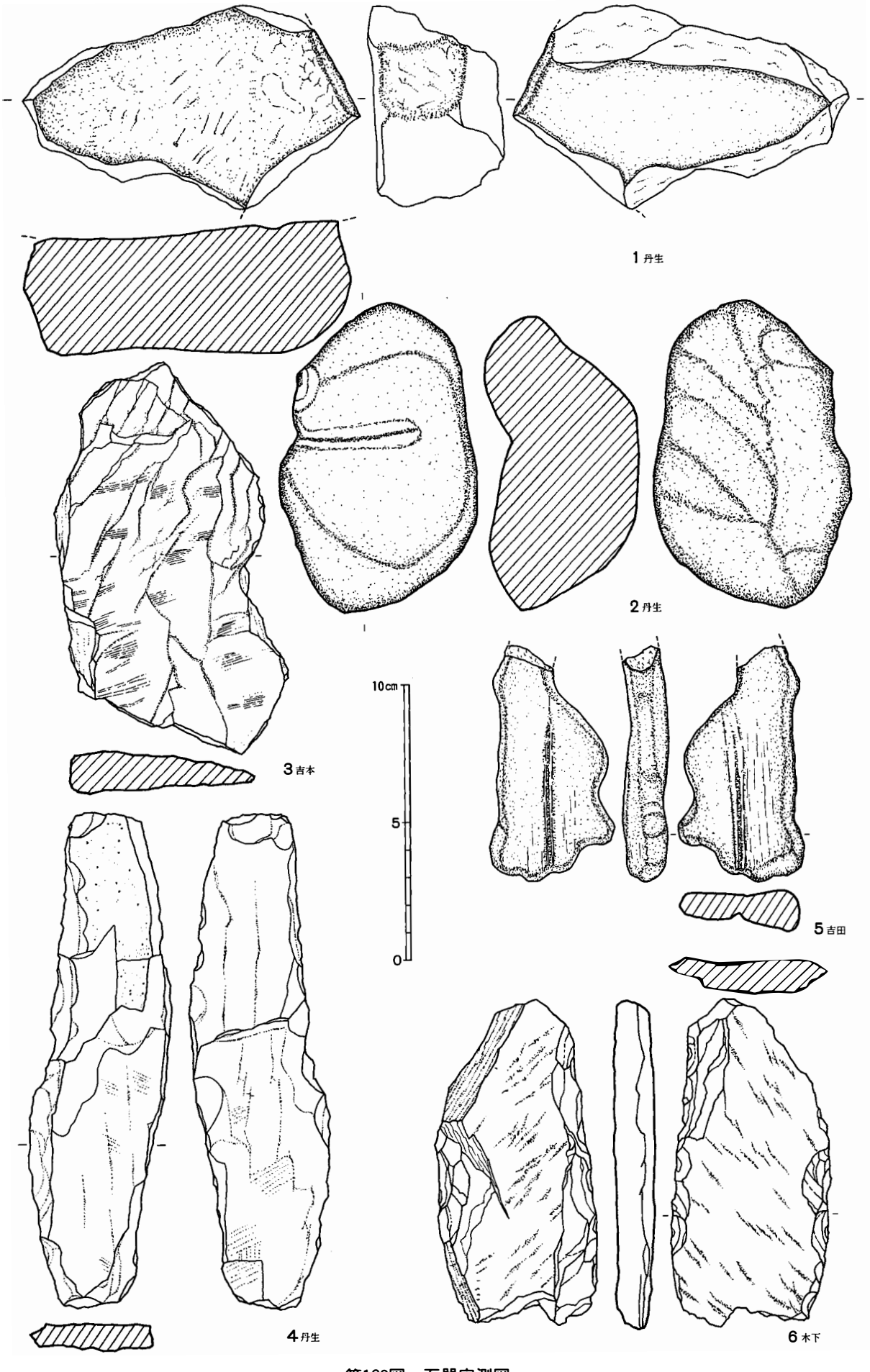
第126図　石器実測図



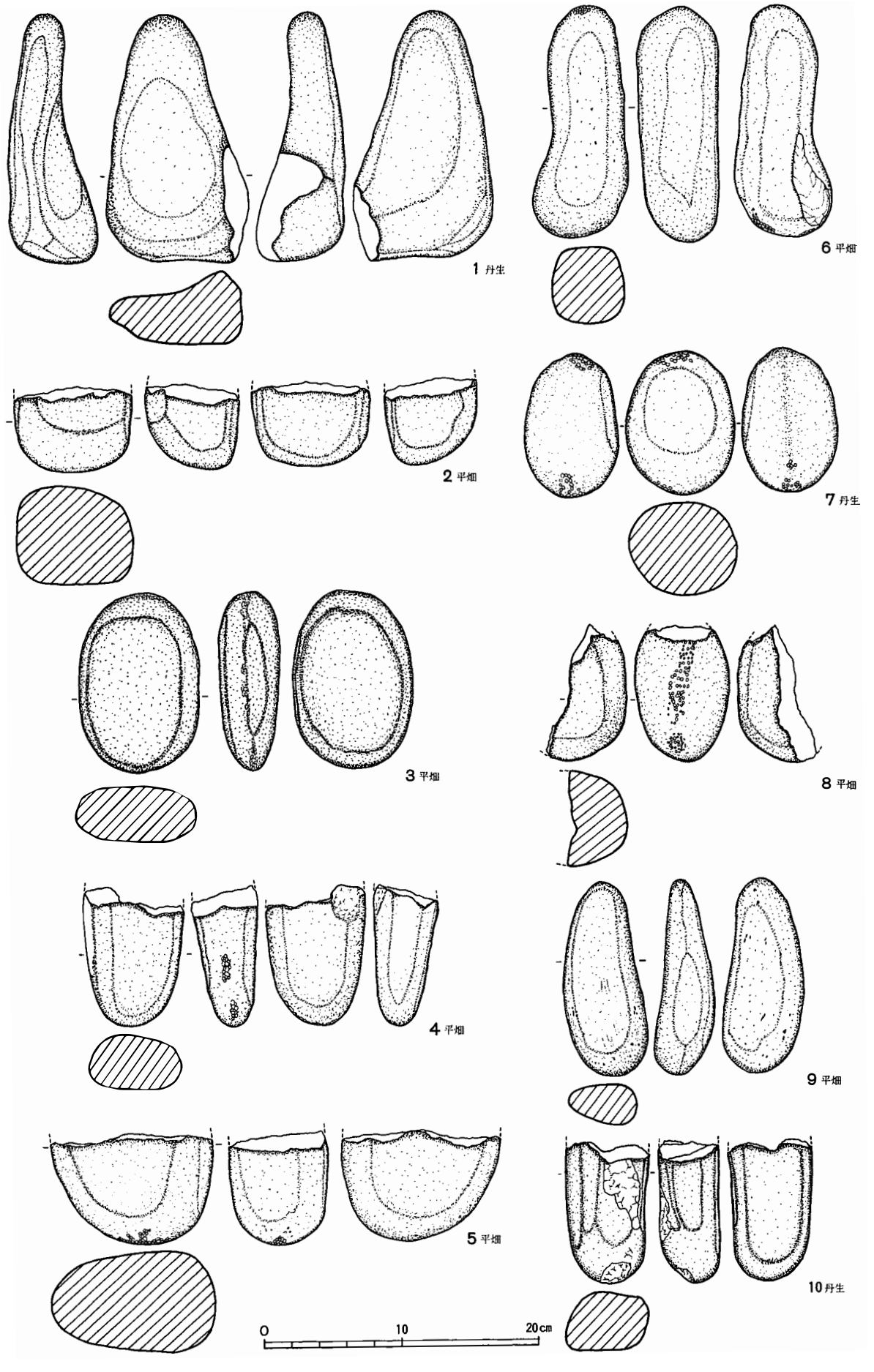
第127図　石器実測図



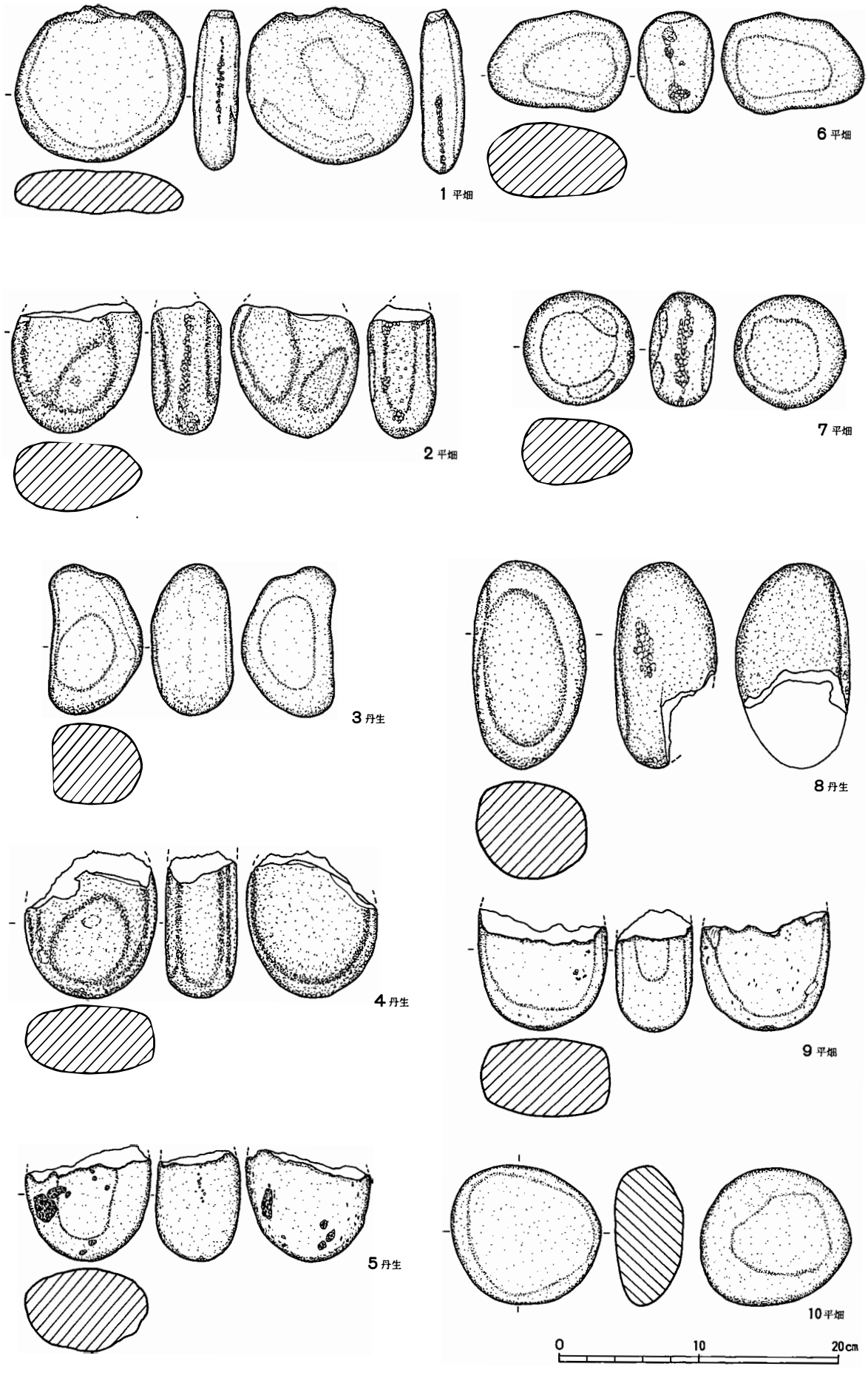
第128図　石器実測図



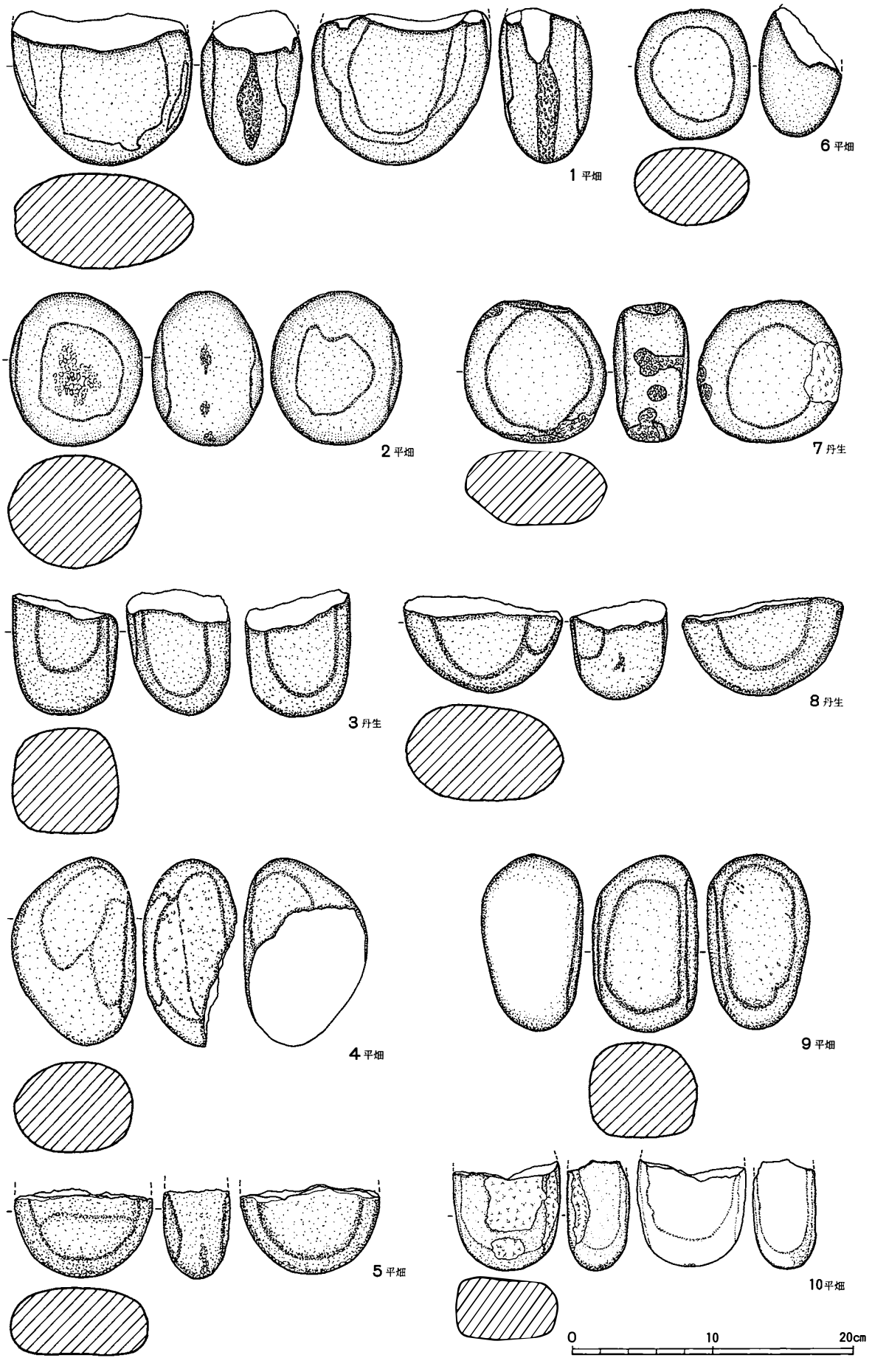
第129図　石器実測図



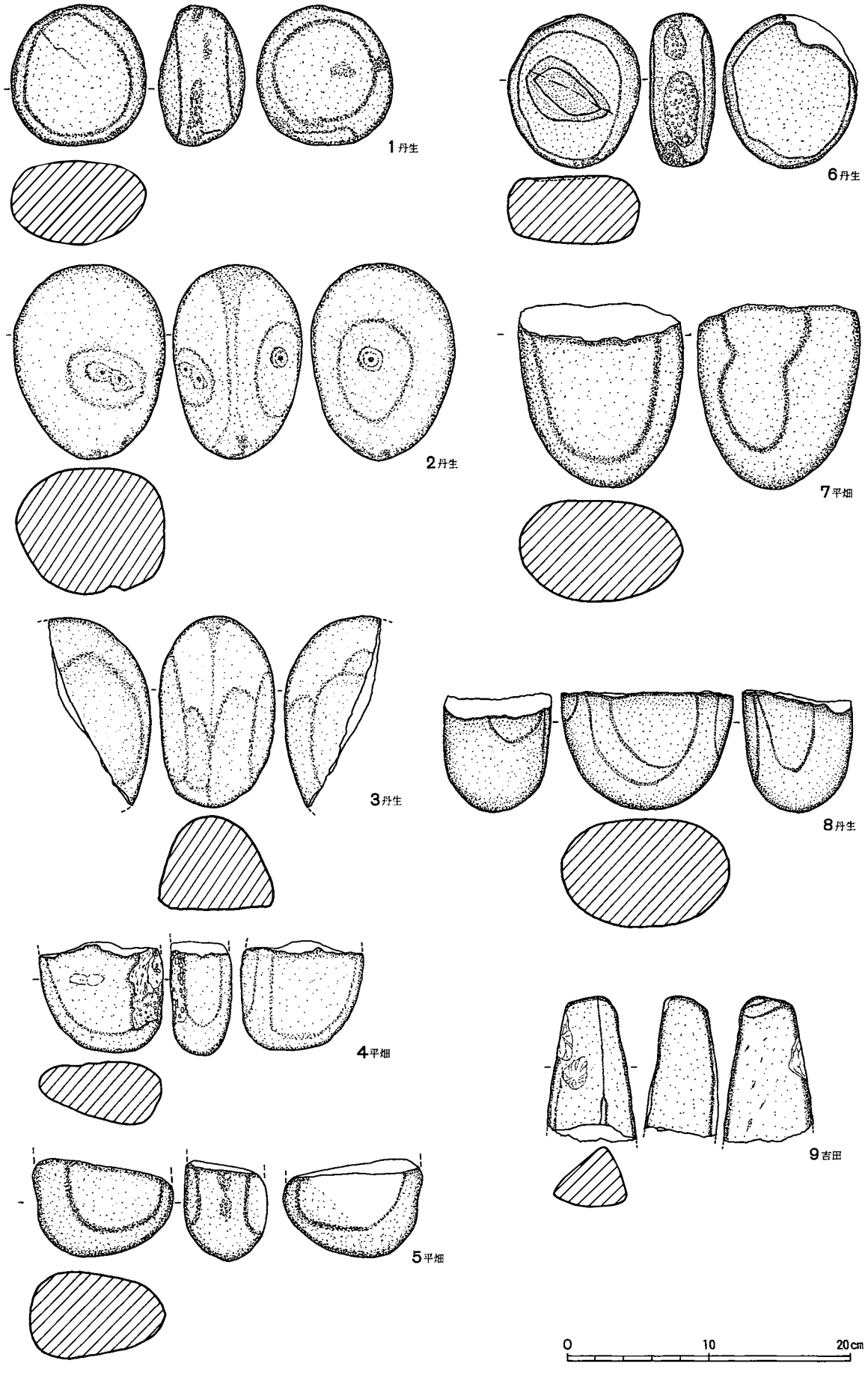
第130図　石器実測図



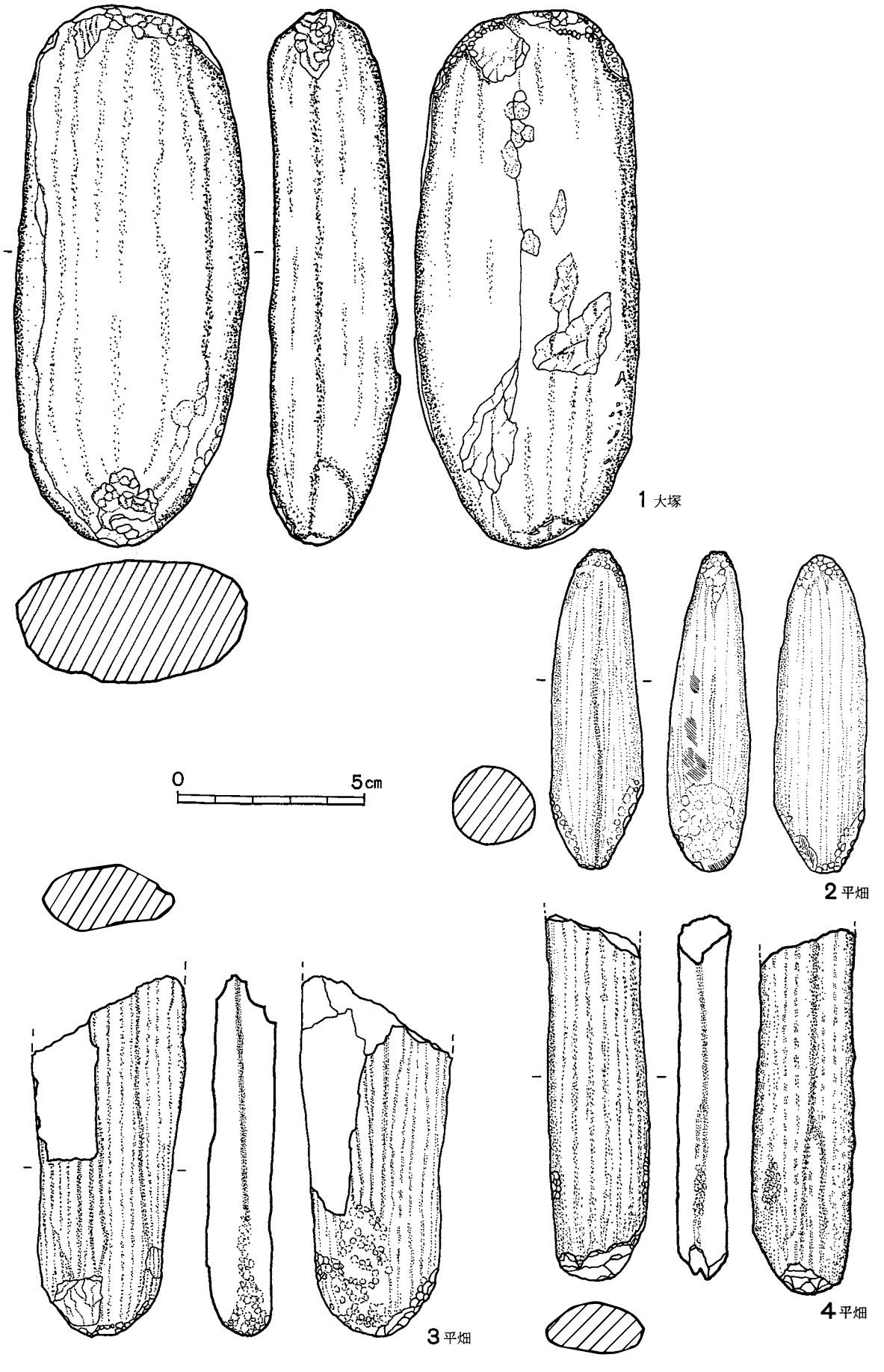
第131図　石器実測図



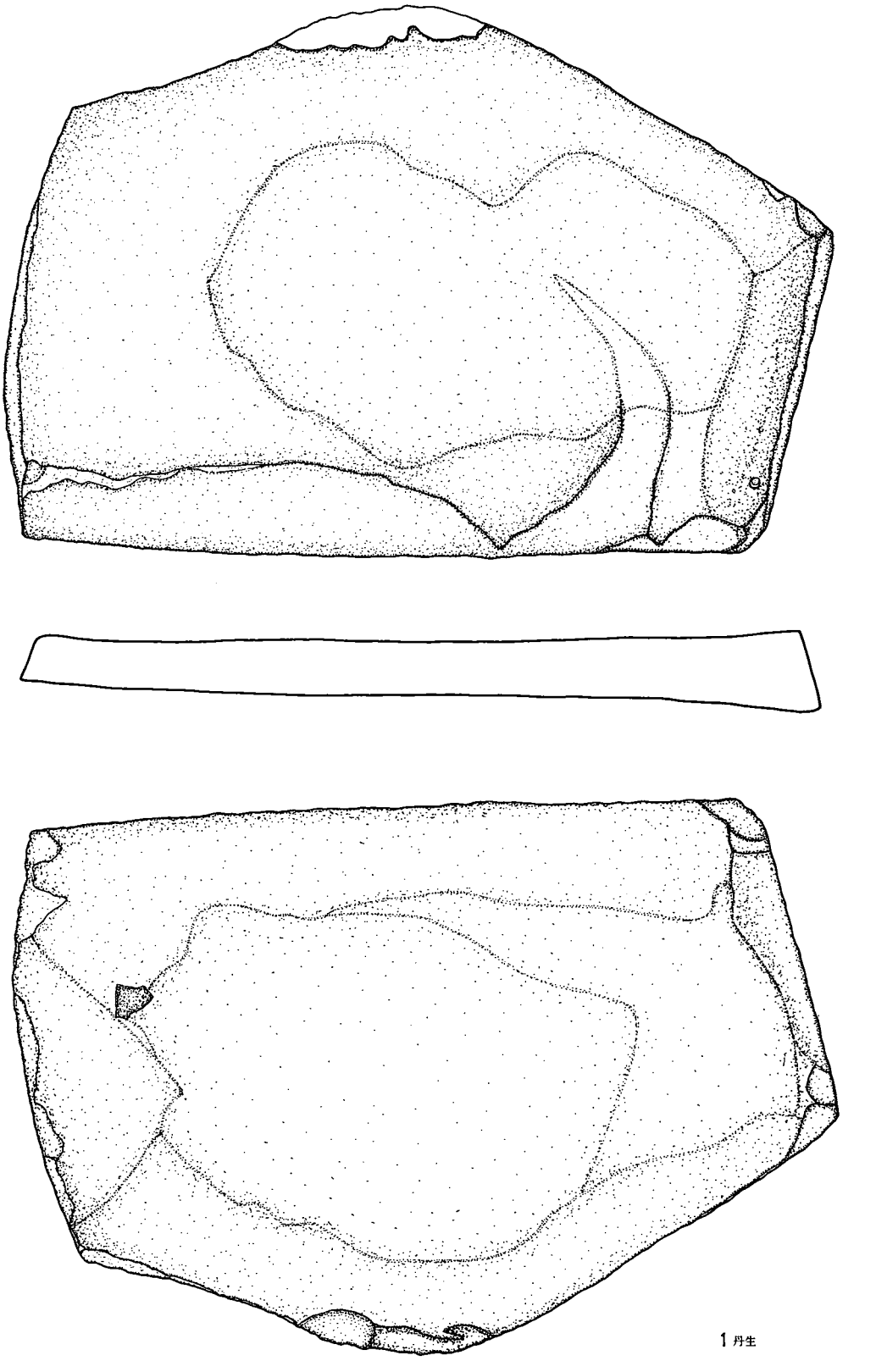
第132図　石器実測図



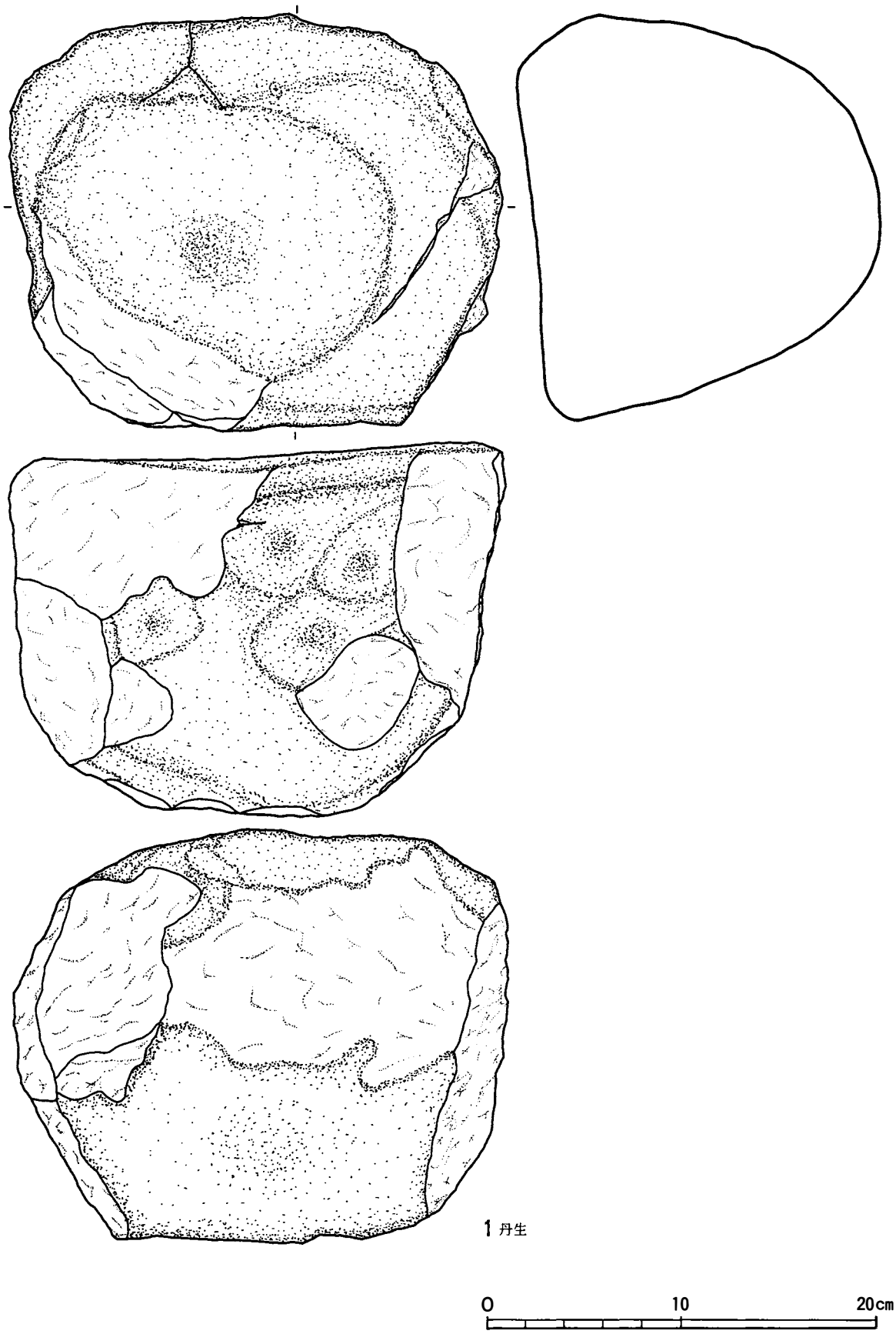
第133図　石器実測図



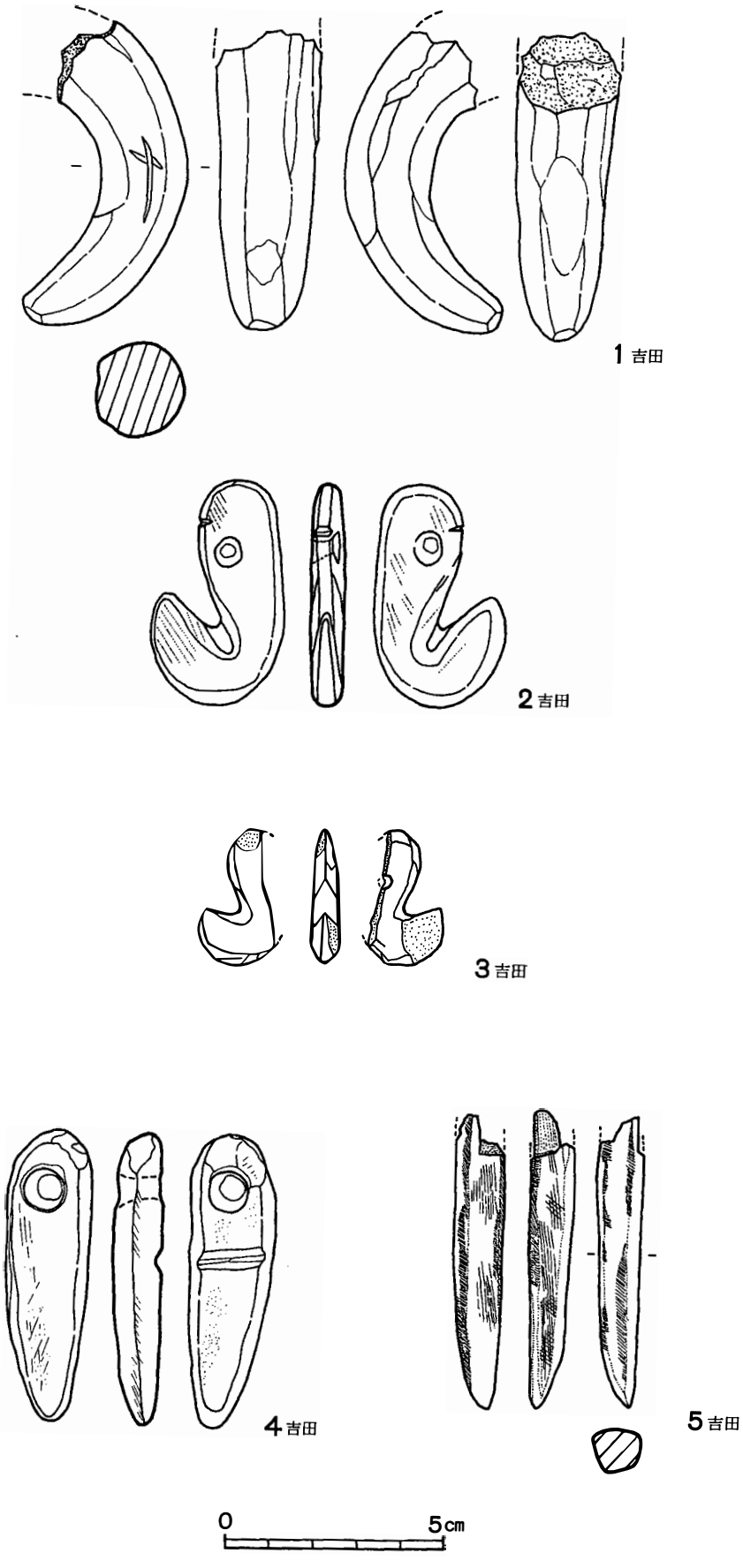
第134図　石器実測図



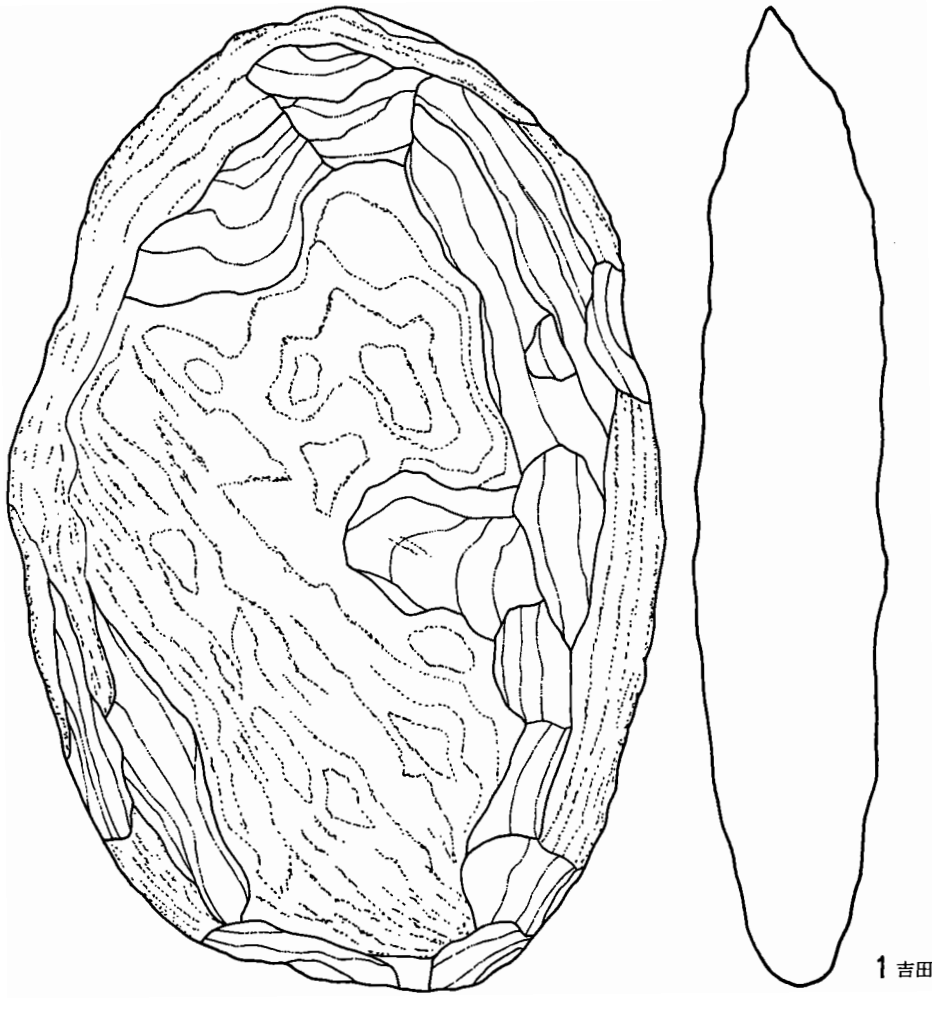
第135図　石器実測図

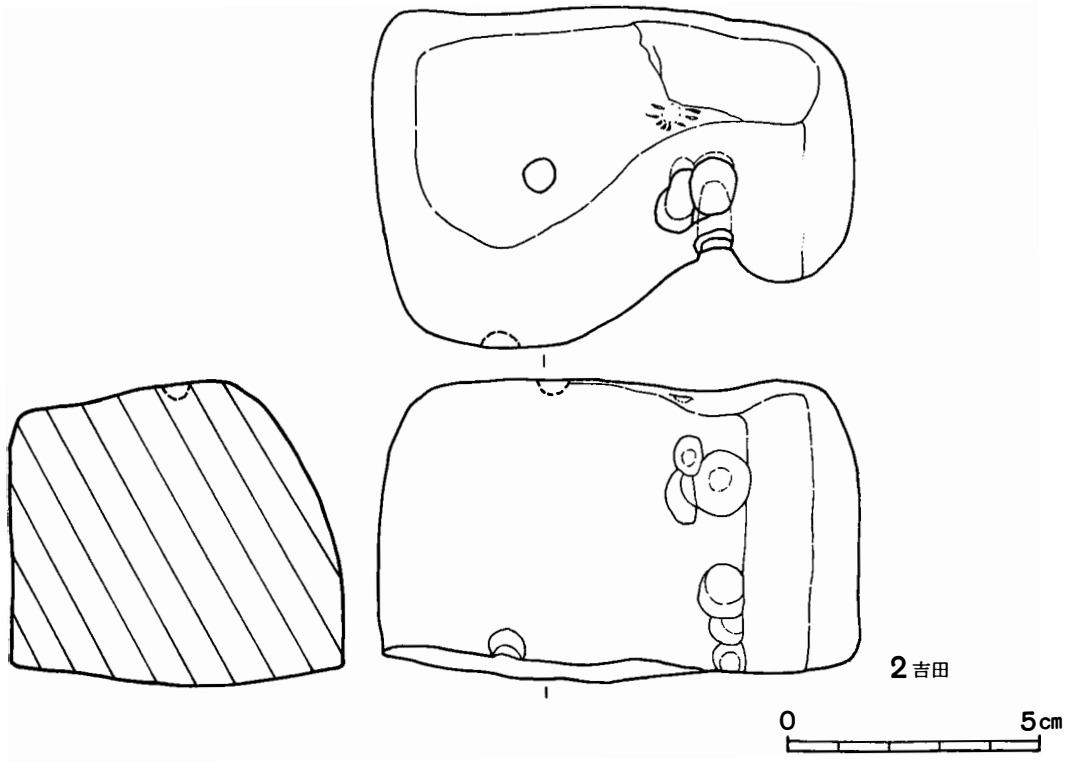


第136図　石器実測図



第137図　石器実測図





第138図　石器実測図

第29表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
97-1	XIII区	石鏃		32	20	3	1.5		No.8798
2	X区	〃	黒曜石	34	19	6	2.9		
3		石鏃	黒曜石	(22)	13	5	1.6		
4	XIII区	石鏃	黒曜石	17	15	4	0.4		包5766
5	XIII区	〃	緑色片岩	(16)	18	2	0.7		包5390
6	III区	〃	姫島産黒曜石	26	(15)	4.5	1.2		
7		スクレイパー	黒曜石	47	23	10	9.0		

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
98-1	III区	石鏃	サヌカイト	(32)	23	4.5	1.9	先端を欠く	包5472
2	XI区	〃	〃	(21)	23	4	0.9		包308
3	XII区	〃	〃	(21)	16	3	0.6		包453
4	XII区	〃	〃	(22)	18	3	1.1		包1348
5	XIII区	〃	〃	23	20.5	3.5	1.0		包11550
6	IX区	〃	姫島産黒曜石	21	17	4	0.7		包360
7	801号溝	〃	〃	(18)	(14)	3	0.5		
8	XII区	〃	サヌカイト	18	14.5	2.5	0.5		包3589
9	XII区	〃	黒曜石	23	17.5	4	0.7		包556
10	801号溝	〃	〃	(22)	17.5	4.5	1.1		
11	XVII区	〃	〃	(18)	15	3	0.4		包2051

第30表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
99-1	1301住	石匙	サヌカイト	71	91	21	77.6		No.2050
2	Ⅸ区	〃	〃	69	51	10	33.0		包151
3	ⅩⅢ区	〃	〃	54	71	7	27.4		包6637
4	ⅩⅠ区	〃	〃	57	40	11	15.2		包409

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
100-1	1303住	石匙	サヌカイト	38	60	12	20.3		No.2085
2	Ⅶ区	〃	〃	37	58	6	10.0		
3	Ⅶ区	〃	〃	(53)	44	14	33.3		No.32
4	901号土壙	〃	〃	49	49	7	13.5	破損著しい	

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
101-1	Ⅹ区	石錘		48	32	17	30.9		P-2303
2	Ⅶ区	〃	安山岩	52	44	16	45.9	自然礫の両端を抉る	M-46
3	ⅩⅢ区	〃	〃	33	30	27	37.2		包1989
4	701号溝	くぼみ石	〃	59	52	29	116.8	敲打によるくぼみ	
5	Ⅶ区	浮子	軽石	52	50	21	24.8		
6	ⅩⅢ区	くぼみ石	安山岩	82	77	21	135.8	くぼみあり	包5670

第31表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
102-1	XⅡ区	打製石斧	輝石安山岩	(196)	85	21	513.8		包2003
2	XⅡ区	〃	角閃石輝石安山岩	(109)	79	14	156.6	角閃石巨晶多い	包2811
3	Ⅷ区	〃	玄武岩（サヌカイト）	104	47	18	97.9		M-15
4	XⅢ区	〃	角閃石石英片岩	133	43	9	77.3		包5377
5	802号溝	〃	〃	(101)	52	12	84.0	ミガキ	No.4
6	XⅡ区	〃	石英石墨片岩	(119)	58	11	141.3		包1522

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
103-1	XⅡ区	打製石斧	輝石安山岩	172	60	15	241.4		包1115
2		〃	石英石墨片岩	(122)	50	13	126.9		
3	XⅡ区	〃	石英角閃石片岩	120	69	10	119.4		
4	XⅡ区	〃	輝石安山岩	133	(53)	20	157.8		包960
5	XⅢ区	〃	石英石墨片岩	(135)	52	14	312.1	表面剝離著しい	包9574
6	XⅢ区	〃	輝石安山岩	(132)	53	10	102.8		包208

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
104-1	1303住	打製石斧	輝石安山岩	(140)	61	29	289.8		No.1882
2	XⅡ区	〃	角閃石石英片岩	(133)	60	12	124.9		No.2981
3		〃	輝石安山岩	(175)	73	9	137.6	敲打痕多い	
4	XⅡ区	〃	角閃石石英片岩	112	55	15	141.3		包214
5	XⅢ区	〃	〃	(133)	60	13	128.4		包3246
6		〃	〃	(82)	71	6	78.3		

第32表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
105-1	XⅢ区	打製石斧	角閃石石英片岩	119	63	10	116.2	刃部にミガキ	P-50
2	XⅢ区	〃	〃	112	63	10	110.9		包887
3	XⅢ区	〃	輝石安山岩	140	71	7	104.8		包1801
4	702号溝	〃	変成岩の一種	(95)	(69)	17	180.3		No.1
5	802号溝	〃	輝石安山岩	(108)	68	25	192.8		
6	Ⅷ区	〃	角閃石石英片岩	(76)	56	12	99.8		No.201
7		〃	〃	(82)	62	11	84.3		

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
106-1	XⅢ区	打製石斧	輝石安山岩	(132)	76	10	128.3	使用痕	包4810
2	XⅢ区	〃	雲母片岩	(94)	73	14	171.0		包1273
3		〃	角閃石石英片岩	115	73	13	107.9		
4	XⅢ区	〃	〃	108	58	21	143.8		包3869
5	1202号溝	〃	輝石安山岩	(118)	64	12	128.8		No.1
6	Ⅵ区	〃	角閃石石英片岩	107	58	7	77.8		包150

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
107-1		打製石斧	石墨片岩	134	60	10	120.9		
2	XⅢ区	〃	石墨石英片岩	155	59	12	127.3		包2169
3	XⅠ区	〃	角閃石石英片岩	128	66	12	127.1	刃部にミガキ	
4	202号溝	〃	〃	122	60	14	138.0		
5	XⅢ区	〃	緑色片岩	(90)	(69)	11	84.0		包7302
6	XⅡ区	〃	石墨石英片岩	122	71	20	224.8		包2537

第33表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
108-1		打製石斧	角閃石石英片岩	(134)	69	10	140.2		
2	Ⅷ区	〃	〃	120	55	10	101.1		No.534
3		〃	〃	139	59	11	91.4		
4	ⅩⅢ区	〃	〃	(96)	48	12	71.4		包11276
5	ⅩⅠ区	〃	〃	(90)	(46)	10	49.9		
6	ⅩⅡ区	〃	石墨片岩	(80)	50	9	65.1		包2840
7	ⅩⅢ区	〃	角閃石石英片岩	94	39	6	36.6		No.99

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
109-1		打製石斧	輝石安山岩	(98)	63	26	65.7		
2	ⅩⅢ区	〃	角閃石石英片岩	124	71	8	120.5		包864
3	901号溝	〃	〃	(86)	46	11	55.9		
4		〃	〃	100	49	11	74.3		
5	1001号溝	〃	輝石安山岩	110	48	14	77.1		No.50
6	ⅩⅢ区	〃	角閃石石英片岩	83	40	9	48.8		No.9964
7	Ⅷ区	〃	〃	111	63	12	129.3		No.72
8	Ⅵ区	〃	〃	122	50	9	73.1		包455

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
110-1	ⅩⅢ区	打製石斧	輝石安山岩	161	74	19	269.8		包1489
2	Ⅷ区	〃	〃	150	81	24.5	291.8		No.17
3	ⅩⅡ区	〃	千枚岩	90	43	5	31.7		包3459
4	Ⅳ区	〃	輝石安山岩	(110)	49	19	107.3		
5	ⅩⅡ区	〃	石英角閃石片岩	80	60	9	69.9		
6		〃	輝石安山岩	(89)	48	9	51.1		
7	901号土壙	〃	石英角閃石片岩	96	45	14	103.0		P-5

第34表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
111-1		打製石斧	角閃石石英片岩	(90)	56	23	148.9		
2		〃	輝石安山岩	(100)	63	21	145.7		
3	1101号溝	〃	〃	(88)	83	26	251.8		No.23
4		〃	安山岩	(65)	70	18	141.8		
5		〃	輝石安山岩	(74)	56	17	95.2		
6	XⅢ区	〃	角閃石石英片岩	(103)	64	12	83.6		包6570
7	XⅢ区	〃	輝石安山岩	(63)	37	15	44.3		No.5220
8	XⅠ区	〃	〃	(65)	54	11	49.2	破損後にカーボン付着	包352

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
112-1		打製石斧	角閃石石英片岩	(120)	85	8	120.9		
2	XⅢ区	〃	〃	(141)	57	8	246.0		包2167
3	XⅢ区	石鎌	〃	134	53	11	116.3		包1486
4	XⅢ区	石包丁	石墨石英片岩	114	53	11	98.0		包7823
5	Ⅶ区	打製石斧	粘板岩	(74)	78	12	83.5		No.66
6	802号溝	〃	角閃石石英片岩	(76)	64	7	55.1		No.9
7	XⅠ区	〃	〃	(95)	72	10	104.8		包1105

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	縦幅 mm	横幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
113-1	Ⅴ区	石鎌	角閃石石英片岩	52	(121)	7	55.9		包211
2	801号溝	〃	〃	41	(91)	5	30.0		
3	1303号溝	〃	〃	40	(127)	10	71.1		
4	XⅢ区	〃	〃	49	(91)	6	32.4		包3295
5	801住	〃	〃	44	(111)	8	43.4		
6	Ⅳ区	〃	〃	47	(116)	7	50.7		包53
7	XⅡ区	〃	〃	35	104	7	30.5		No.1416
8	XⅡ区	〃	〃	30	117	6	33.6		包114

第35表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	縦幅 mm	横幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
114-1	XⅢ区	石鎌	石墨絹雲母片岩	58	76	5	28.1		包10749
2	1303住	〃	緑泥石絹雲母片岩	56	(76)	5	48.7		包1877
3	XⅢ区	〃	石墨絹雲母片岩	61	(82)	1	81.0		包6730
4	802号溝	〃	角閃石石英片岩	63	(72)	8	55.9		
5		〃	〃	59.5	(74)	13	41.4	使用痕	
6	XⅡ区	〃	石墨石英片岩岩	13	46	9	62.1		P-135
7	801号掘立柱建物	〃	角閃石石英片岩	12	(54)	9	68.7		P-8
8	Ⅷ区	〃	〃	47	121	10	73.2		No.237

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
115-1	Ⅳ区		角閃石石英片岩	111	67	6	80.1	使用痕	包24
2	1002号溝		輝石安山岩	(70)	50	20	93	石斧	
3	XⅢ区		角閃石石英片岩	(63)	95	7	32.8		
4	XⅢ区		〃	112	62	4	92.2		包5894

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
116-1	XⅡ区	磨製石斧	角閃石石英片岩	149	55	31	501.1		
2	Ⅸ区	〃	蛇紋岩	114	49	24	190.1		包164
3		〃	玄武岩（サヌカイト）	(89)	51	28	160.3		
4	XⅡ区	〃	蛇紋岩	92	52	22	156.0		包1446
5	1301号溝	〃	石墨石英片岩	117	52	(28)	234.1		
6		〃	粘板岩	115	50	14	120.8	破損後に刃部を再生	

第36表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
117-1	XII区	磨製石斧	角閃石石英片岩	(144)	78	10	173.3		包2007
2		〃	蛇紋岩	(113)	85	22	292.0	美しい色調	
3	XI区	〃	輝石安山岩	(92)	7	17	198.0		
4	XII区	〃	蛇紋岩	(96)	53	11	93.7		包2534
5	VI区	〃	粘板岩	(113)	47	16	134.5		包241
6	XIII区	〃	角閃石石英片岩	104	52	13	100.5		包149

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
118-1	XIII区	磨製石斧	玄武岩	(103)	64	10	77.8	雑なミガキ	包7399
2	XIII区	〃	角閃石石英片岩	(111)	40	4	49.8		包7739
3	XIII区	〃	玄武岩	(97)	52	16	90.9		包8413
4	XIII区	〃	角閃石石英片岩	(62)	65	8	51.6		包1539
5		〃	〃	(113)	49	12	107.4	ミガキは刃部に集中	
6		〃	〃	(52)	62	4	34.4		
7		〃	蛇紋岩	(63)	47	13	54.7		
8	XI区	〃	石墨石英片岩	(64)	44	6	22.2		包172

第37表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
119-1	1001号溝	磨製石斧	輝石安山岩	(82)	(54)	(9)	64.2		No.62
2	XI区	〃	〃	110	77	8	107.9		包709
3	VIII区	〃	角閃石石英片岩	(110)	67	14	115.6		
4		〃	蛇紋岩	85	30	16	68.7		
5	XIII区	〃	蛇紋岩	(83)	26	18	64.7	上端にたたいたあと	包7860
6	XIII区	〃	蛇紋岩	100	49	21	135.6		包195
7	1303住	〃	粘板岩	106	46	12	71.3		
8	XIII区	〃	蛇紋岩	(54)	26	19	64.7		包2277
9	VIII区	〃	雲母片岩	70	36	21	40.0		

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
120-1	XI区	円盤形石器	石英石墨片岩	79	91	15	163.7		
2	XII区	〃	輝石安山岩	93	74	21	176.7		包2233
3	XIII区	〃	石英角閃石片岩	95	88	22	220.0		包101
4	XII区	〃	雲母片岩	84	68	12	93.4	カーボン付着 片面に敲打痕	包2484

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
121-1	XI区	円盤形石器	石墨絹雲母片岩	92	100	14	213.9		包182
2	VIII区	〃	輝石安山岩	87	99	18	210.3		No.421
3	802号溝	〃	〃	88	75	19	169.0		
4	1303住	〃	〃	(72)	102	16	163.2		No.2037

第38表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
122-1	801号溝	円盤形石器	輝石安山岩	99	95	25	258.3		No.2
2	1302住	〃	石墨絹雲母片岩	80	76	14	125.3		No.42
3	XⅢ区	〃	輝石安山岩	81	87	14	122.0		包1731
4	1303住	〃	絹雲母石墨片岩	75	60	10	73.3		No.2501
5	XⅢ区	〃	雲母片岩	96	(57)	12	66.6		No.3285

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
123-1		円盤形石器	輝石安山岩	102	85	12	172.2	カーボン付着	
2	XⅢ区	〃	〃	98	95	14	153.8		包3464
3	XⅢ区	〃	〃	89	83	11	103.0		包846
4	XⅢ区	〃	〃	68	61	8	50.3		No.3661,包5670
5	Ⅷ区	〃	〃	71	73	13	90.3		

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
124-1	Ⅵ区	円盤形石器	凝灰岩	127	118	29	374.1	自然円礫を転用	
2		〃	輝石安山岩	105	22	23	172.3	〃	
3	XⅡ区	〃	絹雲母石墨片岩	70	35	6	28.0	〃	包492
4	XⅢ区	〃	玄武岩	84	94	14	172.7	〃	包7312

第39表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
125-1	Ⅷ区	円盤形石器	変成岩	83	90	13	135.4	カーボン付着	No.91
2	1302住	〃	雲母片岩	(97)	108	13	204.4		No.88
3	XⅠ区	〃	角閃石石英片岩	76	83	8	108.6		包617
4	1102住	〃	〃	94	83	10	241.4		No.2

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
126-1	803号溝	円盤形石器	粘板岩	100	98	9	150.9		No.11
2	1001号溝	〃	角閃石石英片岩	85	85	13	149.9	浅い抉りあり	
3		分銅形石器	石墨石英片岩	88	(79)	9	105.1	浅い抉りあり	
4	XⅢ区	円盤形石器	角閃石石英片岩	(63)	82	11	81.5		包9259

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
128-1	801号溝	十字形石器	石墨片岩	69	(50)	7	18.3		
2		〃	粘板岩	55	63	5	21.0		
3	XⅢ区	〃	雲母片岩	(61)	(68)	9	40.9		包9330
4	XⅢ区	抉入石器	石墨角閃石片岩	78	43	6	26.8	1ヵ所に抉り	包3315

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
129-1	XⅡ区	十字形石器	角閃石石英片岩	(58)	85	13	80.9		包719
2		〃	緑色片岩	92	78	10	48.7	斜交する	
3	XⅡ区	抉入形石器	石墨片岩	67	41	5	15.1	2ヵ所に抉り	包2607

第40表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
129-1	XⅢ区	砥石	砂岩	73	120	46	453.3		包10983
2	XⅢ区	有溝砥石	礫質砂岩	109	72	50	515.6		包2442
3	Ⅲ区	未製品石材	角閃石石英片岩	143	85	15	202.4		
4	XⅠ区	〃	〃	180	47	9	142.3	石英の結晶析出	
5	Ⅷ区	有溝砥石	砂岩	83	43	15	57.6	使用痕著しい	No.518
6	XⅢ区	打製石斧の未製品	角閃石石英片岩	112	57	12	144.7		包2496

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
130-1	XⅡ区	磨石	角閃石輝石安山岩	175	103	51	1107.8	ベンガラ付着 自然の凹凸を利用	包1185
2	XⅡ区	〃	輝石安山岩	(60)	83	68	522.4		P-144
3	XⅠ区	〃	〃	127	87	41	690.0	敲打痕	包121
4	XⅢ区	〃	〃	(99)	67	40	413.1	ベンガラ付着	包6412
5	XⅡ区	〃	〃	(79)	116	72	953.5		包1450
6	XⅡ区	〃	〃	166	67	53	427.5	敲打痕	包683
7	Ⅰ区	〃	〃	102	78	65	728.6	カーボン付着	P-9
8	Ⅳ区	〃	〃	(96)	(48)	69	380.9		No.20
9	XⅡ区	〃	〃	138	51	29	323.1		No.2178
10	Ⅷ区	〃	〃	(96)	60	42	420.8	カーボン付着	No.423

第41表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
131-1	XⅢ区	磨石	輝石安山岩	(109)	120	29	553.6	敲打痕	包10302
2	XⅡ区	〃	角閃石輝石安山岩	(93)	94	47	540.9		包2785
3	XⅡ区	〃	輝石安山岩	105	65	57	619.5		包3305
4	XⅠ区	〃	〃	(102)	94	48	761.8		包1165
5	XⅢ区	〃	阿蘇溶結凝灰岩	(74)	89	59	433.6	カーボン付着	包6932
6	XⅢ区	〃	輝石安山岩	70	101	53	573.1		包10807
7	XⅡ区	〃	〃	80	72	47	411.6	カーボン付着	包2508
8	XⅢ区	〃	〃	144	81	70	1025.0	カーボン付着	包786
9	XⅠ区	〃	角閃石輝石安山岩	(84)	92	55	530.7		包114
10	XⅢ区	〃	輝石安山岩	108	98	47	673.8		包215

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
132-1	XⅢ区	磨石	輝石安山岩	(109)	129	67	1350.0	敲打痕	包3324
2	Ⅶ区	〃	〃	109	94	80	1143.1		No.170
3	XⅡ区	〃	〃	(86)	76	74	674.5		包867
4	XⅢ区	〃	〃	133	89	64	905.9		包7441
5	XⅢ区	〃	〃	(64)	99	49	412.9		No.5747
6	XⅢ区	〃	〃	(92)	82	56	497.0		包1352
7	XⅢ区	〃	〃	99	102	53	697.7	敲打痕	包8460
8	1303住	〃	〃	67	113	68	746.6	〃	No.714
9	Ⅶ区	〃	〃	125	76	66	1039.4	カーボン付着	No.14
10	801号溝	〃	〃	(77)	76	43	404.1	煤付着	No.17

第42表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
133-1	Ⅷ区	磨石	輝石安山岩	92	95	58	73.8	敲打痕	No.242
2	Ⅷ区	〃	〃	133	105	86	1800.9	〃	No.146
3	Ⅷ区	〃	砂岩	132	81	64			No.278
4	ⅩⅢ区	〃	〃	(77)	86	43	409.8	敲打痕	包1211
5	ⅩⅢ区	〃	輝石安山岩	(58)	98	61	583.7	ベンガラ付着	包7840
6	Ⅶ区	〃	〃	107	93	47	615.7	敲打痕	No.15
7	ⅩⅢ区	〃	〃	(127)	115	70	1559.1		包484
8	ⅩⅡ区	〃	〃	81	121	76	1118.4		包2186
9	1303住	〃	〃	102	93	43	350.0		No.2196

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
134-1	801号溝	敲石	石英石墨片岩	142	61	34	355.2		No.8
2	ⅩⅢ区	〃	輝石安山岩	84	24	20	63.7	自然礫を転用	
3	801住	〃	石英角閃石片岩	(86)	41	17	80.7	〃	No.139
4	1303住	〃	角閃石石英片岩	(93)	26	13	54.6	〃	No.342

第43表　石器計測表

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
135-1	1303住	台石	安山岩	560	330	32			No.2533

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ kg	備　考	登録番号
136-1	XⅢ区	台石	安山岩	254	206	177	15.2		包7016

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
137-1	1304住	土製勾玉		33	12	10	4.1		No.275
2	XⅡ区	勾玉	蛇紋岩	26 孔2	15	4	2.0		No.79
3	1002号溝	〃	ヒスイ	16	(9)	3	0.5		
4	1304住	珠玉	ヒスイ	33 孔2.5	9	6	3.1		No.592
5	Ⅶ区	ヘアピン型石製品		(65)	11	9	1.3		No.109

石　器

番号	出土地点	器　種	材　質	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備　考	登録番号
138-1	Ⅶ区	楕円形石製品	変成岩	570.6	260.0	36.0		自然石をわずかに加工	No.294
2	XⅠ区	坏状有穴石製品	粘板岩	95.0	58.0	64.0			包192

第３節　縄文時代以外の遺構と遺物

古墳時代の竪穴住居跡と、平安時代の竪穴住居跡および掘立柱建物、時期不明の土坑を検出した。とくに平安時代の遺構からは官衙的な遺物である墨書土器、権形石製品が出土している。

１、竪穴住居跡と遺物

501号住居跡（第139図）

Ⅴ区に所在する。平面形態はほぼ正方形であり長軸方向は220㌢、短軸方向は183㌢を測り、壁高は削平が著しく６㌢を残す。主軸の方向はＮ27°Ｅである。主柱穴は４本である。住居跡の北壁中央に竈を有するが、粘土製の両袖部は基部以外を削平により失う。その規模は奥行き43㌢、幅52㌢でわずかに壁面の外に張り出す。燃焼室の奥行きは45㌢、幅は25㌢、高さ14㌢で、焚き口から燃焼室にかけ浅く掘り込まれる。竈は焼土を充たす。左袖部は38㌢、右のそれは40㌢を残存し、各々５㌢、８㌢の残存高を有する。

【出土土器】（第150図）

１は、肩部より上を残す壺である。肩部にて直角に折れ外反して直線状に開く口縁を有する。外面はハケ目調整を施し、内面は削りである。　２～６は、甕の資料である。３は、丸底より胴部は内傾きしつつ立ち上がり、胴部中位にて直立する。口縁は分厚く、頸部にて強く折れ水平位に開く。

801号住居跡（第140図）

Ⅷ区の中央に所在する。南北に近世の溝遺構が住居跡の一部を横切る。住居跡の埋土には、縄文時代の住居跡かと見紛うほど夥しく縄文土器の破片を含み、床面まで発掘してようやく土師器の出土をみ古墳時代の住居跡であることを判定した。

平面形態は長方形であり長軸方向は255㌢、短軸方向は186㌢、壁高は26㌢を測り、主軸の方向はＮ25°Ｅである。主柱穴は２本であり、他に数カ所の小柱穴を有するが必ずしも当該住居跡に伴うかは詳らかでない。住居跡の中央よりわずかに南壁に偏して不整円形の炉を有し、その規模は長軸方向38㌢、短軸方向34㌢、深さは７㌢である。炉内の埋土はわずかに炭化物と焼土を充たす。

【出土土器】（第150図）

１～３は、壺である。２は、丸底より球形に膨らむ胴部をなし口縁は頸部で「く」の字に屈曲し、外反して開く。外面はハケ目調整を施し、内面は削りである。

４は、胴部をほとんど欠く甕である。口縁部は頸部で「く」の字に折れ直線状に外反して開く。５～６は、高杯である。いずれも杯部のみの資料である。外面の中位やや下に稜線にて内傾きをやや強めつつ立ち上がり直線状に開く。

1301号住居跡（第141図）

ⅩⅢ区に所在する。平面形態はほぼ正方形とみられるが北がわの半分が調査区を外れ未調査である。埋土には墨書を有する土師器が出土したことは注目される。長軸方向は556㌢、短軸方向は残存202㌢、壁高は32㌢を測り、壁に沿い壁溝を有する。主軸の方向はＮ63°Ｗである。主柱穴は４本とみられるが残存は２本である。住居跡の西壁中央に竈を有するが、袖部は削平によりわずかに残欠の粘土塊を残すのみである。その規模は奥行き98㌢、幅残存82㌢で壁面の外に68㌢張り出す。燃焼室の奥行きは68㌢、幅は残存32㌢、高さ36㌢であり、内には焼土を充たす。

【出土土器】（第152図）

１は、小型の甕である。胴部の下半を欠く資料である。口縁は分厚く、頸部はやや絞り、これより「く」の字に屈曲し外反して開く。外面はハケ目調整、内面は削りである。

２～８は、土師器の杯および杯蓋である。９は須恵器の杯で、底面に墨書が残る。

２、掘立柱建物と遺物

調査の結果、掘立柱建物跡を３基検出した。その検出場所はⅣ区、Ⅵ区、ⅩⅡ区であるが、前２者は調査区域の制約により遺構の一部を調査し、後者は全容を調査した。このほかにⅨ区で総柱の掘立柱建

物１基のほか１基が検出されているが資料の散逸のため遺憾ながら詳細は不明である。写真のみで示した。

401号掘立柱建物（第142図）

Ⅳ区の西北部に所在し、遺構の北半は調査区外である。桁の軸線はわずかに東偏する南北にある。桁間は東側は１間残存し、西側が２間残存するが、本来は２間以上の規模であるとみられる。梁間は２間の建物である。平面形態は長方形である。桁行間は東側が186㌢、西側が382㌢である。梁行間は150㌢～190㌢を測る。東側の桁行柱列の柱間隔は186㌢で、西側の桁行柱列の柱間隔は北から170㌢、212㌢である。梁行柱列の柱間隔は東から186㌢、154㌢である。柱穴の掘り形は円形ないし楕円形である。

【土器】

155－２は、柱穴より出土した完形の土師器の杯である。底面はやや不安定な平底であり、体部は底部縁辺に稜線をなし鈍角に立ち上がり直線状にのび口縁部に到る。底面には回転箆切り痕が残る。口縁端部の一部にカーボンが付着しており灯明皿として用いられたとみられる。

601号掘立柱建物（第143図）

Ⅵ区の南端部に所在し、遺構の東半は調査区外である。桁の軸線はＮ－19°－Ｅである。桁間は東側が４間残存であり、梁間は２間を残存し平面形態は長方形である。桁行間は844㌢であり、梁行間は174㌢を測る。桁行柱列の柱間隔は北から218㌢、190㌢、212㌢、214㌢である。梁行柱列の柱間隔は174㌢である。柱穴の掘り形は円形ないし楕円形で、確認できた柱痕跡は直径18～16㌢である。

1201号掘立柱建物（第144図）

ⅩⅡ区に所在する。桁の軸線はＮ－64°－Ｗである。桁間は５間、梁間は２間で平面形態は長方形の建物である。桁行間は南側が890㌢、北側が872㌢である。梁行間は東側が466㌢、西側が470㌢を測る。南側の桁行柱列の柱間隔は、西から208㌢、164㌢、150㌢、190㌢、184㌢であり、北側の桁行柱列の柱間隔は、西から184㌢、182㌢、150㌢、178㌢、176㌢である。東側の梁行柱列の柱間隔は、北から264㌢、226㌢であり、西側の梁行柱列の柱間隔は、北から250㌢、218㌢である。柱穴の掘り形は円形ないし楕円形である。

出土遺物は柱穴より出土した権形石製品（159－４）である。

３、土壙と遺物

101号土壙（第145図）

Ⅰ区に所在する。平面形態はほぼ正方形であり、長軸方向は178㌢、短軸方向は166㌢であり、深さは10㌢を測る。主軸の方向はＮ66°Ｗである。図面中央の柱穴は後世の切り合いである。

102号土壙（第２図内）

Ⅰ区に所在する。平面形態は長方形の溝状であり、長軸方向は438㌢、短軸方向は148㌢であり、深さは25㌢を測る。平安時代の101号道路状遺構を切って立地しており時期はそれ以降のものとみられるが、同じく平安時代の104号道路状遺構とほぼ平行して位置しており、時期はこれに近い時期であろう。

103号土壙（第２図内）

Ⅰ区に所在する。平面形態は長方形であり、長軸方向は140㌢、短軸方向は86㌢であり、深さは20㌢を測る。平安時代の104号道路状遺構を切って立地しており、時期はそれ以降のものとみられる。

104号土壙（第２図内）

Ⅰ区に所在する。平面形態はほぼ正方形であり、長軸方向は88㌢、短軸方向は84㌢であり、深さは20㌢を測る。103号土壙と同様平安時代の104号道路状遺構を切って立地しており、時期はそれ以降のものとみられる。

401号土壙（第145図）

Ⅳ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸方向は175㌢、短軸方向は141㌢であり、深さは52㌢

を測る。主軸の方向はＮ55°Ｅである。近世の402、403号溝に切られて立地する。

402号土壙（第146図）

Ⅳ区に所在する。平面形態は卵円形であり、長軸方向は170㌢、短軸方向は113㌢であり、深さは26㌢を測る。主軸の方向はＮ33°Ｅである。近世の411号溝に南側を切られて立地する。出土遺物は須恵器の杯と甕の破片である。

403号土壙（第146図）

Ⅳ区に所在する。平面形態は楕円形であり、長軸方向は232㌢、短軸方向は133㌢であり、深さは18㌢を測る。主軸の方向はＮ55°Ｗである。埋土にはこぶし大の礫を多く充たす。

501号土壙（第147図）

Ⅴ区に所在する。平面形態は隅丸の正方形であり、長軸方向は228、短軸方向は196㌢であり、深さは18㌢を測る。主軸の方向はＮ59°Ｗである。遺物は完形に近い土師器の壺が出土した。

【出土土器】（第150図）

151－７は、土師器の壺である。底部は肥厚した丸底で腰高の球形の胴部をなし、口縁は頚部にて内に鋭い稜をなしつつ「く」の字に強く屈曲し直線状に開く。胴部の外面は著しいタタキが残り、内面は削りである。また２次的な火を受けており表面剥離が進行している。

901号土壙

出土状況は不明である。

【出土土器】（第160図）

160－１は、青磁の高台を有する碗である。肥厚した底部である。内底と外体部には線状の文様がある。高台の断面は尖り、畳付きには砂粒が観察される。施釉は底面以外の全面になされ色調は暗いオリーブ色である。

46－２は、流入遺物である。深鉢の口縁部分の破片とみられる。直径４ミリの補修孔がある。わずかに頚部の屈曲が窺われる。外面にはカーボンの付着が認められる。

1001号土壙（第147図）

Ⅹ区に所在する。平面形態は狭長な隅丸の長方形であり、長軸方向は132㌢、短軸方向は38㌢である。深さは20㌢を測る。長軸の方向はＮ13°Ｅである。至近距離に同形で方位を同じくする1002号土壙が位置し同時期の遺構とみられる。

1002号土壙（第147図）

Ⅹ区に所在する。平面形態は狭長な隅丸の長方形であり、長軸方向は111、短軸方向は39㌢である。深さは47㌢を測る。長軸の方向はＮ21°Ｗである。先述のように1001号土壙と同時期の遺構とみられる。

【出土土器】（第160図）

160－７～８は、土師器の杯である。いずれも糸切りが底面に残る。前者は底部の端に稜線が残り体部の下端は丁寧な調整を省いている。後者はやや小振りの杯である。

1003号土壙（第148図）

Ⅹ区に所在する。半分が調査区外にかかり不明であるが、平面形態は円形である。直径126㌢、深さは15㌢を測る。一部を近世の溝に切られる。

1004号土壙（第17図内）

Ⅹ区の西端に所在する。平面形態は長方形である。長軸方向は122㌢、短軸方向は80㌢である。深さは10㌢を測る。長軸の方向はＮ22°Ｗである。

1005号土壙（第148図）

Ⅹ区の中央に所在する。平面形態は不整形な長方形である。長軸方向は206㌢、短軸方向は155㌢である。深さは28㌢を測る。長軸の方向はＮ20°Ｅである。

1201号土壙（第149図）

ⅩⅡ区に所在する。平面形態は隅丸の長方形である。長軸方向は142㌢、短軸方向は101㌢である。深さは26㌢を測る。床面は２段に掘られ、時期不明の柱穴１基が切り合う。出土遺物は土師器、須恵器の

小片と流入した縄文土器が数点である。長軸の方向はN 71°Eである。

1202号土壙（第149図）

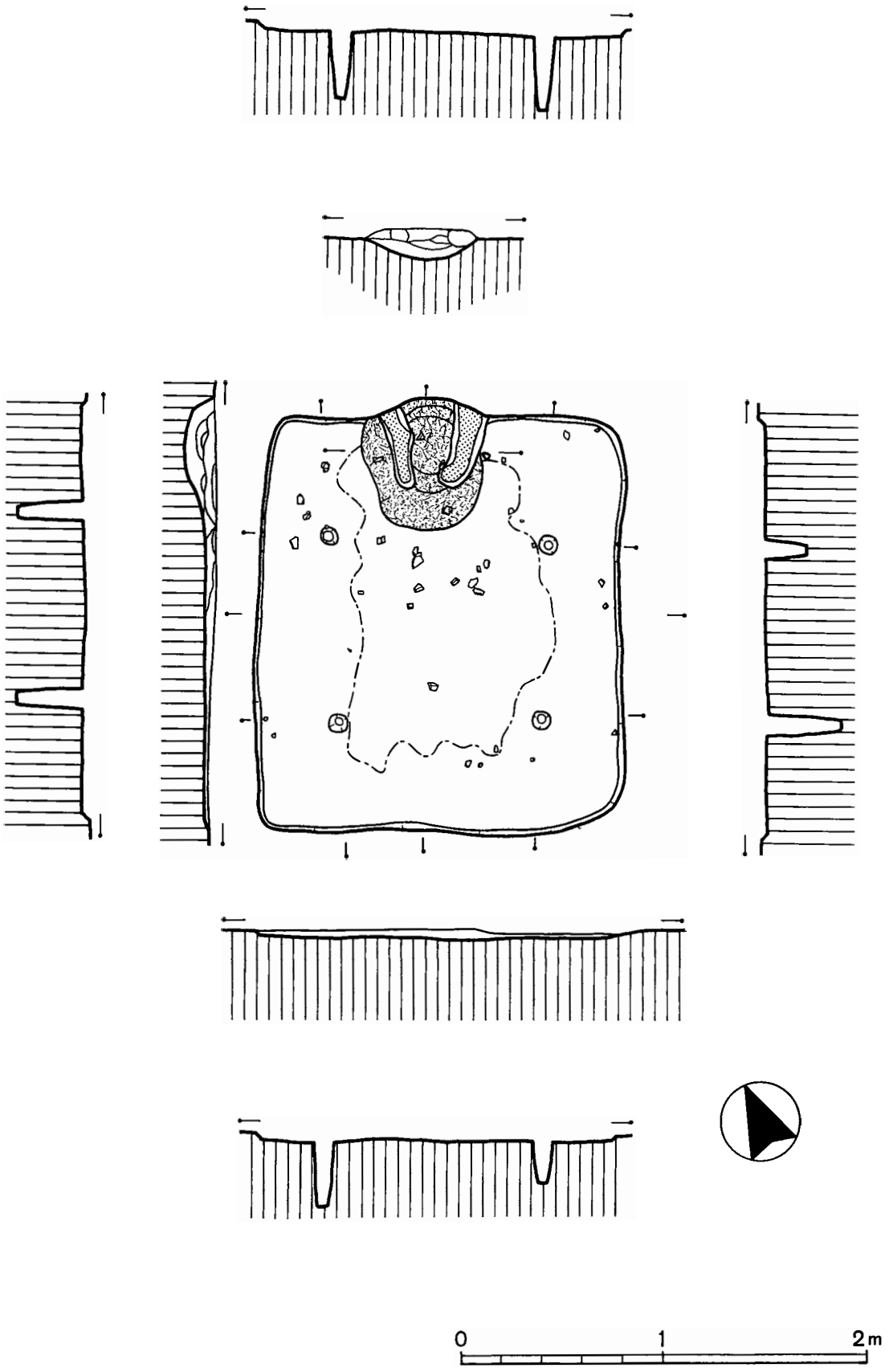
XⅡ区の中央に所在する。平面形態は隅丸の長方形である。ほとんど同規模の1203号土壙と直列に並び位置する。長軸方向は137㌢、短軸方向は77㌢である。深さは23㌢を測る。炉の埋土は中層にカーボンを含む層があるが土器は皆無である。長軸の方向はN 21°Eである。

1203号土壙（第149図）

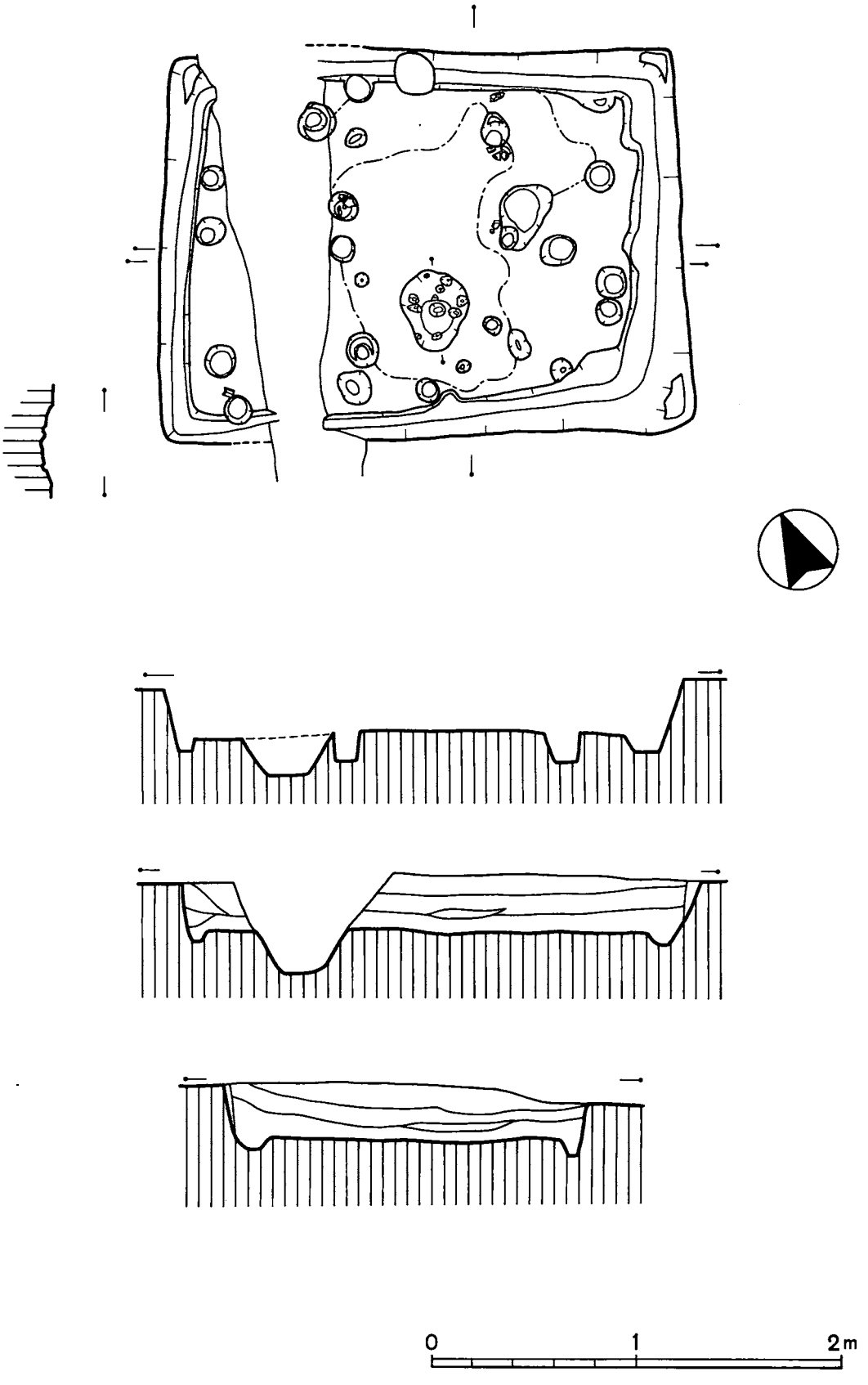
XⅡ区東側の中央に所在する。平面形態は隅丸の長方形である。先述のように、ほとんど同規模の1202号土壙と直列に並び位置し、両者は同時期の遺構とみられる。長軸方向は144㌢、短軸方向は93㌢である。深さは21㌢を測る。下層にはカーボン混じりの埋土を充たす。土器片の出土はない。長軸の方向はN 21°Eである。

1301号土壙（第149図）

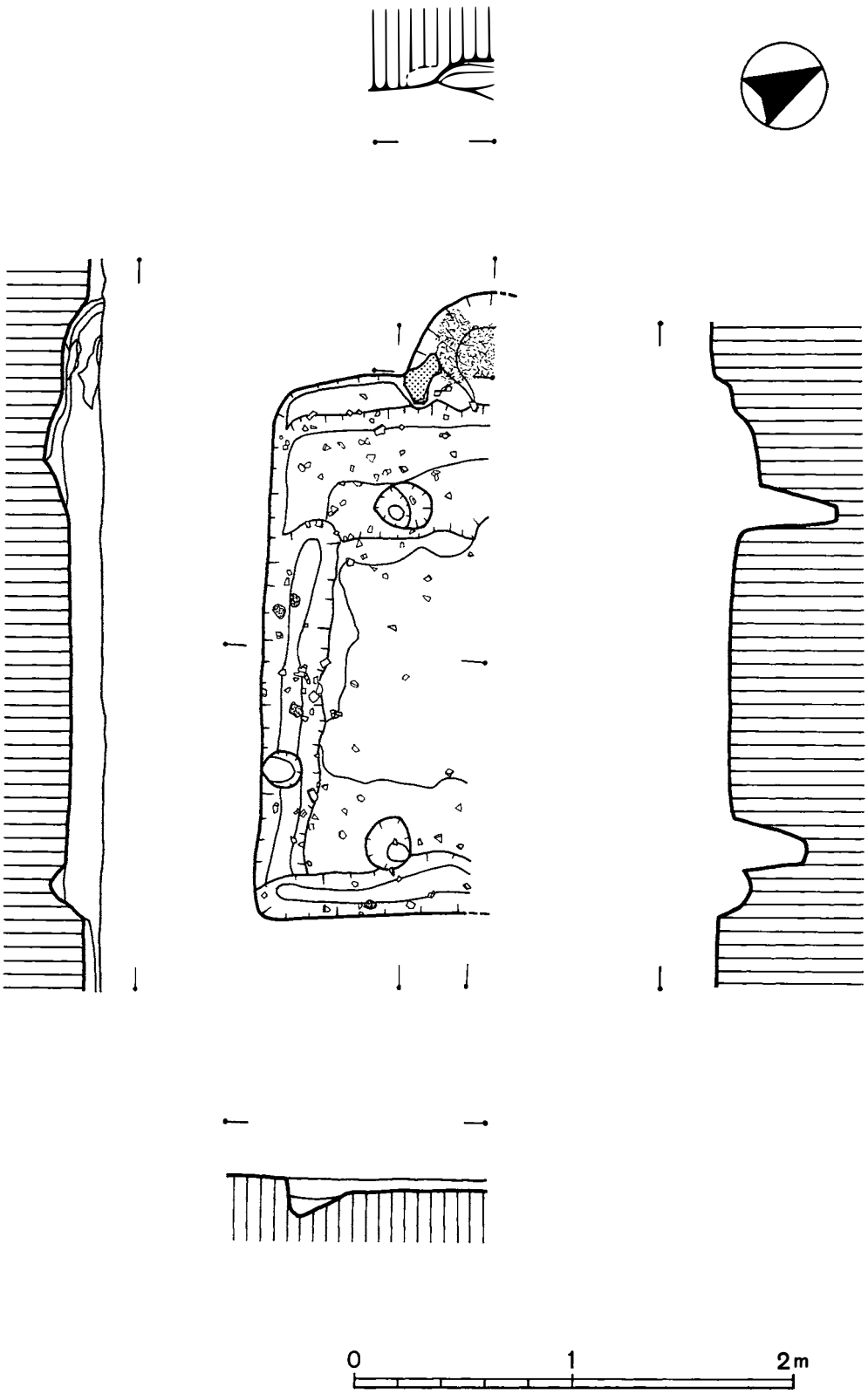
XⅢ区の西端に所在する。平面形態は円形であるが近世の芋穴に著しく攪乱を受けている。直径は139㌢、深さは20㌢を測る。



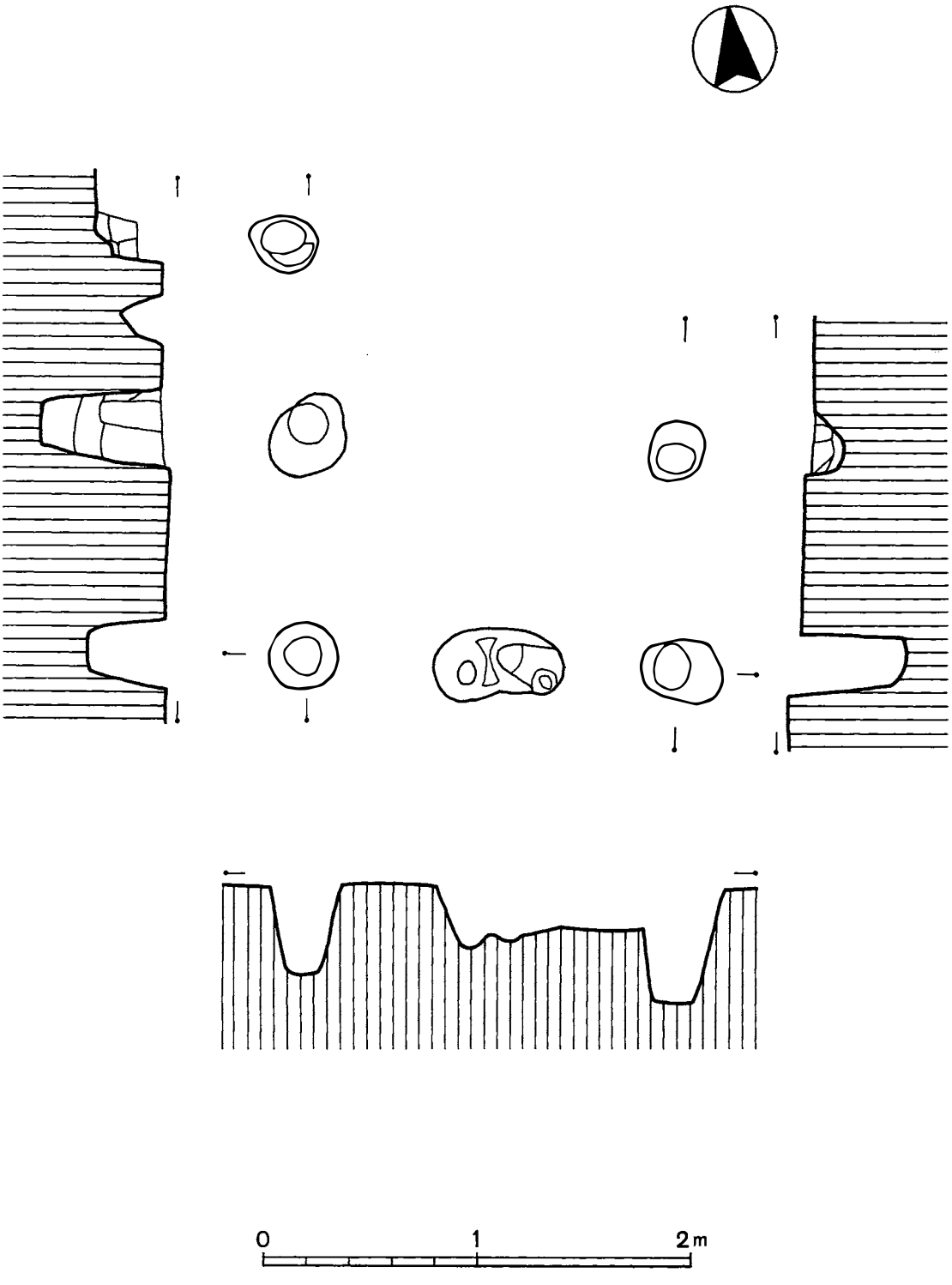
第139図　501号住居跡実測図



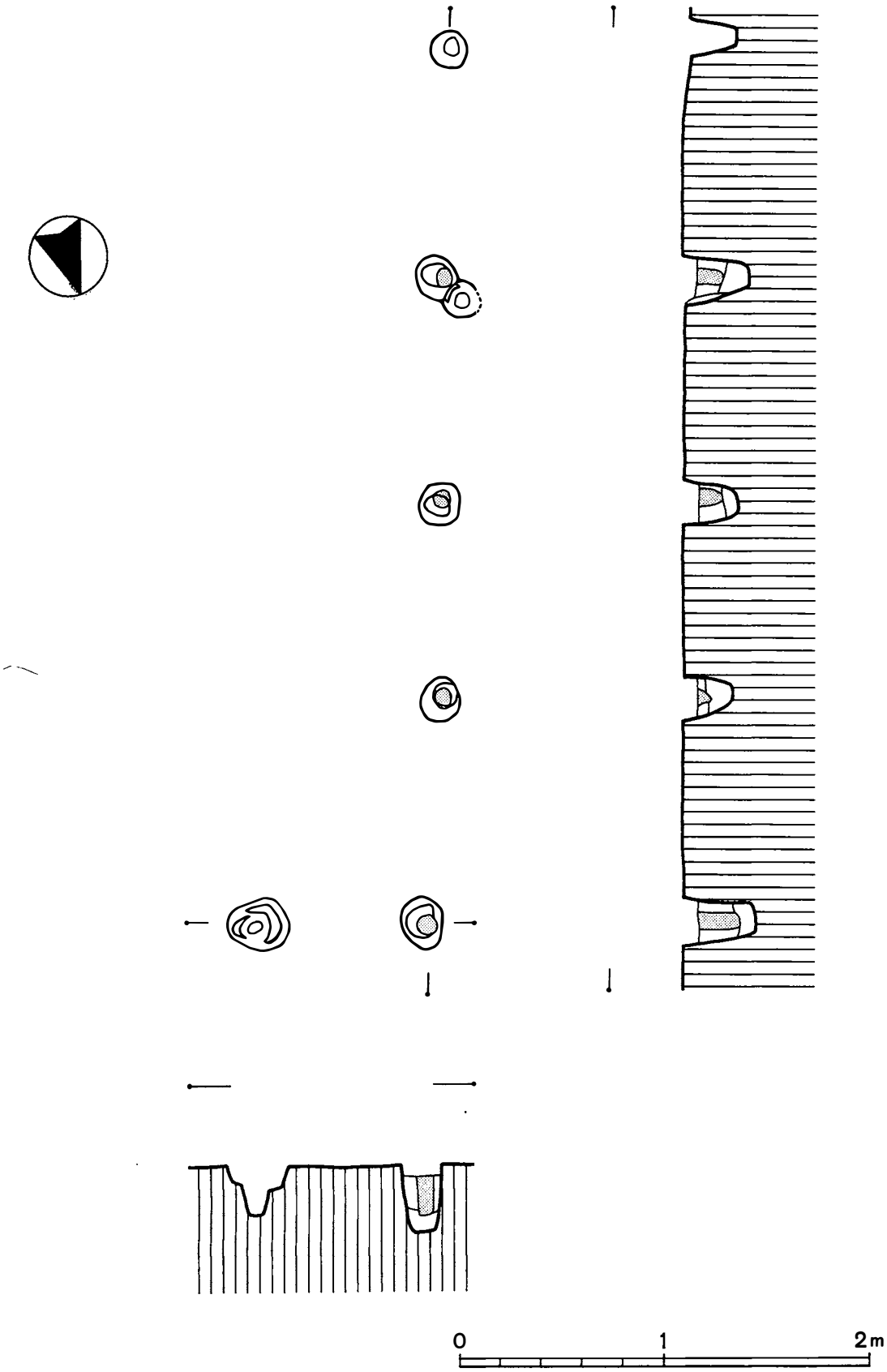
第140図　801号住居跡実測図



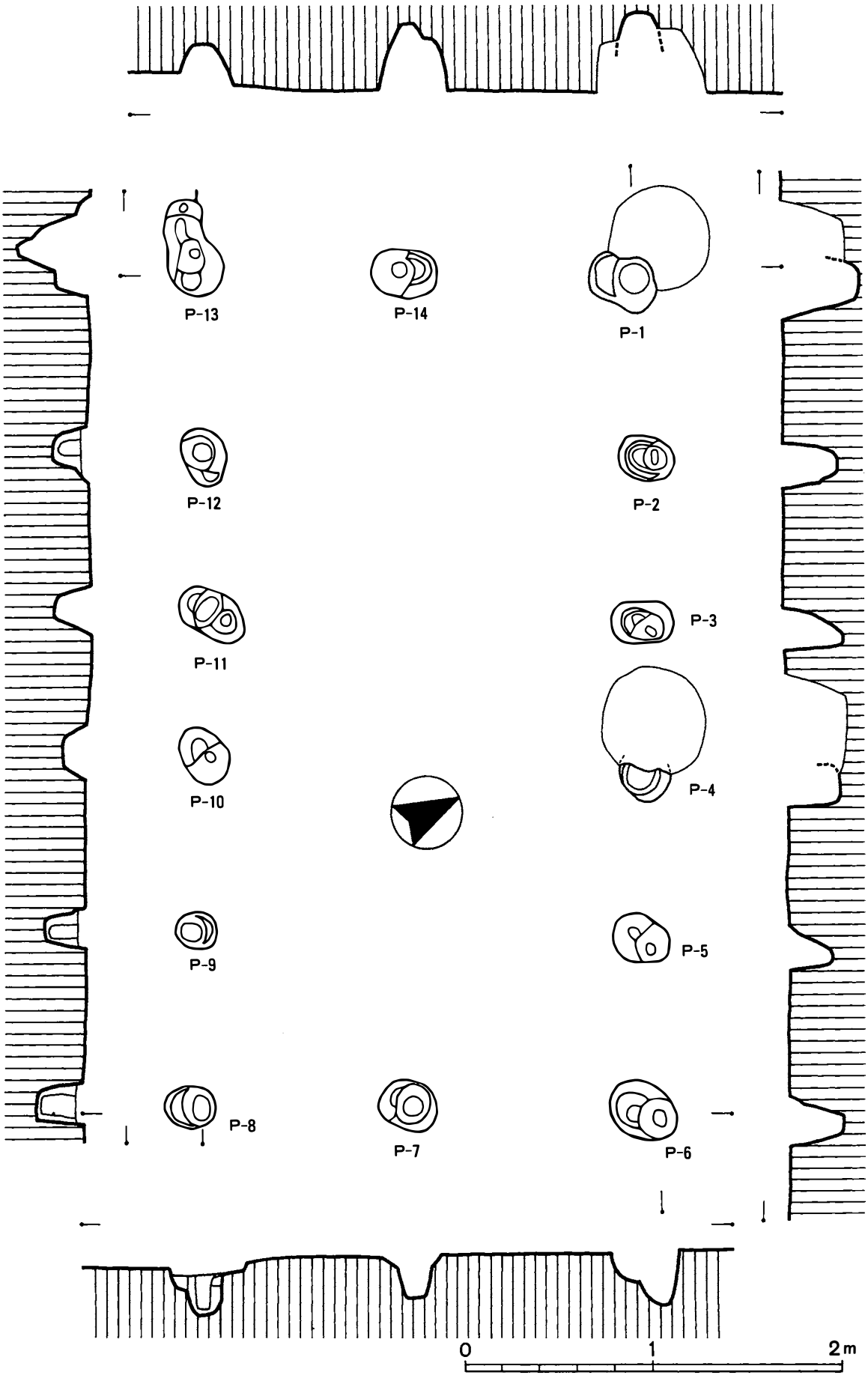
第141図　1301号住居跡実測図



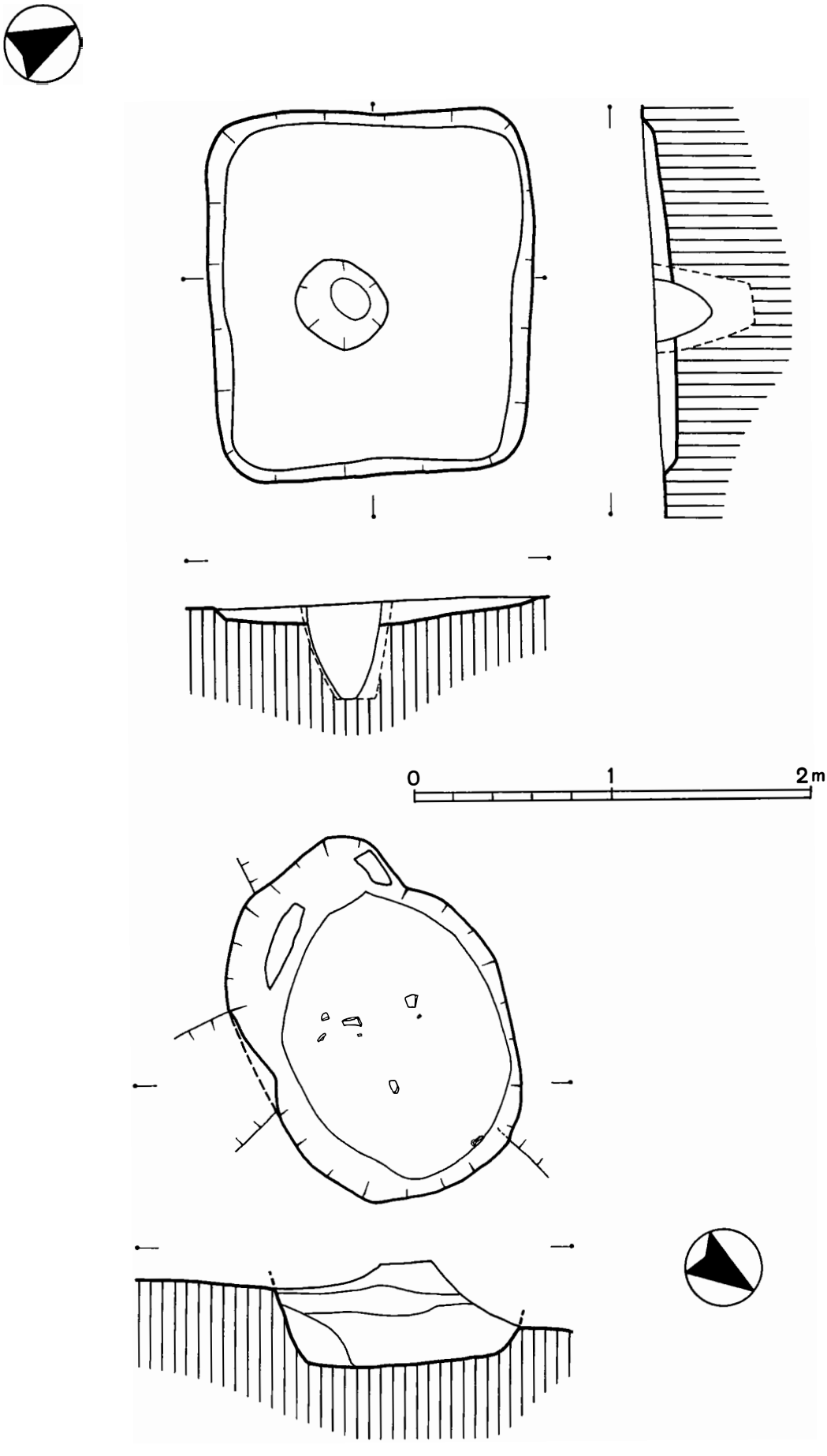
第142図　401号掘立柱建物跡実測図



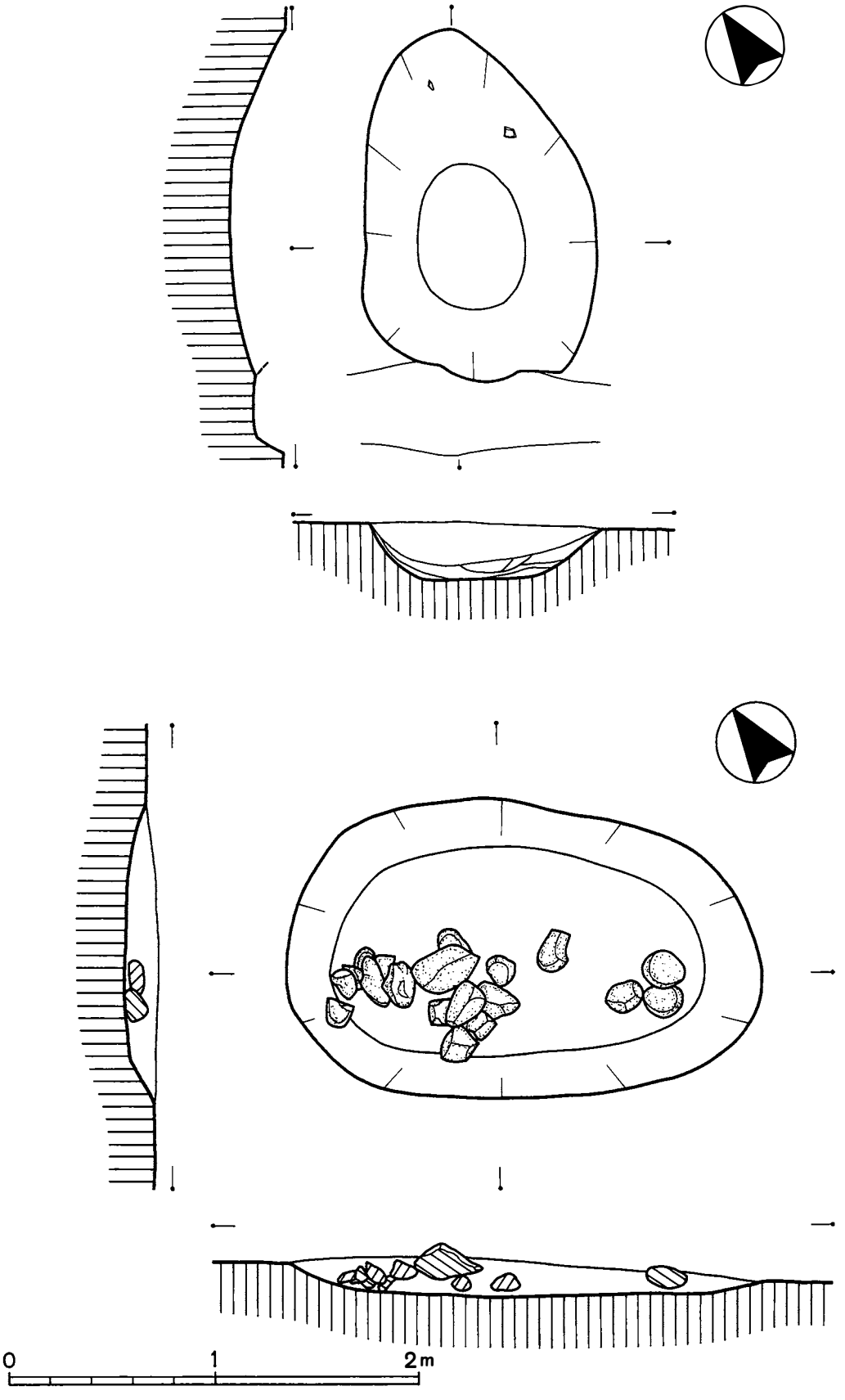
第143図　601号掘立柱建物跡実測図



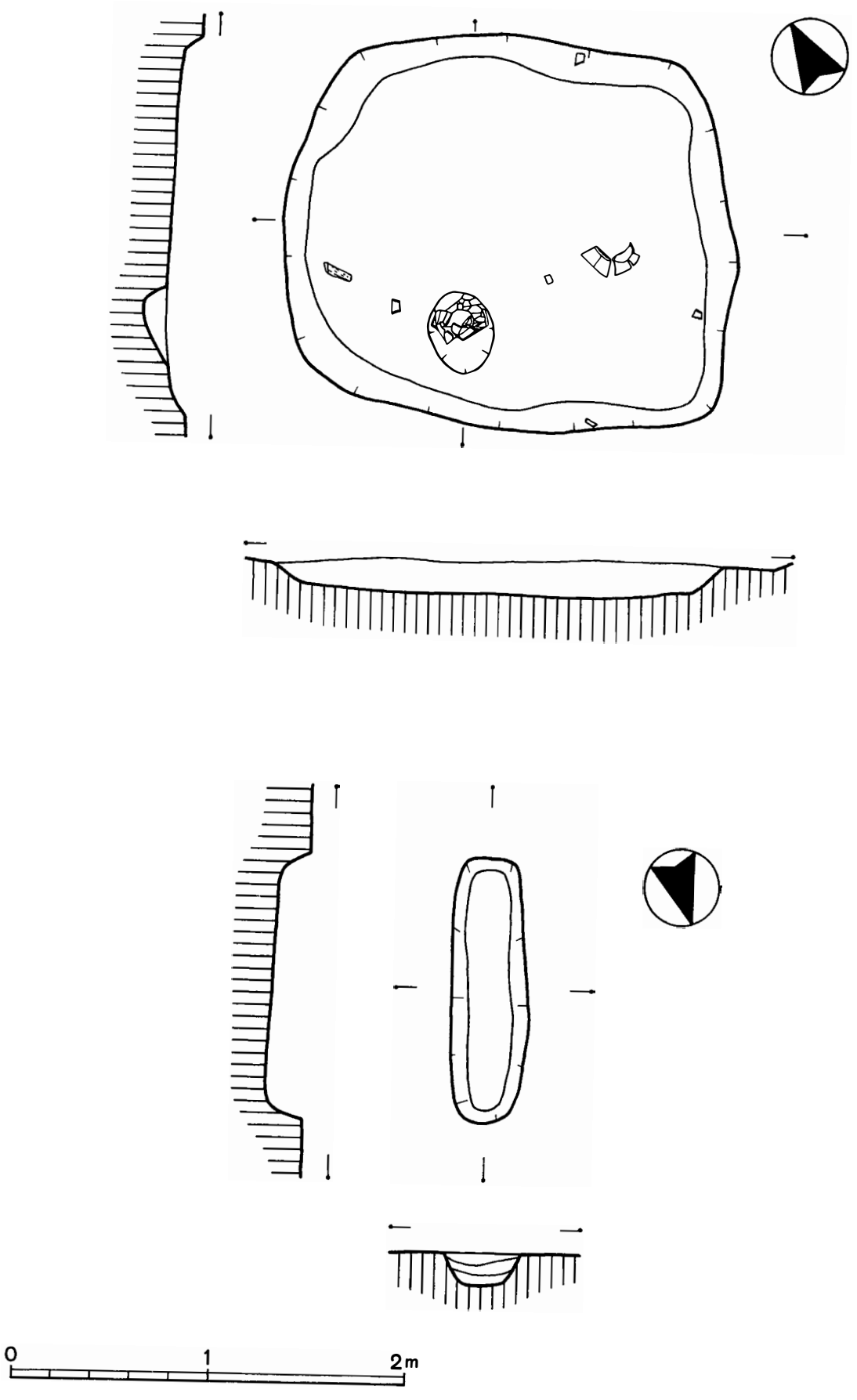
第144図　1201号掘立柱建物実測図



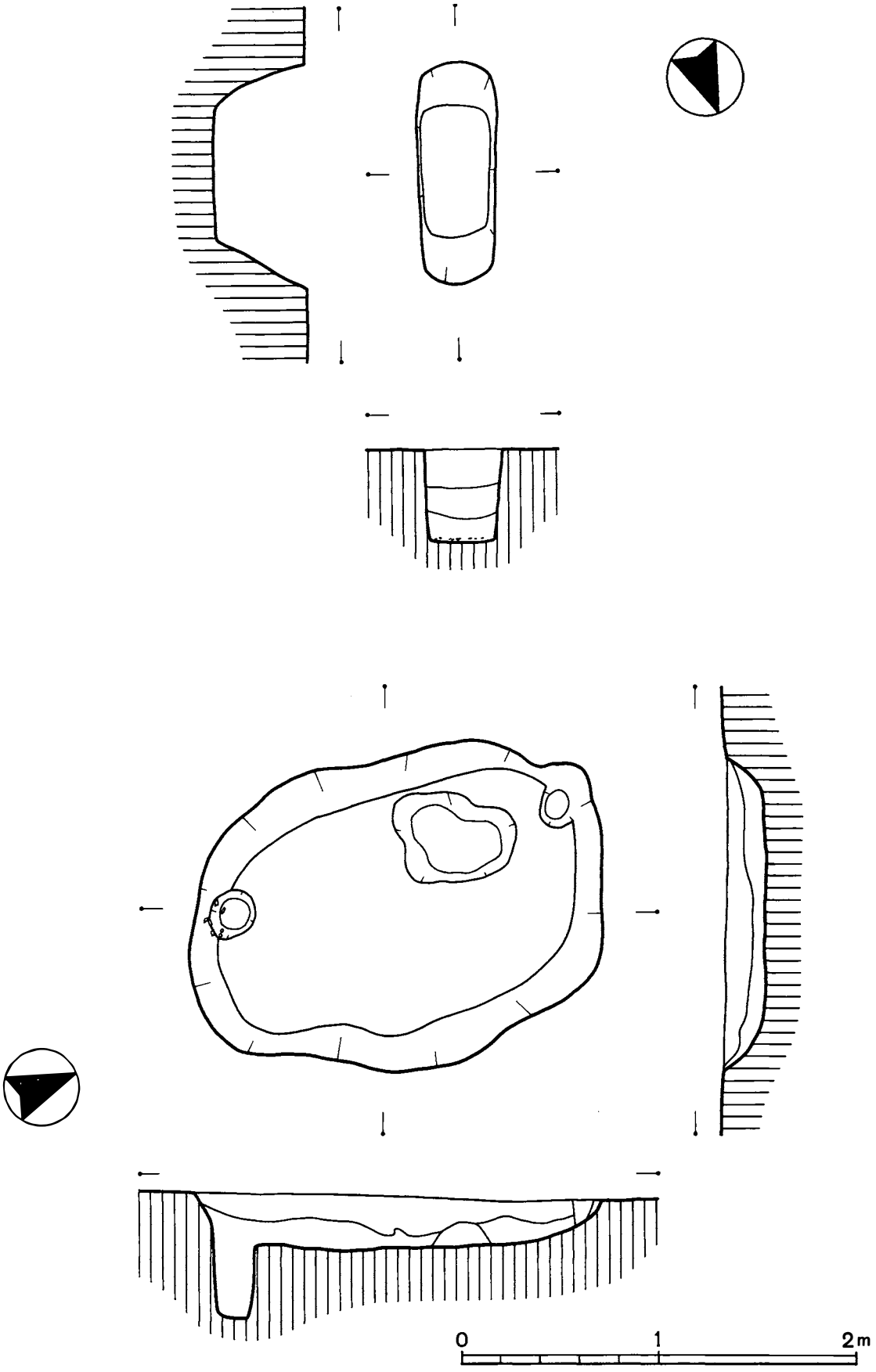
第145図　101号、401号土坑実測図



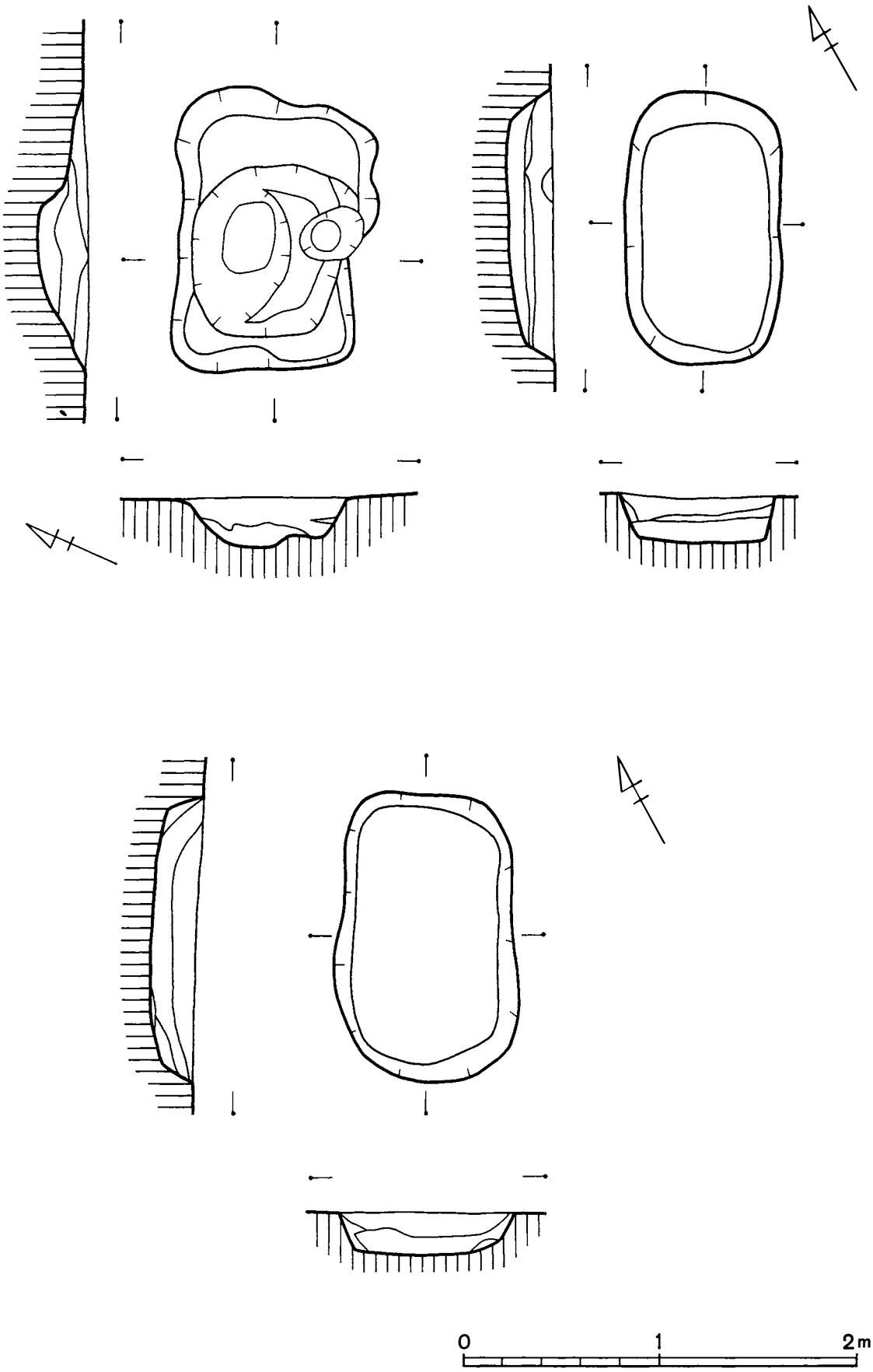
第146図　402号、403号土坑実測図



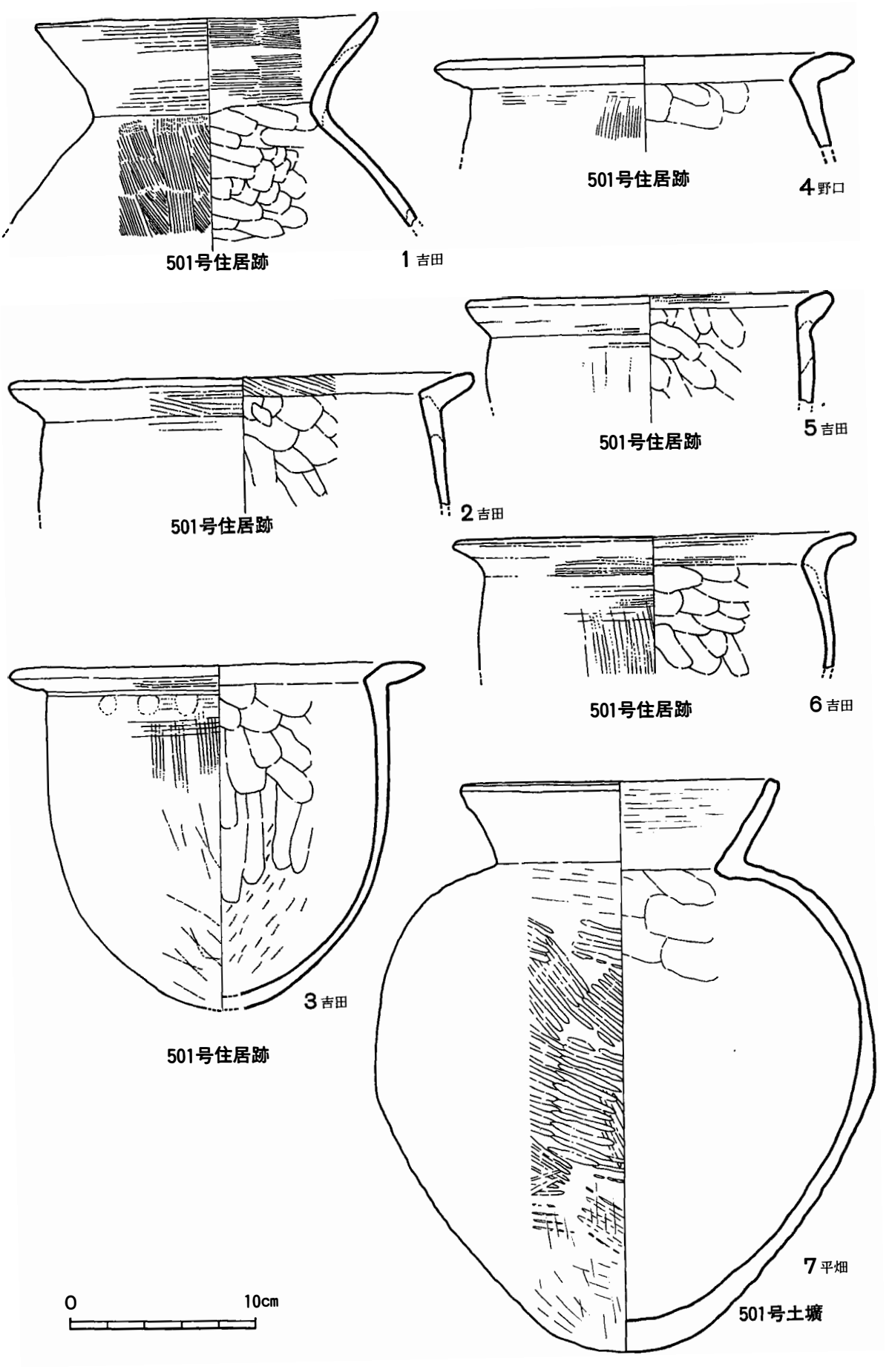
第147図　501号、1001号土坑実測図



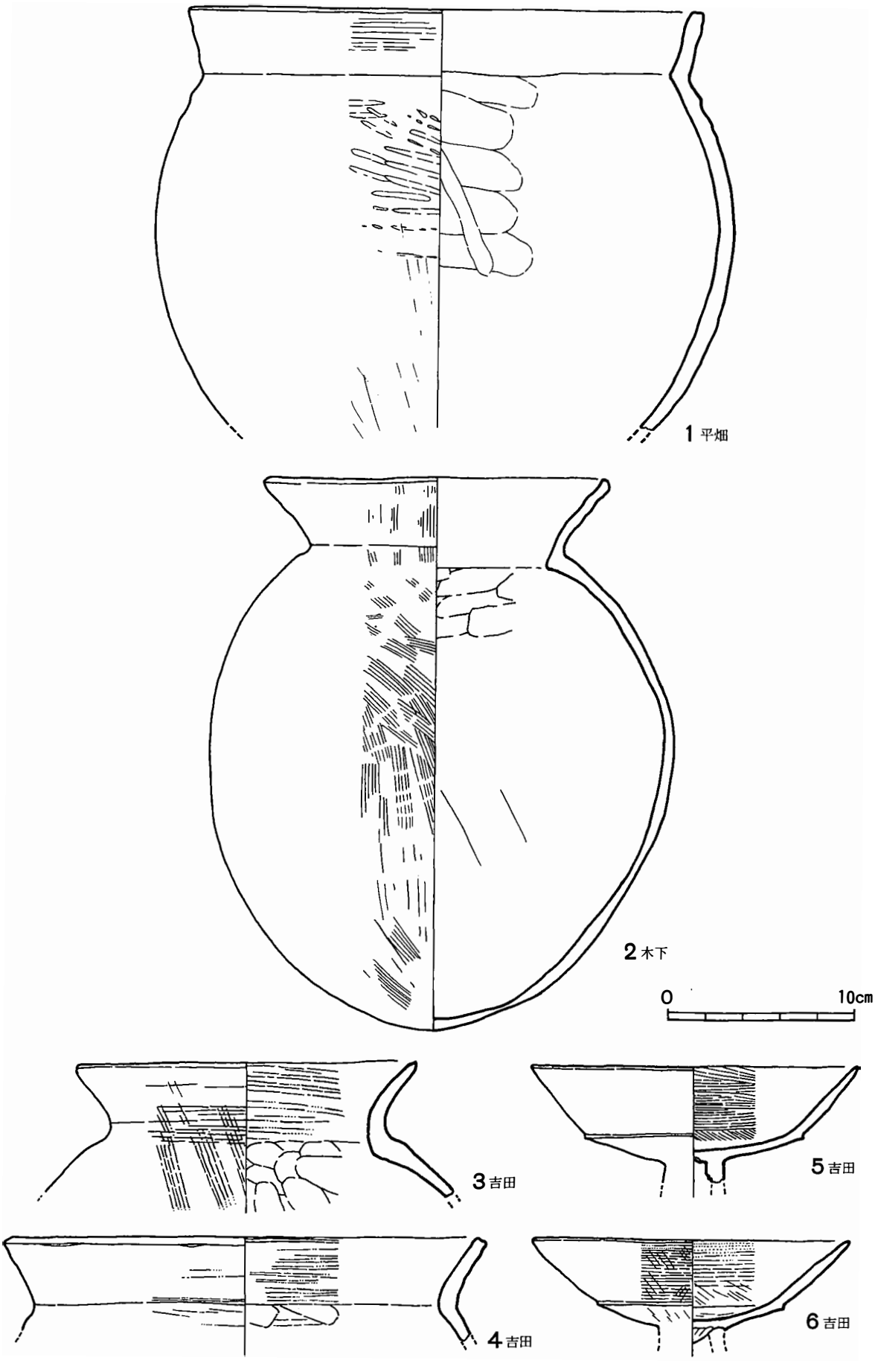
第148図　1002号、1005号土坑実測図



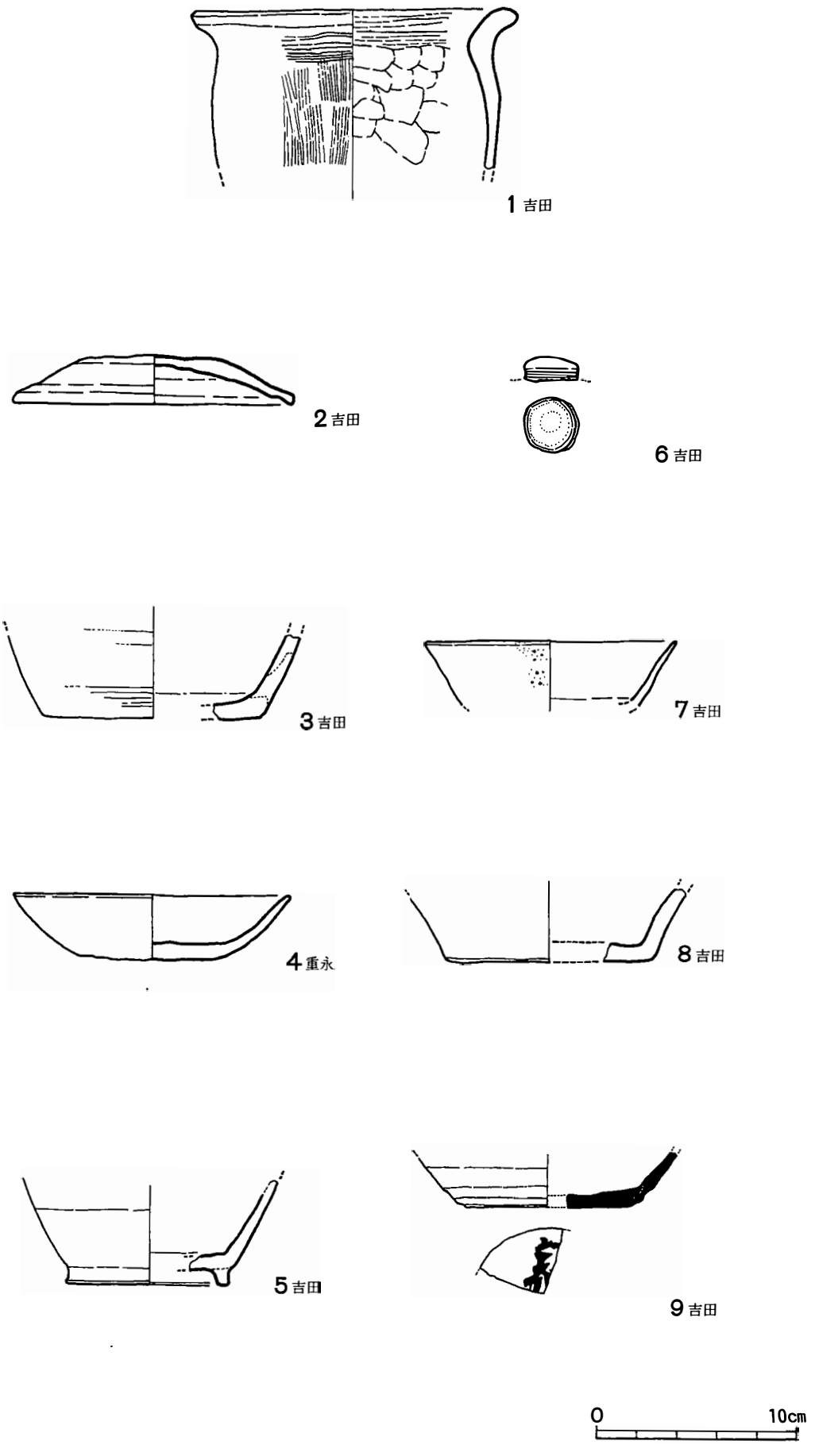
第149図　1201号、1202号、1203号土坑実測図



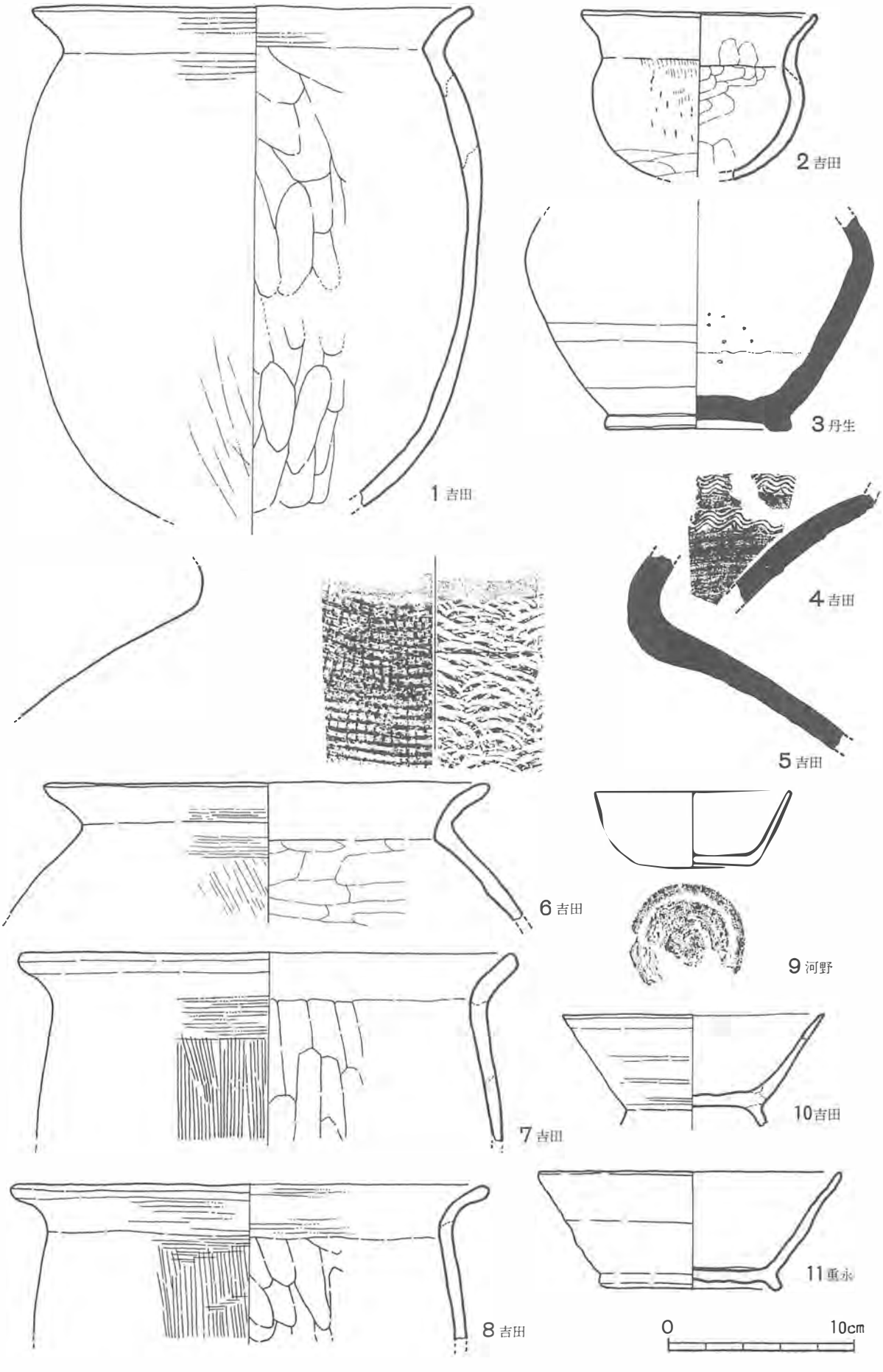
第150図　501号住居跡、501号土坑出土土器



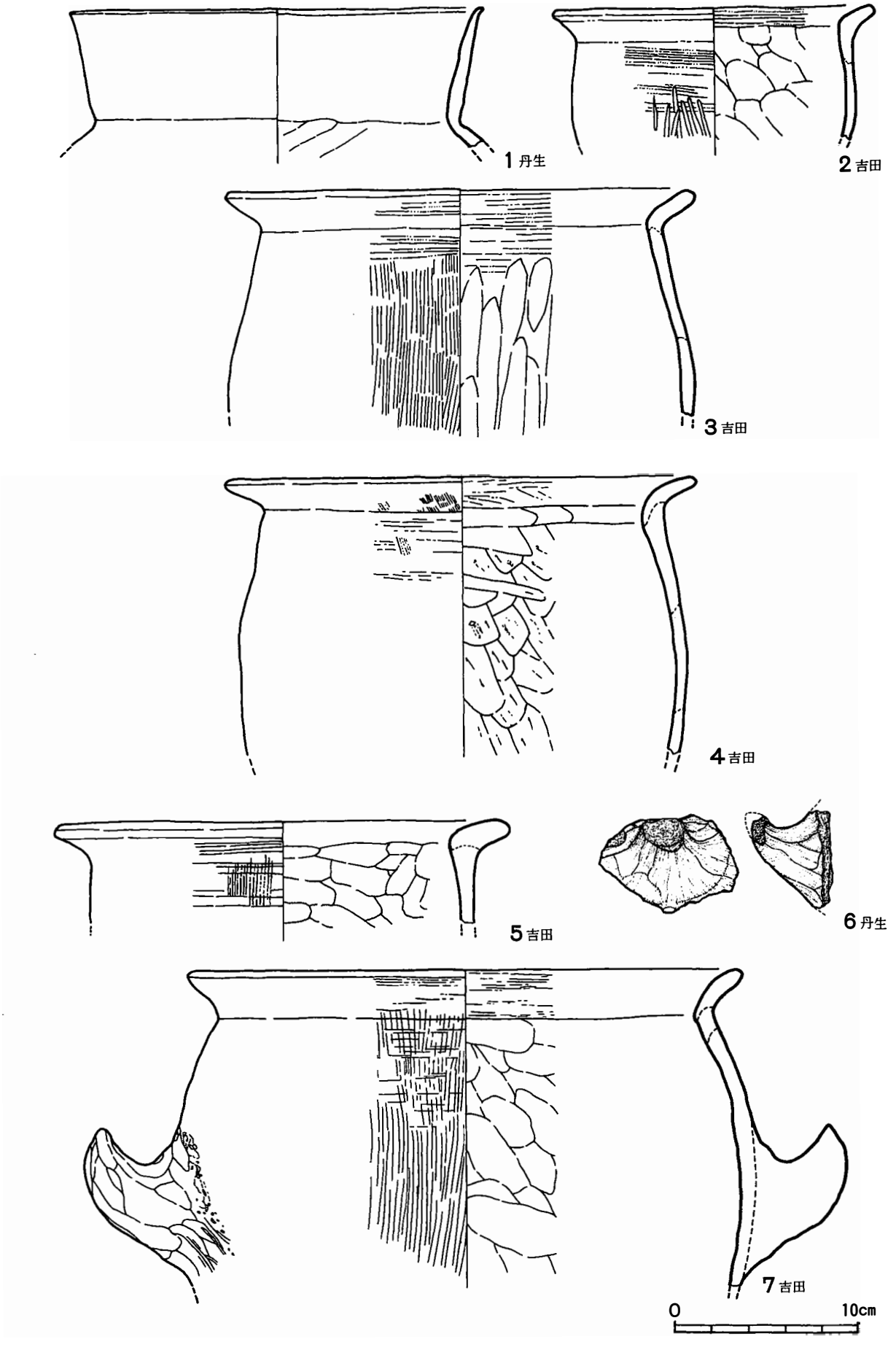
第151図　801号住居跡出土土器



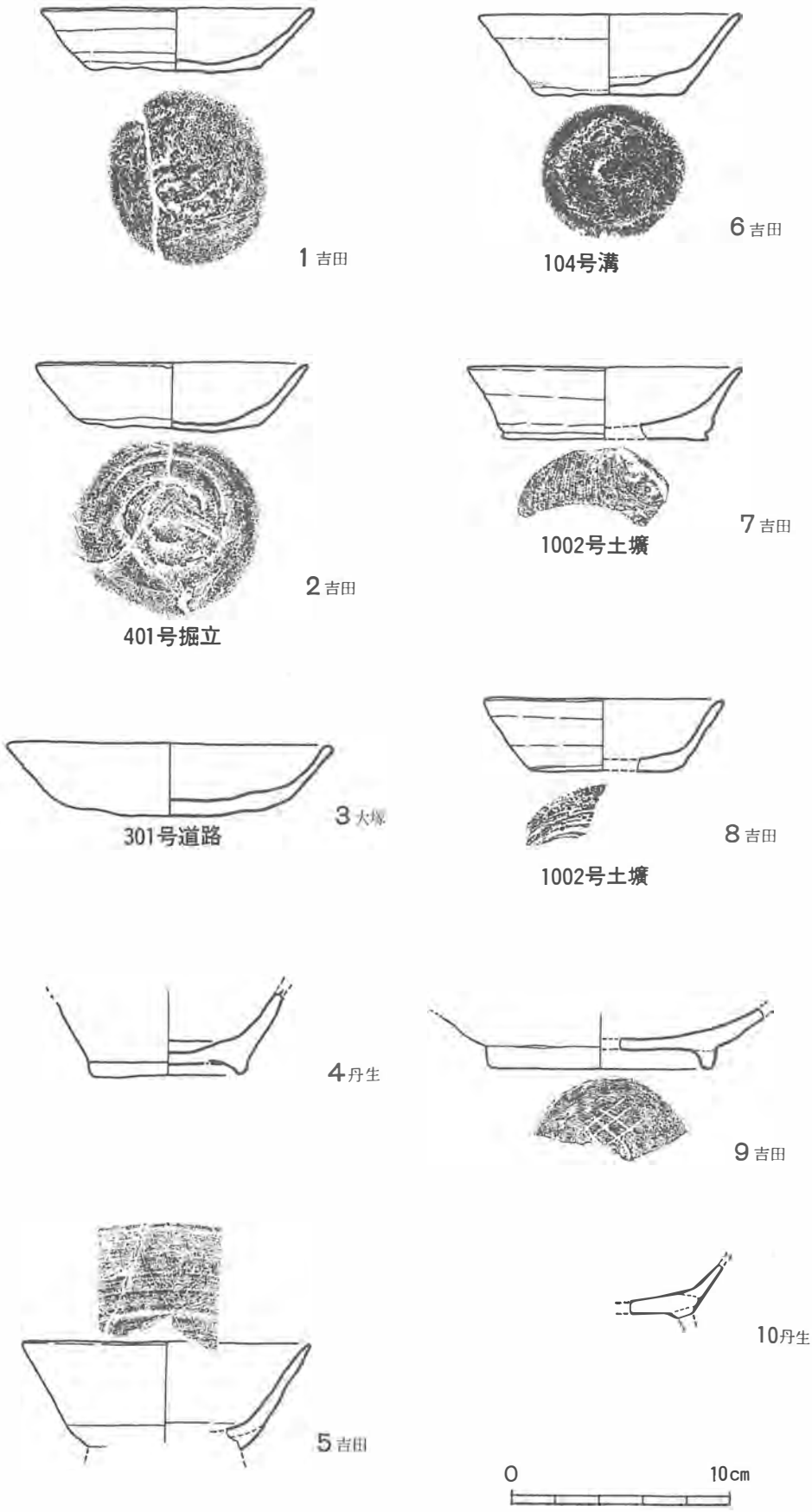
第152図　1301号住居跡出土土器



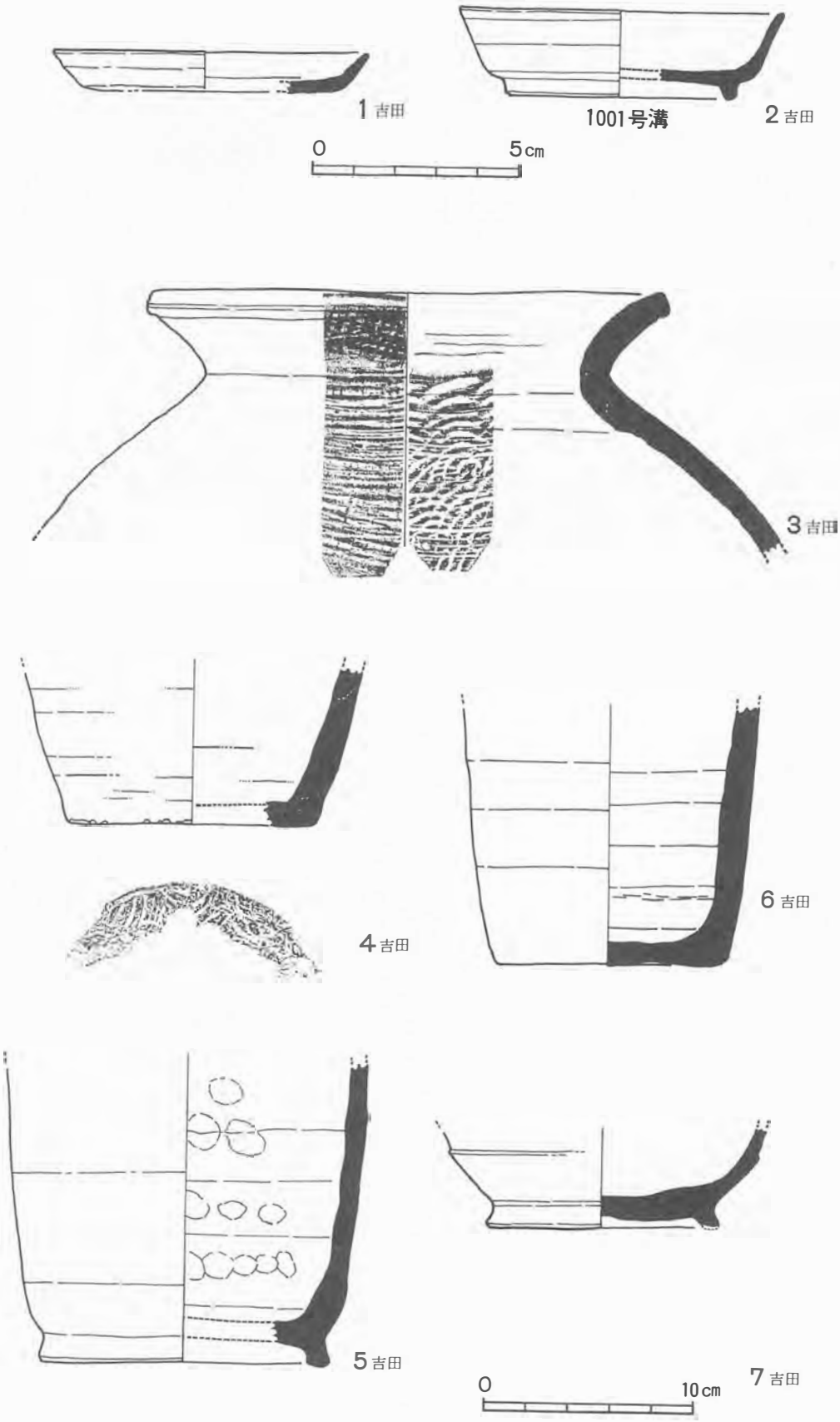
第153図　301号、302号溝出土土器



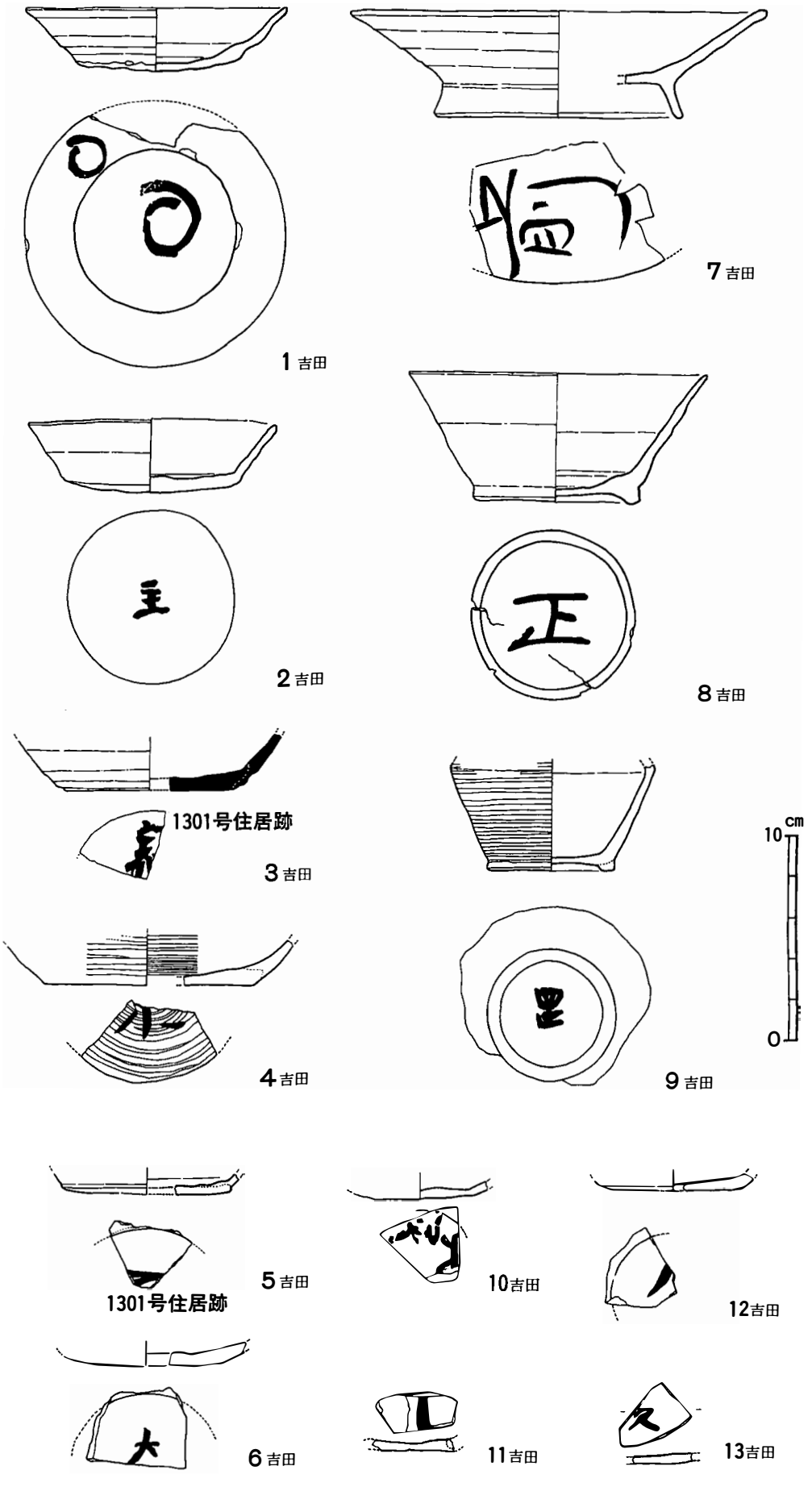
第154図　縄文時代以外の出土土器



第155図　縄文時代以外の出土土器



第156図　縄文時代以外の出土土器



第157図　縄文時代以外の出土土器(墨書土器)

4、墨書土器（第157図）

本遺跡で出土した墨書土器の総数は13点である。このうち土師器は10点、須恵器は３点で、器種は杯である。記銘された部位はほとんどが底面で、２点が体部の外面に記され、うち１点は底面と体部の双方にある。解読可能なものの墨書事項は、１点が記号で他は漢字１字で記される。

出土地点は、５点がⅢ区で最も集中し、３点がⅩⅢ区、２点がⅣ区であり、１点がⅧ、ⅨおよびⅩⅡ区である。

１は、Ⅳ区で出土した土師器の杯である。底部は回転篦切されたあと均されず中央が外にやや盛り上がり、若干の板目圧痕が観察される。体部は底部端の稜が不明瞭なまま鈍く立ち上がり、口縁端部はごくわずかに外反して開く。底面と体部の双方に墨書があり右回りに「の」の字の形に一重の円を描く。

２は、ⅩⅡ区で出土した須恵器の杯である。底部は回転篦切で仕上げ中央がわずかに盛り上がる。底部端は丸みのある稜をなし、これより体部は直線状に立ち上がる。外底部の中央に墨書があり、小さい字で端正に「主」と記す。

３は、1303区で出土した口縁と底部の大半を欠く須恵器の杯である。底部は回転篦切で仕上げ中央がわずかに盛り上がる。体部は底部端から丸みをなして立ち上がり、直線状に開く。外底部の中央を外れて解読できない墨書が１字あるが本来は複数の文字の可能性がある。

４は、Ⅳ区で出土した、口縁と底部の大半を欠く土師器の杯である。底部は平底をなし、成形のあと底部を中心に内外とも稠密な螺旋状の暗文ふうの磨きを丁寧に施す。体部は底部端の稜に明瞭に残しわずかに内湾して立ち上がる。底面の中央に墨書の一部が見えるが解読できない。運筆のあり方から「東」の可能性がある。

５は、1303区で出土した、底部の一部のみの土師器の杯である。底部はわずかに丸みのある平底をなし、底部端には稜線がある。底面の中央に交差する２条の墨痕の一部が見えるが解読できない。

６は、Ⅲ区で出土した、底部の一部のみの土師器の杯である。底部はわずかに丸みをなし回転篦切で仕上げる。底部端の稜線は曖昧である。底面の中央に墨書が１字見えるが磨耗が進み解読できない。

７は、Ⅲ区で出土した、高台を有する大型の土師器のⅢである。体部は直線状に浅く開き、口縁端部はわずかに外反する。底面の端には直線状に外に開く高台を張り付ける。体部の外面には横向きに躍動的な筆致で「前」と角筆で墨書される。

８は、ⅩⅢ区で出土した、高台を有する土師器の杯である。体部は直線状に開き、口縁端部は尖る。底面の端には短く外に開く高台を張り付ける。外底部には「正」と大きく角筆で墨書される。

９は、Ⅸ区で出土した、高台を有する土師器で、器種は杯と思われるが口縁端部がわずかに内の張り出す。内外とも稠密な底部中心の螺旋状によく磨かれれている。底面の端には短く外に開く高台を張り付ける。外底部のほぼ中央に「罡」と墨書がある。罡は岡の古い字体であり、しかも近隣に岡の地名が現存しており本遺跡の性格を知る上で重要な手掛かりを与えるものである。

10は、Ⅲ区で出土した、底部の一部のみの須恵器の杯である。わずかに回転篦切の痕が窺える。底面に墨書が１ないし２字見えるが解読できない。

11は、Ⅷ区で出土した、底部の一部のみの土師器の杯である。わずかに回転篦切の痕が窺える。底面には１条の墨痕が見えるが解読できない。

12は、Ⅲ区で出土した、底部の一部のみの須恵器の杯である。わずかに回転篦切の痕が窺える。底部の端は丸みを帯びる。底面には１条の撥ねた墨痕が見えるが解読できない。

13は、Ⅲ区の302号溝で出土した、部位不明の土師器の杯である。破片には解読できない墨書文字の一部が見える。

5、鉄滓（第158図）

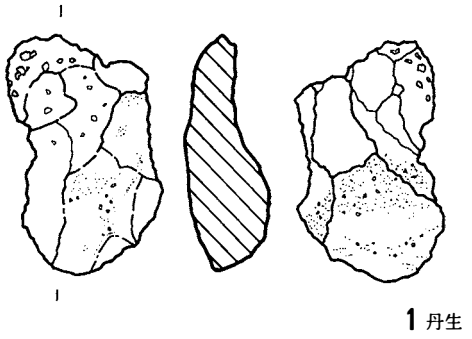
3点出土したが、1点は表面採集である。ほか2点はⅣ区内の近世の溝からの出土である。1、2は、いずれも破片状態の鉄滓で細かい砂粒が付着していることから同一の遺構に起源を有する可能性があるが、鍛冶または製鉄炉は付近に検出はない。一帯は、近世の時期には集落はなく畑地であったとされ、本遺物はそれ以前の所産とみられる。3は、前2者とはやや質的に異なる外観を呈する。図面の右から左方向に流動した状況を留める。

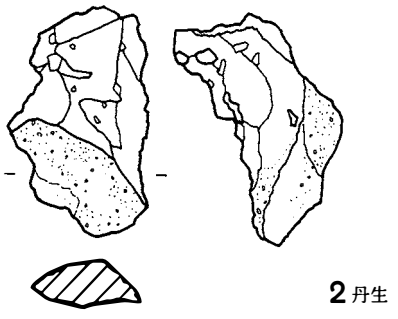
6、布目瓦（第159図）

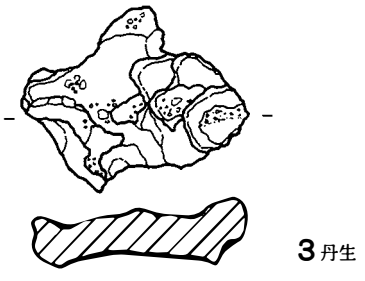
Ⅰ区より出土したが、401号道路状遺構に平行する103号溝遺構から出土した。同調査区は道路状遺構が数条錯綜し、いずれも平安時代の時期とみられる。出土した瓦は、平瓦で背面に布目圧痕があり腹面は平滑である。破断面はやや磨耗する。瓦の出土した意義は大きく、墨書土器の出土から考えて一帯には官衙に相当する遺跡が存在することを示唆している。

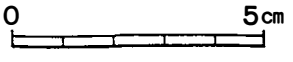
7、土錘（第159図）

2点出土した。紡錘形の管状をなす。遺物の時期は、出土地点から察するところ歴史時代のものであろう。2の出土したⅤ区は至近距離に歴史時代の遺構があり、3は、近世の溝からの出土である。

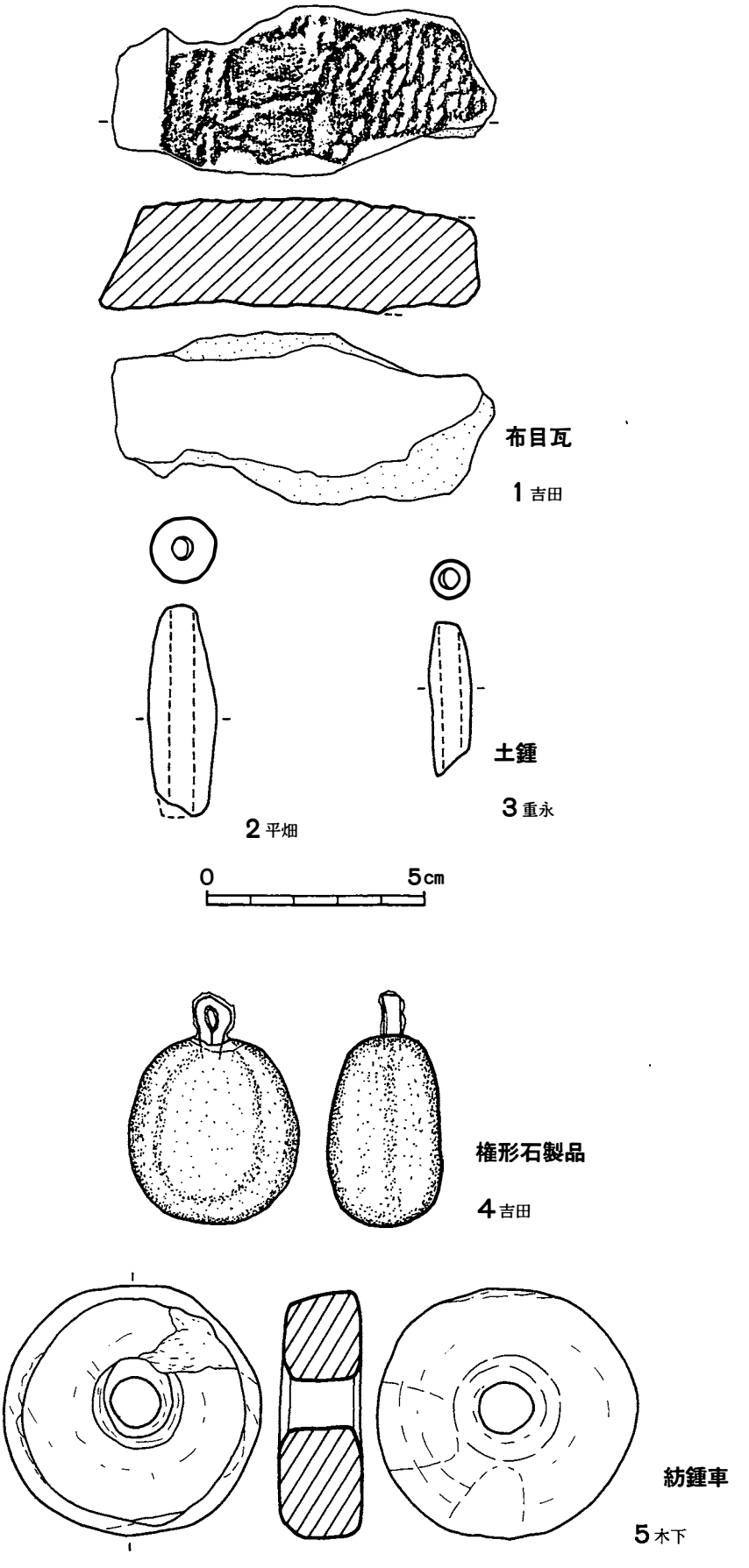




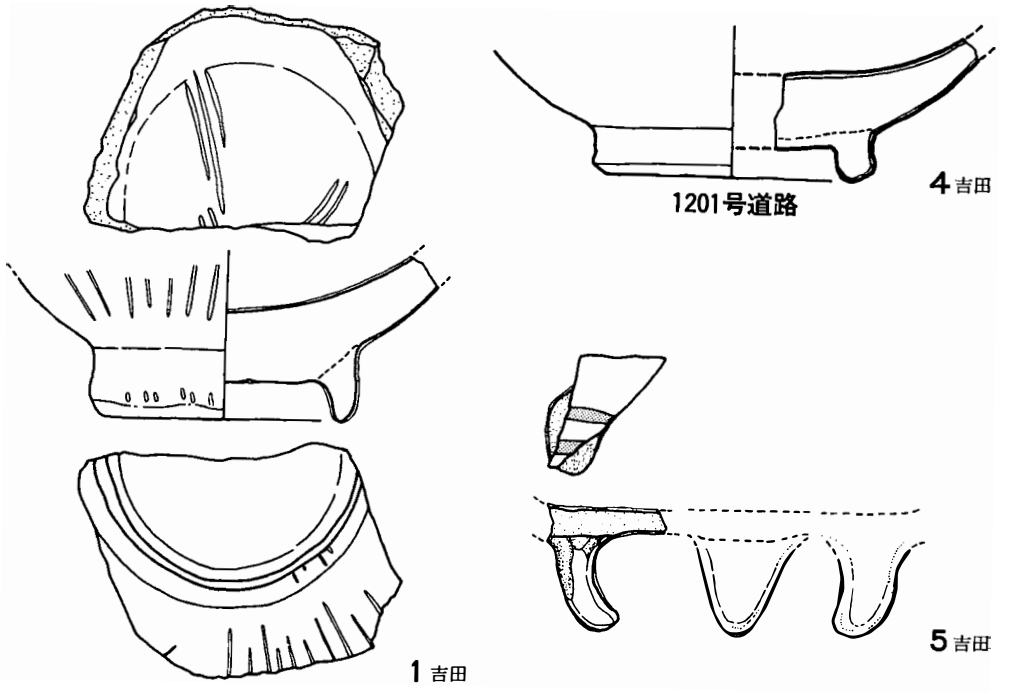


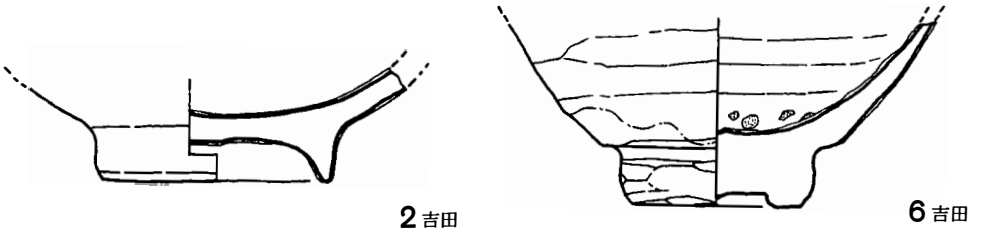


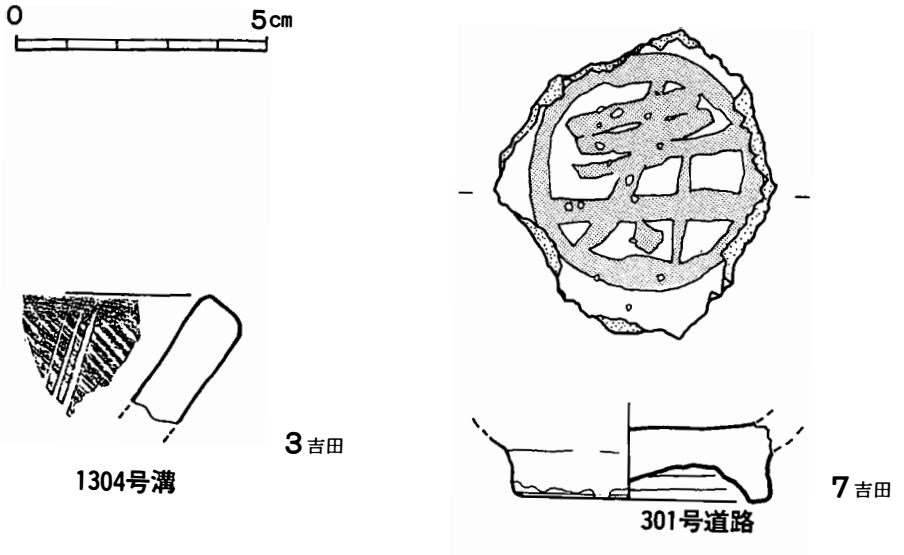
第158図　歴史時代の出土遺物（鉄滓）



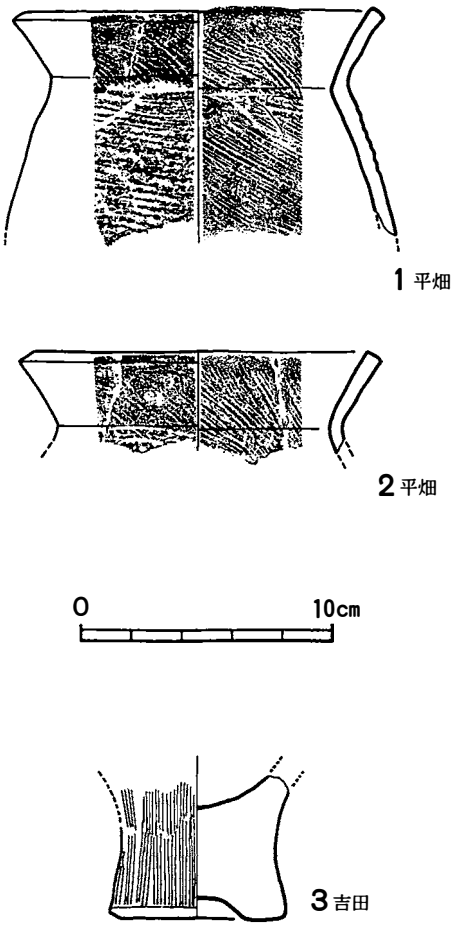
第159図　歴史時代の出土遺物







第160図　歴史時代の出土土器



第161図　縄文時代以外の出土土器(弥生土器)

8、権形石製品（第158図）

安山岩の偏平な自然円礫の縁辺にU字形に折り曲げた鉄線を打ち込まれた遺物である。1201号掘立柱建物の柱穴より出土した。当初、用途が分からず石錘の一種かと思われたが日常的な消耗品にしては巧妙な作りに過ぎること、屈曲した鉄線の頂部がループをなし掛け金をなしていることから推測して、権（分銅）そのもの、権の代用品、制式の権を補助する小単位用の権、権を模した儀礼用の権が可能性として考えられる。

9、紡錘車（第158図）

Ⅹ区で表面採集された。材質は淡い緑灰色の滑石を丁寧に削って作る。

10、青磁・白磁など（第159図）

1は、Ⅸ区で出土した青磁の碗である。器壁は分厚く、高台の断面は三角形をなし先端は尖る。底部内面は無釉である。体部外面の下位に放射状に繊細な直線で文様を描く高台の一部、底部内面にも同様に細い線文を有する。2は、ⅩⅠ区で出土した白磁の碗である。高台は断面が三角形を呈し先端は尖る。底部の一部は無釉である。3は、1304号溝で出土した瓦質のすり鉢である。内面には斜交する目が刻まれている。4は、1201号道路状遺構より出土した青磁である。底部は分厚く高台は断面が方形をなす。5は、501号道路状遺構より出土した青磁である。香炉とみられる鼎の脚で底部の内面には文様の一部と思われる2条の太い線文がみられる。脚は1本のみ残存し側面観は三角形で先端は丸みをもち猫足状に内に強く弯曲する。6は、112号溝より出土した白磁の碗である。体部はやや内弯して立ち上がる。底部は分厚く高台は低い。高台は無釉で外面には横方向の細かい削りが観察される。

7は、301号道路状遺構より出土した近世陶器である。地色は灰白色で、底部内面には呉須で寿の字を描く。

11、弥生土器（第160図）

3点出土した。いずれも甕形土器の破片である。1、2は、弥生後期の甕形土器の口縁部で、頚部で「く」の字に屈曲し外反して開く。3は、弥生中期の甕形土器の底部突出部である。底面は上げ底を呈する。

第44表　縄文土器以外の出土土器計測表

縄文以外の土器　第150図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
150-1	501住	壺	(184)	(113)			外 橙色 5YR6/6 内 橙色 7.5YR7/6		No.4
2	501住	甕	(251)	(70)	(220)		外 浅黄橙 7.5YR8/6 内 橙色 7.5YR7/6	カーボン付着	No.35
3	501住	〃	(222)	(182)	(184)		浅黄橙 10YR8/4	口縁部にカーボン付着	No.38
4	501住	〃	(225)	(51)			にぶい黄橙 10YR7/4	ヘラケズリ	No.40,41
5	501住	〃	(197)	(58)	(175)		外 にぶい黄橙 10YR7/4 内 にぶい黄褐 10YR5/3	やや軟質	No.18
6	501住	〃	(216)	(71)	(191)		外 橙色 5YR7/6 内 橙色 5YR7/8		No.26
7	501住	壺	(170)	299	264		外 にぶい黄褐 10YR5/4 内 灰黄褐 10YR4/2	カーボン付着	No.1

縄文以外の土器　第151図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
151-1	801住	壺	276	218	31		外 灰黄褐 10YR5/2 内 明黄褐 10YR6/6		No.492,624,743,752
2	801住	壺	181	289	249		灰黄褐色	煤付着 完形	No,586,590,689,691, 702,708,729,778,801
3	801住	壺	181	(73)			浅黄橙 10YR8/4	口縁部に著しくカーボン付着	No.623,782
4	801住	甕	(260)	(55)			にぶい黄褐 10YR6/4	カーボン付着	No.504,753,781
5	801住	坏	(168)	(138)			明赤褐色 5YR5/6	カーボン付着	No.779,780,789
6	801住	坏	(164)	(94)			外 にぶい褐色 7.5YR6/3 内 にぶい黄橙 10YR6/3	赤彩	No.1778

縄文以外の土器　第152図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
152-1	1301住	甕土師	165	78	146		橙色 5YR6/6	カーボン付着	No.125,129
2	1301住	土師坏蓋	(140)	24			外 橙色 7.5YR7/6 内 明赤褐色 5YR5/6	赤彩	No.55
3	1301住			(42)		(106)	浅黄橙 7.5YR8/4	ろくろあと	No.95
4	1301住	坏	170	32		66	浅黄橙 7.5YR8/4	カーボン付着 ヘラ切り痕	No.32
5	1301住	須恵坏		(52)			外 灰色 10Y5/1 内 灰白色 10Y7/1	やや軟質	No.88
6	1301住	土師坏のつまみ		幅 (26)	厚 (12)		橙色 5YR6/6		No.63
7	1301住	須恵坏	125	(32)			灰色		No.31
8	1301住	浅鉢		(37)		(102)	灰黄褐色 10YR4/2		No.13
9	1301住	須恵坏		(24)		(38)	灰色	墨書	

第45表　縄文土器以外の出土土器計測表

縄文以外の土器　第153図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
153-1	301号溝	甕	(238)	(264)	(248)		にぶい黄橙	カーボン付着	
2	302号溝	土師器	(126)	(88)	(112)		外　浅黄橙　10YR8/4 内　にぶい黄橙　10YR7/4		No.52
3	302号溝	長頸壺		(112)	(184)		外　にぶい黄橙　10YR7/2 内　明褐灰色　7.5YR7/1		
4	302号溝	壺		(71)			外　にぶい橙色　5YR6/4 内　灰黄色　2.5Y6/2		
5	302号溝			(136)			外　暗灰黄色　2.5Y5/2 内　にぶい褐　7.5YR5/4		No.44
6	302号溝	壺	(242)	(73)			外　明赤褐色　2.5YR5/6 内　浅黄橙　10YR8/4	赤彩	
7	302号溝	土師甕	(268)	(100)	(255)		橙色　5YR7/6	やや軟質	No.30
8	302号溝	甕	(254)	(84)			外　にぶい黄橙　10YR7/4 内　にぶい黄橙　10YR6/4	カーボン付着	
9	302号溝	土師坏	105	38			にぶい橙色　7.5YR7/3		
10	302号溝	坏	(138)	(61)			外　浅黄橙　7.5YR8/3 内　にぶい橙色　7.5YR7/4	タール状のカーボン付着	
11	302号溝	〃	160	63			橙色　5YR6/6		No.27

縄文以外の土器　第154図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
154-1	1301号溝	壺	(208)	(71)			明赤褐色　5YR5/6		
2	Ⅴ区	甕	(176)	(70)	(155)		外　にぶい橙色　5YR6/4 内　にぶい黄橙　10YR6/3	石英・砂粒多い	包51
3	ⅩⅢ区	〃	(252)	(122)	(258)		浅黄橙　7.5YR8/6	カーボン付着 やや軟質	P-114
4	ⅩⅢ区	〃	(262)	(148)	(248)		外　にぶい橙色　7.5YR8/4 内　橙色　7.5YR6/6	カーボン付着	P-111
5	ⅩⅡ区	〃	(250)	(55)	(210)		外　橙色　5YR5/1 内　にぶい橙色　7.5YR6/4		P-72
6	Ⅳ区	甑	長さ (50)	幅 (42)			浅黄橙　10YR8/4		
7	Ⅹ区	甑	(300)	(170)			浅黄橙　7.5YR8/6	砂粒含む	P-8

第46表　縄文土器以外の出土土器計測表

縄文以外の土器　第155図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
155-1	Ⅳ区	土師坏	125	29		79	橙色 5YR6/8	板目圧痕、やや軟質、回転ヘラ切り	
2	401号掘立柱建物	坏	139	32			橙色 5YR6/8	回転ヘラ切り カーボン付着	No.1,P-5
3	301号道路	土師坏	(147)	33			橙色 5YR6/8	回転ヘラ切り カーボン付着	No.1,P-5
4	ⅩⅢ区	〃					外 にぶい黄橙 10YR6/4 内 にぶい黄橙 10YR6/3	回転ヘラ切り	包1830
5	Ⅹ区	〃	(132)	(51)			橙色 5YR6/8	赤彩 体部に窯印の線刻	P-9
6	1004号道路	〃	(118)	(36)		668	黄橙 7.5YR7/8	回転ヘラ切り	No.1
7	1002号土壙	〃	(124)	(33)			橙色 5YR7/6	糸切り カーボン付着	
8	1002号土壙	〃	(110)	(33)			橙色 7.5YR7/6	糸切り	
9	1301住	〃		(28)	脚台径 (101)	脚台高 14	明赤褐色 5YR5/6	カーボン付着 底部に窯印の線刻	No.38
10				(21)			外 明赤褐色 2.5YR5/6 内 暗赤灰色 2.5YR3/1	回転ヘラ切り カーボン付着	

縄文以外の土器　第156図

番号	出土地点	器種	口径 mm	器高 残存高 mm	胴部 最大径 mm	底径 mm	色調	備考	登録番号
156-1	Ⅹ区	土師坏	(150)	18			黄橙色 7.5YR7/8	赤彩、やや軟質 回転ヘラ切り	P-9
2	1001号溝	〃	(154)	41	脚台径 (110)	脚台高 13	橙色 7.5YR7/6	回転ヘラ切り	No.68
3	Ⅹ区	須恵器壺	(250)	(120)			外 灰色 5Y6/1 内 灰白色 5Y7/2		P-11
4	ⅩⅢ区	須恵器 長頸壺		(144)			外 灰黄色 2.5Y7/2 内 灰白色 2.5Y7/1	焼成良 底は輪状文	
5	Ⅲ区	須恵器 長頸壺		(140)	脚台径 (68)	脚台高 19	外 灰色 7.5Y4/1 内 灰色 7.5Y5/1	指頭痕	
6	Ⅰ区	須恵器 長頸壺		(122)		112	灰色	ヨコナデ	P-3
7	Ⅹ区	須恵器壺		(46)	脚台径 110	脚台高 14	外 赤褐色 10R5/3 内 にぶい赤褐 5YR5/4	焼成良	P-10

第47表　歴史時代の遺物計測表

縄文以外の土器(墨書土器)　第157図

番号	出土地点	器　種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　　調	備　　考	登　録　番　号
157-1	Ⅳ区	土師坏	252	60		72	橙色　5YR6/6	墨書 赤彩	
2	Ⅳ区	須恵坏	240	66		84	灰色　5Y5/1	墨書	P-95
3	1301住	〃		(50)		(80)	褐灰色　10YR6/1	墨書	
4	Ⅳ区	土師坏		(50)		(102)	橙色　5YR7/8	ていねいなつくり	
5	1301住	〃					外　橙色　5YR7/8 内　にぶい橙色　5YR6/4	著しく磨耗	No.92
6	Ⅲ区	〃					外　橙色　5YR6/6 内　にぶい橙色　7.5YR7/4	赤彩	
7	Ⅲ区		204	100		(116)	外　橙色　5YR6/6 内　浅黄橙　10YR8/4	赤彩	
8	ⅩⅢ区	土師 高台坏	144	122		78	外　橙色　5YR6/6 内　浅黄橙　7.5YR7/6	赤彩 墨書	
9	Ⅳ区	土師小型 壺土器		(100)	98	(58)	橙色　5YR6/6	磨耗はげしい	
10	Ⅲ区	須恵坏					灰白色　7.5Y7/1		
11	Ⅷ区	土師坏					橙色　5YR6/6		
12	302号溝	須恵坏					にぶい黄色　2.5Y6/3		
13	302号溝	土師坏					橙色　5YR6/6		

歴史時代の遺物　第159図

番号	出土地点	器　種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　　調	備　　考	登　録　番　号
159-1	Ⅰ区	布目瓦	(37)	(85)	24		灰白色　2.5Y8/1		
2	Ⅴ区	土錘	47	10	穴直径 45		明黄褐色		
3	801号溝	〃	35	9	穴直径 4		橙色		
4	1201号掘 立柱建物	権形石製品	51	39	25			安山岩　63.1g	
5	Ⅹ区	紡錘車	53 穴　48	52 穴　49		101.4	緑灰色	滑石	

第48表　歴史時代の遺物計測表

歴史時代の土器　第160図

番号	出土地点	器　種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　　調	備　　考	登　録　番　号
160-1	901号 土壙	青磁		(33)	脚台径 (55)	脚台高 (21)	オリーブ灰　10Y4/2	高台は無釉	
2	ⅩⅠ区	白磁		(23)	脚台径 (51)	脚台高 14	灰白色　7.5Y8/2 ～淡黄　7.5Y8/3	高台は無釉	
3	1304号溝	瓦質 すり鉢		(25)					No.8
4	1201号 道路	青磁		(28)	脚台径 (48)	脚台高 (21)	オリーブ灰　2.5GY6/1	施釉	
5	501号 道路	青磁				脚台高 18		香炉の脚部	No.1
6	1102号溝	白磁		(37)	脚台径 33	脚台高 16	灰白色　2.5GY	高台は無釉	
7	301号 道路	陶器			脚台径 51	脚台高 7	白釉		

鉄　滓　第158図

番号	出土地点	器　種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　　調	備　　考	登　録　番　号
158-1	401号溝	スラグ	46	31	15				No.7
2	401号溝	スラグ	44	29	9				No.1
3		スラグ	44	46	13				

弥生土器　第161図

番号	出土地点	器　種	口　径 mm	器　高 残存高 mm	胴　部 最大径 mm	底　径 mm	色　　調	備　　考	登　録　番　号
161-1	Ⅳ区	弥生甕	(148)	(88)			にぶい黄橙	ハケメ	
2	Ⅳ区	〃	(144)	(40)			にぶい黄橙　10YR6/3	ハケメ	
3	Ⅳ区	〃		(56)			外　橙色　7.5YR6/6 内　黒色　10YR1/1		

第Ⅲ章　総括と展望

今回の調査では、縄文時代の住居跡に加え、古墳時代、平安時代の遺構を検出したことは、この地域おいて貴重な発見となった。

第１節　縄文時代の遺構と遺物について

１、遺構の分布

縄文時代の住居跡７基、埋甕７基、土坑および柱穴群を検出した。401号住居跡、802号住居跡は、削平が著しく不完全な住居跡であったが、1303号住居跡、1304号住居跡からは豊富な縄文土器が出土した。住居跡の時期は、出土土器で見るかぎり401号住居跡は、御領式の時期、1302号住居跡、1303号住居跡および1304号住居跡は、天城式の時期、802号住居跡は、太郎迫式の時期であろう。

埋甕遺構は、時期を識別しうる部位を残す遺物でみると、502号埋甕が御領式の時期、1001号埋甕が鳥井原式の時期であるほかは、すべて天城式の時期である。次いで、遺構の分布と時期の関係をみると、３カ所に時期を違えた分布領域がある。ひとつは、丘陵上面の平坦地に主たる遺構が集中し、包含層からの土器片の出土も夥しい。調査区ではⅦ区南側、Ⅷ区、ⅩⅡ区西側、ⅩⅢ区に相当する。この一帯の遺構の時期はほとんどが天城式の時期である。

いま一つは、丘陵の南緩斜面に散漫に分布する。調査区ではⅣ区、Ⅴ区に相当する。時期は御領式の時期である。三つ目は、三万田式から鳥井原式にかけての時期であるが、明確な分布領域をなさずⅧ区とⅩ区に遺構が点在する。以上から判断して、第一の分布領域が天城式の時期に集落の中心であったと思われ、御領式の時期よりやや集落が北遷しつつ規模が拡大したとみられる。

住居跡と埋甕の関係をみると、天城式の時期に相当する第一の分布領域では、住居跡と埋甕は近接した位置に立地するといえよう。Ⅳ区では両者が至近距離から出土しているが時期が異なり両者の関係を判断するには到らない。

２、土器の編年

大久保遺跡からは、縄文後期から晩期に到る各種の土器が出土したが、大半は天城式であり、この時期が本遺跡の全盛期といえよう。

以下各型式の土器の消長を辿ろう。

Ⅰ期

西平式に相当する。１点のみの出土である。口縁部を欠くが類例では波状口縁である。小型の深鉢の資料であり、胴部には横位の沈線に小さい有抉円文を重ねる。この型式と遺構の関係は不明である。

Ⅱ期

太郎迫式に相当する。擦消縄文を有する土器で、小破片が数点出土する。802号住居跡出土の遺物がその共伴する遺物である。小破片が数点出土する。浅鉢を３類、深鉢１類で構成する。

浅鉢Ａ類は２種あり、29-1は、口縁端部が外傾した切出状の断面を呈し、沈線を有する頚部に括れのない浅鉢、29-4は、ミニチュア土器で、口縁に沈線を有する。

浅鉢Ｇ類は碗形をなす。一見、素口縁の碗形土器であるが、胴部内面にわずかに稜線をなし口縁端面に弱い沈線を有する。

深鉢Ｃ類は、胴部が丸みをなして張り出し、肩部には平行沈線にＸ字形の沈線文を重ねる。口縁部は内傾し擦消縄文を有する波状口縁をなす。

Ⅲ期

三万田式に相当する。浅鉢が３類、深鉢１類、高杯形土器、注口土器で構成する。

浅鉢Ａ類は、頚部に括れのない浅鉢であり、口縁部は外反して開く。口縁部には凹線に羽状文を重ねる。浅鉢Ｂ類は、同じく頚部に括れのない浅鉢であ

るが口縁部が発達しやや長い。

浅鉢C類は、頚部に括れを有する浅鉢である。口縁のあり方は、水平口縁と、波状口縁の名残を残す山形口縁がある。口縁端部は外弯ぎみに開き、先端はとがる。

深鉢B類は、頚部に括れがなく尖底ぎみの胴部をなす。口縁部は外弯して開き先端が尖り、凹線を巡らす。胴部には羽状文をあしらう。

深鉢C類は、胴部はやや丸みがあり頚部の高い位置で深くくびれ、口縁部は強く内傾し凹線を巡らす。

深鉢D類は、C類に似るが著しく寸詰まりの器形である。胴部の最大径での屈曲は深く折れ込む。

深鉢E類は、同じくC類に似るが、口縁部が外反して開き先端が尖る。

深鉢G類は、口縁部にほとんど文様帯がなく、胴部の最大径部位は明瞭な稜線をなして屈曲する。

Ⅳ期

鳥井原式に相当する。浅鉢が3類、深鉢が4類、注口土器で構成される。

浅鉢A類は、頚部に括れのない浅鉢である。口縁部は、外弯ぎみに開き先端が尖るものと、先端に丸みのあるものがある。口縁部には凹線を巡らす。

浅鉢D類は、頚部に括れを有する浅鉢で、口縁部は、外弯ぎみに開き先端が尖り凹線を巡らす。

浅鉢F類は、頚部に括れを有し、口縁部に文様帯のない小型の浅鉢である。頚部の高位にて外弯して開き、先端は尖る。

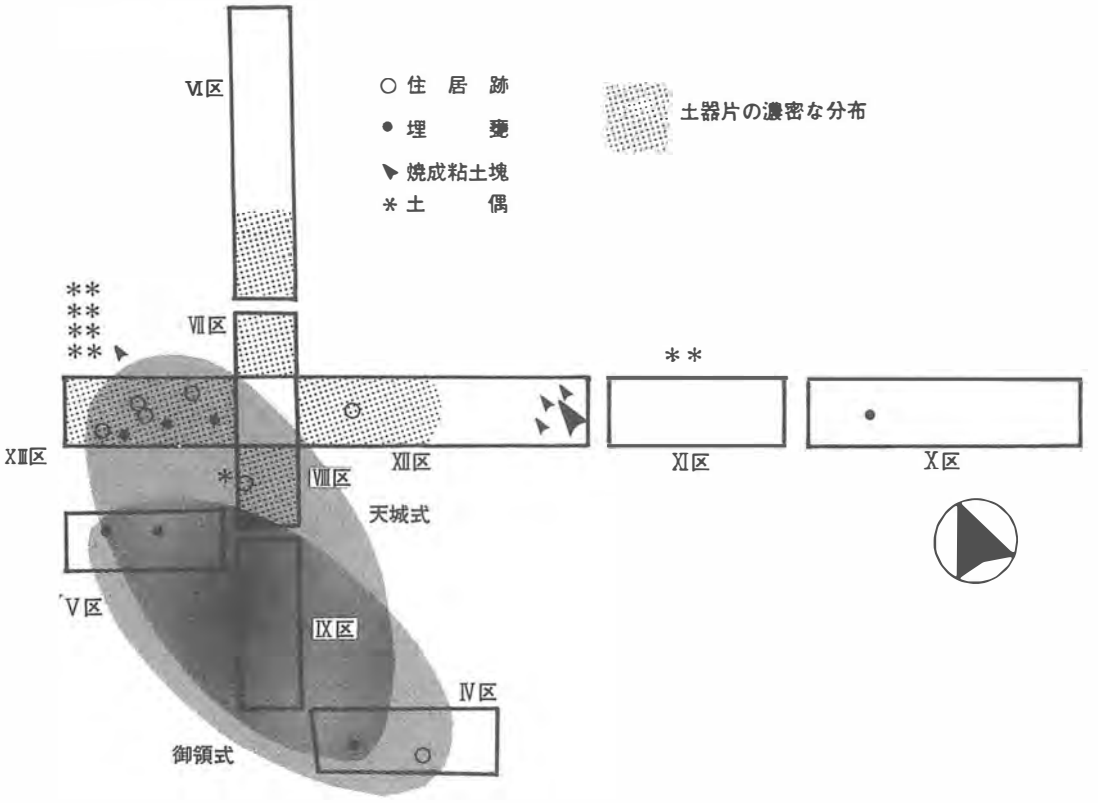
Ⅴ期

御領式に相当する。浅鉢4種、深鉢4種で構成する。

浅鉢E類は、頚部に括れを有し、口縁部はやや外反する。

浅鉢F類は、頚部の高位でわずかに括れたあと外反して開き、そのまま口縁部をなす。文様帯はなく口縁部の先端は尖る。器形は碗形に近い。

浅鉢G類は、碗形の浅鉢である。2種あり、器高の高いものと、低く口縁端部にごくわずかな沈線を巡らし退化した頚部の括れを残すものがある。



第162図　縄文時代の遺構・遺物分布関係図

浅鉢Ｈ類は、異形の碗形の浅鉢である。分厚く張り出した底部を有し、これの側縁には沈線が巡る。平面形態は楕円形であるが、民俗事例で知られている木目方向が長く刳り込まれた楕円形の木器に器形の起源があるとみられる。

深鉢Ｃ類は、口縁部に文様帯のある深鉢である。胴部の最大径部位では鋭く「く」の字に屈曲し、頚部の括れは深いが、括れの位置はⅣ期のものより幾分低い。文様は、磨き込まれた沈線で形成され、むしろ沈線部分をブランクとし沈線間を浮彫状に陽線化して強調し文様表現としたと見受けられるものもある。

深鉢Ｄ類は、胴部が寸詰まりの器形で、胴部の最大径部位は、丸みを呈しつつ深く「く」の字に屈曲する。

深鉢Ｅ類は、胴部の最大径部位は不明瞭な稜線で屈曲する。口縁部はわずかに外反ぎみに直立し、端部は尖る。

深鉢Ｆ類は、口縁部に文様帯を有するが文様の乏しい深鉢である。沈線表現を欠くもの、あるいは沈線の描線が浅いものや途切れがちのもの、また文様帯の幅が短いものなど、器種にはいくつかのバラエティがあるが概して文様に重きを置かない類である。

Ⅵ期

天城式の一部に相当する。天城式の住居跡では切り合いがみられ、この内1304号住居跡の土器の一部には共通する特徴があるため同住居跡の土器群をⅥ期として区別した。浅鉢、深鉢に各１類で構成する。

浅鉢Ｅ類は、Ⅵ-2の同類と比べ胴部の最大径部位が深く折れ、頚部の括れも明瞭である。

深鉢Ｃ類は、口縁部の文様帯がいずれも直立し、尖り気味であることがⅥ-2と区別される属性である。

Ⅶ期

天城式の一部である。本遺跡出土の土器の大半を占める。浅鉢が７類、深鉢が５類で構成する。

浅鉢Ａ類　頚部の括れのない浅鉢である。鳥井原式に盛行した器形であるが、個体数は殆ど見当たらずⅦ期のものは小型で胴部が極わずかにＳ字状のカーブをなしつつ立ち上がる。

浅鉢Ｄ類　頚部の括れを有する浅鉢で、口縁部が大きく外反し先端が尖る。個体数は少ない。

浅鉢Ｅ類　頚部の括れを有する浅鉢で、口縁部は直立ないしはわずかに外反し、浅鉢では最も個体数が多く天城式を代表する浅鉢である。

浅鉢Ｅ類　口縁部に文様帯のない浅鉢である。概して小型であり、さらに細分化しうるほどヴァリュエーションに富む。頚部の中程で弱く外弯する。

浅鉢Ｆ類　碗形の浅鉢である。Ｅ類と同様にさらに細分化も可能であるが、取り敢えず器高が高いものと浅いものに分類できる。

浅鉢Ｉ類　捏鉢形の浅鉢である。浅鉢Ｆ類にも似た器形があるが遙かに大型であり、調整も粗い。

浅鉢Ｉ類　碗形の大型浅鉢である。体部は直立ぎみに立ち上がり口縁部は内傾しつつ先端は尖る。外面には沈線で木葉文を描く滋賀里式の特徴を有する土器である。

深鉢Ｃ類　胴部の最大径での屈曲は角度が鈍くなる。稜線が不明瞭になり丸みを帯びるものもある。頚部の括れも浅くなり全体の器形は寸胴化する。口縁部は直立ないしやや内傾する。器面調整が粗くなることはこの時期の各類の深鉢に共通して顕著になる。また深鉢の大型化もこの時期の特徴である。

深鉢Ｄ類　胴部の最大径部位での屈曲が深く、胴部が短い器形である。口縁部に文様帯を有するものと無いものに細分できる。

深鉢Ｆ類　胴部の最大径部位で丸みをなして屈曲し、口縁部がやや内弯ぎみである。口縁部は無文である。

深鉢Ｇ類　口縁部に文様帯のない深鉢である。深鉢Ｃ類と口縁部以外の器形は同じである。

深鉢Ｈ類　口縁部に文様帯のない深鉢であるが深鉢Ｇ類とは著しく器形が異なる。胴部は丸みを呈しつつ立ち上がり、最大径部位での屈曲は殆どなく頚部に移行する。頚部の括れはわずかである。器面は粗く条痕を全面に残す。

Ⅷ期

古閑式か黒川式に相当する。浅鉢が若干出土した

が、この時期の深鉢については不明である。

Ⅸ期

突帯文を有する土器である。深鉢片２点のみである。口縁端部に刻み目があり、口縁近くの外面に刻み目を有する突帯が巡る。器面は荒い条痕を残す。

３、器形の変遷

次いで各器種を時系列を追って変遷をみると次の通りである。

浅鉢Ａ類

頚部の括れのない浅鉢である。この類はⅡ期から出現し、最も盛行するⅣ期であるが、この直後に急速に衰退し、頚部の括れる浅鉢Ｄ類に浅鉢の主流の座を譲るが、Ⅶ期にも小型化して存続する。

Ⅱ期のものは口縁部の文様帯が未発達で、切出状に外傾した口縁端の外面を文様帯としている。Ⅲ期では、始めて文様が凹線になり、この期に特徴的な羽状文を有する。Ⅳ期は、この類の典型であり、口縁部は外弯して先端は尖り文様帯には力感のある凹線を巡らす。その後、空白を置きⅦ期には再び現れるが小型化し、またこの頃に盛行する浅鉢Ｄ類の影響を受け、文様が凹線から沈線に変わり、胴部には微妙にＳ字状の曲線が窺われる。

浅鉢Ｂ類

Ⅱ期にのみ現れる。同期の浅鉢Ａ類の器形との違いは無文である。浅鉢Ａ類の文様帯の発達にあたかも取り残されるように次期以降は系譜を絶つ。

浅鉢Ｃ類

Ⅲ期にのみ現れる。同期の浅鉢Ａ類の変異型というべき器形であるが、器高全体に対し口縁部の文様帯が大きく発達する特徴があり、未だ兆候を成さざるとはいえ、頚部の括れを有する浅鉢へ移行する下地を形成するものとして把握される。

浅鉢Ｄ類

Ⅲ期に現れる。頚部に弱い括れを有する器形である。口縁部をみると、Ⅳ期の浅鉢Ａ類にみられる外弯して先端が尖る口縁部の在り方と共通するものがある。Ⅳ期には、頚部および口縁部が発達し、また頚部の括れが一層強調されるが、同期から衰退し始め、親縁性を有するゆえに本格的な頚部が括れる器種である浅鉢Ｅ類に吸収される。

Ⅶ期には、系譜を引くとみられるものが出現するが、浅鉢Ｅ類に著しく近く、口縁部が外反して尖ることで区別されるが、外弯して尖るこの類の典型期に見られた属性は失われる。

浅鉢Ｅ類

Ⅴ期に始まりⅦ期に盛行する浅鉢である。傾向として頚部の括れがⅤ期、Ⅵ期では強いが、Ⅶ期になると胴部の最大径での屈曲が弱まり、これに追随して頚部の括れも弱まる。

Ⅷ期には、頚部の括れが形骸化し、口縁部の屈曲も内面の沈線で代用するようになり、胴部と口縁部の境界は曖昧になる。

浅鉢Ｆ類

Ⅳ期からⅦ期にかけ現れるが変化に乏しい器種である。文様帯がなく頚部が括れる器種である。Ⅳ期では頚部の高位で括れやや強く外弯して口縁部を形成する。胴部は器高全体と比べ低い。Ⅴ期では前期より頚部の外弯が弱まる。Ⅶ期では、器種に多様化がみられる。前２期との違いは、器高全体に対し胴部が高くなる。また口縁部の外弯は弱く頚部の中央で生じ、著しいものでは殆ど素口縁に近い器形もみられる。

浅鉢Ｇ類

素口縁の浅鉢である。器種変化は前述の浅鉢Ｆ類より乏しい。器としての最低限をなす器形であるがゆえに本来各時期に存在する普遍的なものであろう。Ⅱ期のものはミニチュア土器である。内面に稜線を微かになし口縁端部はわずかに内に傾き尖る。Ⅶでは前述の浅鉢Ｆ類と同様に多様化の傾向をみせる。

浅鉢Ｈ類

特殊な器形の浅鉢である。編年の項で既述した通りである。Ⅴ期に現れ、この器種のシルエットをみると同期の深鉢Ｄ類にみられる胴部が低く寸詰まりの器形と共通性がある。

浅鉢Ｉ類

捏鉢形の浅鉢で、Ⅶ期に現れる。大型で調整は粗い。

浅鉢Ｊ類

木葉文を有する浅鉢であるが他の器種との系譜上の繋がりはなく外来系の土器である。

深鉢Ａ類

西平式の特徴を有する土器である。胴部の最大径部位が丸みを呈する点がⅡ期の浅鉢Ｄ類に類似するが、器形および文様構成に変異が大きいため独立した類とした。Ⅰ期に現れたのち系譜が途絶える。

深鉢Ｂ類

Ⅲ期にのみ現れる器種である。深鉢としては続く系譜を欠くが、浅鉢には頚部に括れのないものとしてⅣ期の浅鉢Ａ類に属性が引き継がれる。

深鉢Ｃ類

Ⅳ期以降に現れ、Ⅶ期には深鉢の主流として盛行する器種である。Ⅳ期のものは口縁部の内傾が著しく、凹線で文様を巡らすことが大きい特徴である。頚部の括れは強く、また胴部はやや脹らみつつ立ち上がり、器高と比べ最大径部位が広い。Ⅴ期では、文様が磨き込まれた沈線に変わる。胴部は直線状に立ち上がり、最大径部位は鋭く稜線をなし「く」の字に屈曲し、頚部の括れも深く、全体に洗練された器形である。以上の時期までは器面の磨きは丁寧である。

Ⅵ期以降は器面調整が粗くなり、沈線の数も不規則なものが増える。Ⅳ期とⅦ期では時期差が小さいためか大きい変化はないがⅥ期のものには頚部の括れの位置が高く、口縁部は直立する傾向が窺われる。出土数の多いⅦ期でみると、土器の大型化が目立ち、この器形が深鉢の主流の地位を獲得したことを示すとともに、一方では先に述べたように器形の完成度に翳りが現れる。

深鉢Ｄ類

この類の通性は胴部の最大径あたりが丸みを呈することであるが、時期を追うごとに丸みのこじんまりとし最後は単に胴部が寸詰まりを呈するだけになる。

Ⅱ期では、胴部の丸みは大きく、しかも文様帯があり、土器の自己表現すべき部位として重要な位置を占める。Ⅳ期以降は、胴部から文様が消える。口縁部は強く内傾し凹線を巡らす。胴部の丸みをなして折れ込み胴部は短く、頚部はやや強く括れる。Ⅶ期には、胴部の最大径部位の丸みが殆ど消え、胴部が器高全体に対し短い傾向のみ引き継がれる。

深鉢Ｅ類

口縁部はやや外反し端部が尖り、胴部の最大径部位は丸みがある器種である。Ⅳ期、Ⅴ期に現れる。口縁部の傾向は、Ⅲ期およびⅣ期の浅鉢に同じ属性がみられ、ここから選択的に系譜を引くものとみられる。

深鉢Ｆ類

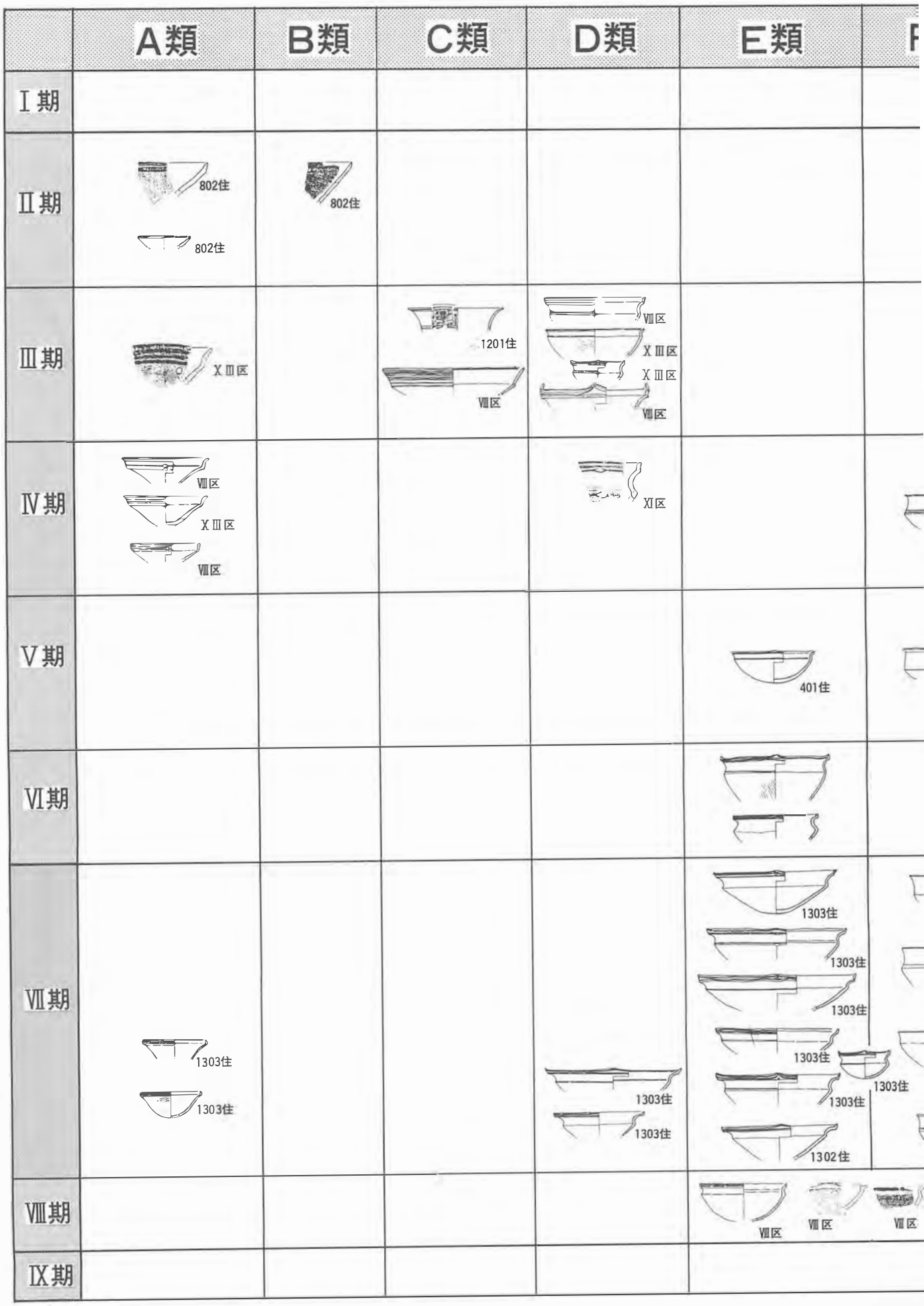
口縁部の文様帯を有しつつも文様が貧弱な類である。Ⅴ期、Ⅶ期にみられ、器形は多様であるが、深鉢の粗製化に伴って現れたものであろう。概して小型である。

深鉢Ｇ類

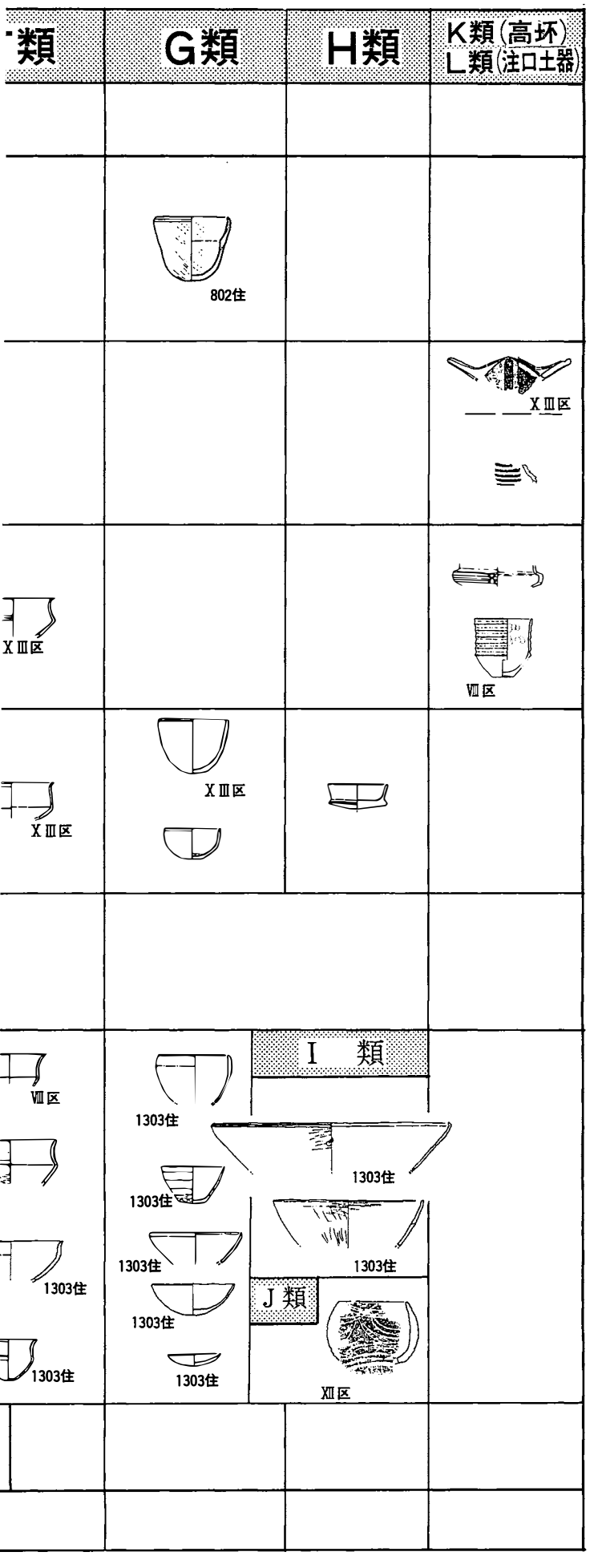
口縁部に文様帯のない深鉢である。深鉢Ｃ類とほとんど同型である。Ⅳ期に現れるが、口縁部の端面に文様らしき名残があり、この期には一気に文様を落とすことには躊躇いが窺われる。Ⅶ期には、先の深鉢Ｃ類がそうであるように大型化する。

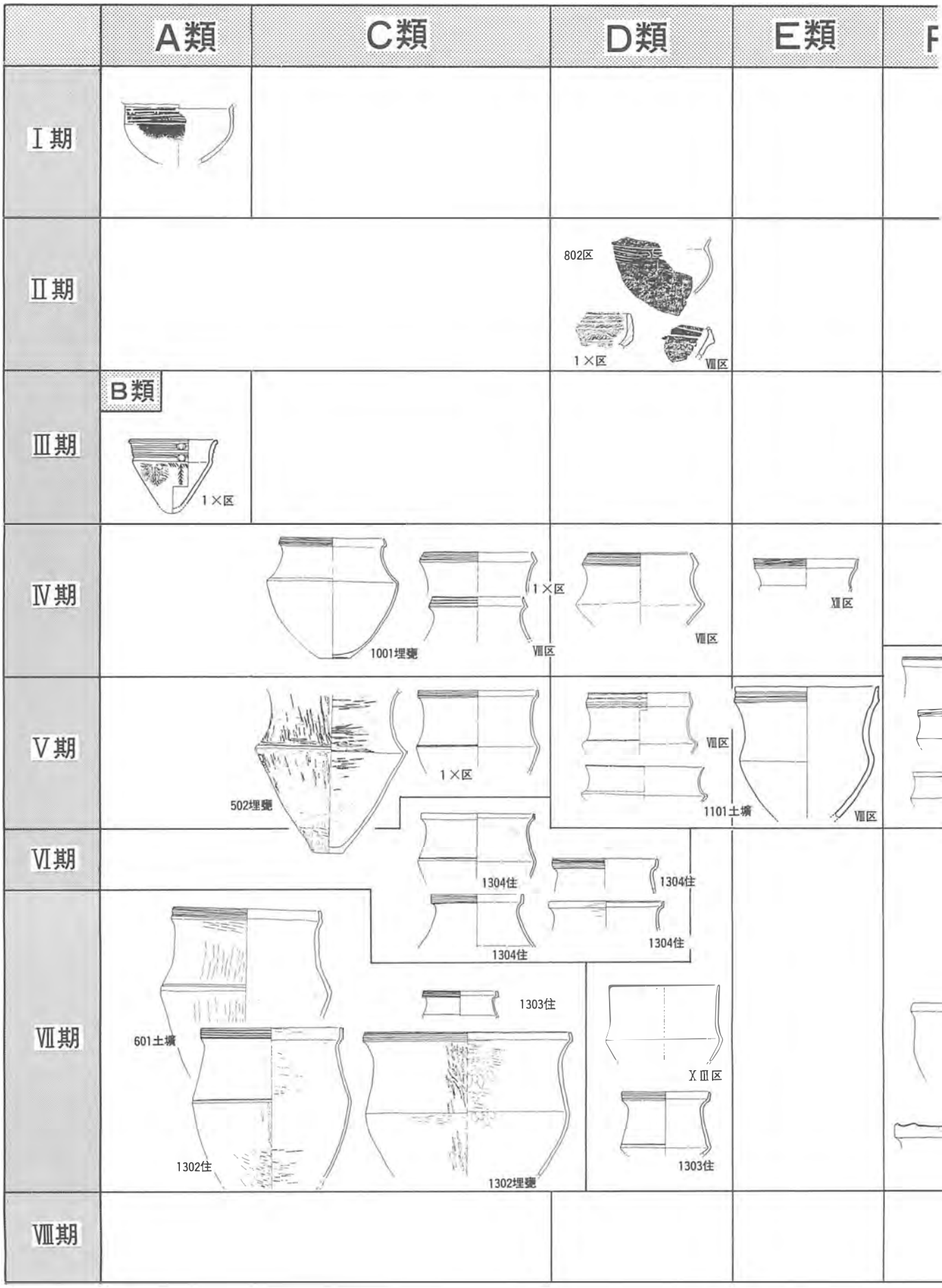
深鉢Ｈ類

Ⅶ期に現れる新しいタイプの口縁部に文様帯のな

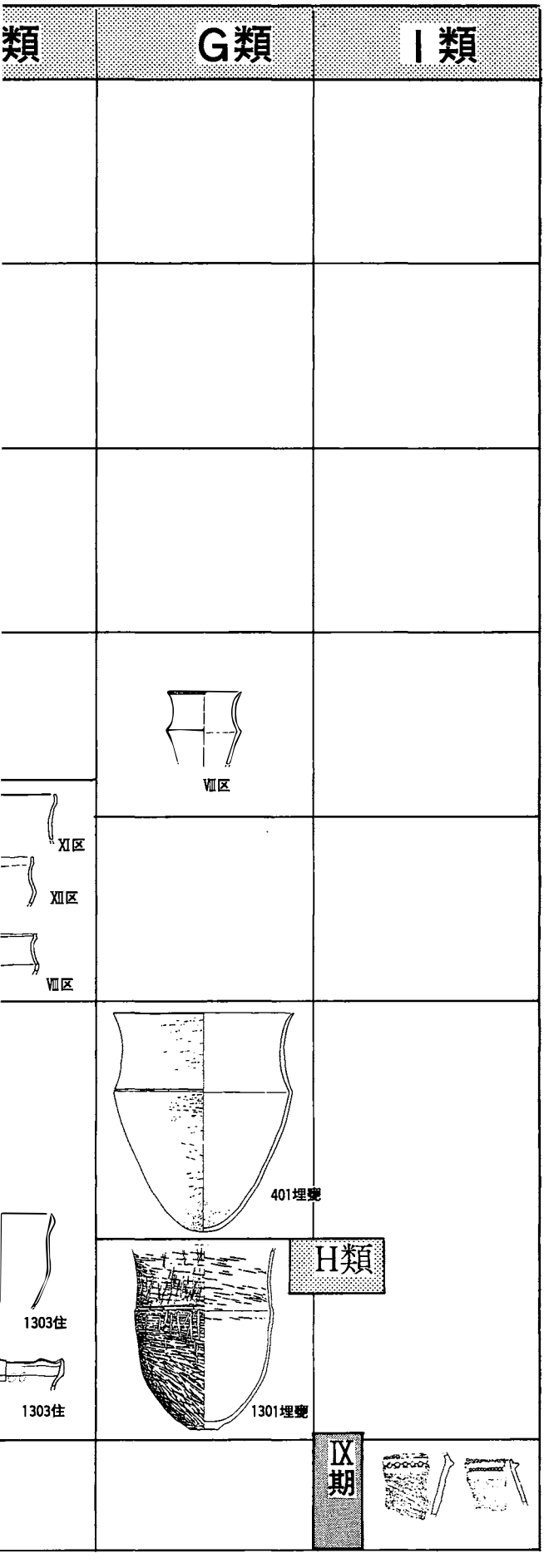


第163図　大久保遺跡出土土器編年表(浅鉢)


類
G類
H類
K類(高坏)
L類(注口土器)
802住
XⅢ区
XⅢ区
Ⅷ区
XⅢ区
XⅢ区
Ⅷ区
1303住
1303住
1303住
1303住
1303住
1303住
1303住
1303住
I 類
1303住
1303住
J類
XⅡ区



第164図　大久保遺跡出土土器編年表(深鉢)


類
G類
I類
Ⅷ区
Ⅺ区
Ⅻ区
Ⅶ区
401埋甕
H類
1303住
1303住
1301埋甕
Ⅸ期

い深鉢である。胴部の最大径部位の屈曲が乏しく、器面は著しい条痕を残す。

深鉢Ⅰ類

Ⅸ期に現れる器種で従来の縄文土器の伝統とは大きく姿を異にする。口縁端部と胴部に刻み目のある突帯を有する。器面には条痕を残す。

4、土偶、焼成粘土塊について

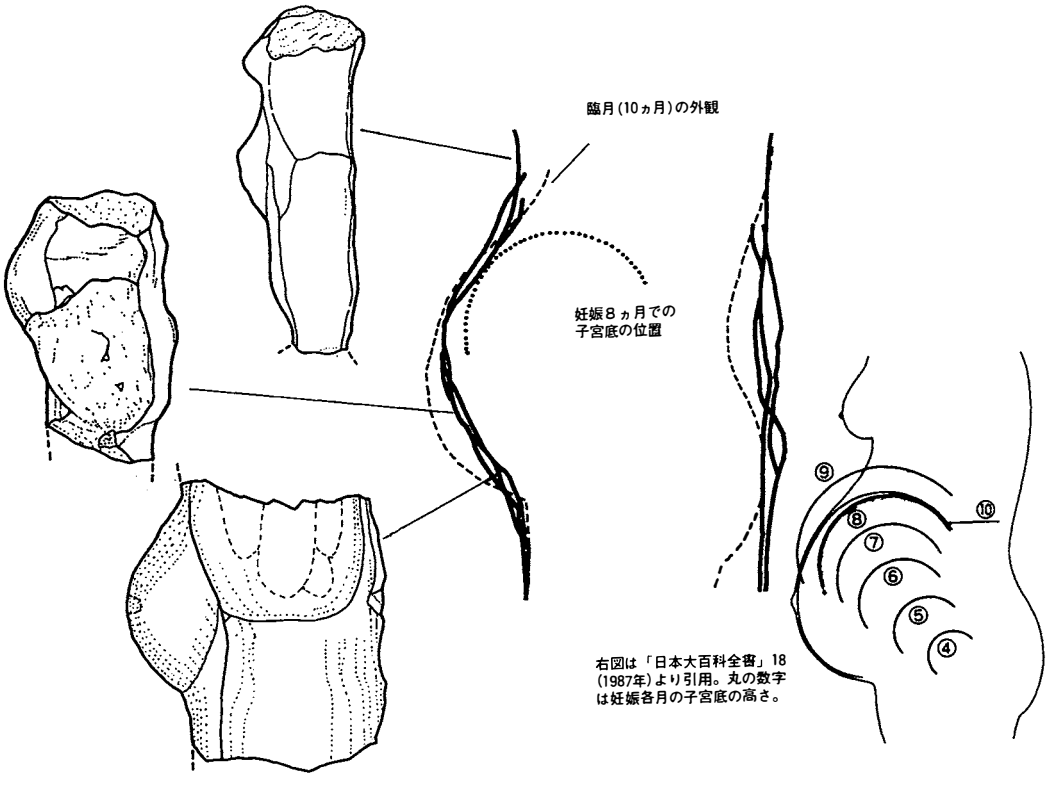
本遺跡からは、土偶を数多く出土した。いずれも完形ではなく、また接合可能な同一固体と思われるものはない。残存部位は、頭部、胸部、腹部、腕部、脚部であり、このほか腕を具す胸部、頭部のみ欠失するものがあるが脚部が最も多い。また頭部を遺存する胴部は無く、頭部は必須の切断部位の可能性が考えられる。

時期については、1303号住居跡、1304号住居跡の埋土から出土した土偶は、住居跡の時期と同様の天城式の時期であろう。本遺跡の土器の時期の大半が天城式の段階であることから類推して土偶の時期も多くは天城式の段階と考えられるが、羽状文を有するものは若干古く位置づけられよう。

出土地点の判明している土偶の分布はⅩⅢ区にほとんど集中し、他はわずかにⅩⅠ区に2点、Ⅷ区に1点出土している。かくして土偶の分布は、住居跡群の中心部とした地点と全く重なり、集落の周縁部に棄損して投棄されるとする従来の土偶観とは趣を異にする。

焼成粘土塊は、土器製作工程で素材である未成形の生地粘土が廃棄されたあと、偶然、火中に入り焼成されたため水分による溶解を免れ遺存したものであるが、焼成粘土塊は、出土する集落と、出土しない集落があり、これは集落内での土器製作の有無を反映するものとされる。かかる所説にしたがえば、この集落が土器製作をする集落であることになる。

ⅩⅡ区の西端とⅩⅢ区の西端に集中するが、前者は大型の粘土塊であり、後者は小さいものである。焼成粘土塊の分布は、土偶の分布と際立った相違がみられる。土偶が住居跡群の内奥からの出土であるのに対し、大型の粘土塊の出土したⅩⅡ区の西端は、土器片の出土密度が薄く、住居跡の集中地点から遠



第165図　土偶腹部の子宮底位置比較図

く、集落の周縁部というべき地点である。これは火を用いる土器焼成地を遠ざけ火災を避けるための立地であろう。

土偶に論を戻そう。土偶について従来からの知見によると、土偶の出土する遺跡は、焼成粘土塊と同様に拠点的な集落であり、しかも特定の拠点的な集落に限定して出土するとされる。また多くの土偶は妊娠状態の姿を表現し、出産儀礼に関わる遺物であるとされ、その出土が、損壊し分散廃棄されることを巡ってその呪的意義の解釈がなされてきた。ここでは後にみるように、土偶が特定の妊娠月齢を表現していることに着目し、制作時における土偶の意義もまた検討課題であることを提起し、さらにこの視角から新しい縄文社会像の可能性探るものである。

土偶の制作は、土器制作と無関係な季節に制作されたとは考え憎い。というのは土器制作の季節にのみ準備される、土器用の熟成した生地粘土の存在が前提であるからである。また土偶の胎土および調整の有り方を観察すると、器形の相異にもかかわらず、土器のそれと共通しており、両者の制作は密接不可分であるとみられる。

では何故に土器制作と同じ季節に土偶が作られたのかが問題である。これは順当な解釈として土器制作の季節が、当時の人々が土偶を必要とした季節、つまり後述する妊娠末期と重なっていたとすべきである。多くの民俗事例が示すように土器制作は女性の仕事であるが、土器と同じ季節に同じ素材と技法を用いる土偶の制作もまた女性であると解するのが自然であり、この中には妊婦が含まれ、この結果として土偶制作があり得たと考えられる。

さて本遺跡出土の土偶のうち腹部を遺存する4点あり、うち3点は明白な妊娠状態を呈し、他1点は腹部に窪みの表現があり出産後とみられる。妊娠状態を呈する個体の側面観を検討し、今日の妊娠曲線と比較すると（第164図）、土偶の形態と大きさは異なるもねれば、妊婦たちは副次的に土器制作に加わったとするより、むしろ妊婦の主たる労働として編成することに重要な意味があり、かかる過程で土偶も作られたとみたい。

土偶は成形後、火中で焼成して初めて完成品となるものである。これを火の試練を経て初めて生命力を獲得する類感呪術行為であると解するならば、妊婦が土器制作に携わることも同じく火を媒介とした通過儀礼としての機能を想定させるものである。さらには妊娠＝豊穣として、妊婦の制作した土器に豊穣の付与を期待したともいえよう。土器制作という生活手段の制作が、同時に呪術的行為と複合し未分化であることの反映が、縄文土器にみられる複雑な呪術的文様であろう。

神話や民俗事例には、出産と火の親縁性を語るものは少なくない。火は文化の創造者である一方で、制御しがたい自然力であるという両義的な性格を有するものである。しかるに両者の親縁性は変容ないし価値転倒を被りがちである。神話では、火の神である迦具土神を産み死に到る伊邪那美神、木花之佐久夜姫の火中出産、民俗事例では出産前後に別火を鑽り出す例、現代の習俗でも妊娠中に火事を目撃することや丙午の禁忌は根強く残っている。これらは出産に関わる火の儀礼の名残であろう。

勿論、ひとつの集落に自然な人口構成で妊婦がとくに集中することはありえないから土偶、焼成粘土塊を出土しないムラー即ち周辺の小集落からの拠点集落への季節的な人口移動とみられ、かかる特定の拠点集落は、出産のためのムラであり、また土器制作のムラであり、総じて女のムラといえよう。

妊娠8カ月で晩秋の土器制作に2カ月従事したあと出産したとすれば、これより10カ月逆算される受胎は概ね早春から春の彼岸あたりに相当する。卑近な例であるが、今日の暦でもこの時期に聖バレンタインの日（この日から小鳥が交尾を開始するといわれる）を制定していることからも頷かれることである。後世の古代の歌垣、若菜摘みはこのシーズンの求婚習俗の名残に相当しよう。

出産時期の限定に対して次のような疑念がありうるだろう。まず出産時期を冬季におくことは生理的な条件に適正かという問題、次いで出産日の斉一性の問題である。

出産を冬に配当することは、全面的に自然な生理的適正に一致しているとはいえない。当時の気温は現在より寒冷であり、冬季の生存条件は厳しかった

と思われるが、一方では、前近代社会での乳幼児の死亡が、夏の疫病であったことを考えると必ずしも冬が不利とは限らない一面もある。しかし出産期を冬としたことは生理的な選択であるよりも社会的要請とみられる。むしろこの季節が生産的労働から解放され、消費のみの季節であるからこそ次世代の生命の「生産」の季節に充てられたとしたい。勿論そのためには前提として恋の季節は早春に設定されざるを得ない。

また出産時期の斉一性は、一つの生存戦略であろう。年間の生産活動が自然のサイクルに適応して厳しく律せられているなかで、集団の各成員にかなりの負担を強いる妊娠と出産がひとり恣意性に委ねられたとは考えらず、厳格なタブーと強力による淘汰が存在したであろう。一方、出産時期の斉一性は、保育管理の上で合理的であり、最小の負担でより多数の生存を保障したであろう。

出産時期の季節的限定と斉一は、自然の全き被制約下にある動物の世界では、交尾期の結果として普遍的に存在し、自然と未分化であったころの人類の行動様式にもあり得たであろうが、時を隔てる縄文時代の出産時期の季節的限定と斉一は、社会的要因が本源的であろう。土器制作の時期が出産時期を規定し、さらにこの結果として受胎する時期にも規定が遡及したものである。

自然状態の交尾期に遠い起源をなすとしても、土器制作という生業が受胎時期に規定を加えたのであり、外観は交尾期に似るが生物学的な起源とは別個とみるべきである。

次いで縄文時代のいつの時期から出産時期の季節的限定と斉一が始まったかを推定したい。そもそも出産時期を土器制作が規定したのは、土器制作の時期に季節性が要求されるようになってから以後とおおまかにいえよう。これは結論から先に言えば、土器生産に質的・量的画期が現れる縄文後期後半以後である。より精緻な黒色磨研土器の制作のための計画的な生地粘土の養生管理の重視、拠点集落の成立と、その特定の集落が土器制作のムラとして土器の大量生産がされるようになった縄文後期後半以後の社会情勢に対応するものといえよう。

最後に、土偶の出土数が「少ない」理由を問いたい。本遺跡が多数の土偶を出土した遺跡として知られていることは事実である。しかし何と比較した数字であろうか。土器の数量と比較すれば遥かに少ない数である。世の「多数の土偶を出土した遺跡」とされるものの場合でもしかりである。土偶の数の「多さ」は眩惑された主観的な数であり、冷静に土器の数量と比べれば、どれほど少ないかにむしろ問われるべき真実が蔵されているのである。日用品である土器と、ハレの遺物には数量に格差があるのは当然のこととしてもあまりに少数である。

もし妊娠の度に土偶の儀礼があるとしたら、土偶の総数＝全女性人口×妊娠回数になり、その数は膨大になるはずである。しかし実際はどれほど多く出土した遺跡でもさして知れた数である。土偶とは、もともと数が少ない遺物である。そしてその理由はただ一つ、土偶を用いる儀礼は個々人の資格で受けるべき儀礼ではなく、毎年、集団全体あるいは年齢集団など一定規模の集団で、同時期に実施されたと説明されよう。これは出産の斉一性の一つの傍証であろう。

5、埋甕について

本遺跡での住居跡と埋甕の近接した立地は、出産のための女のムラなればこそ理解しうる事象である。出産もあれば当然死産もありうる。埋甕の意義は、乳児の埋葬施設に求めるにせよ胞衣埋納施設とするにせよ、埋甕が作られた季節は、女性が拠点集落に滞在している冬場の出産シーズンとほぼ重なる時期に求めるべきであろう。

埋甕のあり方は、縄文時代の死の認識を仄かに知ることができる。すでに述べてきたように、土器制作は妊婦を含む女性の手により、しかも妊娠末期に重なる時期に集中して制作されることは、土器を女性を表徴する媒体としての観念を容易に想起せしめ、死児の埋葬施設としての埋甕とはまさに胎内に相応しいものである。

出産および受胎期が社会的に制御－季節的限定と斉一がなされた社会では、当然の如く、次のような

季節観と照応した生命観を生み出す。

早春の受胎時期から初冬の出産時期までを生命の季節とし、出産時期から翌早春の受胎時期までの短い期間が厳冬の生命力の籠もりの季節として截然と認識される。後者の時期は、新生児には人生最初の試練の時期であり、生まれ得なかった子供にとっては、死の状態として早春までの短い期間を土中で過ごす時期である。埋甕とは、厳冬の短期間、ごく一時的に霊魂が滞留し、ほどなく再生するための装置である。ここでは死は永久のものではなく、生命の籠もれる状態、即ち潜勢力としての生命力あるいは仮死状態である。早春の受胎時期のころには萌え出る春の若菜なみに再び生命は顕現するとされる。

埋甕は、かかる生命観を反映した葬制である。埋甕に供された土器は、日用品である深鉢形土器を転用しており、しかも土器の表面にカーボンの付着が観察される、使用された土器であり、後世の甕棺にみられるような特別なものを用いていないことは、埋甕が居住空間からほとんど隔たっていないことと併せて、当時の人々が死を一過性の短いプロセスとして理解していたことの反映であろう。

6、まとめ

本遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての時期、具体的な土器型式では、御領式と天城式が主体であるが、西平式に始まり、太郎迫式、三万田式、鳥井原式、御領式、天城式、古閑式、黒川式、突帯文土器に到るまで連綿と絶えることなく各時期の土器が出土しており、このことは本遺跡が定住性が高く、長期間にわたり拠点的な地位を維持した集落であることを示している。

では何故に定住性を維持しえたかであるが、石器の器種組成にひとつの解決を読み取ることができる。

すでに石器の項目で記したように、石器の器種組成においては、膨大な量の磨石が示すように植物食に依存する生業であることが分かる。

また狩猟に関わる石器である石鏃、石匙に対し、栽培に関わる石器とされる打製石斧、打製石鎌がはるかに凌駕することからみて、本遺跡の生業が、たんに植物食に依存のみならず栽培に重きを置いていたことが定住性を保障したものであろう。

また黒燿石剝片の産地比は興味ある事実を示している。黒燿石剝片は、漆黒の佐賀県腰岳産のものと、白濁色の大分県姫島産のものの2種であったが、ほとんどが前者であった。これの意味するところは東からの文化交流に対し、西からのそれの優位を示すものであろう。このことは、一方で土偶に代表される栽培経済に対応した社会システムを東から受け入れつつ、他方では、後の稲作文化を受容する情報ルートを掃き清めている姿を見て取ることができる。

7、ひとつの縄文社会試論

ここで土偶という一遺物からの分析からであるが、この視角から後期後半以後の縄文社会の可能な限りの復原を試みた。

もとより縄文集落のごく一部の調査であり、しかも土偶という限られた遺物からの分析による当時の社会の復原であり無謀な試みとの批判は甘受するものである。

すでに見てきたとおり、土偶の有り方から垣間見ると後期以降の縄文社会にはそれ以前の縄文社会とは異なる社会システムを読み取ることができる。

縄文時代は、自然の季節性サイクルに生業が組み込まれ、エコロジカルに適応した社会とされている。ところが土偶から分析される後期後半以後の縄文社会像は、人間の生産活動の側からの強いイニシアティブのもとで、本来自然の摂理である出産、受胎までが規制が及び、年間の生業サイクルに従属している姿である。環境への適応と依存による縄文社会の枠組みを維持しつつも、自然の摂理にまで介入し、年間生業の労働配分のより緻密化により、いわば効率化を志向するものである。

しかし、自然の摂理に反する、擬制された交尾期、出産期の季節的規制と、その斉一性を全成員に求めるにはタブーだけでは不十分であり、そこには強いリーダーシップを予想させ、近年提唱された縄文時代に階層化社会があったとする論は魅力的である。

縄文階層化社会論は、その前提として、豊かな縄

文社会を発見し、既成の縄文社会像の変更を提起している。豊かさの由来については主に2説あり、ひとつは、食糧貯蔵と定住を重視するものであるが、この説は、富の発生が階級を発生するという唯物史観のシェーマを縄文社会に拡張し適用する試みである。また、いま一つは、通年的に安定した食糧資源の存在する生態的条件のもとでは、特殊化した狩猟が生業分化し社会的なプレステージを獲得し階層化するとする説である。

土偶の分析より得られた新たな視点に立って、両説の富の源泉と階層化の由来を検討した。

階層化を基礎づけている富の源泉として、前説は、保存性食糧資源あるいは保存技術の開発が想定されている。しかし収穫の不安定性を補うことに目的があり、水田稲作に比肩するような、投入した労働に比例した安定した獲得を保障するものではない。縄文時代の人口推計の大きな変動は、収穫の不安定性をかかる資源や技術がよく克服し得なかったことを物語るものである。

一方、後説は、良好な生態的条件が前提であり、階層化はよほどの特殊な立地で生じる現象ということになる。また豊かな資源が通年的に安定して獲得できるということは、直ちに人口増加に繋がり、資源と人口は均衡し、生業分化の前提である余剰を消失するものではなかろうか。

富の由来と階層化の成因について、両説から多くを得るものであるが、本論では次の可能性を提示しておきたい。

階層化の基礎となる豊かさは、縄文時代を通じてエコロジカルな適応が開発し尽くされており、さらに生産の不安定性を克服するための、残るフロンティアは、モノよりもむしろ人的資源の有効利用である。人が唯一ほぼ完全に制御しうる自然性は、自己の出産期の規制であり、これによる効率的かつ計画的な資源利用が、生産性の向上に寄与したものと思われる。かかる規制は、当初から富の増大を目的にしたものではなく、縄文後期からの寒冷化に直面した危機戦略としての社会の高度化の過程で結果として派生したものであろう。

次いで階層化の成因については、先に紹介した生業分化が階層化をもたらすとする説が、特殊化した狩猟が少数の上層をまず析出するとするのに対し、ここでは、むしろ均質な社会からの脱落者が層をなすことにより階層化を形成したことを次のように提示したい。

出産期の規制は、当然にもその少数の逸脱者の発生を避けがたいものである。逸脱した出生は悪苗として間引きされ、かかるタブーを侵犯した原因者は集落からの追放であろう。社会の紐帯からの切断であり、この「楽園追放」もまた事実上の生存の否定、すなわち間引きによる秩序の回復である。この間引きの実践は、まさに半栽培技術の人間への応用といえよう。

ところでタブーの強化が進むにつれ、逸脱者の発生が半ば一般化し、間引きによる対応が困難とする。新たな対応は、社会内での「追放」つまり、言葉として最適ではないが賤民層が形成される。さらに安定した社会層として定着すると、特定の生業を分担する。たとえば高度な技術の工芸品は、専業化した生業に生じがちな習熟と生産性の成果であろう。逸脱者の抹殺から、馴致ないし育成への転換であり、人間に応用した半栽培から栽培への転換に相当しよう。

縄文式階層化社会論は、縄文時代の高揚期に、高度な文化を支えた担い手として奴隷(！)の存在の可能性に言及しているが、これについても新たな視点から検討を加えたい。

結論から言えば、奴隷の存在は否定されるべきである。また奴隷の成因を十分に説明しえていない。奴隷獲得のための対外戦争が考えられない以上、奴隷の発生は、当該社会から内在的に説明が要求される。もとよりここで述べる奴隷とは、古代社会におけるような労働力としての階級ではなく、供犠の対象となる人格である。先に社会内での追放者層を賤民層の本体としたが、重ねて定義すれば、賤民層とは、犠牲を供出する階層である、といえよう。

何故なら本来、間引きにより排除されるべき対象から発生し、特定の社会的に必須の職能を分担するとはいえ、間引きを繰り延べられている忌むべき集団としての本源的規定を賤民層は内包しており、自

らの社会の起源を説明する祭儀に際しては、供犠を求められ、反復再現し、定義を社会的に再確認される階層といえよう。犠牲は、いわば賤民層の職能のひとつである。祭儀に供する高度な工芸品の制作も賤民層の職能であるが、こうした品じなも祭儀において蕩尽されることでは犠牲と同様である。

賤民層のさらに下位に独自の社会層として奴隷が存在したのではなく、儀礼において賤民層から白羽の矢が当たった犠牲者があたかも奴隷として現象するにすぎず、階級化を意味する高度のヒエラルキー構造は生じていないとみたい。

ここで縄文社会には階級は存在しない、とする定説と階層の意義を検討しなければならない。

縄文式階層化社会論は、考古学的事実から縄文時代にかなりの社会的格差があり、ここから階層差の存在を想定しているが、階級については触れていない。にもかかわらず、奴隷さえ存在するとしつつ階級の存在を否定することは矛盾であるから、後ろ向きに事実上；階層の語に仮託して階級の存在を肯定する立場といえよう。

本論では前述のように、奴隷と見えるものは均質社会から脱落した賤民層の一つの姿として奴隷の存在を否定し、また階級の存在も認めるものではないが、縄文式階層化社会論の功績は、縄文社会を無階級社会とする定説がもたらすスタティックな社会像に対し、考古学的事実から類推する覆うべくもない明確な社会的格差を直視したことである。階級と階層の混同は、用語の混乱である以上に、階級差と見紛がうほどの社会的格差という事実があるからである。

所有の有り方が規定する取得の格差を階級差とするならば、かかる事実を縄文社会には未だ見出すことは困難である。しかし無階級社会という前提に矛盾を来すほどの歴然とした階層差が存在する意義について次のように結論付けたい。

無階級社会つまり均質社会を転覆する異質な要素として階層化は生じたのでなく、むしろ縄文社会の基本的な有り方である無階級社会の維持するための安全弁として階層は存在したといえよう。既述のように、後期後半以後の縄文社会は、環境の寒冷化に直面して生存戦略として社会の再編成を遂げた。その一つが出産への統制並びにタブーの強化である。これは均質性の徹底であるが、必然的に伴う逸脱者排除の合理化から賤民層を形成される。タブーの侵犯がもたらす社会の動揺を吸収するのが階層の役割であり、階層は社会の均質性の必要条件である。

均質性を徹底した結果、社会に階層が生じ均質性が破られるという危うい二律背反を来しているのだが、階層化が、結果として生業分化と分業化を促進し、後の高度な水田稲作＝階級社会の萌芽を受容する条件を準備したといえよう。

社会を規制したタブーは、階層化の進行で破綻し効力を喪失すると、縄文社会の基礎単位である拠点集落は動揺し、縄文的な生業と社会編制は放棄され、別の寒冷期適応戦略として弥生社会に移行したのである。

第Ⅳ章　平安時代の遺構と遺物について

掘立柱建物が数棟検出され、概ね四至に主軸を重ねるが、調査区が狭長で分散していることから、当該遺構の配置の全貌と意味を知ることは困難である。掘立柱建物および同時期の竪穴住居跡、道路状遺構の所在する調査区は、Ⅰ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅵ区、Ⅷ区、Ⅸ区、ⅩⅡ区、ⅩⅢ区であり、この一帯の丘陵地にかなりの規模の掘立柱建物群が眠っていると想定される。

遺物は、墨書土器、布目瓦、権形石製品であり、いずれも官衙に特有の遺物である。また本遺跡の南東には、9世紀に短期間存続した郡衙跡に比定される上鶴頭遺跡があり、これらの事情と併せて考察すれば掘立柱建物群は官衙の関連施設か一部である可能性は大である。

本遺跡および上鶴頭遺跡墨書土器では「罡」の墨書銘を有するものは注目される。本遺跡の南に小谷を隔てて「岡」の地名が現存し、この地内には近郷の信仰を集める岡稲荷があり、その境内林は禁足地の名残があり、ここからは瓦窯跡が出土している。この岡地区は、郡寺に比定される田島廃寺に隣接し、上鶴頭遺跡に近い。墨書の「罡」は、現存する地名「岡」か、あるいは上鶴頭遺跡周辺の関連施設の立地する丘陵全体の呼称であろう。

参考文献一覧

熊本県教育委員会「古保山・古閑・天城」1980

熊本県教育委員会「上鶴頭遺跡」1983

熊本県教育委員会「伊坂上の原遺跡・石仏遺跡」1986熊本市教育委員会「上南部遺跡」1981

泗水町教育委員会「田島廃寺調査報告書」1974

泗水町教育委員会「三万田東原」1972

泗水町教育委員会「泗水町史」1965

坂本経堯「肥後上代文化資料集成」1983　肥後上代文化研究会

七城町教育委員会「七城町誌」1990

山崎純男・島津義昭〈九州の土器〉　「縄文文化の研究」1980　雄山閣

島津義昭〈黒色磨研土器様式〉　「縄文土器大観」1989　小学館

泉　拓良・山崎純男〈凸帯文系土器様式〉　「縄文土器大観」1989　小学館

今井　堯〈焼粘土塊と生粘土貯蔵穴〉　考古学研究34 3　1987

富田紘一〈粘土塊と　粘土貯〉　縄文研究Ⅹ　1993

渡辺　仁「縄文式階層化社会」1990　六興出版

小杉　康〈縄文時代に階級社会は存在したのか〉考古学研究37－4　1991

江坂輝弥校訂・小野美代子「土偶の知識」1980　東京美術

米田耕之助「土偶」1980　ニューサイエンス社

「国立歴史民俗博物館研究報告第37集・土偶とその情報」1992　国立歴史民俗博物館

酒井龍一「セツルメントアーケオロジー」1990　ニューサイエンス社

F．エンゲルス「国家・家族および私有財産の起源」

木下　忠「埋甕－古代の出産習俗」1981　雄山閣

ベルグソン「道徳と宗教の二源泉」

「縄文文化の研究2　生業」1980小林達雄〈総論－縄文経済〉　前掲、山崎純男〈西日本後晩期の農耕〉雄山閣

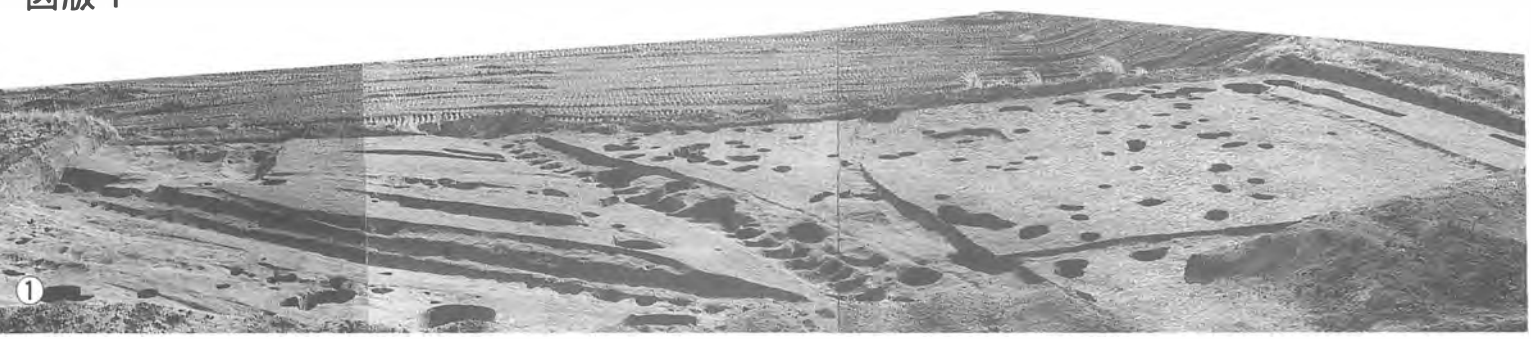
渡辺　誠「縄文時代の植物食」1975　雄山閣

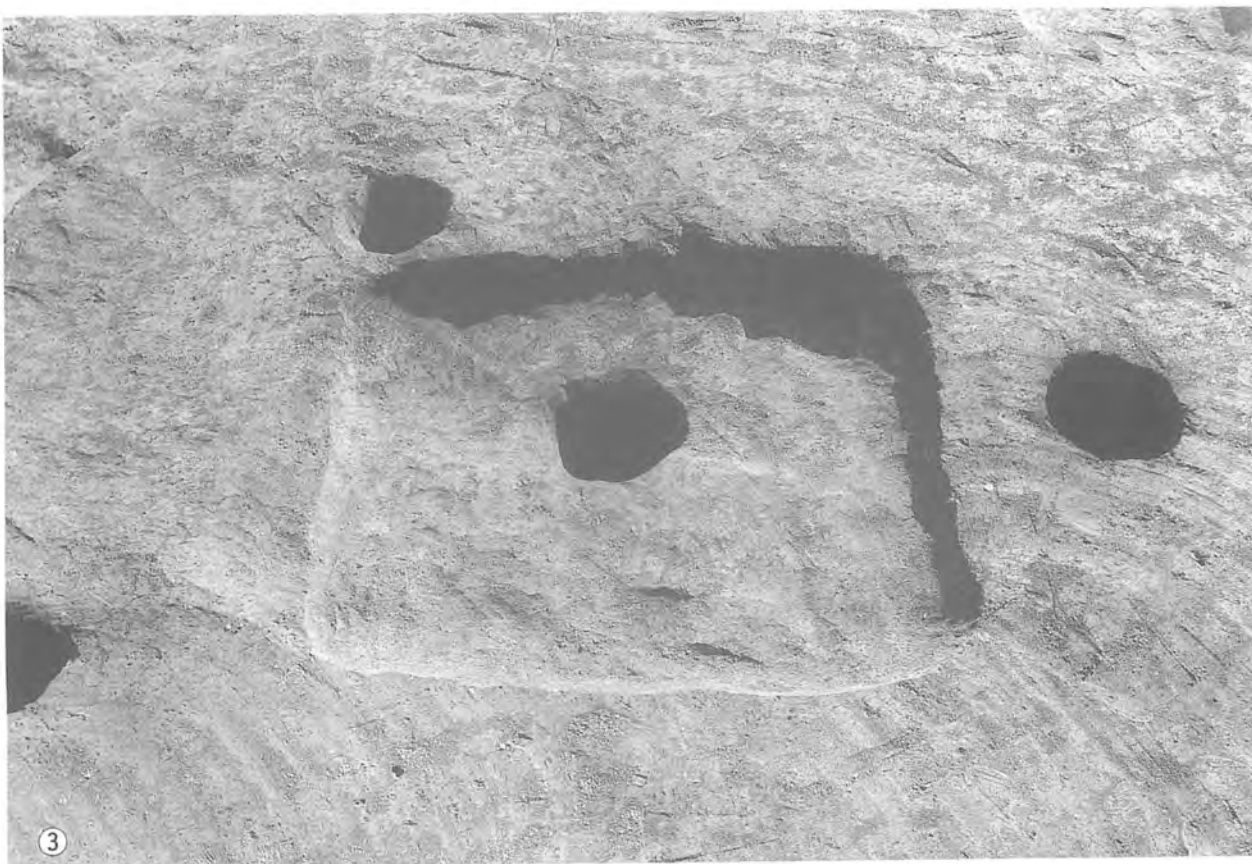
吉田敦彦「小さ子とハイヌウェレ」1986　みすず書房

M．エリアーデ「永遠回帰の神話」堀一郎訳　1963　未来社

写 真 図 版

図版 1

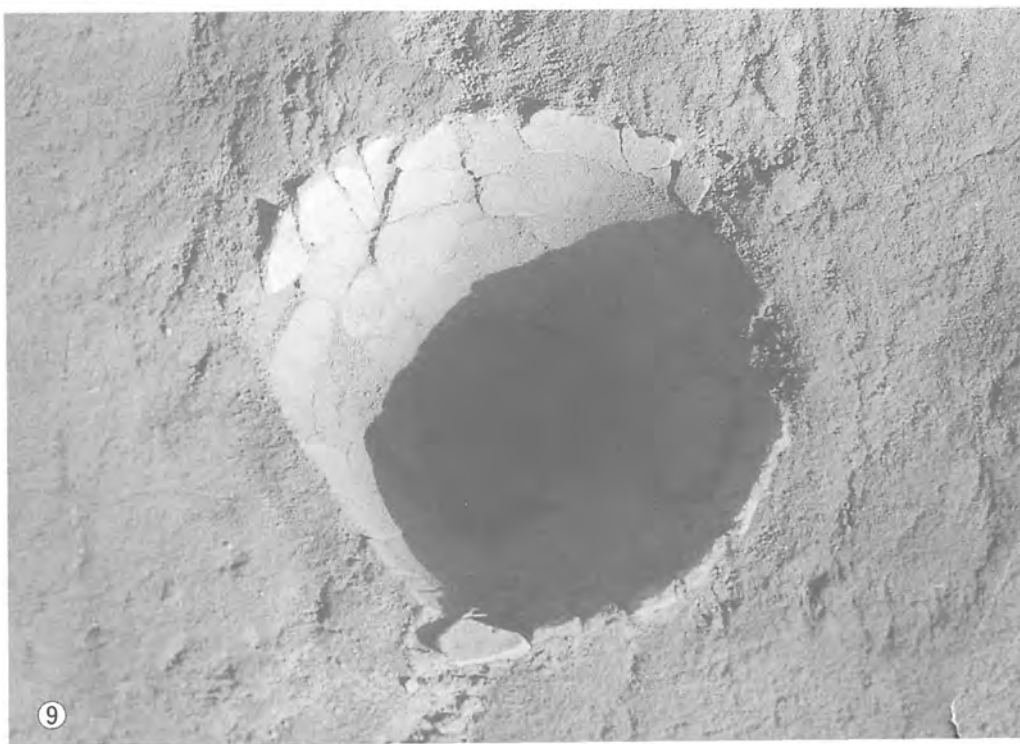




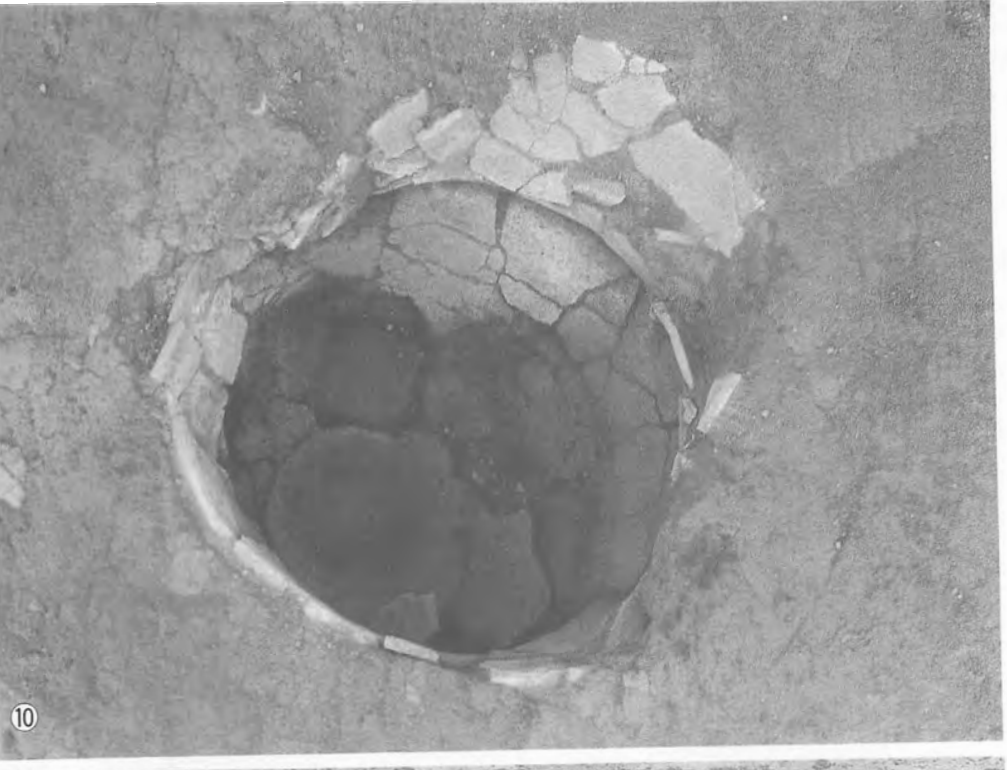
1．Ⅰ区全景
2．道路状遺構の細部
3．101号土坑

4．Ⅱ区全景(南より)
5．Ⅳ区全景(東より)
6．401号住居跡

図版 3



7．403号土坑
8．401号掘立柱建物
9．501号埋甕



10. 502号埋甕
11. 501号住居跡
12. 501号住居跡(完掘)

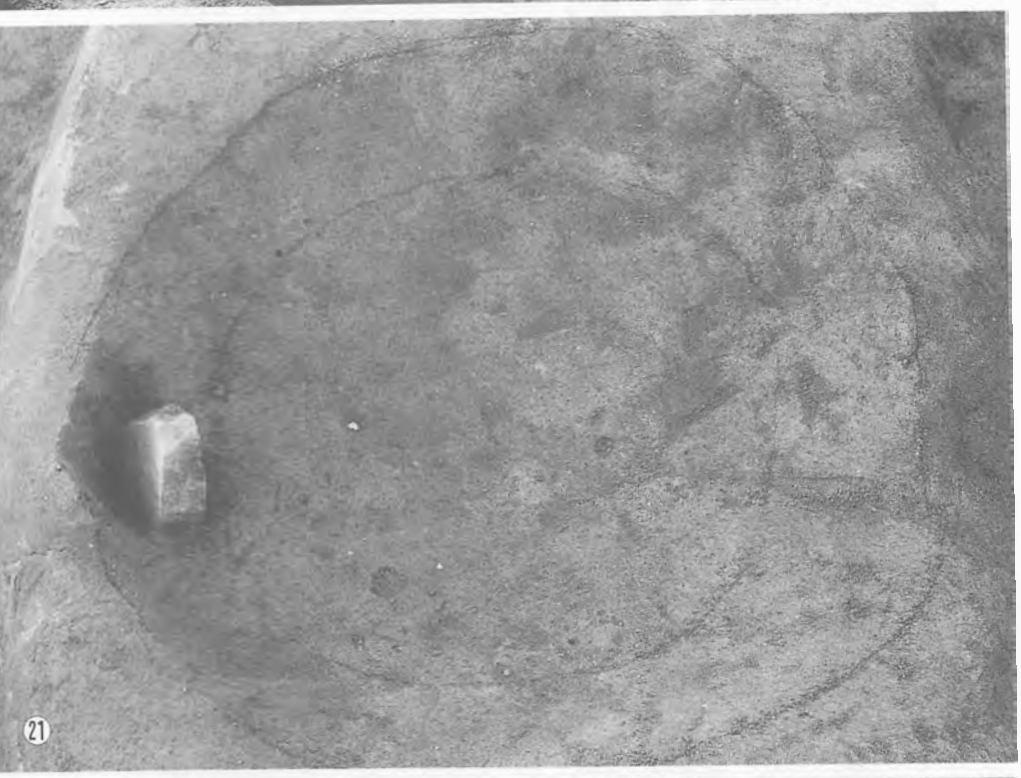
図版 5

13. 501号住カマド
14. 501号土坑

15. Ⅵ区全景(北より)
16. 601号土坑

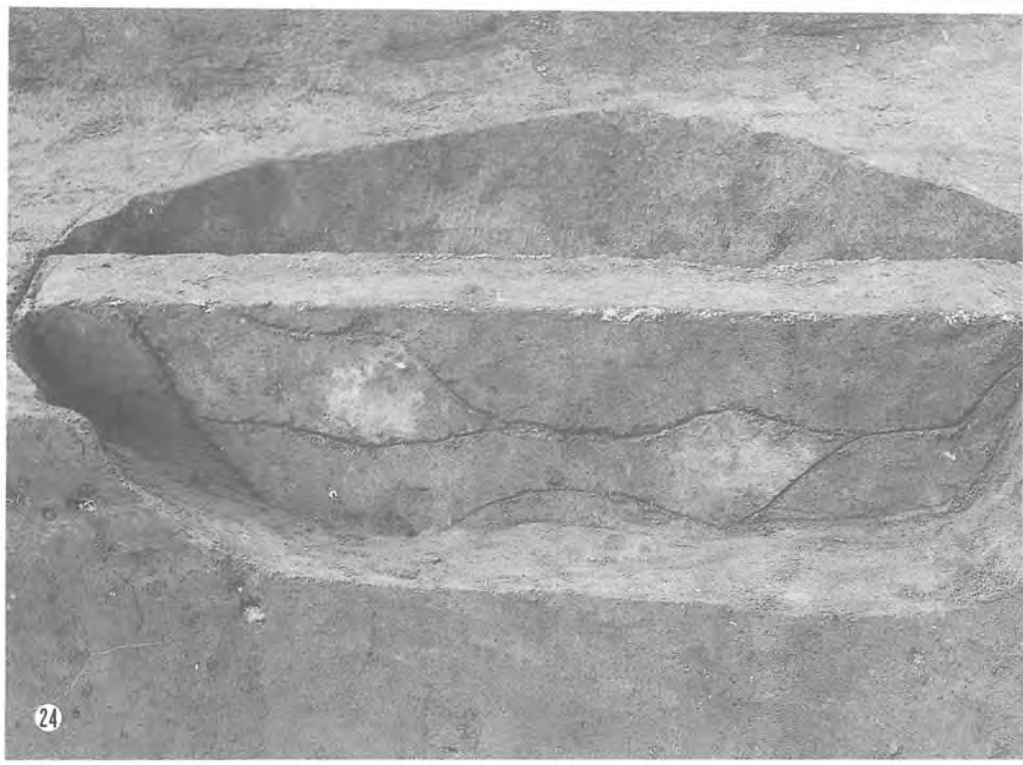
17. 601号掘立柱建物

18. Ⅶ区全景(北より)
19. Ⅶ区出土状況(南より)

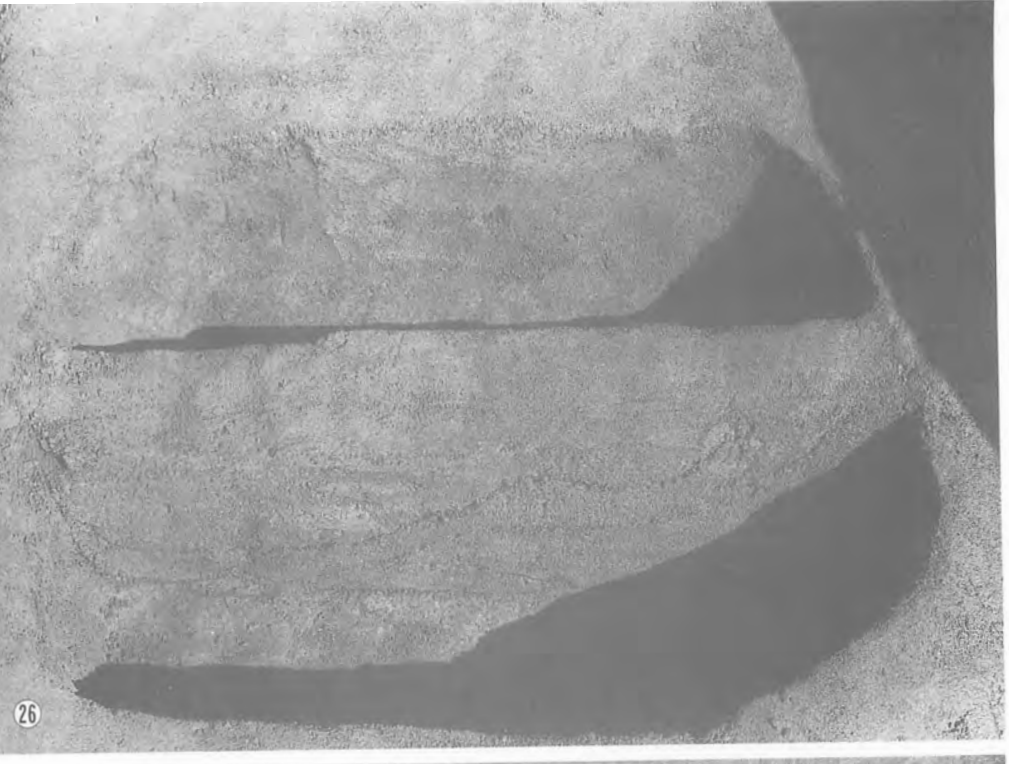


20. Ⅷ区出土状況
21. 801号土坑
22. 801号土坑(断面)

図版 9

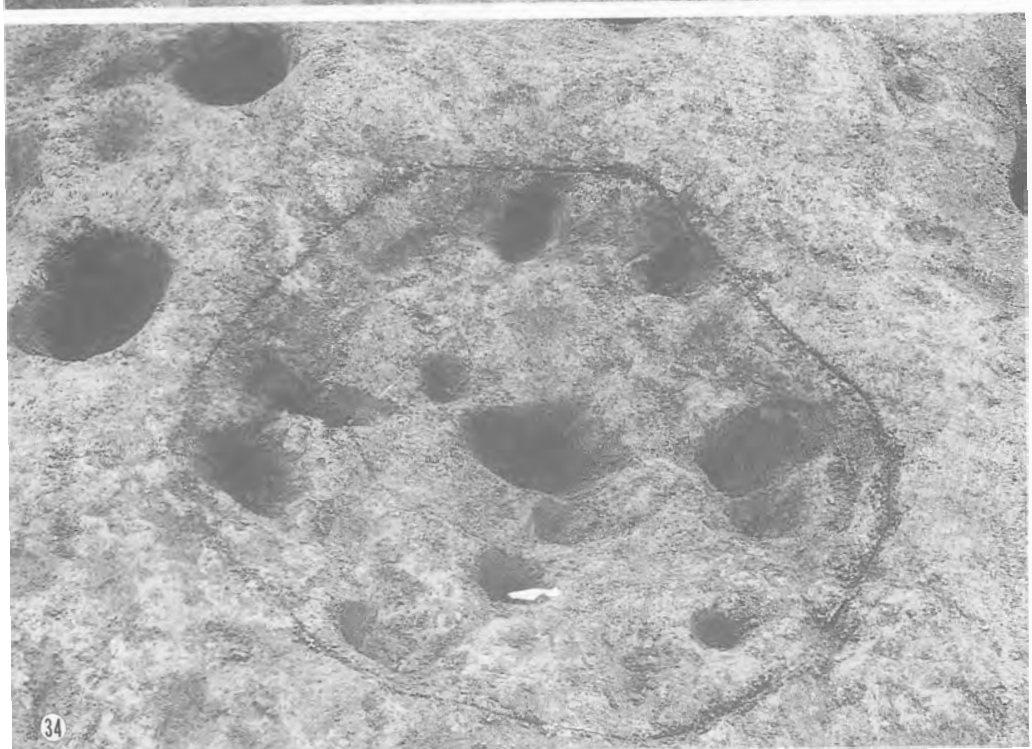


23. 803号土坑断面
24. 804号土坑断面
25. 805号土坑

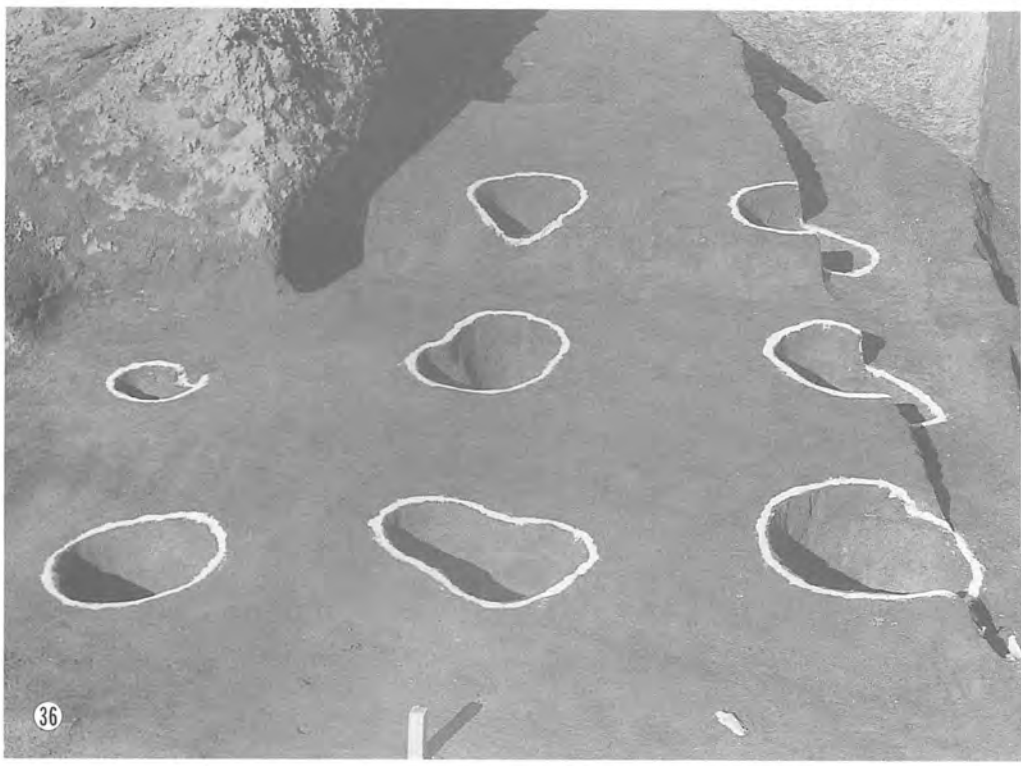


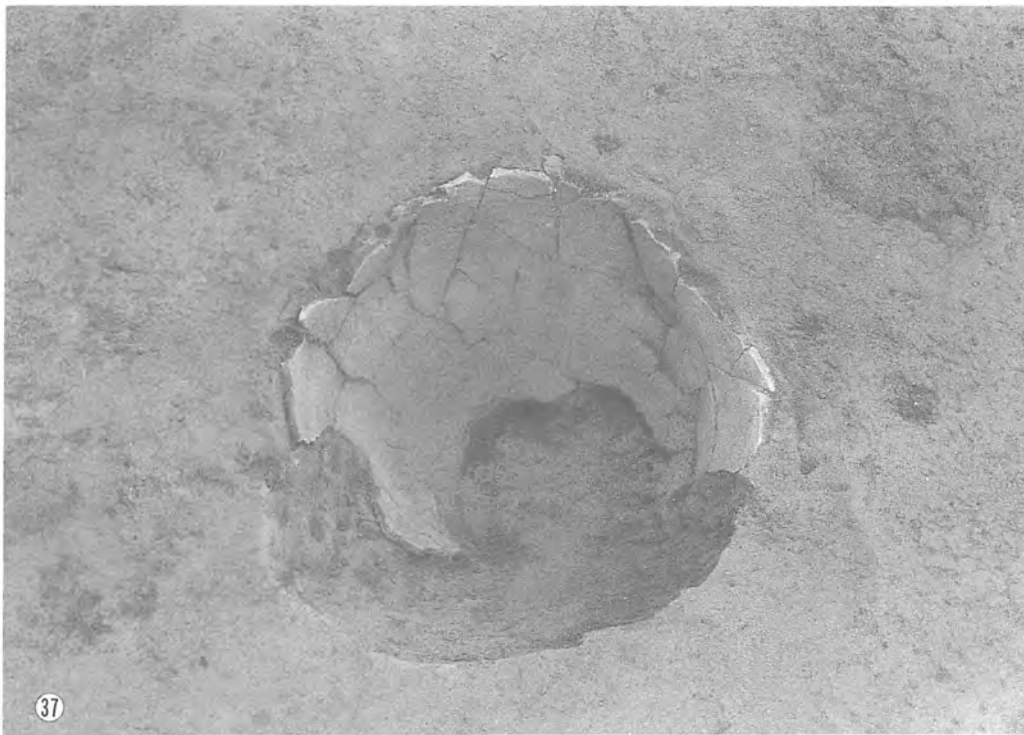
26. 806号土坑
27. 801号掘立柱建物
28. 土偶出土状況

29. 802号住居跡
30. 802号住出土土器
31. 発掘作業風景

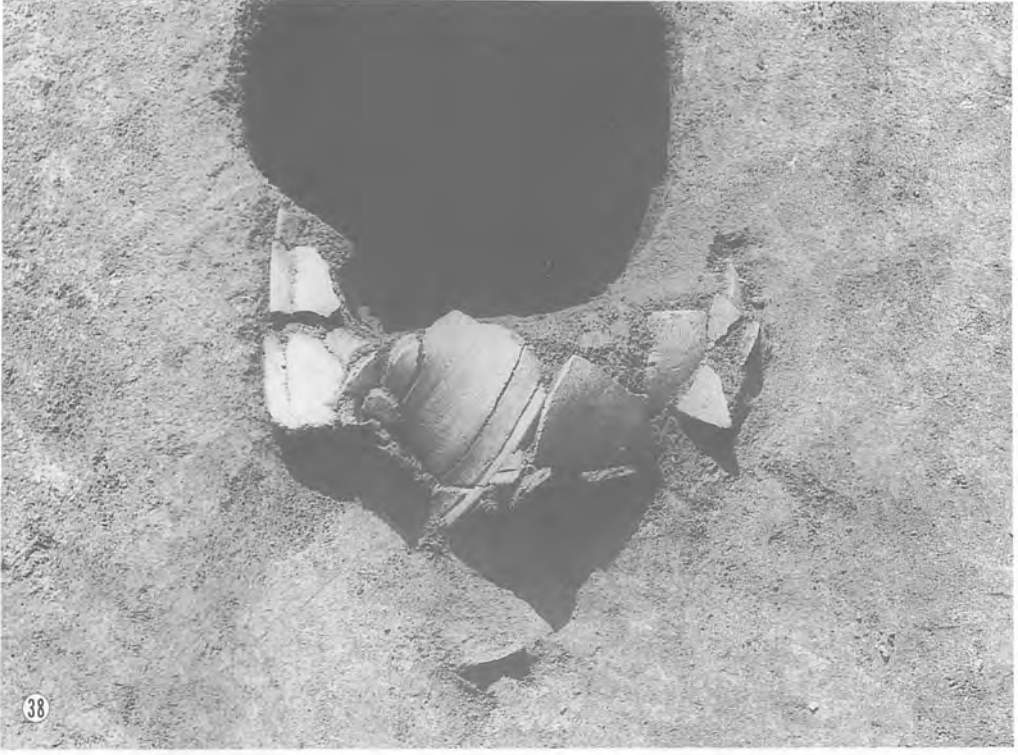


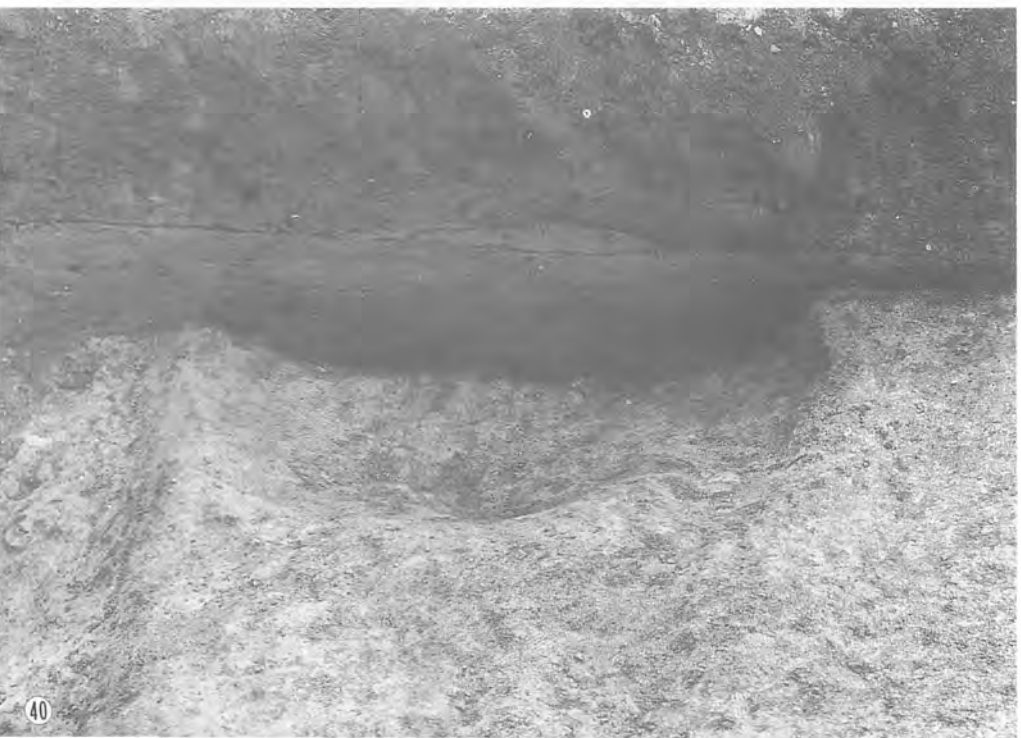
32. 801号住居跡(検出)
33. 801号住居跡(完掘)
34. 801号住居跡(炉)



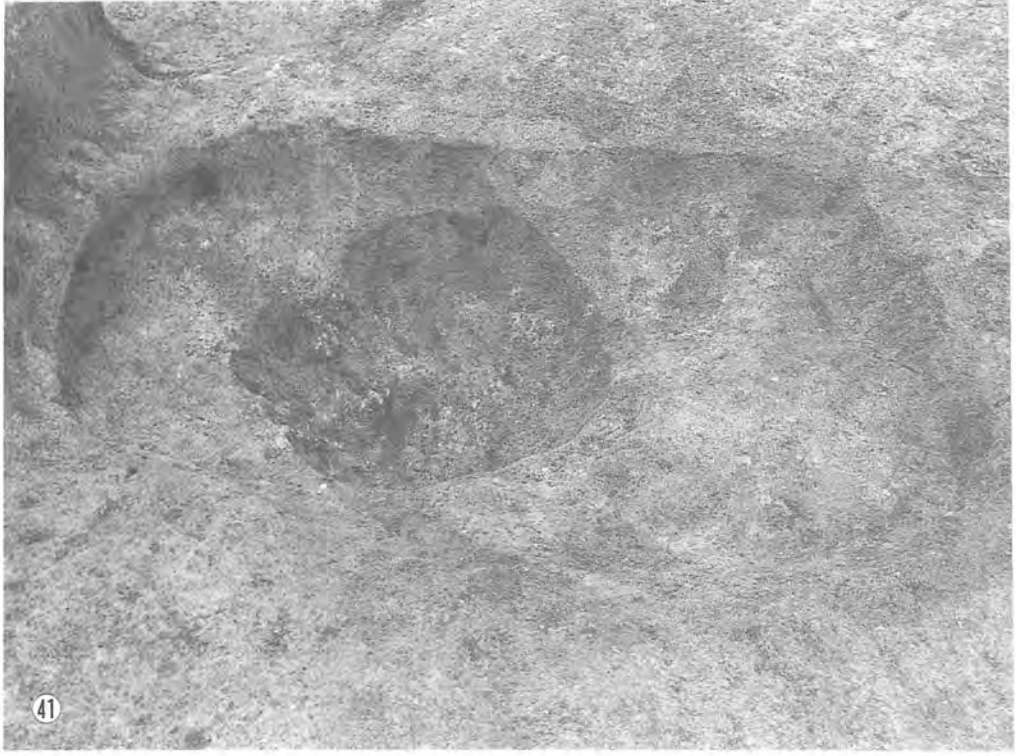


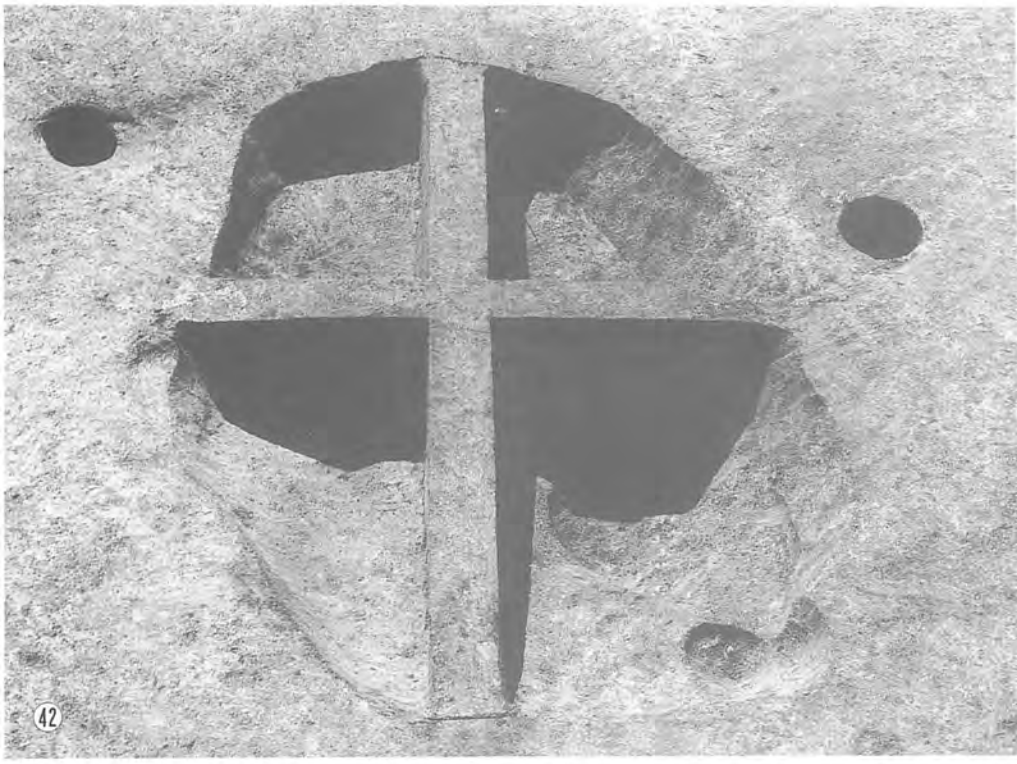
35. 901号掘立柱建物
36. 902号掘立柱建物
37. 901号埋甕

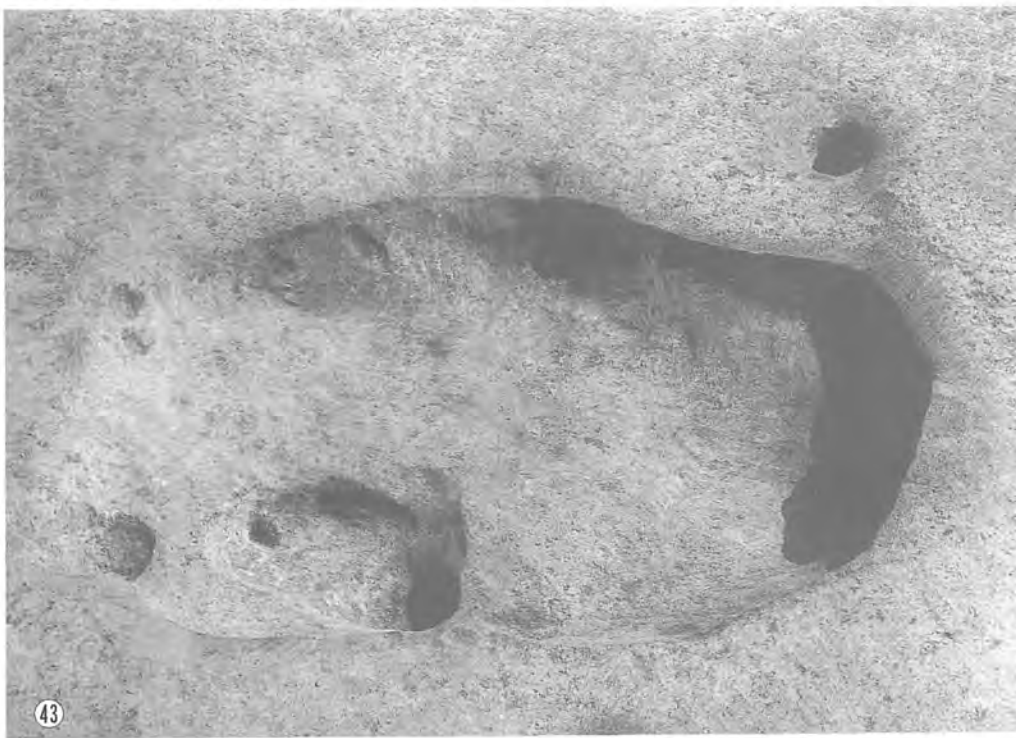




38. 1001号埋甕
39. 1001号土坑
40. 1003号土坑





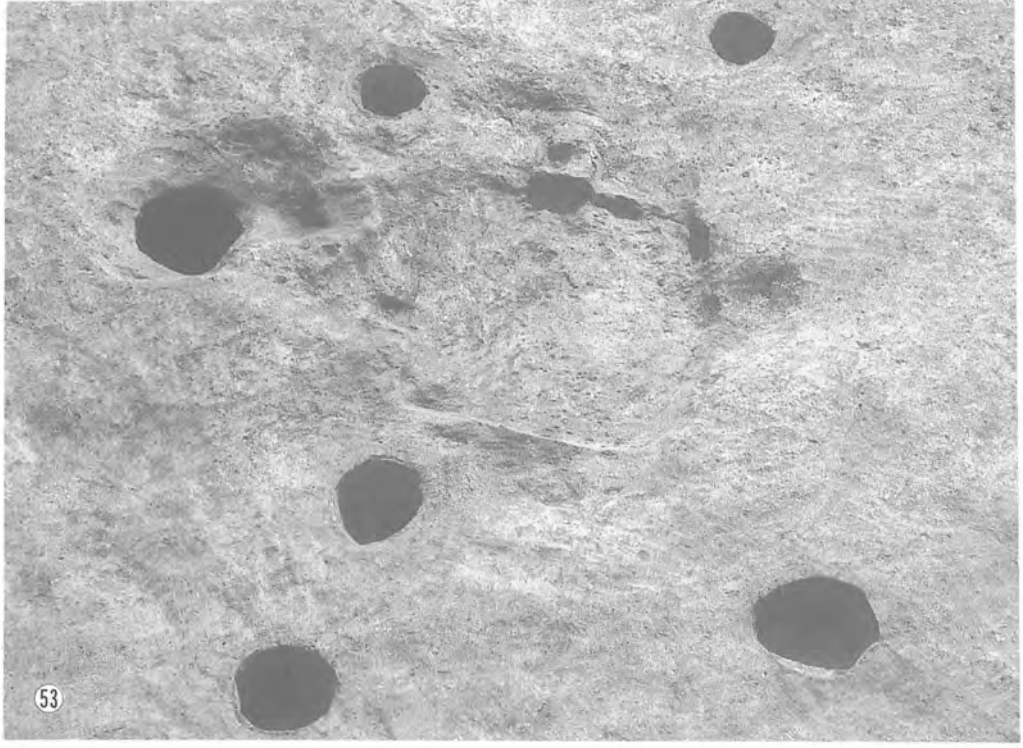


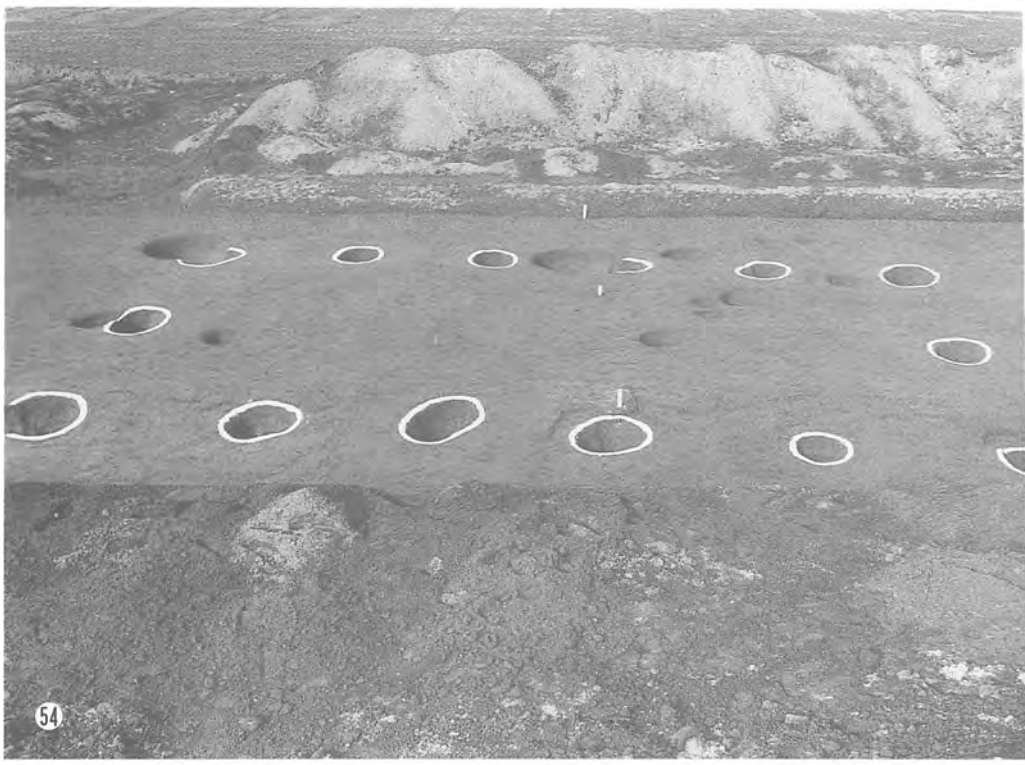
41. 1004号土坑
42. 1005号土坑
43. 1005号土坑(完掘)

44. 1101号土坑
45. 1101号土坑(完掘)
46. 1201号土坑

47. 1202、1203号土坑
48. 1202号土坑
49. 1203号土坑

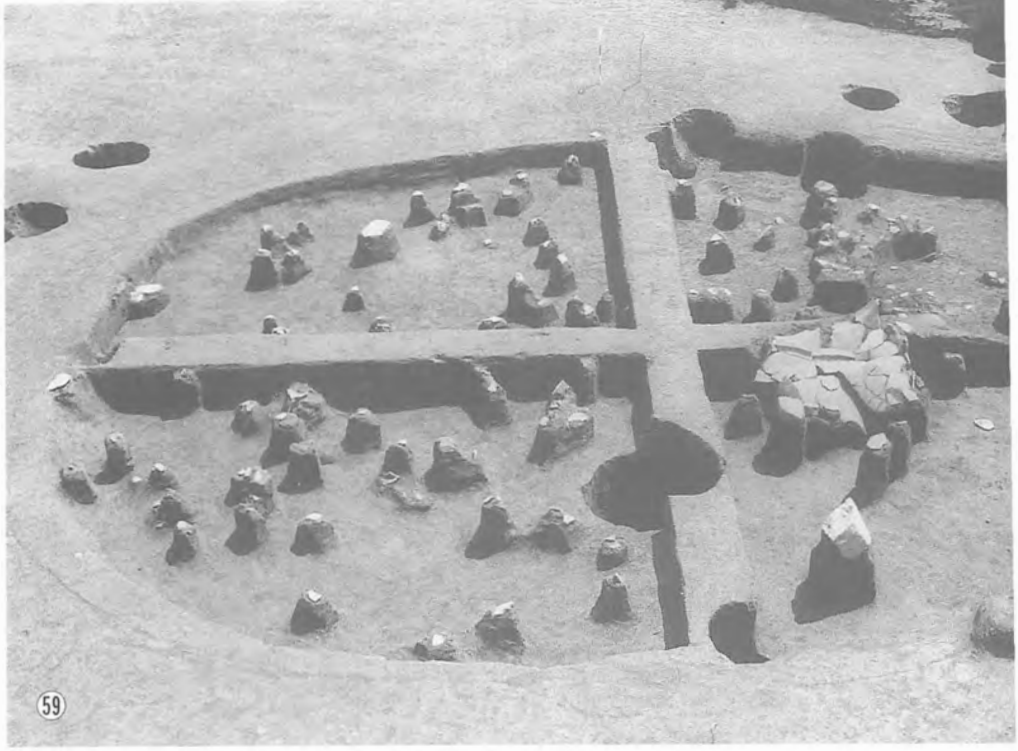
50. 1201号住居跡(出土状況)
51. 1201号住居跡(完掘)
52. 1201号埋甕





53. 1204号土坑
54. 1201号掘立柱建物
55. 発掘作業風景(Ⅲ区)

56. Ⅻ区全景(東より)
57. 1301号住居跡(出土状況)
58. 1301号住居跡(完掘)



59. 1302号住居跡(出土状況)
60. 1302号住居跡(完掘)
61. 発掘作業風景(Ⅷ区)

62. 1303、1304号住居跡
63. 1303、1304号住居跡(完掘)
64. 1303号住居跡(出土状況)

65. 1305号住居跡(出土状況)
66. 1305号住居跡(完掘)
67. 1301号埋甕

68. 1302号埋甕
69. 1303号埋甕

⑩ 401住 28-1

⑪ 802住 29-3　802住 29-8

⑫ 1302住 30-1

⑬ 1302住 30-2

⑭ 1303住 31-2

⑮ 1301住 31-3　1301住 31-7

⑯ 1303住 31-4

1303住 Ⅲ区
31-5

1303住 Ⅲ区
31-6

⑰

⑱ 1303住 32-1　1303住 32-9

⑲ 1303住 32-2

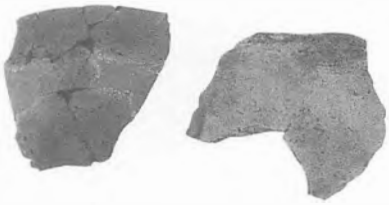
⑳ 1303住 32-4
1303住 32-6

㉑ 1303住 32-5

㉒ 1303住 32-7

㉓ 1303住 33-1

図版26

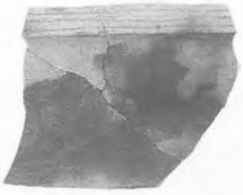


⑧④ 1303住 33-3　1303住 33-2

⑧⑤ 1303住 34-1

⑧⑥ 1303住 34-2

⑧⑦ 1303住 34-7



⑧⑧ 1303住 35-1

⑧⑨ 1303住 35-2(左上)
1303住 35-3(下)
1303住 35-4(右上)

1303住
35-5

1303住
35-6

⑨⓪

⑨① 1303住 36-1

⑨② 1303住 36-3

⑨③ 1303住 36-4

1303住
37-1

1303住
37-2

⑨④

⑨⑤ 1303住 37-3

⑨⑥ 1303住 37-4

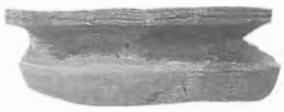
⑨⑦ 1303住 38-5

㊽ 1303住 38-6

㊾ 1303住 39-1(左上)
1303住 39-2(下)
1303住 39-3(右上)

㊿ 1303住 39-4(左)
1303住 39-5(右上)
1303住 39-6(右下)

(101) 1304住 40-1



(102) 1304住 40-2

(103) 1304住 40-3(上)
1304住 40-5(下)

(104) 1304住 41-1

(105) 1304住 41-2

(106) 1304住 41-3

(107) 401号埋甕 42-1

(106) 901号埋甕 42-2

(109) 502号埋甕
43-1

(110) 1001号埋甕 44-1

図版28

⑪ 1301号埋甕
44-2

⑫ 1303埋甕 45-2

⑬ 1302住 46-1

⑭ 901土坑 46-2

⑮

804土坑 47-5(左上)
804土坑 47-2(左中)
802土坑 47-1(左下)

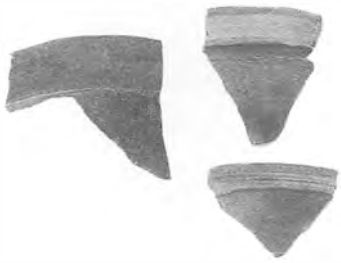
804土坑 47-5(右上)
804土坑 47-4(右中)
804土坑 47-3(右下)

⑯ 1101土坑 48-1

⑰ 1101土坑 48-2

⑱ 1101号土坑 48-7(左)
1101号土坑 48-4(右上)
1101号土坑 48-6(右下)

⑲ XI区 49-4(左)
VIII区 49-1(左)



⑳

XII区 49-2(左)
VIII区 49-5(右上)
XII区 49-6(右下)

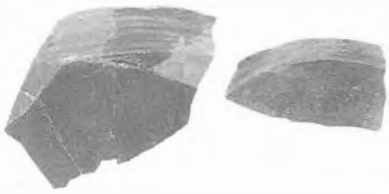
㉑ VIII区 49-3

㉒ VIII区 49-7

㉓ VIII区 50-1

⑫④ XIII区 50-3

⑫⑤ VIII区 50-2



⑫⑥ VIII区 50-4
VIII区 50-5

⑫⑦ VIII区 50-7
VIII区 50-3

⑫⑧ XIII区 51-4(左上)
VIII区 51-1(左下)
XI区 51-7(右)

⑫⑨ XIII区 51-2

⑬⓪ XIII区 51-6(上)
XIII区 51-3(下)

⑬① XIII区 51-5

⑬② VIII区 52-5

⑬③ XII区 53-3

⑬④ XII区 53-4

⑬⑤ XIII区 53-7

⑬⑥ XIII区 53-9

⑬⑦ XII区 54-1

図版30

⑬⑧ Ⅳ区 54-2

⑬⑨ Ⅷ区 54-3

⑭⓪ Ⅷ区 54-5

⑭① Ⅻ区 55-1

⑭② Ⅺ区 55-2

⑭③ Ⅻ区 55-3

⑭④ Ⅻ区 55-5

⑭⑤ Ⅻ区 56-3

⑭⑥ Ⅻ区 57-1

⑭⑦ Ⅻ区 57-2

⑭⑧ 901溝 57-3

⑭⑨ Ⅸ区 57-4

⑮⓪ Ⅻ区 58-1

⑮ Ⅷ区 59-6　1303住 59-1

⑮ Ⅺ区 59-5(左上)
Ⅷ区 59-4(右上)
Ⅷ区 59-2(下)

⑮ 801溝 59-7　Ⅻ区 59-3

⑮ Ⅷ区 39-8

⑮ ⅩⅢ区 60-1

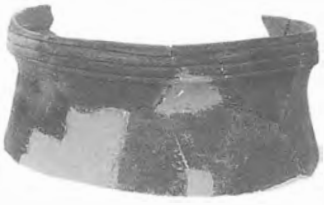
⑮ ⅩⅢ区 60-2

⑮ ⅩⅢ区 603

⑮ ⅩⅢ区 60-4

⑮ ⅩⅢ区 60-5

⑯ ⅩⅢ区 61-1



⑯ ⅩⅢ区 61-2

⑯

ⅩⅢ区 61-5(左)
1304溝 61-4(右上)
ⅩⅢ区 61-3(右下)

図版32

⑯③ Ⅷ区 61-6

⑯④ Ⅷ区 62-1

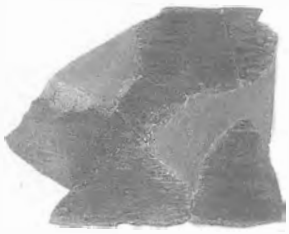
⑯⑤ Ⅷ区 62-4

⑯⑥ Ⅻ区 62-2

⑯⑦ Ⅺ区 62-3

⑯⑥ 1304、1401溝 63-1(上)
Ⅻ区 63-3

⑯⑥ Ⅻ区 63-4(左)
Ⅺ区 63-2(右)



⑰⓪ Ⅺ区 64-1

⑰① Ⅻ区 64-2

Ⅻ区 64-5

Ⅷ区 64-4

⑰②

⑰③ Ⅷ区 64-6

⑰④ Ⅻ区 65-1

⑰⑤ 1303住 65-2

⑰⑥ Ⅸ区 65-6

⑰⑦ Ⅻ区 65-7

⑰⑧ Ⅻ区 65-9

⑰⑨ Ⅻ区 65-11

⑯⓪ Ⅷ区 66-4

⑱① 1303住 66-7

⑱② 66-6

図版34

⑬ 66-9

⑭ Ⅻ区 77-1

⑮ Ⅷ区 78-4

⑯ Ⅶ区 78-14

⑰ Ⅻ区 85-1(左)
遺跡一括 85-2(中)
Ⅻ区 85-3(右)

⑱ Ⅻ区 85-4(左)
遺跡一括 85-5(中)
遺跡一括 85-6(右)

⑲ Ⅻ区 85-7
Ⅻ区 85-8

⑳ Ⅷ区 86-5

㉑ Ⅹ区 86-1(上)
Ⅷ区 86-2(左下)
86(右下)

㉒ 87-1(左)
87-2(中)
87-4(右)

㉓ 87-5～8

㉔ 87-9(左)
87-10(右)

⑯ 91-3

91-1

91-2

⑰ 91-4

91-5

⑯ 91-6

91-7

⑲

⑳ 90-1

㉑ 90-2

図版36

㉒ 89-3(左上)　89-4(左中)　89-6(右上)
89-5(左下)　89-7(右下)

89-2

㉓ 90-4

90-5

㉔ 89-1

㉕ 90-6(左上)　90-7(中)　90-8(右上)
90-9(左下)　90-10(右下)

㉖ 93 上から

㉗ 93 側面

㉘ 93 側面

㉙ 93 下から

㉚ 93 所作復元状況

図版38

㉑1 94-1

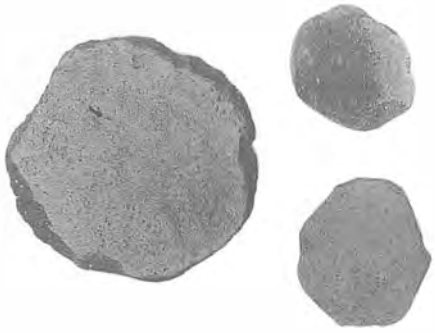
㉑4 95-4(左)　95-5(中)
95-6(右上)　95-7(右下)

㉑2 94-2(上左)　94-4(上中左)　94-5(上中右)
94-6(上右)　94-7(下左)　94-8(下中左)
94-9(下中右)　94-10(下右)

㉑5 96-1

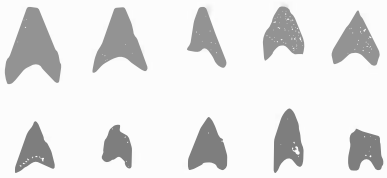
㉑3 95-1　95-2　95-3

㉑6 96-2(左)　96-4(中)
96-5(右上)　96-7(右下)

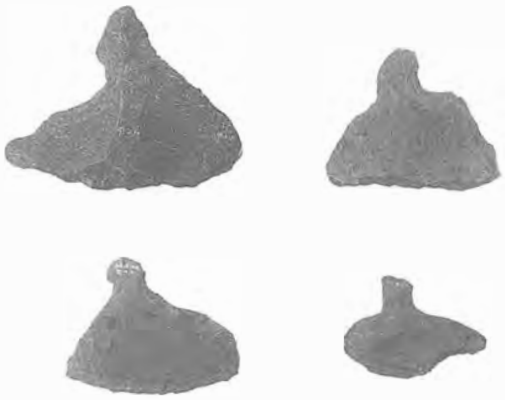


㉑7 92-1(左)　92-3(右上)　92-2(右下)

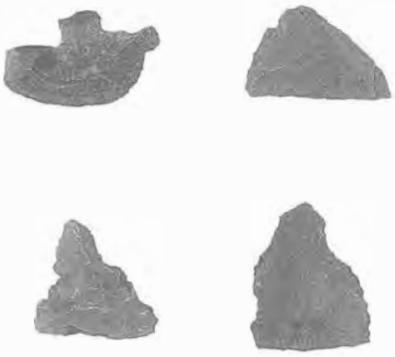
㉑⑧ 96-1～7



㉑⑨ 97-1～11

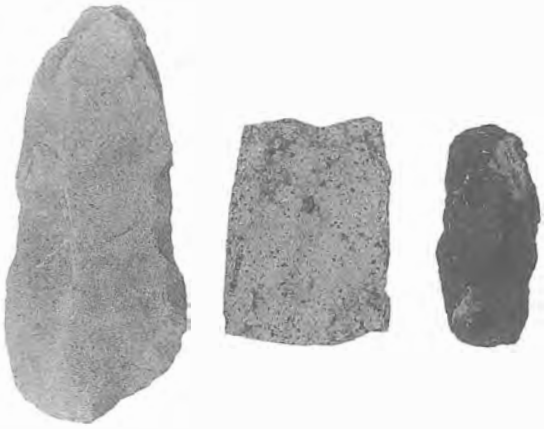


㉒⓪ 98-1～4

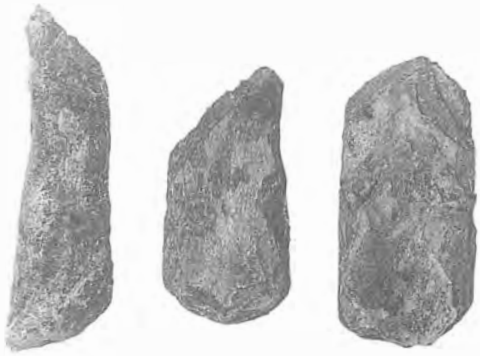


㉒① 99-1～4

㉒② 100-2　100-1　100-3



㉒③ 101-1　101-2　101-3



㉒④ 101-4　101-5　101-6

㉒⑤ 102-1　102-2　102-3

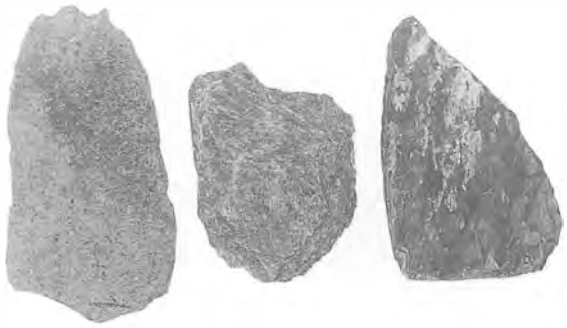
㉒⑥ 102-4　102-5　102-6

図版40

㉗ 103-4　103-5　103-6

㉛ 104-3　104-4

㉙ 103-1　103-2　103-3



㉜ 105-1　105-2　105-3

㉙ 104-5　104-6　104-7

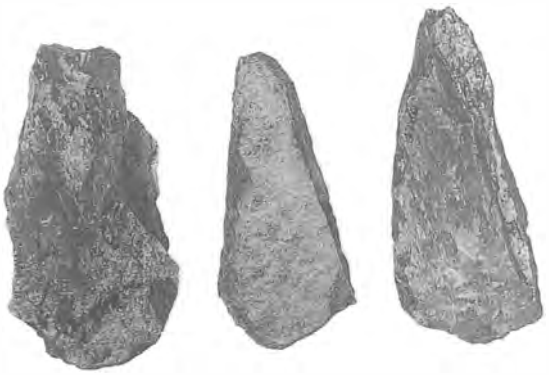
㉝ 105-4　105-5　105-6

㉚ 104-1　104-2

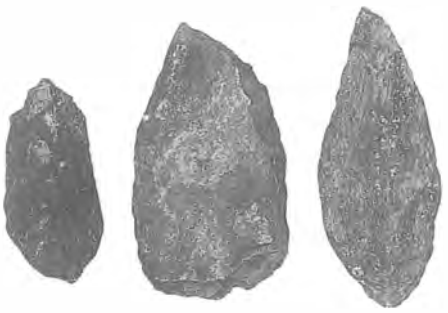
㉞ 106-2　106-3

235 106-4　106-5　106-6

239 108-3　108-4　108-5



236 107-1　107-2　107-3



240 108-6　108-7　108-8

237 107-4　107-5

241 109-1　109-3　109-4

238 108-1　108-2

242 109-2　109-5

図版42

㉓ 109-6　　109-7

㉗ 112-5(上)
112-4(下)

㉔ 110-1　　110-2

㉕ 111-1　　111-2

㉕ 110-3　　110-4　　110-5

㉖ 111-4　　111-3

㉙ 110-6　　110-7　　110-8

㉚ 111-7　　111-6　　111-5

112-1

112-2

112-3

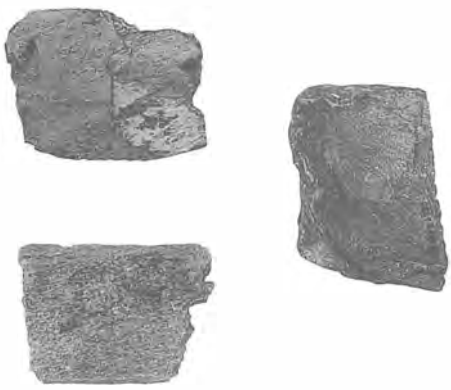
(251)

112-6

112-7

112-8

(252)



(253) 113-1(左上) 113-3(右)
113-2(左下)

113-4

113-5

(254)

113-6

113-7

113-8

(255)

(256) 114-1 114-2

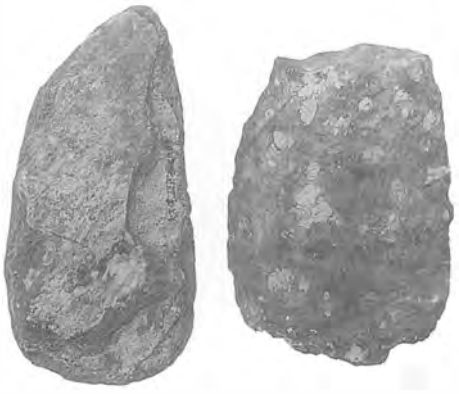
(257) 115-1 115-2

(258) 115-3 115-4

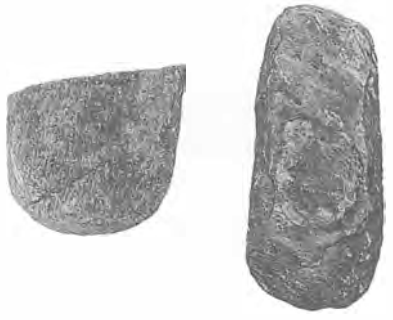
図版44

259 115-5　115-6

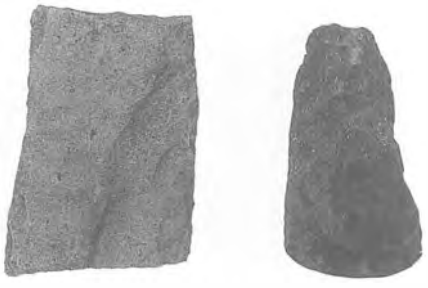
263 117-1　117-2　117-3



260 116-1　116-2



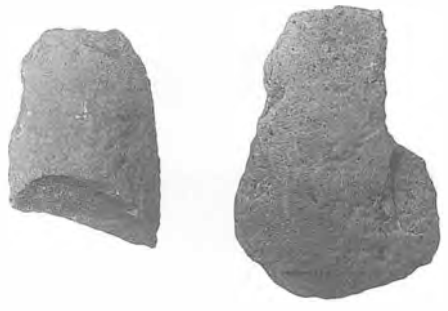
264 117-4　117-5



261 116-3　116-4

265 117-6　117-7　117-8

262 116-5　116-6



266 118-1　118-2

㉖⑦ 118-4　118-5　118-3

㉗① 119-3　119-4

㉖⑧ 118-8　118-9

㉗② 120-1　120-2

㉖⑨ 118-6　118-7

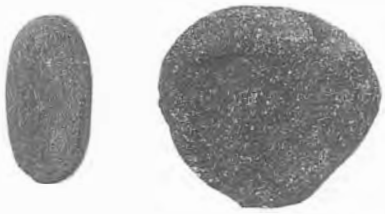
㉗③ 120-3　120-4

㉗⓪ 119-1　119-2

㉗④ 121-1　121-2

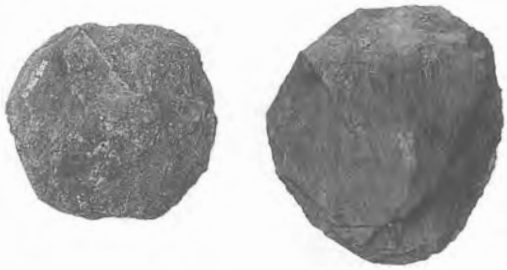
図版46

㉕ 121-3　121-4　121-5



㉙ 123-3　123-4

㉖ 122-1　122-2



㉚ 124-1　124-2

㉗ 122-3　122-4　122-5

㉛ 124-3　124-4

㉜ 125-1　125-2

㉘ 123-1

㉝ 125-3　125-4

(284) 126-1　126-2

(285) 128-5　128-6

(286) 126-3　126-4

(289) 128-3　128-4

(285) 127-1　127-2　127-3

(290) 129-9　129-6　129-7

(287) 128-1　128-2

(291) 129-3(左上)　129-10(右上)
129-5(左下)　129-8(右下)

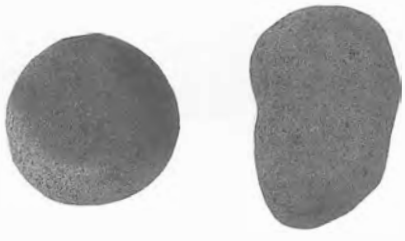
図版48

292 129-1(左)　129-4(右上)
129-2(右下)

295 130-1　130-2

293 130-4　130-3

297 130-9　130-8



294 130-7　130-6

298 131-4　131-9

296 130-10　130-5

299 131-8　131-10

㉚⓪ 131-7　131-2

㉚④ 132-2　132-1

㉚① 131-6　131-3(右上)
131-5(右下)

㉚⑤ 132-9　132-7

㉚② 131-1

㉚⑥ 133-2　133-1

㉚③ 132-4　132-8

㉚⑦ 133-4　133-3

図版50

㊽ 137-2

㊶ 137-1

㊾ 136-1

㊿ 136-2

136-3

136-4

136-5

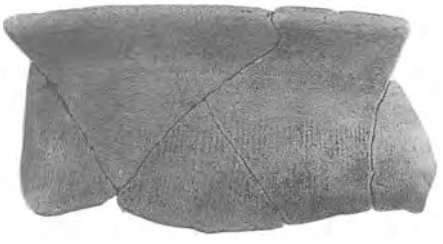
㉜501住　148-7

㊱ 801住 149-2

㉝ 501住 148-3

㊲ 302溝 151-3

㉞ 501住 148-6(上)
501住 148-5(下)



㊱ 302溝 151-7

㉟ 801住 149-1

㊴ 302溝 151-8

図版52

㉚ 151-9

㉑ 151-11

㉒ XIII区 152-4

㉔ XIII区 153-4

㉕ 154-3

㉖ 154-4

㉗ 154-5

㉘ 154-6

㉙ 155-1

㉞ 155-7

㉚ 155-2

㉟ 155-7(墨書部分)

㉛ 1301-住 155-3

㊱ 155-8

㉜ 155-4　155-5

㊲ 155-8(底面)

㉝ 155-6

図版54

㊳ 155-9

㊶ 156-1　156-2　156-3

㊳ 155-9(底面)

㊷ 157-4　157-5

㊵ 155-10(左上)　155-12(右上)
155-11(左下)　155-13(右下)

㊸ 157-1

㊹ 159-3

熊本県文化財調査報告第143集

大 久 保 遺 跡

1994年 3 月31日

編集発行：熊 本 県 教 育 委 員 会
〒862 熊本市水前寺 6 丁目18－1
TEL 096－383－1111(代)
文化課文化財調査係(内線6716)

印　　刷：中 央 印 刷 紙 工 株 式 会 社
〒860 熊本市田崎 2 丁目 5 －38
TEL 096－354－4191

EN HAJAŜIBARU ŜIĈIJO-MAĈI

OHKUBO RUINO

KOMITATO

PRI

EDUKO

KUMAMOTO-GUBERNIO

05 教委 教文
② 002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 143 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大久保遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日